

日田市埋蔵文化財調査報告書第 66 集

大肥遺跡Ⅱ

— B…C 区の調査の記録 —

# 大肥遺跡Ⅱ

— B…C 区の調査の記録 —

日田市埋蔵文化財調査報告書第 66 集

2006 年

日田市教育委員会

2006 年

日田市教育委員会



B-1 区遠景（北から）



B-1 全景（真上から）



B - 2 区遠景 (北から)



B - 2 全景 (真上から)



C区全景（真上から）



朝鮮系軟質土器

## 序 文

古来より九州の交通の要所であった本市には、多くの文化財が市内各所に残され、中でも、市西部の大肥川一帯に広がる谷地は北部九州への玄関口として、数多くの遺跡が分布することが近年明らかになりつつあります。

さて、この地域では平成9年度より大規模な農業基盤整備事業が施工され、工事によってやむなく消滅する埋蔵文化財について、当委員会では事前に発掘調査による記録保存を実施してまいりました。

本書は、そのなかでも平成14年度に県営圃場整備事業大明地区大肥工区に伴って発掘調査を行った、大肥遺跡の調査内容をまとめたもので、調査では、弥生時代前期末～後期の集落跡、甕棺墓などの墳墓群、この集落を囲む流路跡や古墳時代中期～後期の集落跡などが発見されました。特に、弥生時代の流路跡から出土した農具や生活具、木甲などの木製品は市内でも類例の少ない資料として注目されます。

本書が市民の方々の埋蔵文化財に対する理解と保護につながり、地域の歴史の解明や学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、作業に従事いただきました皆様方や、調査にご協力いただきました関係者の方々に対しまして心から厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

日田市教育委員会

教育長 諫山 康雄

## 例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成 14 年度に実施した大肥遺跡 B-1、B-2、C 区の発掘調査報告書である。なお、A-2 区の調査経過、組織等も併せて本書に記載している。A-2 区の本編に関しては分冊形式により今後刊行予定である。
2. 調査は県営圃場整備事業大明地区に伴い、大分県日田地方振興局の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては大分県日田地方振興局耕地課、日田市農林経済部農政推進課（旧経済部農政課）、大明地区圃場整備組合組合長 森山有男氏の協力を得た。
4. 調査現場での写真撮影・実測は渡邊・行時・土居・若杉が行い、一部実測・写真撮影を雅企画有限会社の委託により実施した。
6. 本書に掲載した遺物実測は渡邊が行い、一部を雅企画有限会社及び(株)九州文化財リサーチ、九州文化財研究所の委託により実施した。製図は雅企画有限会社の委託によるものを使用した。
7. 空中写真撮影は有限会社スカイサーベイに委託し、その成果品を使用した。
8. 遺物の写真撮影は長谷川正美氏（雅企画有限会社）の撮影による。
9. 本書に使用した図面中の方位は、全体図が国土座標を使用し、個別遺構は磁北で表示している。
10. 写真図版に付している数字番号は挿図番号に対応する。
11. 出土遺物および図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。なお、出土人骨については九州大学にて管理・保管している。
12. 本書の執筆編集は渡邊が担当した。



日田市の位置

# 目 次

第1章	はじめに	
(1)	県営圃場整備事業大明地区に伴う発掘調査概要	1
(2)	大肥遺跡の調査に至る経緯	3
	1. 調査に至る経過	3
	2. 試掘調査の概要	4
(3)	調査の経過	8
(4)	遺跡の公開	10
(5)	調査組織	11
第2章	遺跡の立地と環境	
(1)	地理的・歴史的環境	13
(2)	大肥川流域の遺跡	16
第3章	B-1区の調査の内容	
(1)	調査の内容	21
(2)	遺構と遺物	
	1. 成人用甕棺墓	22
	2. 小児用甕棺墓	26
	3. 木棺墓	50
	4. 石棺墓	52
	5. 大石	55
	6. 土坑	57
	7. 住居	62
	8. その他の遺構と遺物	68
第4章	B-2区の調査の内容	
(1)	調査の内容	71
(2)	遺構と遺物	
	1. 小児用甕棺墓	72
	2. 石棺墓	85
	3. 土坑	85
	4. 周溝状遺構	92
	5. 住居	92
	6. その他の遺構と遺物	93
第5章	C区の調査の内容	
(1)	調査の内容	99
(2)	遺構と遺物	
	1. 住居	99
	2. 竪穴状遺構	124
	3. 溝	126
	4. 土坑	127
	5. 甕棺墓	129
	6. その他の遺構と遺物	130
第6章	B、C区の調査のまとめ	133
第7章	大肥遺跡出土人骨について	142

(第1章)		第36図 10号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	32
第1図 圃場整備事業区域と調査区位置図(1/30000) ……	2	第37図 10号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	32
第2図 大肥工区試掘調査位置図(1/4000) ……………	5、6	第38図 11号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	34
第3図 竹本工区試掘調査位置図(1/6000) ……………	5、6	第39図 11号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	34
第4図 試掘調査出土遺物実測図(1/3) ……………	7	第40図 12号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	34
(第2章)		第41図 12号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	34
第5図 主要遺跡分布図(1/200000) ……………	14	第42図 13号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	35
第6図 遺跡分布図(1/30000) ……………	17	第43図 13号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	35
(第3章)		第44図 14号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	35
第7図 B -1区遺構配置図(1/200) ……………	19、20	第45図 14号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	35
第8図 1号喪棺墓実測図(1/30) ……………	21	第46図 15号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	37
第9図 1号喪棺実測図(1/8) ……………	22	第47図 15号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	37
第10図 2号喪棺墓実測図(1/30) ……………	23	第48図 16号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	37
第11図 2号喪棺実測図(1/8) ……………	23	第49図 16号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	37
第12図 3号喪棺墓実測図(1/30) ……………	24	第50図 17号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	38
第13図 3号喪棺実測図(1/8) ……………	24	第51図 17号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	38
第14図 4号喪棺墓実測図(1/30) ……………	25	第52図 18号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	38
第15図 4号喪棺実測図(1/8) ……………	25	第53図 18号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	38
第16図 5号喪棺墓実測図(1/30) ……………	26	第54図 19号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	39
第17図 5号喪棺実測図(1/8) ……………	26	第55図 19号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	39
第18図 1号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	27	第56図 20号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	39
第19図 1号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	27	第57図 20号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	39
第20図 2号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	27	第58図 21号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	40
第21図 2号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	27	第59図 21号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	40
第22図 3号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	28	第60図 22号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	41
第23図 3号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	28	第61図 22号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	41
第24図 4号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	28	第62図 23号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	42
第25図 4号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	28	第63図 23号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	42
第26図 5号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	29	第64図 24号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	42
第27図 5号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	29	第65図 24号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	42
第28図 6号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	29	第66図 25号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	43
第29図 6号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	29	第67図 25号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	43
第30図 7号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	30	第68図 26号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	43
第31図 7号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	30	第69図 26号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	43
第32図 8号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	31	第70図 27号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	44
第33図 8号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	31	第71図 27号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	44
第34図 9号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	32	第72図 28号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	44
第35図 9号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	32	第73図 28号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	44
		第74図 29号小児用喪棺墓実測図(1/20) ……………	45
		第75図 29号小児用喪棺実測図(1/6) ……………	45



第76図	30号小児用甕棺墓実測図(1/20)	46	第113図	5号小児用甕棺墓実測図(1/20)	76
第77図	30号小児用甕棺実測図(1/6)	47	第114図	5号小児用甕棺実測図(1/6)	76
第78図	31号小児用甕棺墓実測図(1/20)	48	第115図	6号小児用甕棺墓実測図(1/20)	76
第79図	31号小児用甕棺実測図(1/6)	48	第116図	6号小児用甕棺実測図(1/6)	76
第80図	32号小児用甕棺墓実測図(1/20)	48	第117図	7号小児用甕棺墓実測図(1/20)	77
第81図	32号小児用甕棺実測図(1/6)	48	第118図	7号小児用甕棺実測図(1/6)	77
第82図	33号小児用甕棺墓実測図(1/20)	48	第119図	8号小児用甕棺墓実測図(1/20)	78
第83図	33号小児用甕棺実測図(1/6)	48	第120図	8号小児用甕棺実測図(1/6)	78
第84図	34号小児用甕棺墓実測図(1/20)	49	第121図	9号小児用甕棺墓実測図(1/20)	79
第85図	34号小児用甕棺実測図(1/6)	49	第122図	9号小児用甕棺実測図(1/6)	79
第86図	35号小児用甕棺墓実測図(1/20)	49	第123図	10号小児用甕棺墓実測図(1/20)	79
第87図	35号小児用甕棺実測図(1/6)	49	第124図	10号小児用甕棺実測図(1/6)	79
第88図	1・2号木棺墓実測図(1/30)	51	第125図	11号小児用甕棺墓実測図(1/20)	80
第89図	1・2号石棺墓実測図(1/30)	52	第126図	11号小児用甕棺実測図(1/6)	80
第90図	3・4号石棺墓実測図(1/30)	53	第127図	12号小児用甕棺墓実測図(1/20)	80
第91図	5・6号石棺墓実測図(1/30)	54	第128図	12号小児用甕棺実測図(1/6)	80
第92図	1号大石実測図(1/40)	56	第129図	13号小児用甕棺墓実測図(1/20)	80
第93図	木棺墓・石棺墓・大石出土遺物実測図(1/4)	56	第130図	13号小児用甕棺実測図(1/6)	80
第94図	1・2・5号土坑実測図(1/40)	58	第131図	14号小児用甕棺墓実測図(1/20)	82
第95図	4・6・7・8・27・46号土坑実測図(1/40)	59	第132図	14号小児用甕棺実測図(1/6)	82
第96図	36・92号土坑実測図(1/40)	60	第133図	15号小児用甕棺墓実測図(1/20)	82
第97図	土坑出土遺物実測図(1/4)	61	第134図	15号小児用甕棺実測図(1/6)	82
第98図	1号住居実測図(1/60)	63	第135図	16号小児用甕棺墓実測図(1/20)	83
第99図	住居出土遺物実測図①(1/4)	64	第136図	16号小児用甕棺実測図(1/6)	83
第100図	住居出土遺物実測図②(1/4)	65	第137図	17号小児用甕棺墓実測図(1/20)	83
第101図	住居出土遺物実測図③(1/4)	66	第138図	17号小児用甕棺実測図(1/6)	83
第102図	住居出土遺物実測図④	67	第139図	1・2号石棺墓(1/30)	84
	柱穴出土遺物実測図(1/4)		第140図	1・2号土坑実測図(1/40)	86
第103図	出土石器実測図(2/3、1/2)	68	第141図	3・4・5号土坑実測図(1/40)	87
(第4章)					
第104図	B-2区遺構配置図(1/200)	69、70	第142図	6号土坑・1号周溝状遺構土層断面実測図(1/40)	88
第105図	1号小児用甕棺墓実測図(1/20)	71	第143図	土坑・周溝状遺構出土遺物実測図(1/4)	88
第106図	1号小児用甕棺実測図(1/6)	71	第144図	土坑出土遺物実測図①(1/4)	90
第107図	2号小児用甕棺墓実測図(1/20)	72	第145図	土坑出土遺物実測図②(1/4)	91
第108図	2号小児用甕棺実測図(1/6)	72	第146図	16号住居跡実測図(1/60)	92
第109図	3号小児用甕棺墓実測図(1/20)	73	第147図	住居出土遺物実測図①(1/4)	94
第110図	4号小児用甕棺墓実測図(1/20)	73	第148図	住居出土遺物実測図②(1/4)	95
第111図	3号小児用甕棺実測図(1/6)	74	第149図	住居出土遺物実測図③(1/4)	96
第112図	4号小児用甕棺実測図(1/6)	74	第150図	その他の遺構出土遺物実測図(1/4)	97
			第151図	石器・鉄器実測図(2/3、1/2)	98

(第5章)

第152図 1号住居実測図(1/60) ……………	99	第174図 8号住居カマド B 実測図(1/30) ……………	116
第153図 C区遺構配置図(1/300) ……………	100	第175図 8号住居出土遺物実測図(1/3) ……………	117
第154図 1号住居出土遺物実測図(1/3) ……………	101	第176図 9号住居実測図(1/60) ……………	118
第155図 2号住居実測図(1/60) ……………	102	第177図 9号住居カマド実測図(1/30) ……………	119
第156図 2号住居出土遺物実測図①(1/3) ……………	103	第178図 9号住居出土遺物実測図(1/3) ……………	120
第157図 2号住居出土遺物実測図②(1/3) ……………	104	第179図 10号住居実測図(1/60) ……………	121
第158図 3号住居実測図(1/60) ……………	105	第180図 10号住居カマド実測図(1/30) ……………	121
第159図 3号住居カマド実測図(1/30) ……………	105	第181図 10号住居出土遺物実測図(1/3) ……………	121
第160図 3号住居出土遺物実測図(1/3) ……………	106	第182図 11号住居実測図(1/60) ……………	122
第161図 4号住居実測図(1/60) ……………	107	第183図 11号住居 A カマド実測図(1/30) ……………	123
第162図 4号住居出土遺物実測図(1/3) ……………	108	第184図 11号住居 B カマド実測図(1/30) ……………	124
第163図 5号住居実測図(1/60) ……………	109	第185図 11号住居出土遺物実測図(1/3) ……………	125
第164図 5号住居カマド実測図(1/30) ……………	110	第186図 1～4号竪穴状遺構実測図(1/60) ……………	126
第165図 5号住居出土遺物実測図(1/3) ……………	110	第187図 1～4号竪穴状遺構出土遺物実測図(1/3) ……	127
第166図 6号住居実測図(1/60) ……………	111	第188図 1号溝跡実測図(1/80) ……………	128
第167図 6号住居カマド実測図(1/30) ……………	111	第189図 1号溝跡出土遺物実測図(1/3) ……………	128
第168図 6号住居出土遺物実測図(1/3) ……………	112	第190図 1～3号土坑実測図(1/30) ……………	129
第169図 7号住居実測図(1/60) ……………	113	第191図 1～3号土坑出土遺物実測図(1/3) ……………	129
第170図 7号住居カマド実測図(1/30) ……………	113	第192図 1号小児用甕棺墓実測図(1/20) ……………	130
第171図 7号住居出土遺物実測図(1/3) ……………	114	第193図 1号小児用甕棺実測図(1/6) ……………	130
第172図 8号住居実測図(1/60) ……………	115	第194図 柱穴、包含層出土遺物実測図(1/3) ……………	130
第173図 8号住居カマド A 実測図(1/30) ……………	116	第195図 その他の遺物実測図①(1/3) ……………	131
		第196図 その他の遺物実測図②(1/3) ……………	132
		第197図 器高度数分布図 ……………	134
		第198図 口径度数分布図 ……………	134
		第199図 B区墳墓群変遷図(1/600) ……………	138
		第200図 B区生活遺構変遷図(1/600) ……………	138

## 挿入写真目次

写真1 大明地区空中写真 ……………	2	写真7 A-2区体験発掘風景 ……………	10
写真2 試掘調査風景 ……………	5、6	写真8 遺跡学習会風景 ……………	10
写真3 A-2区作業風景 ……………	9	写真9 現地指導風景 ……………	10
写真4 A-2区作業風景 ……………	9	写真10 現地指導風景 ……………	10
写真5 B-1区作業風景 ……………	9	写真11 中島横穴墓開口状況 ……………	18
写真6 C区作業風景 ……………	9		

## 写真図版目次

<p>巻頭図版1 上段 B-1区遠景(北から) 下段 B-1区全景(真上から)</p> <p>巻頭図版2 上段 B-2区遠景(北から) 下段 B-2区全景(真上から)</p> <p>巻頭図版3 上段 C区遠景(北から) 下段 朝鮮系軟質土器</p> <p>(第3章)</p> <p>写真図版1 上段 B-1区遠景(南から) 下段 B-1区全景(真上から)</p> <p>写真図版2 上段 B-1区遠景(北東から) 下段 成人用甕棺墓群(真上から)</p> <p>写真図版3 上段 大石と墳墓群(真上から) 下段 大石</p> <p>写真図版4 上段 1号成人用甕棺墓(北から) 中段 1号成人用甕棺墓(西から) 下段 1号成人用甕棺墓完掘(西から)</p> <p>写真図版5 上段 1号成人用甕棺墓人骨出土状況 中段 2号成人用甕棺墓(西から) 下段 2号成人用甕棺墓完掘状況(西から)</p> <p>写真図版6 上段 3号成人用甕棺墓(南から) 下段 4号成人用甕棺墓(北から)</p> <p>写真図版7 ① 5号成人用甕棺墓(北から) ② 1・2号小児用甕棺墓(東から) ③ 1号小児用甕棺墓(西から) ④ 2号小児用甕棺墓(東から) ⑤ 3号小児用甕棺墓(東から)</p>	<p>写真図版8 ① 4号小児用甕棺墓(南から) ② 5号小児用甕棺墓(西から) ③ 6号小児用甕棺墓(南から) ④ 7号小児用甕棺墓(南から) ⑤ 8号小児用甕棺墓(東から) ⑥ 9号小児用甕棺墓(北から) ⑦ 10号小児用甕棺墓(東から) ⑧ 11号小児用甕棺墓(東から)</p> <p>写真図版9 ① 12号小児用甕棺墓(南から) ② 13号小児用甕棺墓(北から) ③ 14号小児用甕棺墓(東から) ④ 15号小児用甕棺墓(北から) ⑤ 16号小児用甕棺墓(西から) ⑥ 17号小児用甕棺墓(南から) ⑦ 18号小児用甕棺墓(北西から) ⑧ 19号小児用甕棺墓(南から)</p> <p>写真図版10 ① 20号小児用甕棺墓(西から) ② 21号小児用甕棺墓(西から) ③ 22号小児用甕棺墓(東から) ④ 23号小児用甕棺墓(北から) ⑤ 24号小児用甕棺墓(西から) ⑥ 25号小児用甕棺墓(西から) ⑦ 26号小児用甕棺墓(北から) ⑧ 27号小児用甕棺墓(西から)</p> <p>写真図版11 ① 28号小児用甕棺墓(南から) ② 29号小児用甕棺墓(南から) ③ 30号小児用甕棺墓(北から) ④ 30号小児用甕棺墓断割 ⑤ 31号小児用甕棺墓(北から) ⑥ 32号小児用甕棺墓(西から) ⑦ 33号小児用甕棺墓(東から) ⑧ 34号小児用甕棺墓(東から)</p>
---	---

写真図版12	① 35号小児用甕棺墓(西から)	(第4章)	
	② 35号小児用甕棺墓蓋石除去後(西から)	写真図版25	上段 B-2区遠景(南から)
	③ 1号木棺墓(北から)		下段 B-2区全景(真上から)
	④ 2号木棺墓(西から)	写真図版26	上段 東側甕棺墓群(真上から)
	⑤ 1号石棺墓(西から)		下段 西側甕棺墓群(真上から)
	⑥ 1号石棺墓蓋石除去後(東から)	写真図版27	① 1号小児用甕棺墓(北から)
	⑦ 2号石棺墓(西から)		② 2号小児用甕棺墓(北から)
	⑧ 2号石棺墓蓋石除去後(西から)		③ 3号小児用甕棺墓(西から)
写真図版13	① 3号石棺墓(北から)		④ 3号小児用甕棺墓(南から)
	② 3号石棺墓蓋石除去後(南から)		⑤ 4・5号小児用甕棺墓(西から)
	③ 4号石棺墓(北から)		⑥ 4号小児用甕棺墓(東から)
	④ 4号石棺墓蓋石除去後(北から)		⑦ 5号小児用甕棺墓(西から)
	⑤ 5号石棺墓(北から)		⑧ 6・7号小児用甕棺墓(東から)
	⑥ 5号石棺墓蓋石除去後(北から)	写真図版28	① 6号小児用甕棺墓(西から)
写真図版14	① 5号石棺墓人骨出土状況		② 7号小児用甕棺墓(西から)
	② 6号石棺墓(南東から)		③ 8号小児用甕棺墓(東から)
	③ 1号大石(東から)		④ 9～12号小児用甕棺墓(東から)
	④ 1号大石完掘(南東から)		⑤ 9号小児用甕棺墓(東から)
	⑤ 1号土坑(北から)		⑥ 10号小児用甕棺墓(東から)
	⑥ 2号土坑(西から)		⑦ 11号小児用甕棺墓(東から)
	⑦ 4号土坑(南から)		⑧ 12号小児用甕棺墓(西から)
	⑧ 5号土坑(東から)	写真図版29	① 13号小児用甕棺墓(東から)
写真図版15	① 6号土坑(西から)		② 14号小児用甕棺墓(東から)
	② 7号土坑(西から)		③ 15号小児用甕棺墓(東から)
	③ 8号土坑(東から)		④ 16号小児用甕棺墓(東から)
	④ 27号土坑(東から)		⑤ 17号小児用甕棺墓(北西から)
	⑤ 46号土坑(南から)		⑥ 1号石棺墓(東から)
	⑥ 36号土坑(北から)		⑦ 1号石棺墓(南から)
	⑦ 92号土坑(東から)		⑧ 1号石棺墓(北から)
	⑧ 1号住居跡(西から)	写真図版30	① 2号石棺墓(南から)
写真図版16	出土甕棺		② 1号土坑(西から)
写真図版17	出土甕棺		③ 1号土坑土層
写真図版18	出土甕棺		④ 2号土坑(西から)
写真図版19	出土甕棺		⑤ 2号土坑土層
写真図版20	出土甕棺		⑥ 3号土坑(西から)
写真図版21	出土甕棺		⑦ 3号土坑土層
	出土遺物		⑧ 4号土坑(西から)
写真図版22	出土遺物		
写真図版23	出土遺物		
写真図版24	出土遺物		

写真図版31	① 5号土坑(北から) ② 6号土坑(北から) ③ 6号土坑土器出土状況 ④ 1号周溝状遺構(真上から) ⑤ 1号周溝状遺構1トレンチ土層 ⑥ 1号周溝状遺構2トレンチ土層 ⑦ 16号住居跡(西から) ⑧ 16号住居跡体験発掘風景	写真図版43	① 7号住居跡カマド ② 7号住居跡カマド横土層 ③ 7号住居跡カマド縦土層 ④ 8号住居跡(東から) ⑤ 8号住居跡 A カマド ⑥ 8号住居跡 A カマド土層 ⑦ 8号住居跡 B カマド ⑧ 9号住居跡(南東から)
写真図版32	出土甕棺	写真図版44	① 9号住居跡カマド ② 9号住居跡カマド横土層 ③ 9号住居跡カマド縦土層 ④ 10号住居跡(東から) ⑤ 10号住居跡カマド ⑥ 10号住居跡カマド縦土層 ⑦ 10号住居跡カマド復元 ⑧ 10号住居跡ミニチュア土器出土状況
写真図版33	出土甕棺		
写真図版34	出土甕棺		
写真図版35	出土遺物		
写真図版36	出土遺物		
写真図版37	出土遺物		
写真図版38	出土遺物		
(第5章)		写真図版45	① 11号住居跡(南東から) ② 11号住居跡 A カマド ③ 11号住居跡カマド横土層 ④ 11号住居跡カマド縦土層 ⑤ 11号住居跡カマド復元 ⑥ 10号住居跡 B カマド ⑦ 11号住居跡土器出土状況① ⑧ 11号住居跡土器出土状況②
写真図版39	上段 C区全景 下段 C区西側(真上から)		
写真図版40	上段 調査完了風景 中段 3～6号住居跡(真上から) 下段 7～11号住居跡(南から)	写真図版46	① 1号竪穴状遺構(西から) ② 2号竪穴状遺構(西から) ③ 3号竪穴状遺構(西から) ④ 4号竪穴状遺構(西から) ⑤ 1号溝(南から) ⑥ 1号溝土層 ⑦ 1号甕棺墓(南から) ⑧ 1号土坑(北から)
写真図版41	① 1号住居跡(北から) ② 1号住居跡土器出土状況 ③ 2号住居跡(南から) ④ 2号住居跡遺物出土状況 ⑤ 2号住居跡遺物出土状況 ⑥ 3号住居跡遺物(西から) ⑦ 3号住居跡カマド ⑧ 3号住居跡遺物出土状況		
写真図版42	① 3号住居跡甕出土状況 ② 4号住居跡(南から) ③ 5号住居跡(東から) ④ 5号住居跡カマド ⑤ 5号カマド土玉出土状況 ⑥ 6号住居跡(南から) ⑦ 6号住居跡カマド ⑧ 7号住居跡(東から)	写真図版47	出土遺物
		写真図版48	出土遺物
		写真図版49	出土遺物
		写真図版50	出土遺物
		写真図版51	出土遺物
		写真図版52	出土遺物
		写真図版53	出土遺物
		写真図版54	出土遺物

写真図版55	出土遺物
写真図版56	出土遺物
写真図版57	出土遺物
写真図版58	出土遺物
写真図版59	出土遺物
写真図版60	出土遺物

## 目 次

第1表 県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧	1
第2表 遺構の確認されたトレンチ一覧	5、6
第3表 住居跡番号対応表	99
第4表 出土甕棺観察表①	141
第5表 出土甕棺観察表②	142
第6表 出土甕棺観察表③	143
第7表 出土土器観察表①	143
第8表 出土土器観察表②	144
第9表 出土土器観察表③	145
第10表 出土土器観察表④	146
第11表 出土土器観察表⑤	147
第12表 出土土器観察表⑥	148
第13表 出土土器観察表⑦	149
第14表 出土土器観察表⑧	150
第15表 出土土器観察表⑨	151
第16表 出土土器観察表⑩	152
第17表 出土土器観察表⑪	153
第18表 出土土器観察表⑫	154
第19表 出土土器観察表⑬	155
第20表 出土土器観察表⑭	156
第21表 出土土器観察表⑮	157
第22表 出土土器観察表⑯	158
第23表 出土土製品観察表	158
第24表 出土石器観察表	158
第25表 出土鉄器観察表	158

# 第1章 はじめに

今回調査対象となった日田市大字大肥一帯は、平成5年度刊行の大分県遺跡地図では「大肥条里大肥地区」の名称で周知されてきた。しかし、今回調査を実施するにあたり、条里遺跡の存在は確認できず、遺跡名称と遺構内容とが合致せず不相当であると判断されることから、過去の報告等においてこれまで使用してきた大肥条里大肥地区は「大肥遺跡」として名称変更している。(註1)

註1 渡邊隆行 「大肥遺跡 I - A-1 区の調査の記録」日田市埋蔵文化財調査報告書第50集 日田市教育委員会 2004

## (1) 県営圃場整備事業大明地区に伴う発掘調査概要(第1図、表1)

県営圃場整備事業大明地区は、日田市西部に位置する谷地である大明地区一帯の105ha(最終対象面積94.2ha)を対象として基盤整備を実施すると同時に、共同営農や農産物加工所の建設、農芸工作物生産団地の実施なども含めたモデル営農団地を創設することを目的に平成9年度より事業が実施された。これを受けた平成9年4月15日には大分県教育委員会による「農業基盤整備事業にかかる埋蔵文化財の分布調査結果について」の通知文書が出され、この一帯が文化財の調査を要する地区として判定された。平成9年4月28日には、大明地区全体の工事対象箇所に関する埋蔵文化財の所在についての照会文が提出され、これを受けて事業主体者である大分県日田地方振興局と市教育委員会の両者による埋蔵文化財の取り扱いの協議を実施することとなった。

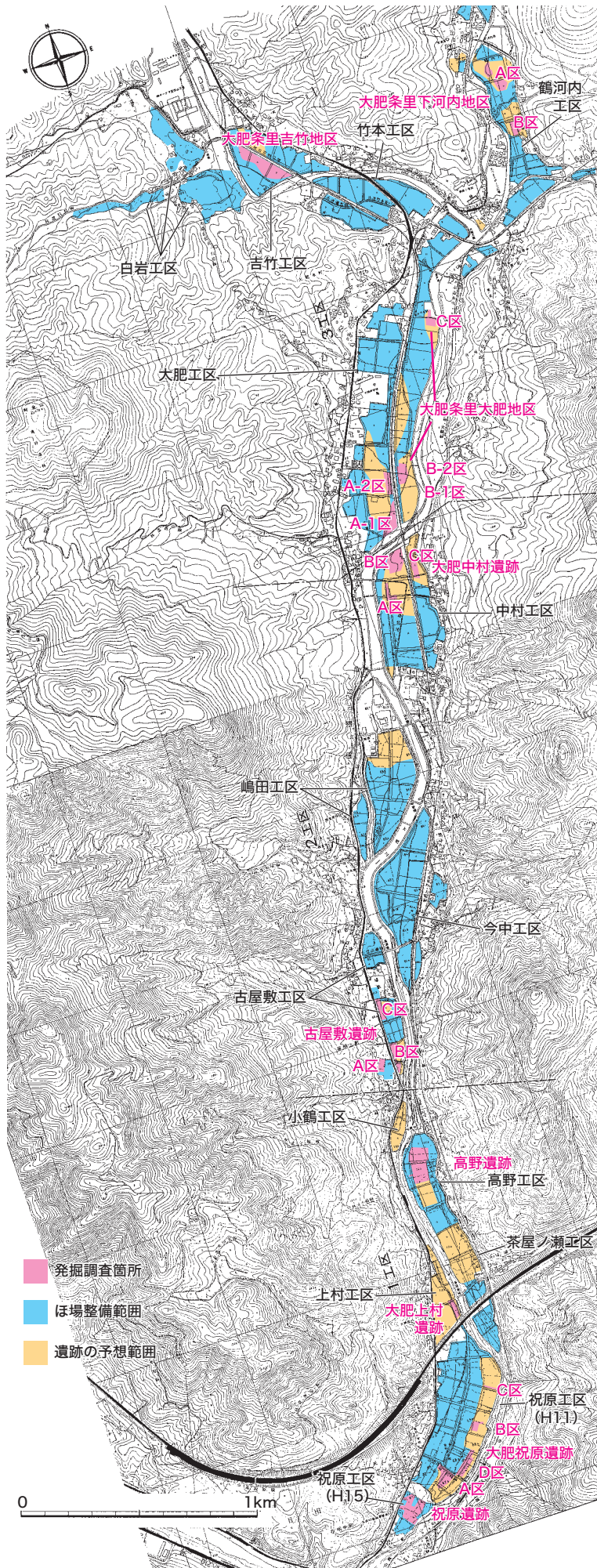
さて、これらの協議の結果、対象地域が周知の遺跡(大肥条里遺跡)に含まれること、基盤整備工事は全部で14工区(大まかには3工区)に分かれ、年度ごとに工区毎の工事を実施する計画であることなどから、工区毎に事前の試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は平成9年10月から平成14年11月までの各年度に実施され、そのうち遺跡の存在が明らかとなった箇所については、再度、各遺跡の取り扱いについて協議を行った。工法の変更等を検討したものの、遺跡の現状保存が困難である対象箇所に関しては、次年度に記録保存のための

第1表 県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧

試掘年度	工区名	遺構内容	時代	処置	遺跡名	発掘調査年度	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	備考
平成9年度	嶋田工区	柱穴、包含層	古代・中世	盛土保存	-	-	97.10.23～97.10.24	-	試掘調査のみ
平成9年度	今中工区	なし	-	許可	-	-	97.10.20～97.10.22	-	試掘調査のみ
平成9年度	中村工区	住居跡、石棺墓、小児用喪棺墓	弥生時代～中・近世	発掘調査	大肥中村遺跡(A～C区)	平成10年度	98.07.07～98.12.30	10,000	概報(文献①)、A区刊行(文献⑦) 試掘調査期間(97.11.10～97.12.26)
平成10年度	祝原工区	溝・土坑・柱穴	縄文時代～弥生時代	発掘調査	大肥祝原遺跡(A～D区)	平成11年度	99.05.16～00.01.17	5,100	刊行済(文献②、⑨) 試掘調査期間(99.01.13～99.01.28)
平成10年度	上村工区	竪穴・溝・土坑・柱穴	弥生時代～中世	発掘調査	大肥上村遺跡	平成11年度	99.09.28～99.10.29	950	刊行済(文献②) 試掘調査期間(99.01.13～99.01.28)
平成10年度	茶屋ノ瀬工区	竪穴、溝、土坑、柱穴	中世	盛土保存	-	-	99.01.13～99.01.28	-	試掘調査のみ
平成10年度	小鶴工区	竪穴住居、溝、柱穴	縄文・弥生・中世	盛土保存	-	-	99.01.13～99.01.28	-	試掘調査のみ
平成11年度	鶴河内工区	柱穴、土坑、包含層	縄文時代～中世	発掘調査	大肥下河内遺跡	平成12年度	00.12.04～01.02.28	5,950	刊行済(文献⑧) 試掘調査期間(99.01.26～99.02.12)
平成11年度	吉竹工区	竪穴住居、溝、土坑、柱穴	古墳時代～中世	発掘調査	大肥吉竹遺跡	平成12～13年度	01.01.29～01.05.24	8,270	刊行済(文献③) 試掘調査期間(99.03.24～99.03.31)
平成13年度	大肥工区	竪穴住居、流路、喪棺墓、石棺	弥生時代～古墳時代	発掘調査	大肥遺跡(A～C区)	平成14年度	02.05.27～03.02.13	8,200	A-1区(文献④)、A-2区(文献⑩)B、C区(本編) 試掘調査期間(02.02.12～02.03.04)
平成13年度	竹本工区	なし	-	許可	-	-	02.02.12～02.03.04	-	試掘調査のみ
平成14年度	高野工区	竪穴住居、溝、土坑、柱穴	弥生時代～中世	発掘調査	高野遺跡	平成14～15年度	03.01.16～03.10.20	9,000	刊行済(文献⑩) 試掘調査期間(02.11.18～99.11.19)
平成14年度	古屋敷工区	溝、土坑、柱穴	縄文時代～中世	発掘調査	古屋敷遺跡	平成15年度	03.05.19～03.10.19	7,100	刊行済(文献⑤) 試掘調査期間(02.11.21～02.11.26)
平成14年度	祝原工区	溝、土坑、柱穴	中・近世	発掘調査	祝原遺跡	平成15年度	03.05.19～03.08.04	4,000	刊行済(文献⑥) 試掘調査期間(02.11.26～02.11.28)
平成14年度	白岩工区	なし	-	許可	-	-	02.11.20	-	試掘調査のみ

※網掛けは発掘調査実施遺跡



第1図 圃場整備事業区域と調査区位置図 (1/30,000)



写真1 大明地区空中写真



発掘調査を実施することとなった。

この結果、平成 10 年度には大肥中村遺跡、平成 11 年度には大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡、平成 12 年度には大肥下河内遺跡、平成 12～13 年度には大肥吉竹遺跡、平成 14 年度には大肥遺跡、平成 14～15 年度には高野遺跡、平成 15 年度には古屋敷遺跡、祝原遺跡の計 9 箇所の発掘調査を実施した。

なお各工区の調査範囲・内容については第 1 図・表 1 に示している。

《参考文献》

- ①行時志郎編 「大肥中村遺跡－発掘調査概報－」日田市教育委員会 2003
- ②若杉竜太編 「大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第 45 集 日田市教育委員会 2003
- ③渡邊隆行編 「大肥吉竹遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第 48 集 日田市教育委員会 2004
- ④渡邊隆行編 「大肥遺跡Ⅰ－A-1 区の調査の記録－」日田市埋蔵文化財調査報告書第 50 集 日田市教育委員会 2004
- ⑤渡邊隆行編 「古屋敷遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第 56 集 日田市教育委員会 2004
- ⑥行時桂子編 「祝原遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第 61 集 日田市教育委員会 2005
- ⑦行時志郎編 「大肥中村遺跡Ⅰ」日田市埋蔵文化財調査報告書第 62 集 日田市教育委員会 2006
- ⑧今田秀樹編 「大肥下河内遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第 63 集 日田市教育委員会 2006
- ⑨今田秀樹編 「大肥祝原遺跡Ⅱ」日田市埋蔵文化財調査報告書第 64 集 日田市教育委員会 2006
- ⑩若杉竜太編 「高野遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第 65 集 日田市教育委員会 2006
- ⑪渡邊隆行編 「大肥遺跡Ⅲ－A-2 区の調査概要－」日田市埋蔵文化財調査報告書第 67 集 日田市教育委員会 2006

## (2) 大肥遺跡の調査に至る経緯

### 1. 調査に至る経過 (第 2・3 図)

前述に記載したように、県営圃場整備事業大明地区の工事が推進されるなかで、平成 13 年 12 月には竹本工区、大肥工区 (対象面積 25ha) の試掘調査依頼が提出された。これを受けて、市教育委員会では平成 14 年 2 月 12 日～3 月 4 日までの期間試掘調査を実施した。両工区合わせて計 118 本のトレンチを設定して調査を行った結果、竹本工区 (第 3 図) では包含層は確認されたものの、遺構の存在は確認出来ず、大肥工区 (第 2 図) では遺構の存在する箇所が明らかとなった。

しかも、これらの遺構の存在する箇所の範囲は約 5ha と広範囲に及んでいたため、平成 14 年 4 月に遺構の確認された箇所について、大分県日田地方振興局耕地課 (以下、県耕地課) との間で、遺跡の取り扱いについて協議を実施した。この内、掘削が遺構面まで達せず、掘削面が遺構面を保護するのに十分な深さを保つと見込まれる箇所、および盛土保存される箇所については工事を許可することとし、残りの遺構面が掘削される箇所について検討することとなった。この時点で、調査対象面積は約 2ha に縮小されていたものの、極力遺跡の破壊を免れることを方針として、県耕地課に対し工法の変更を依頼することとした。その結果、工法変更の可能な箇所に関しては盛土保存を行うこととなり、用水路や道路の設置などに伴い遺跡の保存が困難な箇所約 1ha を対象に調査を実施することとなった。

最終的に調査対象となった箇所は全部で 5 箇所に及び、これらは広範囲な工事対象地内に点在していることから、遺跡名称としては大肥条里大肥地区 (後に大肥遺跡) として統一し、各地点毎に調査区名称を分けることとした。対象地内を JR が横断していることなどの理由から、JR の西側を A 区、東側を B 区と分け、やや北側に位置する箇所を C 区とすることとした。また、道路などで A・B 区はそれぞれ分断されていることから、A-1 区・A-2 区・B-1 区・B-2 区として区分けすることとした。

このうち、B 区に関しては、今後の周辺工事との関連で、盛土保存の検討を行いたいとの申し出

があり、再度協議を実施することとなった。A-1 区の調査に着手した 5 月には、先述した B 区の取扱いの協議を実施し、工法変更により盛土保存を実施することとなったため、調査対象から除外した。その後、6 月中旬の B-2 区の工事に伴う耕作土除去作業中に、当初想定されていなかった石棺墓の露出が発見されると共に、水田基盤土直下にやや土圧で崩落した小児用甕棺墓や大量の遺構と遺物の存在が確認された。この発見により、盛土保存される約 5000 m<sup>3</sup>の範囲に石棺墓や甕棺墓などの遺構が密に広がっている可能性が高く、石棺墓や甕棺墓などは内部が空洞化していることから、工事の土圧による破損や工事完了後にトラクター等が落ち込むなどの危険が想定されることから、調査が必要であると判断された。そこで、県耕地課と遺跡の取り扱いについて再度協議することとなった。

協議の中で、B 区は盛土による遺構の保存が計画され、工期が既にこれらを見込んで実施される予定であることから、非常に高い密度のこの区域を完全に調査することは期間、費用、体制などの面において困難であることが予測された。そこで、対象となる範囲の遺構検出を行い、墳墓群を中心として調査を実施し、これらと重複する住居跡や土坑、柱穴などは掘下げ、それ以外の遺構は確認に留めて調査することとした。

## 2. 試掘調査の概要（第 2～4 図）

平成 14 年 2 月 12 日～3 月 4 日までの期間に実施した事前の試掘調査に伴い遺構が確認されたトレンチは第 2 表のとおりで、ほとんどが大肥工区から発見されている。このうち、12 トレンチは A-1 区、28・36 トレンチは A-2 区、88 トレンチは B-1 区の調査区内に含まれており、その他のトレンチについては工事において影響がないと判断されたことから、調査を実施していない。以下、調査区周辺の遺構の広がりなどを今後検討するうえで重要であるため、トレンチから出土した遺物について説明を加える。なお、遺構の確認されていないトレンチより出土した遺物についても併せて説明する。

1 は 12 トレンチより出土した土師器鉢である。底面は平坦に仕上げられてる。2・3 は 15 トレンチより出土した弥生土器である。2 は甕の口縁部で、くの字状に外反する。3 は甕の胴部破片で、断面三角形の突帯が巡る。4・5 は 20 トレンチより出土した弥生土器甕の底部である。上げ底気味を呈する。6・7 は 28 トレンチより出土した弥生土器である。6 は甕の口縁部で如意状に外反し、頸部下に 1 条の沈線を巡らせる。外面はタテハケが施され、内面はナデ仕上げである。7 は鉢で、底面を平滑状に仕上げ、口縁部はやや内湾する。8 は 36 トレンチより出土した弥生土器で、底部は平坦に仕上げられる。外面はタテハケが施される。一部丹塗の痕跡が残存する。9 は 52 トレンチより出土した須恵器坏蓋である。口縁端部内面には段を有し、外面には沈線が巡らされる。10 は 53 トレンチより出土した須恵器坏身である。11 は 54 トレンチより出土した須恵器高坏である。12～15 は 60 トレンチより出土した遺物である。12・13 は須恵器坏蓋である。口縁部端部内面に段を有し、13 は外面に沈線を巡らせる。14 は土師器甕口縁部である。15 は小型甕か。16 は 74 トレンチより出土した弥生土器壺の破片である。外面に羽状文を有し、丹塗が施される。17 は 83 トレンチより出土した土師器高坏の底部破片である。18 は 86 トレンチより出土した土師器甕の口縁部である。19～21 は 87 トレンチから出土した弥生土器である。19 は底部破片で上げ底状を呈する。20 は胴部破片で M 字状突帯が貼り付けられ、外面には丹塗が施される。21 は高坏である。22・23 は 88 トレンチから出土した弥生土器である。22 は器台である。口縁部端部を



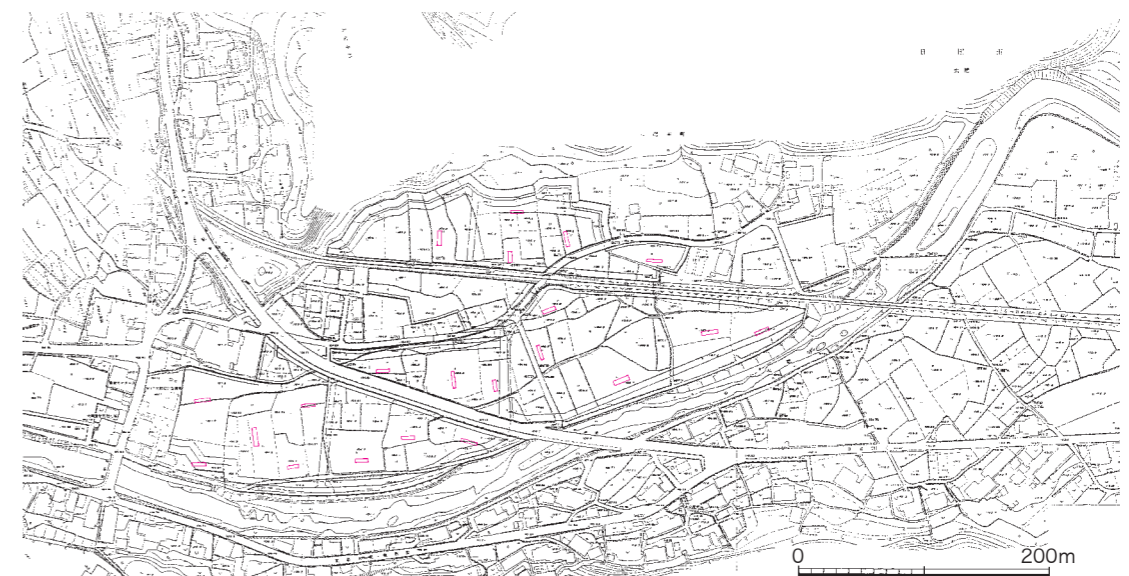
第2図 大肥工区試掘調査位置図 (1/4,000)

第2表 遺構の確認されたトレンチ一覧

トレンチ番号	遺構内容	トレンチ番号	遺構内容
10	土坑	66	溝
12	土坑	74	土坑
14	柱穴	79	柱穴
16	溝	80	流路
20	溝、柱穴	83	流路、柱穴
23	土坑	87	住居、柱穴
25	溝	88	住居、土坑
28	流路	90	柱穴
31	溝、柱穴	92	柱穴
36	溝	93	土坑
60	住居、柱穴	94	溝



写真2 試掘調査風景

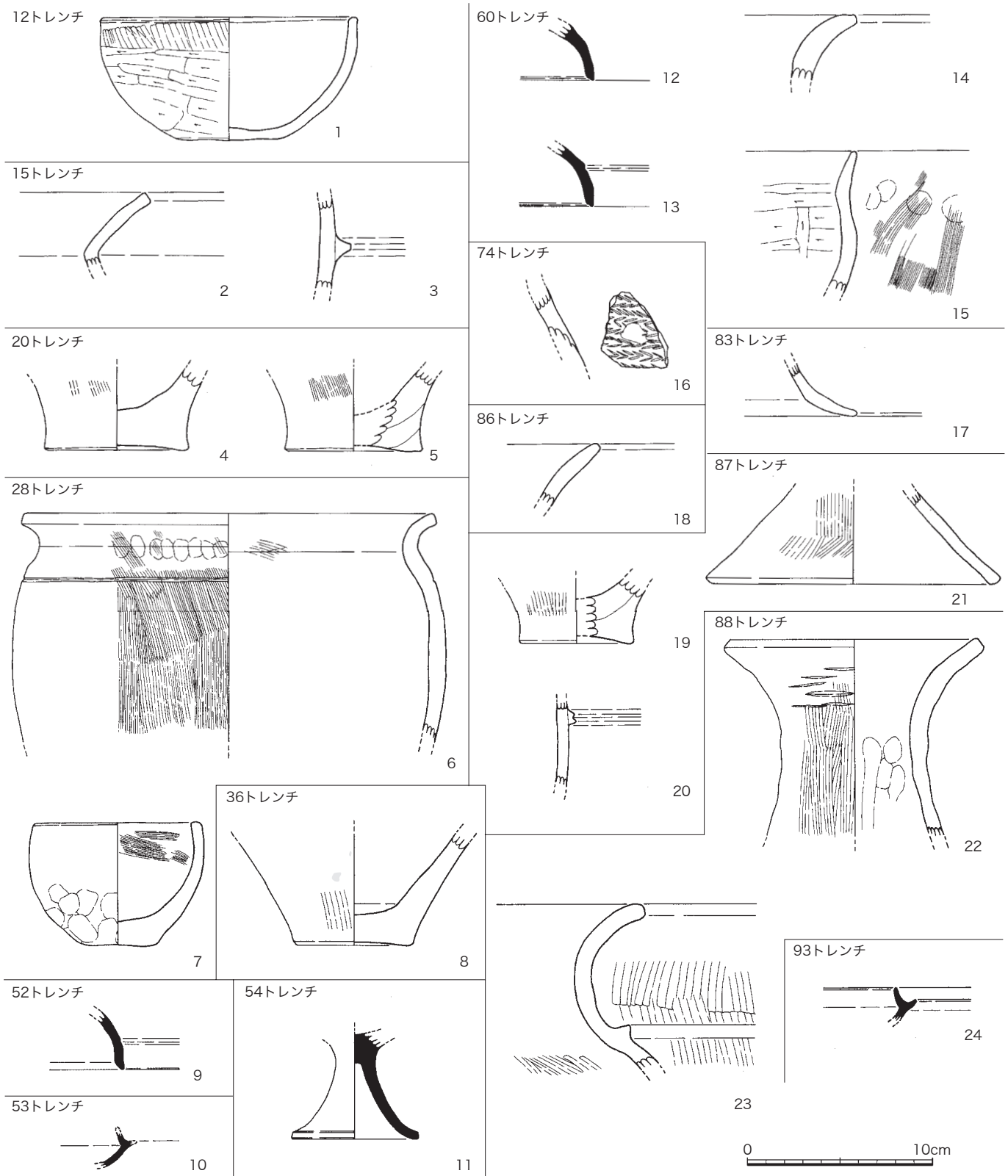


第3図 竹本工区試掘調査位置図 (1/6,000)

やや窪ませる。23は壺である。頸部に突帯が巡らされ、口縁部は外反する。24は93トレンチから出土した須恵器坏身である。

さて、トレンチから確認された遺構・遺物の出土状況などから、調査区周辺の遺構の広がりはいくつのように考えられる。

- ・ A-2区の流路の西側一帯（13～25トレンチ）に弥生時代の遺構が広がっている。これらのトレンチは現況から1m程度と深く、A-2区の遺構面とほぼ同レベルと予測される。



第4図 試掘調査出土遺物実測図 (1/3)

- ・ B区北側一帯（74～90 トレンチ）に弥生時代の遺構が広がっている。これらのトレンチは北側に行くほど深く、集落域は86 トレンチ周辺までと予測される。
- ・ B区東側の小さな谷を隔てた92～94 トレンチ一帯には古墳時代以降の遺構が広がっており、集落の存在が予測される。
- ・ C区周辺の60、66 トレンチ以西は掘削を受けているものと考えられる。
- ・ A-1 区の北側一帯は砂礫層が多く南西側の小谷より流れる方司口川と大肥川の合流地点の氾濫源や大明中学校周辺からC区までの間は大幅な削平により遺構が認められない。

### (3) 調査の経過

調査は平成15年5月27日からA-1区より開始した。ちょうど梅雨時期であることから現場の水没がたびたび発生し、作業がとどこおったものの6月末にはB-2区の調査を開始、平行して実施していたA-1区の調査は7月中旬には終了した。7月末にC区の調査を開始し、8月中旬にはA-2区の調査を開始した。工事との関係から同時に3箇所の現場を実施する状況が続き、各地点の遺構の密度が高いことなどから調査は困難を極めた。そのなかで、徐々に各地点の調査を終了することができ、8月後半にはB-2区、9月中旬にはC区の調査を完了した。A-2区は暗渠などのかく乱が縦横無尽に見られ、これらの除去に時間を要し、有機質遺物の存在も確認されたことから、調査に大きく遅れが生じた。9月後半にはB-1区の調査を開始し、B-2区同様の遺構の広がりが確認され、B-1区の墳墓群の調査に主力を置き、11月後半には調査を完了し、真砂土にて盛土保存を行った。その後、A-2区の調査に全力を注ぐものの、多数の土器・木器の出土や調査区内に大量の水が溢れ出る状況などから、大幅に工程の遅れが生じることとなった。12月に入ると、積雪や凍結などに悩まされ、県耕地課の協力を得て調査期間の延長を図った。また、調査の遅れを取り戻すべく、投光器などを用いて深夜まで、また昼夜天候を問わず作業を実施した。このような努力のいかいもあってか作業は順調に進み、遺構の完掘と測量を完了させ、2月13日には調査を完全に終了した。

なお、法的手続き及び契約関係の流れは以下のとおりとなっている。

平成14年5月27日には日田局耕第287号にて文化財保護法57条の3第1項の埋蔵文化財発掘の通知文の提出がなされ、6月25日には教委文第14-52号にて発掘調査実施の通知文書を受け、6月28日には日教委文第2354号にて文化財保護法58条の2第1項の発掘調査実施書類の提出、調査完了後の平成15年3月4日には教委文第14-241号にて埋蔵物の文化財認定を受けた。平成14年5月20日付けで市と県耕地課との間で、工事の実施区域・期間がJRを挟んで異なるなどの理由から、A区とB区（C区を含む）に分けて契約した。契約期間はA区が平成14年5月20日から平成15年3月20日、B区（C区を含む）が平成14年5月20日～平成15年3月20日までで、整理作業はA区を平成14年6月6日、B区を平成14年9月2日より開始した。なお、各地点並行して整理を行い、調査の完了した翌平成15年度には調査時の都合により区分けされていた契約を、整理作業と報告書作成作業として一本化し、平成15年4月14日から平成15年3月19日までの期間契約を取り交わし、整理作業及び、「大肥遺跡Ⅰ」の報告書作成を実施した。その後、平成16年度は平成16年4月15日から平成17年3月11日までの期間、契約を取り交し、整理・報告書作成作業を実施、平成17年度は平成17年4月20日から平成18年3月20日までの予定で契約を取り交し、整理作業及び、「大肥遺跡Ⅱ」、「大肥遺跡Ⅲ」の報告書作成を実施した。

また、各地区の調査経過の詳細は日誌に基づき、以下に記す。(A-1区は「大肥遺跡Ⅰ」を参照。)

#### A-2区 (1,000 m<sup>2</sup>)

- 8月19日 / 機械による表土剥ぎ、遺構検出を開始。
- 9月2日 / 暗渠等のかく乱の除去を開始する。
- 9月24日 / 調査区南半の掘下げ、遺構実測を開始。
- 10月17日 / 流路の掘下げを実施し、順次遺構の実測、遺物の取上げを実施する。
- 12月24日 / 多数の木製品の出土、記者発表を実施。
- 12月26日 / 投光器を使用して夜間の調査を開始する。
- 2月1日 / 清掃を行い、空中写真撮影を実施する。
- 2月4日 / 木甲の出土に伴い再度記者発表を実施。
- 2月12日 / 遺構の掘下げ、実測を完了する。
- 2月15日 / 機材の撤去を行い、調査を終了する。

#### B-1区 (1,500 m<sup>2</sup>)

- 9月24日 / 機械による表土剥ぎ、遺構検出を開始。
- 10月7日 / 甕棺墓等の遺構の掘下げを開始し、順次実測作業を実施する。
- 10月25日 / 成人用甕棺墓の人骨取上げを実施。
- 11月12日 / 空中写真撮影を実施する。
- 11月13日 / 真砂土により南半の埋戻しを行う。
- 11月25日 / 全ての遺構の掘下げ、実測を完了する。
- 11月26日 / 真砂土を用いて埋戻しを実施する。
- 11月29日 / 機材の撤去を行い、調査を終了する。

#### B-2区 (1,800 m<sup>2</sup>)

- 6月21日 / 石棺墓の露出を確認。手掘りにて遺構の検出を実施する。
- 6月27日 / 機械による表土剥ぎ、遺構検出を開始。
- 7月18日 / 遺構の掘下げを開始する。
- 7月29日 / 小児用甕棺墓の掘下げ、実測開始。
- 8月21日 / 空中写真撮影を実施する。
- 8月29日 / 機材の撤去を行い、調査を終了する。

#### C区 (1,100 m<sup>2</sup>)

- 7月29日 / 機械による表土剥ぎ、遺構検出を開始。
- 8月1日 / 遺構の掘下げ、実測を開始する。
- 9月17日 / 遺構の掘下げ、実測をほぼ完了する。
- 9月19日 / 空中写真撮影を実施する。
- 9月20日 / 機材の撤去を行い、調査を終了する。



写真3 A-2区作業風景



写真4 A-2区作業風景



写真5 B-1区作業風景



写真6 C区作業風景

#### (4) 遺跡の公開

大肥遺跡の各区の調査では、市民への調査成果の公表を始めとして、教育学習機会の提供、遺跡の見学会への協力などの普及啓発活動を実施した。以下その概要をまとめる。

平成 14 年 8 月 27 日 市内公民館行事「平成かんぎ塾」に協力。

大肥遺跡 B-2 区、A-2 区の遺跡見学及び体験発掘に 52 名の児童が参加。

平成 14 年 12 月 11 日 日田考古学同会による遺跡学習会に協力。18 名が A-2 区を見学。

平成 14 年 12 月 18 日 西日本新聞に弥生後期の農具の記事が掲載される。

平成 14 年 12 月 24 日 大肥遺跡各区の調査成果をマスコミ発表。(1 回目)  
大肥遺跡の概要及び調査成果(特に木製品)を公表。

平成 15 年 2 月 4 日 木甲の出土に伴い、再度のマスコミ発表(2 回目)  
県内では初例となる木甲を公開した。

そのほか、平成 15 年 11 月 16 日には九州古文化研究会例会にて「大肥条里遺跡大肥地区出土の木甲と調査概要」、平成 16 年 7 月 17 日には大分県考古学会例会にて「大肥条里大肥地区出土の弥生時代の木器について」を発表したほか、平成 15 年 11 月 16 日には大鶴地区ふるさとまつりにおいて出張展示を実施し、市民 209 名が見学を訪れた。

渡邊隆行 「大肥条里大肥地区出土の木甲と調査概要」『古文化研究会例会発表要旨』古文化談叢第 51 集 九州古文化研究会 2004



写真 7 A-2 区体験発掘風景



写真 8 遺跡学習会風景



写真 9 現地指導風景



写真 10 現地指導風景

## (5) 調査組織

調査関係者は以下のとおりである。なお、A～C区全てに及び記載している。(職名は当時のままとしている。)

### 平成14年度(発掘調査)

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	後藤元晴(日田市教育委員会教育長)
調査指導者	小田富士雄(福岡大学教授)、後藤宗俊(別府大学教授)、高倉洋彰(西南大学教授) 田中良之(九州大学教授)、下村智(別府大学助教授) 佐々木章(大分短期大学助教授)、山田拓伸(大分県立歴史博物館) 高橋徹(大分県教育委員会文化課)
調査統括	後藤清(同文化課課長)
調査事務	田中伸幸(同文化課文化財管理係長兼埋蔵文化財係長) 園田恭一郎(同文化課主査)、酒井恵(同文化課主事補)
調査担当	行時桂子(同文化課主任)、渡邊隆行(同文化課主事)
調査員	土居和幸(同文化課主査)、若杉竜太(同文化課主事)
調査協力者	肥塚隆保、高妻洋成(独立行政法人奈良文化財研究所) 行時志郎(日田市経済部農政課) 山田昌明(東京都立大学助教授)、石井芙美子(夜須町教育委員会)
来訪者	岩満聡、小林昭彦、渋谷忠章、重藤輝行、高橋信武、玉川剛司、宮内克巳
整理補助員	杉森久恵、藤野美音
発掘調査員	穴井昌生、池田貞夫、石井アヤ子、石井チエ子、石井俊政、伊藤智恵子、糸永和子、井上賢信、一ノ宮高喜、一ノ宮森男、岩本綾子、宇都宮貴仁、岡部進、岡部壽美恵、岡崎健治、梶原一二三、北向チズ子、五反田静子、後藤孝市、財津由太、財津利枝、坂本サツキ、高倉知子、田中昇、太郎良開、筒井英治、室井キミ子、森山熊夫、森山春義、森山八重子、森山國雄、森山夏雄、森山幸雄、森山征敏、森山文雄、森山スミ子、森山純義、原田寅夫、平原知義、古田太、堀英子、三俣エイ子、山下アヤ子、山下勇美子、柳原貢、吉田勝秋、和田フミ子
整理作業員	朝倉眞佐子、穴井トミ子、石田紀代子、井上とし子、伊藤一美、伊藤弘子、石松裕美、宇野富子、鍛冶屋節子、梶原ヒトエ、川原君子、黒木千鶴子、佐藤みちこ、坂口豊子、坂本和代、田中静香、中原琴枝、聖川暢子、平川優子、安元百合、吉田千鶴子、和田ケイ子

### 平成15年度(整理作業、報告書作成)

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	後藤元晴(日田市教育委員会教育長)(～平成15年7月) 諫山康雄(日田市教育委員会教育長)(平成15年8月～)
調査統括	後藤清(同文化課課長)



調査事務 佐藤晃（同文化課主幹兼埋蔵文化財係長）園田恭一郎（同文化課主査）  
酒井恵（同文化課主事補）  
報告書担当 渡邊隆行（同文化課主事）  
調査員 土居和幸（同文化課主査）、行時桂子（同文化課主任）  
若杉竜太（同文化課主事）  
調査協力者 藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館）、古谷毅（東京国立博物館）  
山田拓伸（大分県立歴史博物館）  
調査補助員 岡本彩、杉森久恵、藤野美音  
整理作業員 朝倉眞佐子、穴井トミ子、井上とし子、伊藤一美、伊藤弘子、石松裕美、宇野富子、  
鍛冶屋節子、梶原ヒトエ、川原君子、黒木千鶴子、佐藤みちこ、坂口豊子、坂本和代、  
田中静香、中原琴枝、聖川暢子、平川優子、安元百合、吉田千鶴子、和田ケイ子

平成 16 年度（整理作業、報告書作成）

調査主体 日田市教育委員会  
調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長）  
調査統括 後藤清（同文化課課長）  
調査指導者 山口譲治（福岡市教育委員会）  
調査事務 高倉隆人（同文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長）伊藤京子（同文化課副主幹）  
中村邦宏（同文化課主事補）  
報告書担当 渡邊隆行（同文化課主事）  
調査員 土居和幸（同文化課主査）、行時桂子（同文化課主任）  
若杉竜太（同文化課主任）  
調査協力者 扇崎由（岡山県教育委員会）、河合忍（岡山県古代吉備文化財センター）  
山田拓伸（大分県立歴史博物館）、山本悦世（岡山大学教授）  
調査補助員 奥森岳士、杉森久恵、藤野美音  
整理作業員 朝倉眞佐子、井上とし子、伊藤一美、石松裕美、宇野富子、川原君子、黒木千鶴子、  
佐藤みちこ、坂本和代、田中静香、中原琴枝、聖川暢子、安元百合、和田ケイ子

平成 17 年度（整理作業、報告書作成）

調査主体 日田市教育委員会  
調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長）  
調査統括 後藤清（同文化財保護課課長）  
調査事務 高倉隆人（同文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）  
伊藤京子（同文化財保護課専門員）、中村邦宏（同文化財保護課主事補）  
報告書担当 渡邊隆行（同文化財保護課主任）  
調査員 土居和幸（同文化財保護課副主幹）、今田秀樹（同文化財保護課主任）  
行時桂子（同文化財保護課主任）、若杉竜太（同文化財保護課主任）  
矢羽田幸宏（同文化財保護課主事補）  
調査協力者 山田拓伸（大分県立歴史博物館）  
整理作業員 宇野富子、黒木千鶴子、梶原ヒトエ

## 第2章 遺跡の立地と環境

### (1) 地理的・歴史的環境

大肥遺跡の所在する日田市は大分県の西部に位置し、西は福岡県、南は熊本県との県境をなす。平成17年3月22日には、旧日田郡（天瀬町、大山町、上津江村、中津江村、前津江村）と合併し、南北48.1km、東西24.6km、面積約66,619ha、人口は約77,000人の小都市が誕生し、市の境界は西が福岡県うきは市や朝倉市、朝倉郡東峰村、八女郡星野村、同矢部村と、北は福岡県田川郡添田町、大分県中津市と、東は大分県玖珠郡玖珠町や熊本県阿蘇郡小国町、同南小国町、南は熊本県山鹿市、菊池市、阿蘇市とそれぞれ接している。

日田市の地形を概観すると、現在の市街地にあたるのが日田盆地中央の沖積面で、標高は75～90mを測り、日隈・月隈・星隈と呼称される残丘が盆地内に点々と残っている。この盆地底の沖積面周囲には標高約150m前後の阿蘇4火砕流の流出により形成された溶岩台地が段丘上に巡っており、これらの台地は山田原、吹上原などに代表されるように原（はる）と呼ばれる。台地群の外側は龍体山（345m）、西の山（308m）、片峰（約500m）、大石峠（約400m）などの標高約200～600mの耶馬溪火砕流で形成された溶岩台地が占め、さらにその外輪には岳滅鬼山（1,036m）、大将陣山（909m）、一尺八寸山（707m）、月出山（709m）、五条殿山（834m）、釈迦岳（844m）といった標高400～1,000m級の山々、さらに遠方には彦山（1,199m）系、久住山（1,786m）系、阿蘇外輪山（900～1,000m）が広がっている。日田市内には幾つもの小河川が流れ込んでおり、久住山系を源とする玖珠川は天瀬中央部を西流し、阿蘇外輪山を源とする大山川は中津江、大山を北流して盆地東部で合流し、これに台地の合間を縫うようにして幾つもの小河川が盆地内で合わさり、九州最大河川である筑後川（日田市内では三隈川と呼称）となり、さらに西流して大肥川が合流し、筑後平野を経て有明海へと注いでいる。日田盆地の特長とも言える、夏は暑く冬は寒いという典型的な内陸型の気候も、こうした自然環境の影響が大きい。

さて、こうした自然環境下にある日田盆地の西部大肥川沿いに大肥遺跡は存在している。大肥川は福岡県東峰村皿山に源を発し、日田市最北端に位置する岳滅鬼山に源を発する鶴河内川と谷の北部で合流した後、三隈川へと流れ込んでいる。河川の浸食作用によって形成された谷の地形面は、千田昇氏の分類では、阿蘇4火砕流堆積面がさらに開析された時の地形面である「中位段丘2面」と呼ばれ、大肥川沿いには河岸段丘や高位扇状地として主要な地形面を形成している。こうして発達した谷地の最も開けた場所に大肥遺跡は立地しており、やや上流の鶴河内川との合流地点より西奥は一段と幅の狭い谷が形成され、自然の城門のような様相を呈している。この箇所は上座郡と日田郡との国境となっており、現在でも天保6年に建てられた国境石がその当時の国境の名残を残し、現在の福岡県との県境ともなっている。

先史時代の日田市において最初に人類の生活跡が確認されるのは、後期旧石器時代初頭からである。台形様石器群、ナイフ形石器群、細石刃などの狩猟具や生活痕跡などが発見される遺跡が五馬台地に多く見られ、獲物を求めて筑後川上流域を遊動していた様子が見て取れる。特に、代表的な遺跡として後期旧石器時代終末の細石器文化期の亀石山遺跡があり、約2万点を越す石器群の出土は五馬台地周辺の狩猟活動の拠点的な役割を果たしていたことを示している。

縄文時代には、日田盆地内及び五馬台地、大山川流域などの市内各所において遺跡が確認される。

早期の押型文土器、前期の轟式土器、曾畑式土器、中期の船元式土器、後期の磨消縄文土器、晩期の黒色磨研土器などが出土する遺跡が豊富に見られ、縄文時代全般を通して市域全体にその居住域が広がったことが推察される。中でも、平草遺跡では縄文時代の早期の集石炉や落とし穴が確認され、三和教田遺跡 C 地点では縄文時代後期から晩期の流路跡から土偶が出土し、手崎遺跡からは縄文時代後期の竪穴住居跡が確認されている。

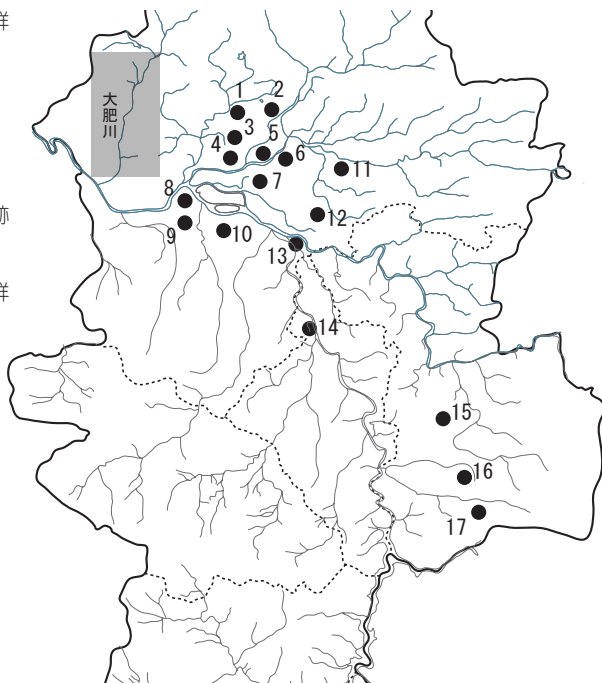
弥生時代には、土器型式や甕棺墓、立岩産の石庖丁などの文物の流入に顕著に現れる福岡平野や筑後地域の弥生文化の影響を受けて、前期後半には本格的な集落が誕生する。この弥生文化は盆地から宇土遺跡などの五馬台地や中川原遺跡などの大山川流域へと広がり、吹上台地には日田地域の中心的集落と考えられる吹上遺跡が生まれる。なかでも銅戈や鉄剣、貝製腕輪、勾玉、管玉などの青銅器・鉄器・装身具などの豪華な副葬品を有する集団墓の存在が明らかとなっており、日田地域の盟主的役割を担っていたものと考えられる。後期に至ると、市内でも平島遺跡や三和教田遺跡などの環濠集落が台地縁辺部へと広がりを見せ、弥生集落の地域的まとまりが市内各所へと広がっていったことが予見される。

弥生時代終末から古墳時代初頭には、複数の環濠集落や居館が営まれる小迫辻原遺跡が登場し、集落の中心は吹上遺跡から隣接する辻原台地へと移る。中期に至ると日田の地にも前方後円墳が遅れて築かれる。後期には市内最大の前方後円墳である朝日天神山古墳群や、筑後地方の影響の下にガランドヤ 1・2 号墳や穴観音古墳、法恩寺山古墳 4 号墳などの装飾古墳が築造される。このうち、法恩寺山古墳は『豊後国風土記』に記されている日下部氏が本拠とした場所に位置するとされ、一族の墓所に比定される。

この日下部氏については、天平 9 年 (737) の『豊後国正税帳』に大領・少領・主張の郡司職を独占していたとの記録があり、8 世紀のはじめに豊後国と共に成立した日田郡の支配体制は確立していたものと考えられる。日田郡には 5 郷、14 里、1 駅が所在したとされ、5 郷は石井・鞆編・在田・

亘理・夜開郷に当たる。これらの比定地は現在の町名にその名残を残し、石井郷は玖珠川右岸流域一帯、鞆編郷は三隈川左岸一帯、在田郷は有田川流域一帯、亘理郷は花月川右岸流域一帯、夜開郷は大肥川流域一帯に比定される。また、駅については『延喜式』に石井駅と記されていることから、石井郷内に所在し、大宰府と豊後国府を結ぶ主要道の駅家が盆地南部に設置されていたものと考えられる。これらを示すように、亘理郷に所在する小迫辻原遺跡からは整然と並ぶ建物群と共に「大領」銘の墨書土器が発見されており、

1. 朝日天神山古墳群
2. 三和教田遺跡
3. 小迫辻原遺跡
4. 吹上遺跡
5. 永山布政所跡
6. 慈眼山瀬戸口遺跡
7. 咸宜園跡
8. ガランドヤ古墳群
9. 穴観音古墳
10. 上野第一遺跡
11. 平島遺跡
12. 法恩寺山古墳群
13. 手崎遺跡
14. 中川原遺跡
15. 宇土遺跡
16. 平草遺跡
17. 亀石山遺跡



第 5 図 主要遺跡分布図 (1/200, 000)

日下部氏の居宅の存在を窺わせ、石井郷に位置する上野第一遺跡からは古代の道路跡と共に「豊馬豊馬」銘の刻書石製品が発見されており、石井駅の存在を彷彿とさせる。

平安時代の中頃になると、日下部氏の勢力は衰え、荘園開発を背景に大蔵姓日田氏が台頭し、郡司職を担うようになる。この大蔵氏は花月川左岸の慈眼山丘陵一帯に山城を築き、中世日田を治め、西豊後一帯にその勢力を誇るようになる。現在も市内に残る永興寺や岳林寺の仏像群に当時の面影が偲ばれる。慈眼山瀬戸口遺跡からは、多量の土師器、輸入陶磁器、渡来銭、十一面観音菩薩像などが出土しており、大蔵氏との関連が想定される。

こうした大蔵姓日田氏の支配も文安元年（1444）には断絶を迎え、変わって大友姓日田氏が登場するが、16世紀前半には大友義鑑により指名された日田郡司職を相伝してきた大蔵氏族の中から選ばれた別名八奉行と呼ばれる郡老支配を経て、文禄2年（1593）には豊臣秀吉の太閤蔵入地となる。翌年には宮木長次郎が代官として赴任し、日隈山に日隈城を築き、城下町として隈町をつくって政治拠点とした。近世に至る慶長6年（1601）には日田は江戸幕府領となり、小川壱岐守光氏が月隈山に丸山城（後に永山城）を築き、城下に丸山町（後に豆田町）をつくると、以後明治維新を迎えるまでの260年余りの間、一時親藩・諸大名の支配地を除けば天領の地となる。

寛永16年（1639）には永山城の堀外に代官陣屋（後に西国筋郡代）、別名永山布政所が置かれ、豆田町には商人が集うようになり、文字通り日田は西海道の政治・経済・文化の中心的な役割を担うようになる。筑後国高良山路・久留米城路、筑前国大宰府路・福岡城路、彦山路・小倉城路、豊前国宇佐宮路・中津城路、玖珠郡森宮路、直入郡岡城路・肥後国阿蘇山路・隈府路・熊本城路と呼ばれる旧国の主要な地域と官道で結ばれ、こうした内陸交通網に加えて筑後川の通船や筏流しといった河川交通も栄え、年貢米や材木といった物資を西へ運び、内陸部の山間であって文字通り要衝の地としての役割を果たしていた。こうして発展した商業のうち千原家・森家・草野家・広瀬家などの有力商家は代官ご用達となり金融業（掛屋）を営むようになる。この掛屋の一つ広瀬家の長男に生まれた広瀬淡窓は文化14年（1817）に私塾咸宜園を開き、明治30年にその幕を閉じるまでの間、全国62ヶ国約5,000人の門弟が学んだ。

また、この時代に始まった杉の植林は日本三大美林の一つにも数えられ、日田杉の名称で一大産地として知られるようになると、日田下駄や家具の部材を作る製材所が立ち並ぶ林業の町へと発展した。また、豊富な筑後川の水源は、今でこそ「水郷日田」として観光のキャッチフレーズになっているが、遊船や鶴飼、鮎築といった伝統的な文化を育んできた。

明治維新を迎え、後に総理大臣となる松方正義が初代日田県知事として赴任し、明治4年には廃藩置県により日田県は大分県に吸収合併され、明治34年には隈町と豆田町が合併して日田町となり、大正5年には日田豆田を結ぶ筑後軌道が開通、昭和9年には国鉄久大本線が開通すると木材産業を支えてきた水運業は衰退してゆく。昭和15年、日田町と三芳・高瀬・光岡・朝日・三花・西有田の周辺6ヶ村が合併して日田市となり、さらに昭和30年には東有田・五和・夜明・大鶴・小野村が合併、平成17年には天瀬・大山町、上津江・中津江・前津江村の2町3村と合併し現在の日田市となる。

このように日田市は、弥生時代の稲作の伝播や装飾古墳の流入など、古代以後、西からの文化の影響を強く受けて発展してきた街で、大分県のなかにあっても伝統や文化などに独自の文化を色濃く残している。

(参考文献)

- 中島国夫 「日田盆地のなりたち」『日田市 30 年史』日田市 1974 年
- 千田昇 「日田・玖珠地域の地形—とくに台地地形について—」『日田・玖珠地域—自然・社会・教育—』大分大学  
教育学部 1992 年
- 行時志郎 「2 遺跡の立地と環境」『大肥中村遺跡—発掘調査概報—』2003 年
- 原田良伸ほか『日田市の歴史と文化財』日田市教育委員会 1996 年
- 土居和幸 「第 2 章 遺跡の立地と環境」『小迫辻原遺跡 I A・B・C・D 地区編』大分県教育委員会 1999 年
- 土居和幸 「第 2 章 遺跡の立地と環境」『吹上遺跡 I』日田市教育委員会 2003 年
- 『日田市史』日田市 1990
- 『天瀬町史 明日への礎』天瀬町 2005

## (2) 大肥川流域の遺跡

この地域は近年の圃場整備に伴う調査によりその概要が明らかになりつつある。この地域で確認される生活の痕跡は縄文時代からである。大肥下河内遺跡<sup>(註1)</sup>では前期の集石炉などが調査され、古屋敷遺跡<sup>(註2)</sup>では前期の包含層が確認されている。大肥吉竹遺跡<sup>(註3)</sup>では中期の船元式土器や球状耳飾再加工作品が見つかり、大肥祝原遺跡<sup>(註4)</sup>では後期の集石や土坑などが発見されている。

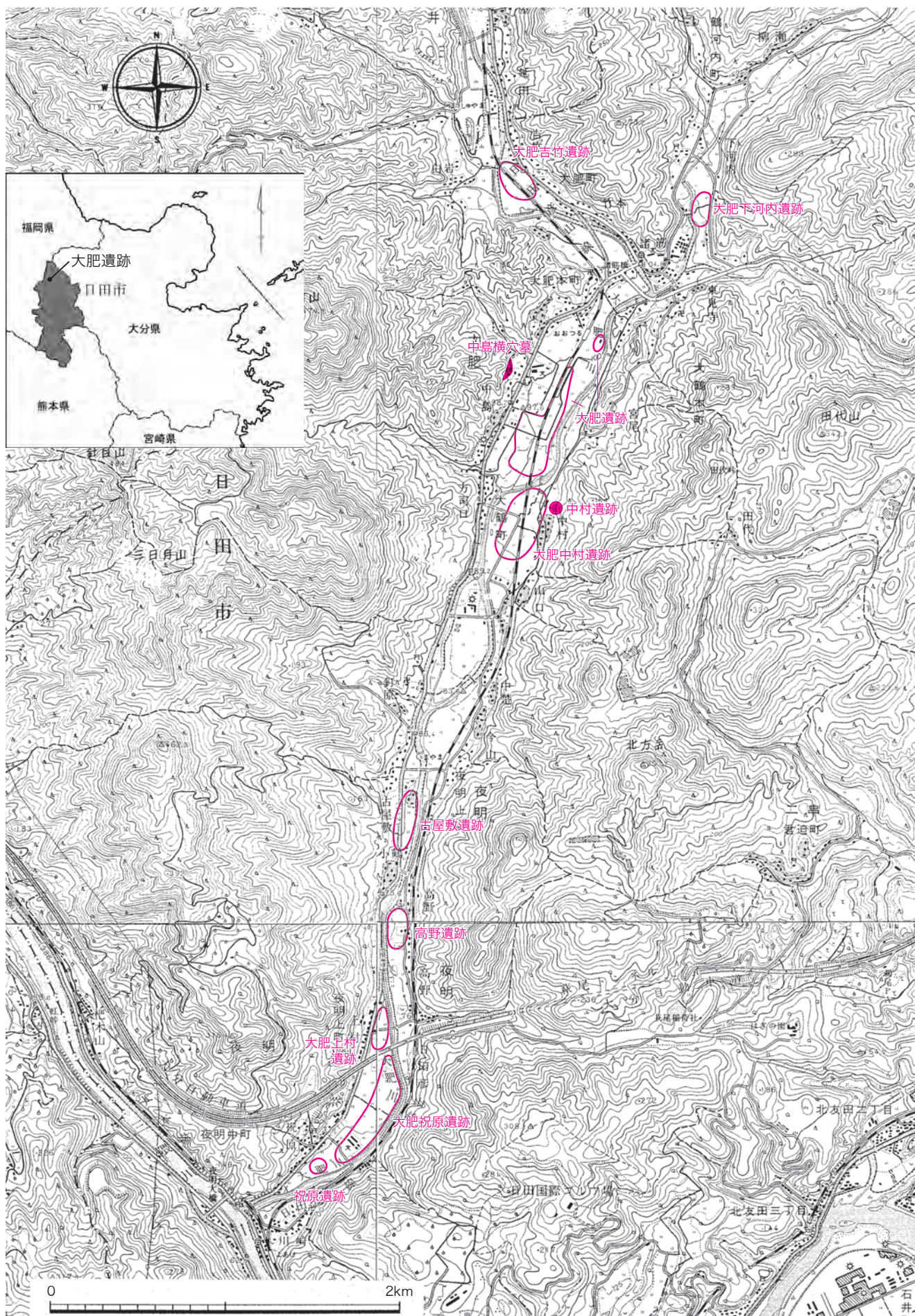
弥生時代では拠点集落が幾つか確認されている。大肥遺跡 A-2、B 区<sup>(註5)</sup>では、前期末から後期の集落跡、成人用甕棺墓、小児用甕棺墓などの墳墓群とそれらを囲むように流れ環濠の役割を果たしていた旧河道などが発見されている。この旧河道からは三叉鍬や杓子、建築部材など大量の木製品が発見されており、特に木甲の存在は注目される。大肥中村遺跡<sup>(註6)</sup>では、中期から後期の墳墓群が発見され、高野遺跡<sup>(註7)</sup>では中期末から後期の拠点集落が確認されている。また、大肥祝原、大肥上村遺跡<sup>(註8)</sup>では中期から後期の土坑などが確認されている。

古墳時代の開始期には大肥遺跡 A-1 区で前期初頭の流路や土坑などが確認され、水場の祭祀の痕跡が見つかっている。大肥遺跡 C 区で 5 世紀後半～6 世紀中ごろまでの竪穴住居群が確認され、縄蓆土器など韓国との交流を示す資料も発見されている。大肥吉竹遺跡、大肥中村遺跡では 6 世紀中ごろの住居が確認されている。

古墳時代の墳墓群は現在のところ確認されていないが、中島横穴墓<sup>(註9)</sup>など周辺の山間部に横穴墓の存在が知られ、また中村遺跡<sup>(註10)</sup>では箱式石棺墓の存在が確認されている。未調査であるため詳細は不明であるが、河岸段丘の周辺の高台などに墳墓群が存在した可能性が考えられる。

古代には、大肥吉竹遺跡にて大規模な集落跡が見つかっており、朱墨土器や円面硯の破片や転用硯、瓦などが発見され、官衙関連施設の可能性が考えられる。大肥中村遺跡では 8 世紀代の住居跡が発見されている。こうした遺跡の存在から、古代日田郡五郷のうちの夜開郷の推定地と考える説もある。

1285 年に書かれた『豊後国岡田帳』によれば、大肥川流域は「大肥荘」と呼ばれ、宇佐宮とならぶ大宰府天満宮安楽寺に寄進された水田地帯であったことがわかっている。この「大肥荘」は『天満宮安楽寺草創日記』に 1032 年、喜多院建立の際に寄進されたことが記述されていることから、それ以前には荘園開発が行われていたようである。これを示すように、この地域は条里地割が残る地域として知られており、周知遺跡名も大肥条里遺跡とされている。しかし、近年の発掘調査では



第 6 図 遺跡分布図 (1/30,000)

これら条里地割の痕跡は確認されず、水田の多くは、近世から近代にかけて大幅に改変されていることが分かってきている。

中世には、大肥中村遺跡で鍛冶工房や建物群、水田などが調査されている。また、中世墓も見つかっており、龍泉窯系青磁合子や湖州鏡などが見つかっており、多彩な中国系遺物を手に入れることの出来る程、鉄器の流通が盛んであったことが窺い知れる。また、高野遺跡では四面庇建物などの中世建物群が調査され、古屋敷遺跡では中世建物群や溝跡、祝原遺跡<sup>(註11)</sup>では水田が見つかっている。大肥荘の時代の賑わいをこれらの遺跡は物語っている。

近世では大肥中村遺跡で江戸時代前期の建物群が見つかっており、祝原遺跡でも建物群が調査されている。

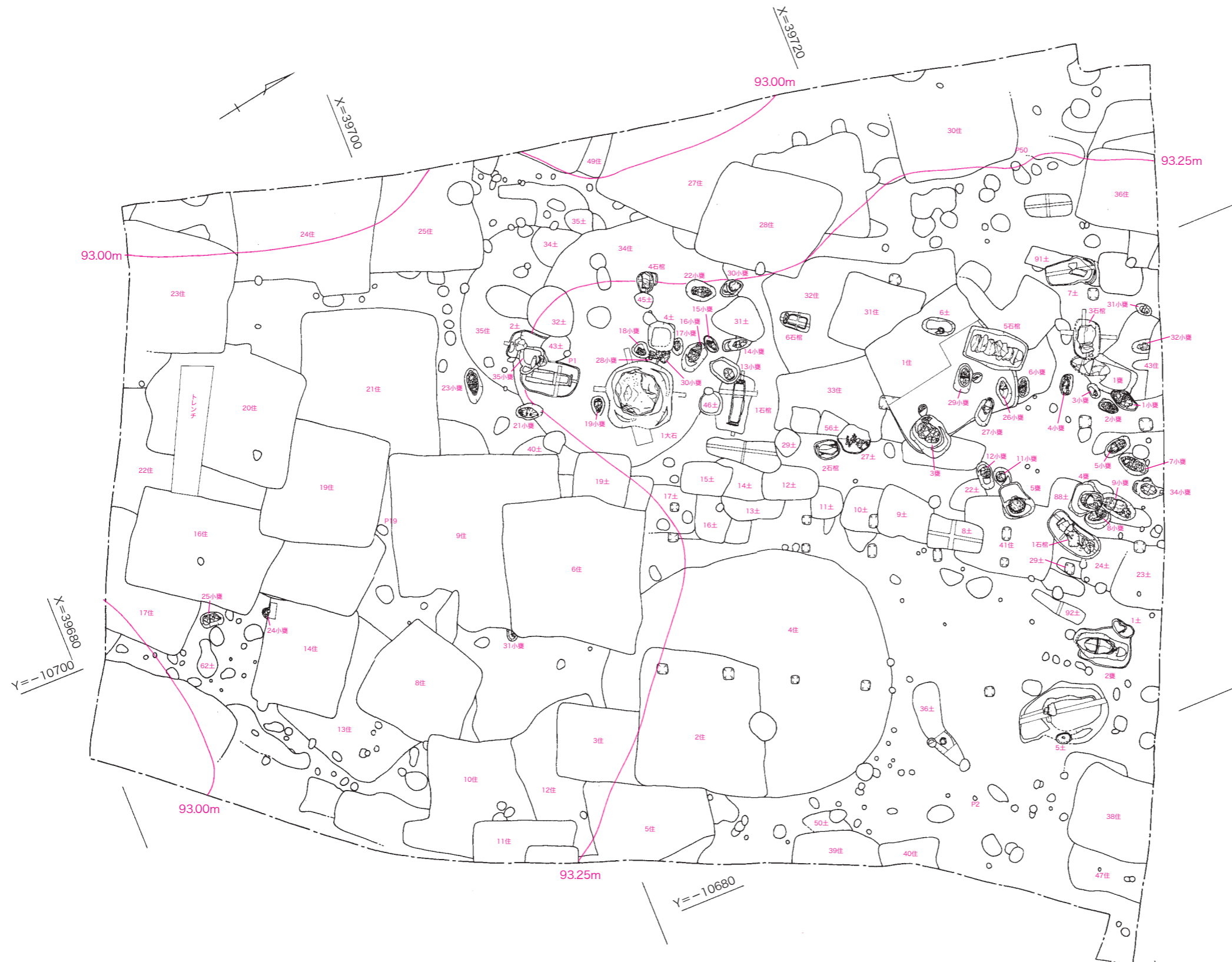
このように近年の調査により、多彩な遺跡の存在が明らかになりつつある大肥川流域は、九州の交通の要所である日田の西の玄関口として、古く縄文時代から現代にいたるまで脈々と生活が営まれ、また日田の歴史を解明する重要な地域となりつつあるのである。

#### 《参考文献》

- 註1) 今田秀樹編 『大肥下河内遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第63集 日田市教育委員会 2006年  
註2) 渡邊隆行 『古屋敷遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第56集 日田市教育委員会 2004年  
註3) 渡邊隆行 『大肥吉竹遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第48集 日田市教育委員会 2004年  
註4) 今田秀樹編 『大肥祝原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第64集 日田市教育委員会 2006年  
註5) 渡邊隆行 『大肥条里大肥地区』『平成14年度(2002年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2003年  
渡邊隆行 『大肥遺跡Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第50集 日田市教育委員会 2004年  
渡邊隆行 『大肥遺跡Ⅲ』日田市埋蔵文化財調査報告書第67集 日田市教育委員会 2006年  
註6) 行時志郎 『大肥中村遺跡-発掘調査概報-』日田市教育委員会 2003年  
行時志郎 『大肥中村遺跡Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第62集 日田市教育委員会 2006年  
註7) 若杉竜太 『高野遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第65集 日田市教育委員会 2006年  
註8) 若杉竜太 『大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第46集 日田市教育委員会 2003年  
註9) 横穴の開口が確認されている。  
註10) 『日田市史』日田市 1990年 道路工事中に発見されている。  
註11) 行時桂子 『祝原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第61集 日田市教育委員会 2005年



写真11 中島横穴墓開口状況



第7図 B-1区遺構配置図 (1/200)



### 第3章 B-1 区の調査の内容

#### (1) 調査の内容 (第7図)

調査区は大肥工区の中でも最南端にあたり、大肥川が大きく蛇行する沖積地上に位置する。対岸には大肥中村遺跡が近接し、北側に B-1 区、西側に A-2 区が隣接している。調査は盛土工法のため、墳墓群が多く見られる区域を中心に南北約 48 m、東西約 41 m の調査区を設定して実施した。調査区内での標高は約 93 m を測り、南及び西側に向かって緩やかに傾斜しており、地山は淡黄褐色の砂礫層で、埋土は黒褐色土、灰褐色土のものが多く、小児用甕棺墓には暗黄褐色土が多く見られた。接する A-2 区南側に建物群が見られることなどから、さらに南側まで遺構が広がっているものと判断される。

水田基盤土直下より検出された遺構のうち、掘下げは墳墓群を中心として実施し、その他の生活遺構などに関しては遺構面での確認にとどめている。遺構密度が非常に高いため、確認に留めた遺構に関してはプラン、切り合い関係などを十分に把握できていない。掘下げた遺構の内訳は成人用甕棺墓 5 基、小児用甕棺墓 35 基、石棺墓 6 基、木棺墓 2 基、土坑 11 基、竪穴住居跡 1 軒である。そのほか、確認に留めたものとして、少なくとも竪穴住居跡 48 軒、土坑 80 基、柱穴多数がある。なお、8～15 号土坑に関しては、長形状プランが列状に並んでいることから、木棺墓や土壙墓の存在を想定して一部遺構をトレンチにて掘下げたが、墳墓であるとの確証を得ることが出来なかった。そこでこれらに関しては土坑として取り扱っている。また、調査区は調査後に真砂土を利用して埋め戻す予定であったことから、破壊を受けない石棺墓、木棺墓などの掘方及び棺材を完掘することは避けてそのまま埋め戻した。

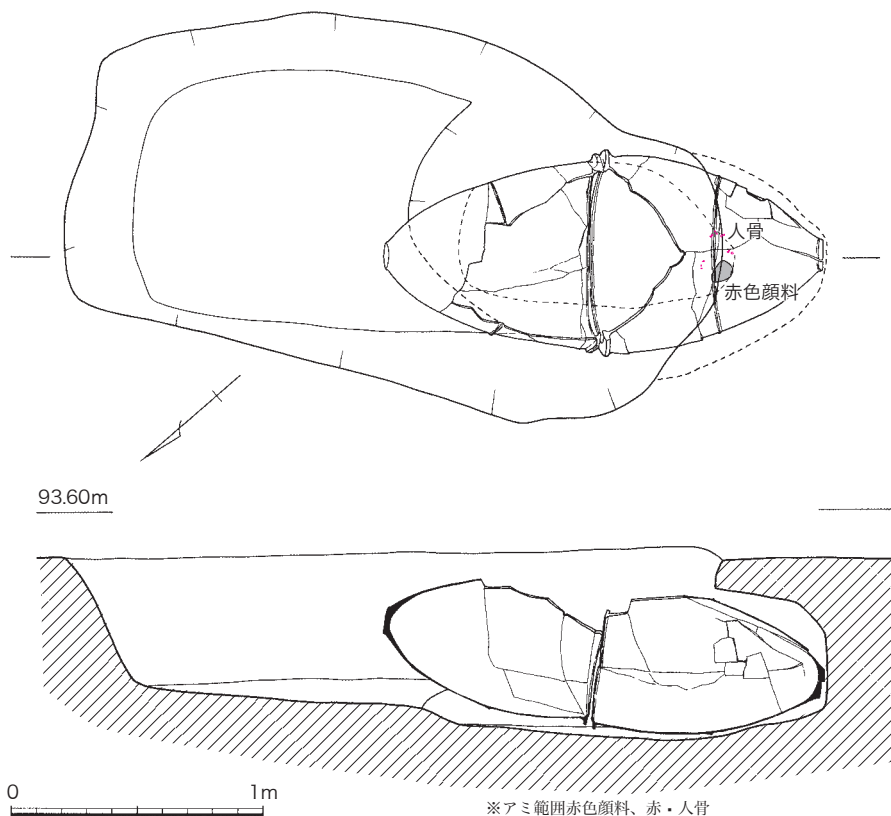
上記記載の遺構数はこれまでの概要報告とは若干異なるが、本報告を正式な報告とする。なお、

調査時に設定した 6 号成人用甕棺、1 号石蓋、1 号土壙墓の遺構番号は、本報告において 35 号小児用甕棺墓、1 号大石、92 号土坑と変更した。

〔文献〕

『平成 14 年度 (2002 年度) 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2003

『大肥遺跡 I - A-1 区の調査の記録 -』日田市埋蔵文化財調査報告書 第 50 集 日田市教育委員会 2004



第 8 図 1 号甕棺墓実測図 (1/30)

## (2) 遺構と遺物

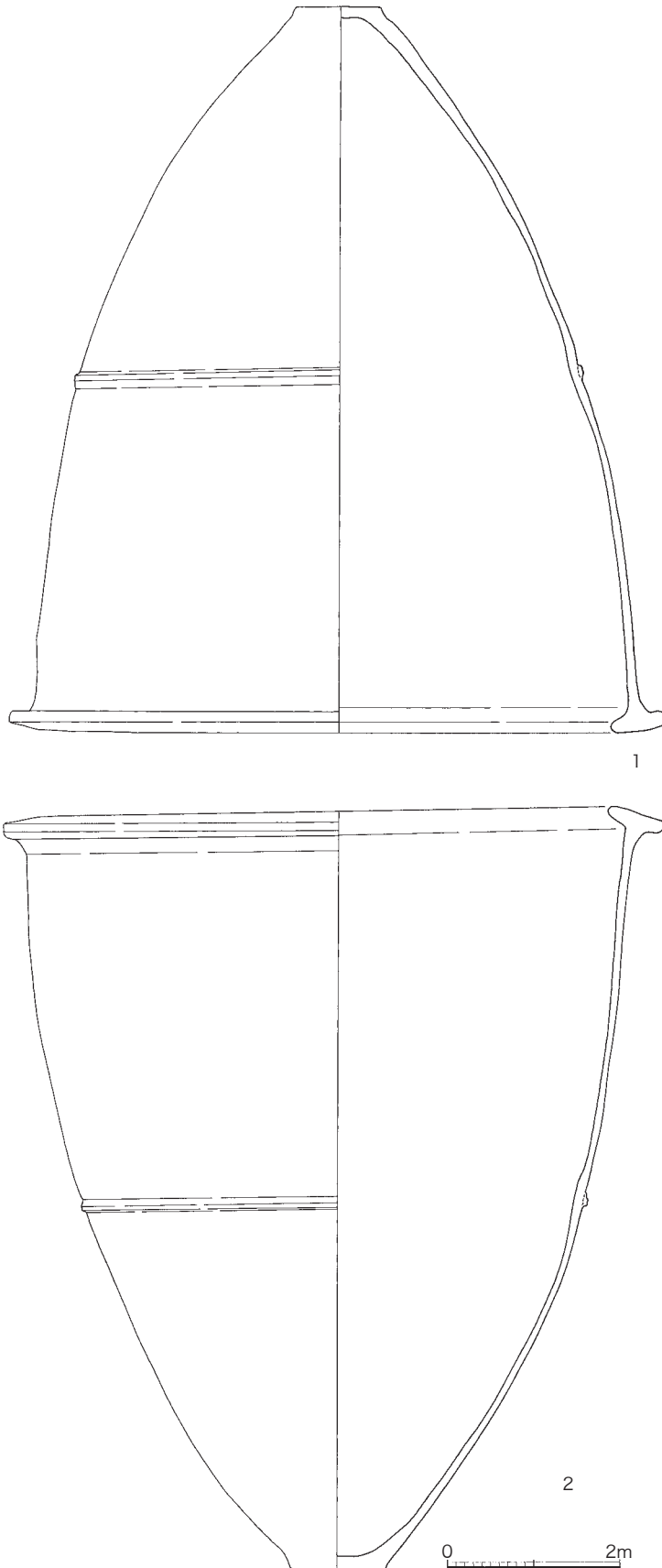
### 1. 成人用甕棺墓

成人用甕棺墓は調査区北側に集中して作られており、その殆どが竪穴住居跡、土坑の密集地から離れていた。また、1、3号甕棺墓は一部空洞化しており、重機による表土除去作業中に天井が一部崩落に伴い開口した。

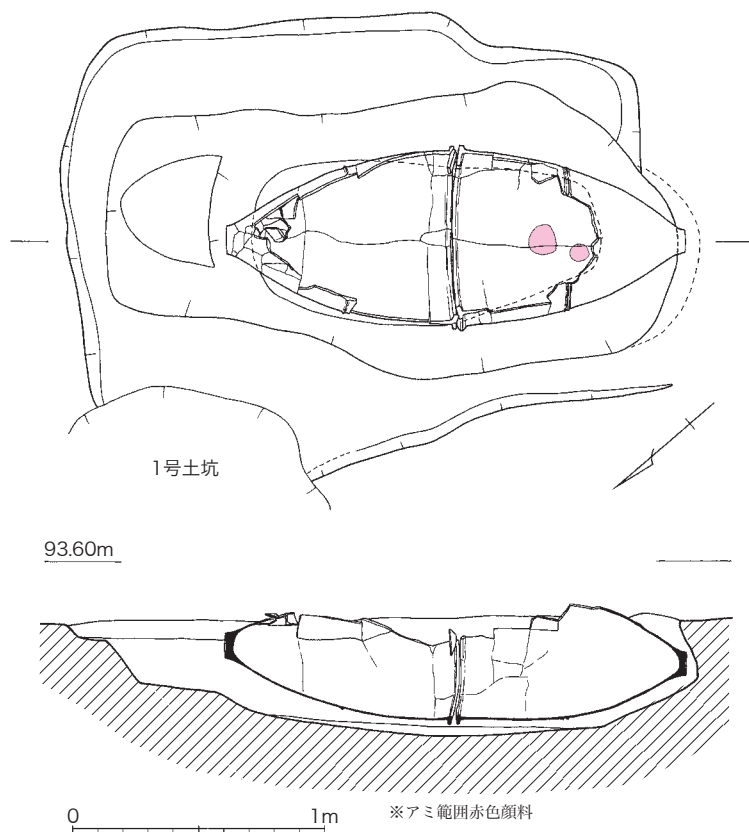
#### 1号甕棺墓 (第8・9図、図版4・16)

調査区北側に位置し、3号石棺墓、3号小児用甕棺墓に切られ、1号小児用甕棺墓と重複関係にある。うち、1号小児用甕棺墓は当初切り合いが詳細に判明せず、1号甕棺墓を切るものとして調査していたが、その後の整理から、1号甕棺墓が小児棺を切って作られたものと判断した。1号小児用甕棺墓の棺を壊すことなく成人棺の墓壙が作られたものと考えられる。したがって、1号甕棺墓の墓壙の南東側は調査時に掘りすぎてしまっている。墓壙は長方形状を呈し、確認面での規模は、南北長軸約2.6m、南北軸約1.6m、深さ約60cmを測る。墓壙の底から約10cmほど堀り窪め、横穴を掘って甕棺を挿入している。上下甕ともに残存状況もよく、接口式の組合せにより埋置され、埋置角度は約8度、主軸はS42°Wを測る。頭位は奥側で、歯牙の破片が残存し、部分的に少量の赤色顔料の飛散が認められた。

第9図1は上甕である。鋤先状の口縁部は口縁部内外に張り出しいわゆるT字形を呈し、外側に傾斜する。最大径は口縁部にあり、底部から緩やかに広がる砲弾形を呈し、胴部下半部に断面逆台形状の突帯が一条巡る。底部は薄めの平底と呈する。調整は内外ともに丁寧なナゲが施される。2は下甕で1とほぼ同じ器形、調整を呈するが、若干法量が大きい。



第9図 1号甕棺実測図 (1/8)

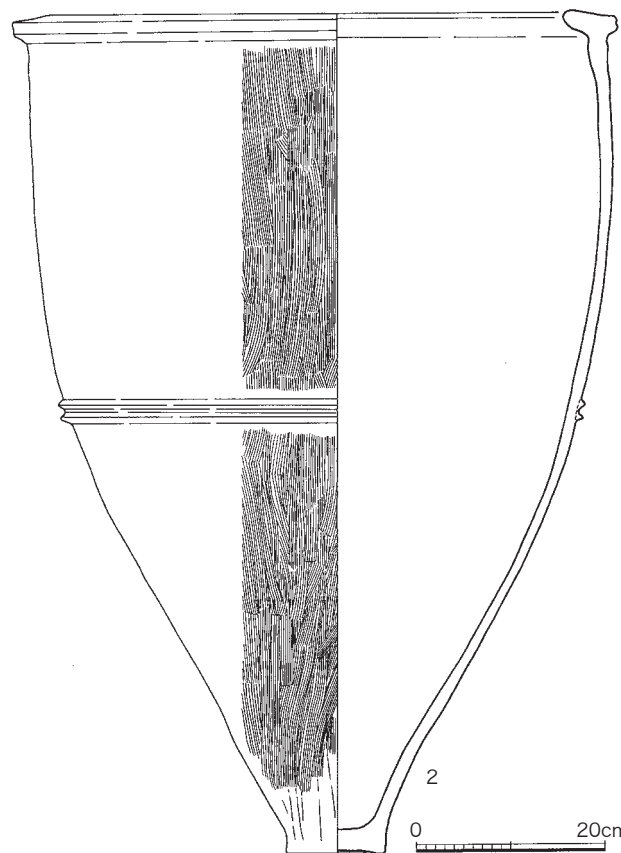
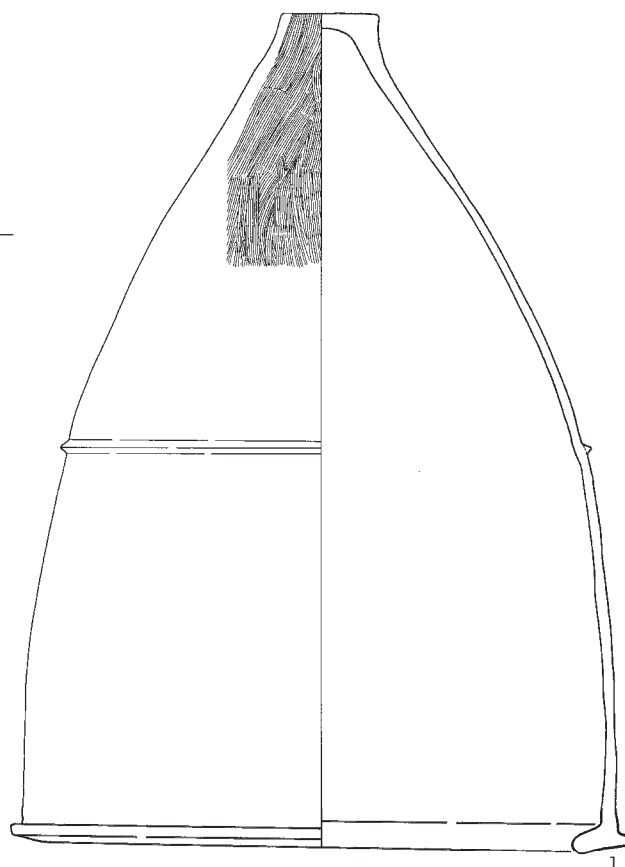


第10図 2号甕棺墓実測図 (1/30)

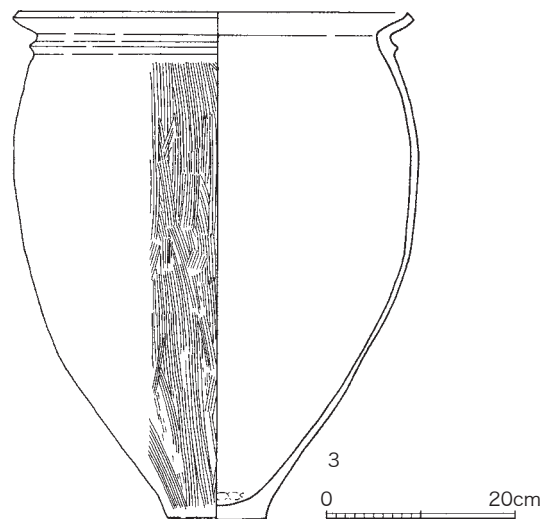
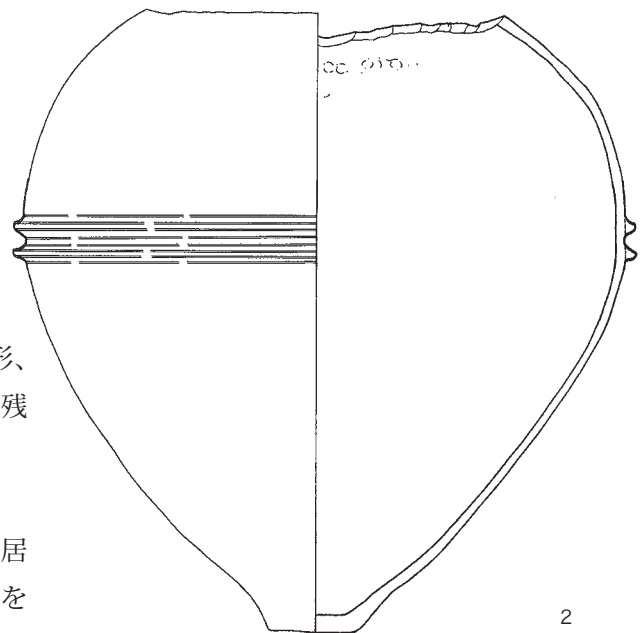
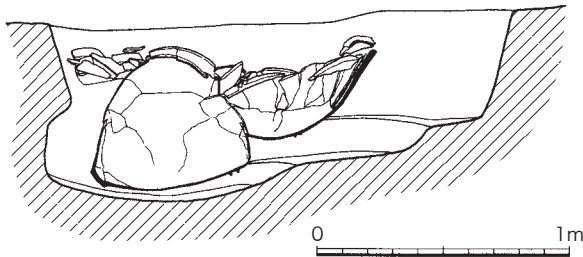
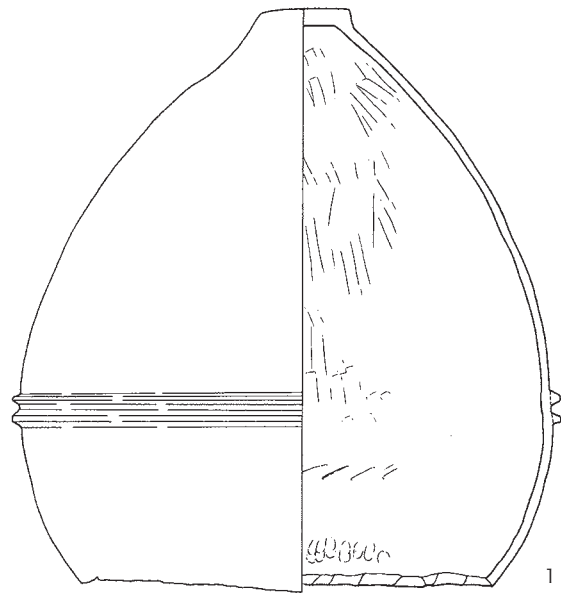
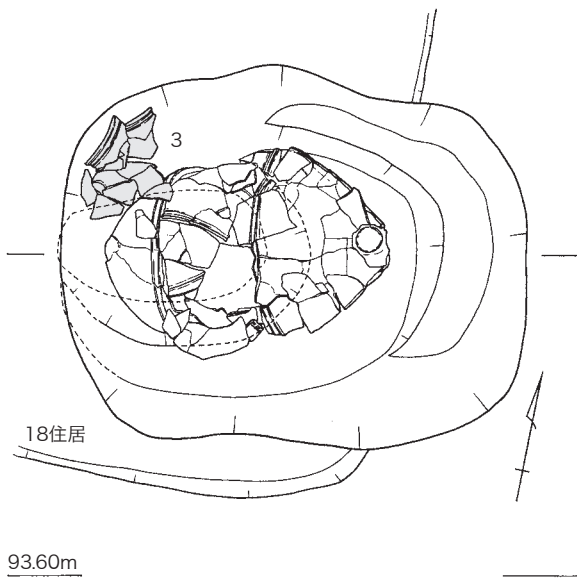
2号甕棺墓 (第10・11図、図版5・6)

調査区北側に位置し、1号土坑に切られ、成人用甕棺墓の中でも最も東側に位置する。墓壙は不整形を呈し、確認面での規模は南北軸約2.3m、東西軸約1.8m、深さ約25cmを測る。墓壙の底から約15cm程掘り窪め、奥側に甕棺を挿入する。上面は削平を受けているが、上下甕共に残存状況は良く、接口式の組合せにより埋置され、埋置角度は約3°、主軸はS39°Wを測る。頭位は奥側と見られ、頭部と想定される位置付近には少量の赤色顔料が飛散していた。上下棺共に甕の鋤先状口縁部内面のうち、底に当たる部分を意図的に打ち欠き、底面を平滑にしていた。

第10図1は、上甕である。鋤先状の口縁部は口縁部内側に大きく張り出し、外側は小さく張り出ている。いわゆるT字形を呈し、外側に傾斜する。胴部上半は直口気味に立ち上がりながら、やや外側へと開き、胴部に断面三角形の突帯が一条巡る。底部にかけてはすぼまった器形を呈し、底部は薄めの平底と呈する。調整は外面底部付近に縦方向のハケメが残るが、上半部は丁寧にナデ消される。内面



第11図 2号甕棺実測図 (1/8)



第12図 3号甕棺墓実測図 (1/30)

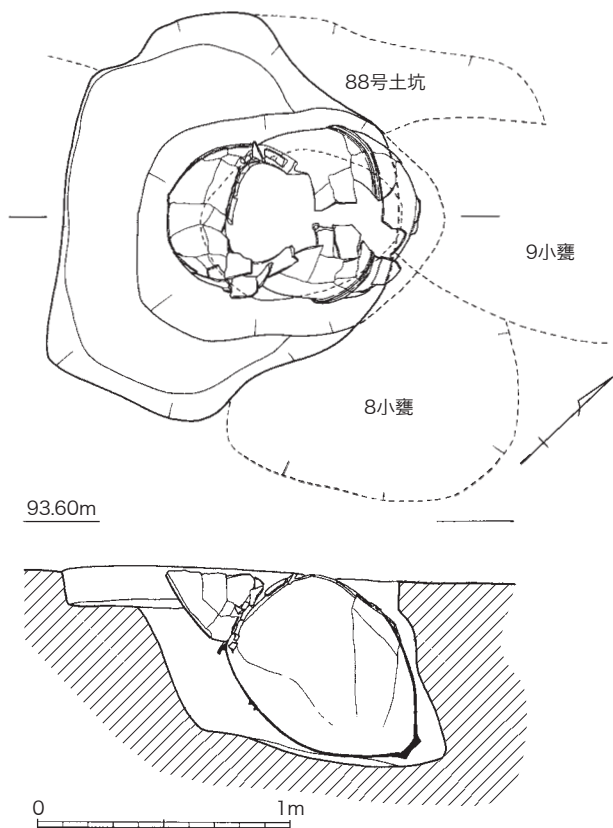
はナデ調整である。2は下甕で1とほぼ同じ器形、法量を呈するが、外面に縦方向のハケメが前面に残り、胴部に断面三角形上の突帯を2条巡らせる。

3号甕棺墓 (第12・13図、図版6・16)

調査区北側の甕棺墓群のなかに位置し、1号住居に切れ、58号土坑を切っている。墓壙は方形を呈し、確認面での規模は東西軸約1.9m、南北軸約1.5m、深さ約40cmを測る。墓壙の底から約15cmづつ、2段階に堀窪めて甕棺を挿入する。甕棺の上面は土圧のため崩落していたものの、下半部の残存から、上下甕共に口縁部打ち欠きの覆口式の組合せと想定され、埋置角度は約39°、主軸はN77°Eを測る。下甕のやや上面には3の甕が潰れた状態で検出された。おそらく小児用甕棺墓が3号甕棺墓の上面に作られていたが、土圧等により崩落したものと想定される。

第13図1は上甕である。口縁部を打ち欠いた甕で、胴部中央に最大径があり、頸部が大きく内傾する器形を呈するものと想定される。胴部には断面逆

第13図 3号甕棺実測図 (1/8)



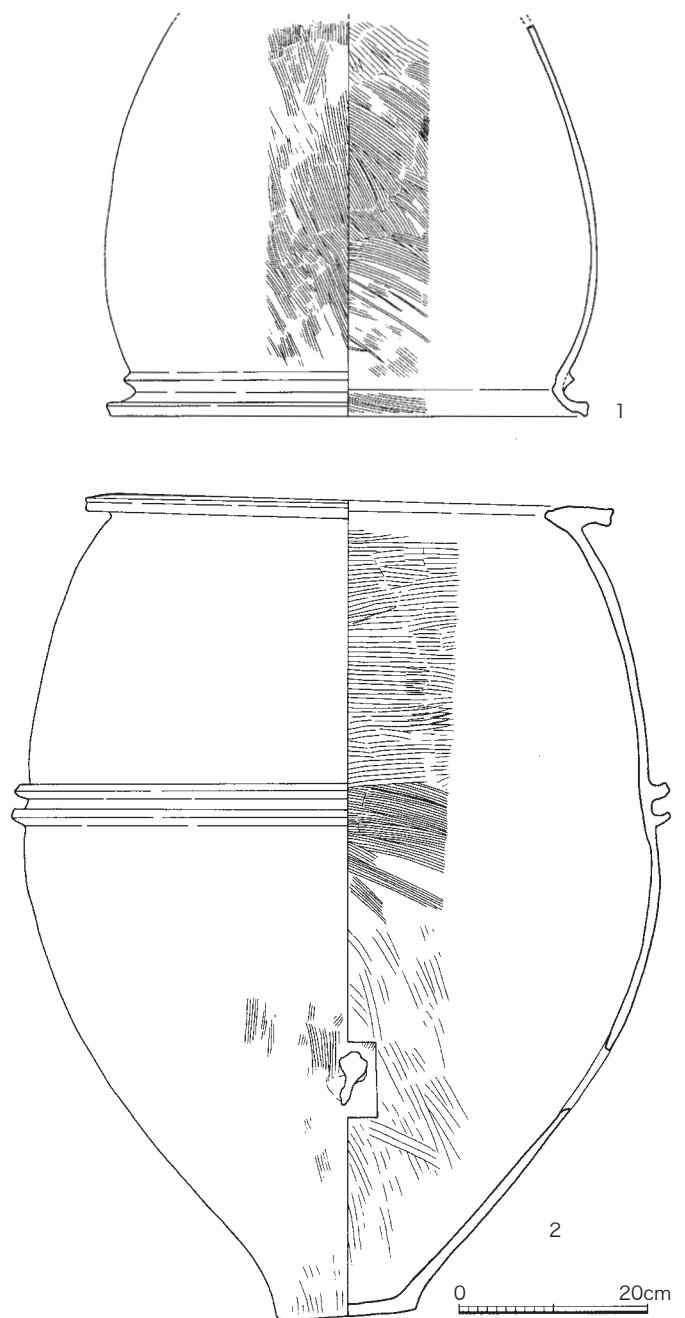
第14図 4号甕棺墓実測図 (1/30)

台形状の突帯が2条巡り、底部は平底を呈する。外面は丁寧にナデ仕上げ、内面には工具による仕上げ痕跡が残り、口縁部付近には指オサエが見られる。打ち欠かれた擬口縁部径は43.2cmを測る。2は1と同様に口縁部を打ち欠いた甕である。同じく、頸部が大きく内傾する器形を呈し、胴部には断面逆台形状の突帯が2条貼り付けられる。口縁部は平底を呈する。外面は丁寧にナデ仕上げ、内面口縁部付近には指オサエが残る。打ち欠かれた擬口縁部径は約37.6cmを測る。3は2の上面に崩落していた甕である。口縁部はくの字の跳ね上げ口縁状を呈し、頸部には断面三角形形状の突帯を1条巡らせ、胴部やや上半部が外に張り出す。底部は薄い平底を呈する。外面には縦方向のハケメが残り、内面はナデが施される。

#### 4号甕棺墓 (第14・15図、図版6・16)

調査区北側に位置し、8、9号小児用甕棺及び88号土坑を切っている。墓壙は横長の不整形を呈し、確認面での規模は南北軸約1.4m、東西軸約1.6m、深さ約15cmを測る。墓壙から約60cmほど掘り窪めて甕棺を挿入している。甕棺の上面は削平のため上甕は胴部下半を欠くものの、接口式の組合せにより埋置され、埋置角度は約46°、主軸はS42°Wを測る。下甕下面には穿孔が施され、穿孔部が底面に位置していた。

第15図1は上甕である。口縁部はくの字の跳ね上げ口縁状を呈し、頸部には断面三角形形状の突



第15図 4号甕棺実測図 (1/8)

帯が巡り、胴部上半部が外に張り出す。外面には縦ハケが残り、内面には斜め上方へのハケメが施される。2は下甕で口縁部は鋤先状を呈し、端部を窪ませる。頸部は大きく内傾し、胴部下半に胴部最大径がある、口縁部のすぼまった器形を呈する。胴部やや上方に断面逆台形状の上向いた突帯が2条巡り、底部は薄い平底を呈する。外面下半部にはハケメが残り、内面下半は荒いハケメをナデ消し、上半には細めの横方向のハケメが施される。

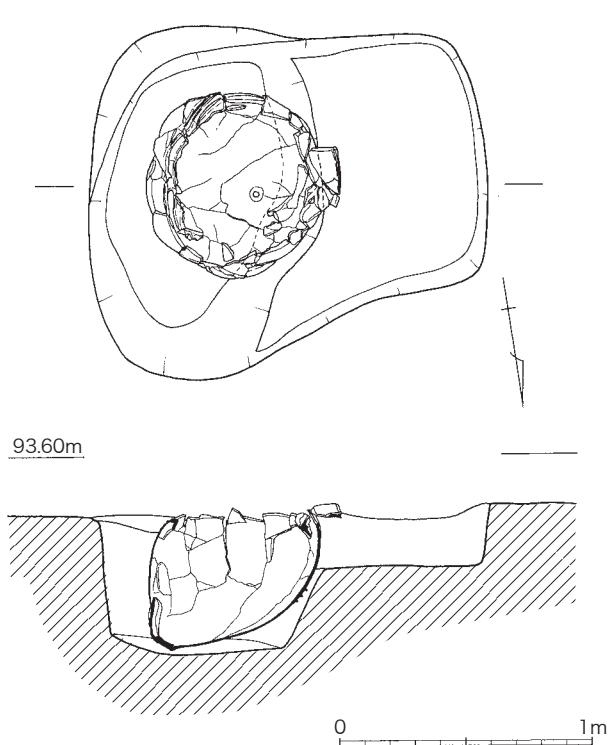
#### 5号甕棺墓（第16・17図、図版7・16）

調査区北側の甕棺墓群の中に位置し、11号小児用甕棺墓、41号住居を切る。墓壙は方形状を呈し、確認面での規模は東西軸約1.6m、南北軸約1.4m、深さ約25cmを測り、墓壙から約30cm掘り窪めて甕棺を挿入している。甕棺の上面を削平されているが、残存状況からも単棺であると想定され、埋置角度約62°、主軸N81°Wを測る。下面には穿孔が施され、穿孔部が底面に位置していた。

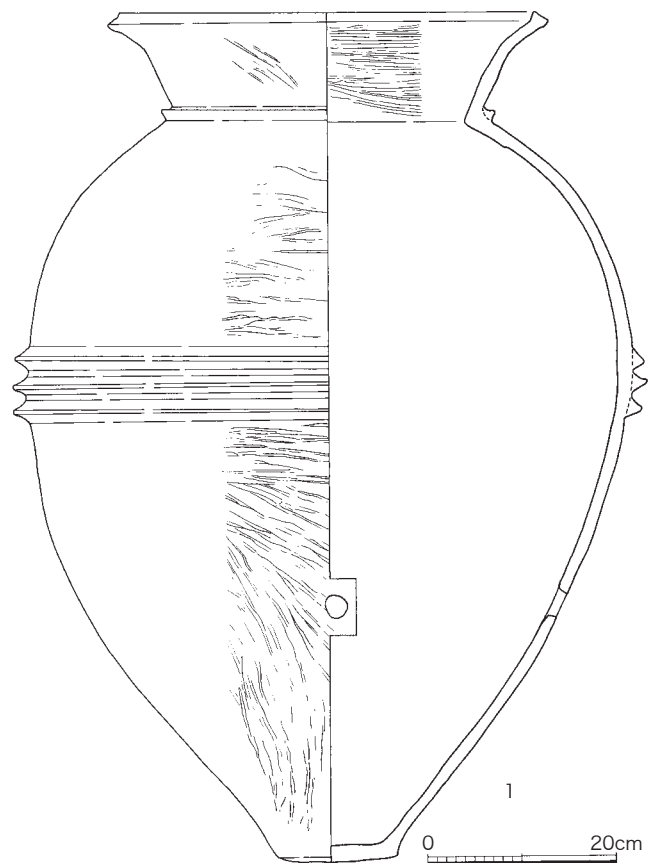
1は使用されていた甕で、口縁部はくの字の跳ね上げ状を呈するが、長く上方に立ち上がり、端部を平滑に仕上げる。頸部は大きく内傾し、断面三角形状の突帯が一条巡る。胴部上半が外に張り出し、胴部には断面三角形状の突帯が3条巡る。底部はやや膨らむレンズ底状を呈する。外面はミガキをナデ消し、内面はナデ仕上げ、口縁部には横方向のハケメが残る。

### 2. 小児用甕棺墓

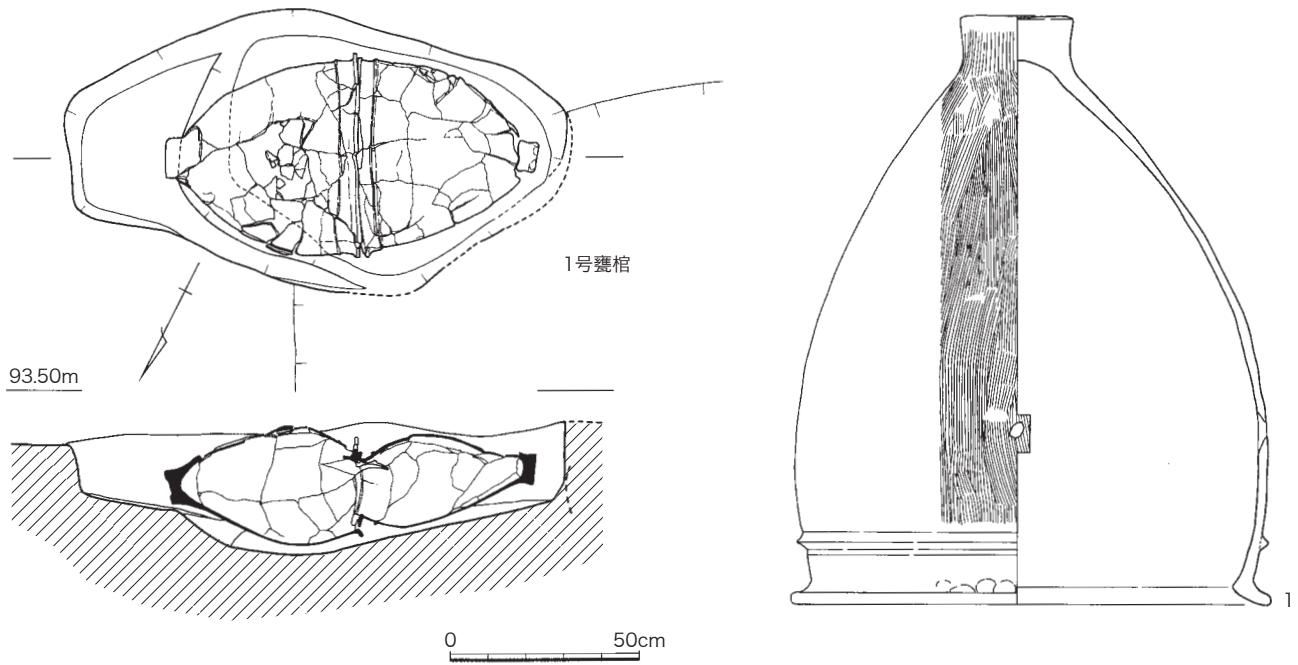
大半が上面を削平され、土圧により崩落していた。成人用甕棺、石棺、木棺墓の周囲に多く見られ、住居群の密集部より離れた位置に分布する。



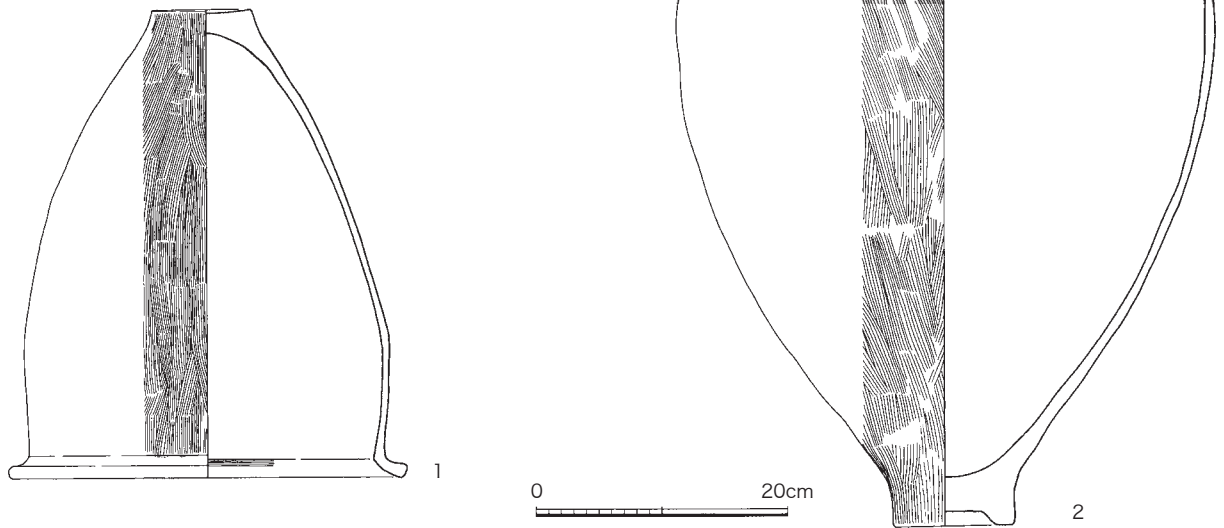
第16図 5号甕棺墓実測図 (1/30)



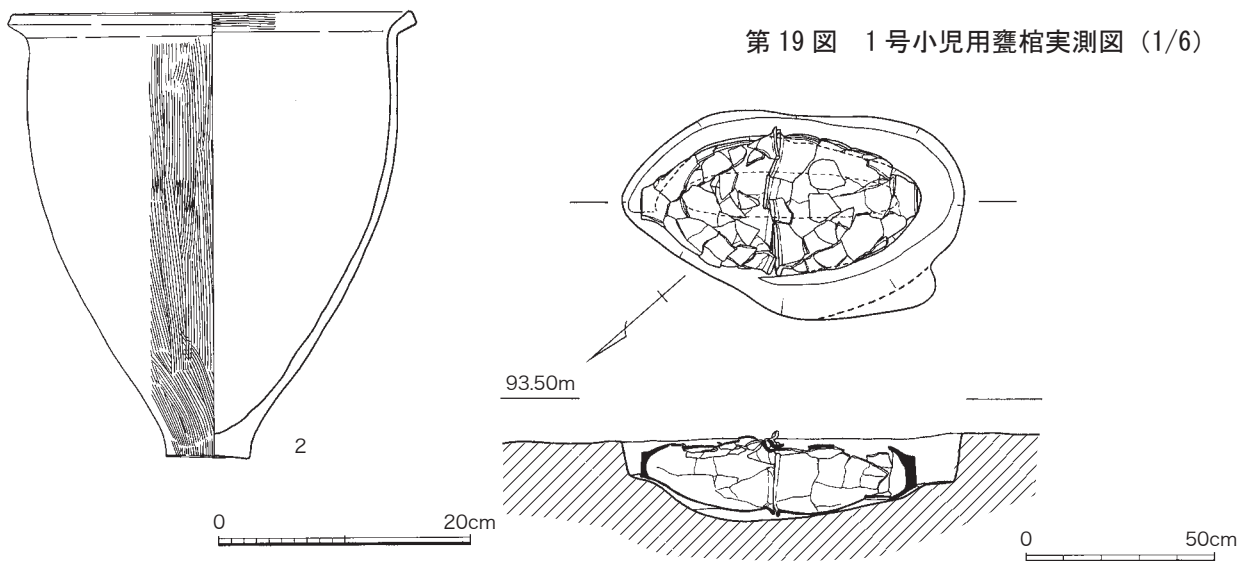
第17図 5号甕棺実測図 (1/8)



第18图 1号小児用甕棺墓实测图 (1/20)



第19图 1号小児用甕棺实测图 (1/6)



第21图 2号小児用甕棺实测图 (1/6)

第20图 2号小児用甕棺墓实测图 (1/20)

1号小児用甕棺墓（第18・19図、図版7・16）

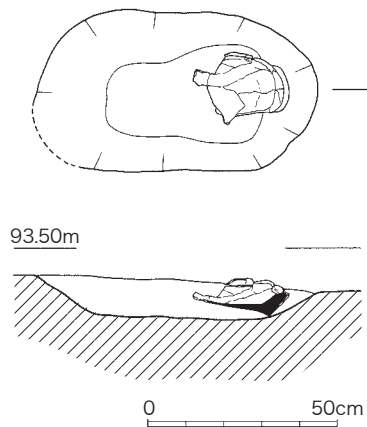
調査区北側に位置し、1号甕棺墓に切られるが、調査時は上下関係を間違えていたため、1号甕棺の掘方が下に来ている。西隅の掘方が一部切られるものと想定される。墓壙は不整楕円形を呈し、確認面での規模は東西軸約1.3m、南北軸約70cm、深さ約30cmを測る。一段西側を一段掘り窪めて棺を埋置する。接口式の組合せで、埋置角度約4°、主軸N62°Eを測る。

第19図1は上甕で下面に穿孔が施される。口縁部は逆L字形を呈し、内面に小さく貼り出し内傾する。頸部やや下面に断面三角形の突帯を巡らせる。胴部は膨らみ、底部は厚手の平底である。外面には縦方向のハケメが残り、口縁部付近には指オサエが見られる。2は下甕で1とほぼ同じ器形を呈するが、1に比べて口縁部の内傾は緩く、内側に張り出す。底部は厚手の上げ底を呈する。

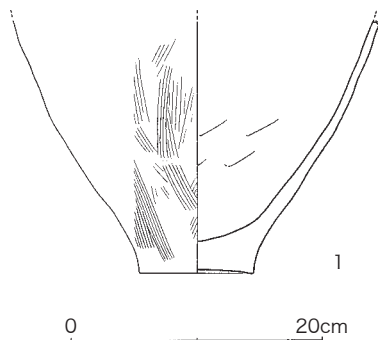
2号小児用甕棺墓（第20・21図、図版7・17）

調査区北側に位置する甕棺で1号甕棺、1・3号小児用甕棺に隣接する。墓壙は不整楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約80cm、東西軸約50cm、深さ約20cmを測る。中央部を掘り窪めて、接口式にて棺を埋置する。埋置角度は約2°、主軸はS47°Wを測る。

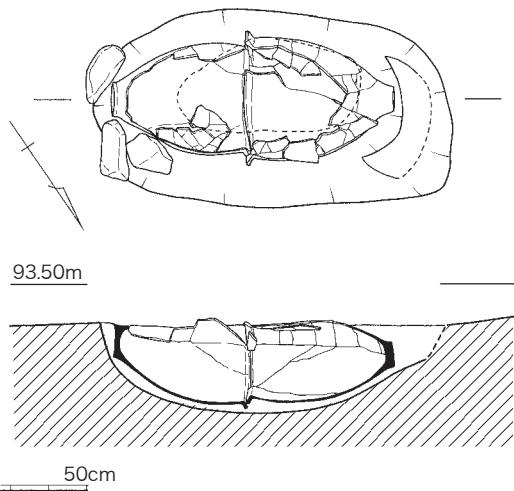
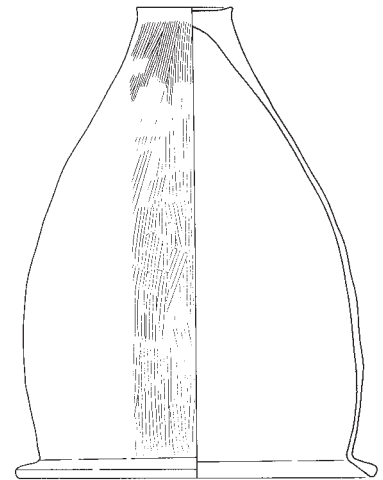
第21図1は上甕である。口縁部はくの字に屈曲する如意形を呈し、若干内傾する。胴部は殆ど張り出さず、底部はやや厚めの上げ底を呈する。外面には縦ハケが残り、内面はナデ仕上げ、口縁部にヨコハケが見られる。2は1とほぼ同様の器形、調整を呈するが、頸部は内傾しない。



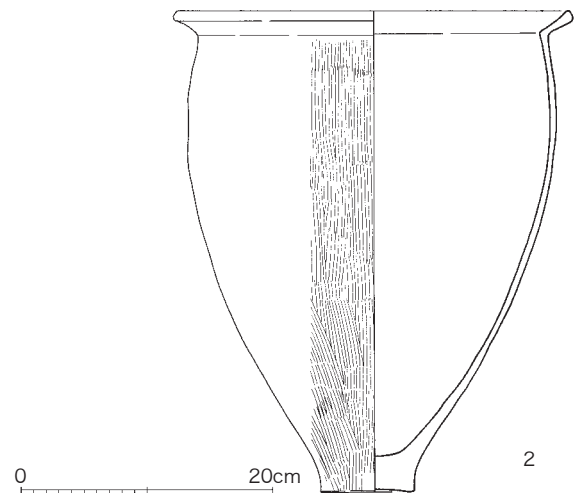
第22図 3号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



第23図 3号小児用甕棺実測図 (1/6)

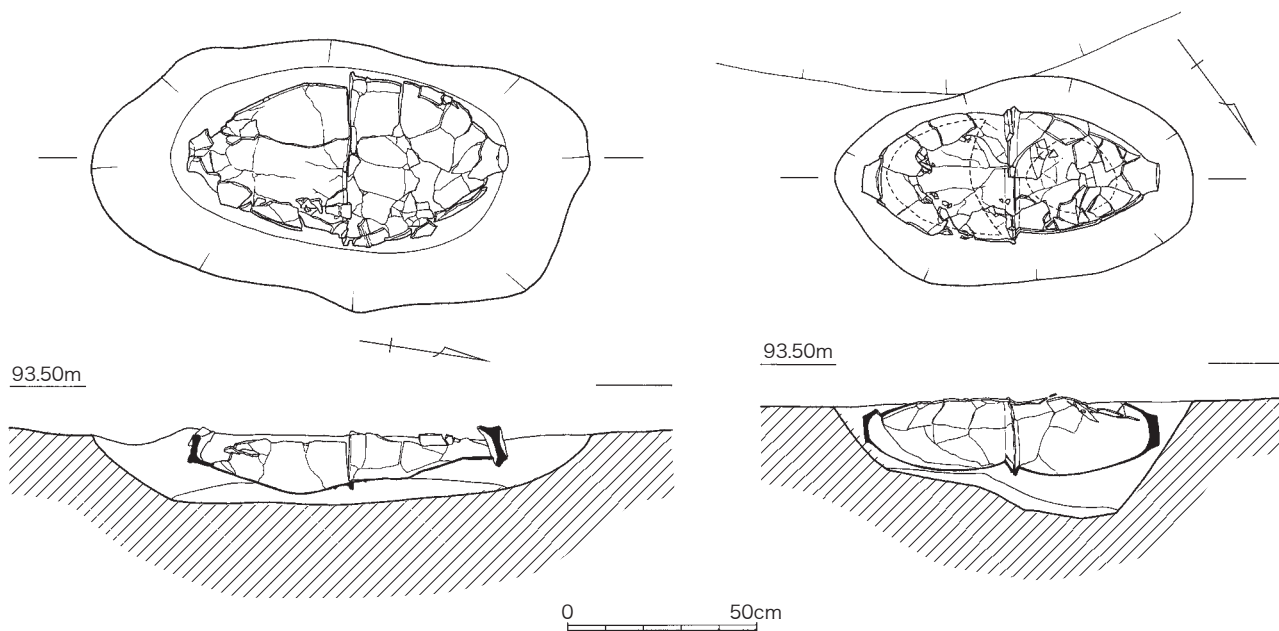


第24図 4号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



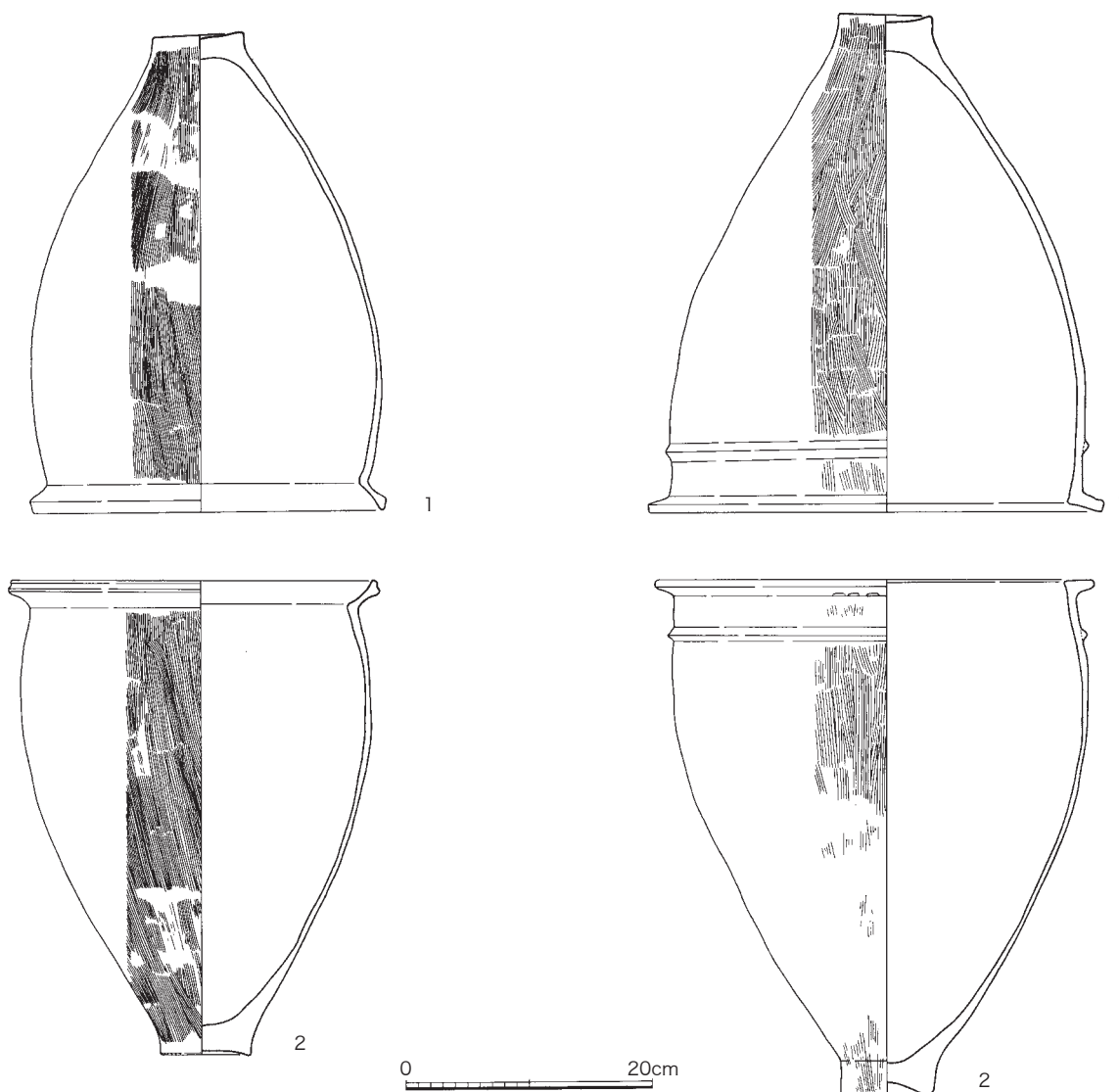
第25図 4号小児用甕棺実測図 (1/6)





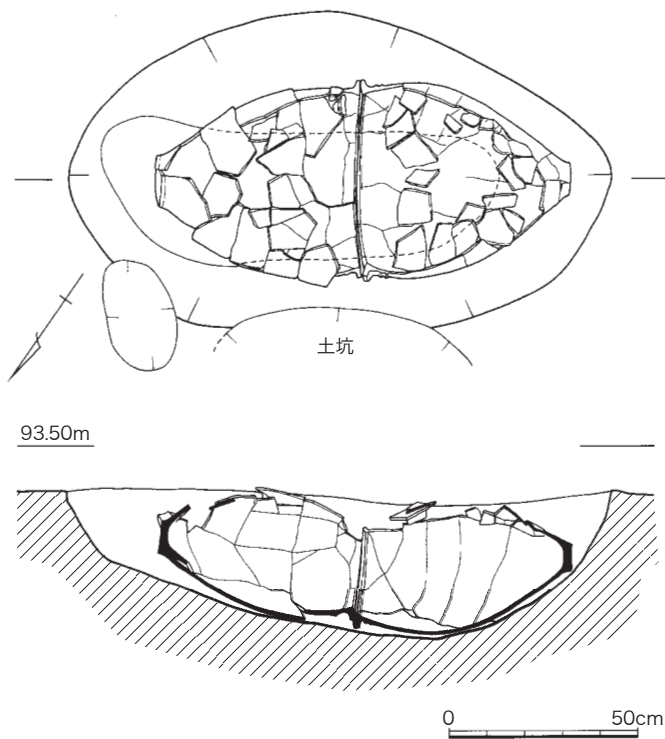
第 26 图 5 号小児用甕棺墓実測图 (1/20)

第 28 图 6 号小児用甕棺墓实测图 (1/20)



第 27 图 5 号小児用甕棺实测图 (1/6)

第 29 图 6 号小児用甕棺实测图 (1/6)



第30図 7号小児用甕棺墓実測図 (1/20)

3号小児用甕棺墓 (第22・23図、図版7・17)

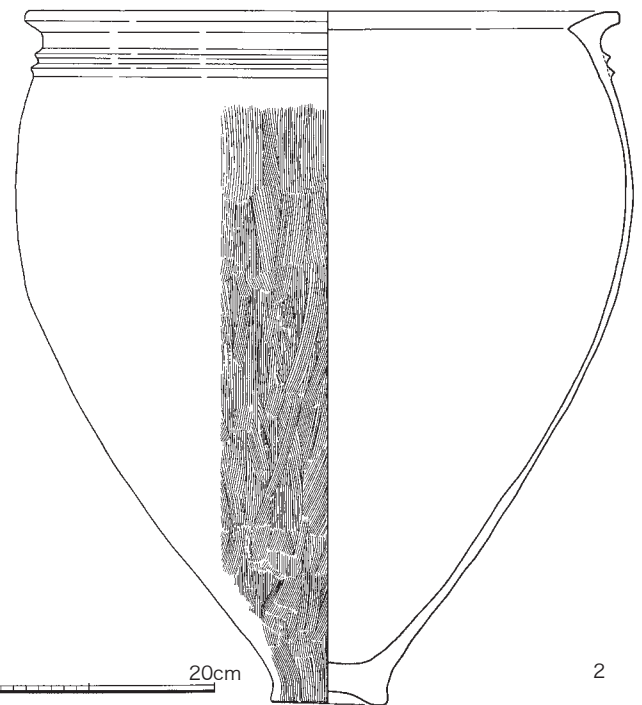
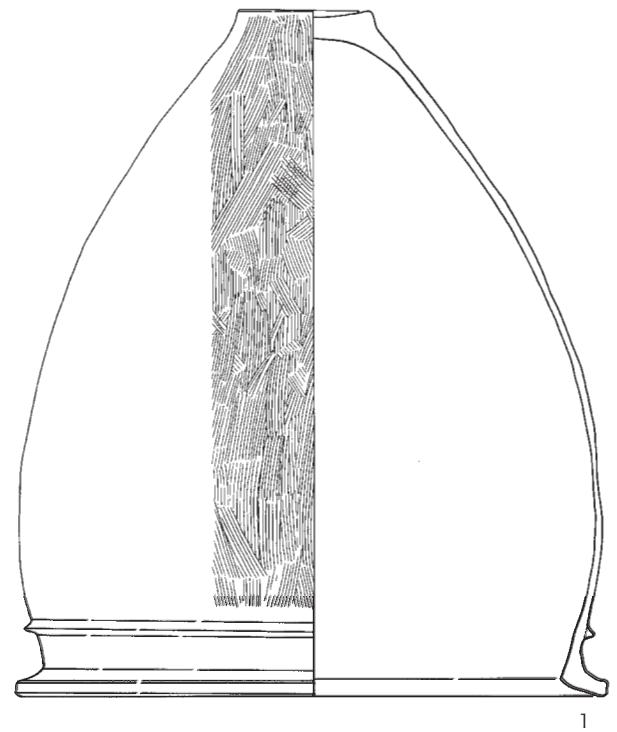
調査区北側に位置し、1号甕棺墓を切る。上面の殆どが削平により残存しないため詳細が不明である。墓壙は不整楕円形を呈し、確認面での規模は東西軸約75cm、南北軸約40cm、深さ約10cmを測る。底部の残存のみであるため詳細は不明であるが、推測される埋置角度は約40°前後、主軸S86°Wを測る。

第23図1は甕棺である。底部はやや上げ底を呈し、外面に縦ハケ、内面には工具痕が見られる。

4号小児用甕棺墓 (第24・25図、図版7・17)

調査区北側に位置し、1号甕棺墓に近接する。上面に削平を受ける。墓壙は長方形を呈し、確認面での規模は東西軸約95cm、南北軸約50cm、深さ約25cmを測る。墓壙西側に段を有し、東側の甕底部付近には地山に含まれる河原礫が残り、礫にうまく甕を差し込み、接口式にて埋置している。埋置角度は約3°、主軸はS56°Eを測る。

第25図1は上甕で、口縁部はくの字屈曲の跳ね上げ状を呈する。頸部は若干内傾し、胴部上半がやや膨らむ。底部は上げ底状を呈する。外面には縦ハケが残り、内面はナデ調整。2は下甕で、1とほぼ同様の器形、調整を呈するものの、底部はやや厚底で、法量は若干大きい。

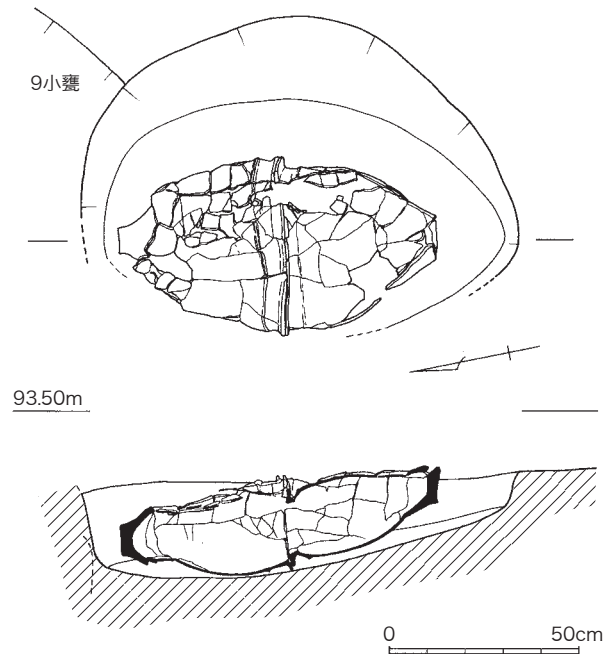


第31図 7号小児用甕棺実測図 (1/6)

5号小児用甕棺墓（第26・27図、図版8・17）

調査区北側に位置し、7号小児用甕棺墓に近接する。上半部は削平のため欠損する。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約1.3m、東西軸約70cm、深さ約20cmを呈する。残存する下半部から、接口式で埋置され、想定される埋置角度は約0°前後、主軸はN9°Wを測る。

第27図1は上甕で、口縁部はくの字屈曲の跳ね上げ状を呈し、口縁端部を窪ませる。頸部は若干内傾し、胴部上半がやや膨らむ。底部は上げ底状を呈する。外面には縦ハケが残り、内面はナデ調整。2は下甕で、1とほぼ同様の器形、調整を呈するものの、底部はやや厚底である。

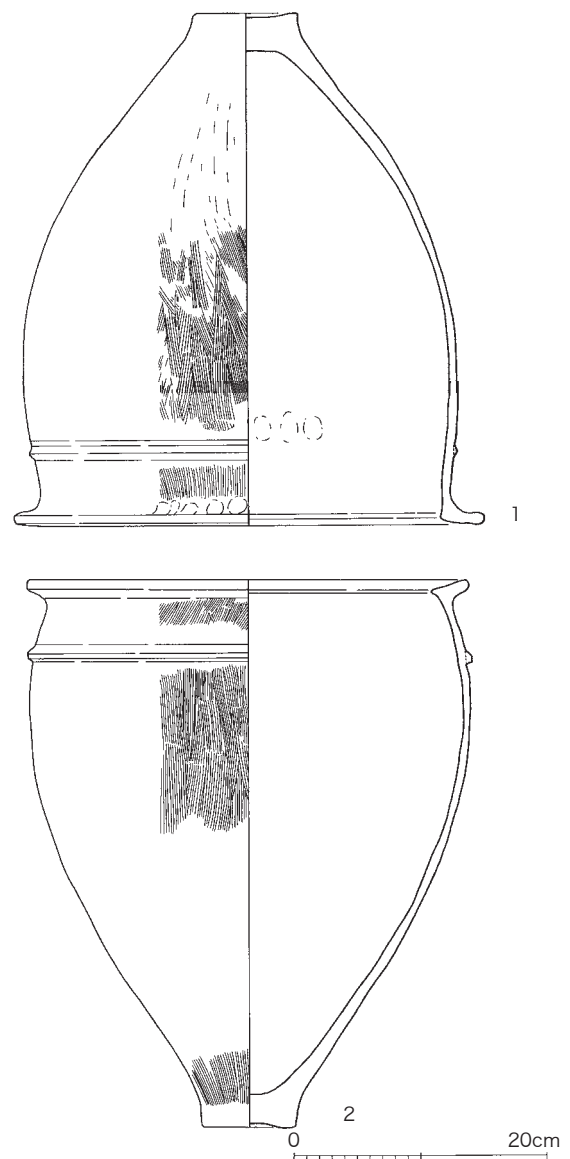


第32図 8号小児用甕棺墓実測図（1/20）

6号小児用甕棺墓（第28・29図、図版8・17）

調査区北側に位置し、1号住居に切られ、26号小児用甕棺墓、5号石棺墓に近接する。上半部は土圧により崩落する。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は東西軸約95cm、南北軸約55cm、深さ約20cmを呈し、西側を10cm程一段掘下げる。接口式で埋置され、埋置角度は約0°、主軸はN52°Wを測る。

第29図1は上甕で、口縁部は逆L字形を呈し内傾する。頸部やや下面に断面三角形の突帯を巡らせる。胴部は若干膨らみ、底部は上げ底である。外面には縦方向のハケメが残り、内面はナデ仕上げ。2は下甕で、1とほぼ同様の器形を呈するが、口縁部は断面コの字の逆L字形を呈しほぼ平行する。

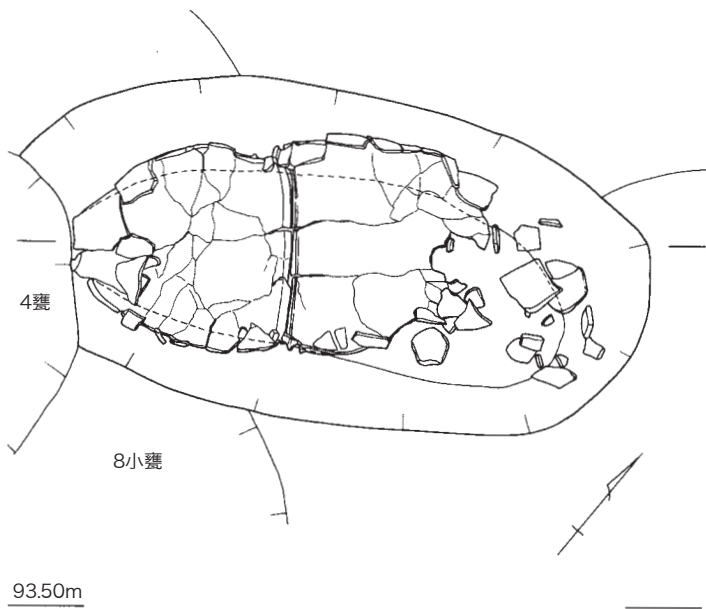


第33図 8号小児用甕棺墓実測図（1/6）

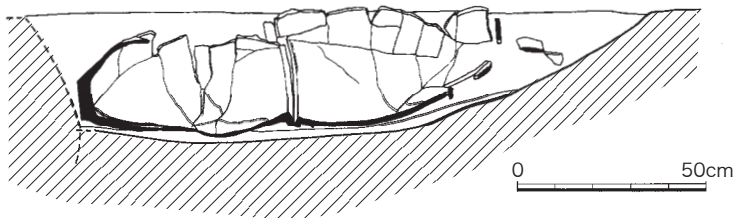
7号小児用甕棺墓（第30・31図、図版8・17）

調査区北側に位置し、5号小児用甕棺墓に近接する。上半部は土圧により崩落する。墓壙は卵形を呈し、確認面での規模は東西軸約1.45m、南北軸約80cm、深さ約40cmを呈する。西側に向かって床面が下がる。接口式で埋置され、埋置角度は約3°、主軸はN55°Eを測る。

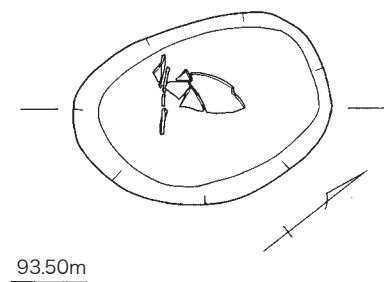
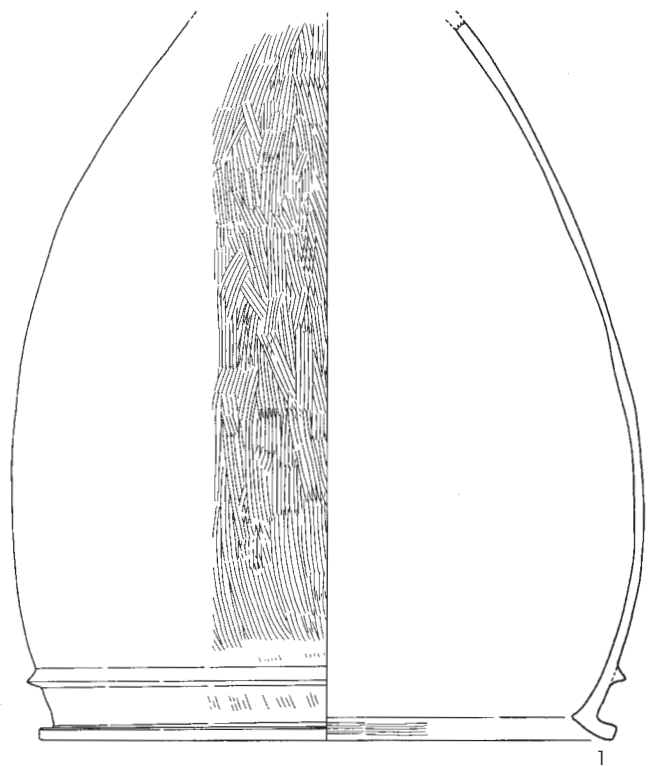
第31図1は上甕で、口縁部は逆L字形を呈し内傾する。頸部やや下面に断面三角形の突帯を巡らせる。胴部は膨らみ、底部は薄手の上げ底である。外面には縦方向のハケメが残り、内面はナデ仕上げである。2は口縁部が逆L字形を呈し、内面に張り出し内



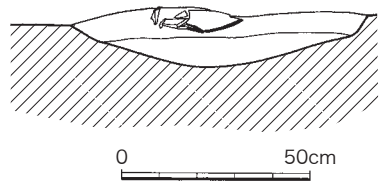
93.50m



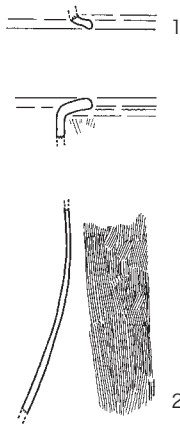
第34図 9号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



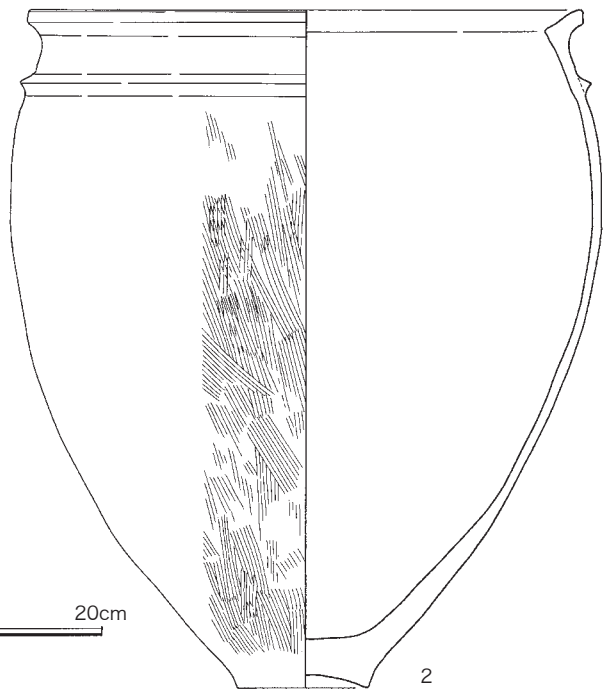
93.50m



第36図 10号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



第37図 10号小児用甕棺実測図 (1/6)



第35図 9号小児用甕棺実測図 (1/6)

傾する。頸部やや下面に断面三角形の突帯を2条巡らせる。胴部は膨らみ、底部は上げ底である。外面には縦方向のハケメが残り、内面はナデ仕上げである。

8号小児用甕棺墓 (第32・33図、図版8・18)

調査区北側に位置し、4号甕棺墓、9号小児用甕棺墓に切られる。上半部は土圧により崩落する。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約115cm、東西軸約85cm、深さ約25cmを呈する。北側に向かって床面が下がる。接口式で埋置され、埋置角度は約8°、主軸はS12°Wを測る。

第 33 図 1 は上甕で、口縁部は逆 L 字形を呈しほぼ平行する。頸部やや下面に断面三角形の突帯を巡らせる。底部は上げ底である。外面には縦ハケ、口縁部下面には指ナデが残る。内面はナデ仕上げである。2 は口縁部が逆 L 字形を呈し、内面に張り出し内傾する。頸部やや下面に断面逆台形状の突帯を 1 条巡らせる。胴部は若干膨らみ、底部は上げ底である。外面には縦方向のハケメが残り、内面はナデ仕上げである。

#### 9 号小児用甕棺墓 (第 34・35 図、図版 8・18)

調査区北側に位置し、4 号甕棺墓に切られ、8 号小児用甕棺墓を切る。上半部は掘削を受ける。墓壇は楕円形を呈し、確認面での規模は東西軸約 1.7m、南北軸約 85cm、深さ約 35cm を呈する。南西側に向かって床面が下がる。接口式で埋置され、埋置角度は約 8°、主軸は N50° E を測る。

第 35 図 1 は上甕で、口縁部は逆 L 字形を呈し、内面に張り出し内傾する。頸部やや下面に断面三角形の突帯を巡らせ、胴部が膨らむ。外面には縦ハケが残り、内面はナデ仕上げである。2 は口縁部が逆 L 字形を呈し、内傾する。頸部やや下面に断面逆台形状の突帯を 1 条巡らせる。胴部は膨らみ、底部は上げ底である。外面には縦方向のハケメが残り、内面はナデ仕上げである。

#### 10 号小児用甕棺墓 (第 36・37 図、図版 8・18)

調査区北東側に位置し、5 号土坑を切る。大半が削平を受けていた。墓壇は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約 70cm、東西軸約 50cm、深さ約 10cm を呈する。口縁部の破片の残存状況から接口式の埋置が想定される。

第 37 図 1 は甕の口縁部で、くの字の跳ね上げ状を呈する。2 は下甕の口縁部で、くの字状を呈する。3 は 2 と同一個体で胴部破片である。胴を張り出さず、外面に縦ハケが残る。

#### 11 号小児用甕棺墓 (第 38・39 図、図版 8・18)

調査区北側に位置し、5 号甕棺墓に切られ、12 号甕棺墓に隣接する。墓壇は楕円形を呈し、確認面での規模は東西軸約 90cm、南北軸約 70cm、深さ約 25cm を測る。東側に一段テラスを有する。上半部削平のため、上甕の残存は確認できない。埋置角度は約 56°、主軸は S68° W を測る。

第 39 図は使用されていた甕である。胴部が張り出し、底部は平底を呈する。外面には縦ハケが残り、内面は縦ハケのちナデ調整である。

#### 12 号小児用甕棺墓 (第 40・41 図、図版 9・18)

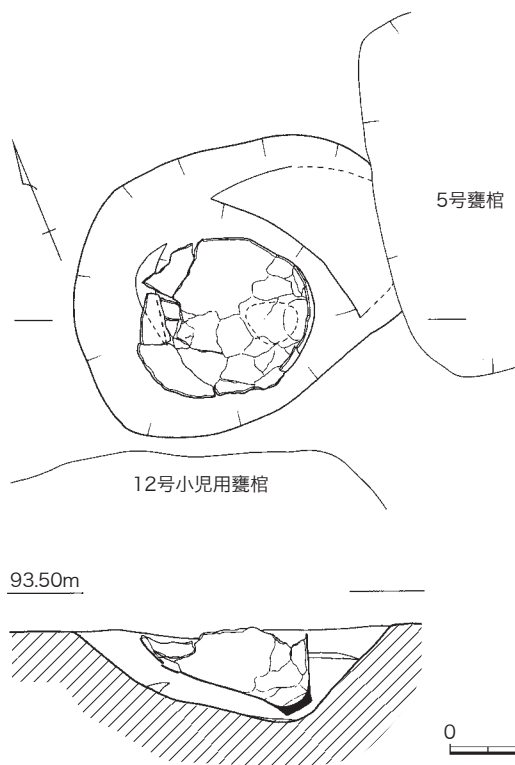
調査区北側に位置し、11 号甕棺墓に隣接する。墓壇は長楕円形を呈し、確認面での規模は東西軸約 130cm、南北軸約 70cm、深さ約 35cm を測る。東西にテラスを有する。上半部削平のため、上甕の存在は確認できない。埋置角度は約 69°、主軸は S81° W を測る。

第 41 図は使用されていた甕である。頸部に突帯を有し、胴部は小さく張り出す。底部は薄い平底を呈する。胴部下面に穿孔を有する。外面には縦ハケが残り、内面はナデ調整である。

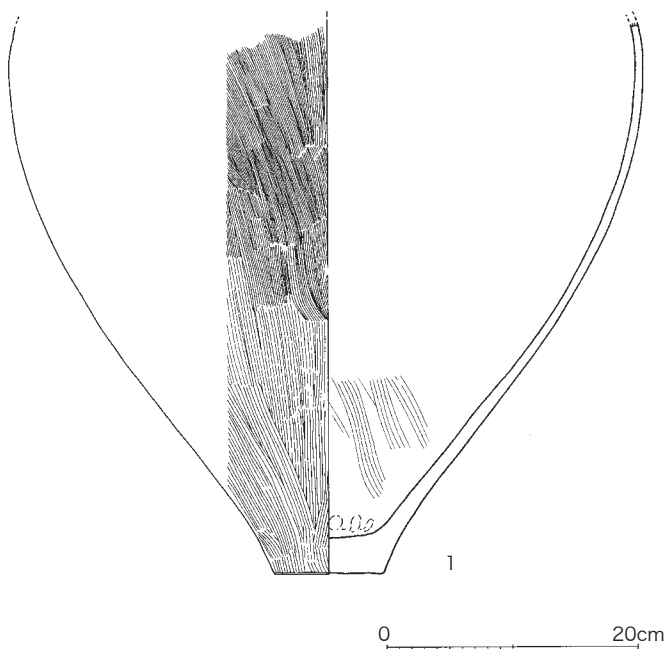
#### 13 号小児用甕棺墓 (第 42・43 図、図版 9・18)

調査区中央部に位置し、1 号木棺墓を切る。墓壇は不整形を呈し、確認面での規模は東西軸約 140cm、南北軸約 100cm、深さ約 20cm を測る。上半部は削平を受けるが、残存する下半部より、埋置角度は約 30°、主軸は N86° E を測る。

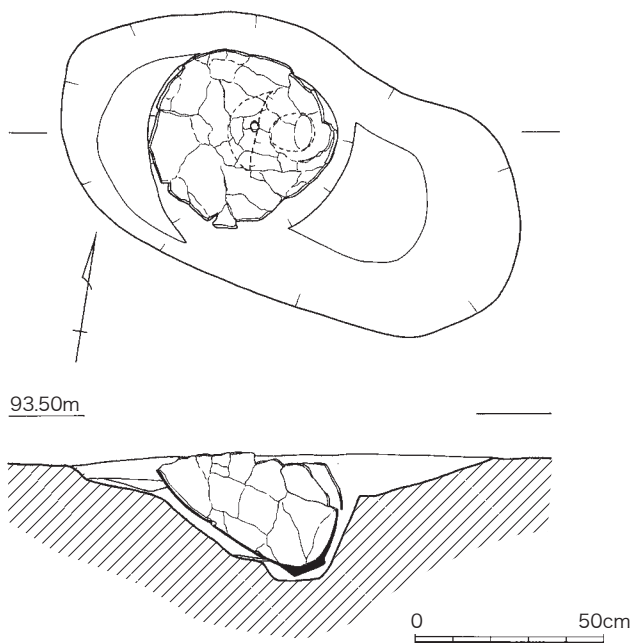
第 43 図は使用されていた甕である。口縁部はくの字状を呈し、頸部に断面三角形の突帯を巡らせる。胴部はやや張り、底部は平底を呈する。胴部外面には縦ハケが残り、内面には斜め方向のやや荒いハケが施される。胴下半部に穿孔を有する。



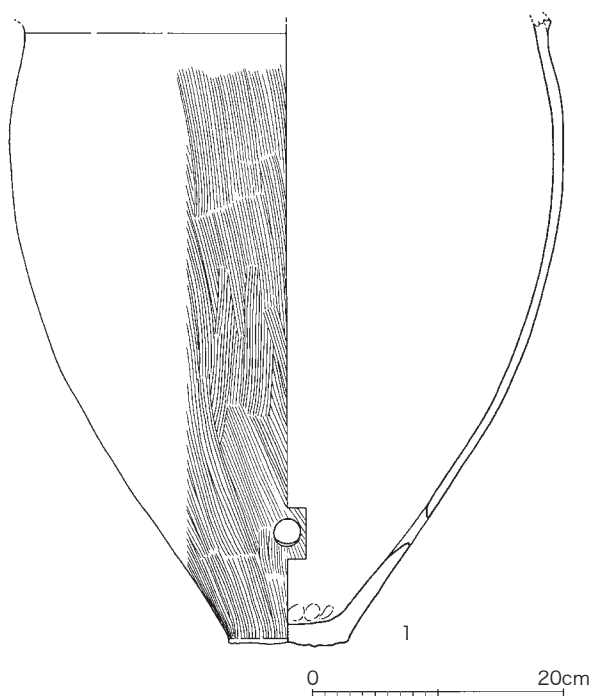
第 38 図 11 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



第 39 図 11 号小児用甕棺実測図 (1/6)



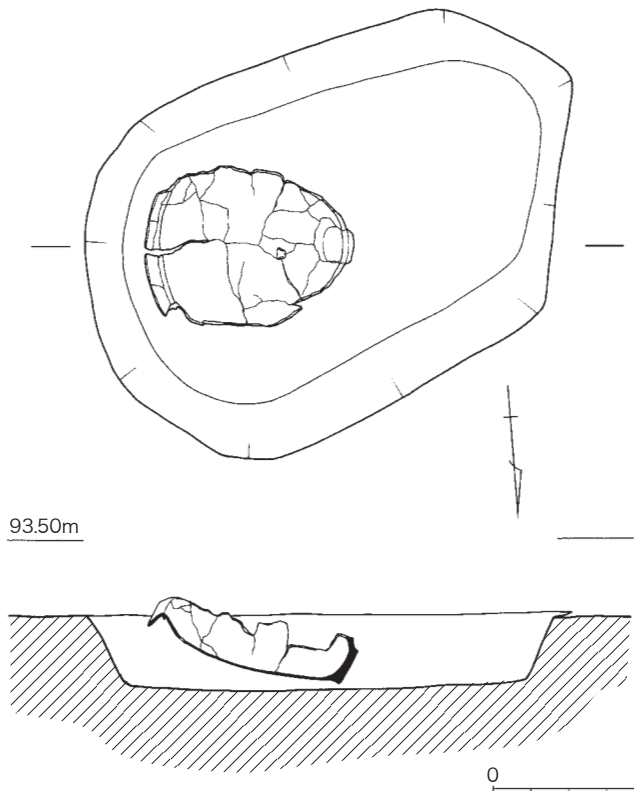
第 40 図 12 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



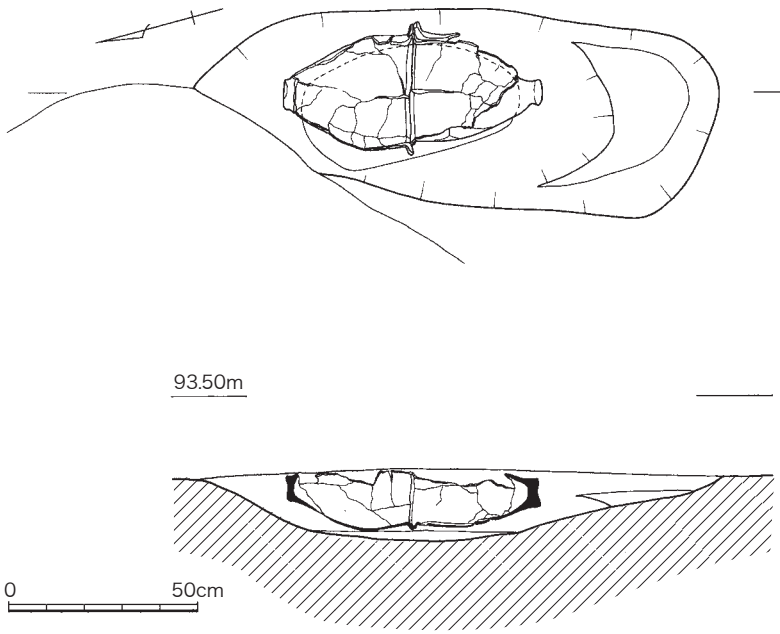
第 41 図 12 号小児用甕棺実測図 (1/6)

14 号小児用甕棺墓 (第 44・45 図、図版 9・18)

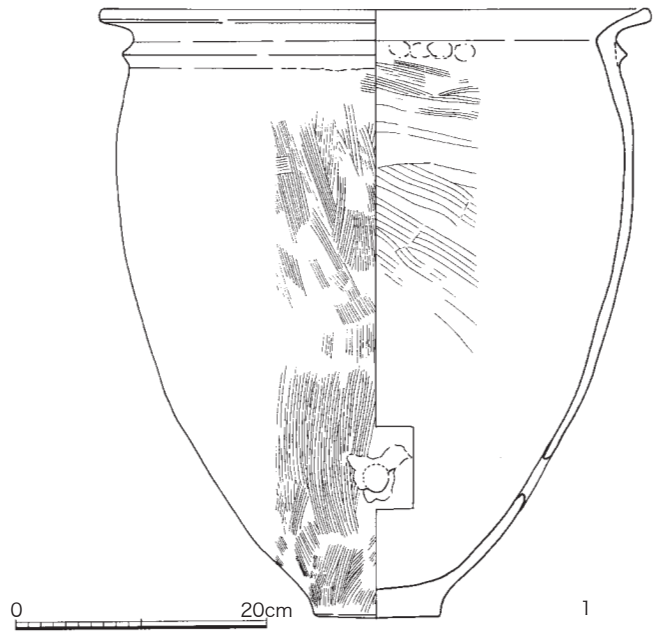
調査区中央に位置し、15 号小児用甕棺に近接する。墓壙は長方形を呈し、確認面での規模は南北軸約 1.4m、東西軸約 50cm、深さ約 20cm を測る。上半部は削平を受けるが、残存部より接口



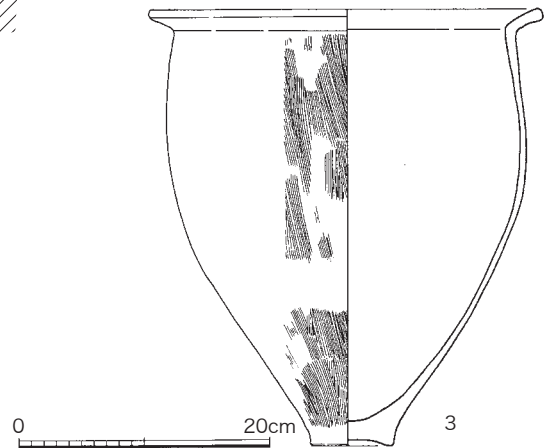
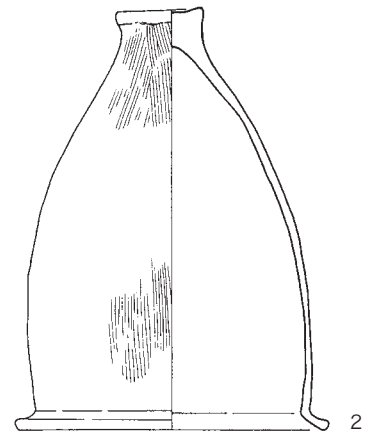
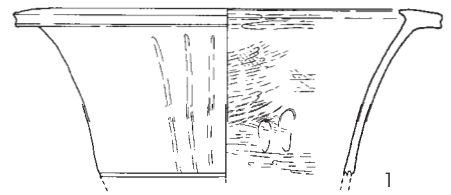
第 42 图 13 号小児用甕棺墓实测图 (1/20)



第 44 图 14 号小児用甕棺墓实测图 (1/20)



第 43 图 13 号小児用甕棺实测图 (1/6)



第 45 图 14 号小児用甕棺实测图 (1/6)

式で埋置され、埋置角度は約 $1^{\circ}$ 、主軸は $S15^{\circ}W$ を測る。上甕の上面には壺の口縁部が重ねられていた。

第45図1は上甕に重ねられていた壺である。頸部より下は打ちかかれたものと思われる。口縁部は鋤先状を呈し、外に傾く。頸部付近には沈線が巡る。外面には暗文が施され、内面には横方向のハケが残り、ナデ消される。2は上甕で、口縁部はくの字に外反する。胴部は張り出さず、底部は厚い上げ底である。胴部外面には縦ハケが残り、内面はナデ調整である。3は下甕で胴部はくの字に外反し、胴部が若干張り出し、底部は上げ底を呈する。外面は縦ハケ、内面はナデ調整である。

#### 15号小児用甕棺墓（第46・47図、図版9・18）

調査区中央部に位置し、14号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は楕円形を呈し、確認面の規模は東西軸約85cm、南北軸約50cm、深さ約10cmを測る。上面の大半に削平を受けており、残存する下半部の状況から、接口式にて埋置され、埋置角度は不明であるが、主軸は $N79^{\circ}E$ を測る。

第47図1は上甕である。口縁部はくの字状を呈し、屈曲の具合からやや器高の低い甕と推測される。2は下甕で、口縁部はくの字状を呈し、頸部に断面三角形の突帯を巡らせる。外面には縦ハケが施される。

#### 16号小児用甕棺墓（第48・49図、図版9・19）

調査区中央部に位置し、15・17号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約140cm、東西軸約90cm、深さ約25cmを測る。床面は北側に向かって下がる。接口式にて埋置され、埋置角度は約 $11^{\circ}$ 、主軸 $S28^{\circ}E$ を測る。

第49図1は上甕で、口縁部は断面コの字形を呈し内傾する。頸部やや下面に断面三角形の突帯を巡らせる。胴部は膨らみ、底部は厚手の上げ底である。外面には縦方向のハケメが残り、内面はナデ調整である。2は下甕で、口縁部は逆L字形を呈し、小さく内傾する。胴部やや下面断面逆台形状の突帯を巡らせる。底部は外側に開き、上げ底を呈する。外面には縦ハケが残る。

#### 17号小児用甕棺墓（第50・51図、図版9・19）

調査区中央部に位置し4号土坑に切られる。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は東西軸約75cm、南北軸約50cm、深さ約15cmを測る。上半部を削平され、残存していた甕から合口式と推測される。上甕の口縁部が下甕内側に崩落していたため、接口式なのか、挿入式なのか不明である。残存する甕より、埋置角度は約 $42^{\circ}$ 、主軸は $N65^{\circ}W$ を測る。

第51図1は上甕である。口縁部はくの字の跳ね上げ状を呈する。胴部外面には縦ハケが残る。2は下甕で口縁部はくの字の跳ね上げ状を呈する。頸部に断面三角形の突帯を巡らせ、胴部は張り出さず、底部は薄い上げ底状を呈する。外面には斜め方向のハケメが残る。

#### 18号小児用甕棺墓（第52・53図、図版9・19）

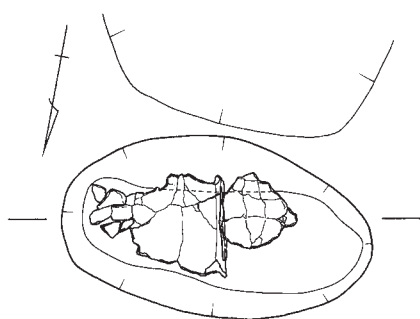
調査区中央にて検出され、28号小児用甕棺墓に切られる。墓壙は不整形を呈し、確認面での規模は東西軸約85cm、南北軸約70cm、深さ約15cmを測る。上半部を削平されているため、上甕の存在は確認できない。残存する下半部から、埋置角度約 $20^{\circ}$ 、主軸は $S60^{\circ}W$ を測る。

第53図1は使用されていた甕で、口縁部はくの字の跳ね上げ状口縁部を呈し、胴部は若干張り出し、底部は平底を呈する。外面には縦ハケが残る。

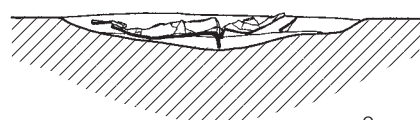
#### 19号小児用甕棺墓（第54・55図、図版9・19）

調査区中央部に検出され、1号大石に近接する。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は東西



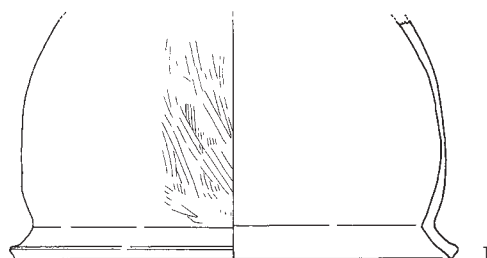


93.40m

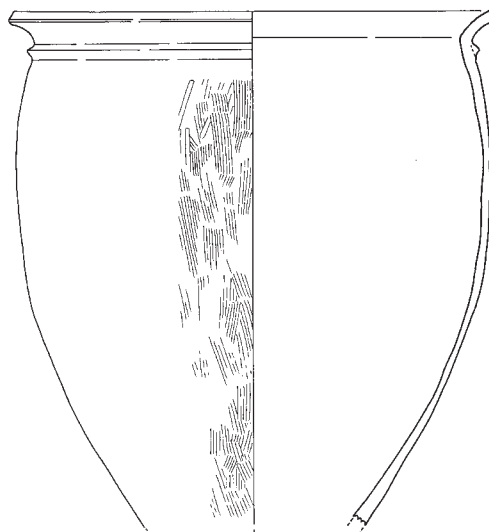


0 50cm

第46图 15号小兒用甕棺墓实测图 (1/20)



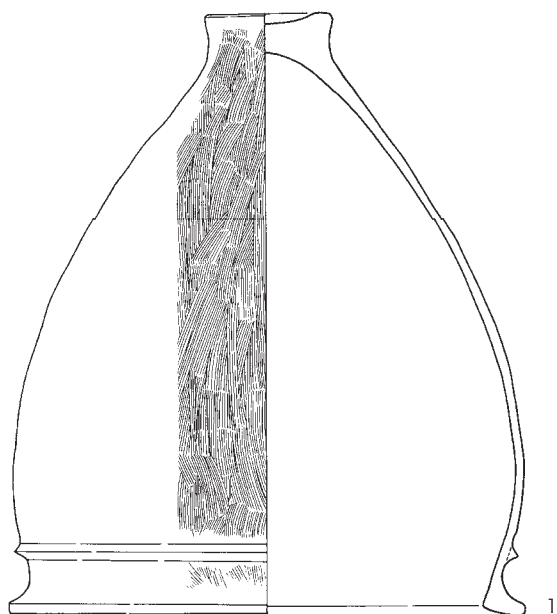
1



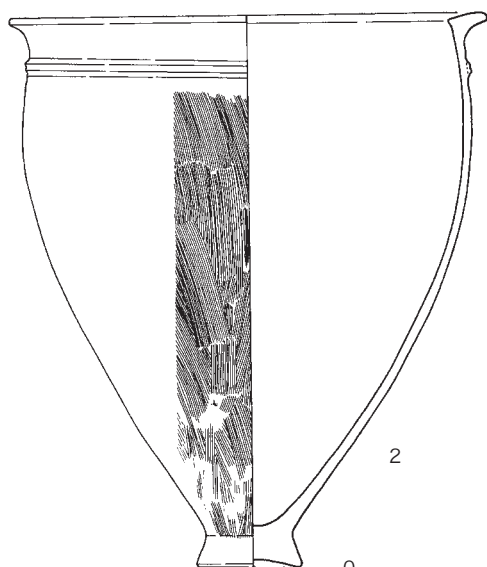
2

0 20cm

第47图 15号小兒用甕棺实测图 (1/6)



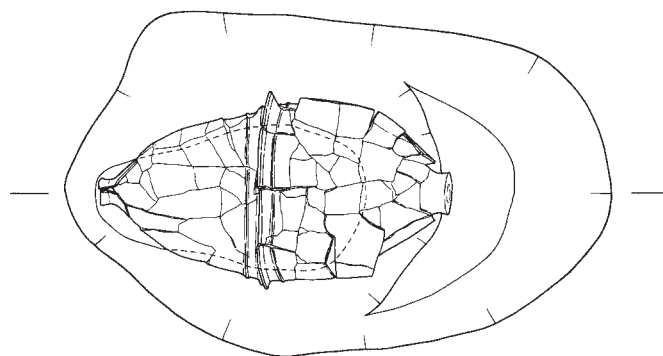
1



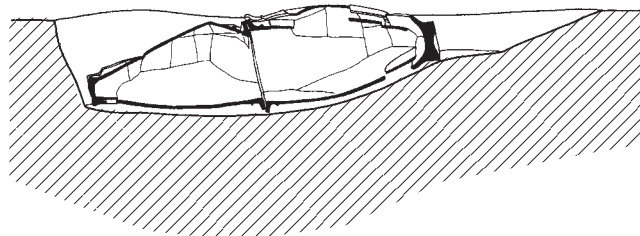
2

0 20cm

第49图 16号小兒用甕棺实测图 (1/6)

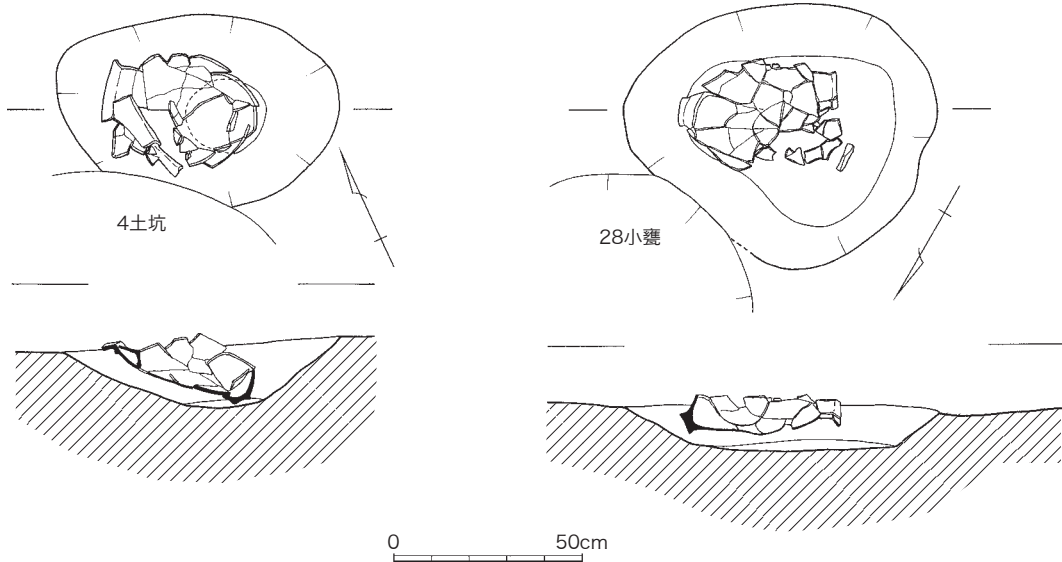


93.50m



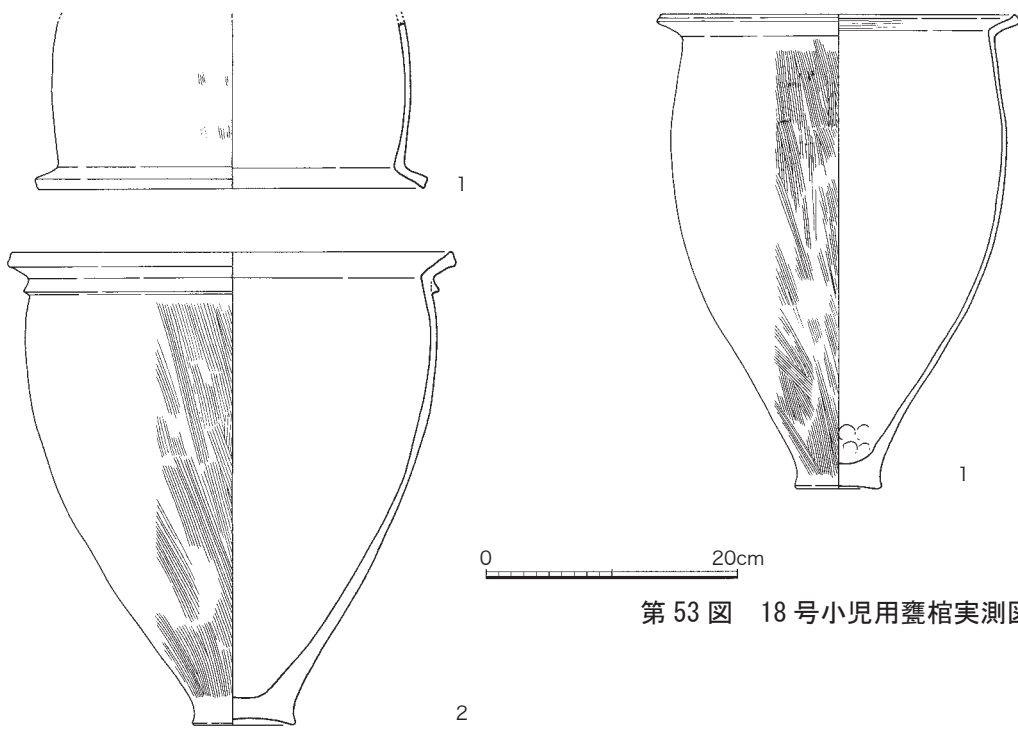
0 50cm

第48图 16号小兒用甕棺墓实测图 (1/20)



第 50 図 17 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)

第 52 図 18 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



第 51 図 17 号小児用甕棺実測図 (1/6)

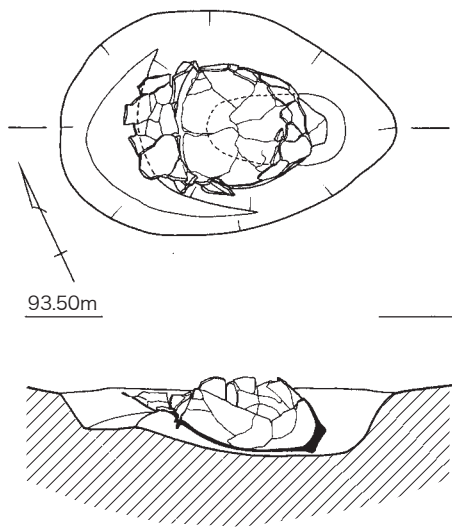
第 53 図 18 号小児用甕棺実測図 (1/6)

軸約90cm、南北軸約60cm、深さ約20cmを測る。上半部を削平されているが、接口式にて埋置され、埋置角度は約42°、主軸はN65°Wを測る。

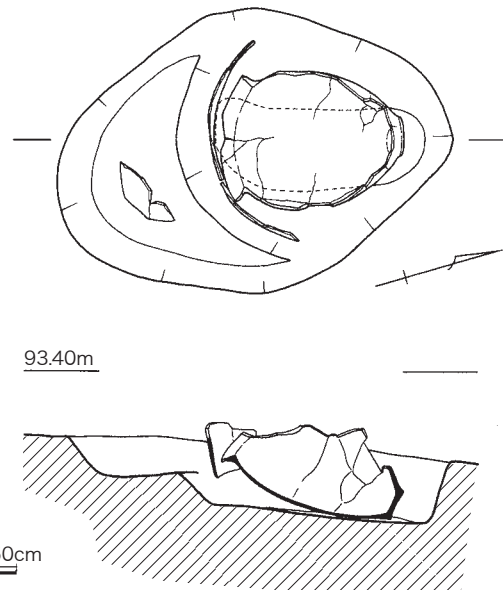
第55図1は上甕で、口縁部はくの字状を呈する。外面には縦ハケが残る。2は下甕で口縁部はくの字状を呈し、胴部が若干張り出す。底部は薄い上げ底を呈する。外面には縦ハケが残る。

20号小児用甕棺墓（第56・57図、図版10・19）

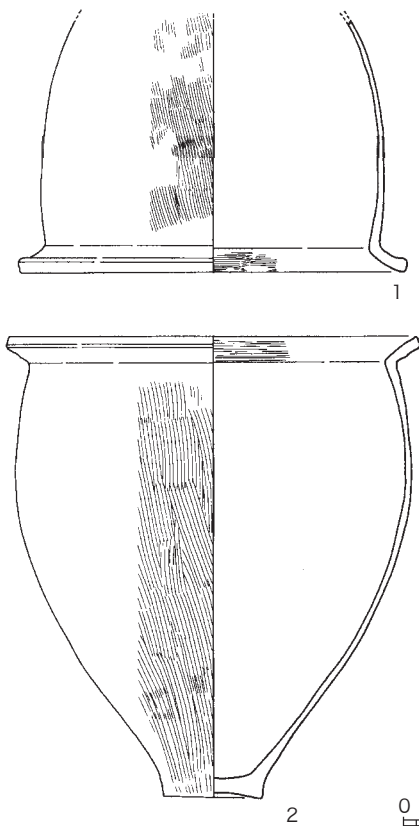
調査区調査区中央部に位置し、22号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約105cm、東西軸約75cm、深さ約20cmを測る。南側に一段テラスを有する。上半部は削平を受けているが、残存する土器の状況から、打ち欠かれた甕により覆口式にて埋置さ



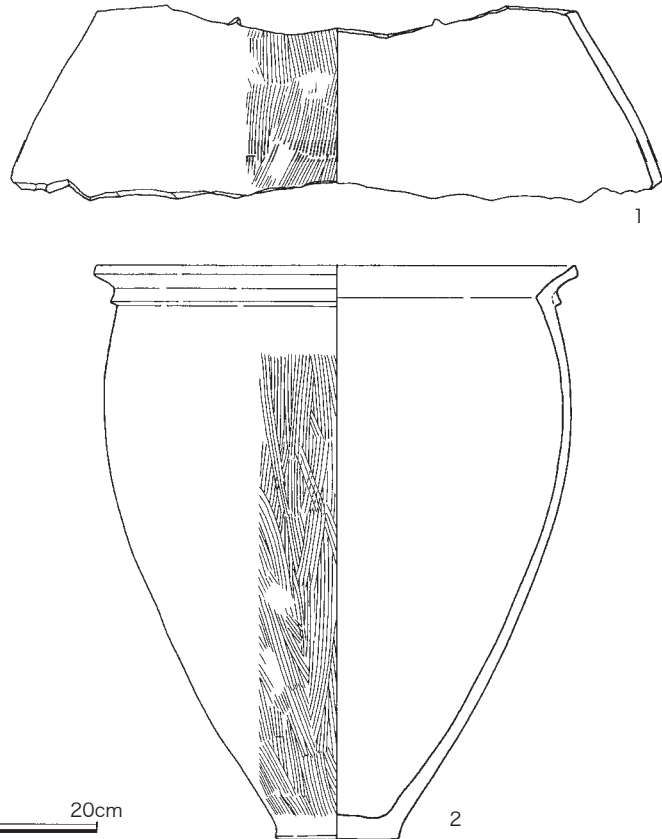
第 54 図 19 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



第 56 図 20 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



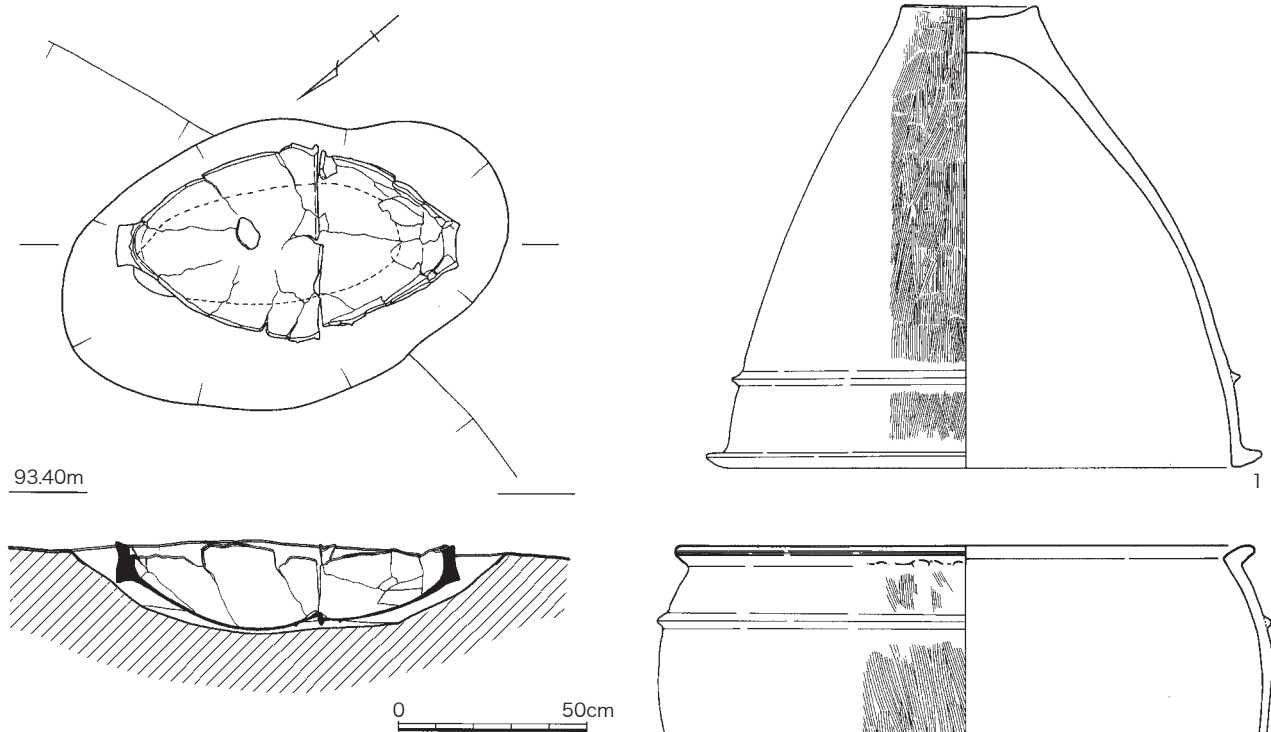
第 55 図 19 号小児用甕棺実測図 (1/6)



第 57 図 20 号小児用甕棺実測図 (1/6)

れるものと考えられる。埋置角度は約  $34^\circ$ 、主軸は  $S16^\circ W$  を測る。

第 57 図 1 は上甕である。打ちかかれた大振りの底部付近を甕に使用していたものと想定され、外面には縦ハケが残る。2 は下甕で、口縁部はくの字状を呈し、頸部に断面三角形の突帯を巡らせる。胴部は若干張り出し、底部は薄い平底である。外面には縦ハケが残る。



第 58 図 21 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)

#### 21 号小児用甕棺墓

(第 58・59 図、図版 10・19)

調査区中央部にて検出された遺構である。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約 120cm、東西軸約 75cm、深さ約 25cm を測る。上半部は削平を受けるが、下半部の残存状況から、接口式にて埋置され、埋置角度は約  $1^\circ$ 、主軸は  $N41^\circ W$  を測る。

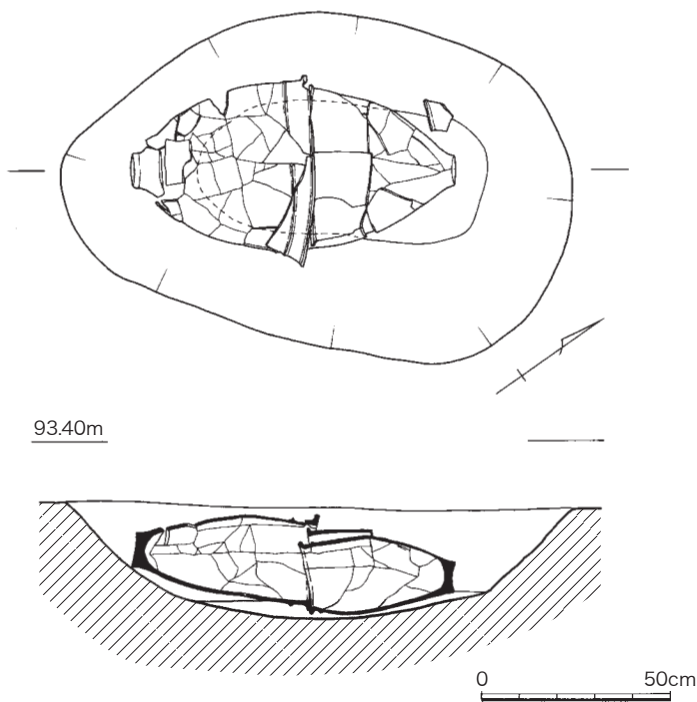
第 59 図 1 は上甕で、口縁部は断面三角形状を呈し、頸部やや下方に断面三角形状の突帯を巡らせる。全体に器高が浅く、口縁部から底部にかけて緩やかに窄まり、底部は上げ底を呈する。外面には縦ハケが残る。2 は下甕で、口縁部は断面コの字状を呈し、頸部やや下方に断面三角形状の突帯を巡らせる。胴部上方が張り出し、底部にかけて緩やかに窄まる。底部は上げ底を呈する。外面には縦ハケが残り、口縁部下部に指オサエが見られる。

第 59 図 21 号小児用甕棺墓実測図 (1/6)

#### 22 号小児用甕棺墓 (第 60・61 図、図版 10・19)

調査区中央部にて検出され、20 号小児用甕棺に近接する。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約 135cm、東西軸約 90cm、深さ約 30cm を測る。上面は土圧により崩落しているものの、接口式により埋置され、埋置角度は約  $2^\circ$ 、主軸は  $S35^\circ W$  を呈する。下甕口縁部付近の上面に胴部を打ち欠いた土器が重ねられていた。

第 61 図 1 は上甕で、口縁部は断面コの字状を呈し、内傾する。頸部やや下面には断面三角形状の突帯が巡り、底部は厚めの上げ底状を呈する。外面には縦ハケが残る。2 は下甕に重ねられてい



第 60 図 22 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)

た甕で、口縁部は断面くの字状を呈する。胴部下半を打ち欠いている。外面には縦ハケが施される。3 は下甕で、口縁部は如意形を呈する。頸部下面には断面三角形状の突帯が巡り、底部はやや薄めの平底である。外面には縦ハケが残る。

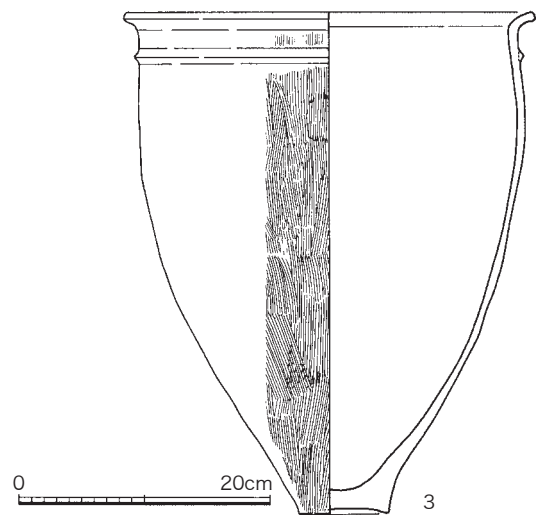
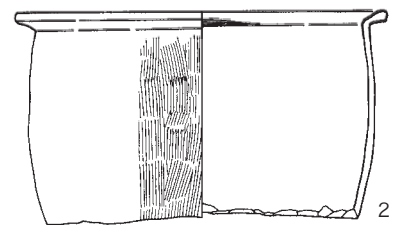
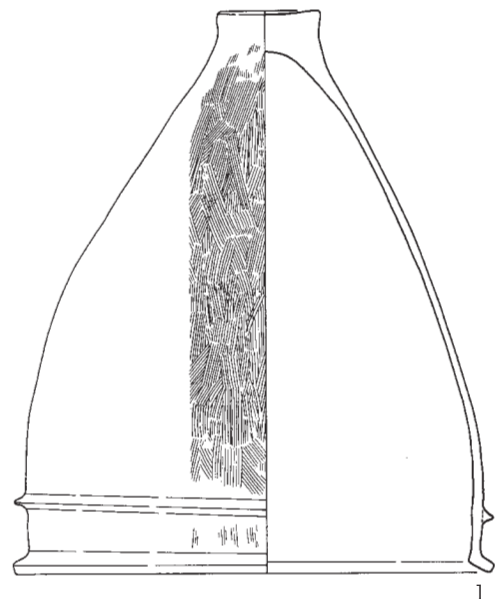
23 号小児用甕棺墓 (第 62・63 図、図版 10・20)

調査区南側で検出される。墓壙は長楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約 160cm、東西軸約 70cm、深さ約 35cm を測る。上面は土圧で崩落するものの、東側に向かって下がった形状を呈し、接口式にて埋置され、埋置角度は約 11°、主軸は N73° E を測る。

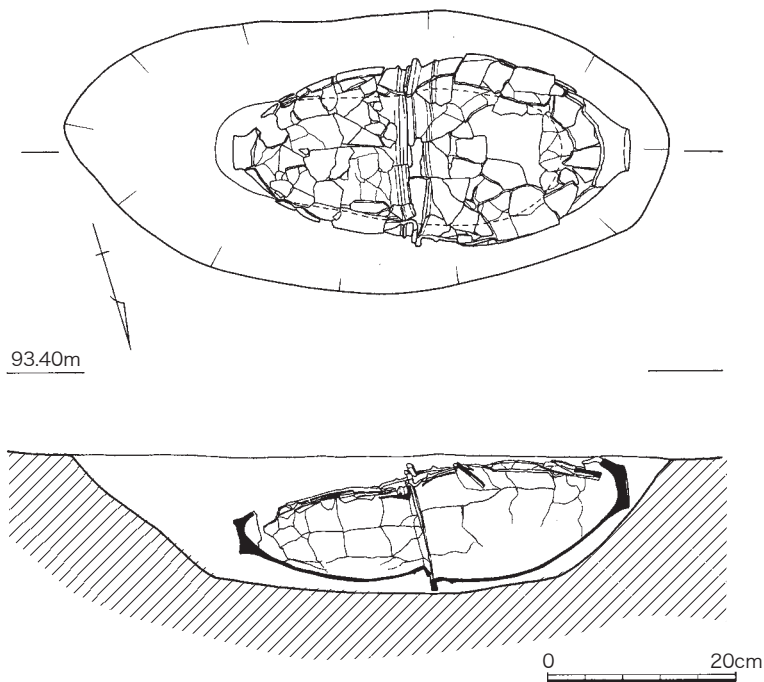
第 63 図 1 は上甕である。口縁部はくの字を呈し、頸部下面に断面三角形状の突帯を巡らせる。胴部は張り出し、底部は平底を呈する。外面には縦ハケが残る。2 は下甕で、口縁部はくの字状を呈し、頸部下面に断面三角形の突帯が巡る。胴部は若干張り出し、底部はやや外に張り出す上げ底である。外面には縦ハケが残る。

24 号小児用甕棺墓 (第 64・65 図、図版 10・20)

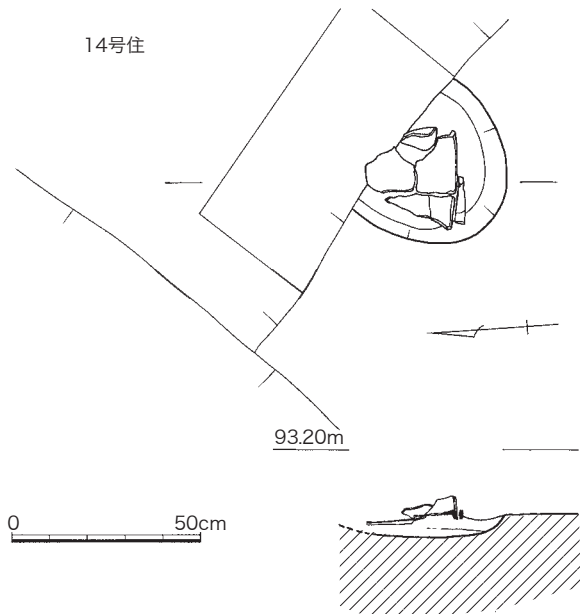
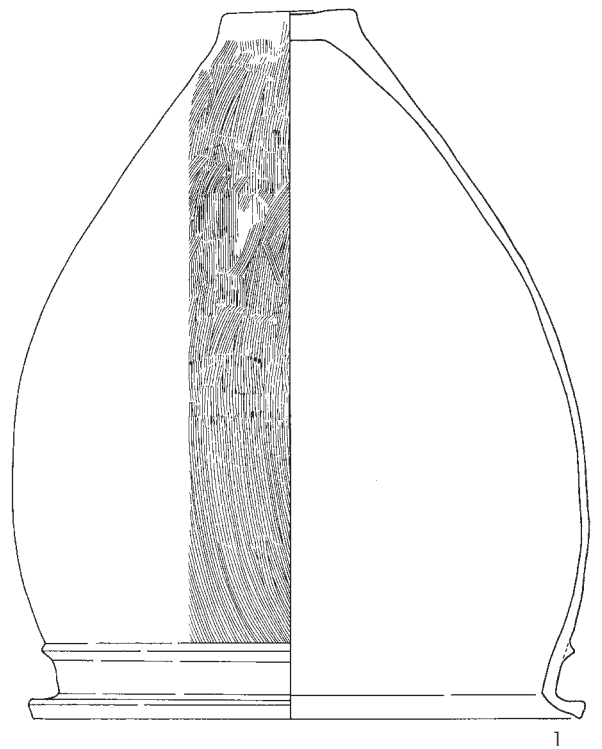
調査区南西側にて検出され、北側を 14 号住居に切られる。上面の大半及び、北側を住居に破壊されている。墓壙は円形を呈し、少なくとも 40cm 以上の大きさであると推測される。残存する下半部の状況から、接口式にて埋置されるものと推測され、埋置角度は不明であるが、主軸は N3° E と想定する。



第 61 図 22 号小児用甕棺実測図 (1/6)



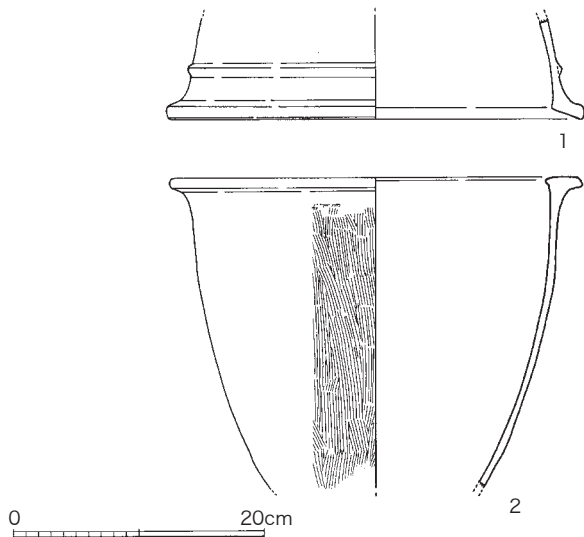
第 62 图 23 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



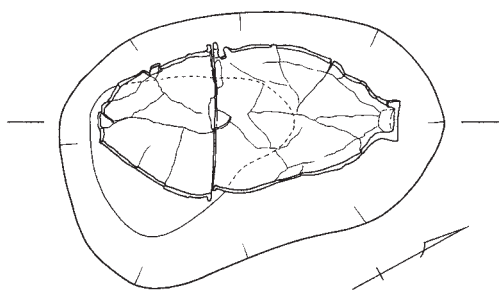
第 64 图 24 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



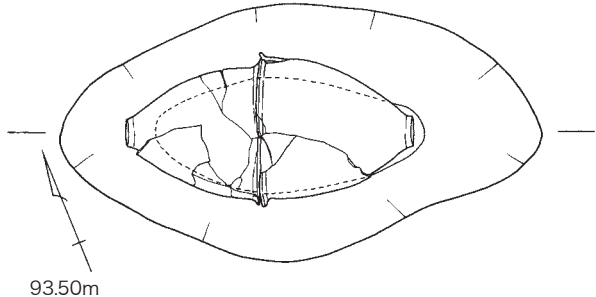
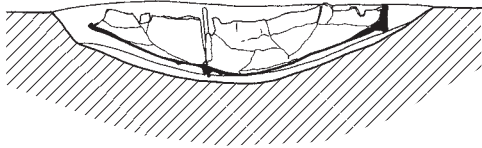
第 63 图 23 号小児用甕棺実測図 (1/6)



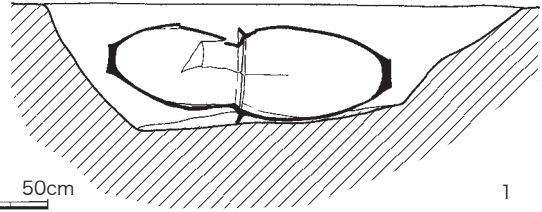
第 65 图 24 号小児用甕棺実測図 (1/6)



93.30m



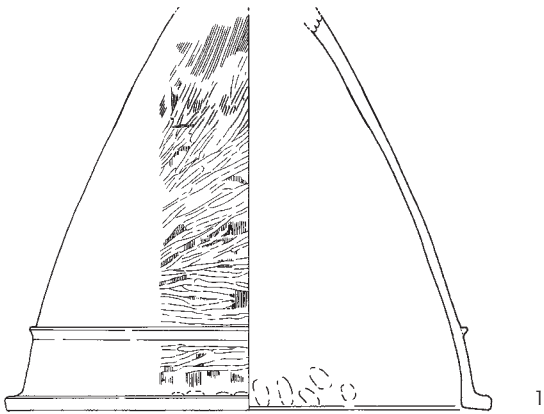
93.50m



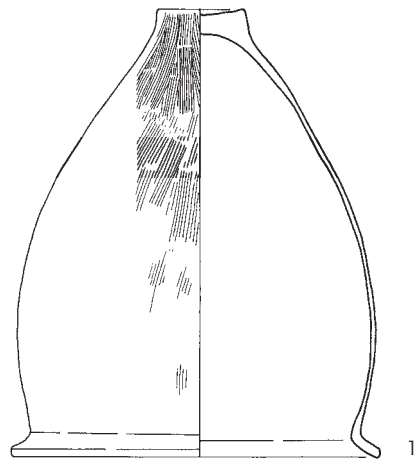
0 50cm

第 66 图 25 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)

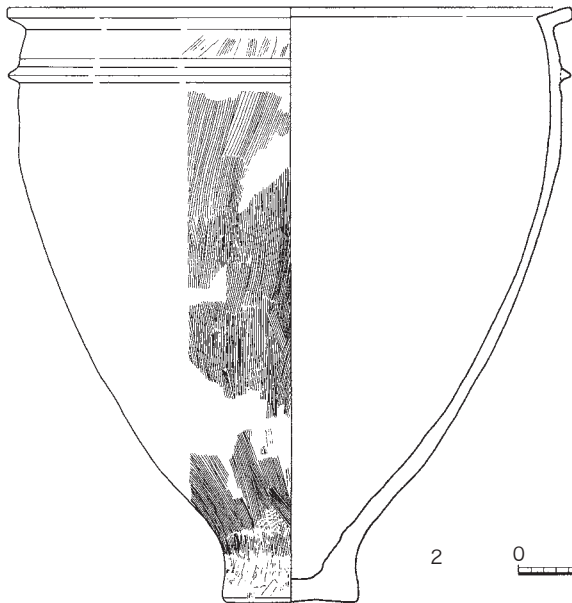
第 68 图 26 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



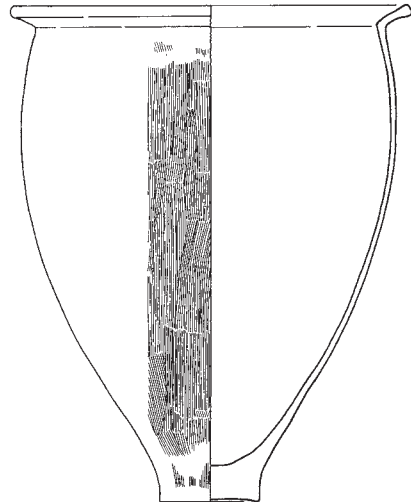
1



1



2

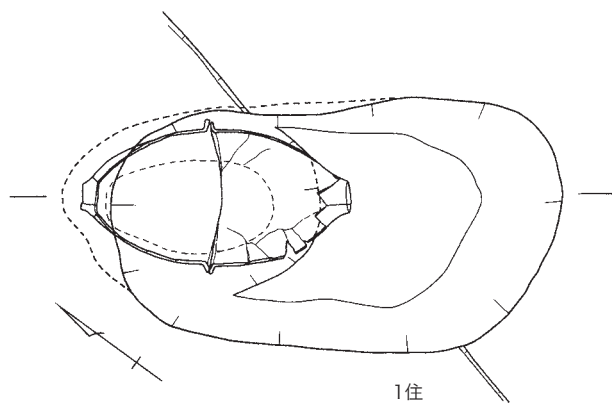


2

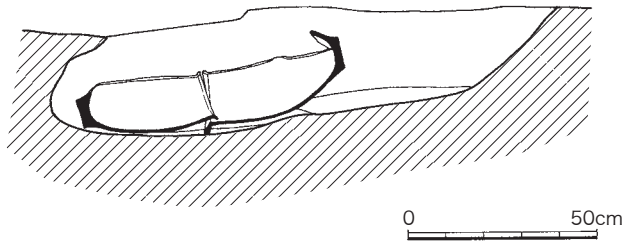
0 20cm

第 67 图 25 号小児用甕棺実測図 (1/6)

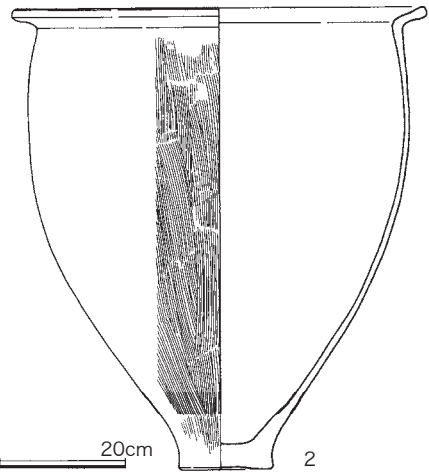
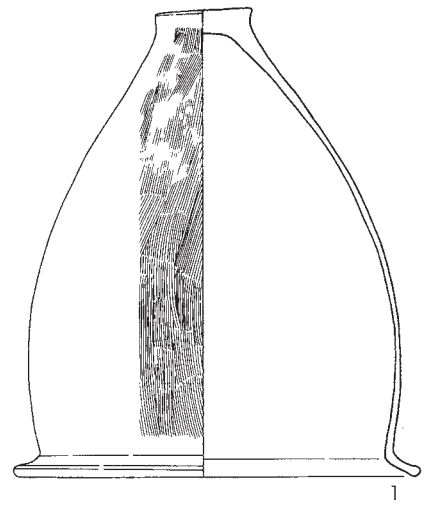
第 69 图 26 号小児用甕棺実測図 (1/6)



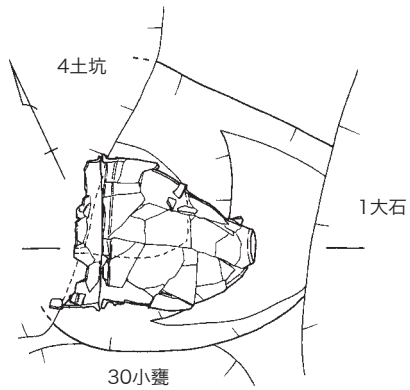
93.50m



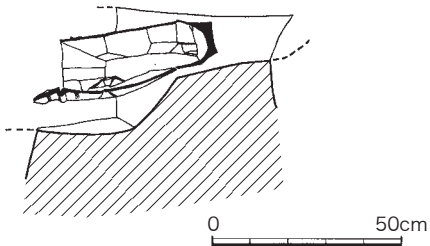
第70图 27号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



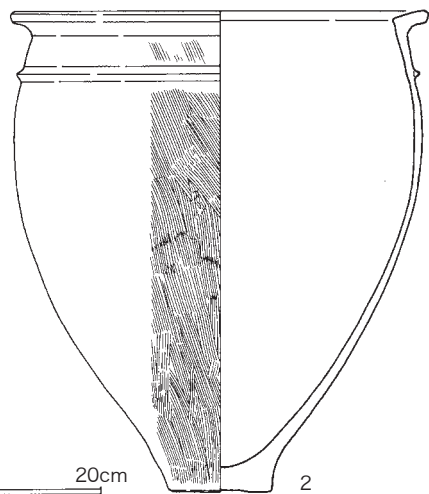
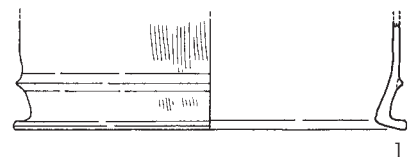
第71图 27号小児用甕棺実測図 (1/6)



93.50m

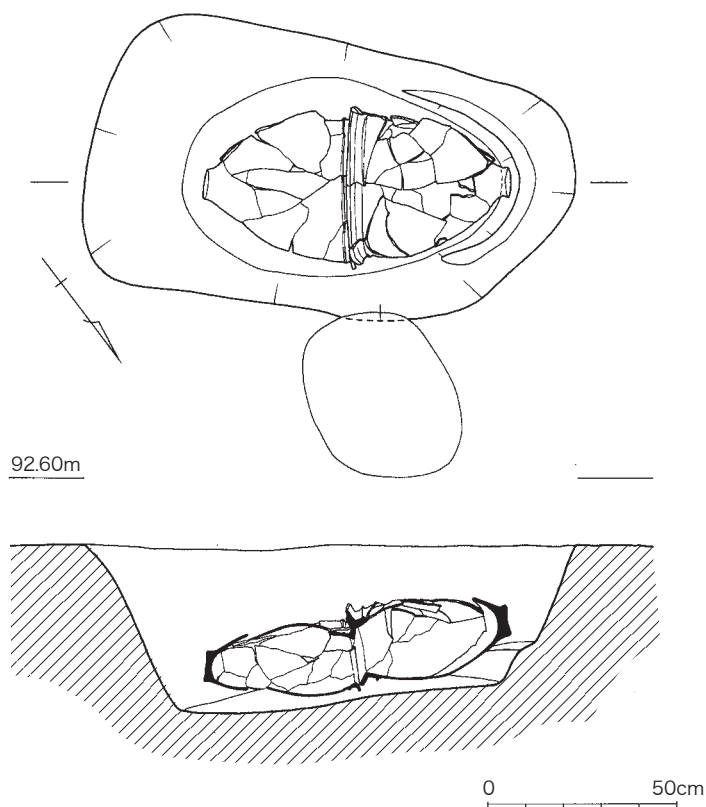


第72图 28号小児用甕棺墓実測図 (1/20)

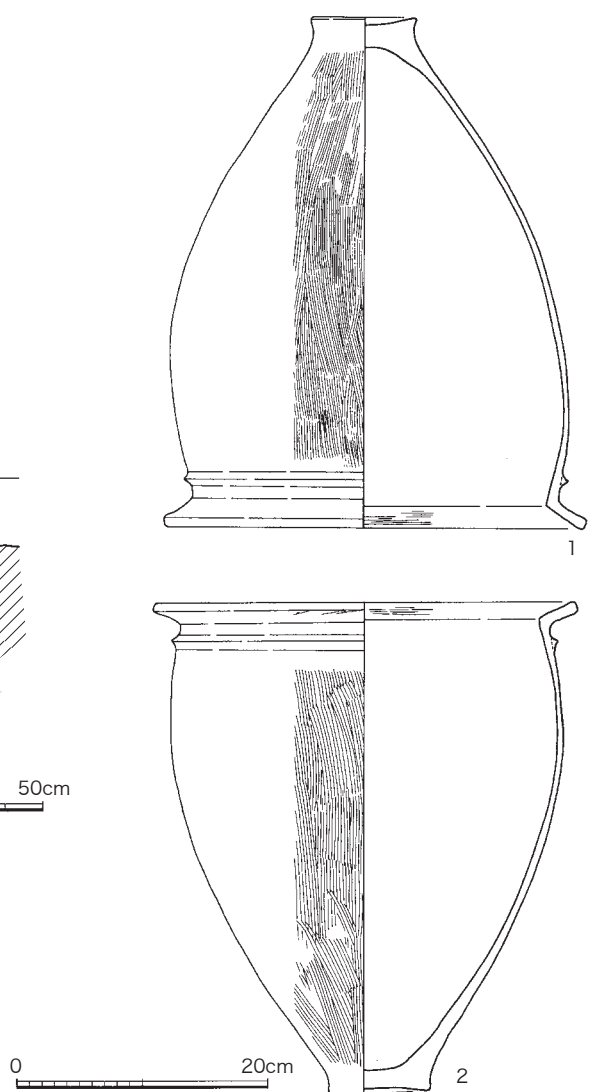


第73图 28号小児用甕棺実測図 (1/6)





第 74 図 29 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



第 75 図 29 号小児用甕棺実測図 (1/6)

第 65 図 1 は上甕である。断面逆 L 字形の口縁部を呈し、内傾する。頸部下部には断面三角形の突帯が巡る。2 は下甕で、断面逆 L 字形を呈し、内側に張り出す。胴部外面には縦方向のハケが残る。

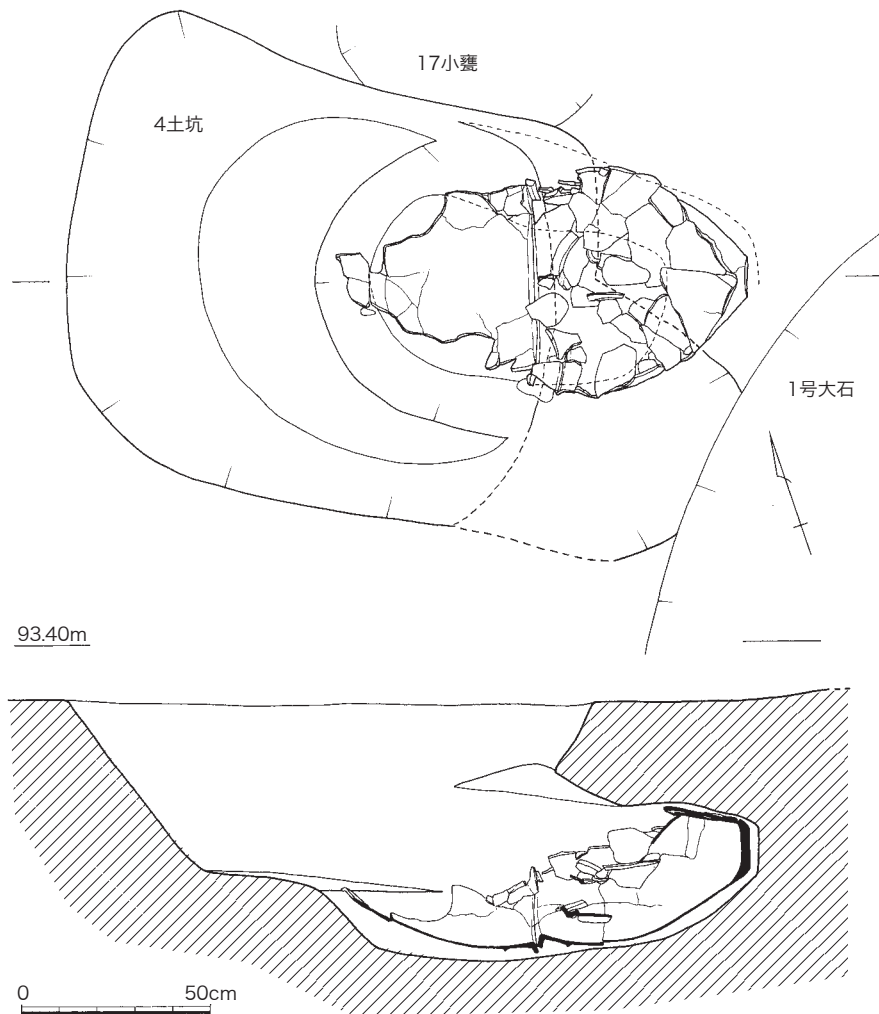
#### 25 号小児用甕棺墓 (第 66・67 図、図版 10・20)

調査区南西側にて検出され、上面を削平を受ける。墓壙は不整形を呈し、確認面での規模は南北軸約 100cm、東西軸約 70cm、深さ約 20cm を測る。残存する状況から接口式にて埋置され、埋置角度は約  $1^\circ$ 、主軸は  $N27^\circ E$  を測る。

第 67 図 1 は上甕で、口縁部は断面コの字状を呈し、頸部下部に断面三角形の突帯が巡る。外面はハケ調整ののちミガキが施され、口縁部内面には指オサエが残る。2 は下甕で、口縁部は断面逆 L 字状を呈する。頸部下面には断面三角形の突帯を巡らせ、底部はやや薄めの平底である。外面には縦ハケが残る。

#### 26 号小児用甕棺墓 (第 68・69 図、図版 10・20)

調査区北側にて検出され、1 号住居に切られ、6・27 号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は不整形楕円形を呈し、確認面での規模は東西軸約 130cm、南北軸約 70cm、深さ約 30cm を測る。残存する状況から接口式にて埋置され、東側に向かって傾斜し、埋置角度は約  $3^\circ$ 、主軸は  $N68^\circ W$  を



第76図 30号小児用甕棺墓実測図(1/20)

測る。

第69図1は上甕で、口縁部はくの字状を呈し、胴部はやや張り出し、底部は上げ底を呈する。外面には縦ハケが残る。2は1はほぼ同様の器形を呈する。

#### 27号小児用甕棺墓

(第70・71図、図版10・20)

調査区北側にて検出され、1号住居に切られ、26号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約120cm、東西軸約70cm、深さ約25cmを測る。接口式にて埋置され、北側に向かって挿入される。埋置角度は約13°、主軸は約S36°Eを測る。

第71図1は上甕で、口縁部はくの字状を呈し、底部は平底を呈する。外面に

は縦ハケが残る。2は1とほぼ同様の器形を呈する。

#### 28号小児用甕棺墓(第72・73図、図版11・20)

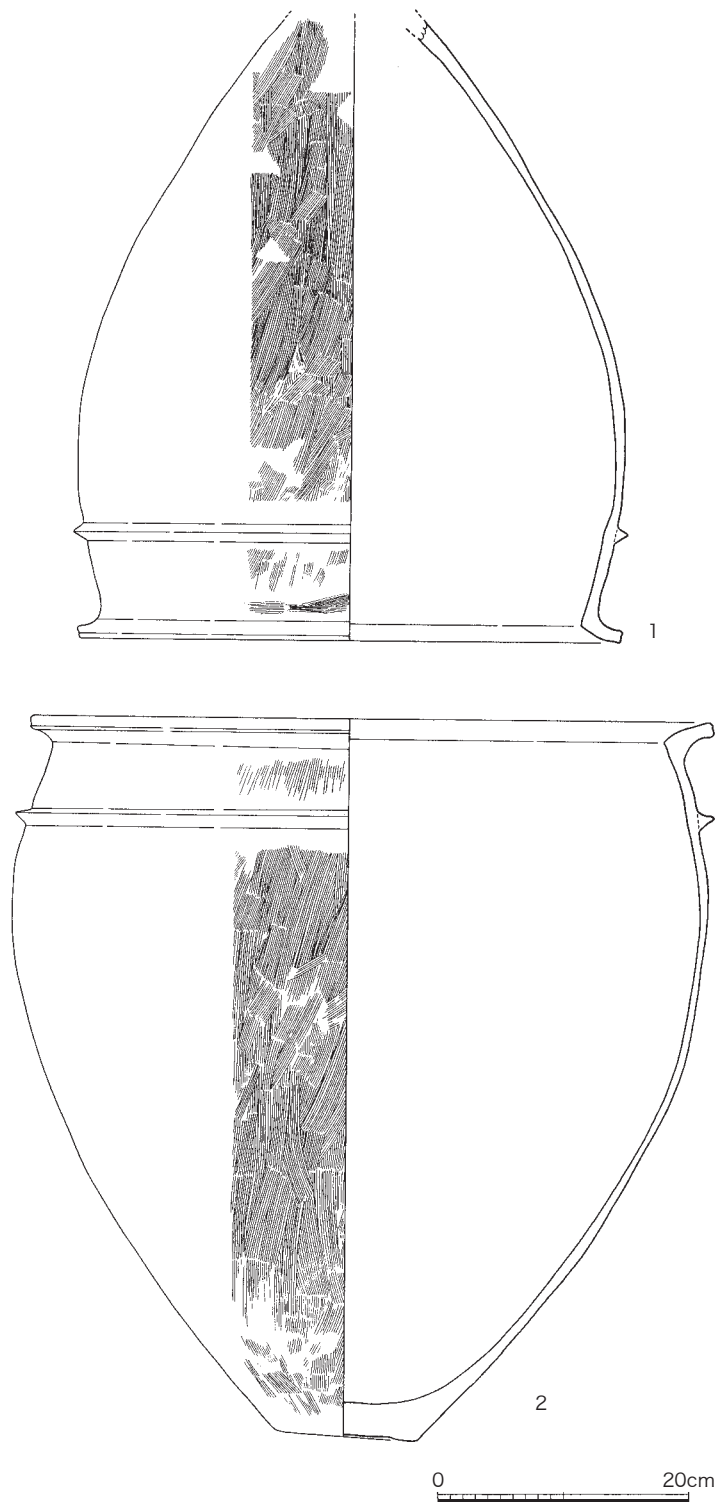
調査区中央部にて検出され、30号小児用甕棺、4号土坑、1号大石に切られる。大きく削平と破壊を受けるため、墓壙規模は不明である。残存する甕の状況から、接口式の埋置が想定される。埋置角度は13°、主軸はS65°Eを測る。

第73図1は上甕で、口縁部は断面逆L字形を呈し内傾する。頸部下面に断面三角形の突帯を巡らせる。外面には縦ハケが残る。2は下甕で口縁部は断面逆L字形を呈し内傾する。頸部下面に断面三角形の突帯を巡らせる。胴部はやや張り出し、底部は平底を呈する。外面には縦ハケが残る。

#### 29号小児用甕棺墓(第74・75図、図版11・20)

調査区北側に位置し、1号住居に切られ、5号石棺墓に近接する。墓壙は不整形を呈し、確認面での規模は東西軸約130cm、南北軸約70cm、深さ約45cmを測る。墓壙底は東側に下がり、接口式にて埋置され、埋置角度は約9°、主軸はN53°Wを測る。

第75図1は上甕で、口縁部は逆L字形を呈し、頸部に断面三角形の突帯を巡らせる。底部はやや上げ底を呈し、外面には縦ハケが残る。2は1とほぼ同器形を呈する。



第77図 30号小児用甕棺実測図(1/6)

は縦ハケが残る。2は1とほぼ同様の器形を呈する。

32号小児用甕棺墓(第80・81図、図版11・21)

調査区北側にて検出され、44号住居を切る。墓壙は楕円形を呈するが、北半は削平のため残存しない。確認面での規模は東西軸約60cm、深さ約15cmを測る。上面は大半の削平を受け、口縁

30号小児用甕棺墓

(第76・77図、図版11・21)

調査区中央部に位置し、4号土坑に切られる。墓壙の大半を4号土坑により削平されるため詳細は不明である。残存する甕が4号土坑床面より掘り窪められ、東側に向かって挿入される。本来かなり深めに掘り窪められた甕棺であったと想定される。残存する甕から、接口式にて埋置され、埋置角度は約 $0^\circ$ 、主軸は $S32^\circ E$ を測る。

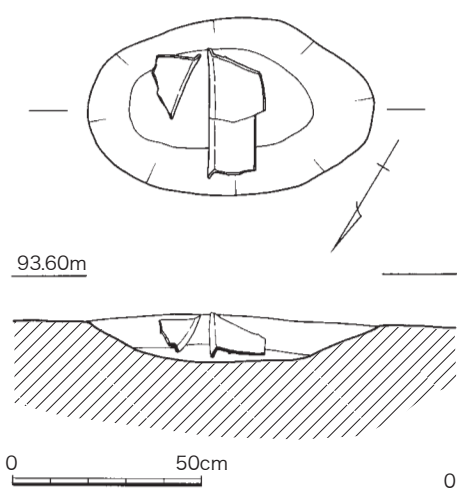
第77図1は上甕で、口縁部は断面逆L字形を呈し、内傾する。頸部よりやや下半に断面三角形の突帯を巡らせる。胴部は若干張り出し、外面には縦ハケが残る。2は下甕で、口縁部は断面逆L字形を呈し、内傾する。頸部やや下面に断面三角形の突帯を巡らせ、胴部は張り出し、底部は薄い平底を呈する。外面には縦ハケが残る。

31号小児用甕棺墓

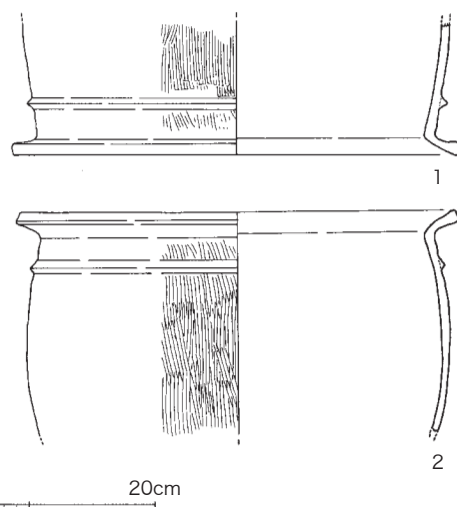
(第78・79図、図版11・21)

調査区北側にて検出され、44号住居を切る。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は東西軸約75cm、南北軸約45cm、深さ約10cmを測る。上面の大半を削平を受け、口縁部のみが残存する。推測される主軸は $N60^\circ E$ を測る。

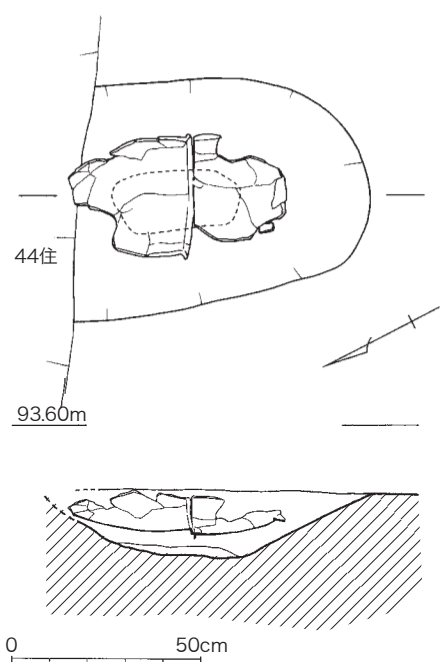
第79図1は上甕である。口縁部はくの字状を呈し、頸部下面に断面三角形の突帯を巡らせる。外面に



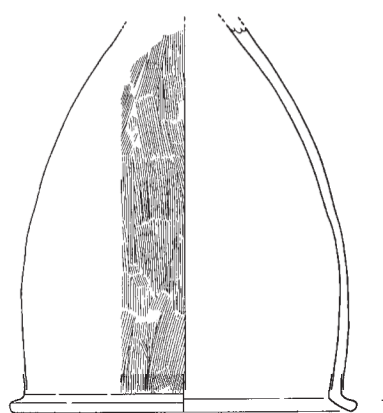
第 78 图 31 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



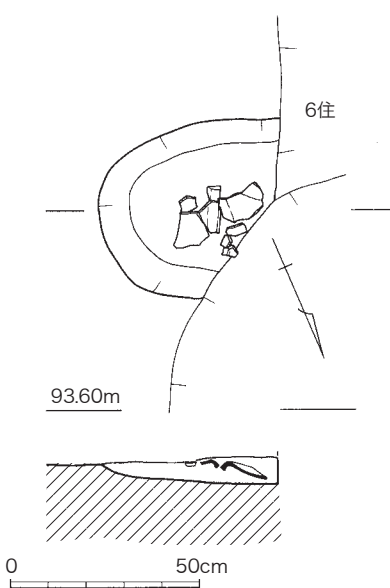
第 79 图 31 号小児用甕棺実測図 (1/6)



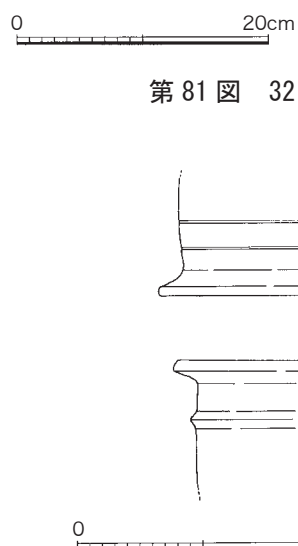
第 80 图 32 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



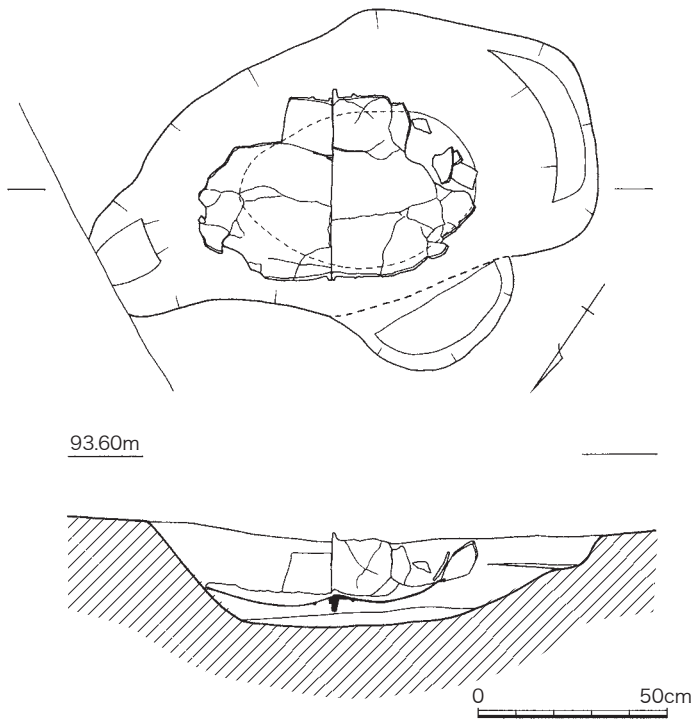
第 81 图 32 号小児用甕棺実測図 (1/6)



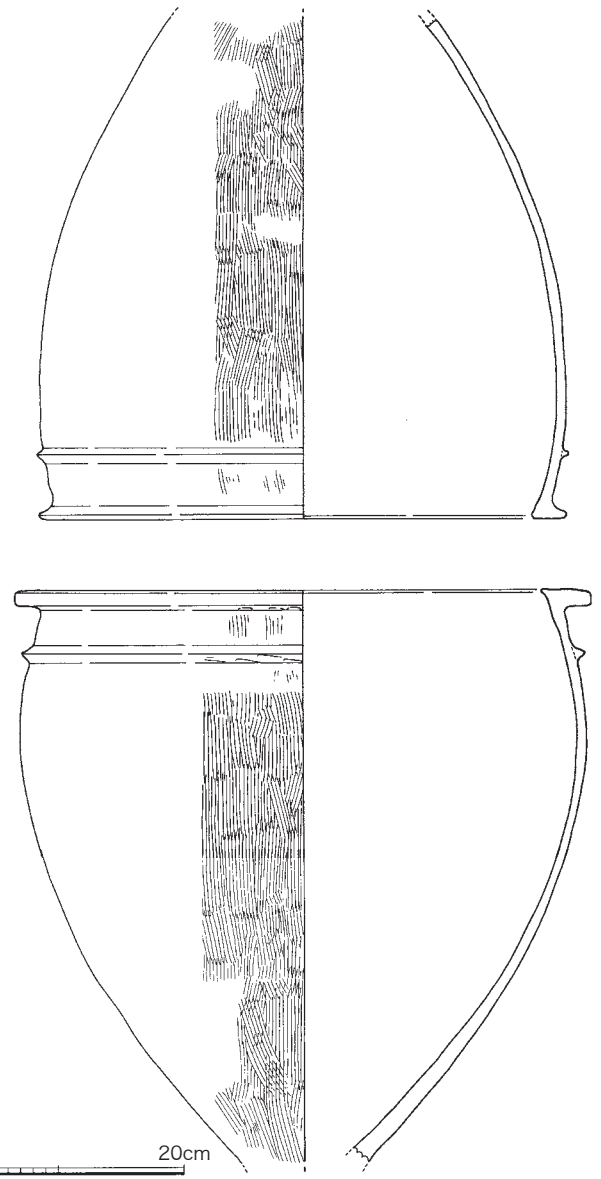
第 82 图 33 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



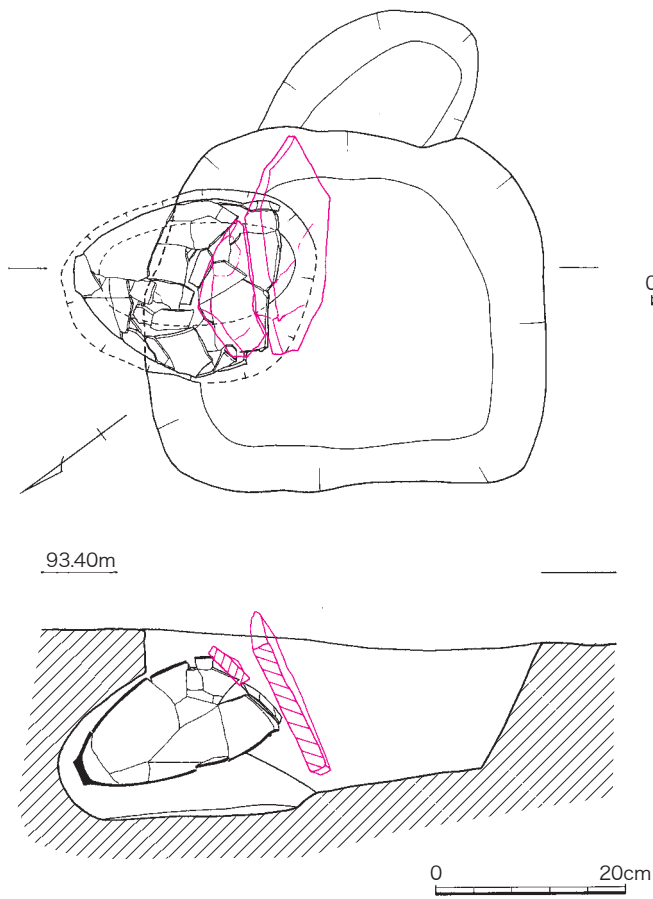
第 83 图 33 号小児用甕棺実測図 (1/6)



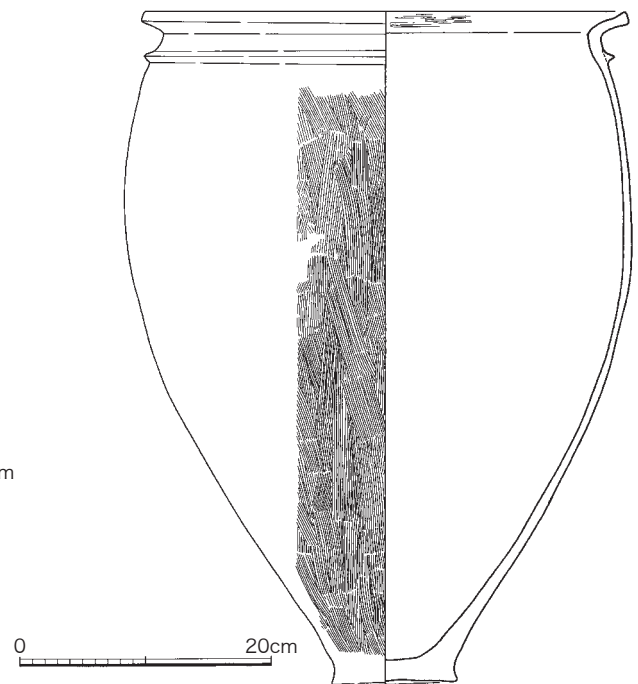
第 84 图 34 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



第 85 图 34 号小児用甕棺実測図 (1/6)



第 86 图 35 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



第 87 图 35 号小児用甕棺実測図 (1/6)

部のみが残存する。接口式にて埋置され、推測される主軸は N27° E を測る。

第 81 図 1 は上甕である。口縁部はくの字状を呈し、外面には縦ハケが残る。2 は口縁部はくの字状を呈し、頸部下部に断面三角形形状の突帯を巡らせる。外面には縦ハケが残る。

#### 33 号小児用甕棺墓（第 82・83 図、図版 11・21）

調査区中央よりやや西側にて検出され、6 号住居に切られる。口縁部の破片が合わせ口状に出土していたことから、甕棺墓と判断した。墓壙は円形を呈する。主軸は口縁部の残存から N66° E 前後と考えられる。

第 83 図 1 は上甕である。口縁部はくの字状を呈し、頸部下面に沈線が 2 条巡る。外面には縦ハケが残る。2 は下甕で、口縁部はくの字状を呈し、頸部下面に断面三角形形状の突帯が巡る。外面には縦ハケが残る。

#### 34 号小児用甕棺墓（第 84・85 図、図版 11・21）

調査区北側にて検出され、9 号小児用甕棺に近接する。墓壙は不整形を呈し、確認面での規模は東西軸約 145cm、南北軸約 75cm、深さ約 25cm を測る。接口式にて埋置され、推測される埋置角度は約 1°、主軸は N56° W を測る。

第 85 図 1 は上甕で、口縁部は断面三角形形状を呈し、頸部下面に断面三角形形状の突帯を巡らせる。外面には縦ハケが残る。2 は下甕で、口縁部が逆 L 字状を呈し、若干内側に張り出す。頸部下面には断面三角形形状の突帯を巡らせ、胴部は張り出す。外面には縦ハケが残る。

#### 35 号小児用甕棺墓（第 86・87 図、図版 12・21）

調査区北側にて中央にて検出され、2 号木棺墓、2 号土坑を切る。当初成人用甕棺墓と想定し 6 号甕棺墓と番号をつけたが、小児棺であったことから、今回 35 号小児用甕棺墓と名称変更する。墓壙は方形を呈し、確認面での規模は南北軸約 105cm、東西軸約 95cm、深さ約 40cm を測る。墓壙底から約 10cm 掘り窪めて棺を挿入し、単棺の蓋として安山岩製の石を使用する。埋置角度は約 24°、主軸は S37° W を測る。

第 87 図 1 は使用された甕である。口縁部はくの字に屈曲し、跳ね上げ状を呈する。頸部に断面三角形形状の突帯を有し、胴部は若干張り出し、底部を平坦に仕上げる。外面には縦ハケが施される。

### 3. 木棺墓

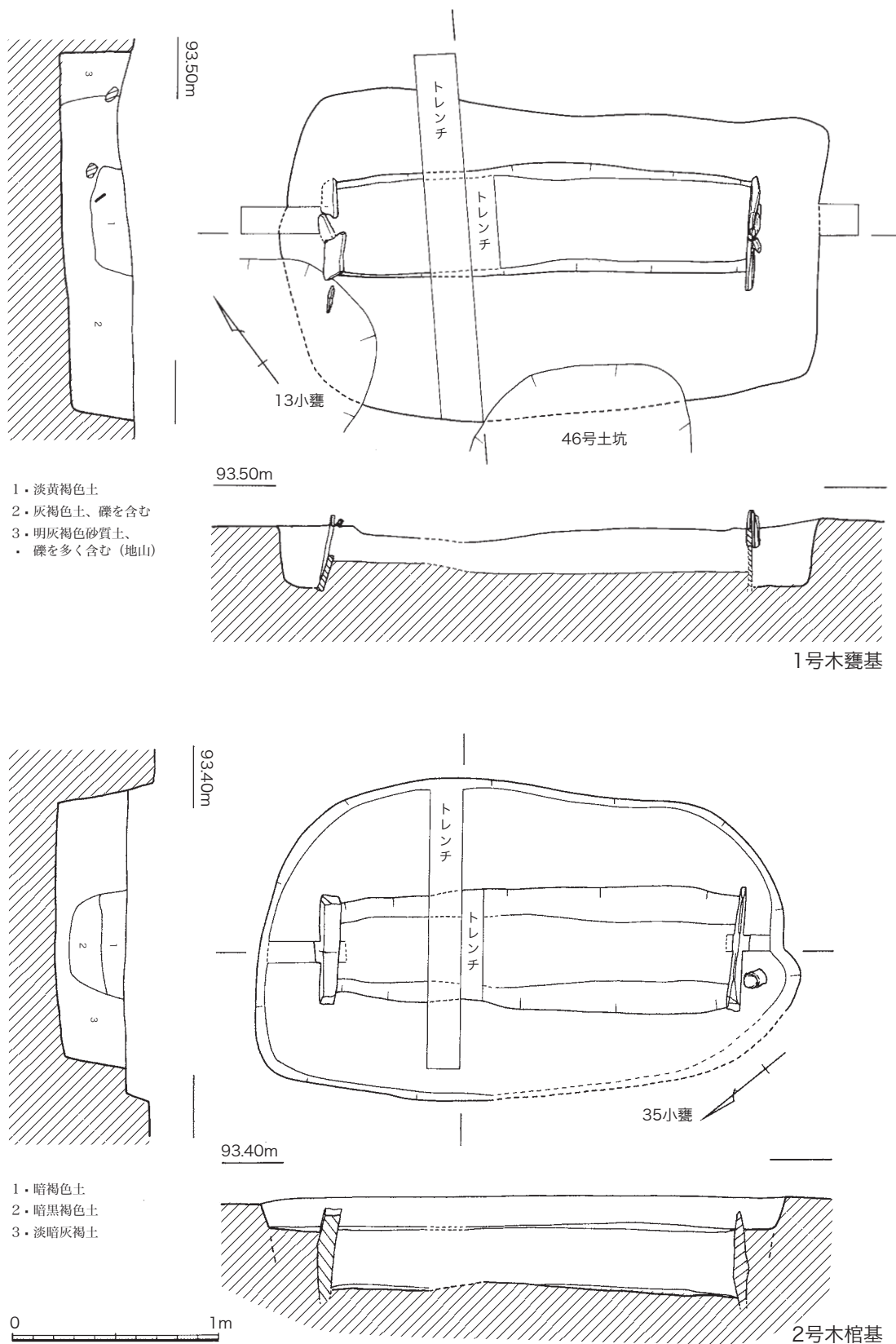
調査区中央部、1 号大石付近に集中しており、木棺墓として明確に認定できたのはこの 2 基のみである。何れも両小口に石を据えている。

#### 1 号木棺墓（第 88 図、図版 12）

調査区中央にて検出され、13 号小児用甕棺墓、46 号土坑に切られる。墓壙は方形を呈し、確認面での規模は東西軸約 2.6m、南北軸約 1.6m、深さ約 30cm を測る。石を立てた内側と外側では土質が異なっていた。墓壙を掘り込み、安山岩製の両小口石を立てて側板を押さえ、裏込めに土を入れたものと想定される。主体部床面は墓壙掘方よりも一段高くなっており、長軸約 2.0m、短軸約 0.5m、を測る。頭位方向は不明で、主軸方向は N53° W を測る。

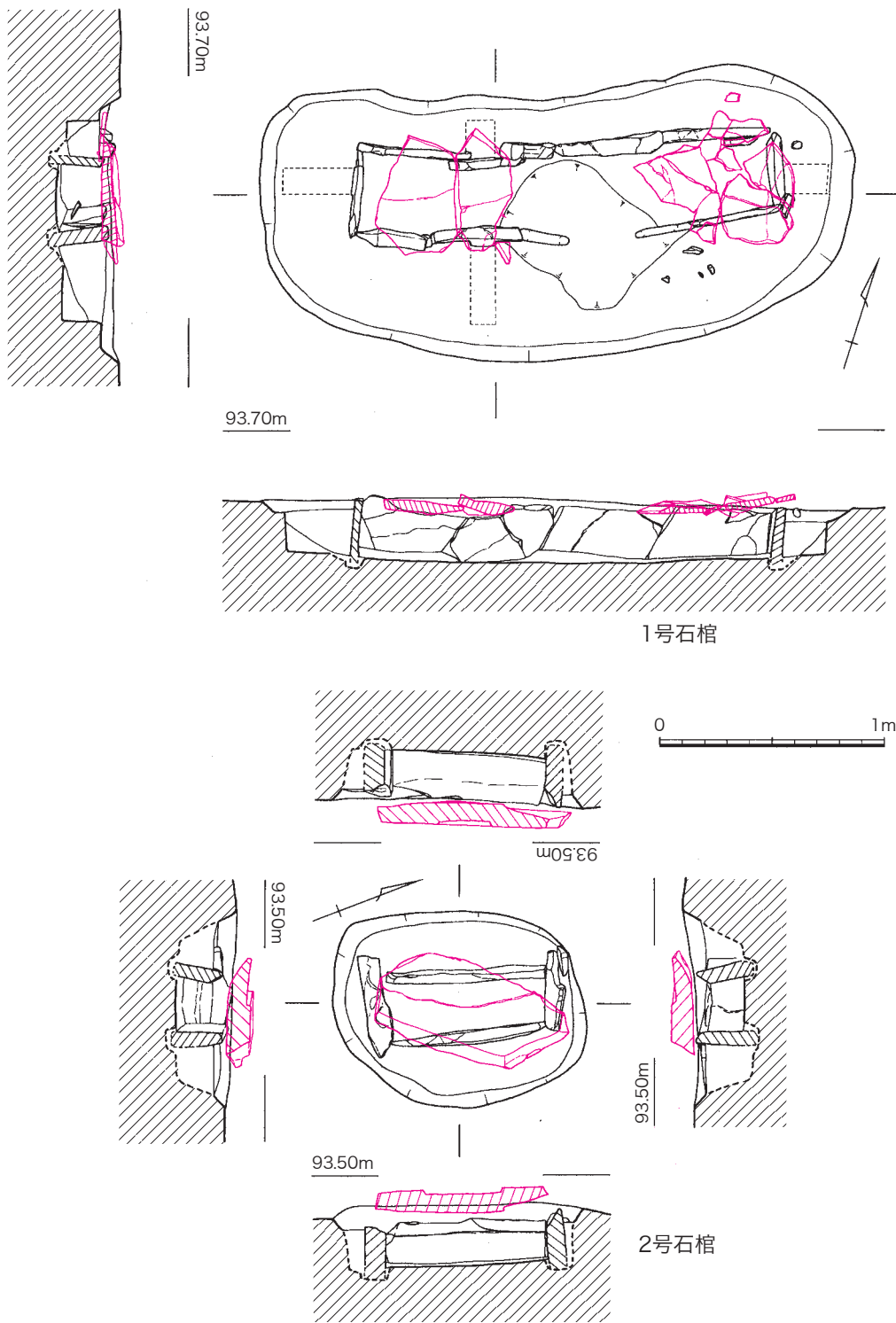
#### 2 号木棺墓（第 88 図、図版 12）

調査区中央にて検出され、35 号小児用甕棺墓に切られる。墓壙は隅丸方形を呈し、確認面での規模は長軸約 2.6m、短軸 1.5m、深さ約 30cm を測る。石を立てた内側と外側とでは埋土が異なり、



第 88 図 1、2 号木棺墓実測図 (1/30)

墓壇を掘り込み、安山岩製の両小口石を立てて側板を押さえ、裏込めに土を入れたものと想定される。主体部床面は墓壇掘方よりも一段高く、長軸約 1.9m、短軸約 0.6m を測る。南側の石が若干大きく、主体部の幅が若干広いことから、頭位は南西側と想定される。主軸方向は S38° W を測る。



第 89 図 1、2 号石棺墓実測図 (1/30)

木棺墓出土遺物

(第 93 図)

木棺の埋土に含まれていた遺物についてここでは一括して解説する。

1～3 は 1 号木棺墓から出土した。1・2 は甕の口縁部で断面コの字形を呈し、外面にはハケが残る。3 は須恵器皿である。46 号土坑の遺物が混入したもののか。4～6 は 2 号木棺墓より出土した。4・5 は甕の口縁部で、6 は底部である。

4. 石棺墓

成人用と小児用の 2 種類が有り、成人用は甕棺墓の近辺、小児用はややバラけて分布する。

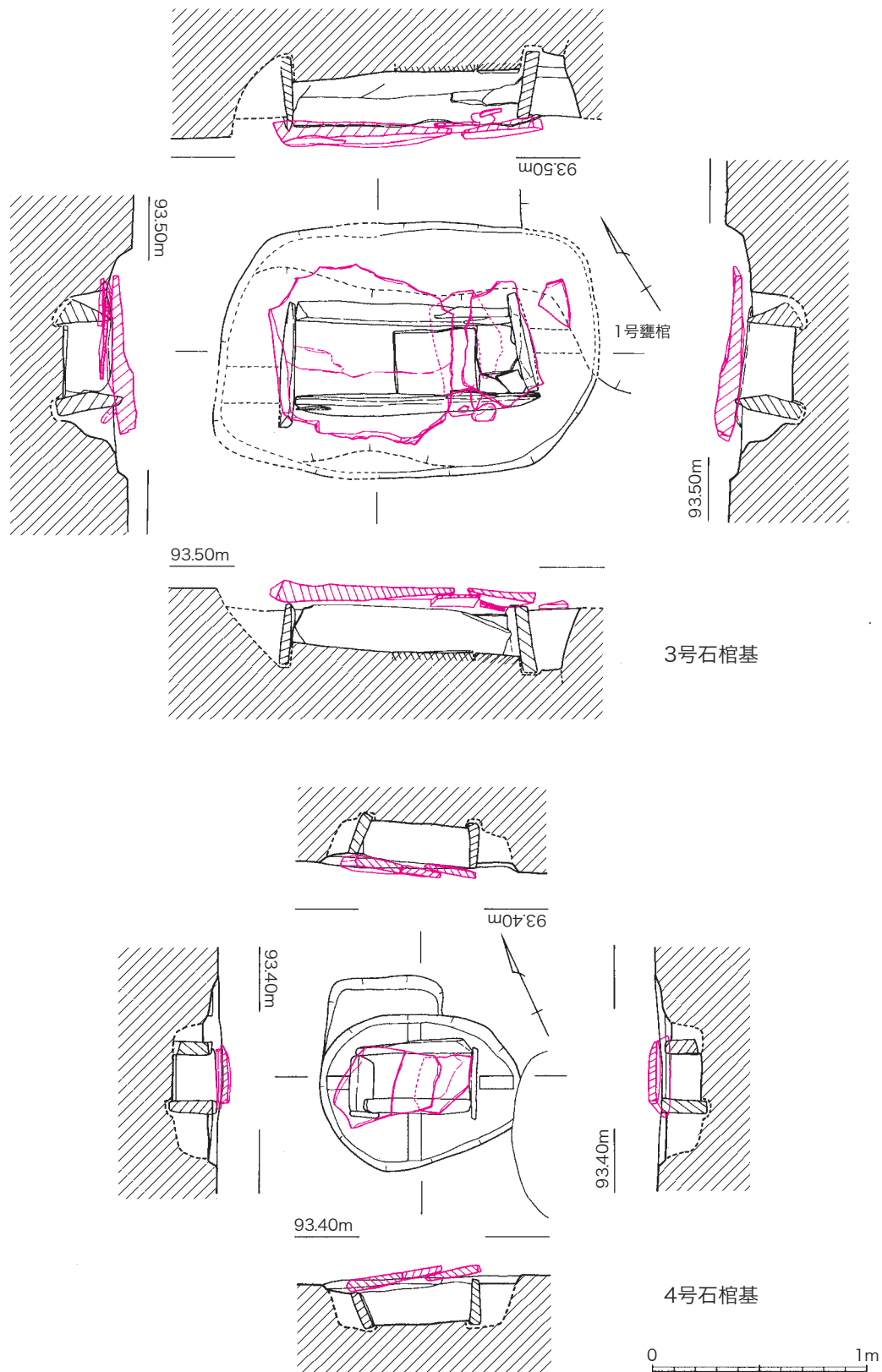
1 号石棺墓

(第 89 図、図版 12)

調査区北側にて検出され、4 号甕棺墓に近接し、ビ

ニールハウスの支柱が中心部を破壊していた。設置の際に板石が複数枚出土したとの所有者の証言から、本来、側壁だけでなく、蓋石も残存していたものと考えられる。墓壙は隅丸方形を呈し、東西軸約 2.6m、南北軸約 1.4m、深さ約 30cm を測る。蓋石は小ぶりの安山岩製の石を複数枚並べており、目貼りの痕跡は見られなかった。石棺は両小口に板石を立て、板石で挟み込むように側石を並べる。石棺規模は長軸約 1.8m、短軸約 30cm を測る。頭位は不明である。主軸方向は S73° W を測る。

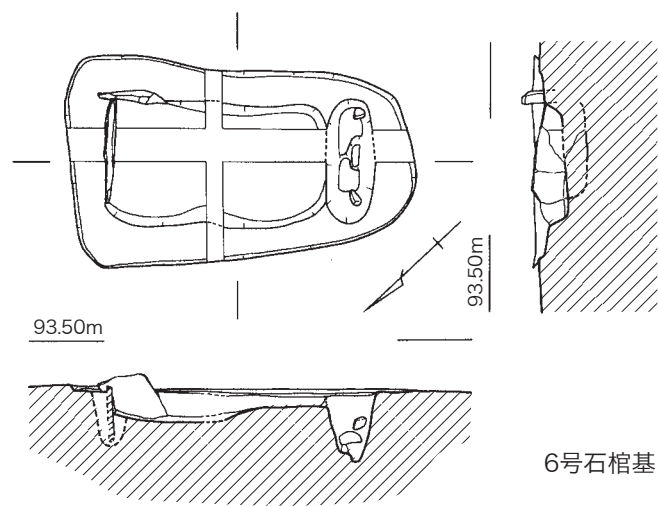
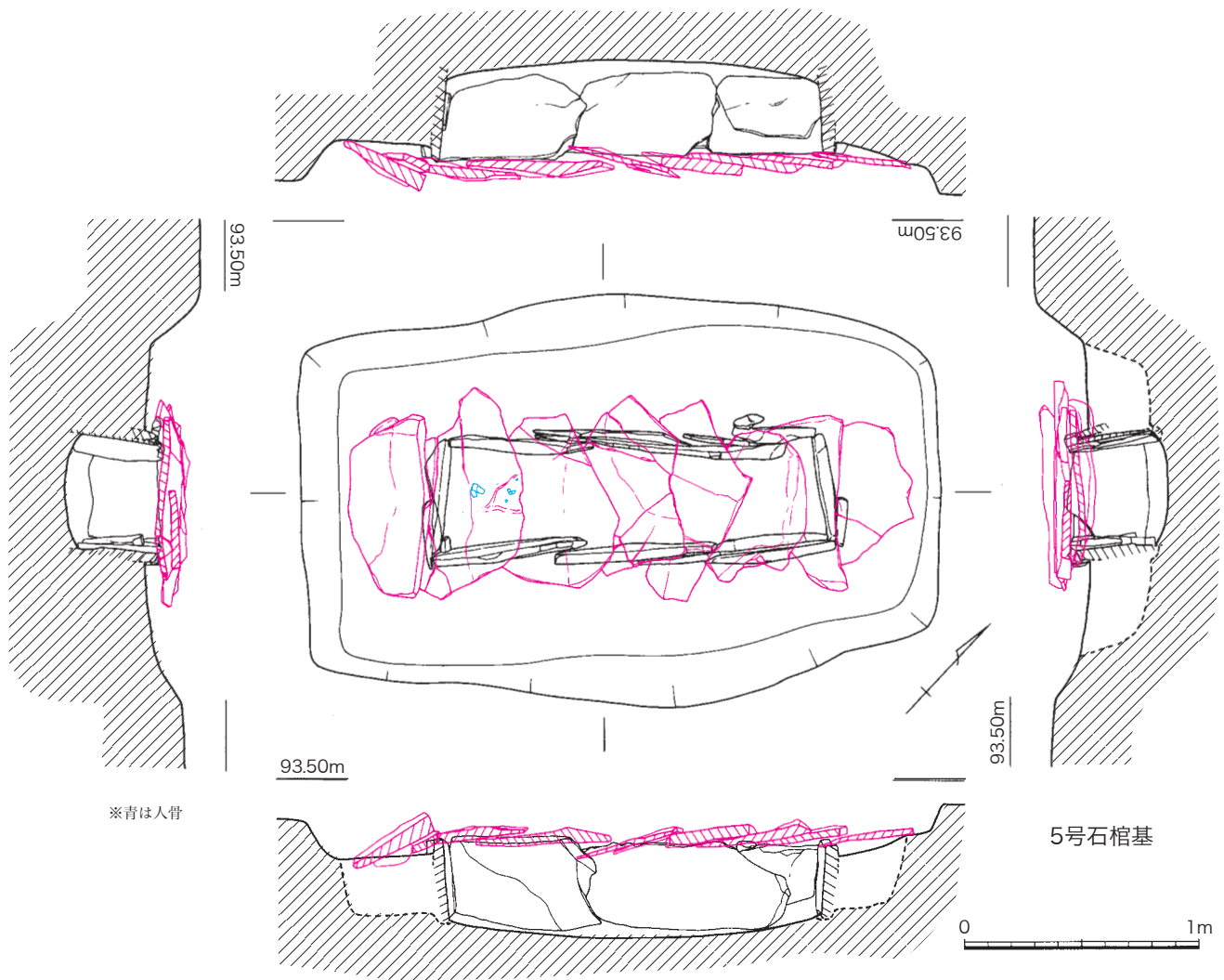




第90図 3、4号石棺墓実測図 (1/30)

2号石棺墓 (第89図、図版12)

調査区中央より北側にて検出され、27号土坑に近接する。墓壙は楕円形を呈し、南北軸約1.1m、東西軸約0.9m、深さ約20cmを測る。蓋石は安山岩製の石を1枚が使用され、目貼りの痕跡は見られなかった。石棺は安山岩製の両側壁に板石を立て、小口石で挟み込む。石棺規模は長



第 91 図 5、6 号石棺墓実測図 (1/30)

軸約 70cm、短軸約 20cm を測る。南側小口の方が若干幅広いが、床面は北側小口の方が若干高く、頭位は不明である。主軸方向は  $N22^{\circ} E$  を測る。

3号石棺墓 (第 90 図、図版 13)

調査区北側にて検出され、1号甕棺墓を切っている。当初、石棺墓との切り合いが明確に出来なかったため、東側の一部及び、墓壇掘方を掘りすぎてしまった。墓壇は隅丸方形を呈し、東西軸約 1.85m、南北軸約 1.2m、深さ約 30cm を測る。蓋石は安山岩の大きな石を一枚、方形状の石を 2 枚重ねて使用し、目貼りの痕跡は見られなかった。石棺は安山岩の長い板石状の両側壁を立て、両小口で押さえ込んで裏込めに土を入れている。床面東側には板石が 2 枚敷かれていた。石棺規模は長軸約 100cm、短軸約 30cm を測る。西側小口の方が幅広く、床面も若干高く、蓋石にも大石が使用されていることから、頭位は西側と想定される。頭位方向は  $N58^{\circ} W$  である。

#### 4号石棺墓（第90、図版13）

調査区西側にて検出される。墓壙は円形を呈し、東西軸約90cm、南北軸約70cm、深さ約20cmを測る。蓋石は安山岩製の板石2枚を重ねて使用し、目貼りの痕跡は見られない。石棺は安山岩の両側壁を立て、両小口で押さえ込んで裏込めに土を入れたものと想定される。西側蓋石が最後に重ねられることから、西側が頭位か。主軸方向はN64°Wを測る。

#### 5号石棺墓（第91、図版13）

調査区北側にて検出され、1号住居に切られる。墓壙は方形を呈し、東西軸約2.7m、南北軸約1.75m、深さ約50cmを測る。蓋石は安山岩製の板石8枚を重ねて使用し、目貼りの痕跡は見られない。石棺は安山岩製の板石を側壁に3枚並べ、両小口で押さえ込んでから裏込めに土を入れたものと想定される。石棺規模は、長軸約160cm、短軸は西側小口約80cm、東側小口約70cmを測る。西側小口側が頭位と想定され、歯牙の破片が数点出土した。頭位方向はS47°Wを測る。

#### 6号石棺墓（第91、図版14）

調査区中央より北側にて検出された。蓋石も残存せず、石棺も両小口及び、北側小口側に側壁が一枚見られるのみであることから、木棺墓の可能性も考えられる。墓壙は台形状を呈し、南北軸約1.4m、東西軸約0.8m、深さ約10cmを測る。石棺は北側小口に安山岩製の板石、東側に一枚側壁を立てる。南側小口は抜取り痕が見られる。石棺規模は長軸約85cm、短軸約50cmを測る。頭位は不明で、主軸方向はN43°Eを測る。

#### 石棺墓出土遺物（第93図、図版21）

石棺墓の埋土に含まれていた遺物についてここでは一括して解説する。

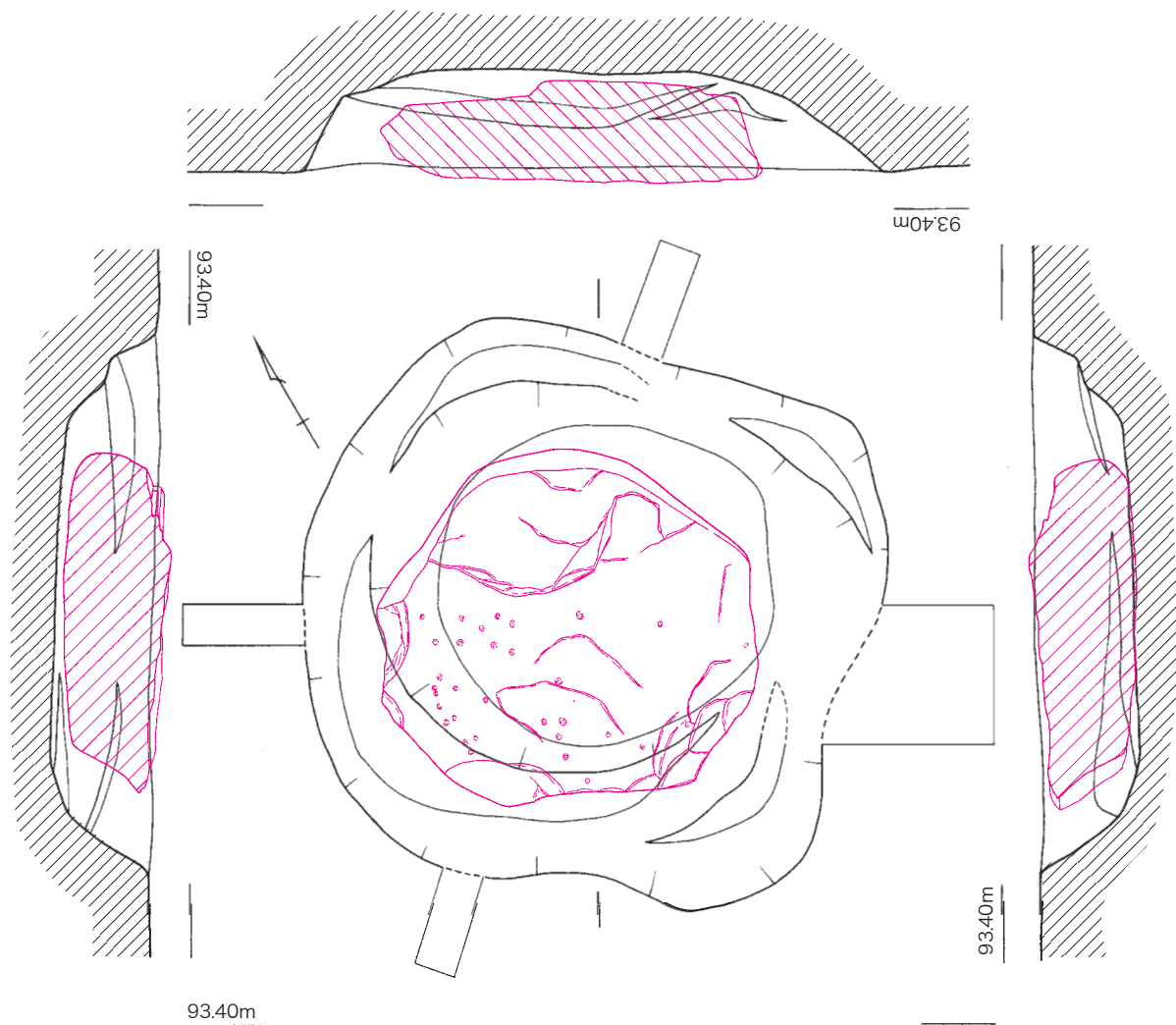
7は1号石棺より出土した高環の脚である。8は3号石棺より出土した甕の口縁部で断面逆L字形を呈する。9は4号石棺より出土した甕の口縁部で跳ね上げ状を呈する。10～12は5号石棺より出土した。10は甕の胴部で幅が太めの突帯に刻目が施される。11は平底の底部でやや外に開く。12は甕の底部で、若干レンズ状である。

## 5. 大石

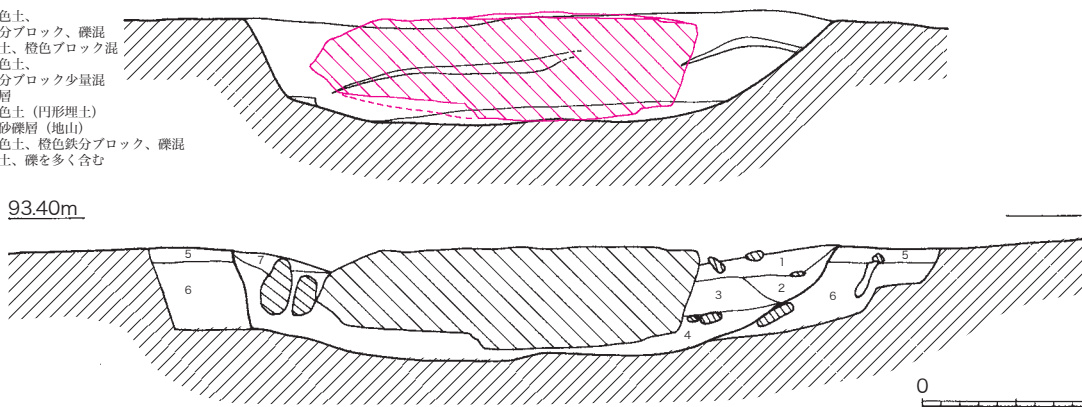
#### 1号大石（第92、図版14）

調査区中央部にて検出された。掘方は不整形円形を呈し、確認面での規模は約3m、深さ約60cmを測る。掘方は階段状を呈し、床面は平坦で、石が直上に乗る。埋土は床面付近がしまりの弱い砂質土で、地山の土に類似する。それより上には灰色系の土が埋められ、石が多数混じっていた。当初地山の石が見えているだけかと考えたが、掘方が確認され、大石の存在が明らかとなった。大石は安山岩製で、約2mの大きさを呈し、南側には石の大きさを調整するための剥離痕が見られた。また、この石の表面には信仰儀礼痕跡とされる盃状穴が無数に見られる。

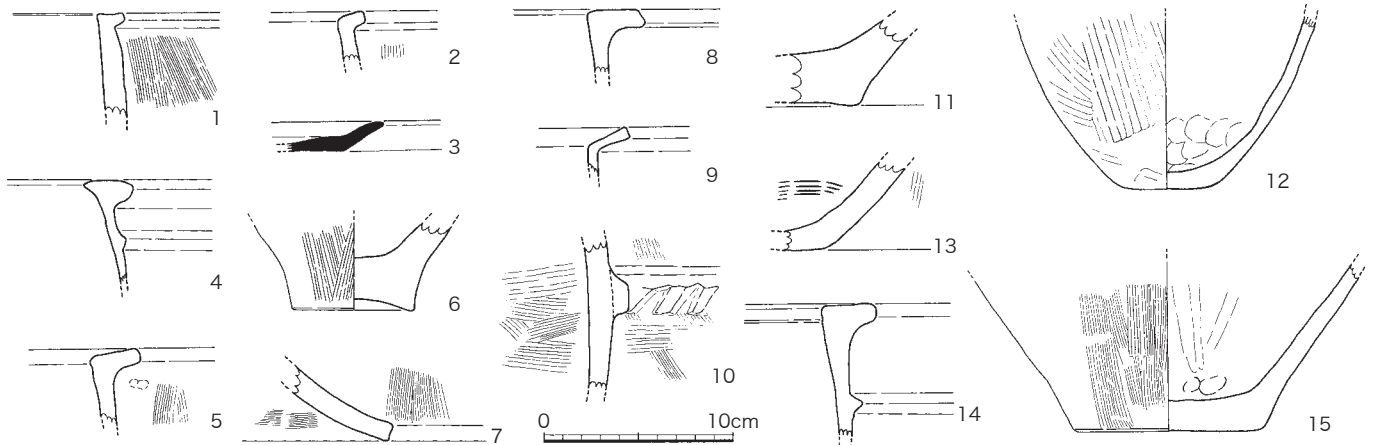
その他の墓の埋土が黒色系を呈するのに対して灰色系を呈すること、埋土に比較的大きな石が多数混じること、確認面から深く掘り窪められ、掘方が広くないことなどから、この大石はこの土地が水田化する際に邪魔となり、石と共にこの場所に埋められたのではないかと考えられる。しかし、盃状穴の存在や円形状に加工した痕跡などから、この大石が自然石であるとは考えにくい。また、重機でやっと持ち上げることの出来るほどの大石をわざわざ遠くから持ってきてこの場所に埋めるとは考えにくい。従ってこの大石は、調査区内において水田化前まで地上面に存在していた可能性



- ・1号大石
- 1・淡灰褐色土、
- ・橙色鉄分ブロック、礫混
- 2・灰褐色土、橙色ブロック混
- 3・淡灰褐色土、
- ・橙色鉄分ブロック少量混
- 4・砂質礫層
- 5・暗灰褐色土（円形埋土）
- 6・暗褐色砂礫層（地山）
- 7・淡灰褐色土、橙色鉄分ブロック、礫混
- 8・暗褐色土、礫を多く含む



第92図 1号大石実測図 (1/40)



第93図 木棺墓・石棺墓・大石出土遺物実測図 (1/4)

が高い。確固たる根拠はないが、甕棺墓等の墓壙上面に存在していた支石墓の可能性も視野に入れる必要がある。

#### 大石出土遺物（第 93 図、図版 21）

13～15 は大石より出土した。13 は甕の底部、14 は甕の口縁部で断面コの字状を呈する。15 は甕の底部で大きめの平底である。

## 6. 土坑

調査区内で多数検出されたが、そのうち墓の可能性が高いもの、墓との重複があるものなどを中心に掘下げを行っており、その他のものに関しては遺構面での検出のみにとどめている。内、8～13 号土坑とその周辺の土坑は土壙墓の可能性も想定されるが、確証を得られなかったため土坑として取り扱う。以下、遺構の掘下げを実施したものを中心に説明を加える。

#### 1 号土坑（第 94 図、図版 14）

調査区北側で検出され、2 号甕棺墓を切る。平面形は楕円形を呈し、西側が一段下がる。確認面での規模は東西軸約 110cm、南北軸約 60cm、深さ約 10cm を測る。

#### 出土遺物（第 97 図）

1 は如意形を呈する甕の口縁部頸部下面に沈線文が巡る。2 は厚みのある甕の底部である。

#### 2 号土坑（第 94 図、図版 14）

調査区中央より西側にて検出され、35 号小児用甕棺墓に切られる。平面形は方形状を呈し、確認面での規模は東西軸約 130cm、深さ約 5cm を測る。安山岩製の板石が流入していた。

#### 4 号土坑（第 95 図、図版 14）

調査区中央より西側にて検出され、17・28・30 号小児用甕棺墓を切る。平面形は方形を呈し、確認面での規模は東西軸約 120cm、南北約 130cm、深さ約 50cm を測る。埋土は灰褐色の粘質土を呈し、やや新しい印象を受けた。30 号小児用甕棺墓の掘方とは別である。

#### 出土遺物（第 97 図、図版 21）

3 は断面くの字形を呈する甕の口縁部で、頸部に断面三角形状の突帯が巡る。4 は甕で、口縁部は断面逆 L 字形を呈し、頸部下面断面三角形状の突帯が巡る。5 は底部でやや上げ底を呈する。

#### 5 号土坑（第 94 図、図版 14）

調査区北東より検出され、10 号小児用甕棺墓に切られる。平面形は不定形を呈し、南側にテラスがつき、北側が一段掘り窪められる。やや上面には安山岩製の板石が一枚流入していたが、埋土はレンズ状に堆積し、墓の確証は得られなかった。確認面での規模は南北軸約 4.2m、東西軸約 2.9m、深さ約 30cm を測る。

#### 出土遺物（第 97 図）

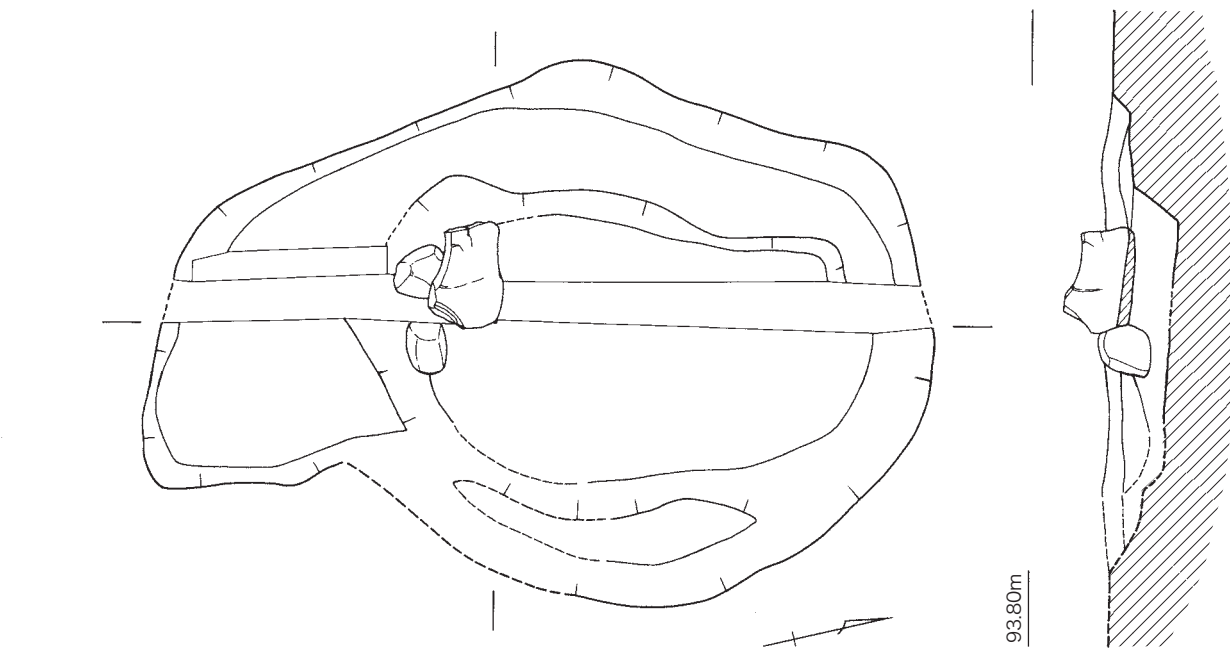
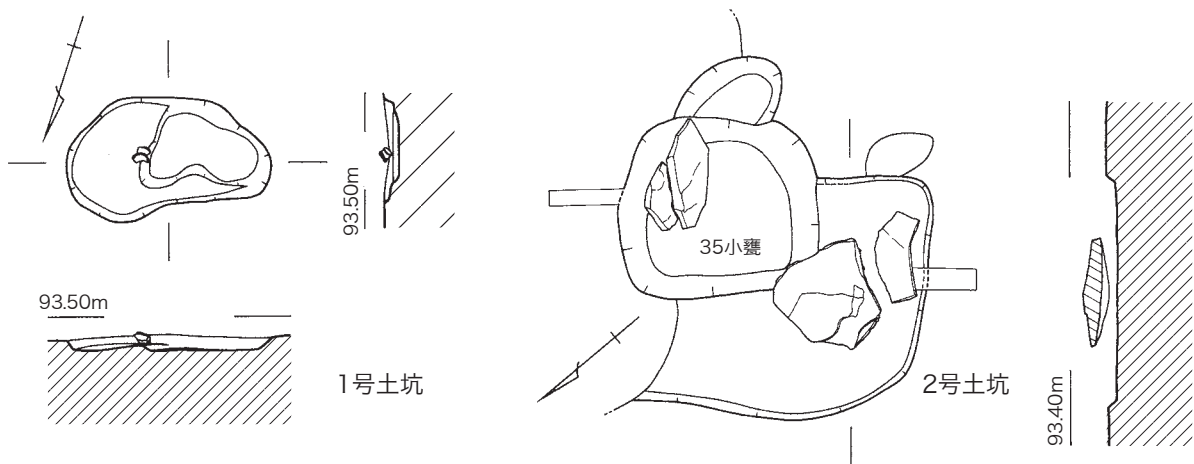
6 は如意形を呈する甕の口縁部、7 は断面逆 L 字形を呈する。

#### 6 号土坑（第 95 図、図版 15）

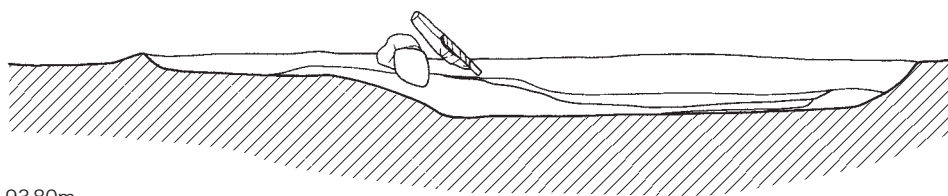
調査区北側にて検出され、1 号住居を切る。平面形は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約 140cm、東西軸約 80cm、深さ約 25cm を測る。

#### 出土遺物（第 97 図）

8 は断面くの字を呈し、頸部下面に沈線が巡り、9 は断面逆 L 字形で頸部下面に沈線が巡る。

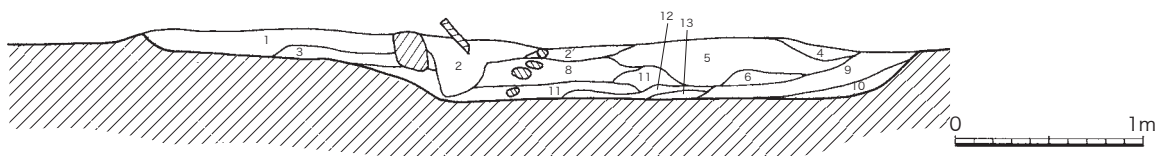


93.80m



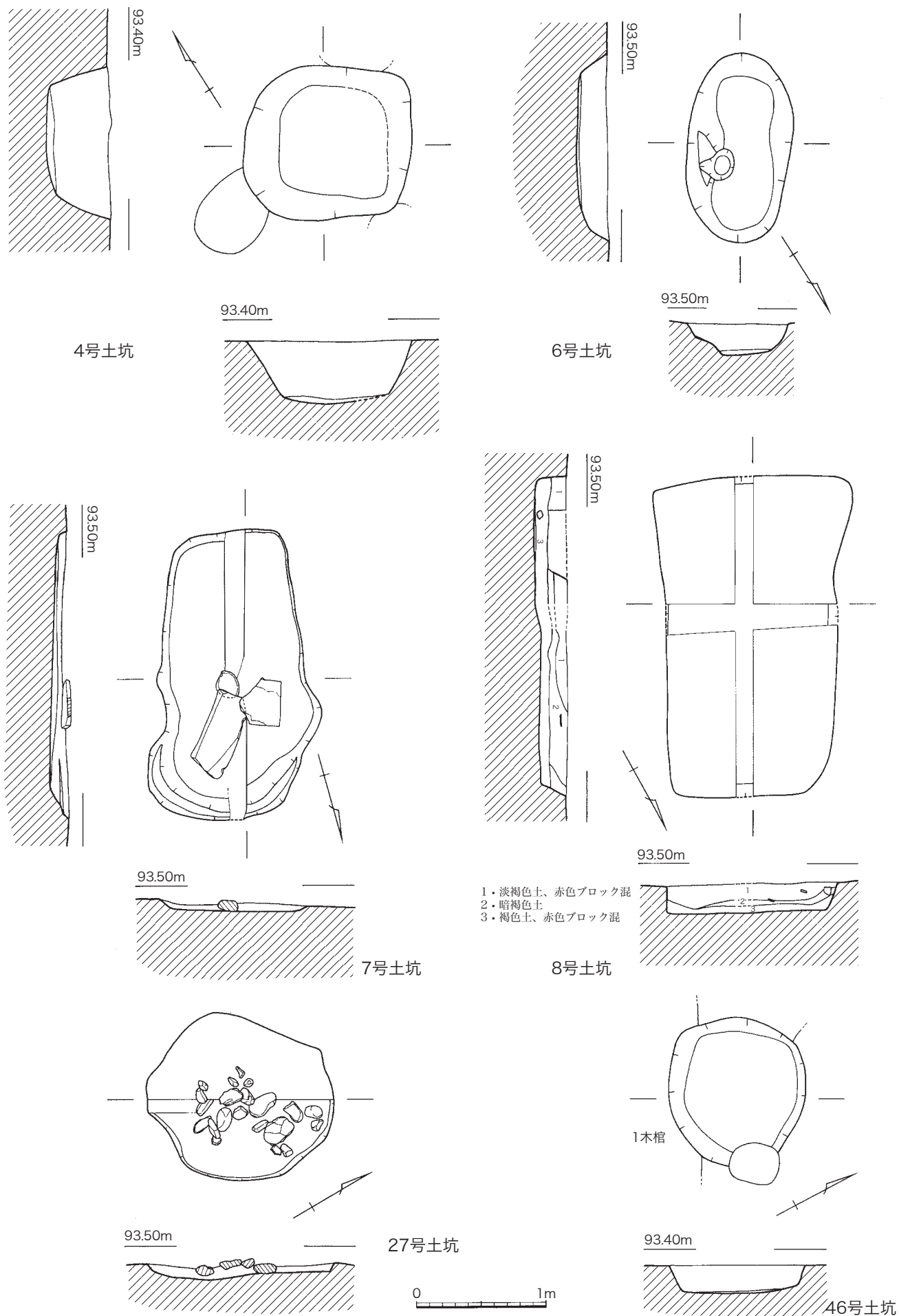
93.80m

5号土坑



- |                       |                     |            |             |
|-----------------------|---------------------|------------|-------------|
| 1・暗褐色土                | 4・黄褐色土、しまりなし（攪乱層）   | 8 褐色土      | 12 褐色土      |
| 2・黄褐色土、しまりなし（攪乱層）     | 5・暗褐色土              | 9 暗黄褐砂     | 13 褐色土（砂礫混） |
| 2' 暗褐色土、黄褐色ブロック混（攪乱層） | 6・淡褐色砂質土、黄褐色砂質ブロック混 | 10 暗礫層（地山） |             |
|                       | 7・暗黒褐色土、黄褐色砂質ブロック混  | 11 暗黒褐色土   |             |

第94図 1・2・5号土坑実測図（1/40）



第95図 4・6・7・8・27・46号土坑実測図 (1/40)

7号土坑（第95図、図版15）

調査区北西隅にて検出された土坑で、平面形は不整形を呈し、確認面での規模は南北軸約220cm、東西軸約130cm、深さ約10cmを測る。墓壙内に安山岩製の板石が2枚流入していた。

出土遺物（第97図）

10は断面コの字形を呈する甕である。

8号土坑（第95図、図版15）

調査区中央部北側にて検出された土坑で、15号土坑まで列状に並ぶ土坑群の内のひとつである。中央部にトレンチを入れて確認したが、墓壙状の落ち込みなどは確認出来ず、埋土はレンズ状に堆積していた。平面形は方形を呈し、確認面での規模は南北軸約245cm、東西軸約150cm、深さ約20cmを測る。

出土遺物（第97図）

11は壺の口縁部で、貼り付け口縁により肥厚させる。

27号土坑（第95図、図版15）

調査区中央部で検出され、2号石棺に切られる。平面形は円形を呈し、確認面での規模は約130cm、深さ約10cmを測る。埋土内に小ぶりの礫が多数混入していた。

出土遺物（第97図）

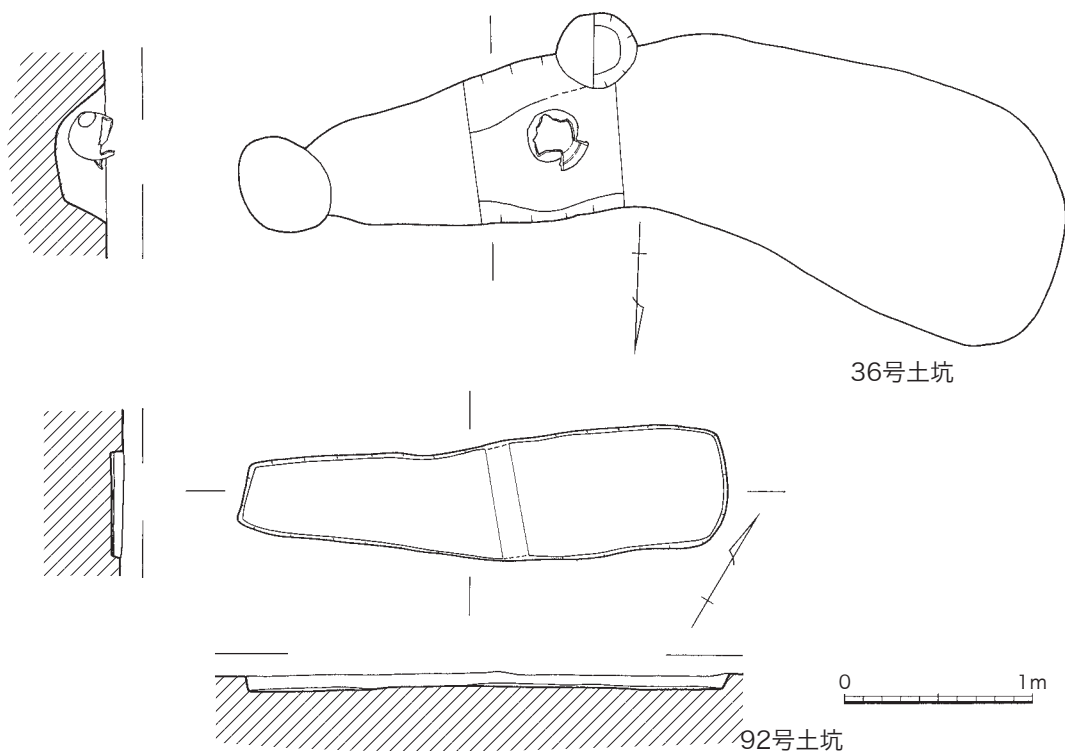
12は甕の底部、13は器台、14は高坏である。

36号土坑（第96図、図版15）

調査区北東側にて検出された溝状の遺構である。確認面での規模は東西軸約4m、南北幅約1.2m、深さ約25cmを測る。中央部に完形の壺の存在が確認され、この部分のみをトレンチ調査した。

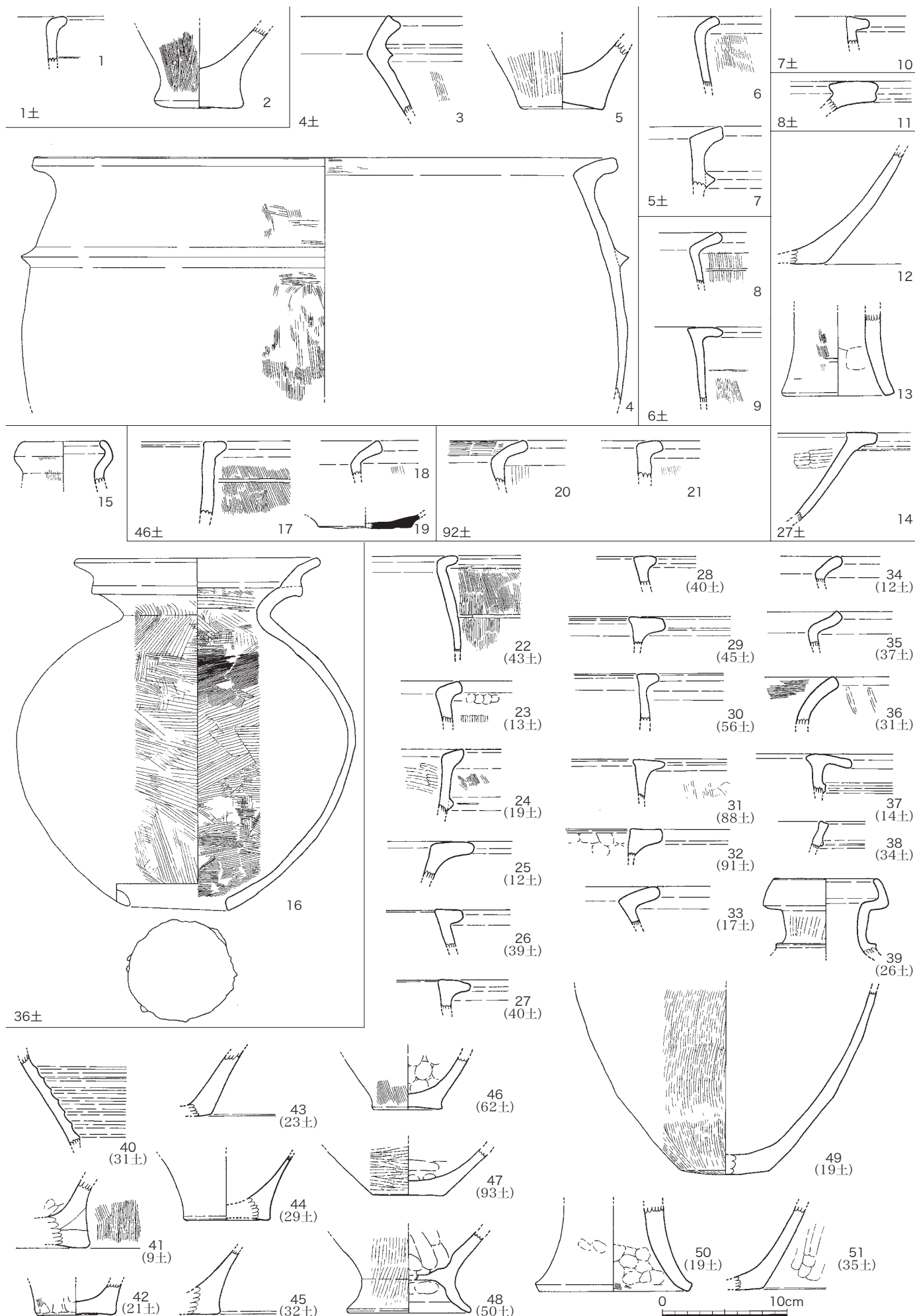
出土遺物（第97図、図版21）

15は複合口縁壺の口縁部で、16は畿内系二重口縁壺である。1次口縁を外に貼り出し、2次口縁は外反する。底部は穿孔で、祭祀行為に伴うものと考えられる。内外ともにハケが残る。



第96図 36・92号土坑実測図（1/40）





第 97 图 土坑出土遺物実測図 (1/4)

#### 46号土坑（第95図、図版15）

調査区中央部にて検出され、1号木棺墓を切る。平面形は円形を呈し、確認面での規模は約120cm、深さ約20cmを測る。

#### 出土遺物（第97図）

17は断面三角形を呈する甕の口縁部で、頸部下面に沈線が巡る。18は断面くの字状の甕の口縁部、19は須恵器皿である。

#### 92号土坑（第96図、図版15）

調査区北側にて検出され、2号甕棺墓に近接する。平面形は長方形を呈し、確認面での規模は約2.6m、幅約0.6m、深さ約5cmを測る。平面形は土坑は土壇墓状を呈しているが、土壇墓とする明確な根拠に欠けるため土坑として報告する。

#### 出土遺物（第97図）

20・21は甕の口縁部である。20は断面くの字状、21はコの字状口縁を呈する。

#### その他の土坑出土遺物（第97図、図版22）

22～51は遺構検出のみに留めた土坑の表面採集遺物である。表面採集であるため、遺構の時期決定根拠としての確実性は低いが、未調査遺構群の時期を検討するための資料としては有効であると考えられるためここで紹介しておく。なお、採集量がバラバラであるため、紙面の都合上遺構別に遺物を配置せず、器種、器形ごとに区分けして説明を加える。

22～37は甕の口縁部である。22は如意形口縁を呈し、頸部下面に沈線文が巡る。23～32は断面コの字形あるいは逆L字形を呈する甕の口縁部である。33は断面逆L字形が伸びたタイプで、34～36は断面くの字状を呈し、うち35は跳ね上げ口縁を呈する。37は鋤先状口縁を呈する丹塗り甕で、頸部下面にM字状突帯が巡る。

38は丹塗りの鉢か。39は複合口縁壺である。40は壺の頸部で7条の三角突帯が巡る。41～49は甕あるいは壺の底部である。41は厚みのある上げ底上を呈し、42～46は平底を呈する。47は平底であるが、底部が外に広がることから壺の可能性が考えられる。48は脚付きの甕である。49はレンズ状を呈する。50は器台で、51は外面にケズリの見られる土師器である。

## 7. 住居

調査区内から49軒以上の住居跡が確認されたが、この内掘下げを実施したのは1号住居のみである。そのほかの住居跡に関しては確認のみに留めている。従って、その切り合い関係や、プランなどを明確につかみきれていない。また、4号住居は楕円形を呈し、2軒の円形住居が切りあっている可能性が高いが、プランの確認が出来なかったため、1軒の住居として報告している。また、34、35号住居に関しては埋土が灰褐色土でプランが不鮮明のため円形住居と断言できない。

#### 1号住居跡（第98図、図版15）

調査区北側で検出され、3号甕棺墓、6・27・29号小児用甕棺墓、5号石棺墓を切る。平面形は方形を呈し、確認面での規模は東西軸約4.0m、南北軸約3.9m、深さ約5cmを測る。掘下げたのは墳墓にかかる箇所のみであるため、確認できた施設は深さ約20cmの支柱穴2穴のみであった。

#### 出土遺物（第99図）

1～6は甕の口縁部で、1は跳ね上げ状を呈し、2・3は断面逆L字形を呈し、4・5は断面逆L

字形であるが、内側に張り出す。6は鋤先状を呈する壺か高坏か。7～10は底部で、7は厚みのある上げ底を呈し、8は上げ底、9は平底を呈する。10は平底であるが胴部が外に開くことから壺であると考えられる。

その他の住居出土遺物（第99～102図、図版22～24）

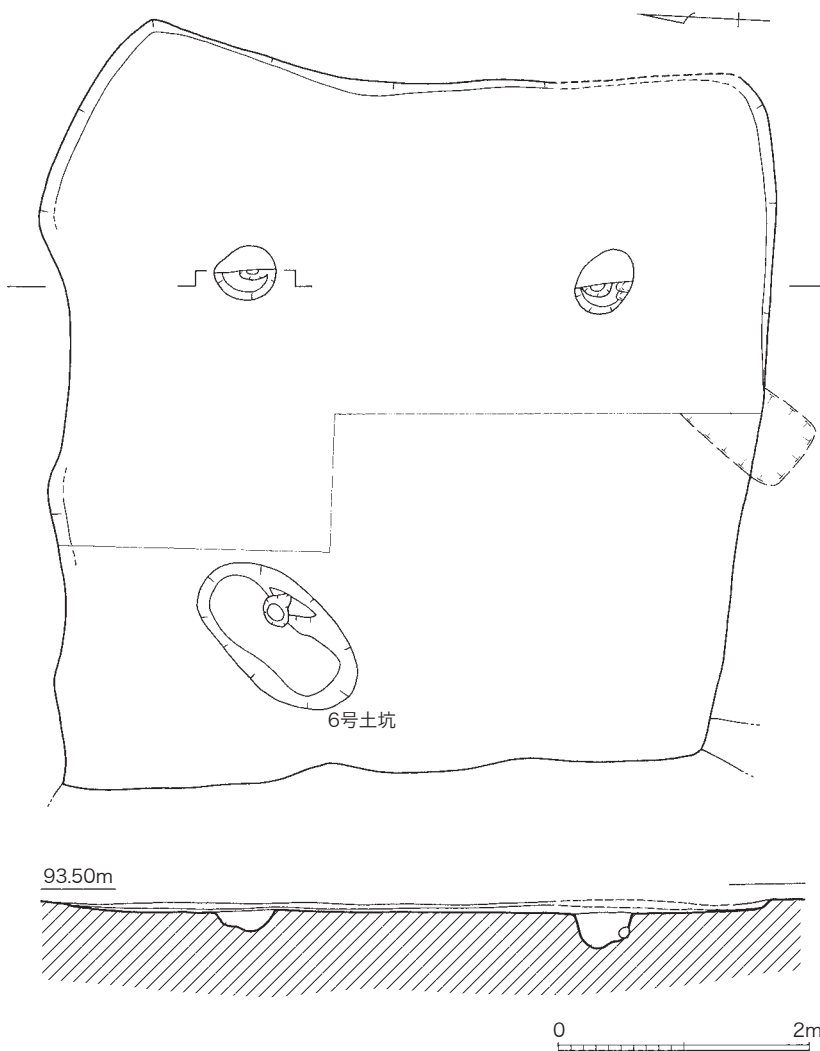
11～124は遺構検出のみに留めた住居の表面採集遺物である。土坑同様、未調査遺構群の時期を検討するための資料としては有効であると考えられるためここで紹介しておく。なお、採集量がバラバラであるため、紙面の都合上遺構別に遺物を配置せず、器種、器形ごとに区分けして説明を加える。

11～52は甕である。11～16は断面コの字状、三角形状、逆L字形を呈する。17～31は断面くの字状あるいは逆L字形を呈する甕である。17～23は明瞭に屈曲し、頸部が外に開くものが多いのに対し、24～31は屈曲が緩やかである。32は鋤先状口縁部を呈する。33・34はくの字に屈曲し、口縁部が比較的長く上方に立ち上がり、頸部に三角突帯を巡らせる。35～51はくの字状に屈曲し上方に立ち上がる甕の一群である。35・36は長胴甕で底部は平底を呈する。37～40も同様の器形を呈する。42～51は小型の甕である。42・43は頸部が小さく窄まり43は小さく外反する。底部はレンズ底を呈する。44～51は口縁部が短く、胴部がやや張り出す。47は底部がレンズ状を呈する。52は小型丸底壺の口縁部か。

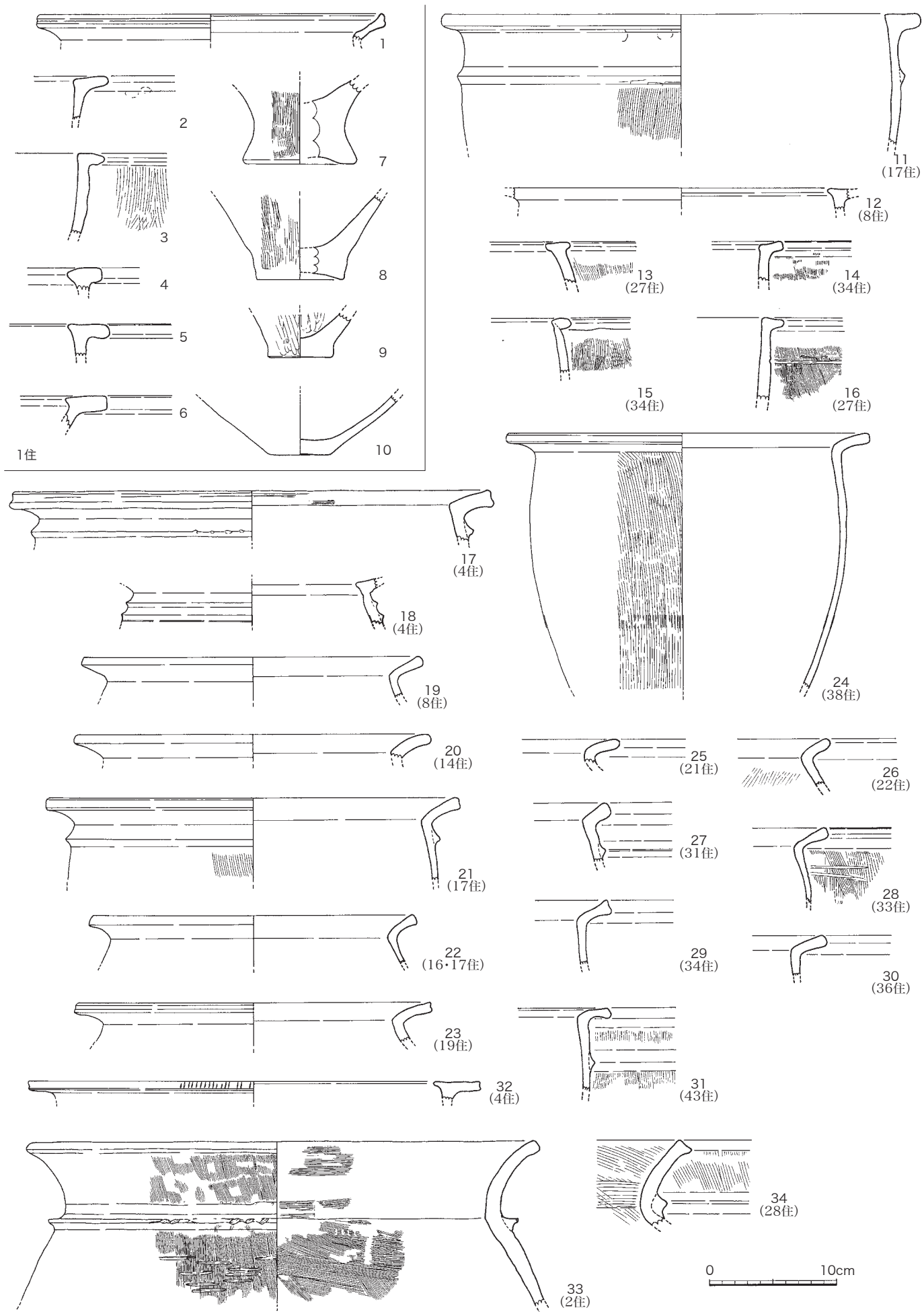
53～93は甕あるいは壺の底部である。53は明瞭な上げ底を呈し、54は薄い上げ底、55～

59は若干厚めの上げ底状を呈する。60～62は平底を呈し、63～69は薄めの平底を呈する。70～72は平底であるが、胴部が外に張出すことから壺と想定される。73は薄めで底径の大きい平底。74～76は平底で胴部が外に張り出す小型の壺か。77～83はレンズ状を呈し、84～89はレンズ気味の丸底を呈する。90は筒状の器形を呈する底部で、91はミニチュア土器の底部か。92は甕もしくは鉢の底部か。93は脚付きの甕底部である。

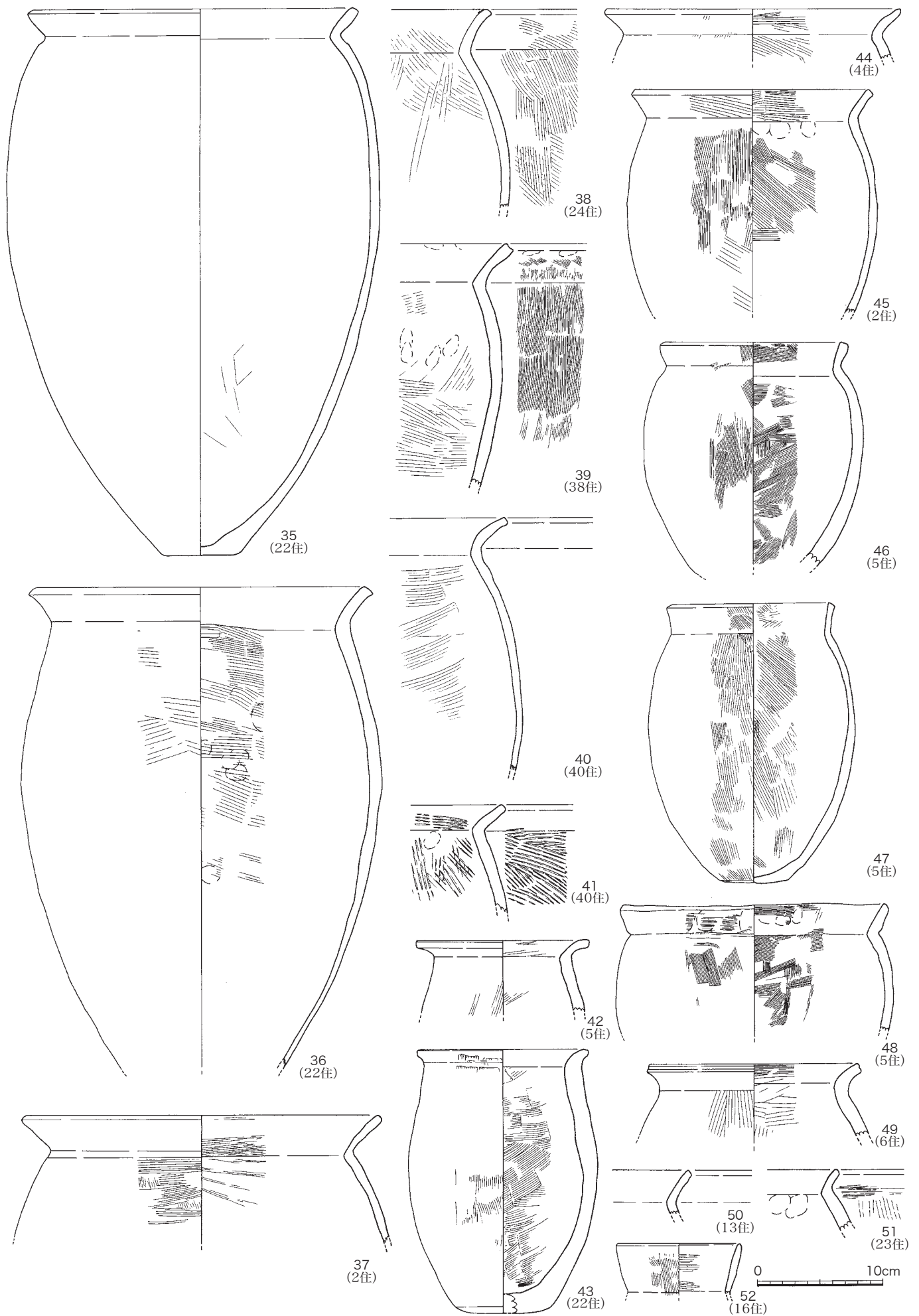
94～102は壺である。94は鋤先状口縁を呈し、95～99は複合口縁壺である。100は袋状口縁壺で、丹塗りが施される。101は壺の頸部である。102は長頸壺で、底部は平底を呈する。103～106は高坏である。103は口縁部が外反し、脚部に穿孔が施される。104



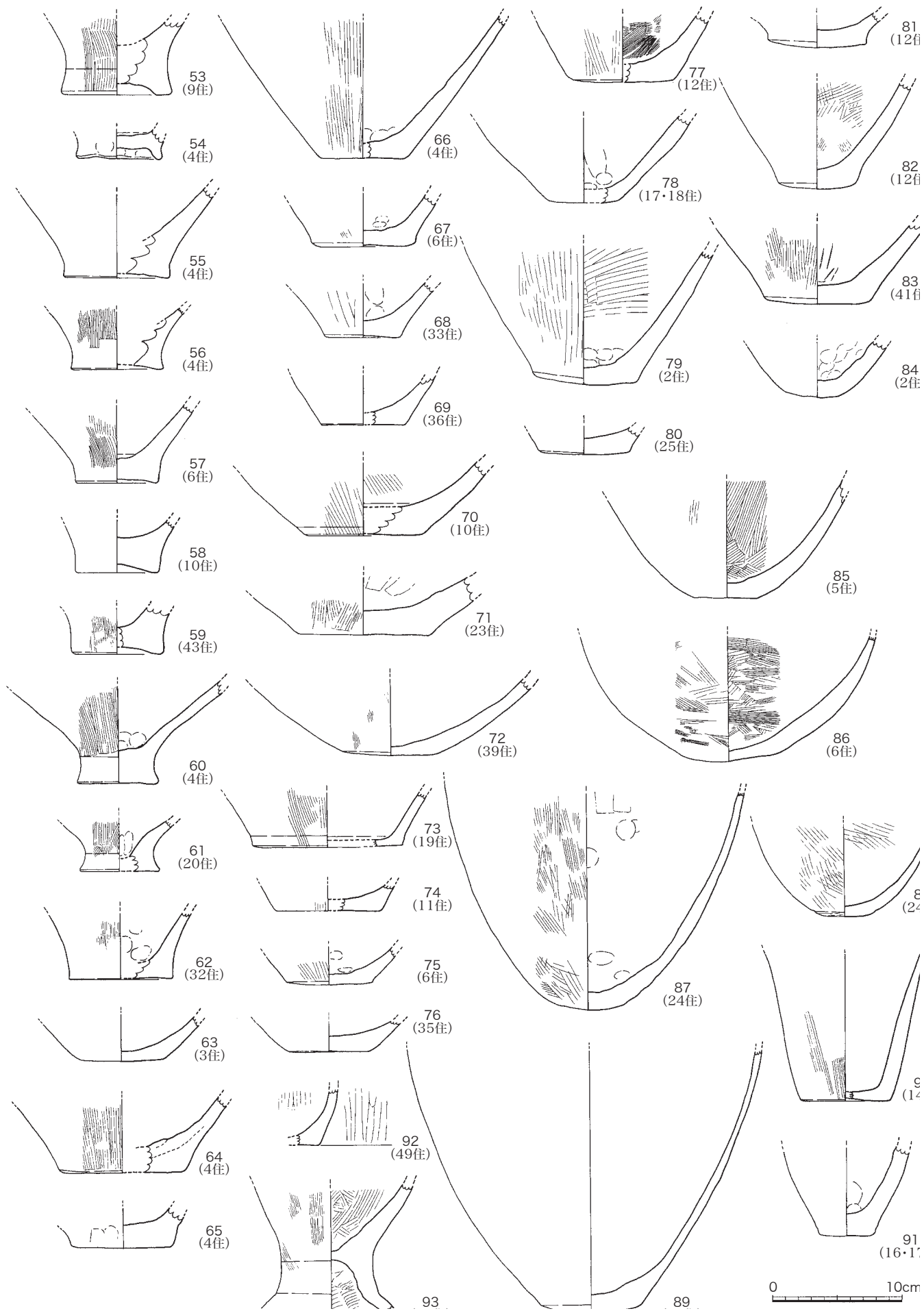
第98図 1号住居実測図 (1/60)



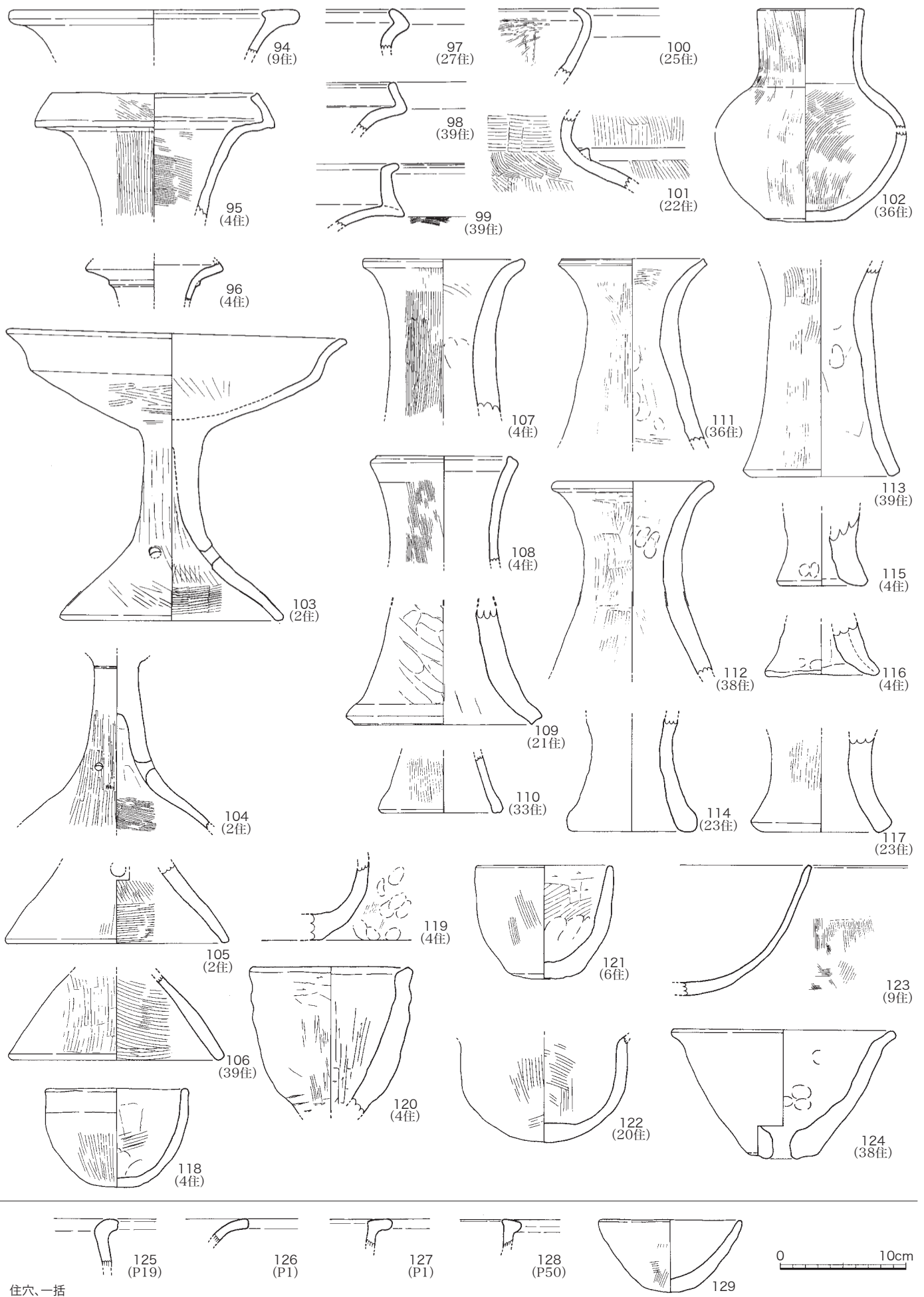
第 99 図 住居出土遺物実測図① (1/4)



第 100 図 住居出土遺物実測図② (1/4)



第101図 住居出土遺物実測図③ (1/4)



第102图 住居出土遺物実測图④、柱穴出土遺物実測图(1/4)

～106は脚部で穿孔が施される。107～112は器台である。111～113は最もしる位置が上部にくる。114～117は支脚か。内外面共にナデが残り調整が荒い。118～123は鉢である。全体的に小型丸底のものが多い。120は鉢もしくは小型の甕か不明なものである。124は甕と考えられる。

## 8. その他の遺構と遺物

### 柱穴等出土遺物 (第102図)

ここでは柱穴及び表土より採集した遺物について説明する。125はP19より出土した甕である。126、127はP1より出土した甕の口縁部で、128はP50より出土した甕である。129は表土中より採集した鉢である。

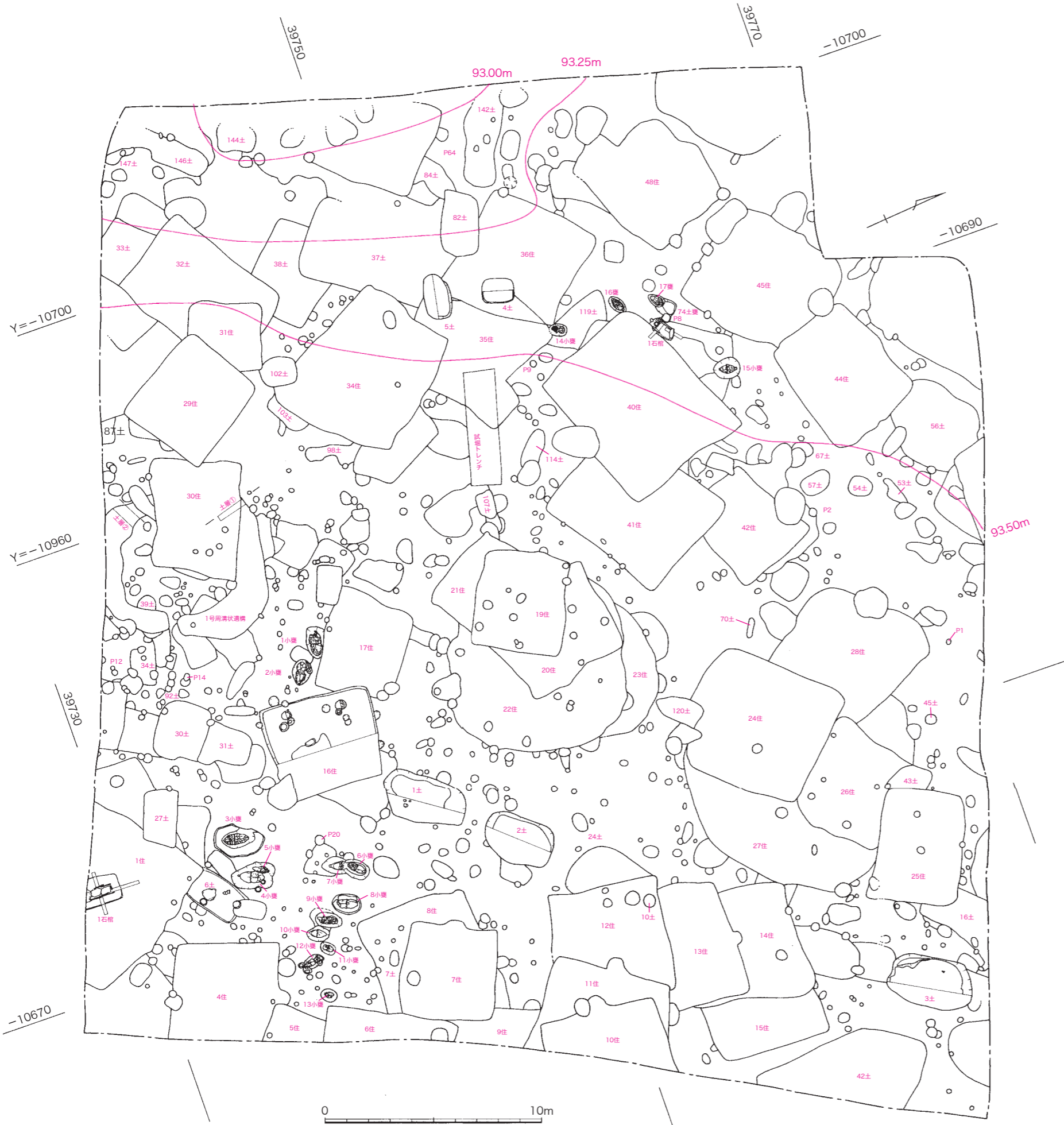
### 石器、土製品 (第103図)

1～5は石庖丁である。1・2は背部が外湾し、3・4は背部が直線的である。6は石剣である。7は抉入石斧片、8は蛤刃石斧、9は砥石である。10は石鏃で、11・12は土錘である。



第103図 出土石器実測図 (2/3、1/2)





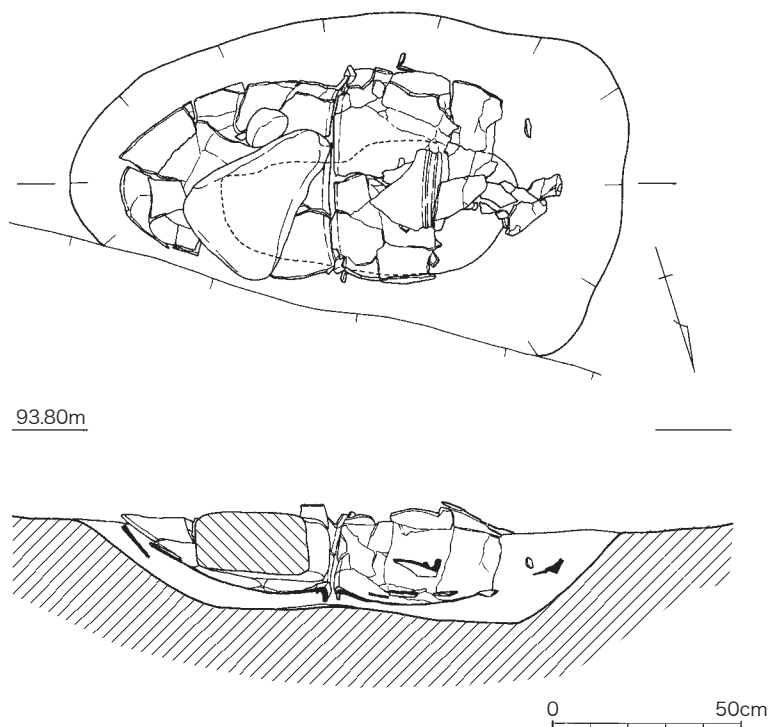
第 104 図 B-2 区遺構配置図 (1/200)

## 第4章 B-2 区の調査の内容

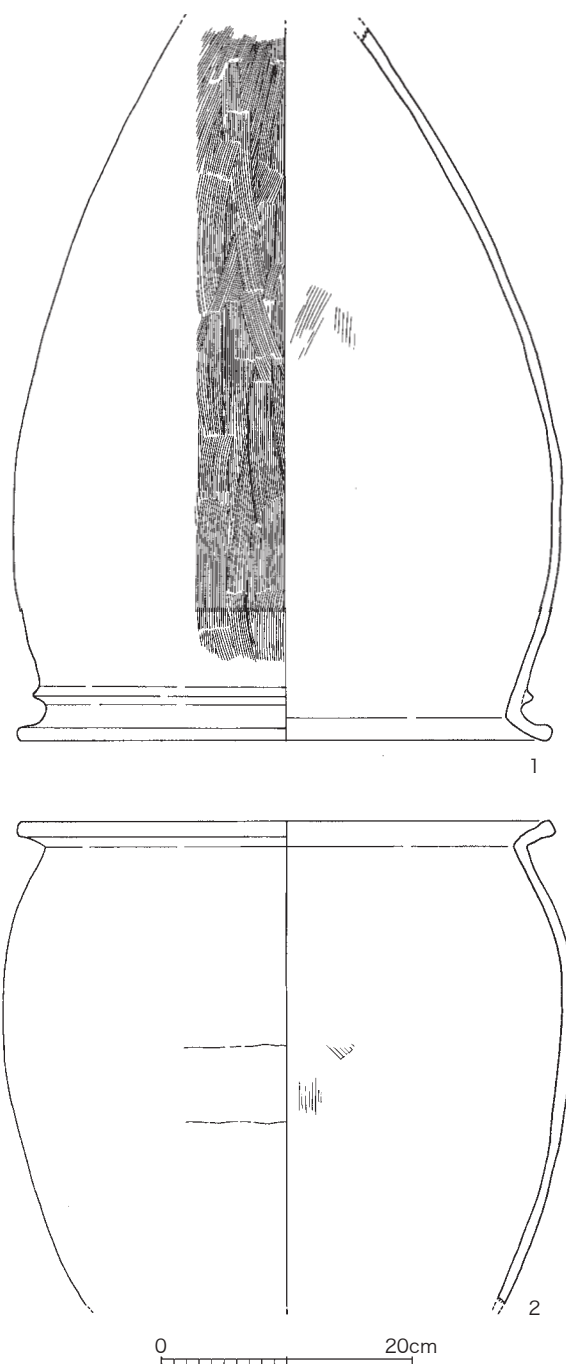
### (1) 調査の内容 (第104図)

調査区は大肥工区の中でも南端にあたり、大肥川が大きく蛇行する沖積地上に位置し、南側にB-1区が隣接している。調査は盛土工法のため、墳墓が多く見られる区域を中心に南北約41m、東西約47mの調査区を設定して実施した。調査区内での標高は約93mを測り、西側に向かって緩やかに傾斜しており、地山は淡黄褐色の砂礫層で、埋土は黒褐色土、灰褐色土が多く、小児用甕棺墓には暗黄褐色土が多く見られた。北側にはさらに遺構が広がっているものと考えられる。

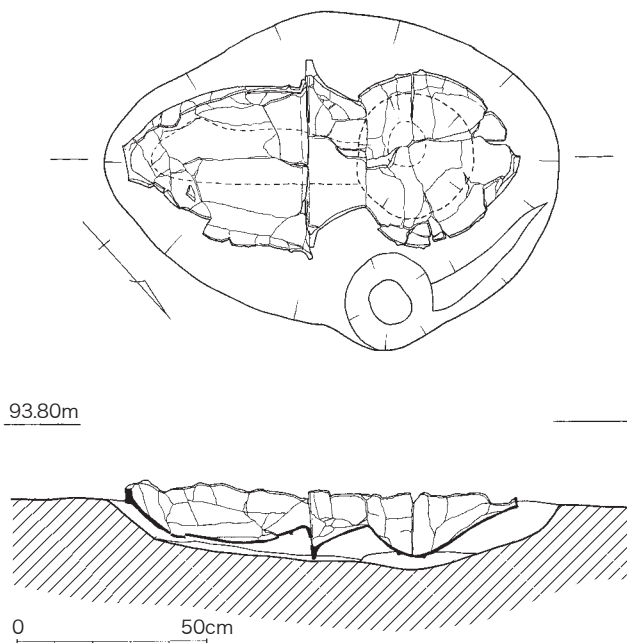
水田基盤土直下より検出された遺構のうち、掘下げは墳墓群を中心として実施し、その他の生活遺構などに関しては遺構面での確認にとどめている。遺構密度が非常に高いため、確認にとどめた遺構に関してはプラン、切り合い関係などを十分に把握できていない。掘下げた遺構の内訳は小児用甕棺墓17基、石棺墓2基、土坑5基、竪穴住居1軒である。そのほか、確認に留めたものとして、少なくとも竪穴住居51軒、周溝状遺構1基、土坑140基、柱穴多数がある。なお、1～4、28～32号土坑に関しては、長形状プランが列状に並んでいることから、木棺墓や土壙墓の存在を想定して一部遺構をトレンチにて掘下げたが、墳墓であるとの確証を得ることが出来なかった。そこでこれらに関しては土坑として取り扱っている。また、調査区は調査後に埋め戻す予定であったことから、破壊を受けない石



第105図 1号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



第106図 1号小児用甕棺墓実測図 (1/6)



第 107 図 2号小児用甕棺墓実測図 (1/20)

棺墓の掘方及び棺材を完掘することは避けてそのまま埋め戻した。

上記記載の遺構数はこれまでの概要報告とは異なるが、本報告を正式な報告とする。

## (2) 遺構と遺物

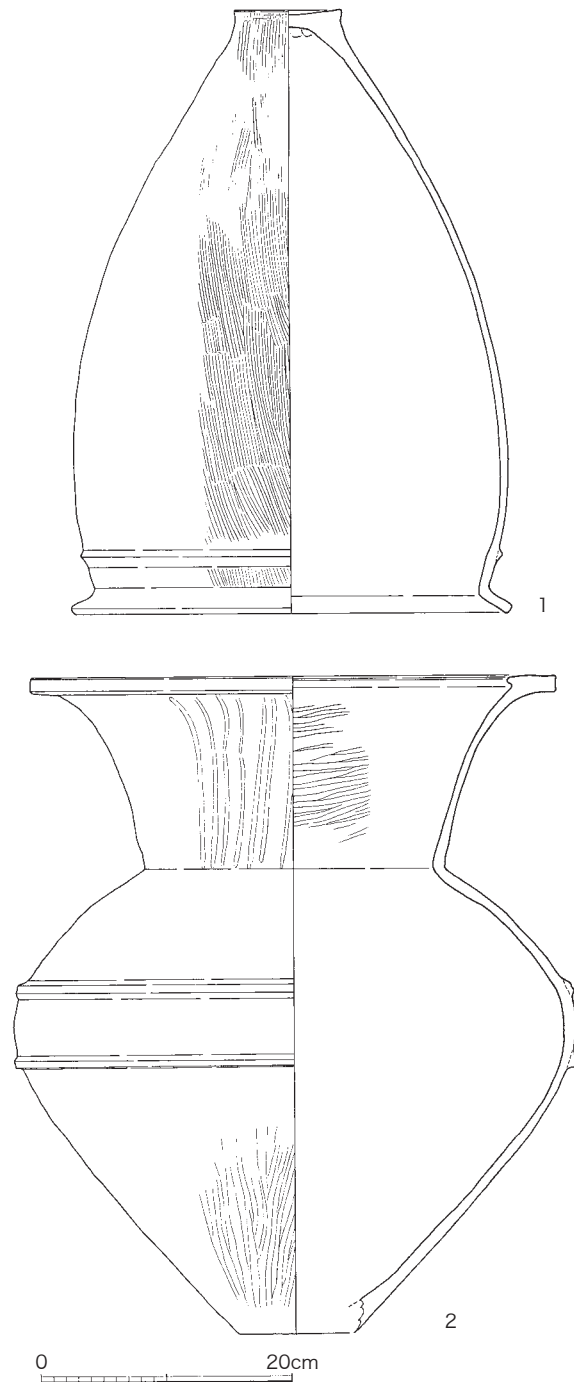
### 1. 小児用甕棺墓

小児用甕棺墓は調査区南東側に集中して作られており、その殆どが竪穴住居、土坑の密集地から離れていた。甕棺墓の埋土は暗黄褐色土のものが多く、その検出には困難を要した。

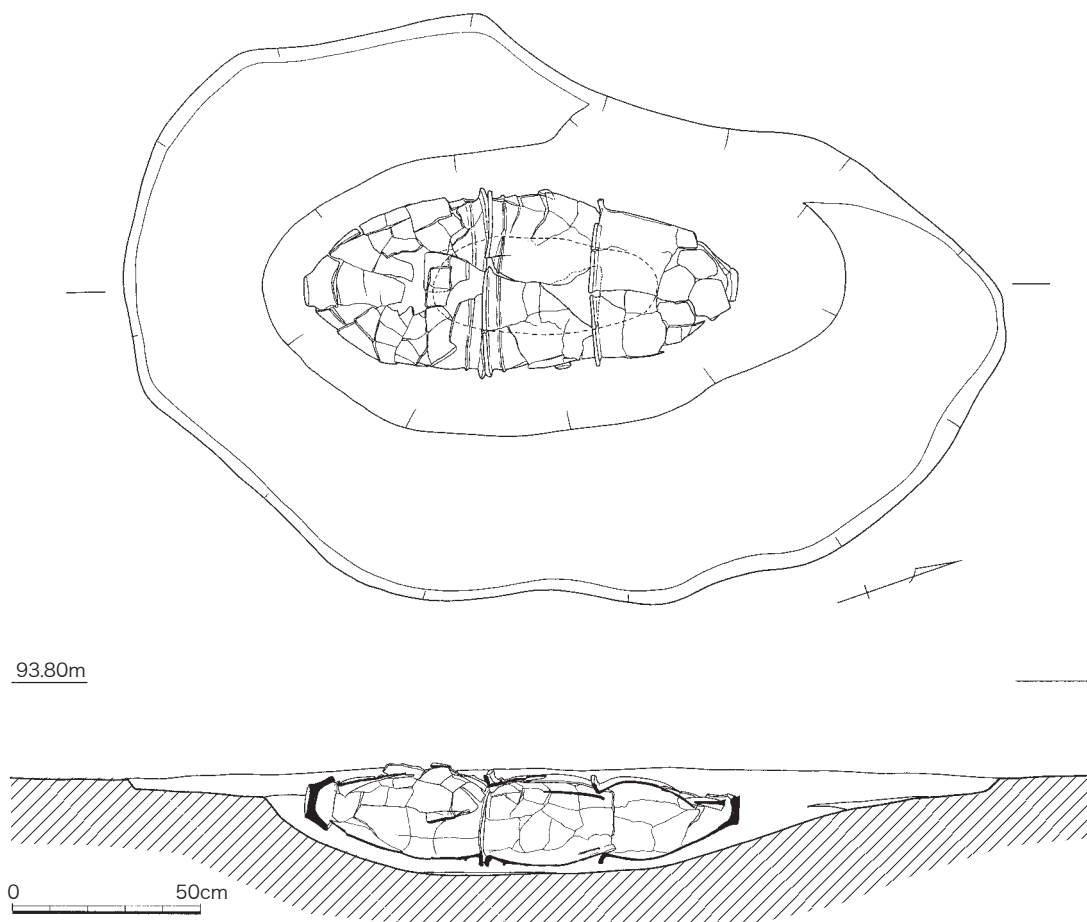
#### 1号小児用甕棺墓 (第 105・106 図、図版 27・32)

調査区南側に位置し、2号小児用甕棺墓に近接する。上面は一部削平を受けており、上甕内には大振りの石が崩落していた。この石は当初墓標などの存在も考えたが、上面の削平が著しいことから、水田形成時に崩落した石と考えられ、墓標と断定することは出来なかった。墓壙は楕円形状を呈し、確認面での規模は、東西軸約 150cm、南北軸約 90cm、深さ約 25cm を測る。上下甕ともに底部を欠き、接口式の組合せにより埋置され、埋置角度は約 8°、主軸は S73° E を測る。

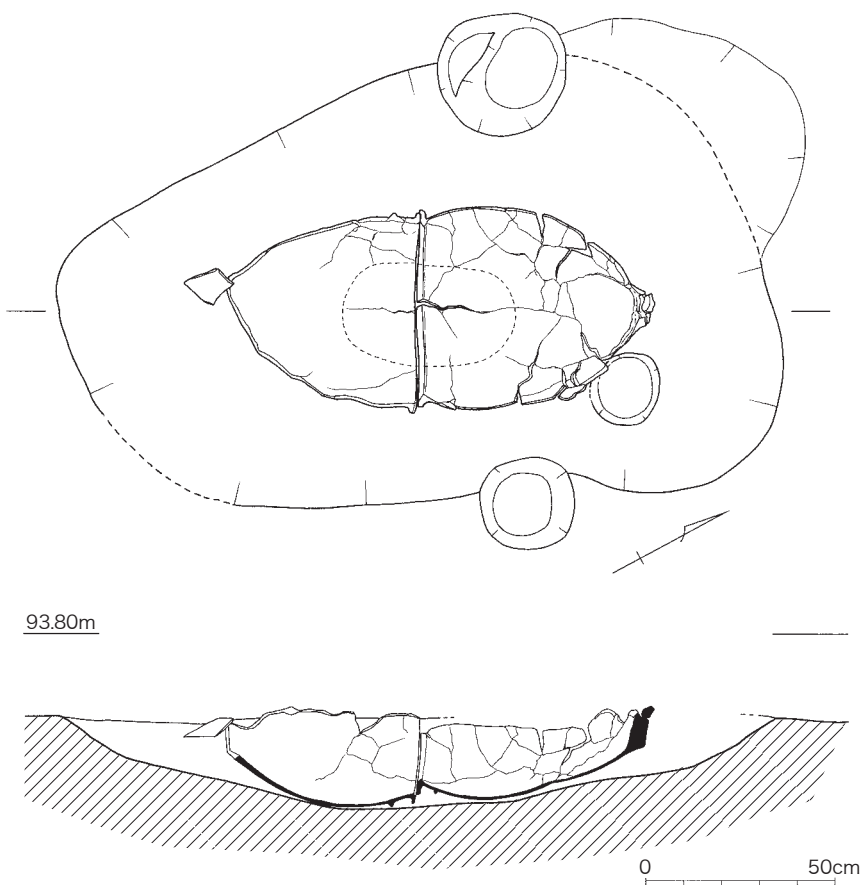
第 106 図 1 は上甕である。口縁部はくの字状を呈し、頸部下面に断面三角形の突帯が巡る。胴部はやや張り出し、外面には縦ハケが残る。2 は下甕で、口縁部はくの字を呈し、胴部はやや張り出す。外面ナデ、内面には縦ハケが残る。



第 108 図 2号小児用甕棺実測図 (1/6)



第109図 3号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



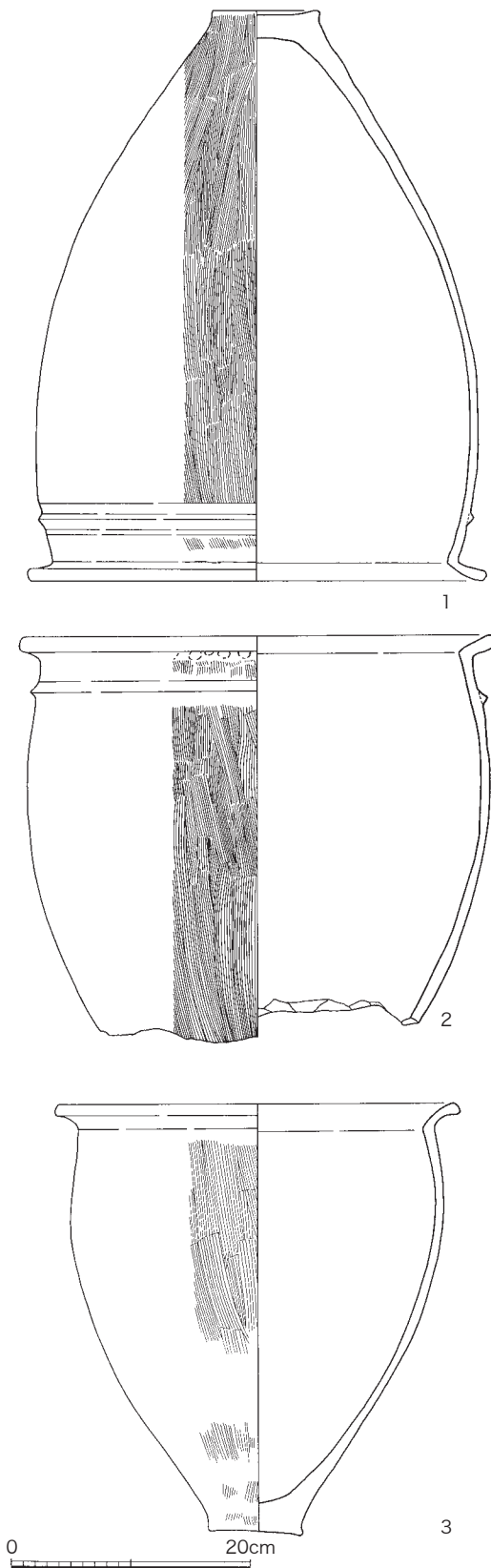
第110図 4号小児用甕棺墓実測図 (1/20)

### 2号小児用甕棺墓

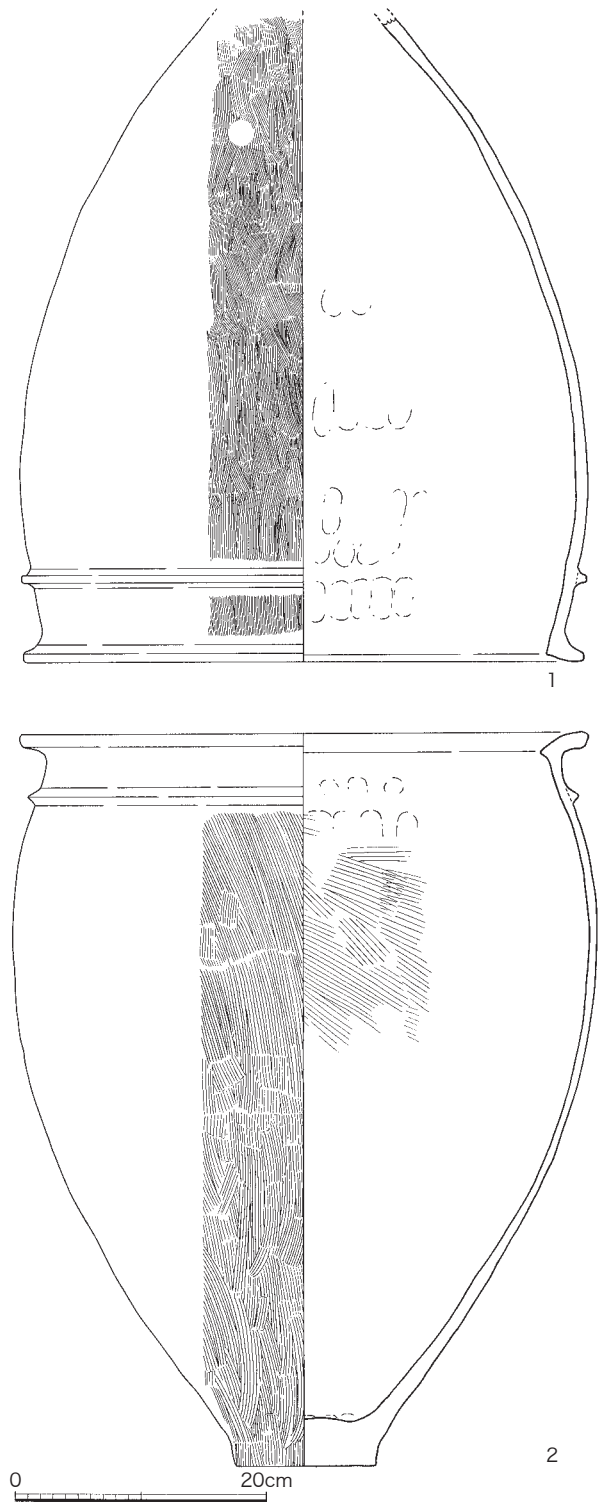
(第107・108図、図版27・32)

調査区南側に位置し、1号小児用甕棺墓に近接する。上面は削平を受けており、墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約120cm、東西軸約90cm、深さ約20cmを測る。接口式にて埋置され、埋置角度は約0°、主軸はS51°Eを測る。

第108図1は上甕で口縁部はくの字状を呈し、頸部やや下面に断面三角形の突帯を巡らせる。胴部は若干張り出し、底部は薄い平底である。外面には縦ハケが残存する。2は下甕として使用された壺で、口縁部は



第 111 图 3 号小児用甕棺实测图 (1/6)



第 112 图 4 号小児用甕棺实测图 (1/6)

鋤先状を呈し、胴部の張出し部には断面逆台形状の突帯が2条巡る。底部は一部欠損するが、平底を呈するものと想定される。口縁部外面には暗文が施され、底部付近には縦方向のミガキ痕が残存する。

### 3号小児用甕棺墓（第109・111図、図版27・32）

調査区南東側にて検出され、4・5号小児用甕棺墓に近接する。3連棺で、墓壙は不整楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約230cm、東西軸約160cm、深さ約30cmを測り、中央部付近に長軸約150cm、短軸約80cmの掘方を設ける。上甕と中甕は接口式、中甕と下甕は挿入式にて埋置され、埋置角度は約1°、主軸はS19°Wを測る。

第111図1は上甕で、口縁部はくの字状を呈し、頸部やや下面に断面三角形の突帯を巡らせる。底部は薄い平底で、外面には縦ハケが残存する。2は中甕で、口縁部はくの字状を呈し、頸部やや下面に断面三角形の突帯が巡り、胴部下面にて打ち欠く。外面には縦ハケが残存する。3は下甕で口縁部はくの字状を呈し、底部は平底を呈する。外面には縦ハケが残存する。

### 4号小児用甕棺墓（第110・112図、図版27・32）

調査区南東側にて検出され、5号小児用甕棺墓に切られる。墓壙は不整形を呈し、確認面での規模は南北軸約190cm、東西軸約110cm、深さは約20cmを測る。接口式にて埋置され埋置角度は約0°、主軸はN29°Eを測る。

第112図1は上甕で、口縁部は断面逆L字形状を呈し、内傾する。頸部やや下面には断面逆台形状の突帯が巡る。底部を欠損し、外面には縦ハケ、内面には指オサエが残る。2は下甕で口縁部は断面逆台形状を呈し、内側に若干張出す。頸部やや下面には断面三角形の突帯が巡り、底部は平底を呈する。外面には縦ハケが残り、内面には指オサエ、横ハケが残る。

### 5号小児用甕棺墓（第113・114図、図版27・32）

調査区南東側にて検出され、4号小児用甕棺墓を切っている。当初切合い関係を明確に把握出来なかったため、墓壙の東側を掘りすぎてしまっている。墓壙は隅丸方形を呈し、確認面での規模は南北軸約100cm、東西軸約70cm、深さは約25cmを測る。接口式にて埋置され、埋置角度は約2°、主軸はN36°Eを測る。

第114図1は上甕で口縁部はくの字の跳ね上げ状を呈し、底部は上げ底状である。外面には縦ハケが残る。2は下甕で、1とほぼ同様の器形を呈するが、器高は若干高めであるため、スマートな印象を受ける

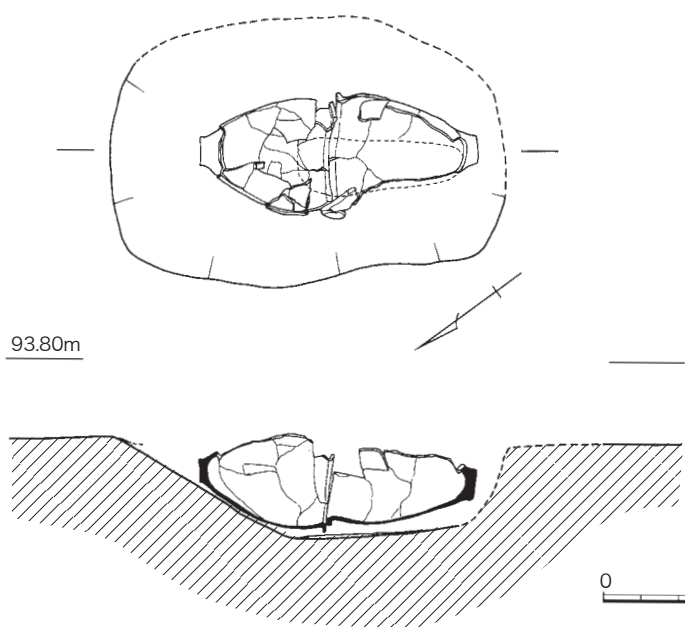
### 6号小児用甕棺墓（第115・116図、図版28・32）

調査区南東側にて検出され、7号小児用甕棺墓を切っている。7号の上甕を破壊しないように作られており、当初7号との切合い関係を明確に把握出来なかったため、南側の掘方を掘りすぎてしまった。墓壙は長楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約120cm、東西軸約80cm、深さ約20cmを測る。接口式にて埋置され、主軸はN48°Eを測る。

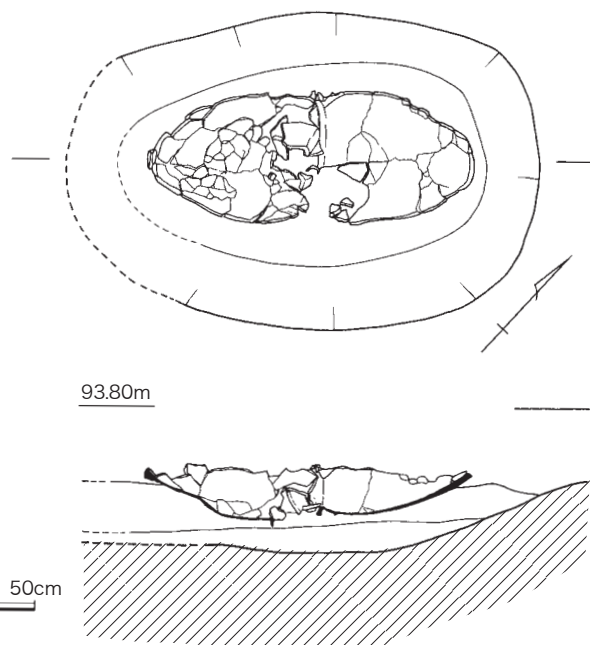
第116図1は上甕で口縁部はくの字状を呈し、頸部やや下面に断面三角形の突帯が巡る。底部は若干上げ底を呈するものと考えられ、外面には縦ハケが残る。2は断面くの字状を呈し、頸部やや下面に断面三角形の突帯が巡る。胴部はやや張出し、外面には縦ハケが残る。

### 7号小児用甕棺墓（第117・118図、図版27・28・33）

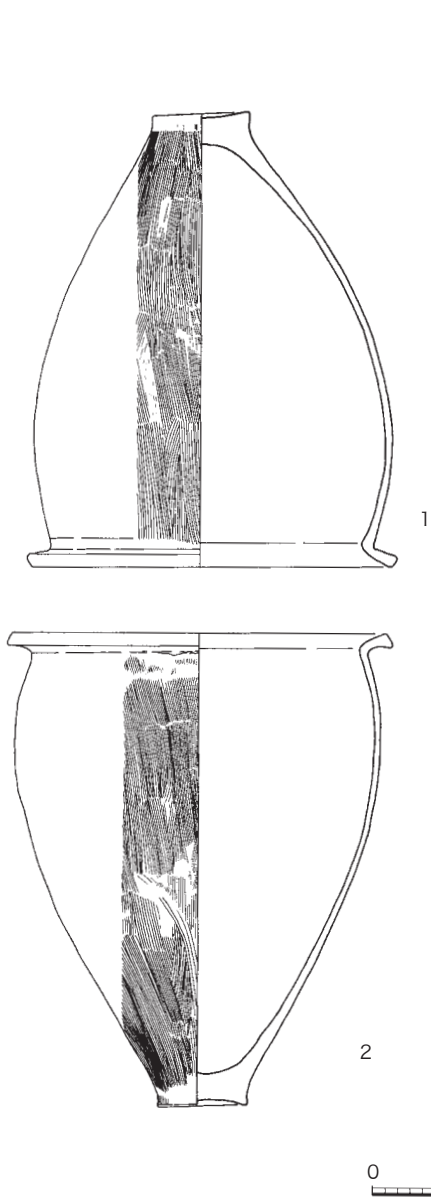
調査区南東側にて検出され、6号小児用甕棺墓に切られる。北側の掘方の一部を掘りすぎてしま



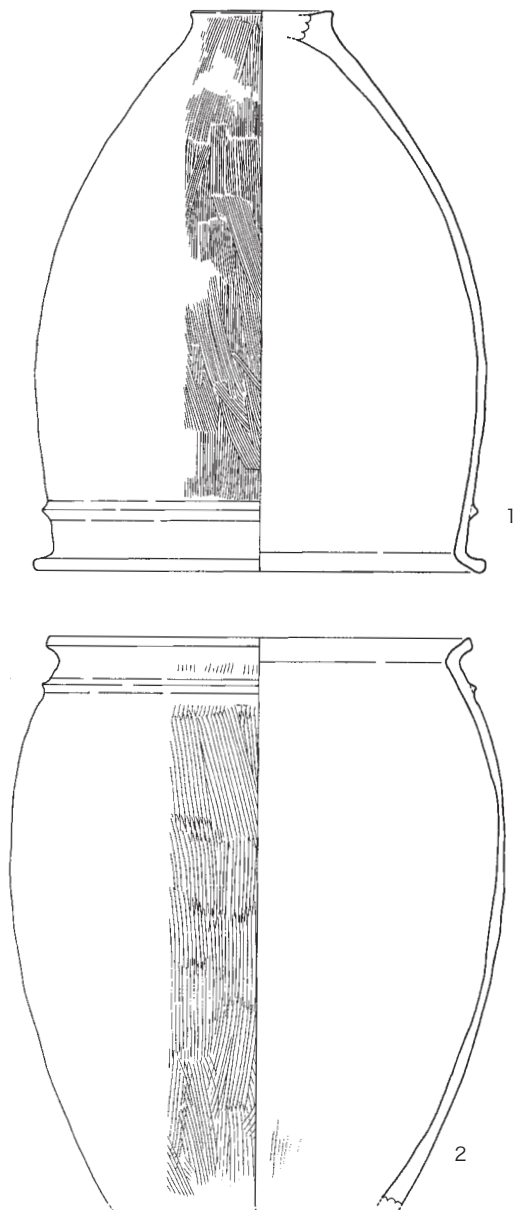
第 113 图 5 号小児用甕棺墓実測图 (1/20)



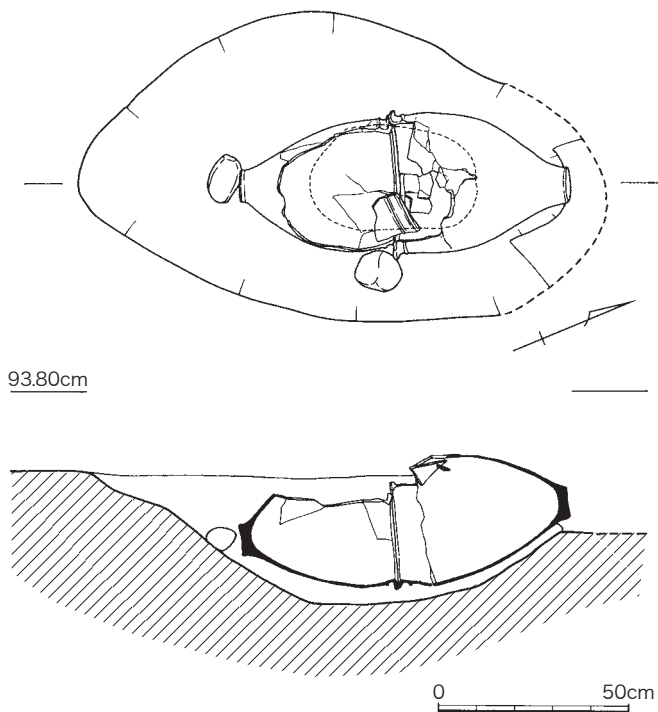
第 115 图 6 号小児用甕棺墓实测图 (1/20)



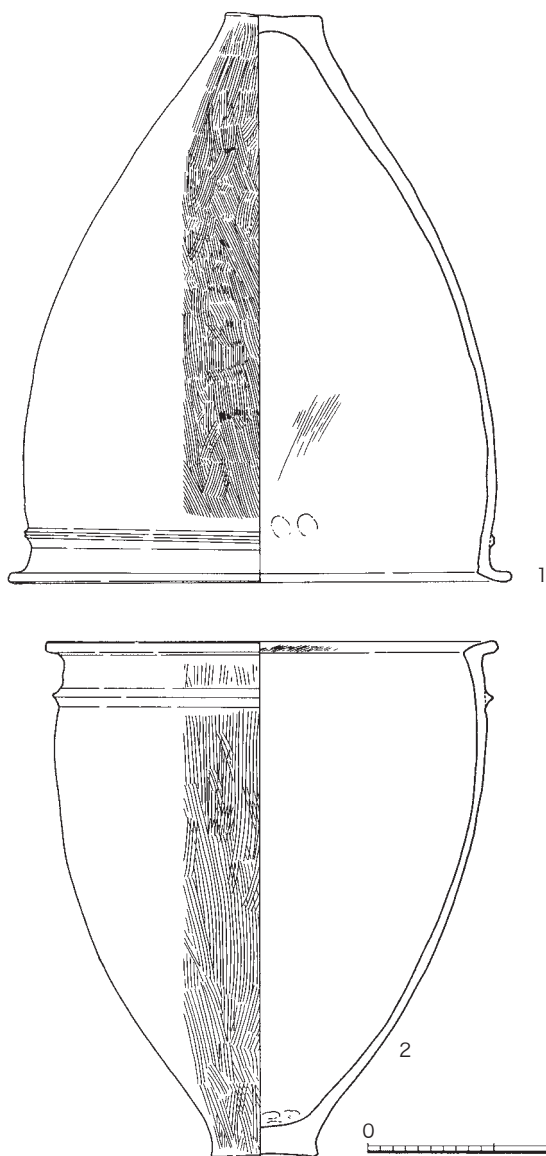
第 114 图 5 号小児用甕棺实测图 (1/6)



第 116 图 6 号小児用甕棺实测图 (1/6)



第117図 7号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



第118図 7号小児用甕棺実測図 (1/6)

っている。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約140cm、東西軸約80cm、深さ約35cmを測る。接口式にて埋置され、埋置角度は約 $6^\circ$ 、主軸は $N22^\circ E$ を測る。下甕の底部付近及び、上下甕の口縁部付近には埋置する際の固定用と思われる小石が据えられていた。

第118図1は上甕で口縁部は断面逆L字形を呈し、内傾する。頸部やや下面には断面逆台形状の突帯が巡り、底部は平底を呈する。外面には目の細かいハケが残る。2は下甕で、口縁部は断面逆L字形を呈し、内傾する。頸部下面には断面三角形の突帯が巡り、底部はやや凹む平底である。外面には縦ハケが残る。

8号小児用甕棺墓 (第119・120図、図版28・33)

調査区南東側にて検出され、9号小児用甕棺墓に近接する。上面の削平が著しいものの、墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約130cm、東西軸約90cm、深さ約15cmを測り、西側に一段テラスを設ける。接口式にて埋置され、主軸は $N28^\circ E$ を測る。

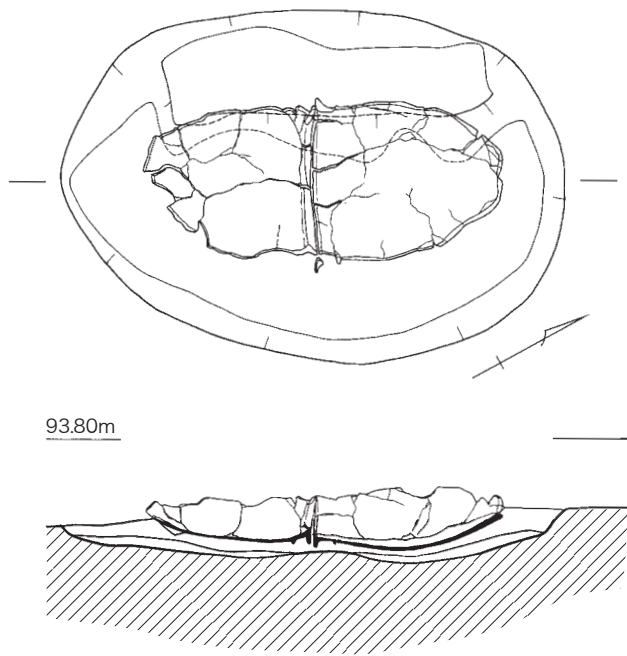
第120図1は上甕で口縁部は断面逆L字形を呈し、大きく内傾する。頸部下面には断面三角形の突帯巡らせ、外面には縦ハケが残る。2は口縁部断面逆L字形を呈し、頸部下面に断面三角形の突帯が巡る。外面には目の細かい縦ハケが残る。

9号小児用甕棺墓 (第121・122図、図版28・33)

調査区南東側にて検出され、8・10号小児用甕棺墓に近接する。上面の削平が著しいものの、墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約120cm、東西軸約70cm、深さ約15cmを測る。3連棺を呈し、上甕と中甕は挿入式、中甕と下甕は接口式にて埋置され、埋置角度は約 $0^\circ$ 前後、主軸は $N34^\circ E$ を測る。

第122図1は上甕で、口縁部は断面逆L字形を呈し、外面には縦ハケが残る。2は中甕で口縁部は断面逆L字形を呈し、内傾する。頸





第119図 8号小児用甕棺墓実測図(1/20)

部下面には断面三角形の突帯が巡り、胴部下面にて打ち欠かれる。外面には縦ハケが施される。3は口縁部断面がコの字状を呈し、内傾する。頸部下面には断面三角形の突帯を巡らせ、外面には縦ハケが施される。

10号小児用甕棺墓(第123・124図、図版28・33)

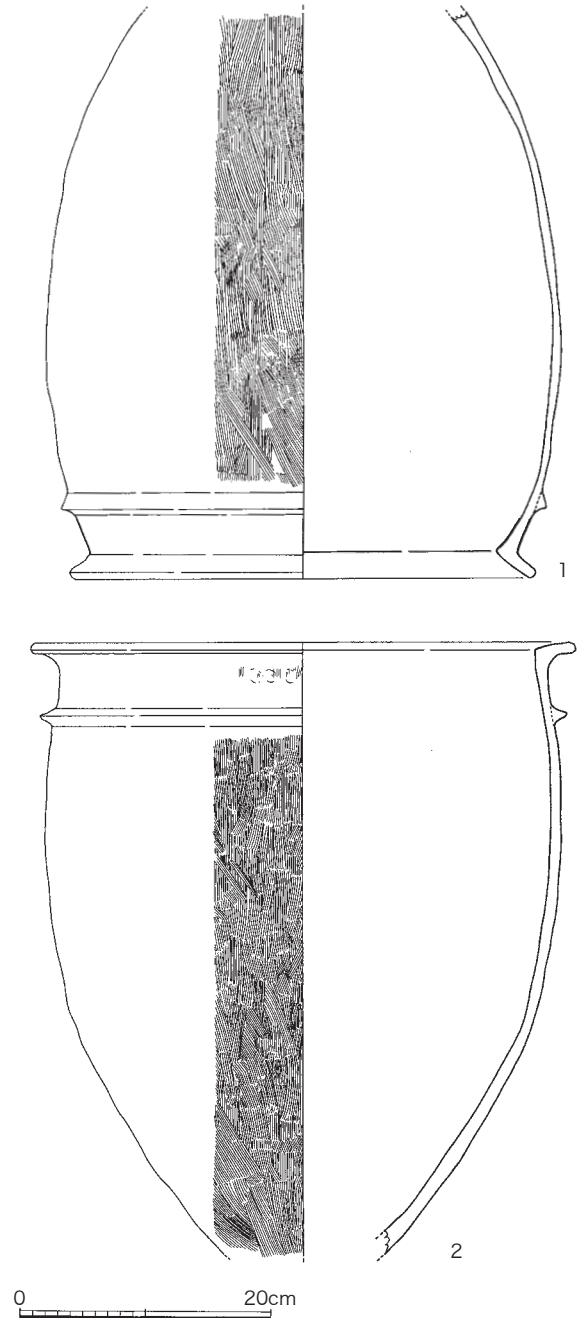
調査区南東側にて検出され、9号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は不整形を呈し、確認面での規模は南北軸約100cm、東西軸約75cm、深さ約20cmを測る。接口式にて埋置され、埋置角度は約5°、主軸はN29°Eを測る。

第124図1は上甕で口縁部は断面三角形の小さく内側に張出す。頸部下面には断面三角形の突帯を巡らせ、底部は上げ底を呈する。外面には縦ハケが残る。2は口縁部断面逆L字状を呈し、頸部下面に断面三角形の突帯が巡り、底部は上げ底を呈する。外面にはやや目の粗い縦ハケが残る。

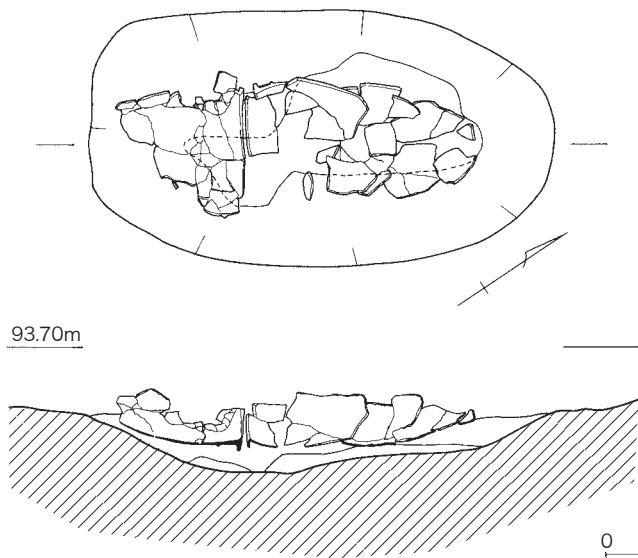
11号小児用甕棺墓(第125・126図、図版28・33)

調査区南東側にて検出され、10号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は隅丸方形を呈し、確認面での規模は南北軸約70cm、東西軸約50cm、深さ約15cmを測る。上半部の削平が著しく上甕は破片が残存するのみで、推測される主軸はN45°Eを測る。

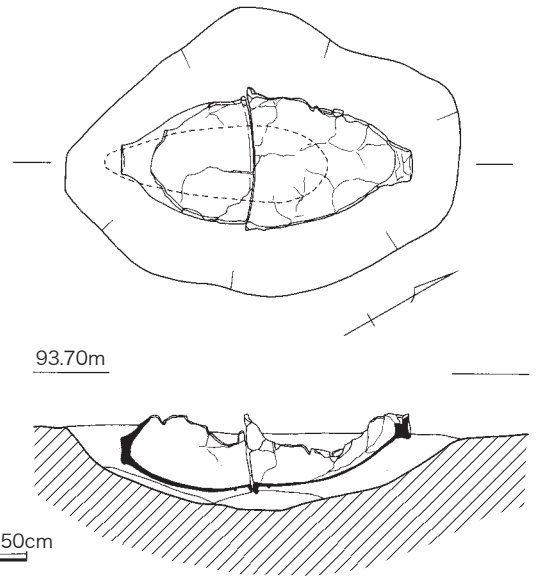
第126図1は上甕で口縁部は断面逆L字状を呈し、頸部下面には断面三角形の突帯を巡らせる。外面には縦ハケが残る。2は口縁部がくの字状を呈し、頸部下面に断面三角形の突帯が巡る。外面には縦ハケが残る。



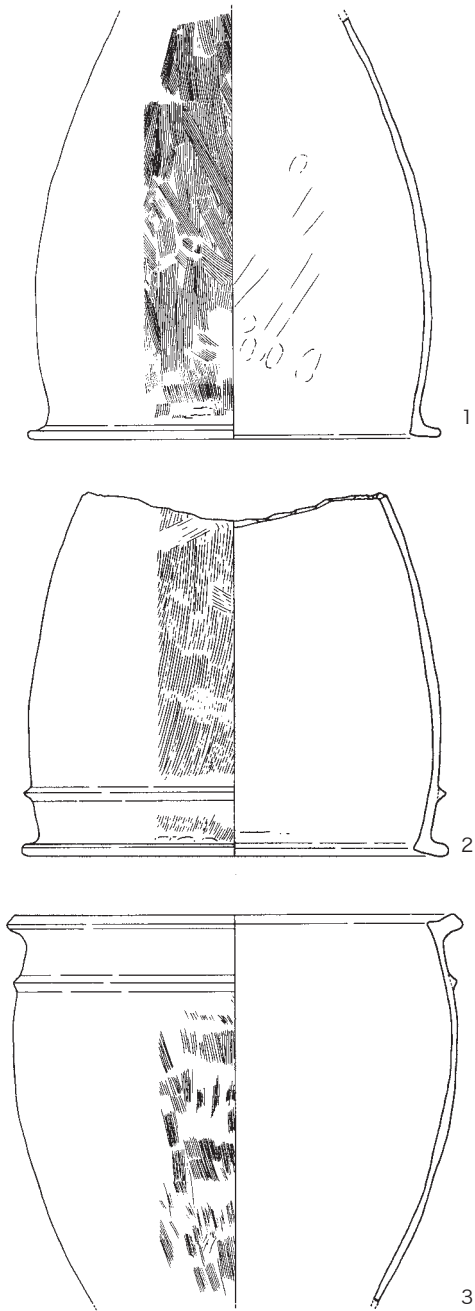
第120図 8号小児用甕棺実測図(1/6)



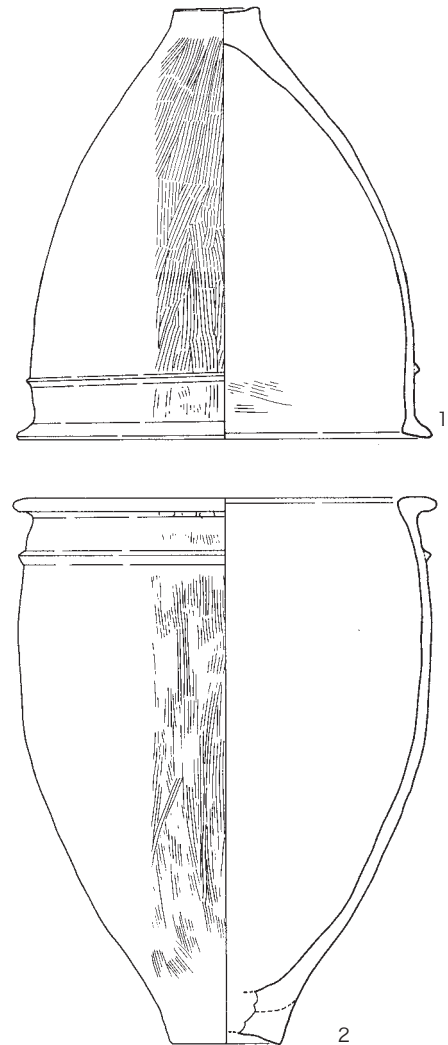
第121图 9号小児用甕棺墓実測图 (1/20)



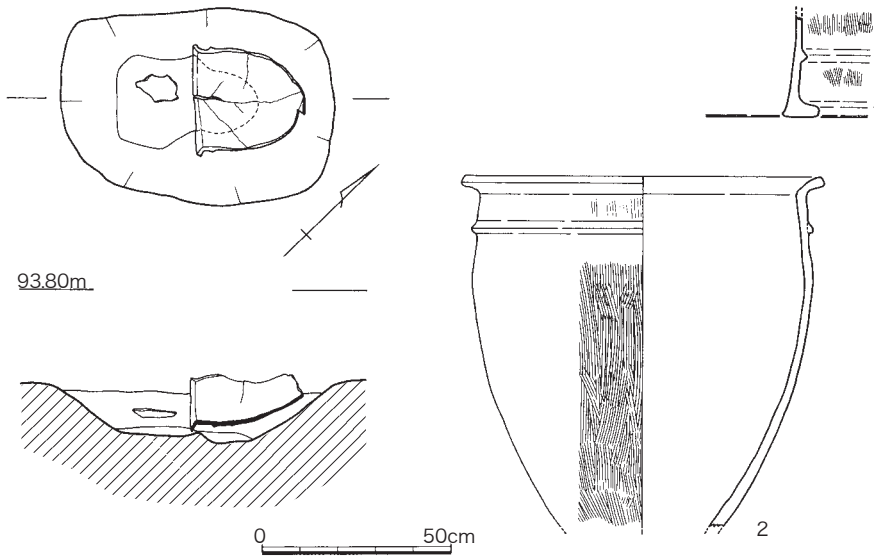
第123图 10号小児用甕棺墓実測图 (1/20)



第122图 9号小児用甕棺实测图 (1/6)

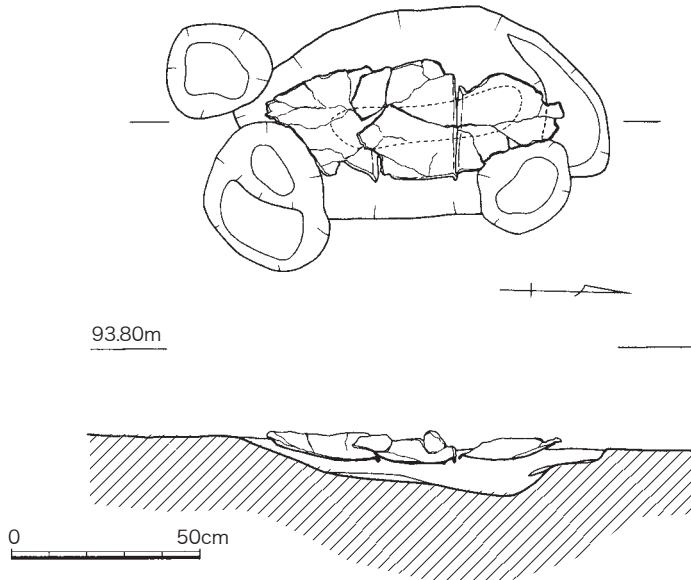
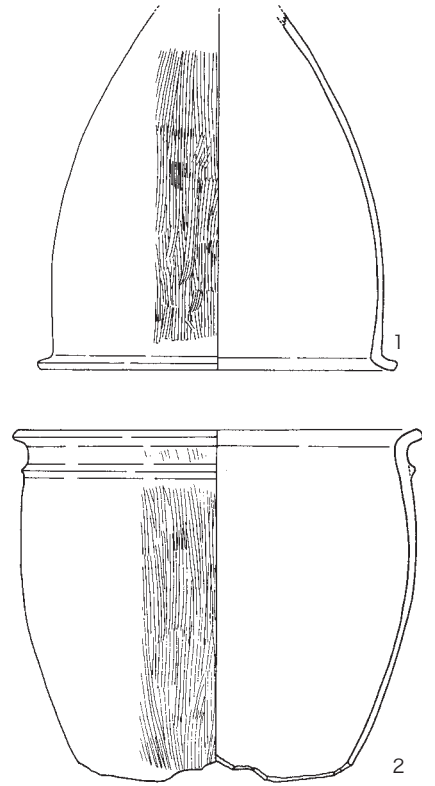


第124图 10号小児用甕棺实测图 (1/6)

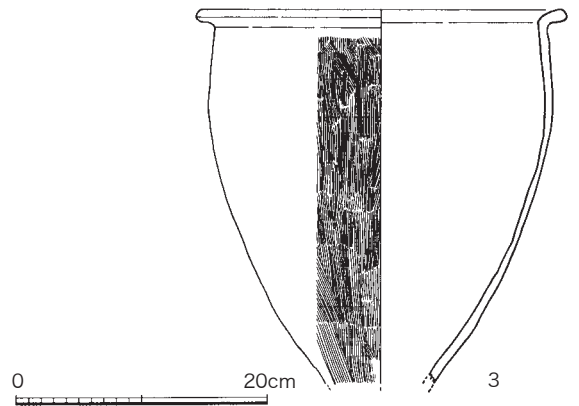


第 125 图 11 号小児用甕棺墓  
実測図 (1/20)

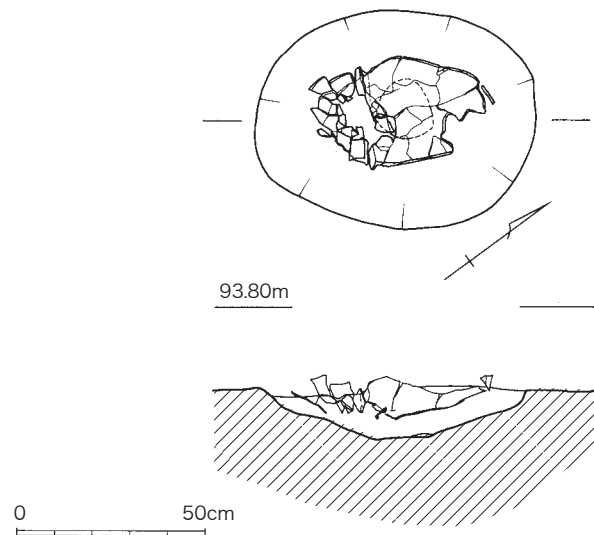
第 126 图 11 号小児用甕棺  
実測図 (1/6)



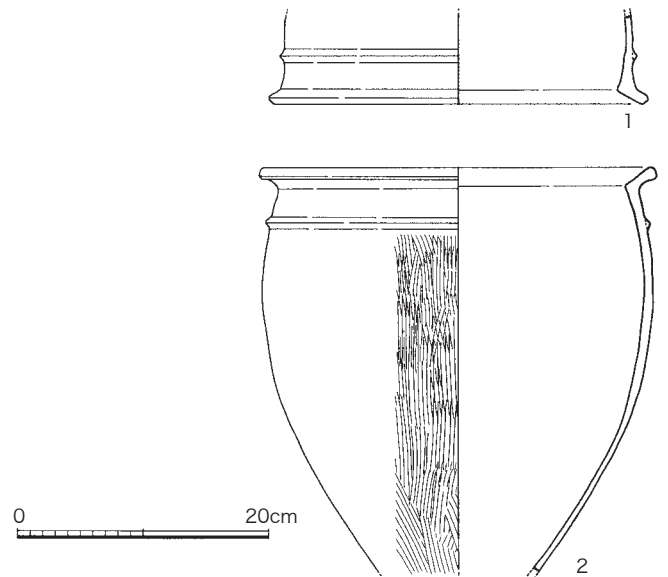
第 127 图 12 号小児用甕棺墓实測図 (1/20)



第 128 图 12 号小児用甕棺实測図 (1/6)



第 129 图 13 号小児用甕棺墓实測図 (1/20)



第 130 图 13 号小児用甕棺实測図 (1/6)

#### 12号小児用甕棺墓（第127・128図、図版28・34）

調査区南東側にて検出され、11号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約100cm、東西軸約55cm、深さ約15cmを測り、北側にテラスを有する。上半部の削平が著しいものの、三連棺を呈し、埋置角度は $0^{\circ}$ 前後、主軸は $N2^{\circ}W$ を測る。

第128図1は上甕で、口縁部は断面くの字状を呈し、外面には縦ハケが残る。2は中甕で口縁部は如意状を呈し、頸部下面には断面三角形の突帯が巡り、胴部下面にて打ち欠かれる。外面には縦ハケが施される。3は口縁部断面が逆L字形を呈し、外面には縦ハケが施される。

#### 13号小児用甕棺墓（第129・130図、図版29・34）

調査区南東側にて検出され、12号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は円形を呈し、確認面での規模は南北軸約75cm、東西軸約60cm、深さ約15cmを測る。上面の削平が著しいものの、残存する甕の状況から接口式にて埋置されるものと推定される。主軸は $N37^{\circ}E$ を測る。

第130図1は上甕で口縁部は断面逆L字状を呈し、内傾する。頸部下面には断面三角形の突帯巡らせる。2は口縁部断面逆L字形を呈し、頸部下面に断面三角形の突帯が巡り、外面にはやや目の粗い縦ハケが残る。

#### 14号小児用甕棺墓（第131・132図、図版29・34）

調査区北西側にて検出され、16号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は南北軸約80cm、東西軸約55cm、深さ約15cmを測る。上面の削平が著しいものの、残存する甕の状況から接口式にて埋置されるものと推定される。主軸は $N32^{\circ}E$ を測る。

第132図1は上甕で口縁部はくの字状を呈する。外面には縦ハケが残る。2は下甕として使用された壺で、口縁部は鋤先状を呈し、端部をM字状に窪ませる。口縁部上面には7本の沈線による4cm程の文様が7cm間隔で施される。暗文によるものを真似たものか。口縁部外面には縦方向の暗文が施される。胴部最大部とその上面には断面三角形の突帯が2条巡る。胴部やや下面には穿孔が施される。

#### 15号小児用甕棺墓（第133・134図、図版29・34）

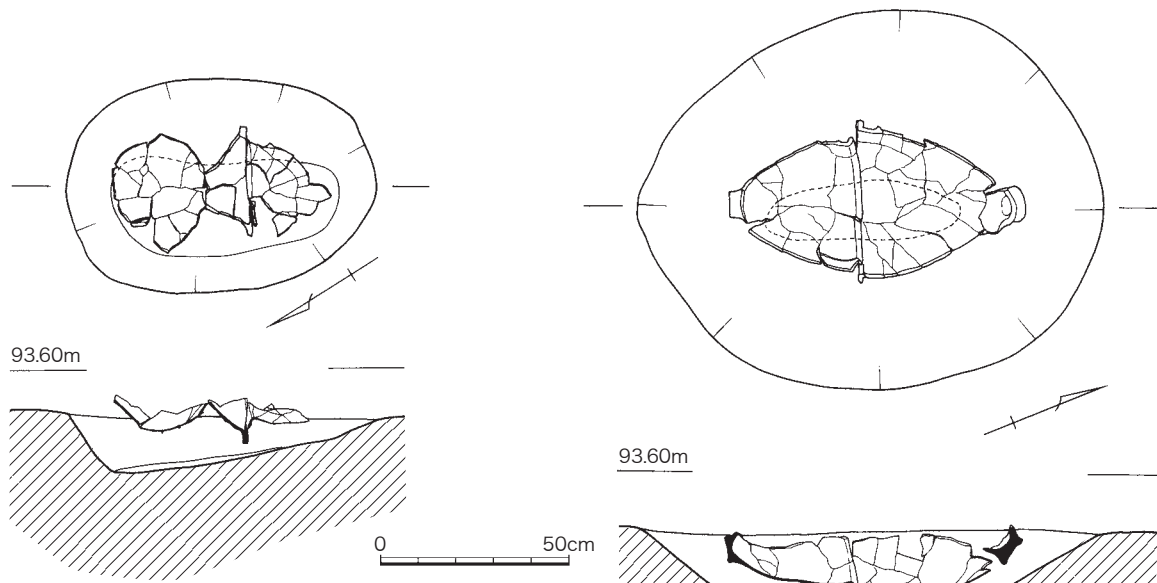
調査区北西側にて検出され、17号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は円形を呈し、確認面での規模は南北軸約120cm、東西軸約100cm、深さ約25cmを測る。上下甕の接点が若干ずれているが、接口式にて埋置されるものと推定される。埋置角度は約 $5^{\circ}$ 、主軸は $S23^{\circ}W$ を測る。

第134図1は上甕で口縁部はくの字状を呈し、頸部下面には断面三角形の突帯巡らせる。底部は上げ底状を呈し、外面には縦ハケが残る。2は下甕で、口縁部は断面逆L字形を呈し、内傾する。頸部下面には断面三角形の突帯が巡り、底部は上げ底である。外面には縦ハケが残る。

#### 16号小児用甕棺墓（第135・136図、図版29・34）

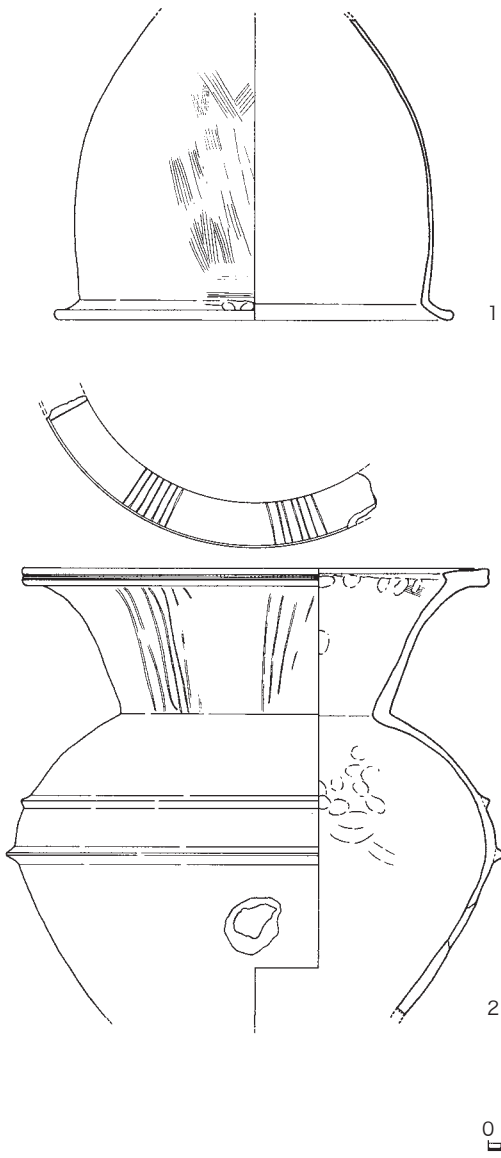
調査区北西側にて検出され、14号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は楕円形を呈し、確認面での規模は東西軸約95cm、南北軸約55cm、深さ約25cmを測る。接口式にて埋置され、埋置角度は約 $6^{\circ}$ 、主軸は $N72^{\circ}E$ を測る。

第136図1は上甕で口縁部はくの字状を呈し、頸部下面には3本の沈線文が施される。底部は上げ底状を呈し、外面には縦ハケが残る。2は下甕で、口縁部はくの字状を呈する。底部は平底で、外面には縦ハケが残る。

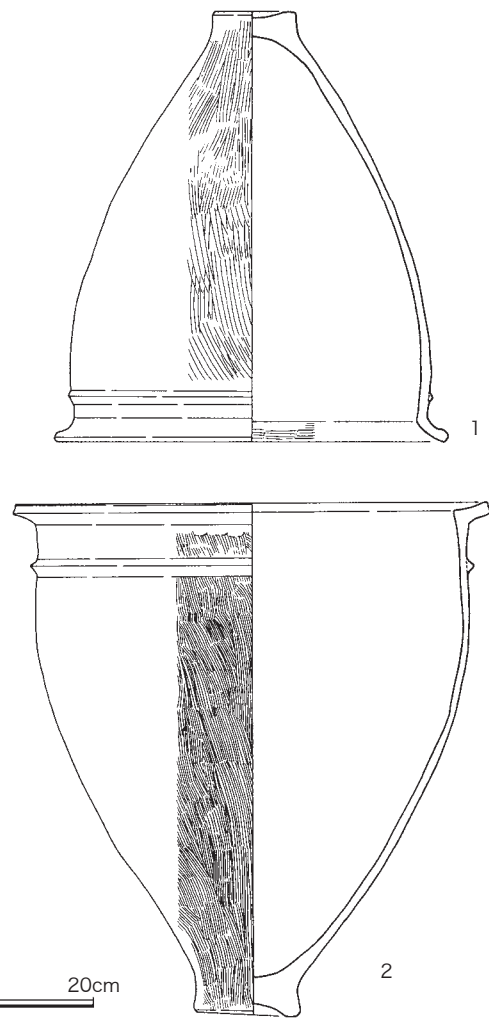


第 131 图 14 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)

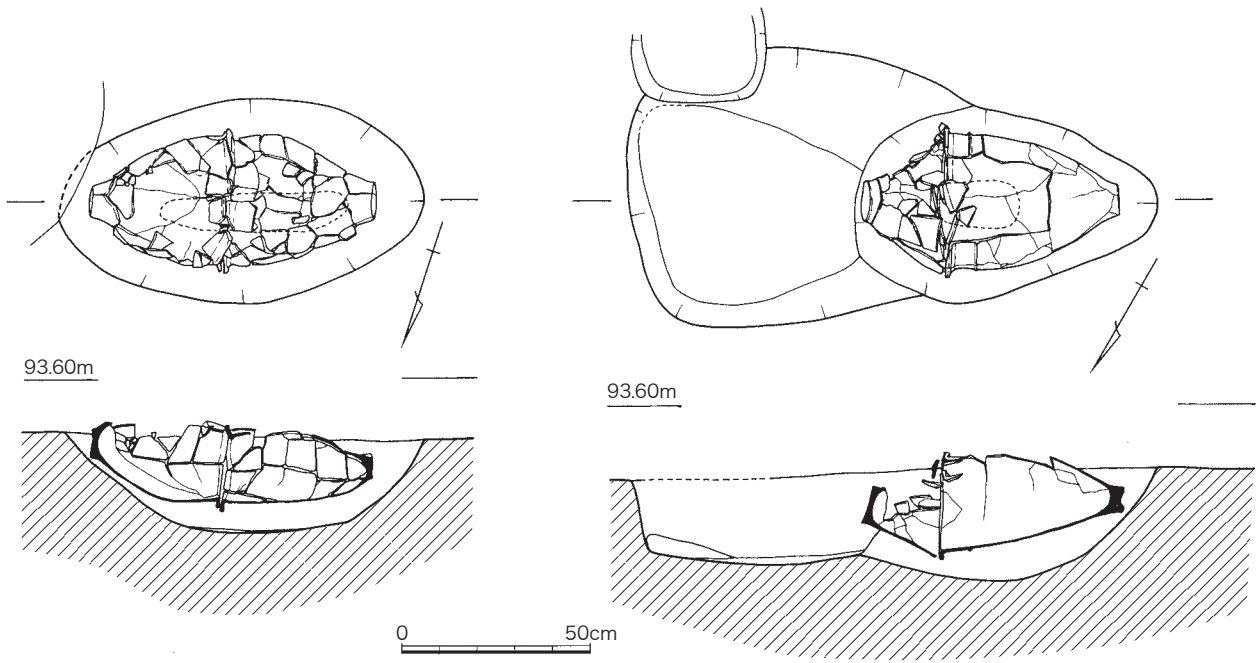
第 133 图 15 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



第 132 图 14 号小児用甕棺実測図 (1/6)

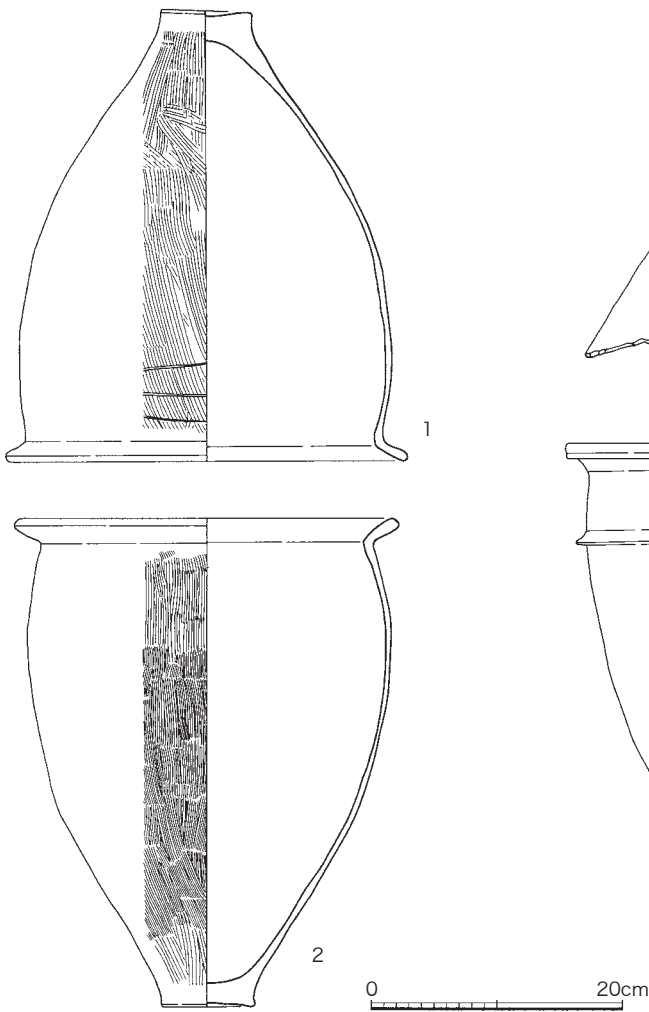


第 134 图 15 号小児用甕棺実測図 (1/6)

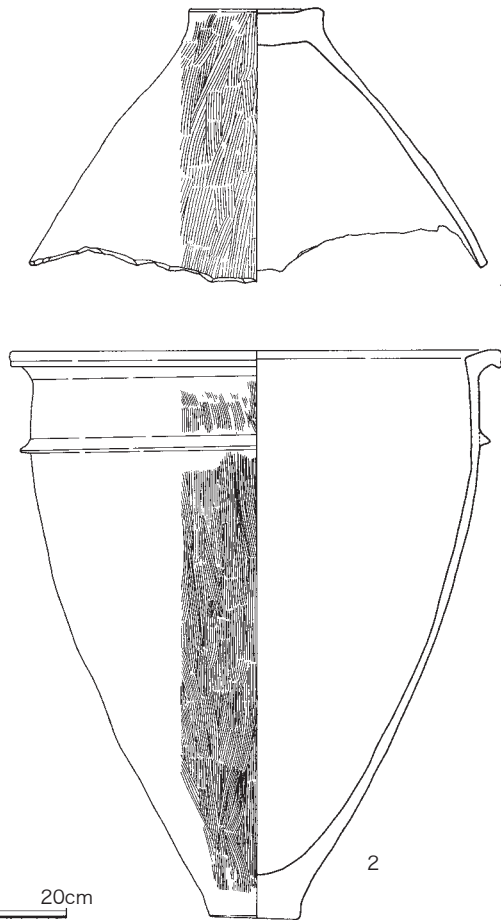


第 135 图 16 号小児用甕棺墓実測图 (1/20)

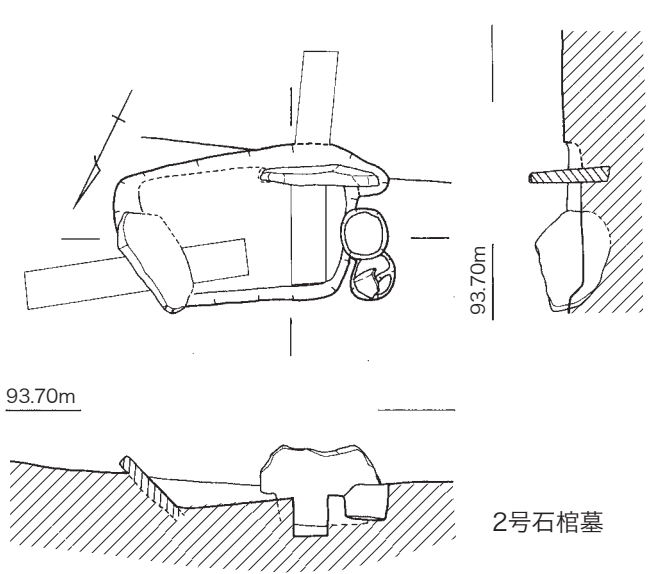
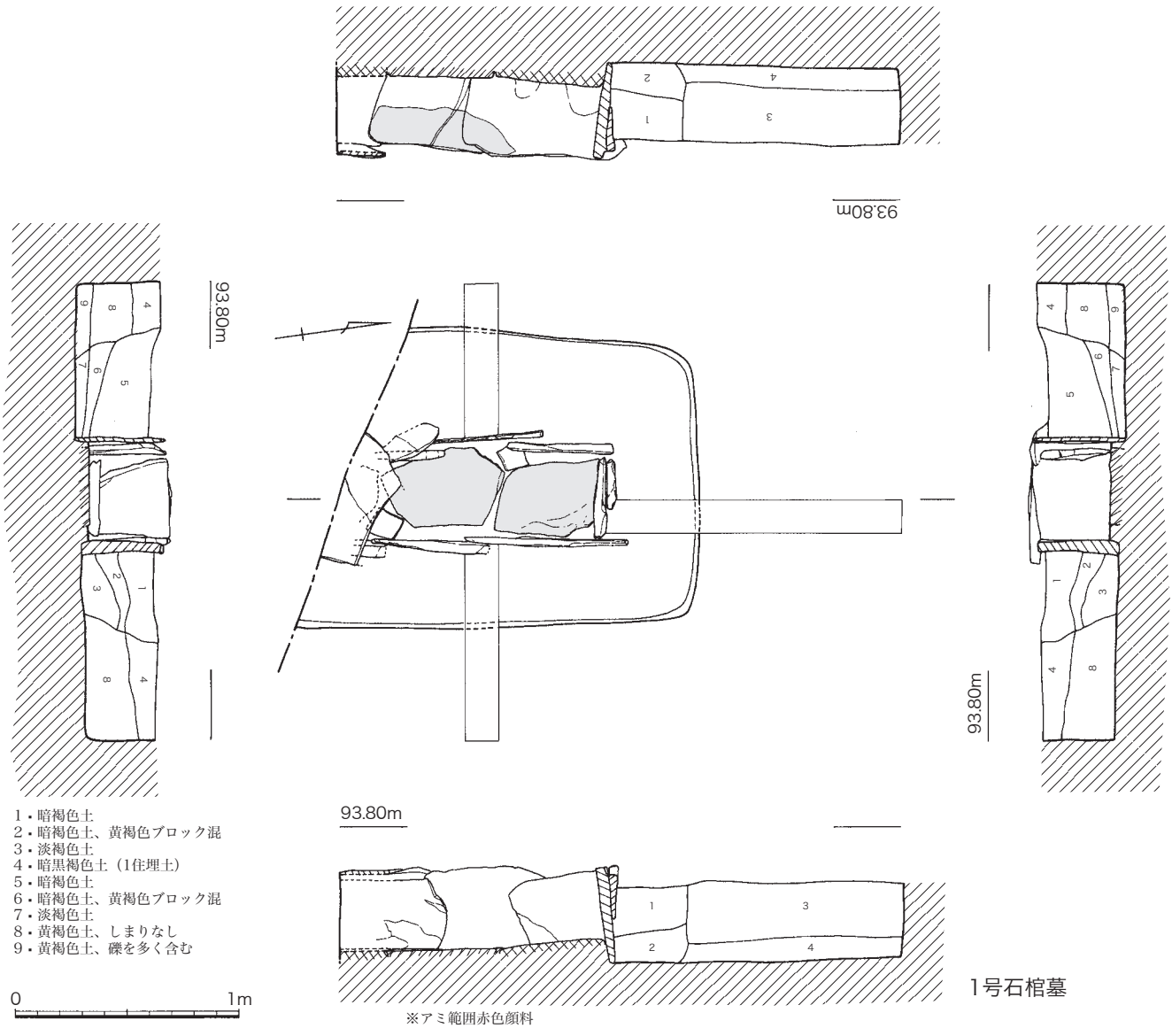
第 137 图 17 号小児用甕棺墓实测图 (1/20)



第 136 图 16 号小児用甕棺实测图 (1/6)



第 138 图 17 号小児用甕棺实测图 (1/6)



第139図 1・2号石棺墓実測図 (1/30)

17号小児用甕棺墓 (第137・138図、図版29・34)  
 調査区北西側にて検出され、16号小児用甕棺墓に近接する。墓壙は不整形を呈し、確認面での規模は東西軸約140cm、南北軸約70cm、深さ約30cmを測る。墓壙より一段掘下げて、甕を接口式にて埋置し、埋置角度は約0°、主軸はN60°Eを測る。  
 第138図1は上甕で胴部下半より上を打欠き、蓋状に仕上げている。底部は上げ底状を呈し、外面には縦ハケが残る。2は下甕で、口縁部は断面逆L字形を呈し、端部をやや下方に垂れ下げる。頸部下面には断面三角形の突帯を巡らせ底部は厚い平底を呈する。外面には縦ハケが残る。

## 2. 石棺墓

調査区内より2基を検出したが、墳墓群とは離れた位置に見られ、いずれも住居を切って構築されていた。

### 1号石棺墓（第139図、図版29）

B区の調査を実施する契機となった石棺墓で、工事に伴い表土が除去された時点でその存在が確認された。重機により石棺墓の蓋は既に除去されており、その残骸と考えられる板石が周辺から発見された。石棺の南半分は道路の下に位置し、蓋石の上面までコンクリートで固められていたため、検出された北半分の調査を実施した。1号住居を切って構築されており、墓壙は方形を呈し、確認面での規模は南北軸約1.7m +  $\alpha$ 、東西軸約1.3m、深さ約35cmを測る。蓋石は安山岩製で、北半分側に一部残存しており、蓋石内面には赤色顔料が塗られていた。石棺は長軸120cm +  $\alpha$ 、短軸40cmを測り、小口に板石を建て、比較的大振りの板石で挟み込むように側石を並べたのち、裏込を行っている。床面には板石が敷かれ、北側が若干高くなる。側壁東側には一部赤色顔料が塗布されており、床面にも顔料が認められた。北側床面が若干高く、幅もやや広いことから、北側頭位と推測され、主軸はN7°Eを測る。

### 2号石棺墓（第139図、図版30）

調査区北西側にて検出された石棺墓で、40号住居を切っている。蓋石も存在せず、石棺も東側小口、南側側壁の一部に安山岩製の板石が見られるのみであるため、木棺墓や土壙墓の可能性も考えられる。墓壙は長方形を呈し、確認面での規模は東西軸約90cm、南北軸約60cm、深さ約10cmを測る。西側に向かって床面が高まっていた。主軸方向はN64°Eを測る。

## 3. 土坑

調査区内より多数の土坑を確認したが、そのうち墓の可能性が考えられ、また切り合い関係が上面で明確に把握できるものについて一部掘下げを実施した。特に、1～3号土坑に関しては列状に並ぶことから、墓の可能性を想定したが、確証を得ることが出来ず土坑として紹介する。

### 1号土坑（第149図、図版30）

調査区東側に列状に並ぶ土坑群の内のひとつである。平面形は不整長方形を呈し、底面はレンズ状を呈する。確認面での規模は、長軸約3.9m、短軸約2.2m、深さ約60cmを測る。埋土は暗灰褐色系の土がレンズ状に堆積しており、特に1層中には土器が多く見られた。

#### 出土遺物（第143図）

1、2は鉢である。1は口縁部が外に開き、2は内湾する。2には内面に工具痕が残る。3は高坏の口縁部である。口縁上面には沈線による文様が施される。4は甕の口縁部である。5、6は甕の底部で、平底を呈する。7は丹塗りの高坏である。シボリ部に突帯が巡る。

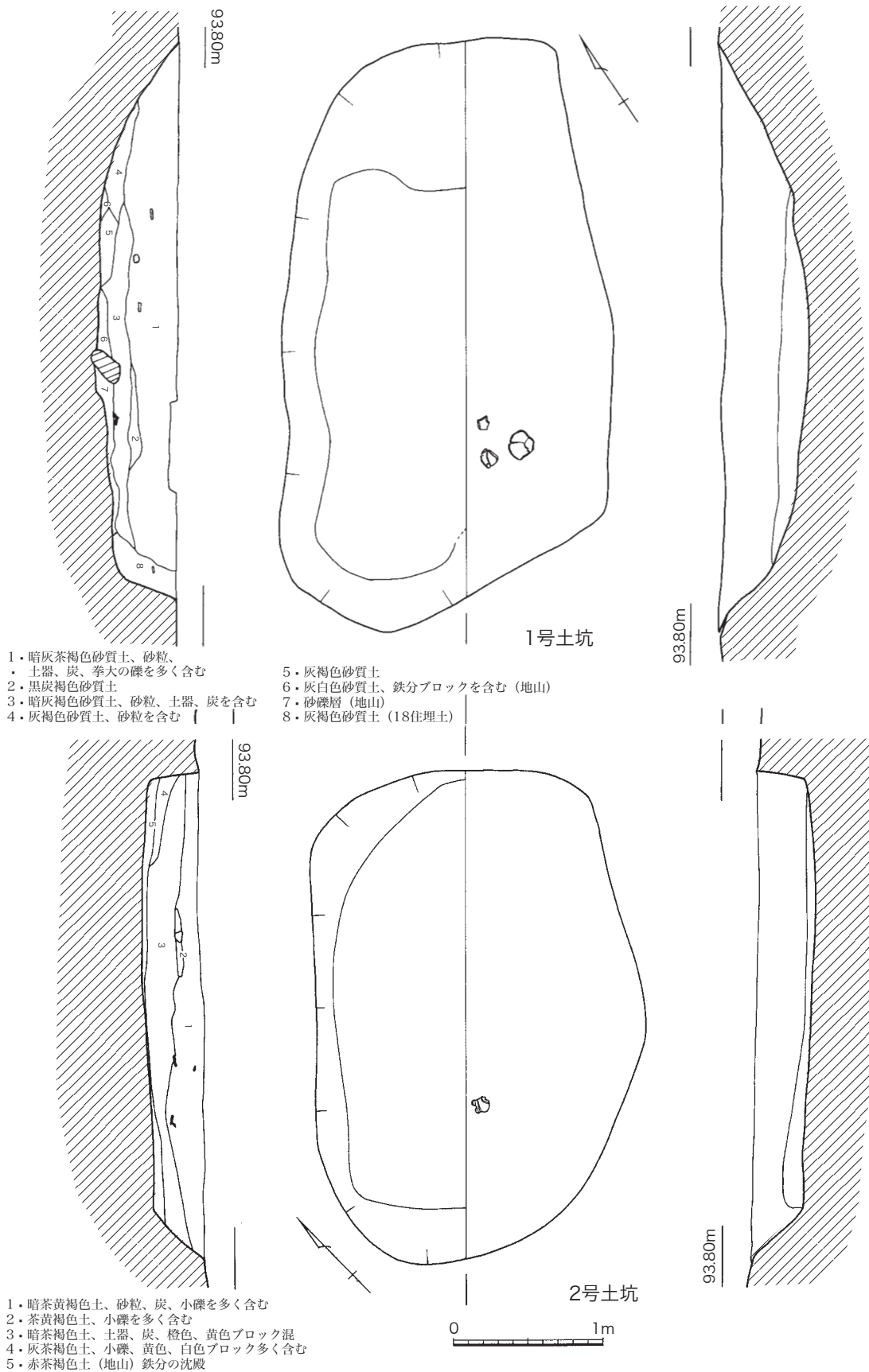
### 2号土坑（第140図、図版30）

調査区東側に位置し、1号土坑に近接する。平面形は不整長方形を呈し、底面は平坦になっている。確認面での規模は、長軸約3.3m、短軸約2.2m、深さ約35cmを測り、埋土は1、3層がレンズ状に堆積し、多数の土器が見られた。

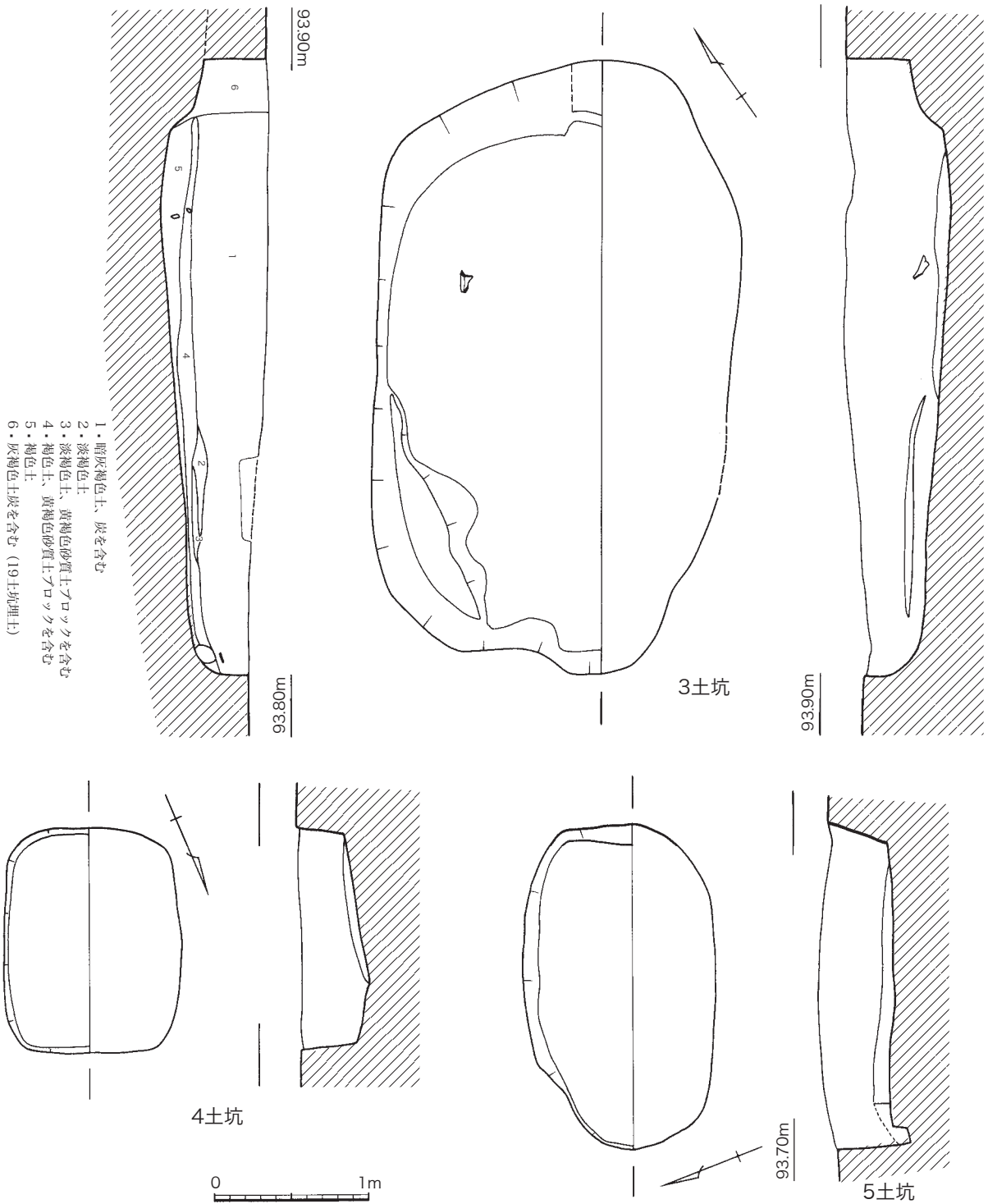
#### 出土遺物（第143図）

8は高坏の口縁部か。9は甕の口縁部、10はやや上げ底の底部、11は厚めの平底の底部である。





第140図 1・2号土坑実測図（1/40）

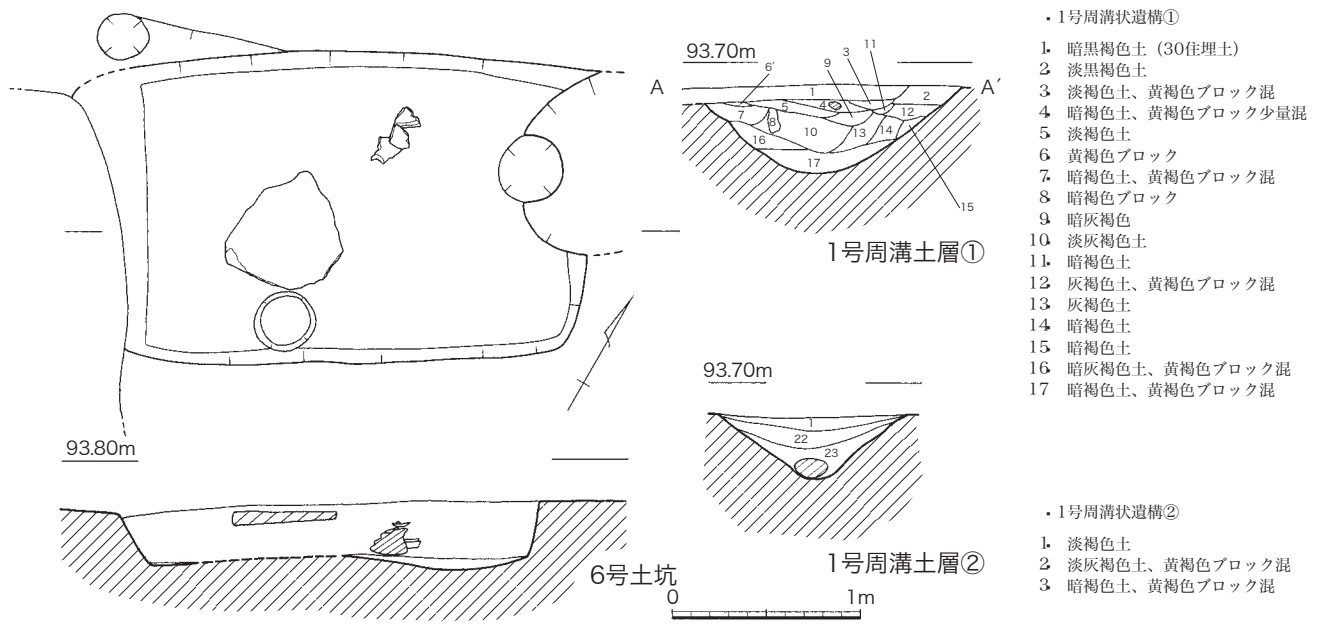


第 141 図 3・4・5 号土坑実測図 (1/40)

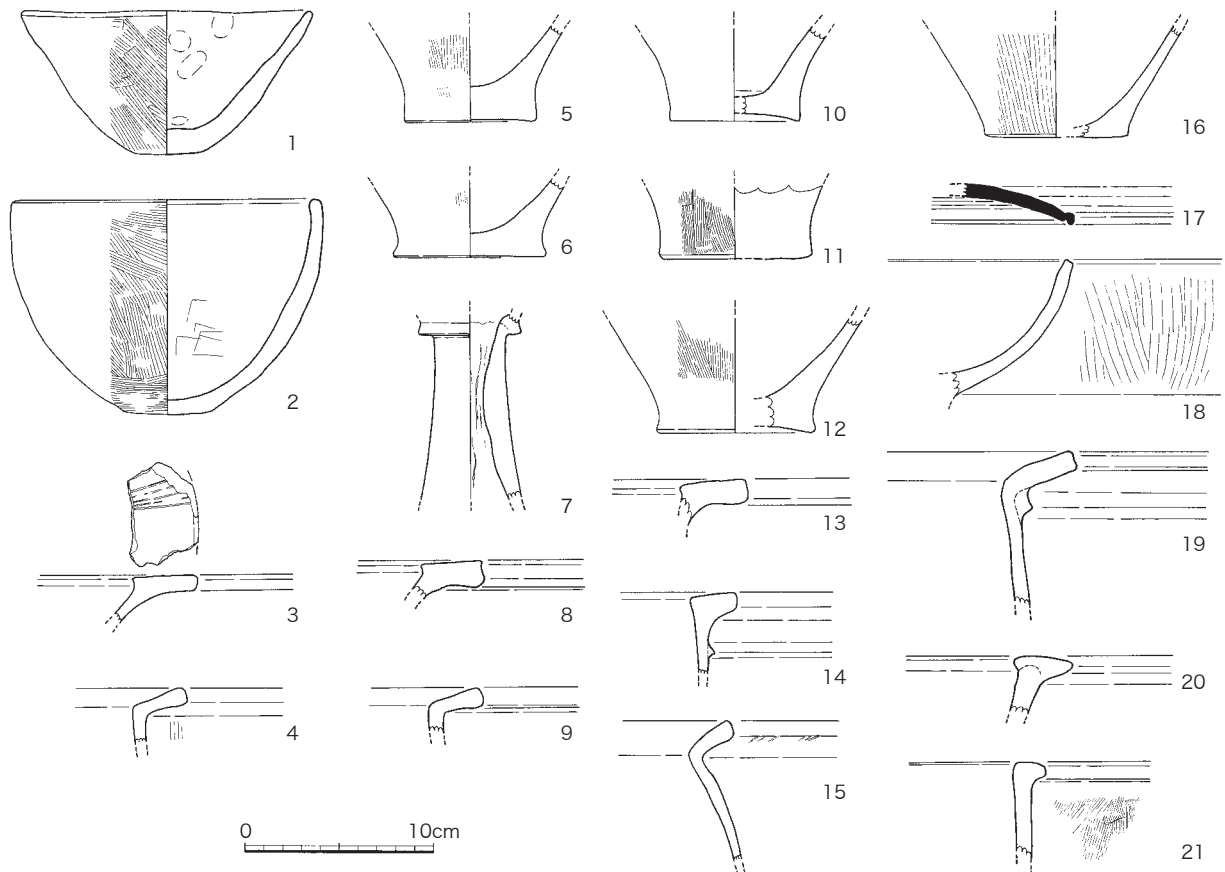
12 は上げ底の嚢底部である。

### 3号土坑 (第 141 図、図版 30)

調査区北東隅に位置する。平面形は不整長方形を呈し、底面は平坦を呈する。確認面での規模は、長軸約 3.9m、短軸約 2.3m、深さ約 70cm を測る。1～5 層が平坦に堆積し、そのうち 1 層には多数の遺物が含まれていた。



第 142 図 6号土坑、1号周溝状遺構土層断面実測図 (1/20)



第 143 図 土坑、周溝状遺構出土遺物実測図 (1/4)

#### 出土遺物（第 143 図）

13・14 は断面逆 L 字形の口縁部である。15 はくの字状口縁部を呈する。16 は底部で薄めの平底を呈する。

#### 4 号土坑（第 141 図、図版 30）

調査区西側に位置し、平面形は方形を呈し、確認面での規模は長軸約 1.4m、短軸約 1.1m、深さ約 40cm を測る。埋土は灰褐色を呈する。

#### 5 号土坑（第 141 図、図版 31）

調査区西側に位置し、平面形は楕円形を呈し、確認面での規模は長軸約 2.1m、短軸約 1.2m、深さ約 50cm を測る。埋土は灰褐色を呈する。

#### 出土遺物（第 143 図）

17 は須恵器坏蓋で、口縁端部を丸める。

#### 6 号土坑（第 142 図、図版 31）

調査区南東隅に位置し、平面形は方形を呈し、埋土中に板石が一枚流入していた。確認面での規模は長軸約 2.7m、短軸約 1.6m、深さ約 30cm を測り、底面は平坦を呈する。

#### 出土遺物（第 143 図）

18 は鉢である。口縁部を内湾させる。19 は甕の口縁部で断面くの字状を呈し、頸部に三角突帯を巡らせる。

#### その他の土坑出土遺物（第 144・145 図、図版 35・36）

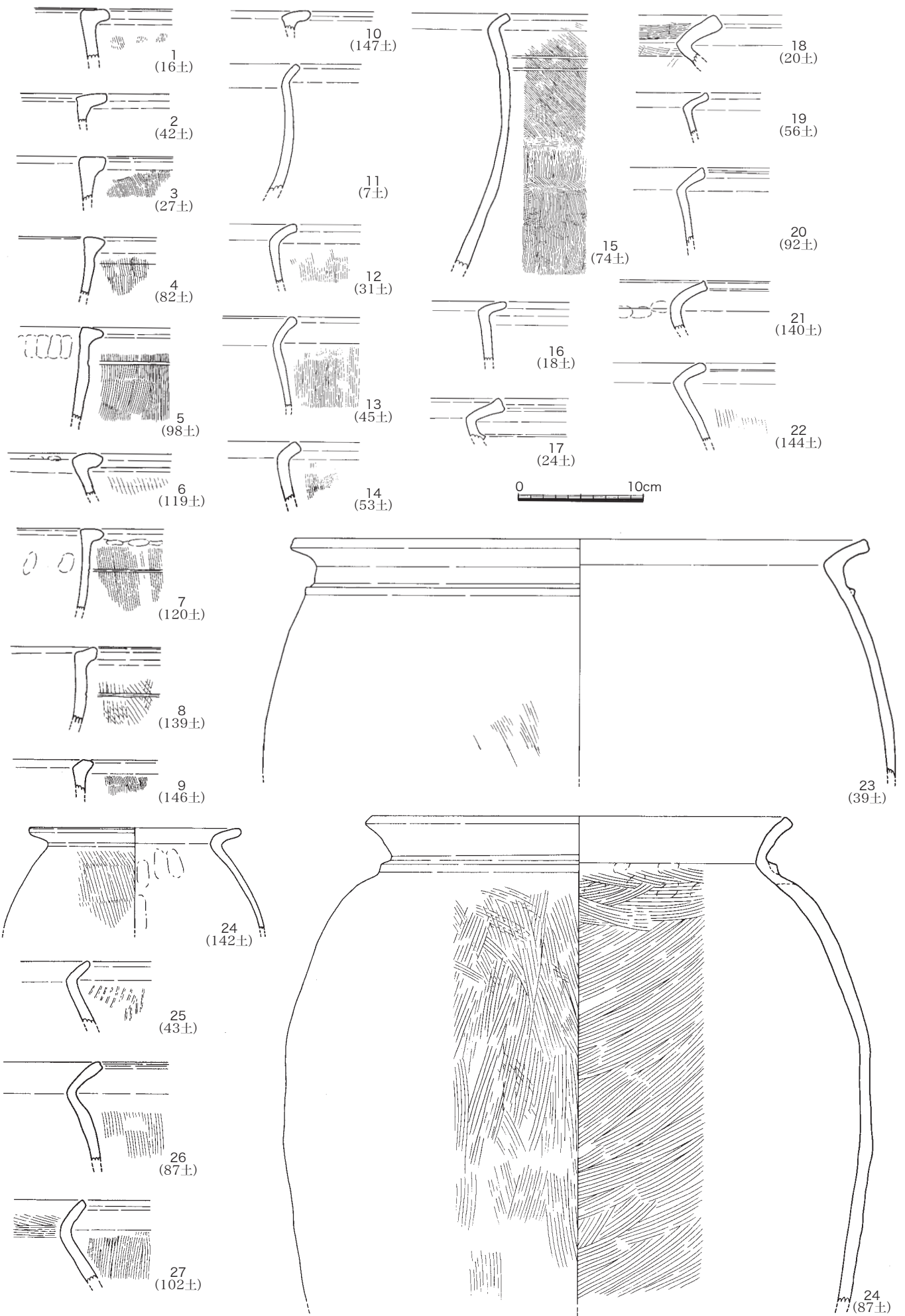
1～54 は遺構検出のみに留めた土坑の表面採集遺物である。B-2 区は工事に伴い既にケズリ取られていた箇所があったこともあり、遺物の表面への露出が多く見られ、遺物の出土量も多い。ただし、表面採集であるため、遺構の時期決定根拠としての確実性は低い。ここでは、未調査遺構群の時期を検討するための資料としては有効であると考えられるため紹介しておく。なお、採集量がバラバラであるため、紙面の都合上遺構別に遺物を配置せず、器種、器形ごとに区分けして説明を加える。

1～32 は甕である。1～10 は断面逆 L 字形、断面三角形状を呈する甕の口縁部である。11～15 は如意形口縁を呈する。特に 15 は頸部下面に 2 条の沈線が巡る。16～23 は断面くの字状を呈し、跳ね上げ状口縁部形を呈する。24～29 はくの字状口縁部を呈し、25～29 は上方に立ち上がり、胴部を張出す。30～32 は鋤先状口縁部を呈する。30 は頸部から胴部にかけて断面 M 字状突帯が 6 条巡る。

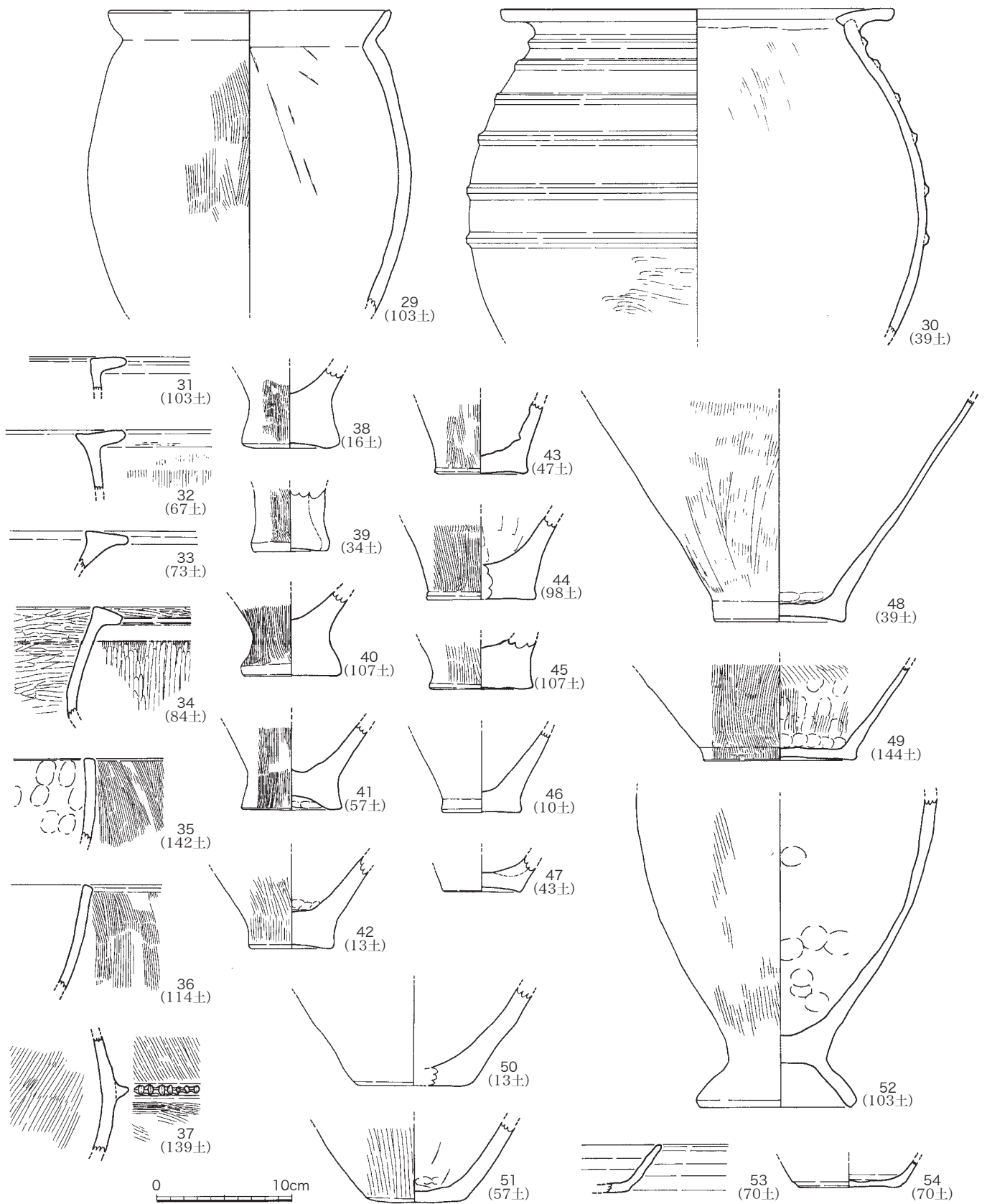
33・34 は壺で口縁部は断面逆 L 字形を呈する。34 は内面にミガキが施される。35・36 は鉢である。37 は壺の胴部か。刻目突帯が 1 条巡る。

38～52 は甕または壺の底部である。38～40 は厚みのある平底の底部で、やや外に張出す。41 は厚みのある上げ底で、42 はやや上げ底状を呈する。43～45 は平底の底部で、46～49 は薄めの平底で、特に 49 は底径が広い。50、51 はレンズ状を呈する甕の底部である。52 は脚付きの甕の底部で、脚は外に開く。

53・54 は土師器で坏身である。口縁部は直線的に外に開く。



第 144 图 土坑出土遗物实测图① (1/4)



第 145 图 土坑出土遺物実測図② (1/4)

#### 4. 周溝状遺構

##### 1号周溝状遺構 (第142図、図版31)

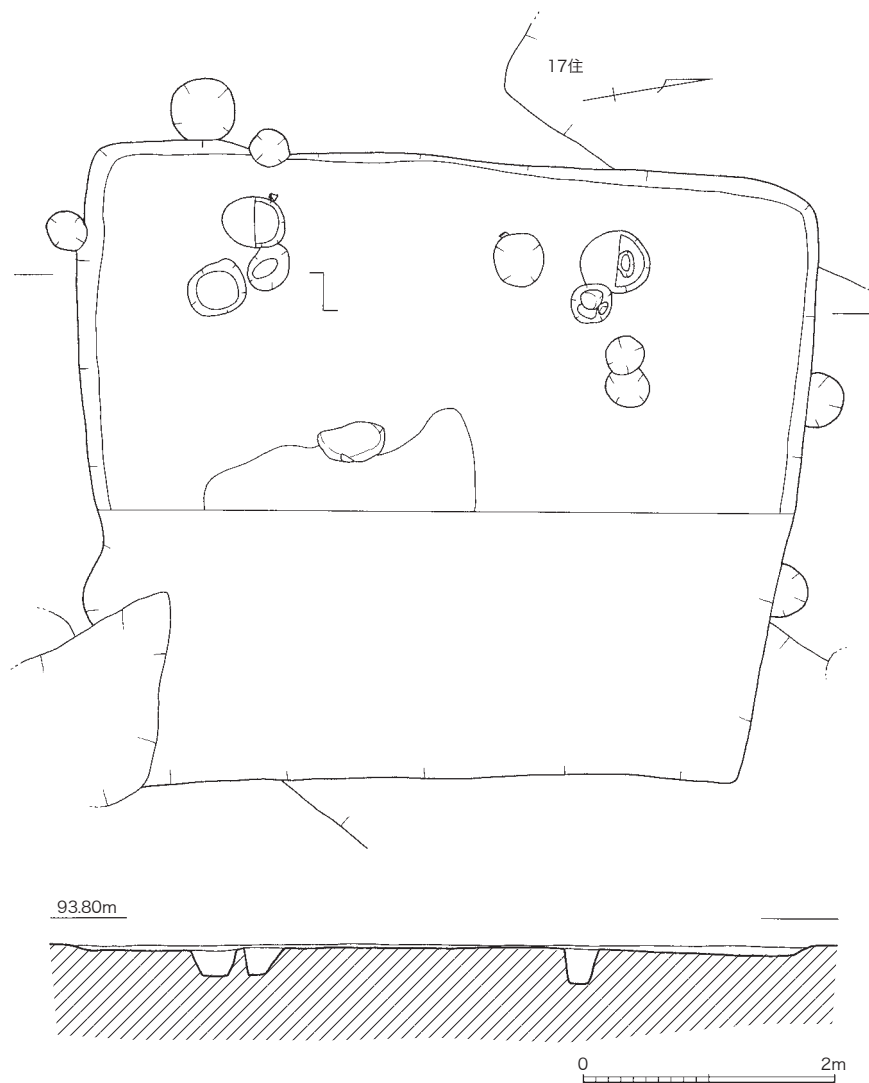
調査区南側に位置し、30号住居に切られる。平面形の確認にとどまっており、土坑や住居などの切り合い関係が著しいため、プランを明確にしえていない。検出された状況での平面形は隅丸方形を呈し、南北方向約7.5m、東西方向約6.5mを測る。このうち、周溝の断面形状及び住居との切り合い関係を明確にする目的でトレンチを設定し、土層確認を行った。1トレンチでは30号住居との切り合い関係が把握でき、堆積状況も互層状になっていた。断面形は浅いV字形で、深さは約40cmを測る。2トレンチではレンズ状堆積が確認され、深さは約30cmを測る。

##### 出土遺物 (第143図)

20・21は2トレンチより出土した。20は甕の口縁部で断面三角形状を呈し、内側に張り出す。21は口縁部で断面三角形状を呈する。

#### 5. 住居

51軒の住居が検出されたが、掘下げを実施したのは16号住居のみである。その他の住居に関しては確認のみに留めている。なお、6・7・10・11・12・13号住居に関しては表面観察のみではあるが、カマドと想定される焼土の飛散が見られた。



第146図 16号竪穴住居実測図 (1/60)

## 16号竪穴住居（第146図、図版31）

調査区南側に位置し、17号住居を切る。平面形は方形を呈し、確認面での規模は南北軸約5.8m、東西軸約5m、深さ約5cmを測る。支柱穴は判然とせず、深さ20cmほどの柱穴が該当するものと想定した。住居中央部付近には黒色の土坑プランが確認され、炉跡になるものと想定される。

### 出土遺物（第147図）

1は甕の口縁部で断面三角形状を呈する。2は高坏の口縁部である。3は甕の底部で平底を呈し、4は器台である。

### その他の住居跡出土遺物（第147～149図、図版31～32）

5～87は遺構検出のみに留めた住居の表面採集遺物である。土坑同様、住居の遺物の出土量も多いが、表面採集であるため、遺構の時期決定根拠としての確実性は低い。ここでは、未調査遺構群の時期を検討するための資料としては有効であると考えられるため紹介しておく。なお、採集量がバラバラであるため、紙面の都合上遺構別に遺物を配置せず、器種、器形ごとに区分けして説明を加える。出土遺構に関しては観察表を参照していただきたい。

5～34は甕である。5～10は断面三角形状あるいはコの字状を呈する甕の口縁部である。11～14は如意形口縁部を呈する甕である。15～26は断面くの字状の跳ね上げ口縁状を呈する甕である。胴部は張り出さない。27は断面逆L字形を呈する甕で、頸部下面に断面三角形状の突帯が巡る。底部は薄い平底である。28～34は口縁部断面くの字状を呈し、口縁部が上方に立ち上がり、頸部はしまり、胴部が張り出す。33は底部が平底で、34は小型の甕である。

35～44は壺である。35は短頸の壺で、頸部は若干しまり、口縁部は緩やかに立ち上がる。36は長頸壺、37は小型壺の胴部である。38～41は壺の口縁部で、38・39は断面コの字状を呈し、40・41は断面鋤先状を呈する。42・43は壺で、口縁部は緩やかに外湾する。44は断面くの字状の口縁部を呈し、頸部に突帯を巡らせる。45～54はやや厚みのある平底の甕の底部である。56～59は薄めの平底の底部である。57～59は胴部が貼り出すことから壺と考えられる。60～63はレンズ状を呈する甕の底部である。64は浅い上げ底状の甕の底部で、65～67は脚付きの甕である。脚台部は外に広がる。

68は高坏で、丹塗りが施される。69・70は器台で、71・72は支脚である。73・74は鉢である。74はハケにより底部を作り出す。75は突帯の破片か。2穴の穿孔が施される。76は不明品である。ミニチュアの甕か。77・78はミニチュアの鉢か。79～82は土師器甕である。内面にケズリが施される。83・84は土師器高坏である。85～87は須恵器で、85は坏蓋、86は坏身、87は高台付の坏身である。

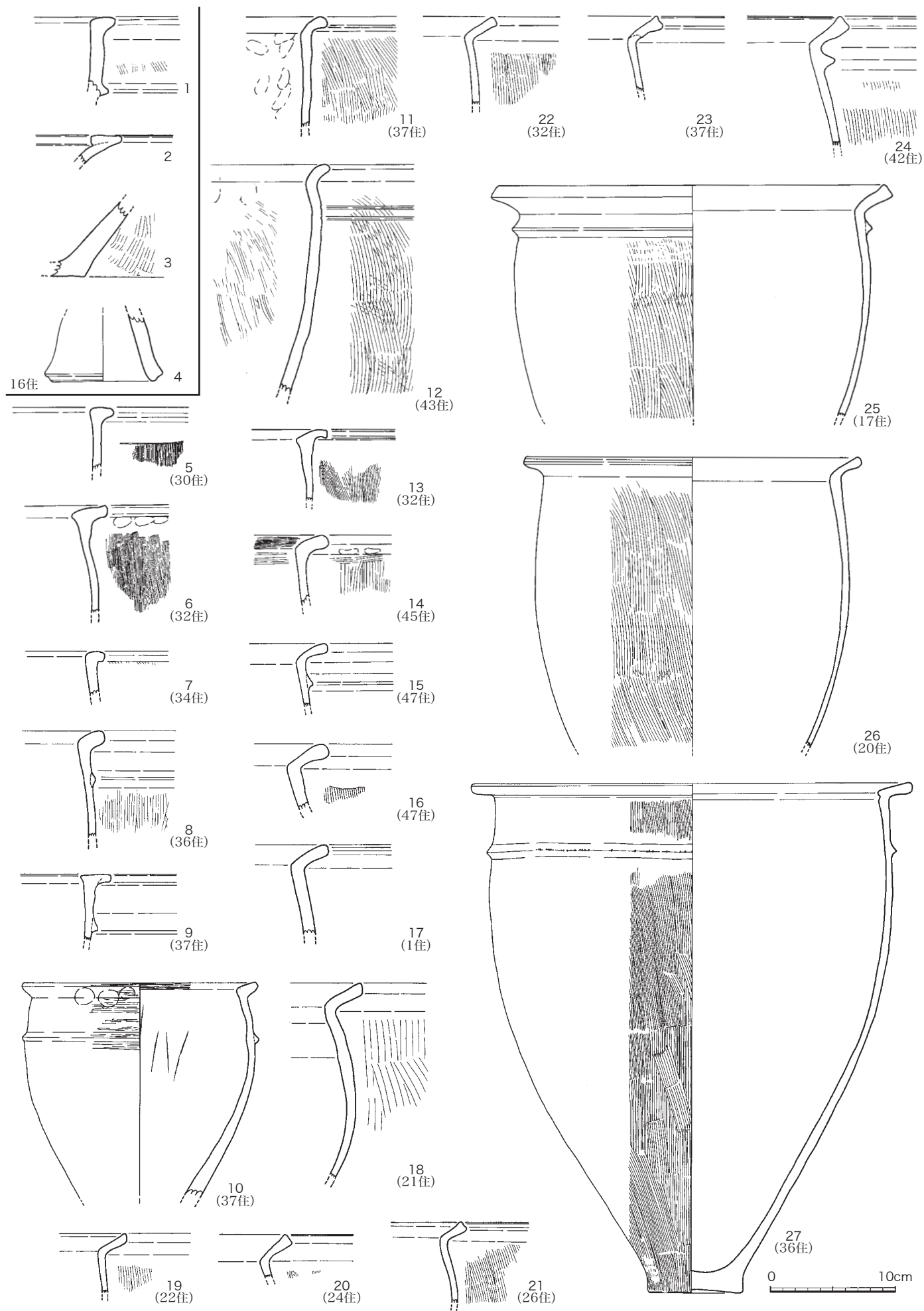
## 6. その他の遺構と遺物

### 柱穴出土遺物（第150図）

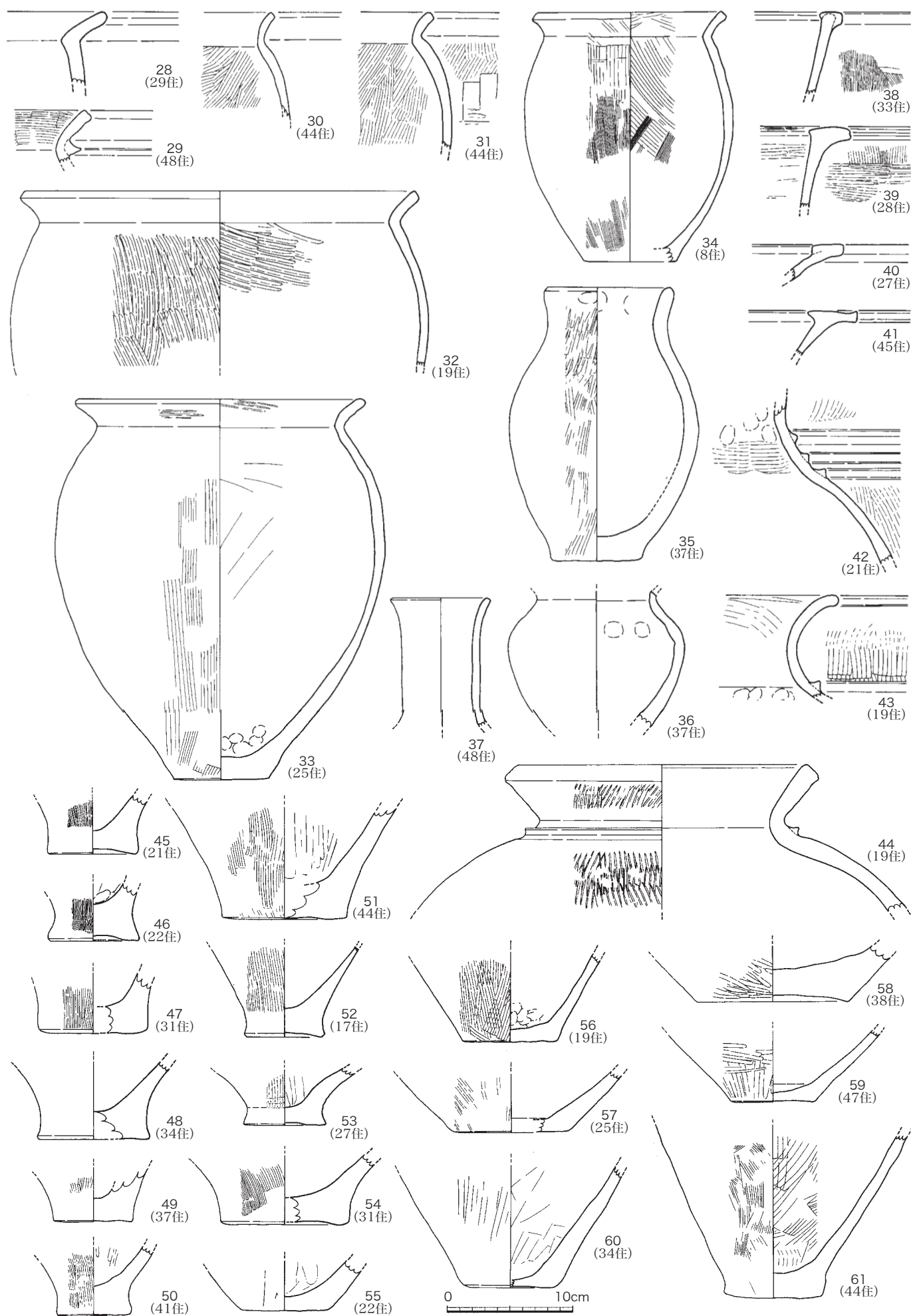
柱穴は多数検出されたが、切り合いも激しく、表面確認のみに留めていることもあり、建物の想定は出来なかった。ここでは柱穴より採集した遺物について説明する。

1はP64より出土した弥生土器甕で、口縁部断面三角形状を呈する。2はP12より出土した甕で、口縁部断面がコの字状を呈する。3はP9より出土したやや集めの平底の底部で外に張り出す。4

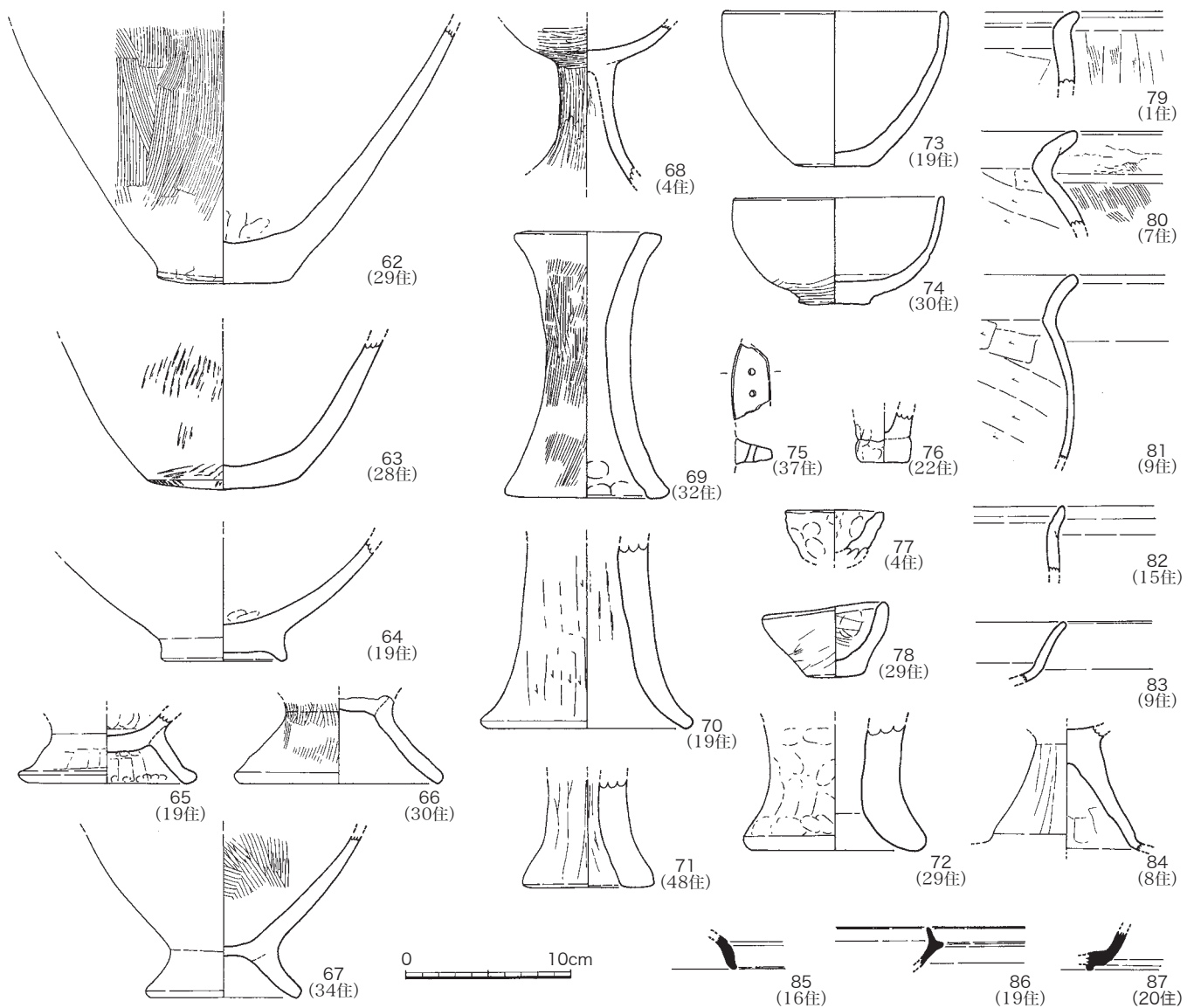




第 147 図 住居出土遺物実測図① (1/4)



第 148 图 住居出土遺物実測図② (1/4)



第149図 住居出土遺物実測図③ (1/4)

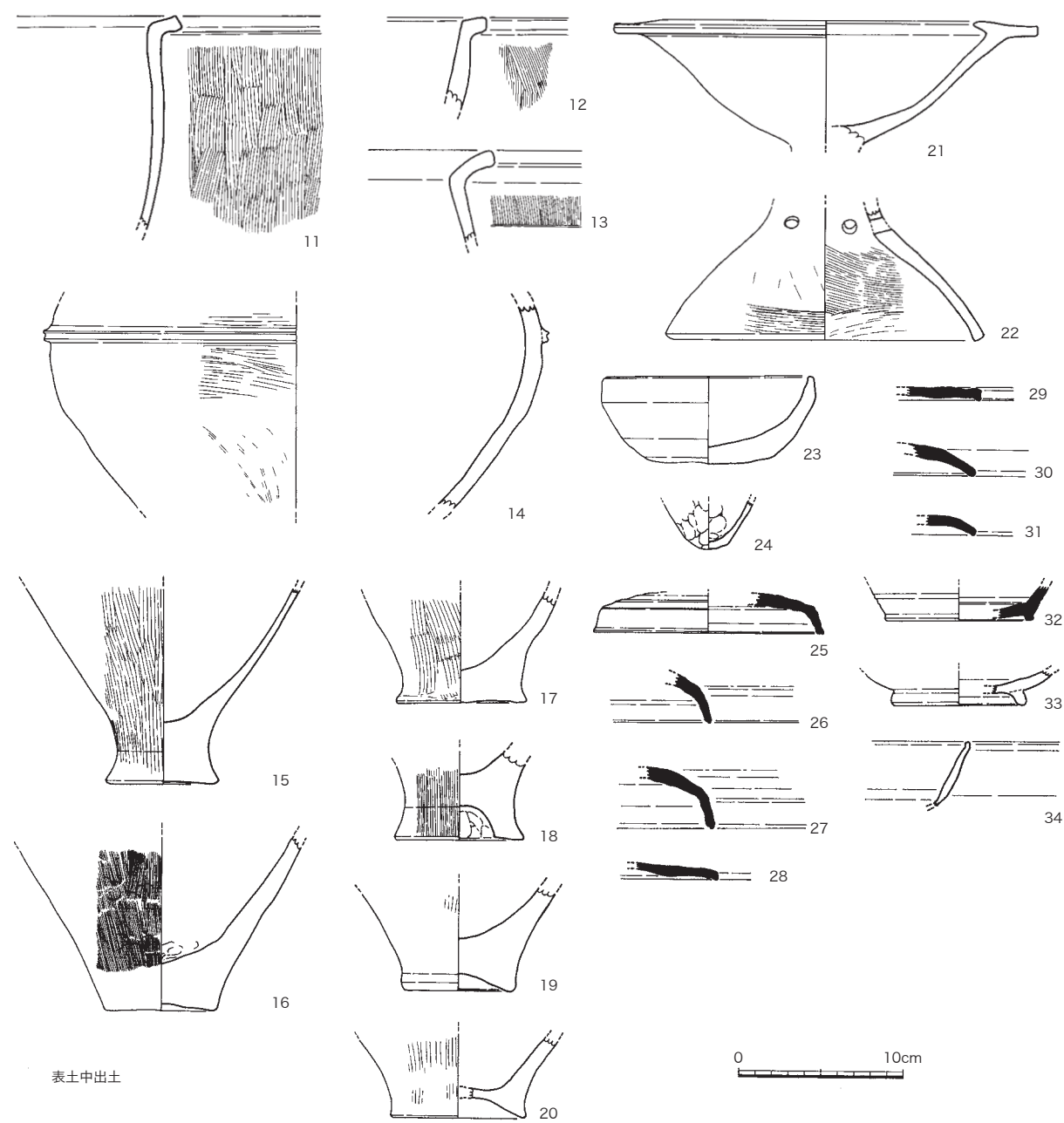
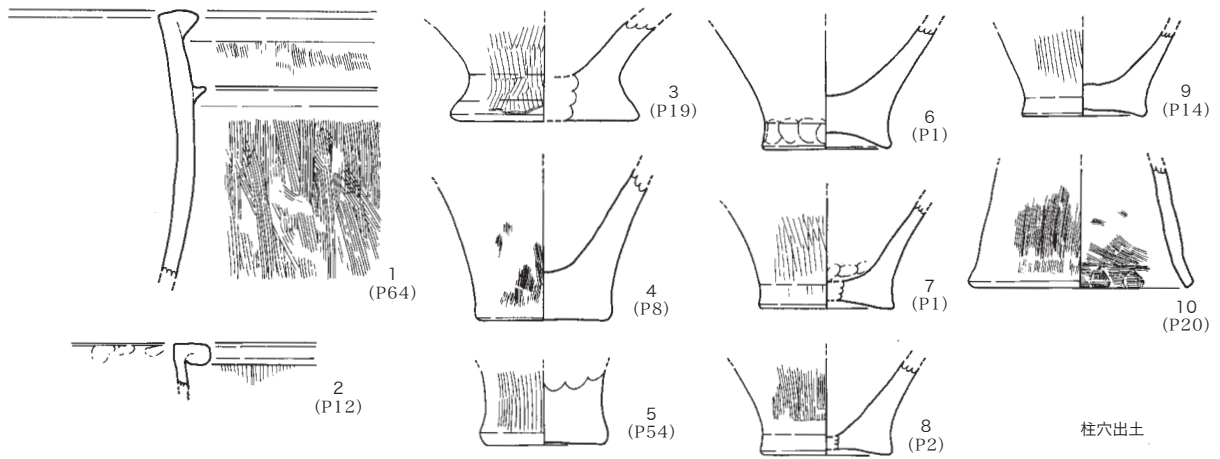
はP8より出土した平底の底部。5はP54より出土の平底の底部、6はP1より出土で上げ底を呈する。7はP1より出土した薄めの平底。8はP2より出土したやや上げ底気味の底部。9はP14より出土したやや上げ底の底部。10はP20より出土した器台である。

表土中出土遺物 (第150図、図版36)

表土除去時に出土した遺物について説明する。11・12は断面コの字状を呈する甕で、13は跳ね上げ口縁状を呈する。14は壺の胴部で、胴部に突帯が巡る。15～20は底部で、15は厚めの平底、16・17は平底、18は厚めの上げ底、19・20は上げ底気味を呈する。21は丹塗り高坏の坏部で、口縁部は鋤先状を呈する。22は高坏の脚部、23は土師器碗、24は手捏土器である。25～34は須恵器である。25～31は須恵器坏蓋で、口縁部体部で屈曲し、端部には段を有する。28～32は須恵器坏身で、扁平状を呈し、端部は丸められる。33は高台付の須恵器坏身である。34は高台付の土師器坏身である。35は土師器高坏の口縁部。

石器・鉄器 (第151図、図版38)

各遺構より出土した石器についてここでは解説する。出土遺構については観察表を参照いただきたい。1～5は石鏃である。1は平基無茎鏃でやや大きめ、2～4は凹基無茎鏃である。5～8



第150図 その他の遺物実測図 (1/4)



第151図 石器・鉄器実測図 (1/2 ※1~4は2/3)

は石庖丁である。背部は直線的である。9~12は石剣である。11・12は砥ぎ分けがされており、12は柄部が残る。13は蛤刃石斧の破片である。14は鉄器で凹基式鏃、15は扁平状の不明鉄器である。あるいは板状鉄斧片か。

## 第5章 C区の調査の内容

### (1) 調査の内容 (第153図)

調査区は大肥工区全体の中でも北側で、大肥川がすぐ東側に流れる河岸段丘上に位置する。水路の設置と切り土により削平される南北75m、東西31mを対象として調査を実施した。調査区内での標高は約98mを測り、西側に向かってやや下がり、地山は淡黄色の砂礫層であった。遺構の多くは、この砂礫層のなかでも特に砂層が広がっている箇所に密集してみられた。また、調査区西側端は削平を受けており、試掘調査の結果と併せて判断しても西側に遺構の残存は認められない。

水田基盤土直下より検出された遺構は竪穴住居11軒、竪穴状遺構4基、土坑3基、小児用甕棺墓1基、溝1条で、遺構埋土は暗褐色土であった。なお、これまで報告した概要の遺構数とは若干

異なっているが、本報告を正式な報告とする。また、調査時に設定した遺構番号を本報告において変更し、その対応関係は第3表に記している。

第3表 住居番号対応表

調査時番号	本報告番号	調査時番号	本報告番号	調査時番号	本報告番号
1号住居	1号住居	6号住居	4号住居	11号住居	7号住居
2号住居	2号住居	7号住居	5号住居	12号住居	8号住居
3号住居	1号竪穴状遺構	8号住居	6号住居	13号住居	9号住居
4号住居	2号竪穴状遺構	9号住居	3号竪穴状遺構	14号住居	10号住居
5号住居	3号住居	10号住居	4号竪穴状遺構	15号住居	11号住居

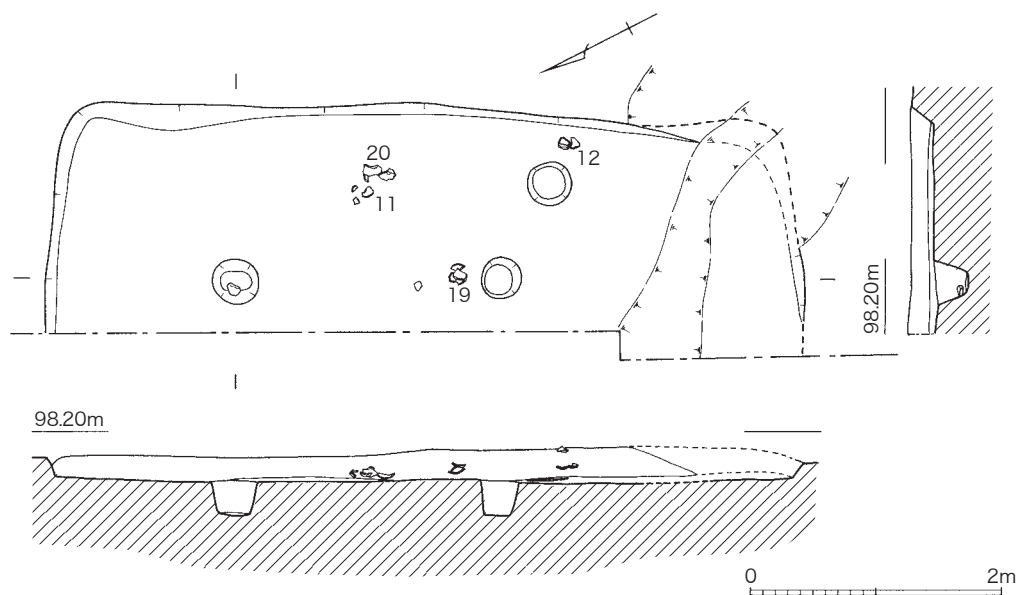
### (2) 遺構と遺物

#### 1. 住居

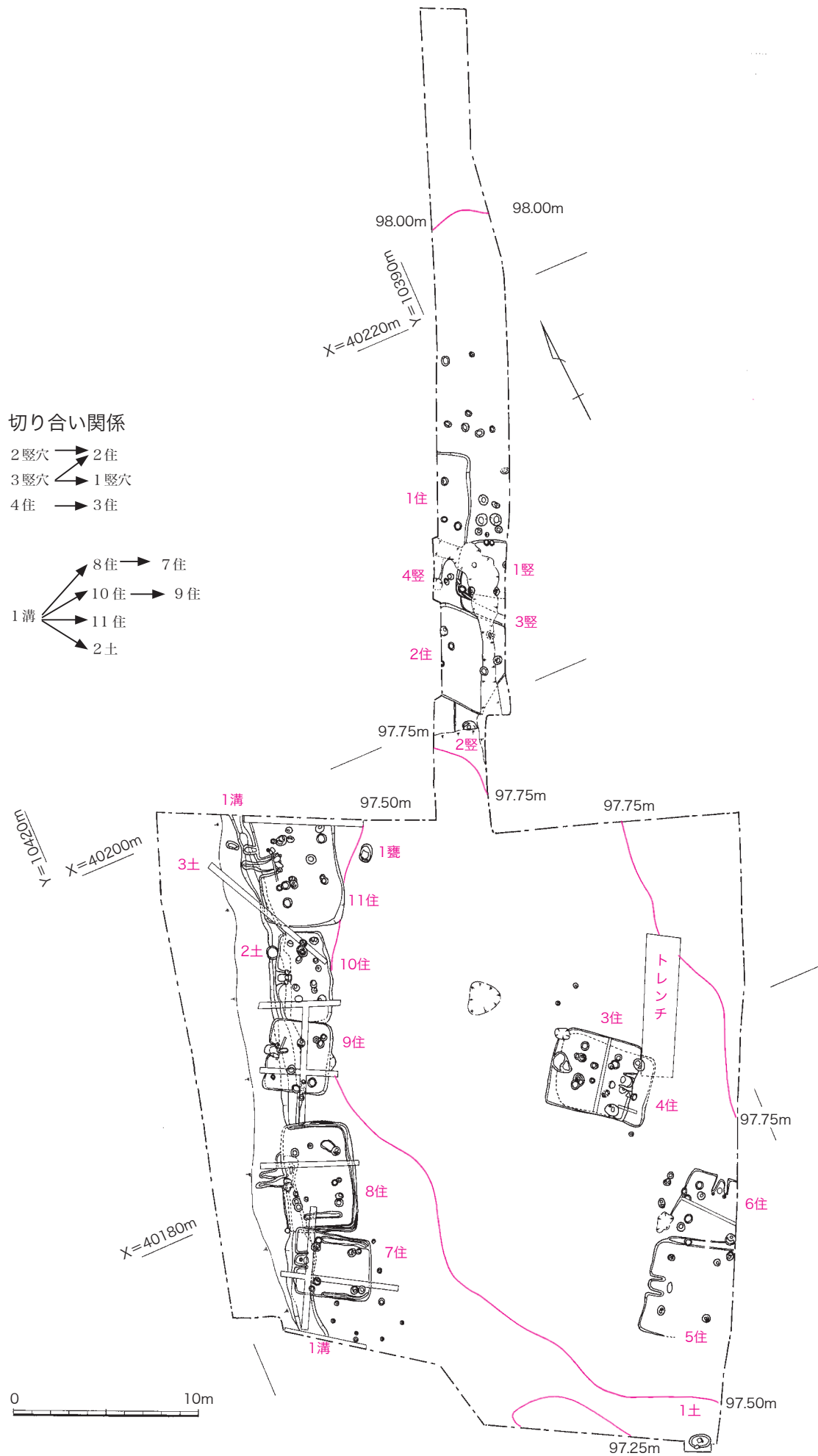
住居の多くは比較的安定した砂層に作られ、建替も含めた重複関係が確認された。特に、西側には砂層に沿うように南北方向に住居跡が並び、長屋のような様相を呈している。

#### 1号竪穴住居 (第152図、図版41)

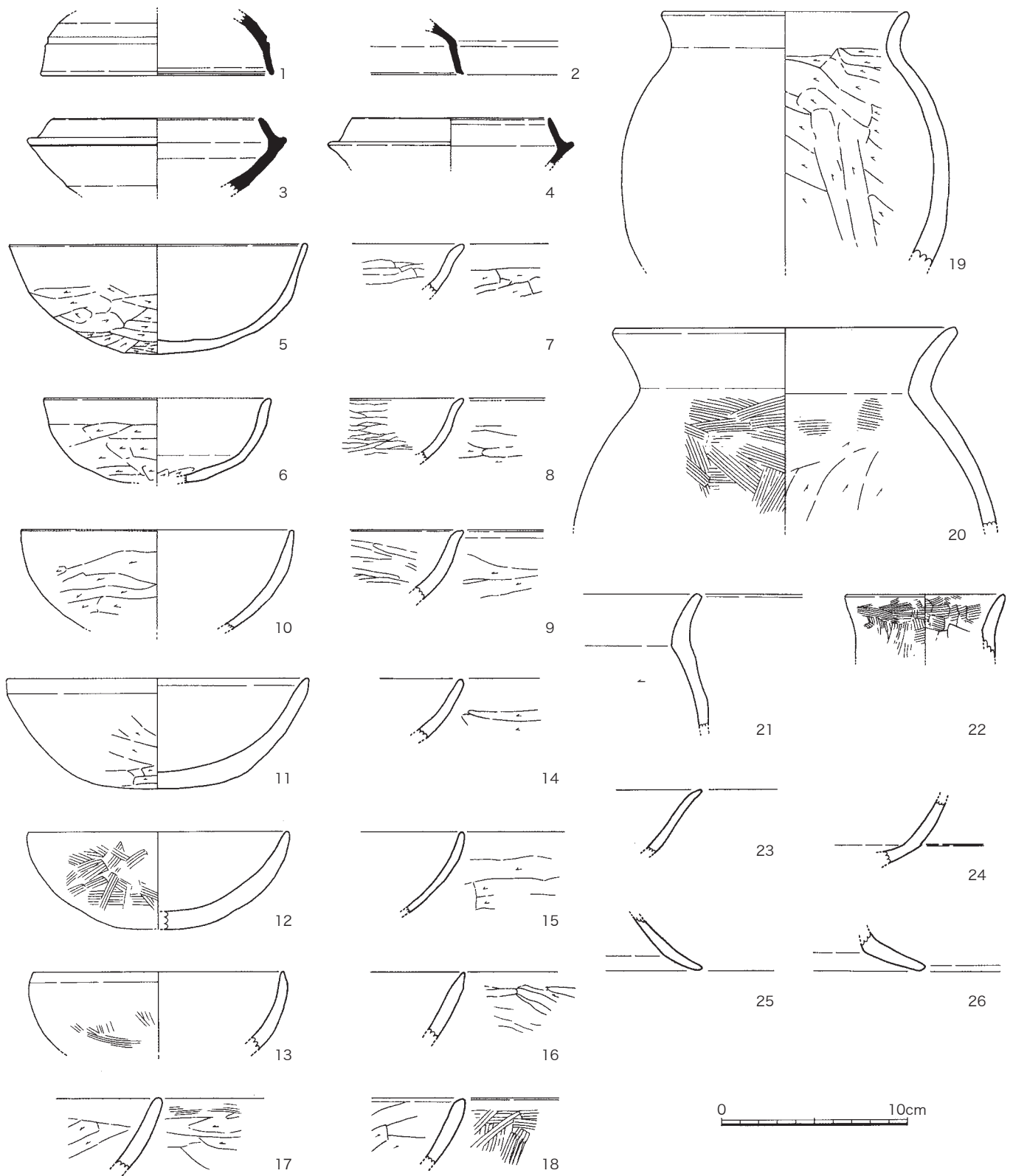
調査区北側にて検出され、住居内部に溝による攪乱を受ける。確認面での規模は南北軸で約6.0m、東西軸は調査区外へと広がり約1.8m +  $\alpha$ 、床面までの深さ約30cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で河原礫が多く見られた。深さ30cm程の支柱穴が2穴見られ、4本柱の建物構造と考えられる。住居東壁側に遺物の集中が見られ、床面直上であることなどから、廃棄時の祭祀



第152図 1号竪穴住居実測図 (1/60)



第 153 図 C 区遺構配置図 (1/300)



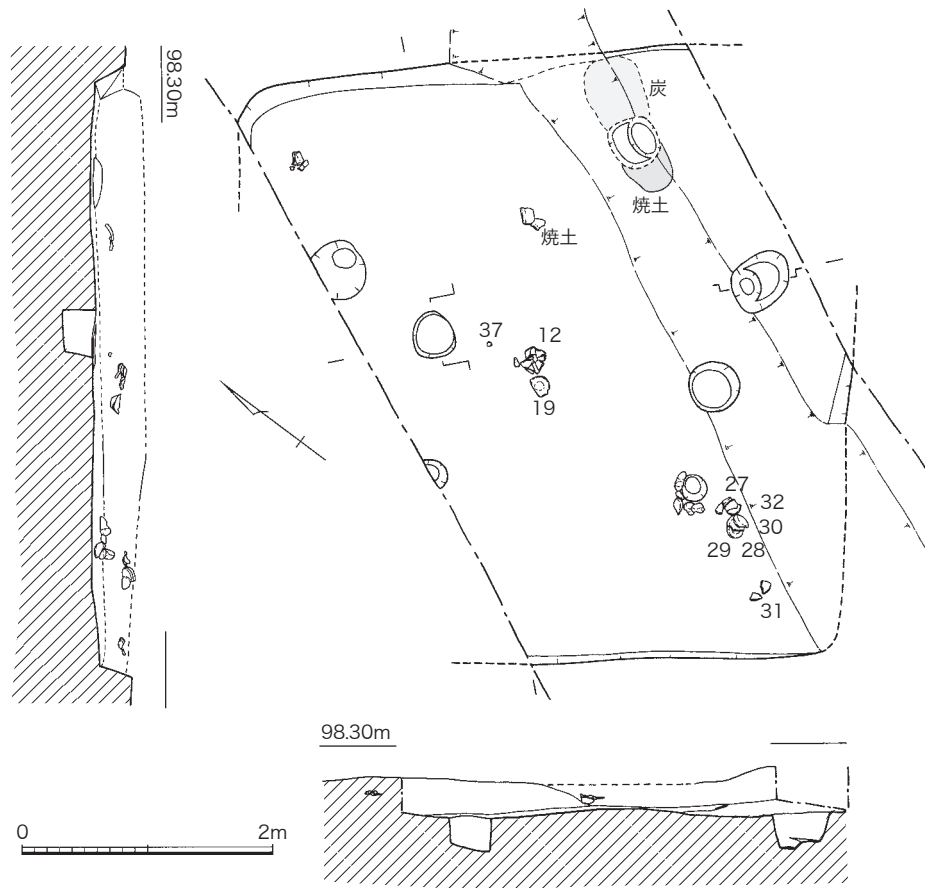
第 154 図 1 号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)

痕と考えられる。カマドは調査区内では確認されなかったことから、北～南のいずれかの方向に付設されるものと考えられる。

出土遺物 (第 154 図、図版 47)

1・2 は須恵器坏蓋である。いずれも口唇部内面に段を有し、1 は外面に沈線、2 は段を有する。3・4 は須恵器坏身である。口縁部は内傾して立ち上がる。5～18 は土師器碗である。5～9 は口縁





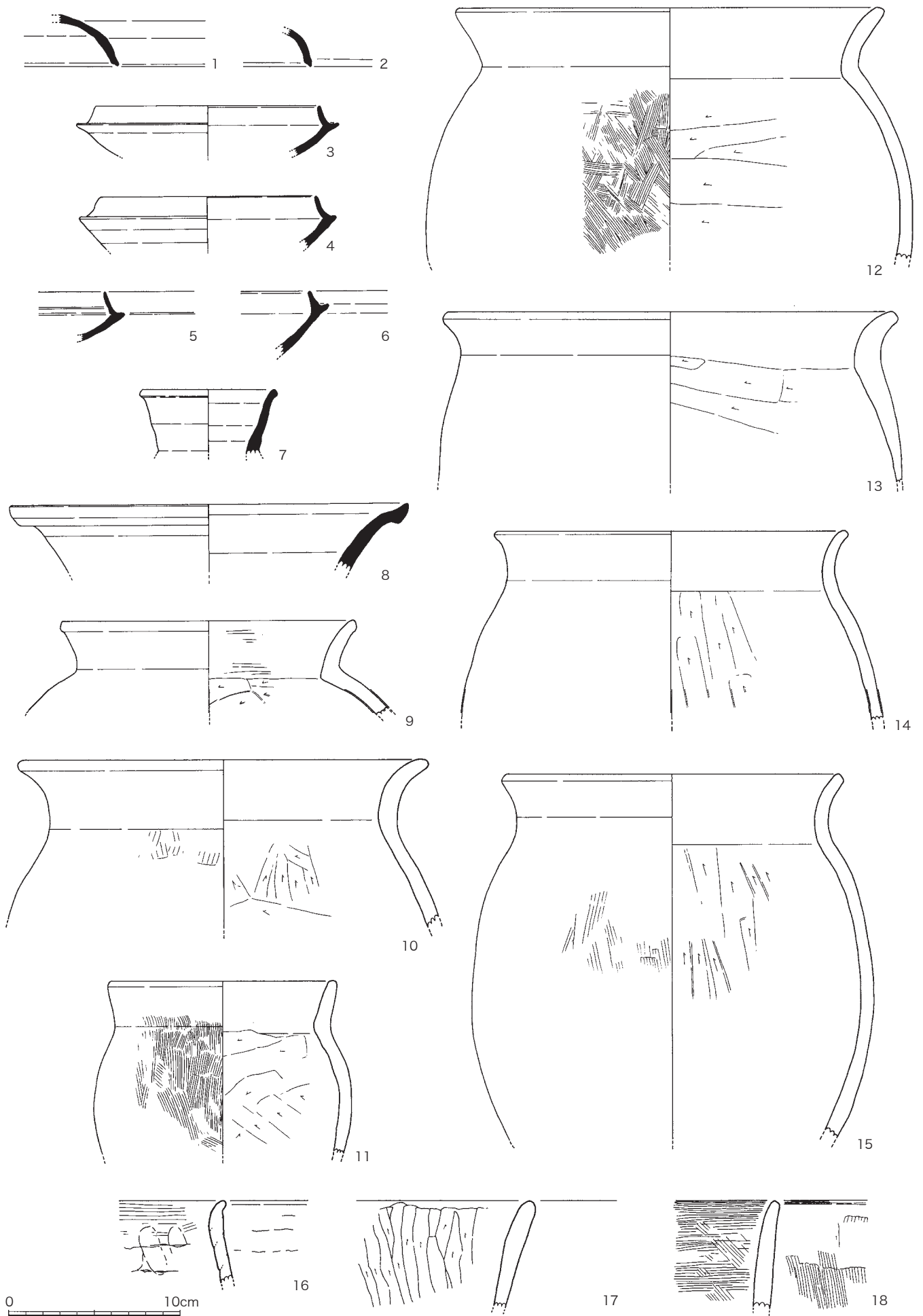
第155図 2号竪穴住居実測図 (1/60)

部が外反し、外面を手持ちヘラケズリ、内面にはミガキが施される。10～18は口縁部が直線状に立ち上がる。なかでも11・13・16は口唇部を尖らせる。内面はヘラケズリもしくはナデ調整、外面にはヘラケズリもしくはミガキ、ハケメが施される。19～21は土師器甕である。うち20はくの字状に明瞭に外反する。22は小型甕である。口縁部を緩やかに外反させ口縁部付近に内外ともにハケメ調整が施される。23～26は高坏である。23は坏部、25・26は脚部である。うち、24は胴部屈曲部に段を有する。あるいは土師器坏の可能性も考えられる。

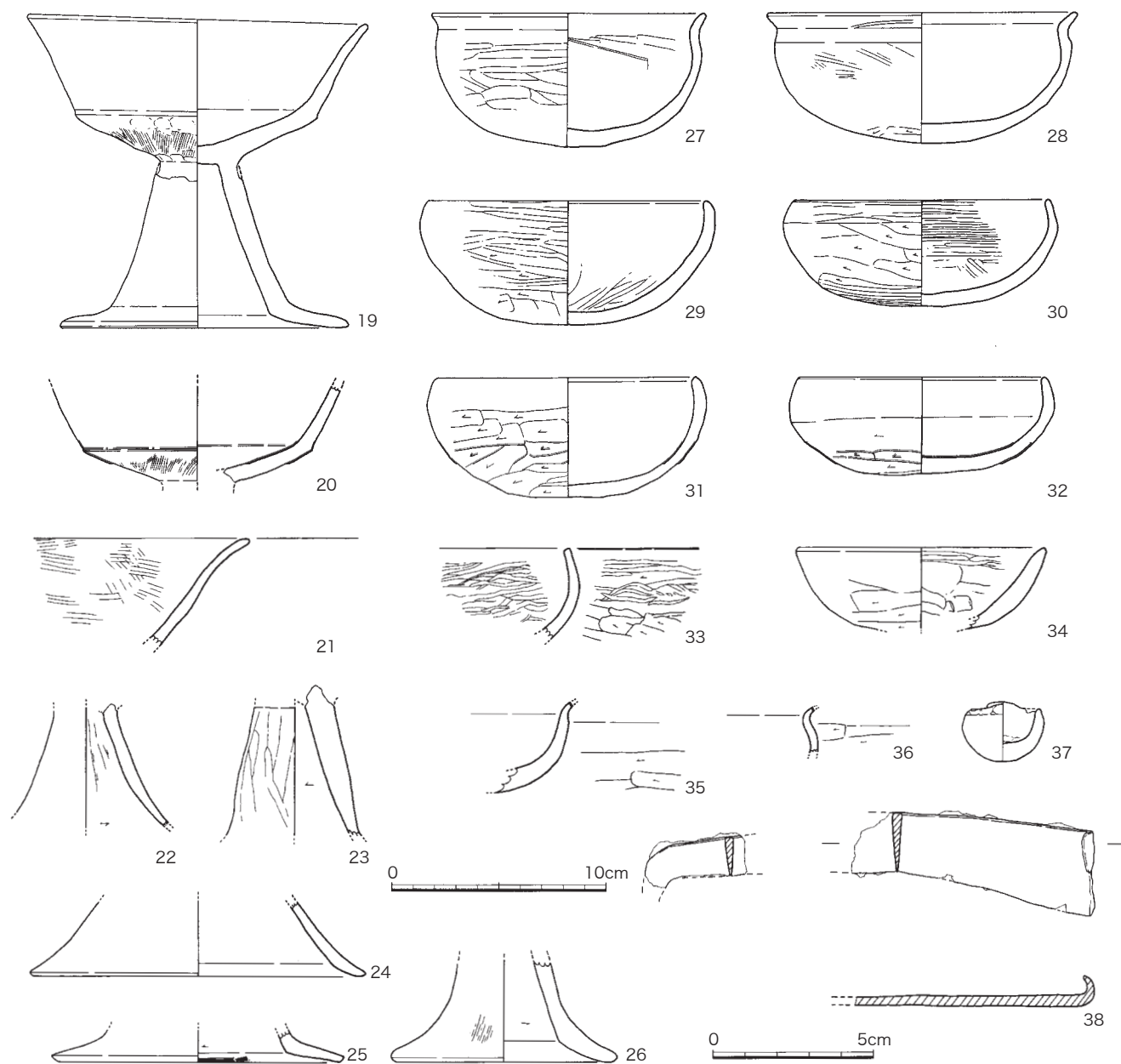
#### 2号竪穴住居 (第155図、図版41)

調査区北側にて検出され、2・3号竪穴状遺構を切り、住居中央部に溝による攪乱を受ける。確認面での規模は南北軸約4.8m、東西軸約4.8m、床面までの深さ約30cmを測り、方形を呈する。床面は地山整形で河原礫が多く見られた。支柱穴は判然とせず、約30cm程の深さのある柱穴が3穴確認されたものの、その展開は不明である。4本柱の建物構造ではなかった可能性も考えられる。住居南隅には完形の土師器碗が5点ほど重なった状態で出土し、中央部からは完形の高坏や甕、手捏土器などが密集して出土したことなどから、これらの遺物は廃棄時の祭祀行為に伴うものと考えられる。

カマドは住居中央部の攪乱のため判然としないが、北東壁側に若干の炭と焼土の飛散が確認された。やや南東壁側に寄っているがカマド痕跡と想定される。攪乱のため袖等の残存は確認できず、袖石等の抜き取り痕も見られなかった。壁側に炭の飛散が多く見られ、手前側に焼土の飛散が確認されたことから、手前側が火床面と考えられる。



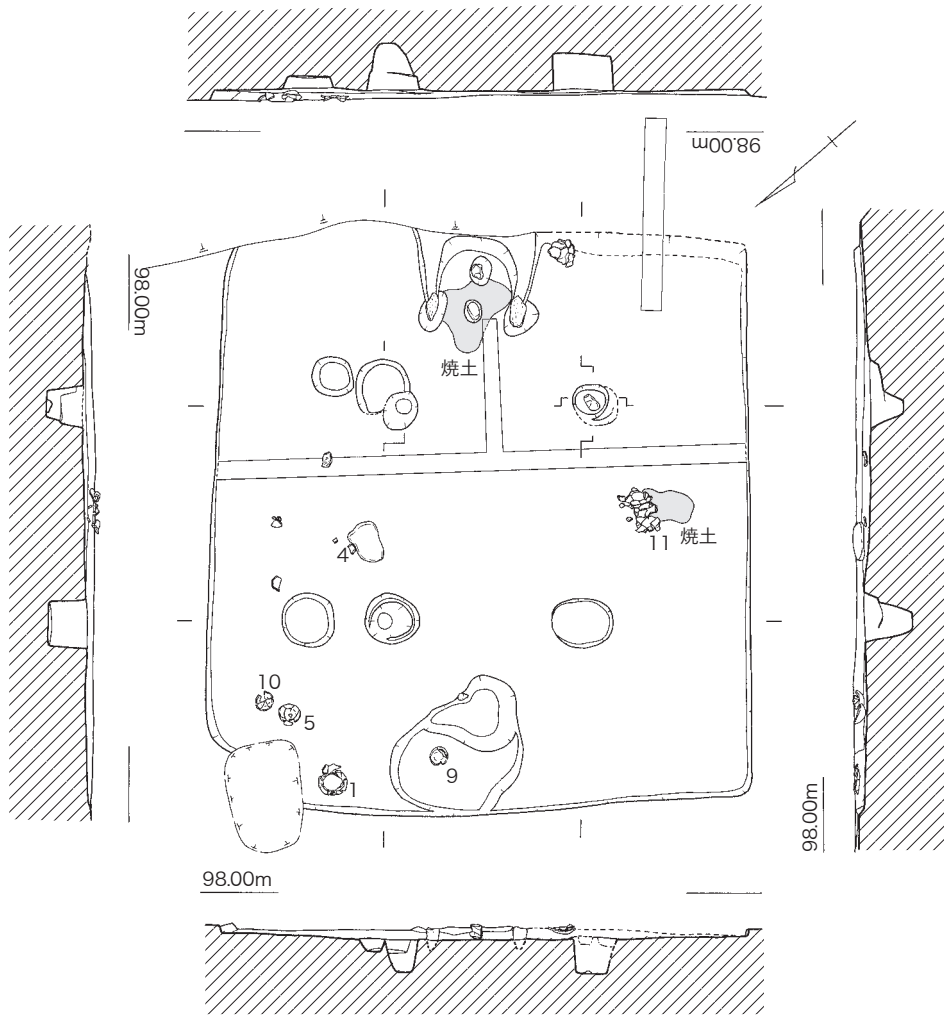
第156图 2号竖穴住居出土遺物実測図① (1/3)



第157図 2号竪穴住居出土遺物実測図② (1/3)

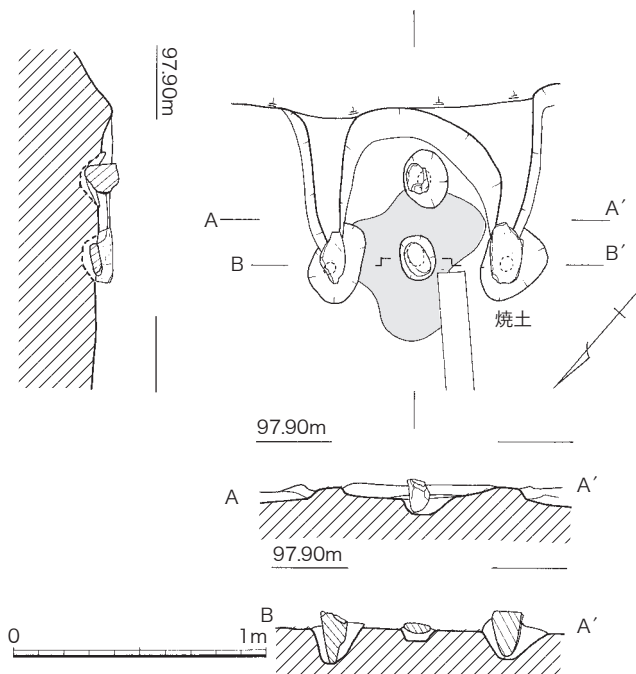
出土遺物 (第156・157図、図版47・48)

1～2は須恵器坏蓋である。口唇部内面に段を有する。3～6は須恵器坏身である。口縁部は内傾し立ち上がる。7は須恵器提瓶である。口唇部をやや肥厚させ外側に膨らむ。8は須恵器甕である。口縁部は外反し、口唇部を肥厚させて立ち上がり、口唇部外面に面を形成する。9～16は土師器甕である。9は頸部をケズリにより明瞭に作り出し、口縁部は短く立ち上がる。10・12～15は頸部を緩やかに屈曲させ、口縁部は緩やかに外反する。内面はケズリ調整、外面はハケのちナデのものが殆どで、12は不定方向に目の細かなハケが施される。11・16は小型甕である。11は頸部を削りにより明瞭に作り出し、口縁部はやや上方に立ち上がる。外面には、目の細かな縦方向のハケが施される。16は内傾し口縁部を小さく外反させる。成形時の粘土紐痕が残り、内面は口縁部にハケ調整、胴部には指頭圧痕が残る。17・18は土師器甕である。17は口縁部をやや肥厚させ、内面にはケズリが残る。18は口縁部にかけてやや細くなり、外面は縦ハケ、内面には横ハケが施される。19～26は土師器高坏である。19・20は坏部に明瞭な段を有し、口縁部は緩やかに外反



第158図 3号竖穴住居実測図 (1/60)

する。坏部底面はハケ調整が施される。脚部は外側に開き、脚底部を明瞭に屈曲させる。21は口縁部が外側に開き、口唇部を緩やかに外反させる。24は脚底部に屈曲が殆ど見られず、25・26は脚底部を明瞭に屈曲させる。27～36は土師器碗である。27・28・35・36は口縁部を外反させる。27は内面ケズリ、外面ミガキ調整が残る。29～33は口縁部を内湾させる。内面はハケ、ナデ調整で33はミガキ調整が残る、外面は手持ちヘラケズリ、のちミガキである。34は口縁部が外に開き、や

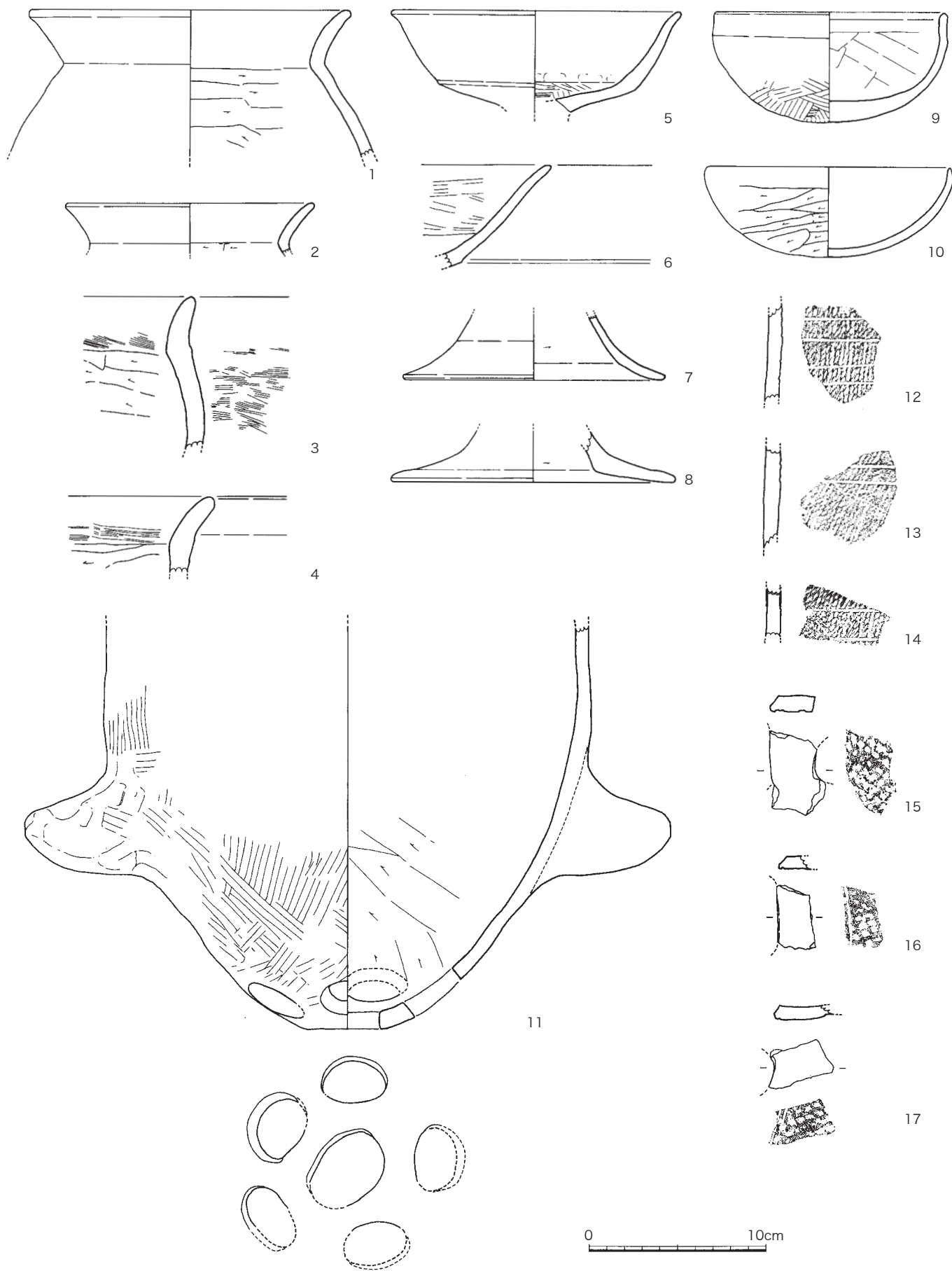


第159図 3号竖穴住居カマド実測図 (1/30)

や肉厚である。内外ケズリ、口縁部内面にはミガキが残る。37は手捏土器である。38は鉄鎌であると思われる。同一個体と考えられる先端部及び基部の破片が2点出土しており、先端部は下方に屈曲しており、基部は着装のため内側に折り曲げられている。

### 3号竖穴住居 (第158・159図、図版41)

調査区中央部にて検出され、4号住居跡を切っている。おそらく4号住居の作り変えによるものと考えられる。確認面での規模は、東西軸約4.6m、南北軸約4.3m、深さ約15cmを測り、方形を呈する。床面には灰黄褐色土の貼床が施され、深さ約30～40cmの支柱穴が4穴見られる。カマドと反対側壁には屋内土坑が見られ、南壁側には4号住居のカマド痕と思われる焼土の飛散が



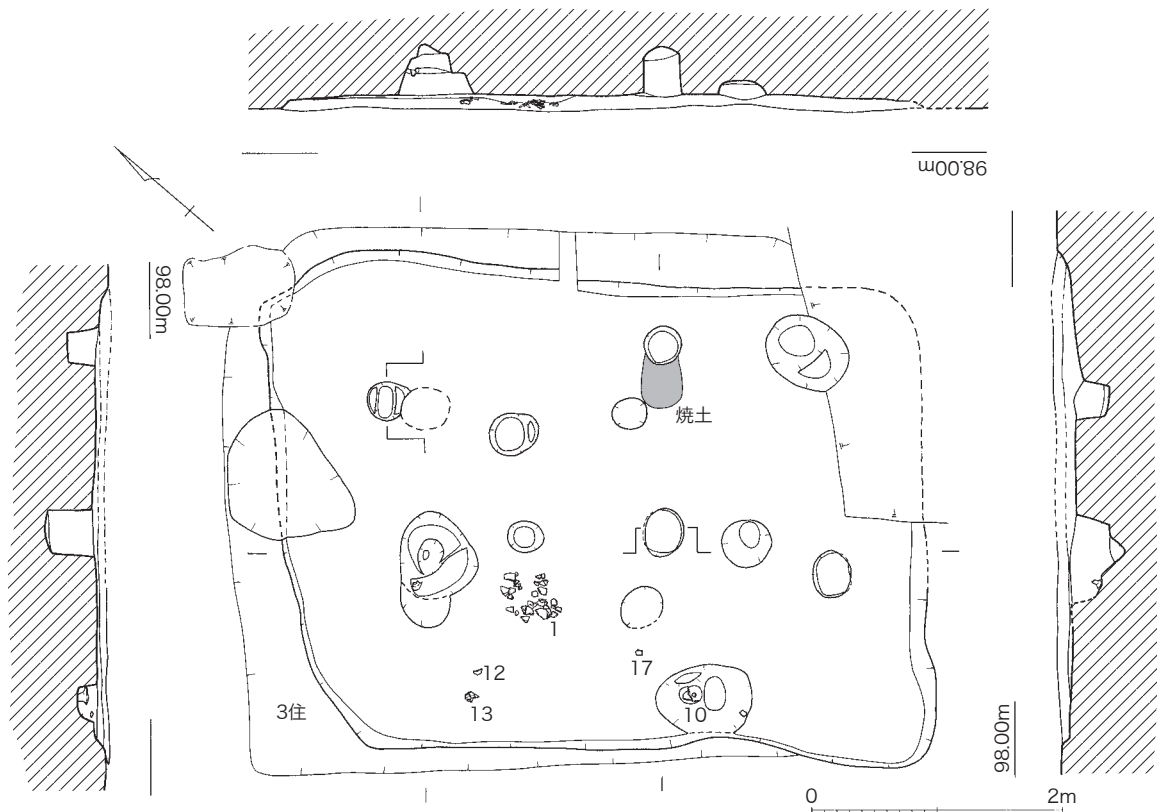
第160图 3号竖穴住居出土遗物实测图 (1/3)

見られ、4号住居の廃棄後、ほぼ直上に住居を作り変えたものと思われる。遺物は住居南隅に甕、高坏、碗などが固まって出土していることから、北西壁側の多孔式甕も含めて、廃棄時の祭祀行為に伴うものと考えられる。

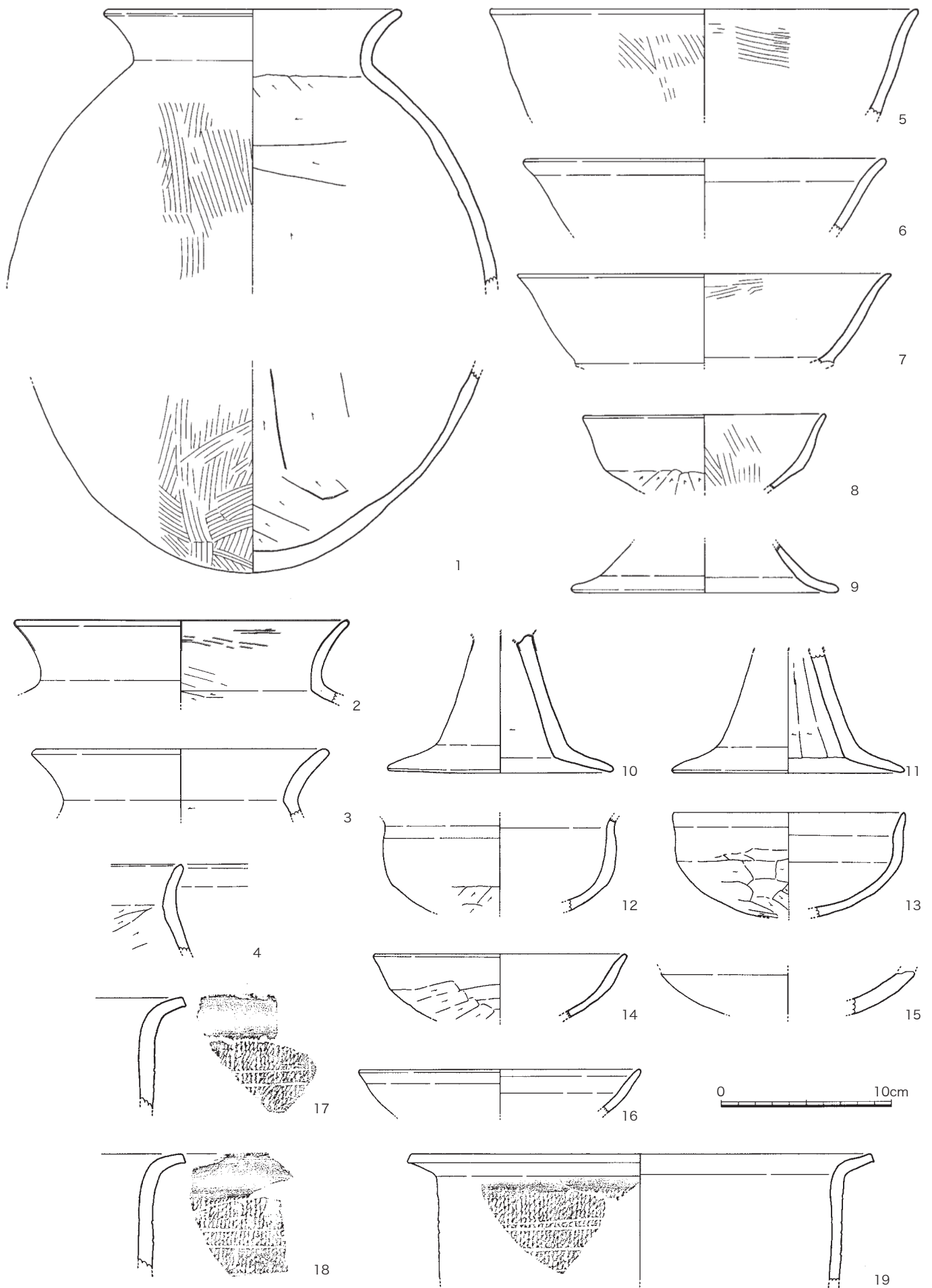
カマドは住居南東壁内側に付設される。上面を破壊されているが、袖、袖石、支脚などが残り、両袖間の距離約55cm、両袖の長さ約70cmを測り、両袖間の被熱箇所が火床面で、中央部に小さな河原石が据えられていた。袖は暗灰褐色の砂質粘性土を使用しており、袖石には凝灰岩が用いられ、支脚は袖口より約40cm奥に凝灰岩製の石が据えられていた。

#### 出土遺物 (第160図、図版49・50)

1～4は土師器甕である。1・2はケズリにより頸部を明瞭に屈曲させ、口縁部を外反させる。3・4は小型甕で、頸部を緩やかに外反させる。5～8は土師器高坏である。5・6は坏底部から口縁部にかけて段を有して屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。7・8は脚柱部から端部にかけて屈曲し、外に開く。9・10は土師器碗である。口縁部は内湾し上方に立ち上がる。9は外面にハケメ、10は手持ちヘラケズリが施される。11は多孔式の土師器甕である。口縁部は残存していないが、把手がやや下方につき、底部は丸底気味を呈する。底面には残存する孔から、中央にやや大きめの1孔があり、その周囲に5孔が配されると想定される。内面はケズリ、外面はハケメ調整である。12～17は朝鮮半島系の軟質土器である。12～14は鉢の破片で、器壁外面に縄文タタキが施されるいわゆる縄蓆文土器である。いずれも焼成は良好で、淡赤褐色を呈し、12・14の外面は淡黒色を成す。胴部破片と想定され、縄文タタキの後に沈線が数条巡らされる。15～17は器壁外面に格子目タタキが施される多孔式の甕の破片と考えられる。いずれも焼成は良好で淡赤褐色を呈し、15は外面に黒斑が見られる。15は両側に孔の痕跡が残り、16・17は片面に孔の痕跡が見られ、孔端部に沈線が巡る。



第161図 4号竪穴住居実測図 (1/60)



第 162 图 4 号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)

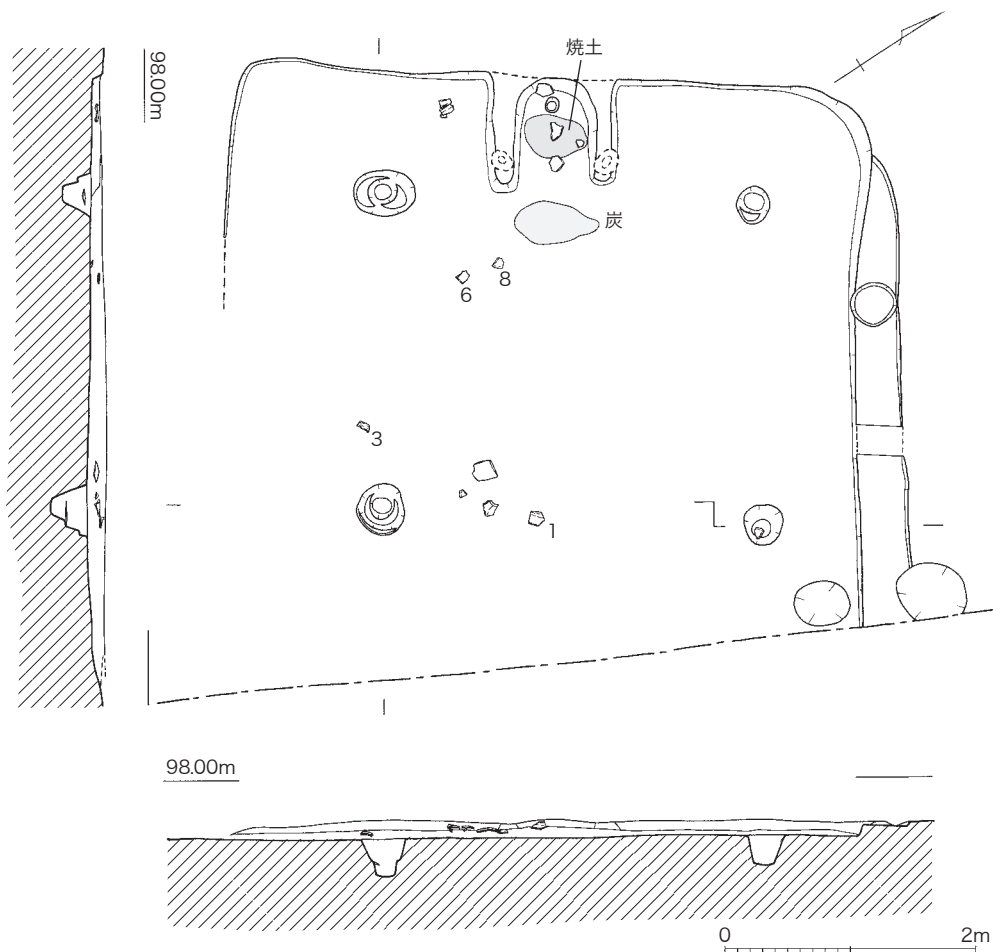
#### 4号竪穴住居（第161図、図版42）

調査区中央にて検出され、3号住居に切られる。確認面での規模は南北軸約4.0m、東西軸約5.2m、深さ約10cmを測り、長方形を呈する。床面は地山整形で河原礫が多く見られた。深さ40cm程の柱穴が幾つか確認されたものの、その対応は不明である。カマドの対面の南西壁には小さな屋内土坑が付設される。住居西隅側には甕が1個潰れた状態で出土し、屋内土坑とP-1からは高坏の脚部が反転した状態で出土しており、廃棄時の祭祀行為が想定される。

カマドは北東壁側に焼土の硬化面が見られることからカマド痕跡と想定される。3号住居の建替え時に破壊を受けており、残存状況がかなり悪い。袖石、支脚の抜取り痕も確認できなかった。

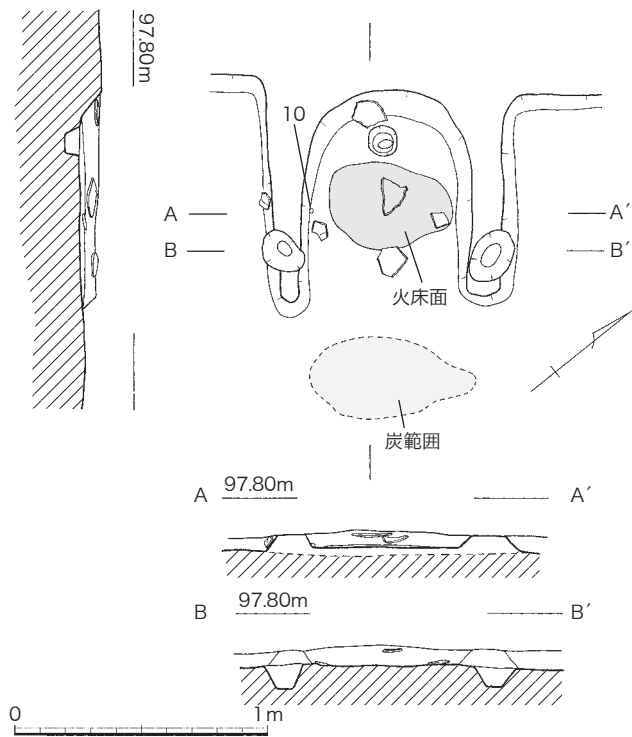
#### 出土遺物（第162図、図版50・51）

1～3は土師器甕である。ケズリにより頸部を明瞭に屈曲させ、口縁部は緩やかに外反する。1は胴部接合部が残存していない同一個体で底部は丸底を呈し、内面ケズリ、外面ハケメ調整である。4は土師器小型甕で、口縁部を緩やかに屈曲させる。5～11は土師器高坏である。5～8は坏底部に段を有し、いずれも口縁部がやや外側に開き、口縁端部を緩やかに外反させる。9は脚端部を外側に開き、10・11は脚柱部から端部にかけて屈曲させ外側に開く。12～16は土師器碗である。12・13は口縁端部を緩やかに外反させる。14～16は口縁部が大きく外へ開く。17～19は朝鮮半島系軟質土器の鉢の破片で、器壁外面に縄文タタキが施されるいわゆる縄蓆文土器である。いずれも焼成は良好で、淡赤褐色を呈し、17・19の外面は淡黒色を成す。口縁部は緩やかに外反し、端部に面を成す。頸部下半より縄文タタキののち数条の沈線が巡らせる。3号住居出土の縄蓆文土



第163図 5号竪穴住居実測図 (1/60)



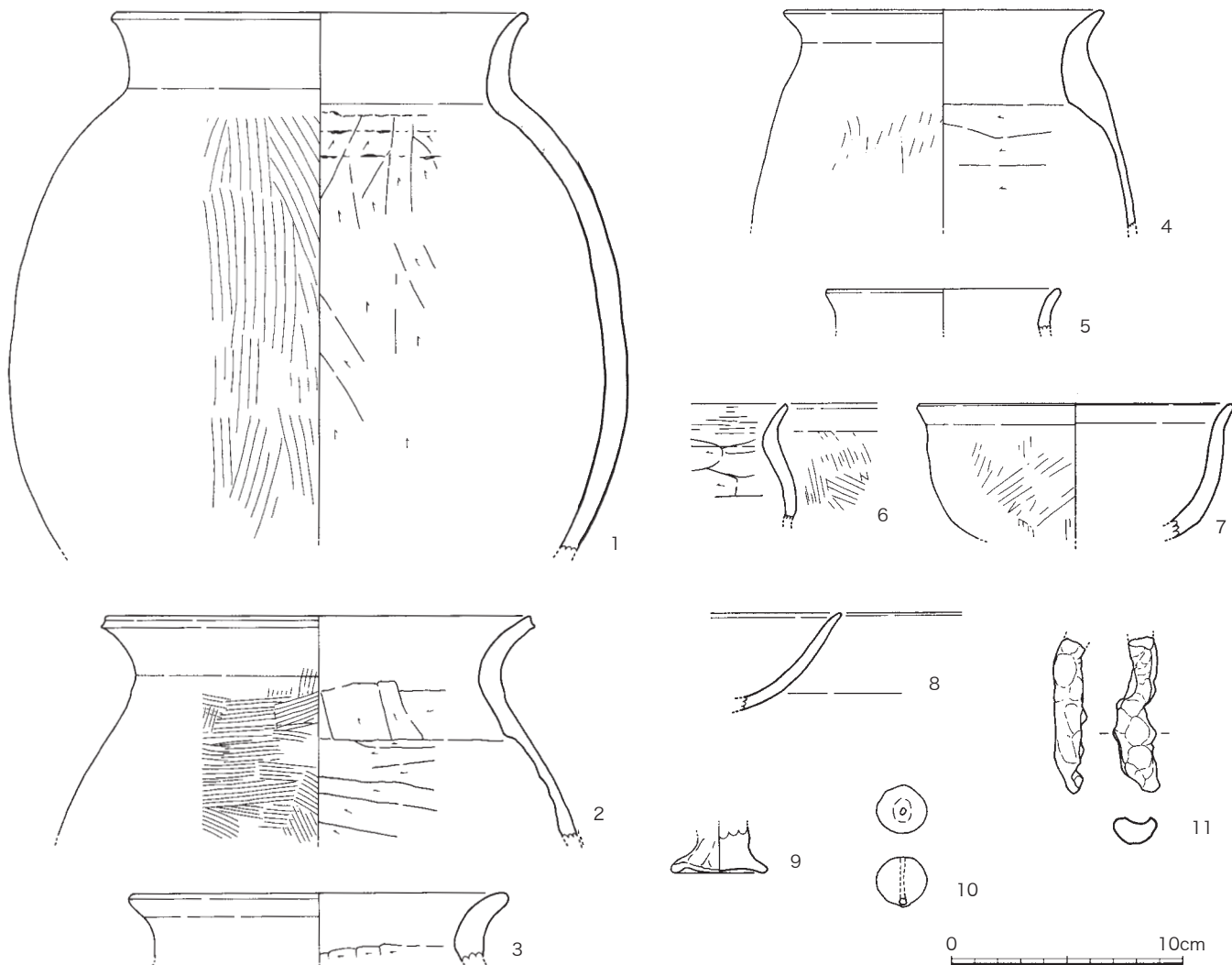


第 164 図 5 号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

器と同一個体の可能性が考えられる。3・4号住居跡が重複関係にあることから、調査時の遺物取上の際に混入した可能性も考慮する必要がある。

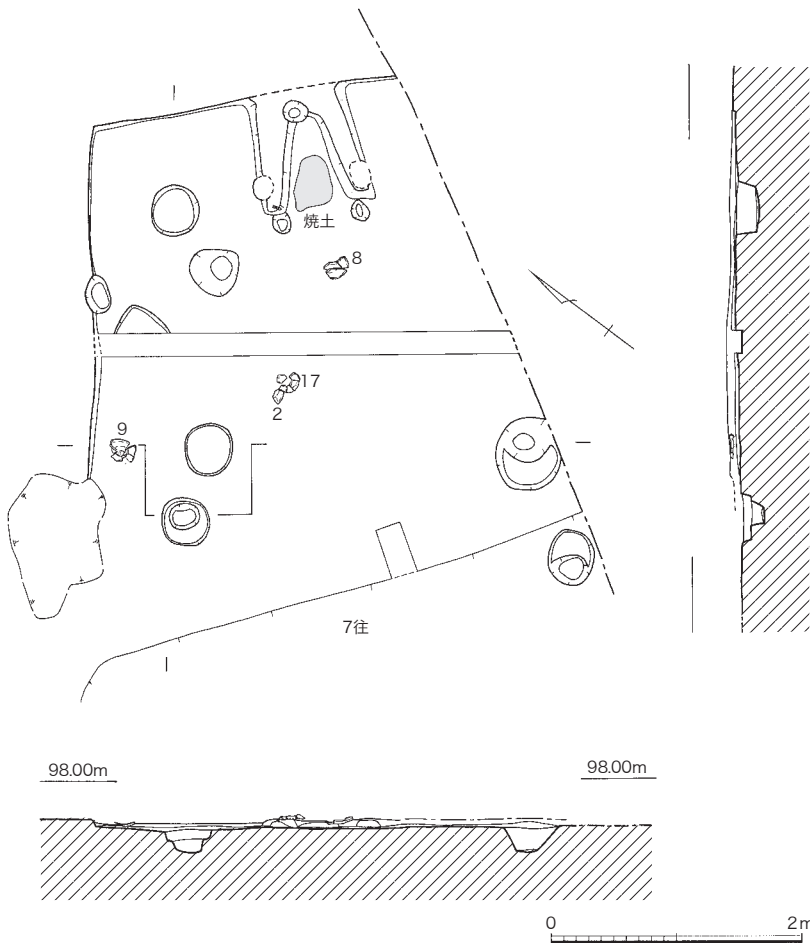
5号竪穴住居 (第 163・164 図、図版 42)

調査区南東側にて検出され、6号住居に近接し、南側が削平を受けて壁が残存していない。確認面での規模は東西軸約 4.8 m + α、南北軸約 5.1 m、深さ約 10cm を測り、方形を呈する。北側壁の外側に浅い段を有しており、住居の建替えがあった可能性が考えられる。床面は地山整形で河原石が多く見られ、部分的に灰黄褐色土の貼床が施される。深さ 30cm 程の支柱穴が 4 穴確認され 4 本柱の建物構造であったと想定される。住居の南東側に土器の集中が見られ、カマド内、及びその周辺にも遺物の集中が見られたことから、廃棄時の祭祀行為があったと考えられる。



第 165 図 5 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

カマドは住居北西壁中央部内側に付設されており、上面の大部分が破壊を受けているが、袖が残存し、両袖間の距離約 57cm、両袖の長さ約 90cm を測り、両袖口よりやや奥に位置し、被熱箇所が火床面で、袖口の手前には炭の飛散が確認された。この炭はカマドの灰の掻き出しによるものと考えられる。袖は黒色粒子の混じる黄褐色砂質土で形成され、袖石の残存は見られないが、両袖の中に練り込むように袖石の抜き取り痕がみられ、支脚は火床面より奥の、壁から 20cm ほどの位置に抜き取り痕が見られた。カマド内部には土器破片が散乱するとともに、土玉が出土したことから、廃棄時のカマド祭祀が行われた可能性が考えられる。



第 166 図 6 号竪穴住居実測図 (1/60)

出土遺物 (第 165 図、図版 51)  
1～4 は土師器甕で頸部をやや肥厚させて、ケズリにより頸部内面に段を形成し、口縁部を緩やかに外湾させる。5・6 は土師器小型甕である。口縁部を小さく外反させる。7 は土師器である。口縁部を小さく外反させる。8 は土師器高杯の口縁部である。9 はミニチュアの高杯の底部か、手捏で成形される。10 は土玉である。中央に 1mm ほどの孔を穿つ。外面はナデにより丁寧に仕上げられる。11 は不明土製品である。粘土塊を棒状に伸ばしたような形状をとり、指頭圧痕が多数残る。

11 は不明土製品である。粘土塊を棒状に伸ばしたような形状をとり、指頭圧痕が多数残る。

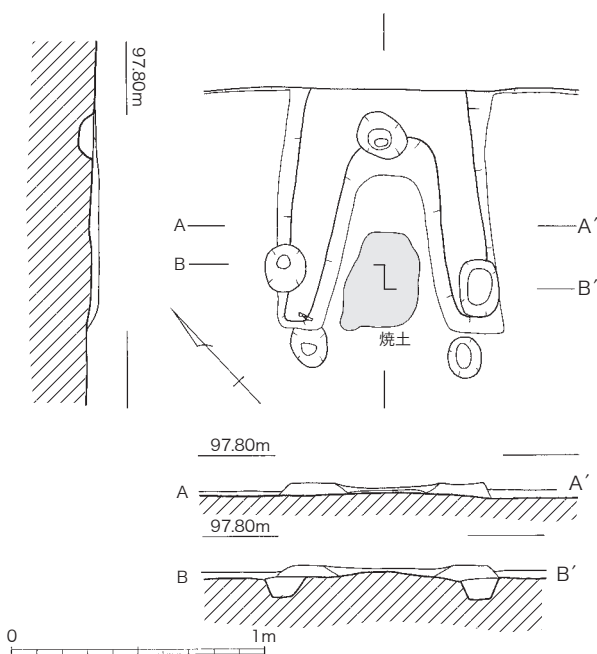
6 号竪穴住居 (第 166・167 図、図版 42)  
調査区南東側にて検出され、5 号住居に近接し、南西側の壁は削平のため残存していない。確認面での規模は南北軸約 2.8 m + α、東西軸約 3.7 m + α、深さ約 5cm を測り、方形を呈する。床面には貼床が貼られ、深さ 25cm 程の柱穴が 3 穴確認され、4 本柱の建物構造であると想定される。住居跡中央部には高杯などの土器が点在して廃棄される。  
カマドは北西壁内側に設置される。上面を破壊されているが、袖が残存し、両袖間の距離約 50cm、両袖

る。11 は不明土製品である。粘土塊を棒状に伸ばしたような形状をとり、指頭圧痕が多数残る。

6 号竪穴住居 (第 166・167 図、図版 42)

調査区南東側にて検出され、5 号住居に近接し、南西側の壁は削平のため残存していない。確認面での規模は南北軸約 2.8 m + α、東西軸約 3.7 m + α、深さ約 5cm を測り、方形を呈する。床面には貼床が貼られ、深さ 25cm 程の柱穴が 3 穴確認され、4 本柱の建物構造であると想定される。住居跡中央部には高杯などの土器が点在して廃棄される。

カマドは北西壁内側に設置される。上面を破壊されているが、袖が残存し、両袖間の距離約 50cm、両袖

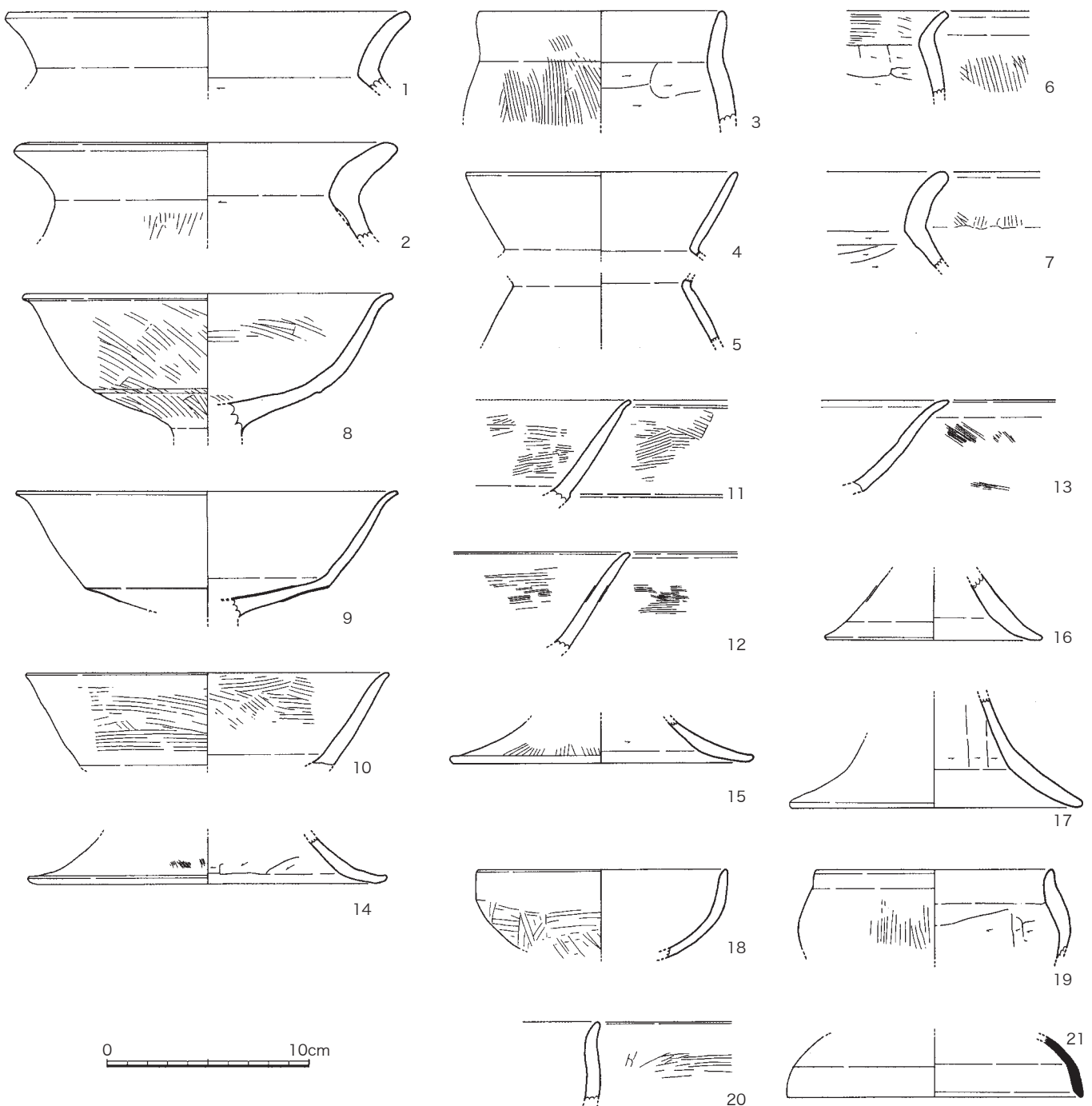


第 167 図 6 号竪穴住居カマド実測図 (1/30)

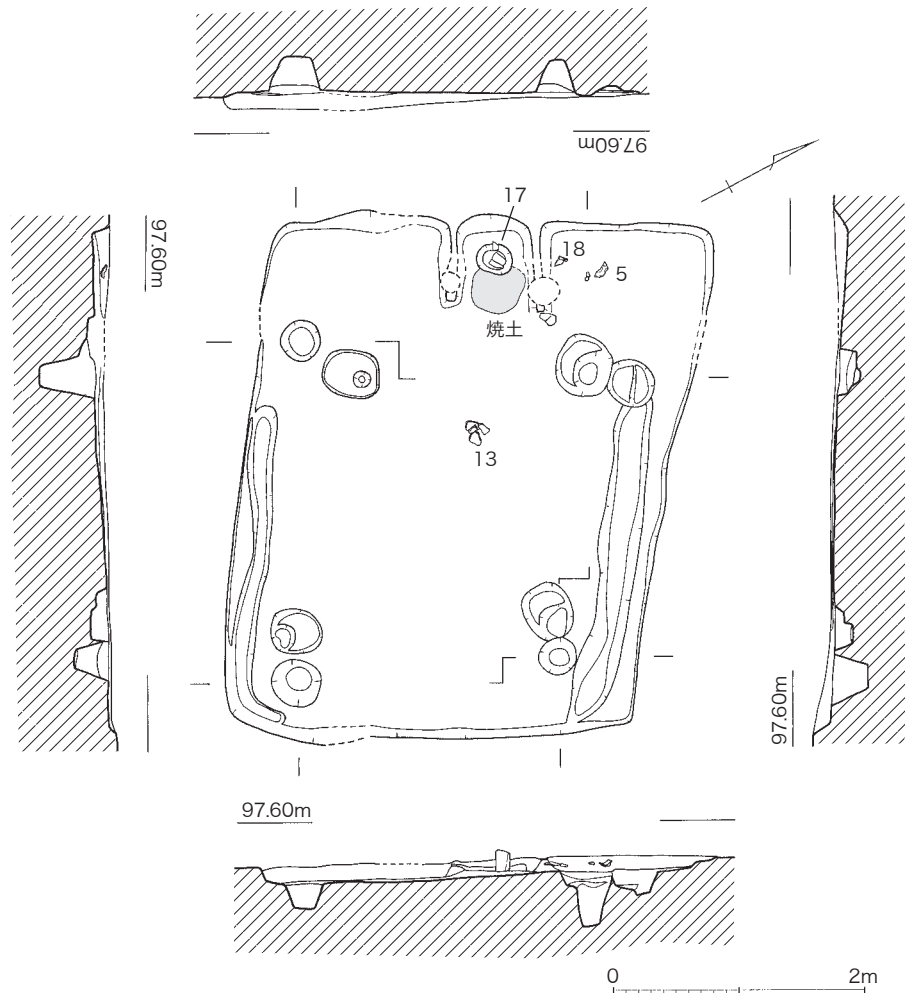
の長さ約 90cm を測り、やや外側に開き、両袖間の被熱箇所が火床面である。袖は黒色粒子の混じる黄褐色砂質土で形成され、袖石の残存は見られないが、両袖の中に練り込むように袖石の抜き取り痕がみられ、両袖の手前にも浅く小さなピットが見られた。あるいはこれらのピットも袖石抜き取り痕の可能性が考えられる。支脚は火床面より奥の、壁から 20cm ほどの位置に抜き取り痕が見られた。カマド奥壁は住居壁よりも手前で立ち上がっており、他の住居とはやや構造が異なる。

出土遺物 (第 168 図、図版 51・52)

1～7 は土師器甕である。1・2 は頸部を明瞭に屈曲させる。3～6 は小型甕で、3 は口縁部が緩やかに立ち上がる。4・5 は同一個体の可能性が高く、頸部を明瞭に屈曲させる。あるいは小形丸底壺か。6 はやや大きく外へ開く。7 は破片のため不明であるが、小型甕か。8～17 は土師器高坏である。いずれも坏底部に段を有し、口縁部は緩やかに外反する。内外共にハケメ調整である。



第 168 図 6号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



第169図 7号竖穴住居実測図 (1/60)

14から17は脚底部で、14・15は脚端部を屈曲させ外に開き、端部はやや上方に上がる。16・17は緩やかに外に開く。18は土師器椀である。19・20は鉢か。上方に立ち上がり、胴部に丸みを帯びる。21は須恵器坏蓋である。口縁端部内面に段を有する。

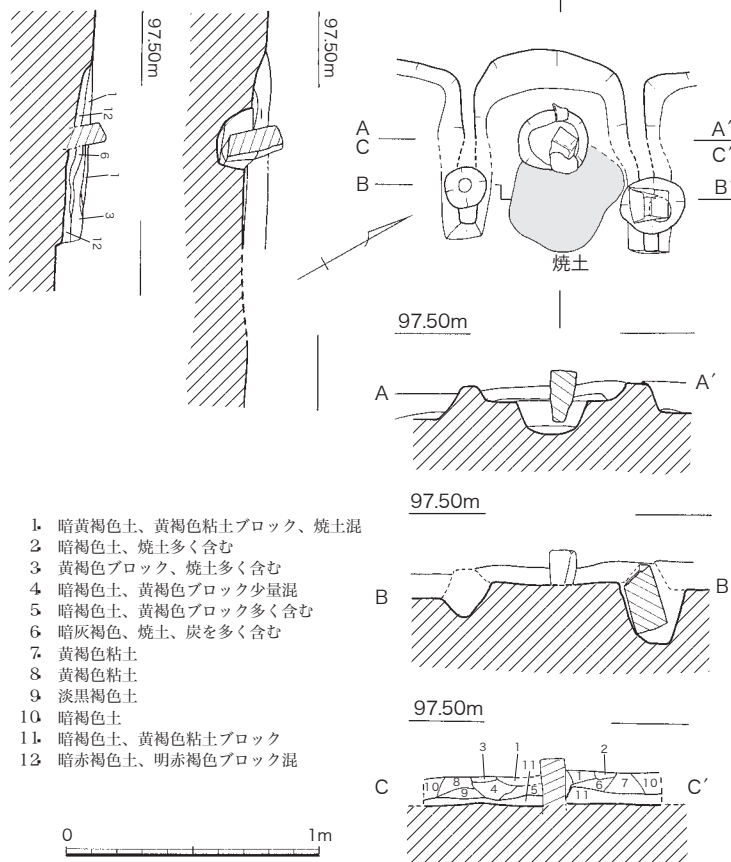
7号竖穴住居

(第169・170図、図版42・43)

調査区西側にて検出され、8号住居、1号溝を切る。確認面での規模は、東西軸約4.1m、南北軸約3.4m、深さ約15cmを測り、やや南側に歪み平行四辺形状を呈する。床面には灰黄褐色

土の貼床が施され、深さ約30cm程の柱穴が4本ほど見られ、4本柱の建物構造が想定される。住居南西壁、北東壁側には部分的に壁周溝が巡る。遺物はカマド周辺に集中しており、カマド祭祀の可能性が考えられる。

カマドは住居北西壁内側に付設される。上部を破壊されているが、袖、袖石、支脚などが残り、両袖間の距離約50cm、両袖の長さ約70cmを測り、両袖間の被熱箇所が火床面である。袖は黄褐色の粘土を使用しており、右袖には袖に練り込むように安山岩質の袖石が残り、左袖には拔取り痕が見られた。支脚は火床面のやや奥、奥壁より70cm手前に安山岩質の石を黄褐色粘土で固定して据えていた。袖と同一の粘土ブロック



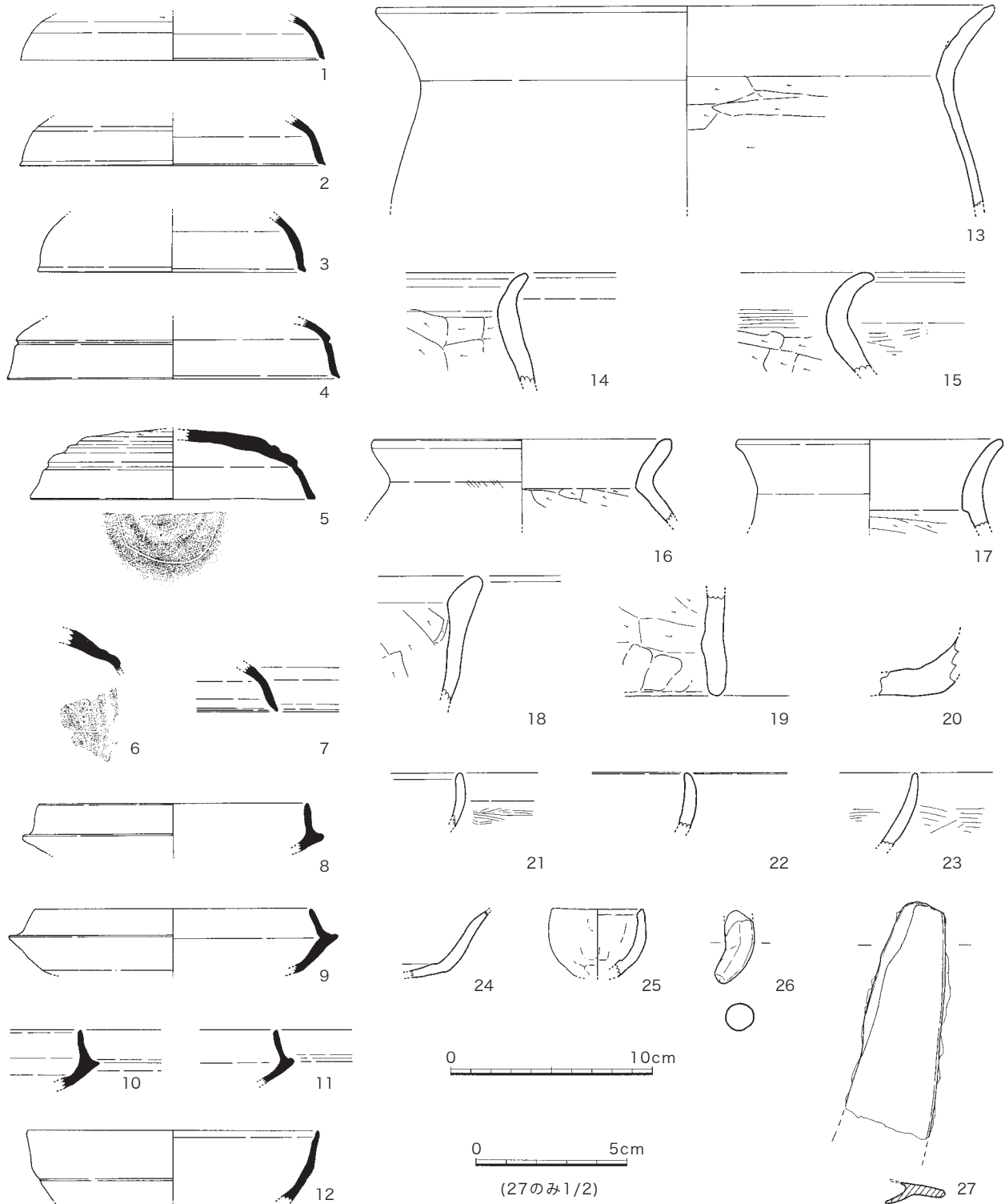
第170図 7号竖穴住居カマド実測図 (1/30)

- 1 暗黄褐色土、黄褐色粘土ブロック、焼土混
- 2 暗褐色土、焼土多く含む
- 3 黄褐色ブロック、焼土多く含む
- 4 暗褐色土、黄褐色ブロック少量混
- 5 暗褐色土、黄褐色ブロック多く含む
- 6 暗灰褐色、焼土、炭を多く含む
- 7 黄褐色粘土
- 8 黄褐色粘土
- 9 淡黒褐色土
- 10 暗褐色土
- 11 暗褐色土、黄褐色粘土ブロック
- 12 暗赤褐色土、明赤褐色ブロック混

の崩落が火床面の上に見られ、支脚より手前側に多く見られることから、カマド祭祀時に手前に引き倒して壊したものと思われる。

出土遺物 (第 171 図、図版 52・53)

1～7は須恵器坏蓋である。いずれも、口縁端部内側に段を有し、5は端部を平坦に仕上げている。4～6は天井部と口縁部に段を有する。うち、5・6は内面にヘラ記号が施される。8～11は須恵器坏身である。口縁部はやや上方に立ち上がる。12は須恵器無蓋高坏である。坏底部から口縁部にかけて段を有し、口縁端部内面に段を有する。13～18は土師器甕である。13・16は頸部を



第 171 図 7号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

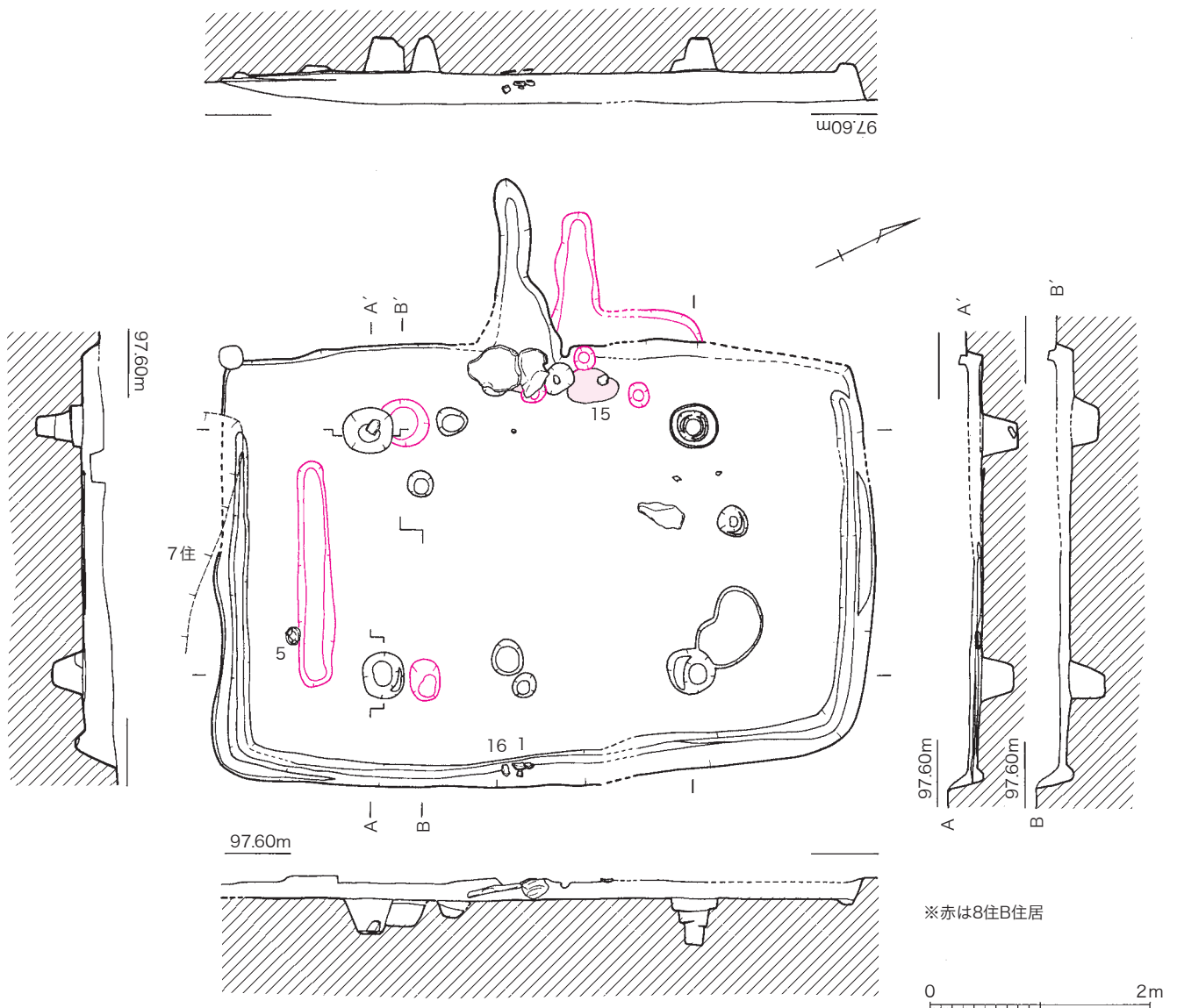
明瞭に屈曲させて口縁部は外に開き、15・16は緩やかに外反し、14は口縁部が小さく外反する。18は小形甕で頸部をやや肥厚させる。19は甑の底部、20は甕の底部である。21～23は土師器椀である。口縁部がやや内湾する。24は土師器高坏で、坏底部に明瞭な段を有する。25は手捏土器である。26は土製勾玉か。27はU字形鋤先の基部である。着装部は断面Y字状を呈する。

8号竪穴住居（第172・173・174図、図版43）

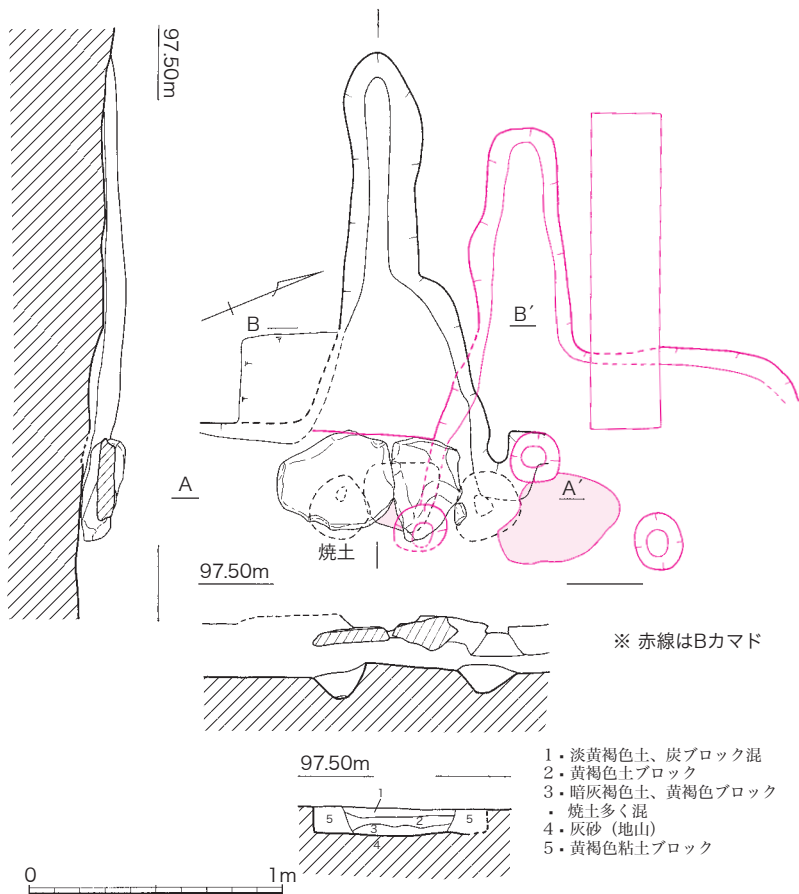
調査区の西側にて検出され、7号住居に切られ、1号溝を切っている。この住居は作り替えを行っており、住居プランを南側に約30cm拡張し、カマドも横にずれて作り変えている。拡張後と拡張前の住居をそれぞれA住居、B住居と区分して説明する。

A住居 確認面での規模は東西軸約4.0m、南北軸約6.0m、深さ約20cmを測り、長方形を呈する。床面には灰黄褐色土の貼床が施され、深さ約40cmの支柱穴が4本確認され、北西方向を除く全方向に壁周溝が巡る。カマドと反対の南東側壁際に遺物の集中が見られ、廃棄時の祭祀行為の痕跡と考えられる。

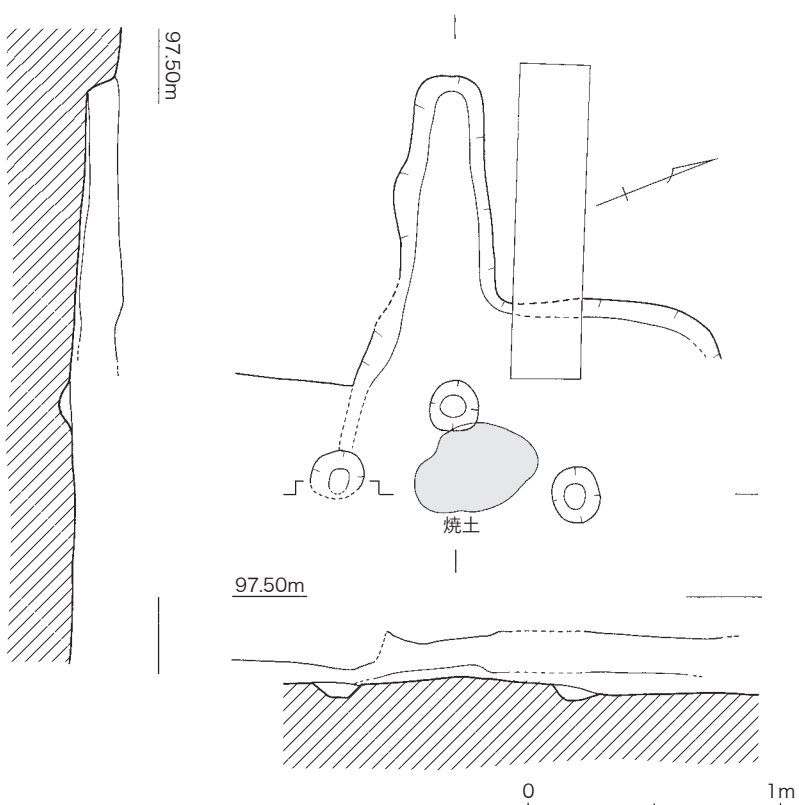
カマドは北西壁中央内側に設置され、上部を破壊されているが、右袖の一部が残り、袖石等に使用されていた凝灰岩質の石が火床面直上に引き倒されていた。この袖石を除去するとその下に抜取



第172図 8号竪穴住居実測図(1/60)



第 173 図 8 号竪穴住居 A カマド実測図 (1/30)

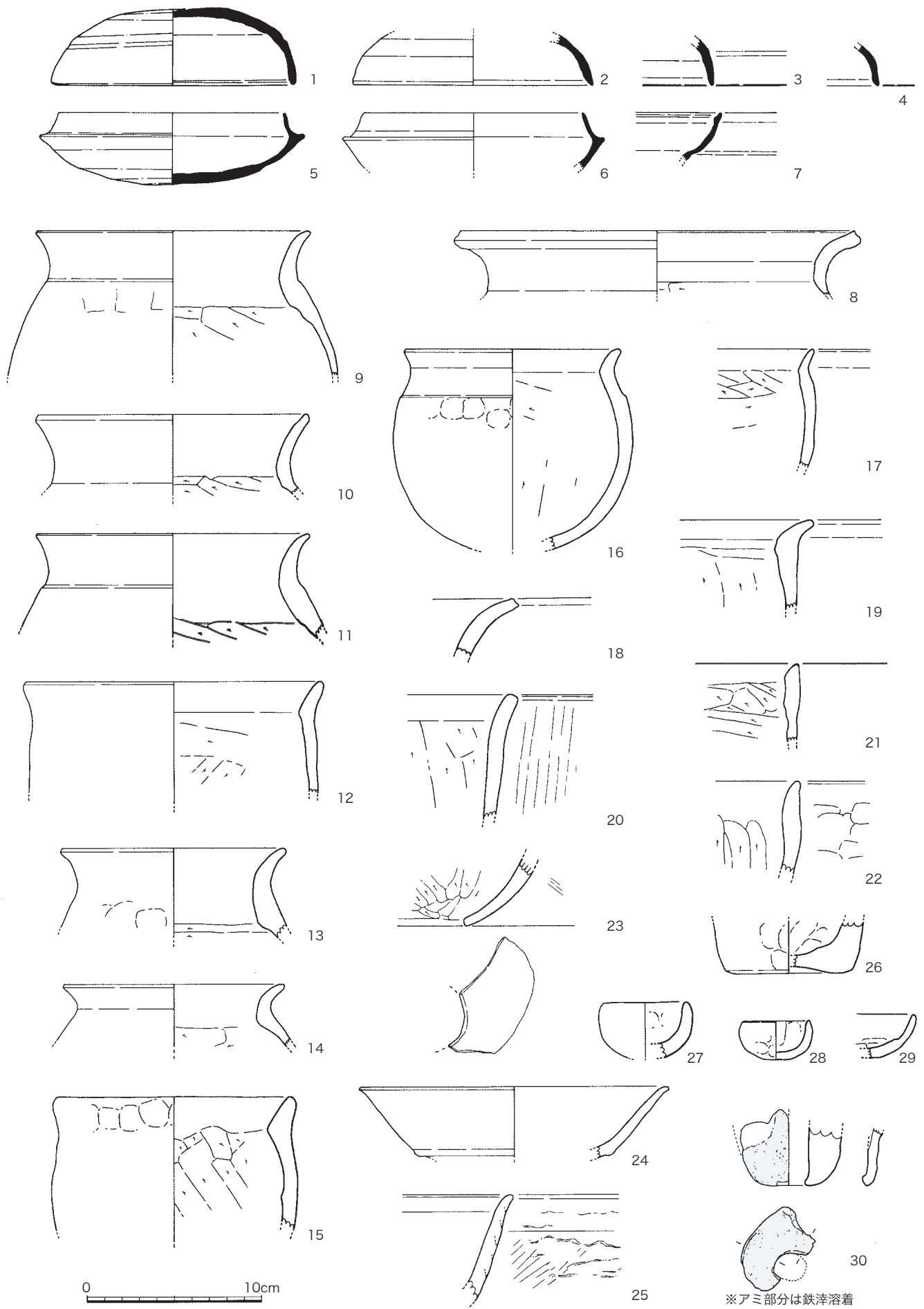


第 174 図 8 号竪穴住居 B カマド実測図 (1/30)

り痕が確認され、この抜き取り痕から想定される両袖間の距離約 35cm、袖の長さ約 25cm を測り、両袖石抜き取り痕間の被熱箇所が火床面である。袖は暗灰褐色の砂質粘性土を使用して作られていた。おそらく、左袖はカマド祭祀時に破壊されたものと考えられる。支脚痕跡は確認されなかったことから、土器などが用いられていた可能性が考えられ、カマド奥壁には最大幅約 70cm、奥行約 1.5 m の手前側が広がった形状の煙道が備えつけられていた。

**B 住居** A 住居の拡張に伴い破壊を受けているが、南側の壁周溝の一部が残存していたことから、想定される規模は東西軸約 4.0 m、南北軸約 5.25 m を測り、長方形を呈する。床面には灰黄褐色土の貼床が施され、A 住居の南側の支柱穴に切られる深さ約 30cm の支柱穴が 2 本確認され、北側には作り替え前の痕跡は確認できなかったことから、北側の柱穴は再利用されたものと考えられる。

カマドは北西壁中央内側に設置され、A 住居カマドに左側を破壊されている。右側は住居壁よりも若干外に張り出した掘り込みがあり、カマド構築時の掘り込みの可能性が考えられる。両袖共に残存していないが、左右抜き取り痕が確認され、この抜き取り痕から想定される両袖間の距離約 70cm、袖の長さ約 40cm を測り、両袖石抜き取り痕間の被熱箇所が火床面である。支脚抜き取り痕は火床面のすぐ



第 175 図 8号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



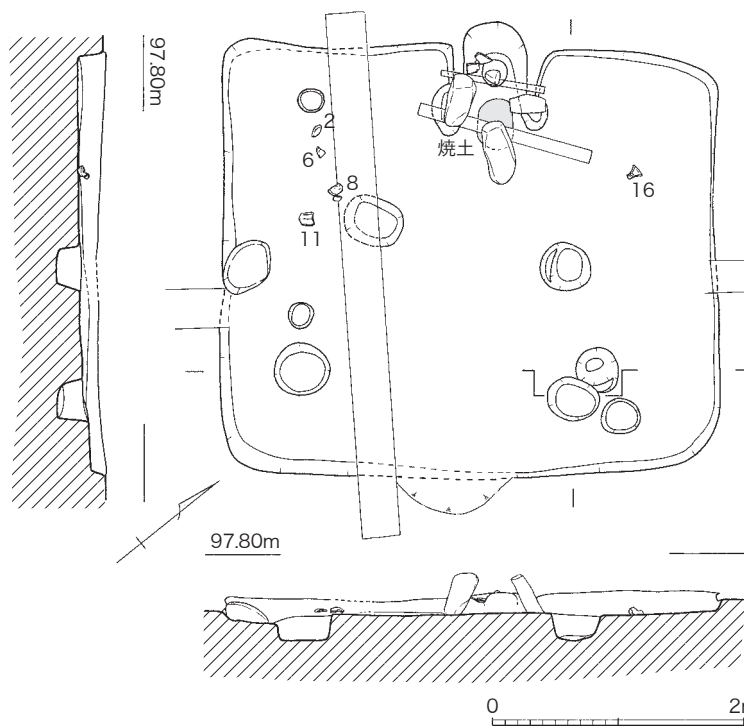
奥にて確認され、カマド奥壁には最大幅約 40cm、奥行約 1.2 mの手前側が広がった形状の煙道が備えつけられていた。

#### 出土遺物 (第 175 図、図版 53・54)

1～4 は須恵器坏蓋である。いずれも口縁端部内面に段を有し、うち、1・3 は天井部と体部の間に沈線による段を有する。5・6 は須恵器坏身である。口縁部はやや内湾してから上方に立ち上がる。7 は須恵器疎である。口縁部は屈曲し、内湾しながら立ち上がる。口縁端部内面には段を有する。8～19 は土師器甕で、うち 9 は B 住居の煙道より出土した。8 は頸部を明瞭に屈曲させ、口縁部は肥厚し、外反する。9～11・13・14 は頸部を肥厚させ、口縁部は外反する。12・17・19 は口縁部を小さく外反させる。18 は口縁端部を平滑に仕上げる。15・16 は小型甕である。頸部を肥厚させ、ケズリにより頸部に段を形成し、口縁部は小さく外反する。全体に丸みを帯びる。20～23 は土師器甕である。20～22 は口縁部が真っ直ぐに立ち上がる。23 はカマドより出土した甕の底部で、蒸気孔の痕跡がやや小さいことから、単孔ではなく、多孔の可能性が考えられる。24・25 は土師器高坏である。いずれも口縁部を緩やかに外反させ、24 は坏底部に段を有する。26 は土師器手掬の土器底部である。円筒状を呈し、やや上げ底気味である。27～29 は手掬土器である。30 はカマドより出土した鞆羽口である。外面には鉄滓が溶着しており、先端部は丸く仕上げられる。

#### 9 号竪穴住居 (第 176・177 図、図版 43・44)

調査区西側より検出され、10 号住居、1 号溝を切る。確認面での規模は南北軸約 3.4 m、東西軸約 3.9 m、深さ約 20cm を測り、方形を呈する。床面は地山整形で、河原石が多く見られた。主柱穴は判然とせず、約 20cm 程の深さのある柱穴が数穴確認されたものの、その展開は不明である。4 本柱の建物構造ではなかった可能性が考えられる。遺物はカマド内と住居西隅に遺物の集中が見られ、廃棄時の祭祀行為の痕跡と考えられる。



カマドは住居北西壁中央内側に付設されており、上面を破壊されているが、両袖石、支脚が残る。両袖間の距離約 50cm、両袖の長さ約 50cm を測り、両袖間よりやや手前の被熱箇所が火床面で、奥壁はやや外側に飛び出ている。火床面の直上には安山岩製の天井石が手前に引き倒された状態で出土した。袖は黄褐色土を使用しており、やや手前に倒れた状態で安山岩製の袖石が据えられ、支脚は奥壁から 40cm 手前に安山岩製の石が据えられていた。土層の観察では、袖に使用されていた黄褐色土ブロックは火床面側に多く見られることから、祭祀時にカマドを手前側に向かって引き倒して破壊し

第 176 図 9 号竪穴住居実測図 (1/60)

たものと想定される。

出土遺物 (第 178 図、図版 55)

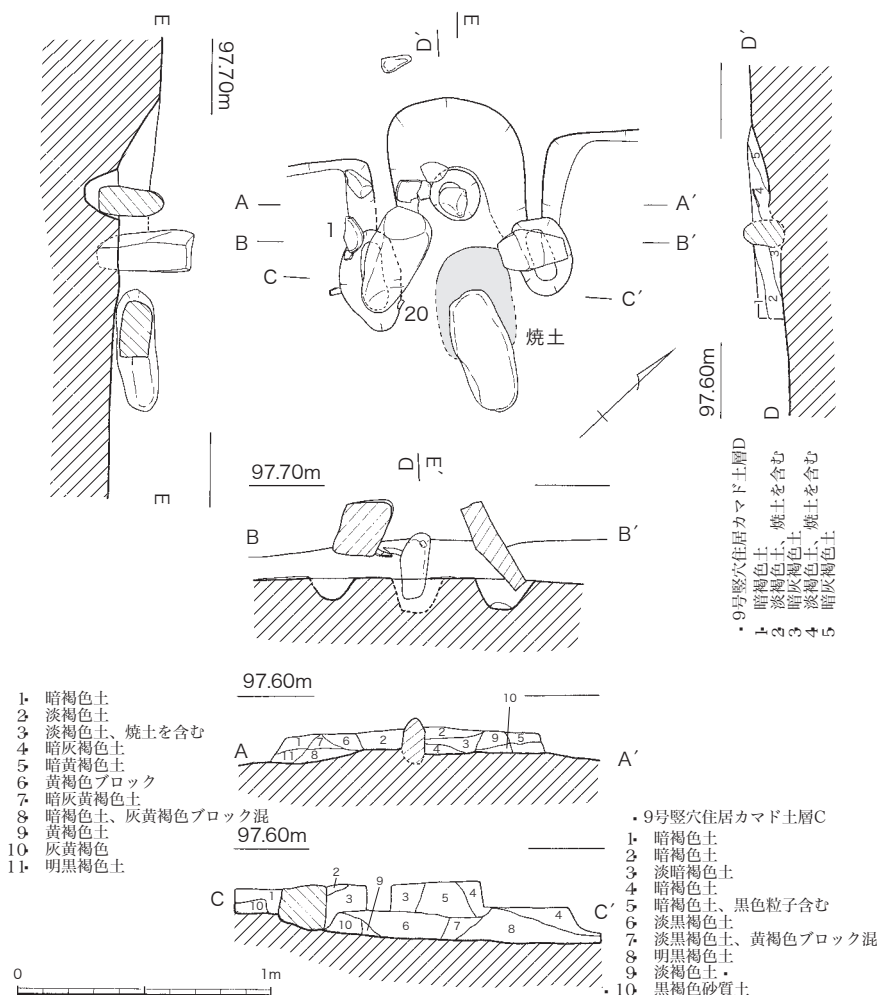
1～5 は須恵器環蓋である。いずれも口縁端部内面に段を有し、2・5 は端部がやや平滑に仕上げられる。2・5 には天井部との境に沈線が施され、3 は明瞭な段を有する。うち、4 には内面にヘラ記号が施される。6～9 は須恵器環身である。口縁部は内傾し、上方に立ち上がる。うち、6 には内面にヘラ記号が施される。10 は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反する。11～14 は土師器甕である。11・14 は頸部を明瞭に屈曲させる。12 は小型甕か。15・16 は土師器高坏である。15 は坏底部に明瞭に段を有し、口縁部は緩やかに外反する。16 は坏柱部から端部にかけて明瞭に屈曲し外に開く。17 は土師器椀か。口縁部は緩やかに外反する。18 はミニチュア土器である。高坏の底部か。あるいは口縁部の可能性も考えられる。19～22 は手捏土器である。19 は内面がミガキ調整。23 は模造鏡である。手捏成形で、鈕の部分には紐通しのための孔が開けられているが、貫通はしていない。鏡面は平滑に仕上げられる。

10 号竪穴住居 (第 179・180 図、図版 44)

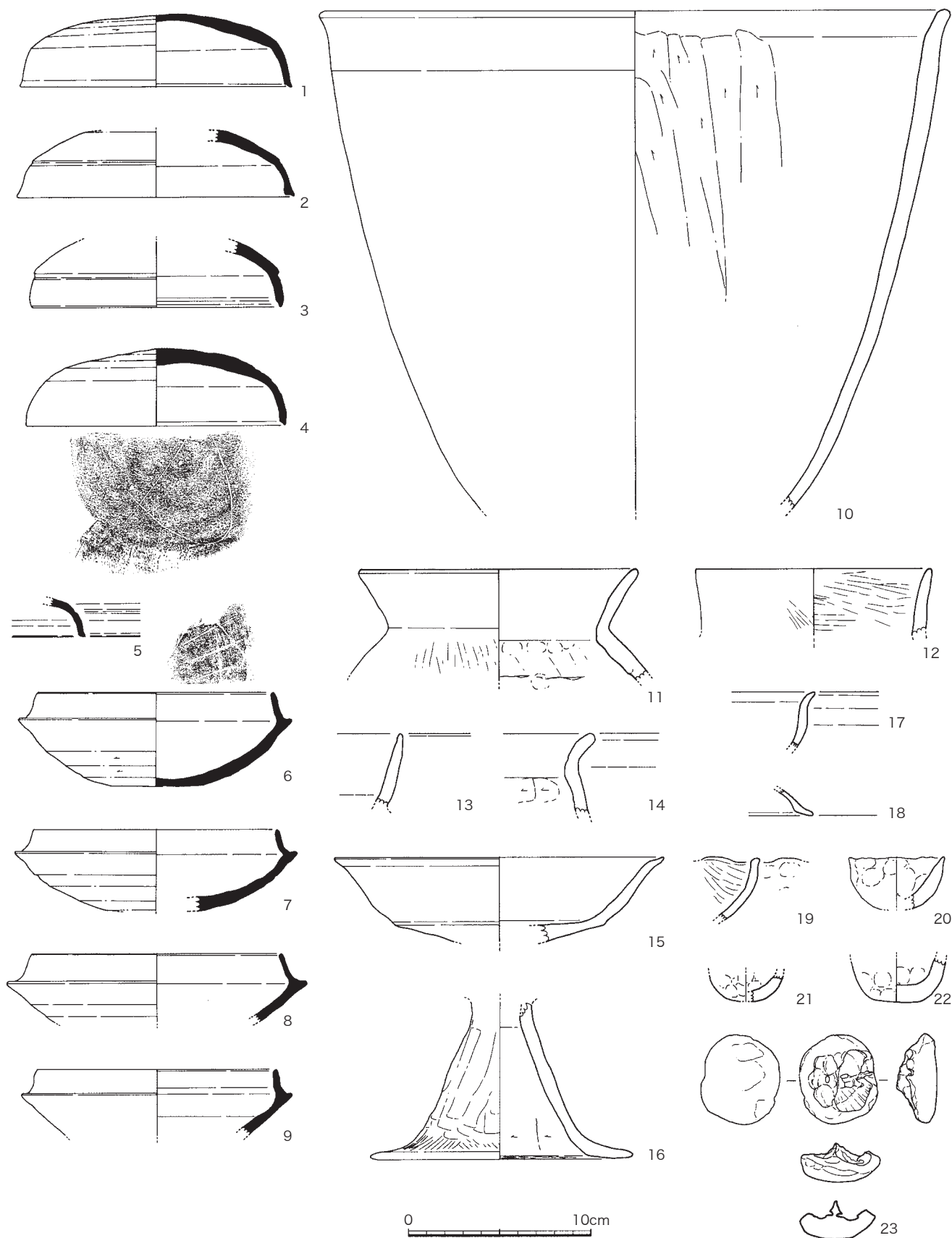
調査区西側より検出され、9 号住居に切られ、1 号溝を切る。確認面での規模は東西軸約 3.1 m、南北軸約 5.0 m + α、深さ約 20cm を測り、不整長方形を呈する。床面は地山整形で、河原石が多く見られた。主柱穴は判然とせず、約 40cm 程の深さのある柱穴が数穴確認されたものの、その展開は不明である。4 本柱の建物構造ではなかった可能性が考えられる。遺物は住居跡西隅にミニ

チュア土器の集中が見られ、廃棄時の祭祀行為の痕跡と考えられる。

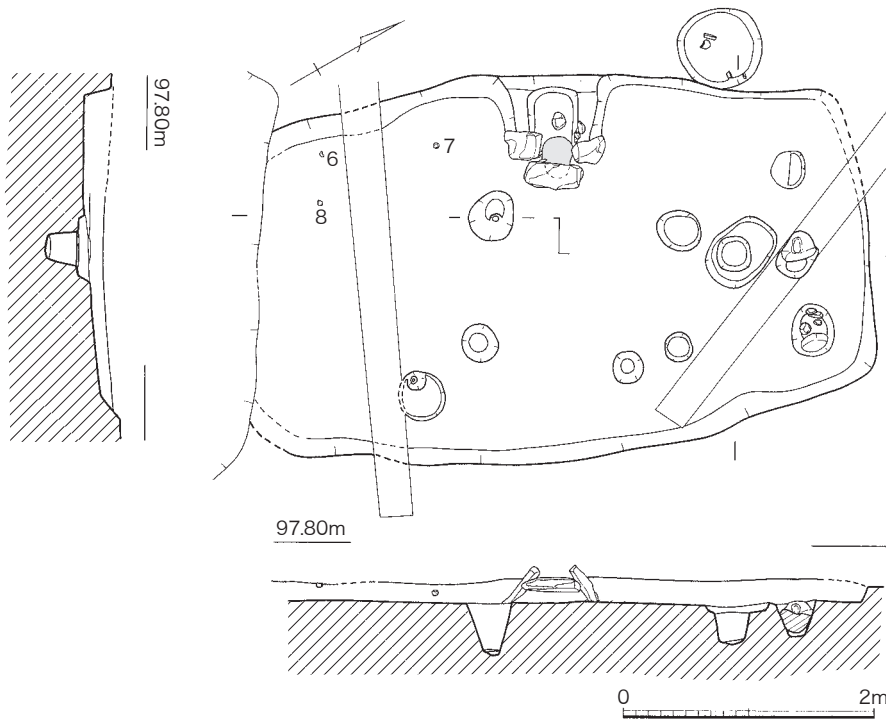
カマドは住居北西壁中央内側に付設されており、上面を破壊されているが、両袖石、支脚が残る。両袖間の距離約 40cm、両袖の長さ約 70cm を測り、両袖間の被熱箇所が火床面で、奥壁はやや手前で回っている。火床面の直上には安山岩製の天井石が手前に引き倒された状態で出土した。袖は灰黄褐色土を使用しており、内側に倒れた状態で安山岩製の袖石が据えられ、支脚は奥壁から 30cm 手前に安山岩製の石が据えられていた。土層の観察から、袖に使用されていた黄褐色土ブロックが火床面側に多く見られることか



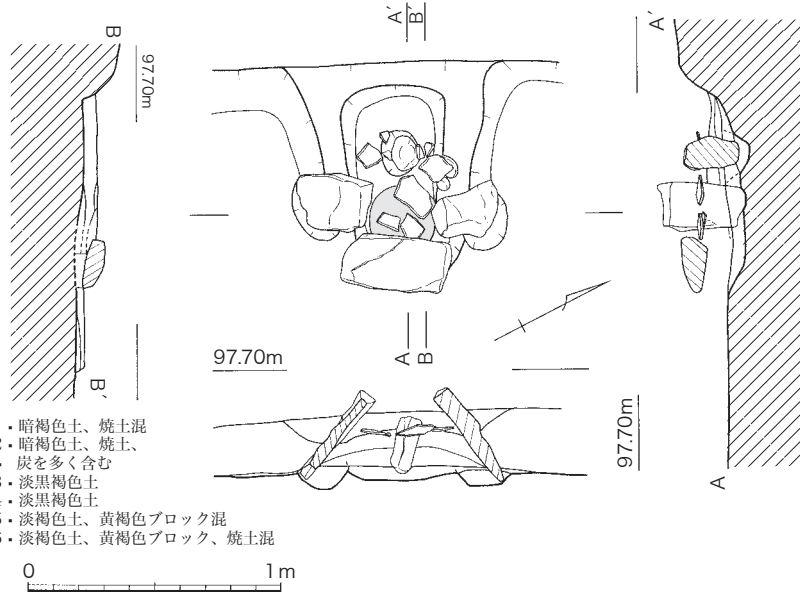
第 177 図 9 号竪穴住居カマド実測図 (1/30)



第 178 图 9 号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)

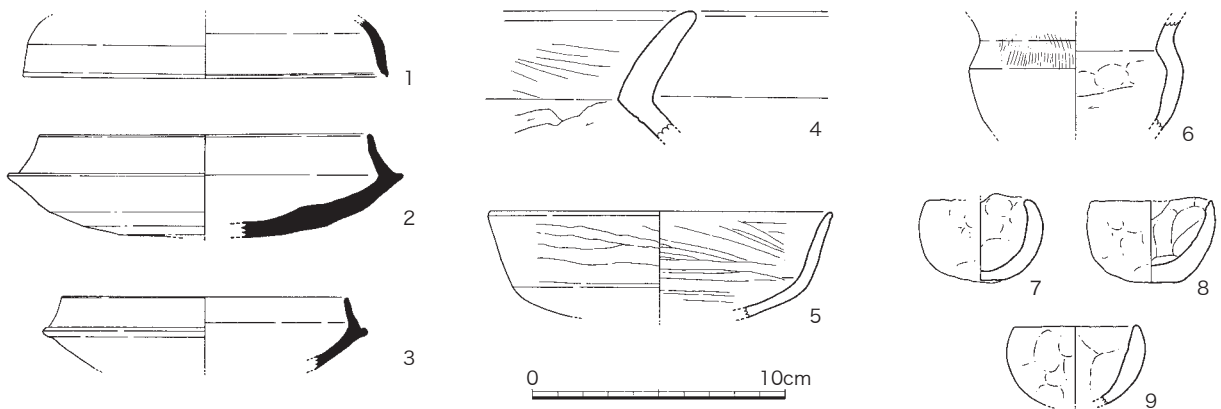


第179図 10号竖穴住居実測図 (1/60)



- 1・暗褐色土、焼土混
- 2・暗褐色土、焼土、炭を多く含む
- 3・淡黒褐色土
- 4・淡黒褐色土
- 5・淡褐色土、黄褐色ブロック混
- 6・淡褐色土、黄褐色ブロック、焼土混

第180図 10号竖穴住居カマド実測図 (1/30)



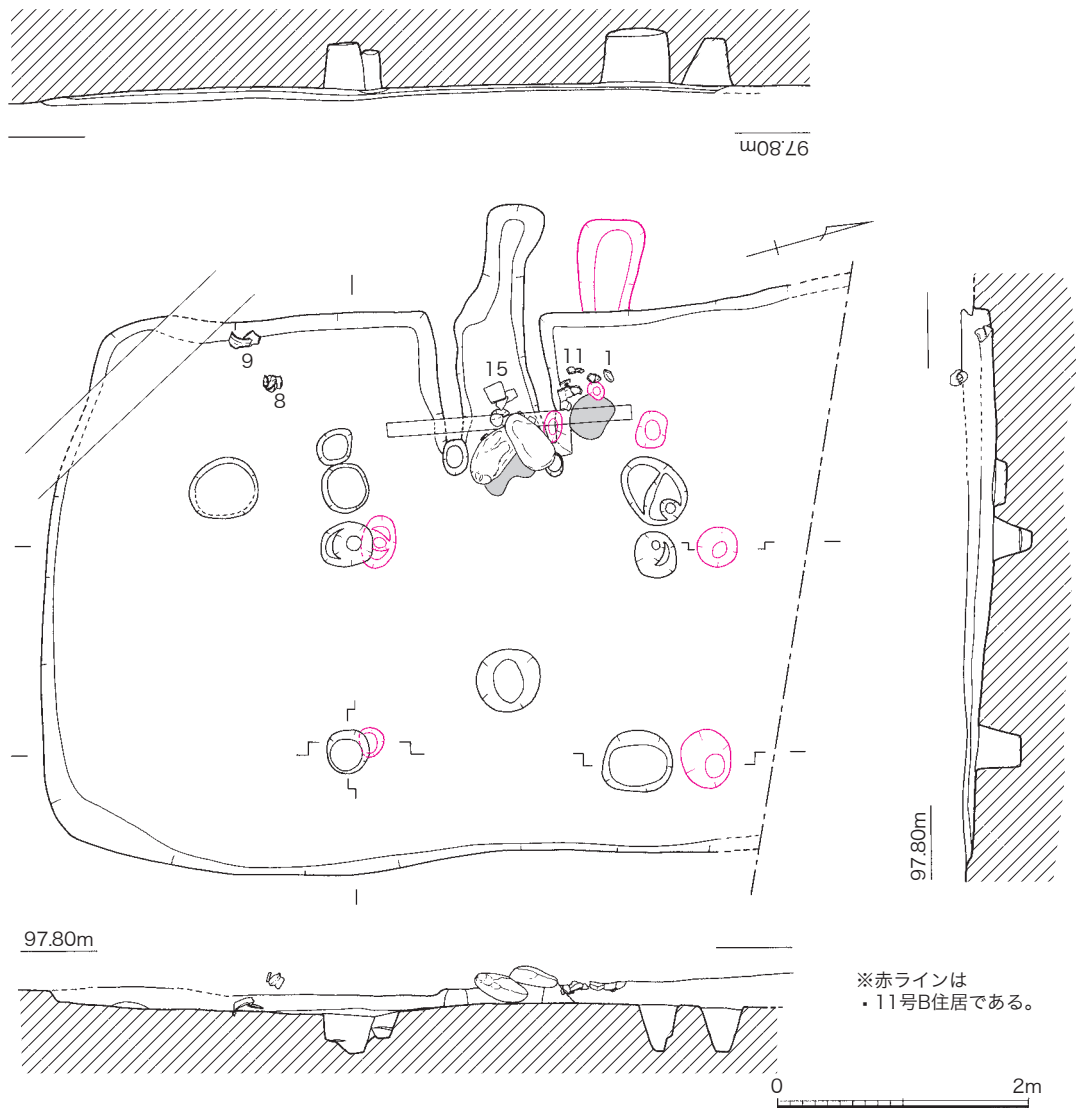
第181図 10号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)

ら、祭祀時にカマドを手前側に向かって引き倒して破壊したものと想定される。

出土遺物

(第181図、図版55・56)

1は須恵器坏蓋である。口縁端部には段を有する。2・3は須恵器坏身である。口縁部は内傾して立ち上がる。4は土師器甕である。頸部を明瞭に屈曲させる。5は土師器碗である。底部から明瞭に屈曲させ、口縁部はやや外に開く。6は土師器ミニチュア土器である。小型の甕か。頸部を明瞭に屈曲させる。7～9は手捏土器である。7・8は底部がやや平滑に仕上げられる。



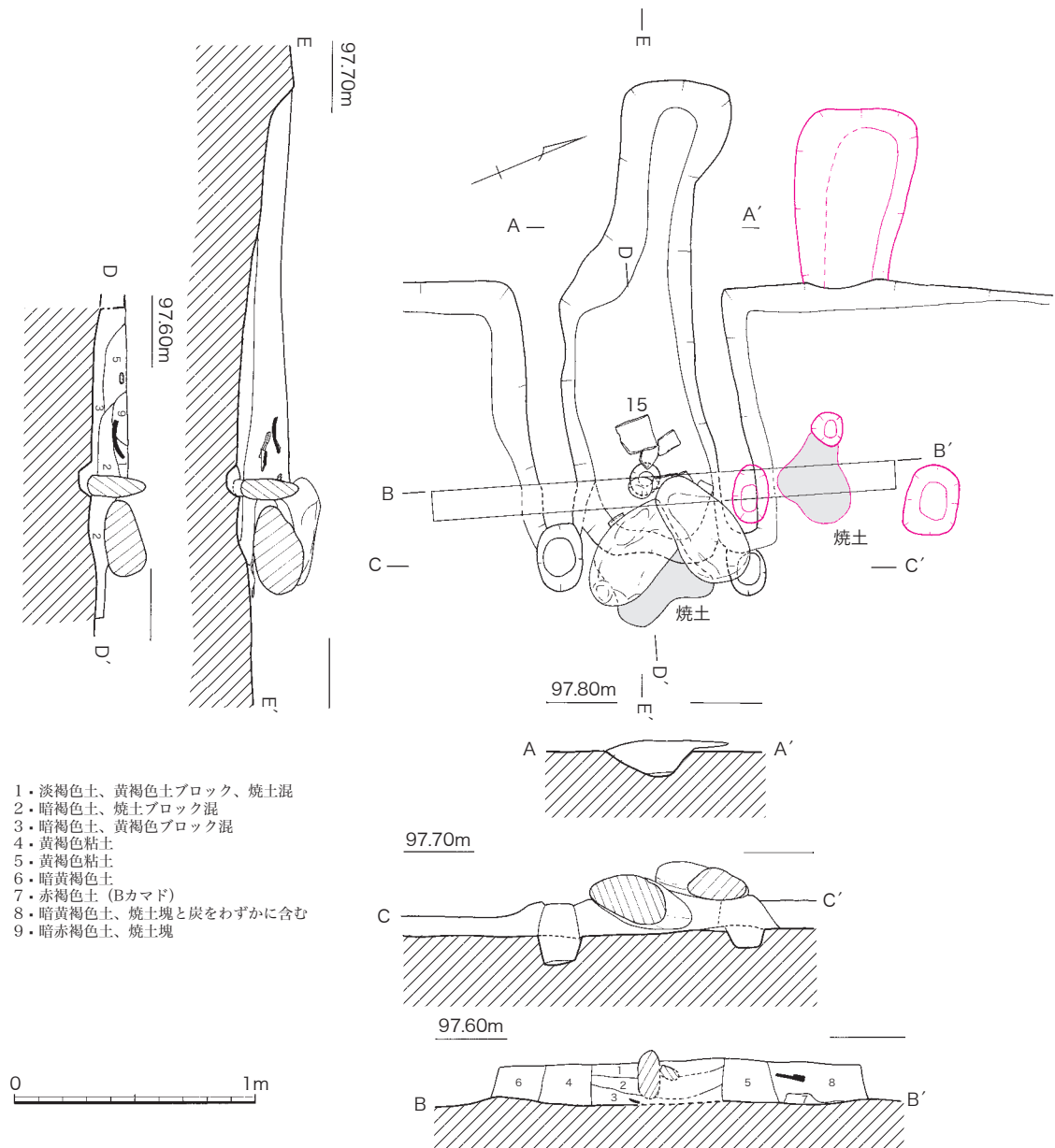
第 182 図 11 号竪穴住居実測図 (1/60)

#### 11 号竪穴住居 (第 182・183・184 図、図版 45)

調査区の西側にて検出され、10 号住居に隣接し、1 号溝を切っており、北側は調査区外へと続く。この住居は作り替えを行っており、住居プランを南側に拡張し、カマドも横にずれて作り変えている。拡張後と拡張前の住居をそれぞれ A 住居、B 住居と区分して説明する。

**A 住居** 確認面での規模は東西軸約 4.5 m、南北軸約 6.5 m +  $\alpha$ 、深さ約 20cm を測り、長方形を呈する。床面は地山整形で、部分的に灰黄褐色土の貼床が施される。深さ約 40cm の支柱穴が 4 本確認され、4 本柱の建物構造と想定される。遺物はカマド周辺と南西壁際に遺物の集中が見られ、廃棄時の祭祀行為の痕跡と考えられる。

カマドは西壁中央内側に設置され、上部を破壊されているが、両袖が残り、袖石に使用されていた安山岩質の石が火床面直上に引き倒されていた。この袖石を除去すると抜き取り痕が確認され、想定される両袖間の距離約 55cm、袖の長さ約 110cm を測り、両袖石抜き取り痕間の被熱箇所が火床面である。袖は黄褐色の粘質土を使用して作られ、支脚は安山岩質の石が奥壁より 80cm 手前に据えられ、カマド奥壁には最大幅約 50cm、奥行約 90cm の手前側が広がった形状の煙道が備えつけられていた。土層の観察から、袖に使用されていた黄褐色土ブロックの崩落は全体に確認される



第183図 11号竪穴住居Aカマド実測図(1/30)

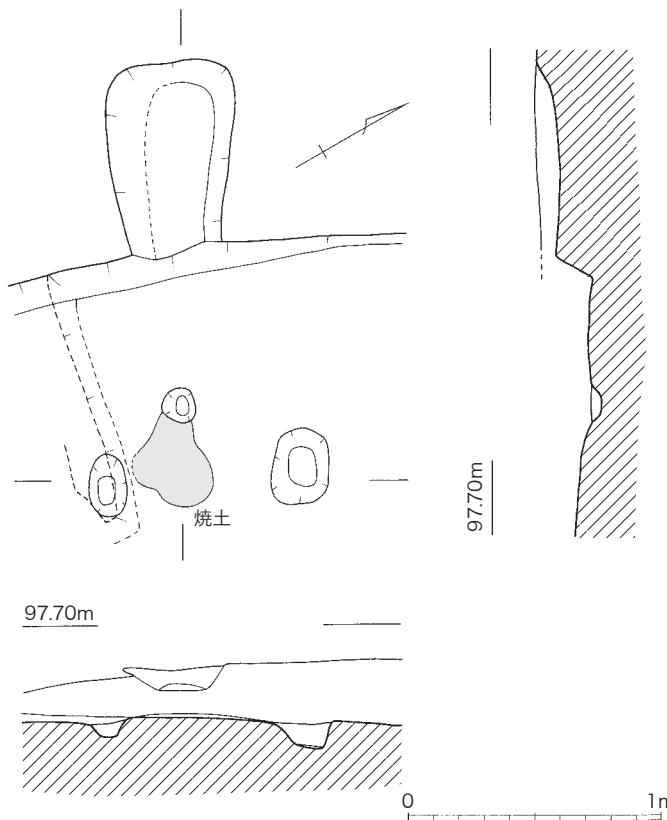
ことから、カマド祭祀時に直下にカマドを壊したものと考えられる。

**B住居** A住居の拡張に伴い殆どが破壊を受けているためその規模は不明であるが、少なくともA住居よりもそのプランは小さかったものと考えられる。A住居の南側2本の支柱穴に切られる深さ約30cmの支柱穴が2本確認され、北側はA住居の支柱穴よりも50cm程北側にずれている。

カマドは北西壁中央内側に設置され、A住居カマドに大部分を破壊されている。両袖共に残存していないが、左右抜取り痕が確認され、この抜取り痕から想定される両袖間の距離約55cm、袖の長さ約100cmを測り、両袖石抜取り痕間の被熱箇所が火床面である。支脚抜取り痕は火床面のすぐ奥にて確認され、カマド奥壁には最大幅約50cm、奥行約70cmの奥側が広がった形状の煙道が備えつけられている。

**出土遺物** (第185図、図版56・57)

1～3は須恵器坏蓋である。口縁端部内面には段を有する。4～7は須恵器坏身である。口縁部は内傾して立ち上がる。8は須恵器の短頸壺である。底部は平滑に仕上げられ、胴部は張り出し、頸部を屈曲させ、口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。9～14は土師器甕である。9～12は



第184図 11号竪穴住居Bカマド実測図(1/30)

調査区北側にて検出され、3号竪穴状遺構を切り、中央部に溝の攪乱を受ける。確認面での規模は南北軸約4.0m、東西軸約2.6m+ $\alpha$ 、深さ約10cmを測り、不整形を呈する。南側には深さ20cm程の柱穴が確認されるものの、支柱穴とするにはやや壁際に寄っている。北西壁側には周溝が巡る。

#### 出土遺物(第187図、図版46)

1は須恵器坏身である。2～4は土師器碗である。2は底部に明瞭な段を有し、口縁部はやや外に開く。3は全体に丸みを帯び、口縁部は上方に立ち上がる。4は口縁部が外湾し、ミガキ調整が残る。

#### 2号竪穴状遺構(第186図、図版57)

調査区北側にて検出され、2号竪穴住居に切られ、東側は溝の攪乱を受け、西側の壁が検出されるのみである。東西方向の長さ約2.9m+ $\alpha$ を測り、方形を呈するものと考えられる。西壁傍には土坑が掘り込まれる。

#### 出土遺物(第187図、図版46)

5は土師器碗か。口縁部は外反する。6は土師器甕である。口縁部を緩やかに外反させる。7は土師器甕である。口縁部は外に開き、口縁端部を平滑に仕上げる。

#### 3号竪穴状遺構(第186図、図版57)

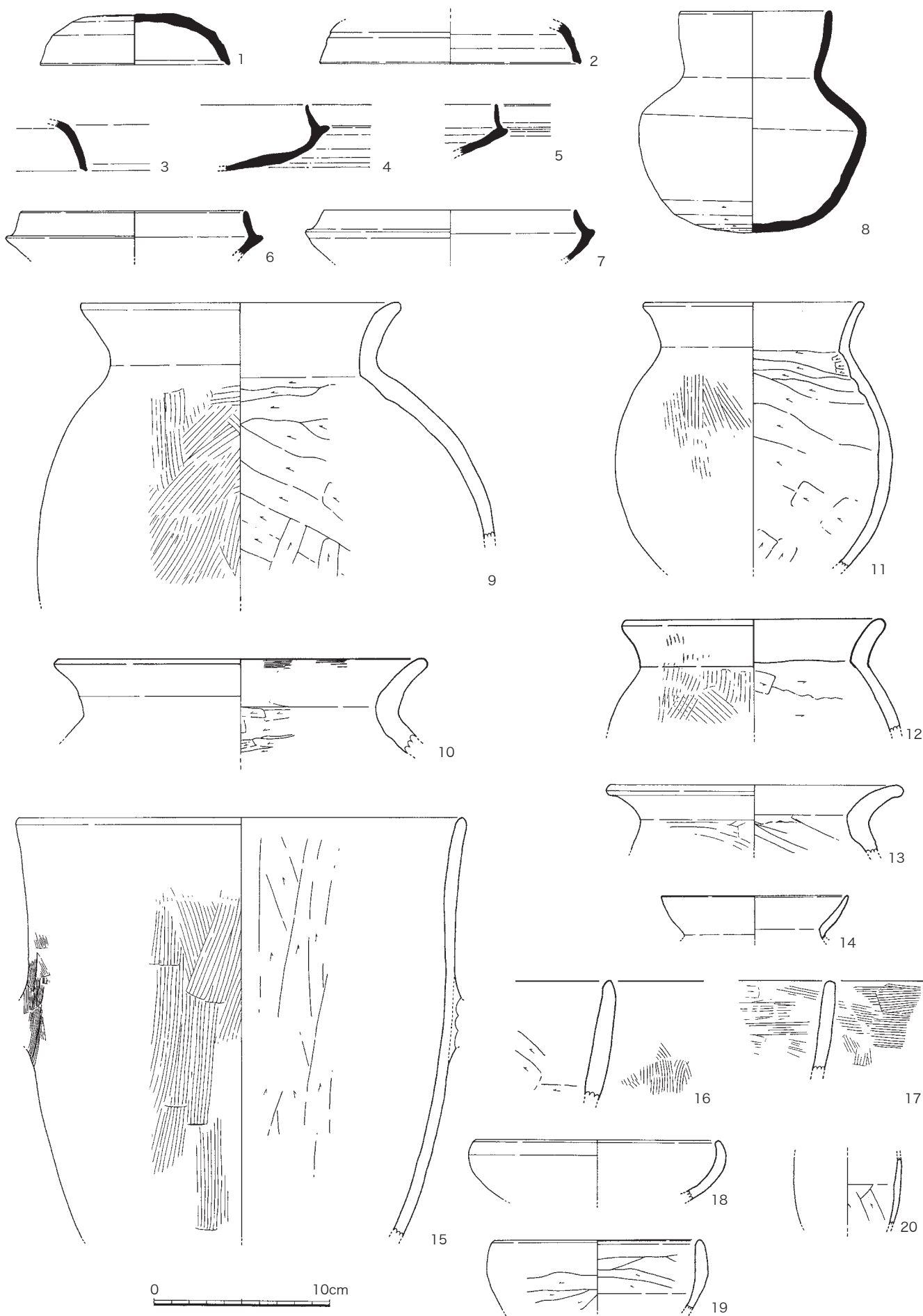
調査区北側にて検出され、2号竪穴住居、1号竪穴状遺構に切られ、中央は溝の攪乱を受ける。確認面での規模は東西軸約2.3m、南北軸約1.4m、深さは最大約30cmを測り、方形を呈すると考えられる。

頸部を明瞭に屈曲させ、口縁部は外反する。13は口縁部を大きく外に開く。14は土師器小形甕か。口縁部はやや内湾する。15～17は土師器甕である。15は口縁部にかけて緩やかに立ち上がり、口唇部をやや外反させる。胴部上方には把手が付く。18・19は土師器碗である。18の口縁部は大きく内湾する。19はやや上方に立ち上がる。20はミニチュア土器の甕か。内面をケズリ調整にて仕上げる。

## 2. 竪穴状遺構

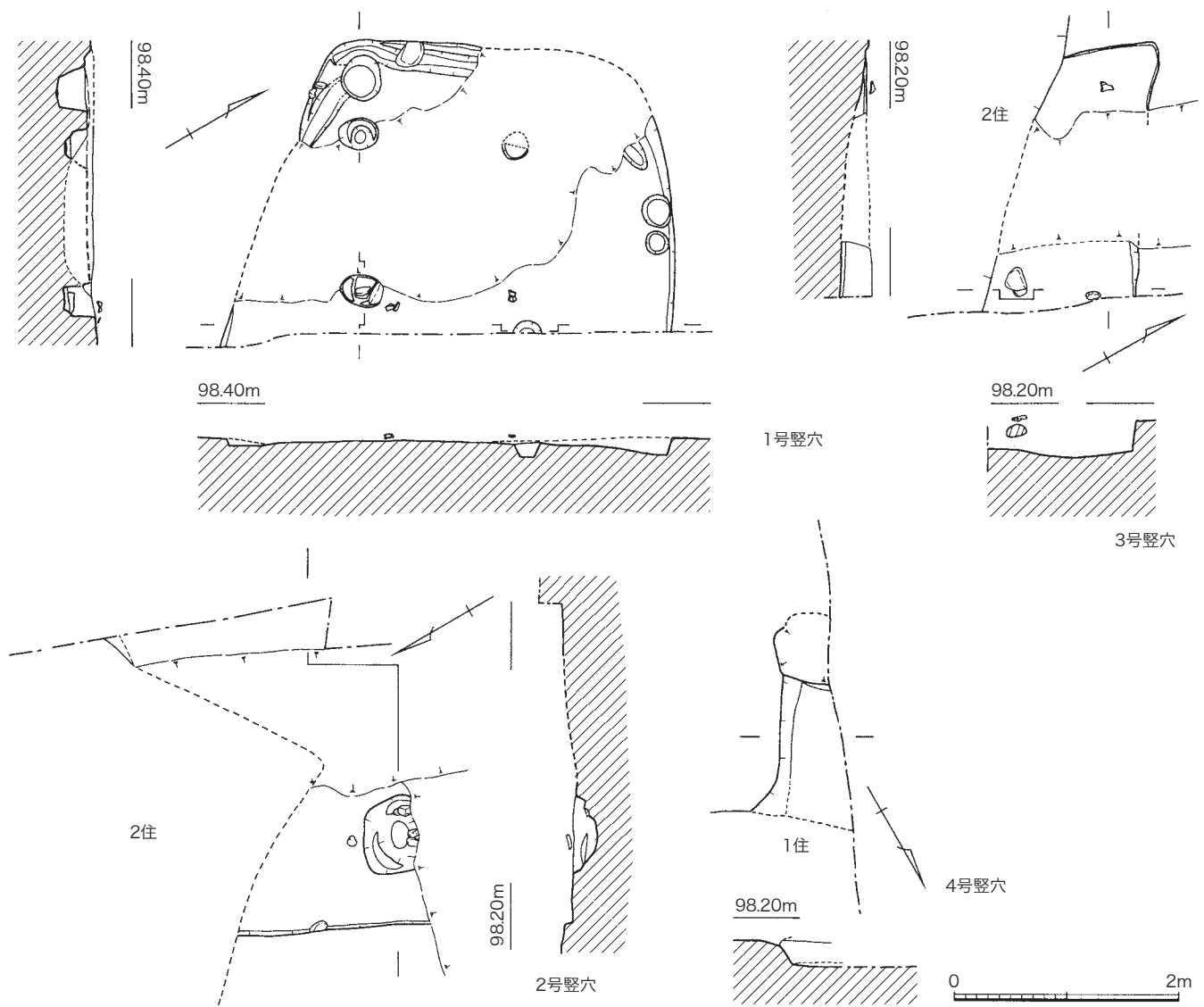
調査時は住居として設定したものうち、調査後の整理において住居と認定するには積極的根拠の欠ける方形の遺構に関して、竪穴状遺構として報告する。特に、2号住居周辺に多く見られる。

### 1号竪穴状遺構(第186図、図版57)



第 185 图 11 号竖穴住居出土遗物实测图 (1/3)





第 186 図 1～4号竖穴状遺構実測図 (1/60)

出土遺物 (第 187 図、図版 57)

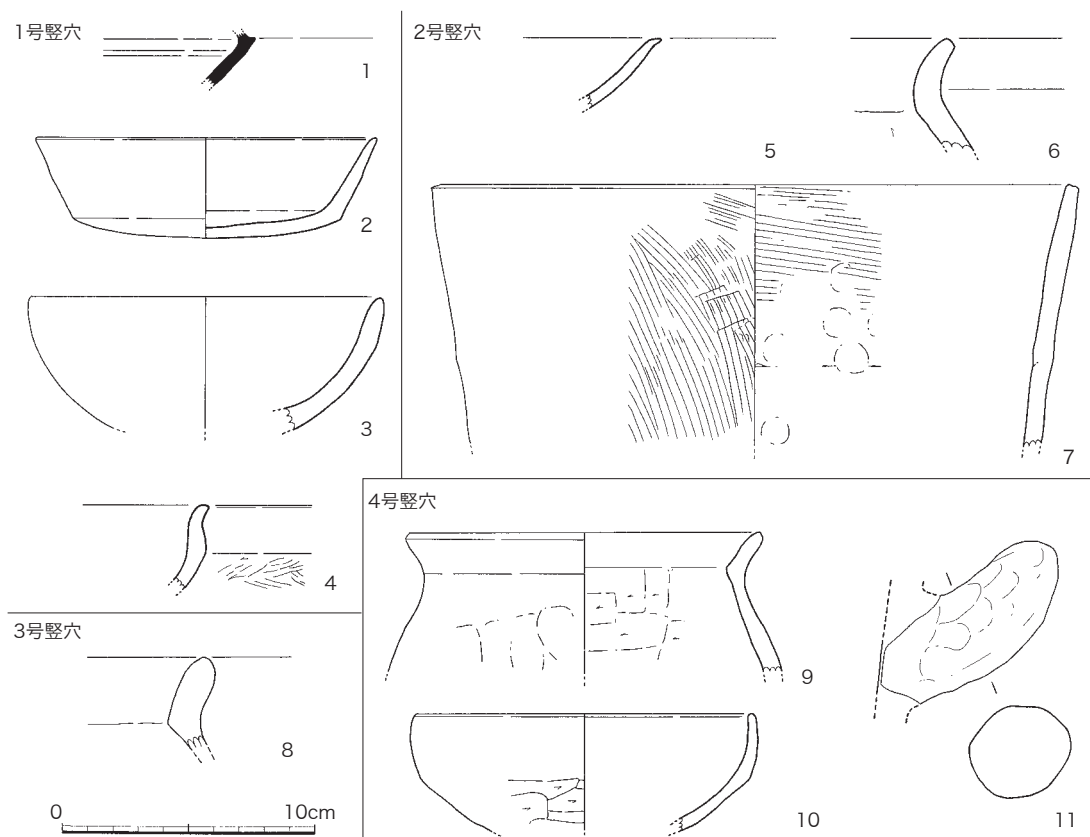
8 は土師器甕の口縁部である。口縁部をやや肥厚させる。

4号竖穴状遺構 (第 186 図、図版 46)

調査区北側にて検出され、1号住居に切られ、南側は攪乱を受け、東側の壁が確認されるのみである。確認面での規模は東西軸約 60cm +  $\alpha$  を測り、方形を呈すると考えられる。

出土遺物 (第 187 図、図版 57)

9 は土師器甕である。頸部を明瞭に屈曲させ、口縁部を小さく外反させる。10 は土師器碗である。口縁部は内湾し、外面は手持ちヘラケズリ調整。11 は土師器甕あるいは甑の把手である。ケズリにて調整される。



第187図 1～4号竖穴状遺構出土遺物実測図 (1/3)

### 3. 溝

#### 1号溝 (第188図、図版46)

調査区西側にて検出され、7～11号住居に切られている。北から南へと流れており、調査区内での長さ約28m、深さ約20cmを測る。10・11号住居より西側には溝の上面に砂層の堆積が確認され、溝の廃棄後に一旦この箇所が埋没して砂層が堆積し、その後10・11号住居が構築したことが伺える。土層観察では互層状に粘質土が堆積し、床底面には小礫が見られることから、緩やかな水流により次第に埋没した可能性が考えられる。

#### 出土遺物 (第189図、図版57・58)

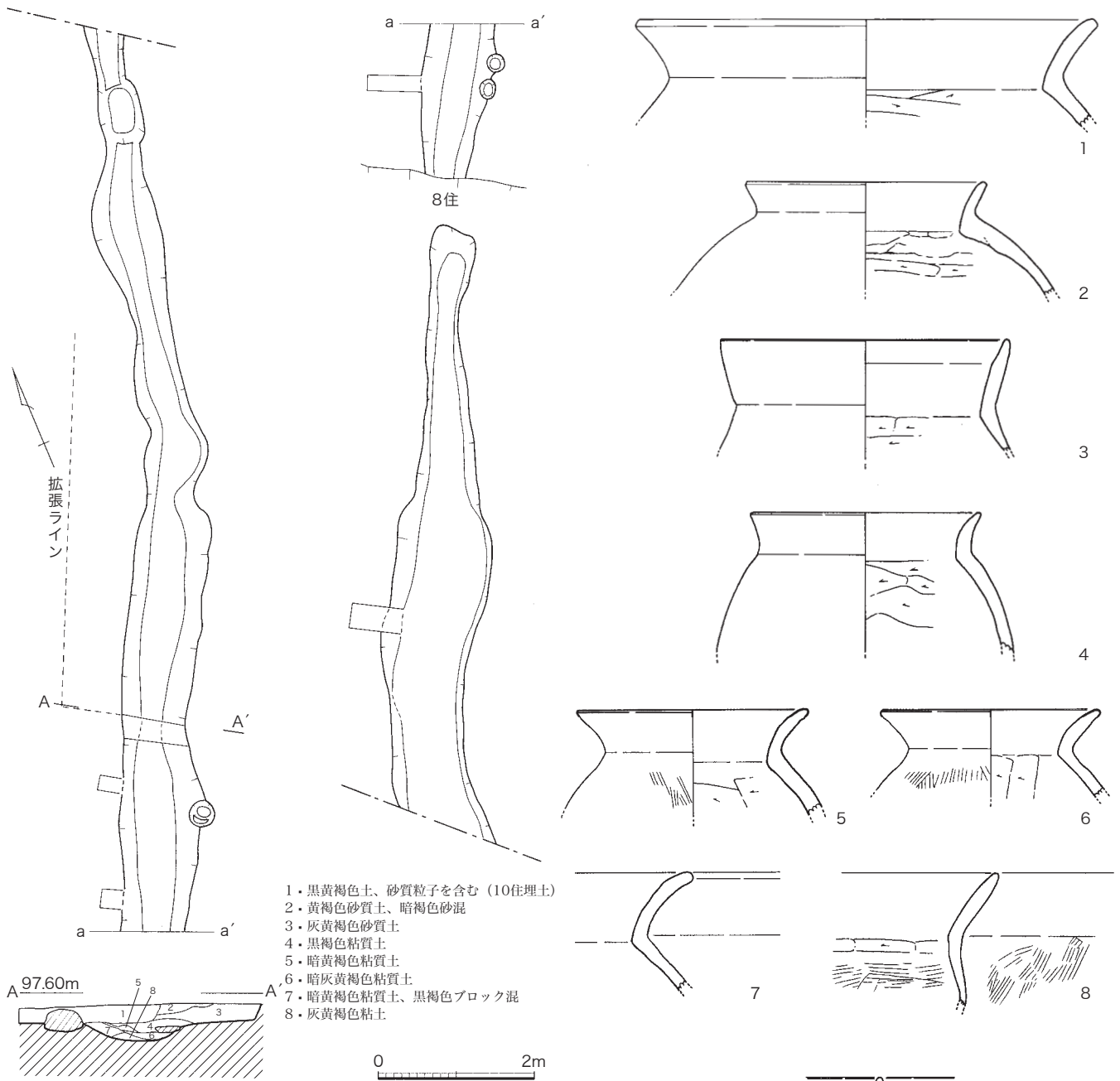
1～8は土師器甕である。頸部をケズリにより明瞭に屈曲させ、口縁部は外反する。2は頸がかなり小さく、口縁部は小さく立ち上がる。9は土師器の鉢である。全体に丸みを帯びており、頸部を明瞭に屈曲させ、口縁部は小さく立ち上がる。内面はハケメ調整、外面は手持ちヘラケズリである。10～14は土師器碗である。10は内面にミガキが見られる。15は土師器坏身か。口縁部と体部の間に段を有し、口縁部は内傾して立ち上がる。16・17は土師器高坏である。坏底部に明瞭に段を有し、外に開く。18は手捏土器である。

### 4. 土坑

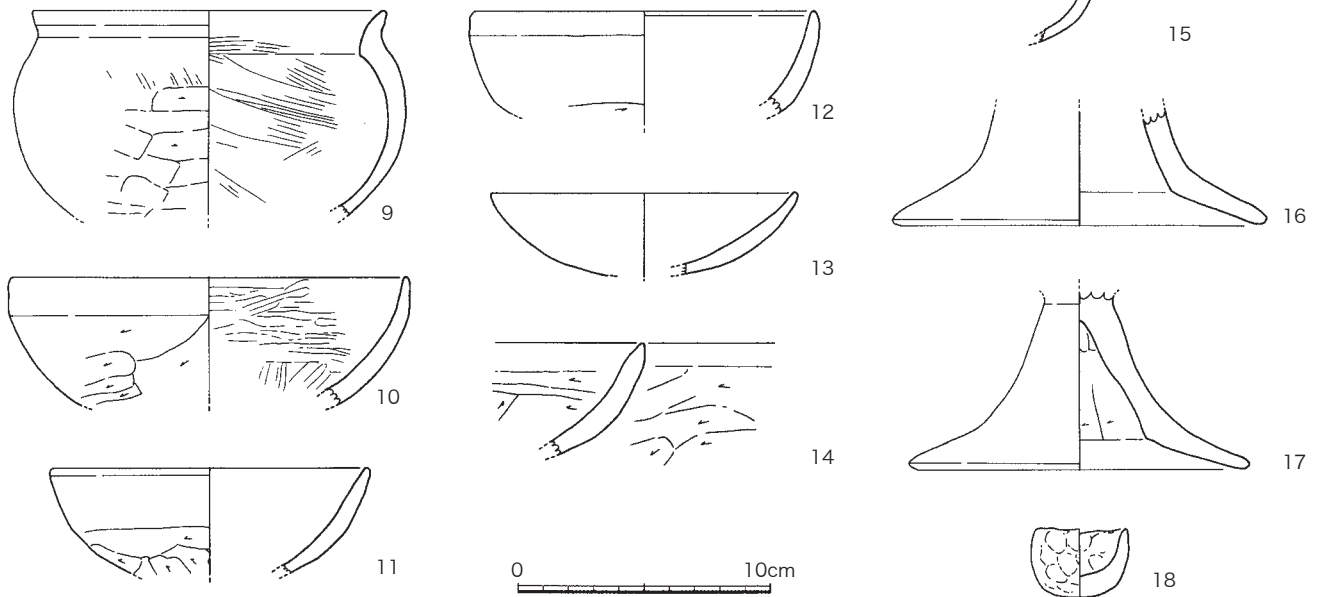
調査区西側に2基、調査区南側に1基が確認される。

#### 1号土坑 (第190図、図版46)

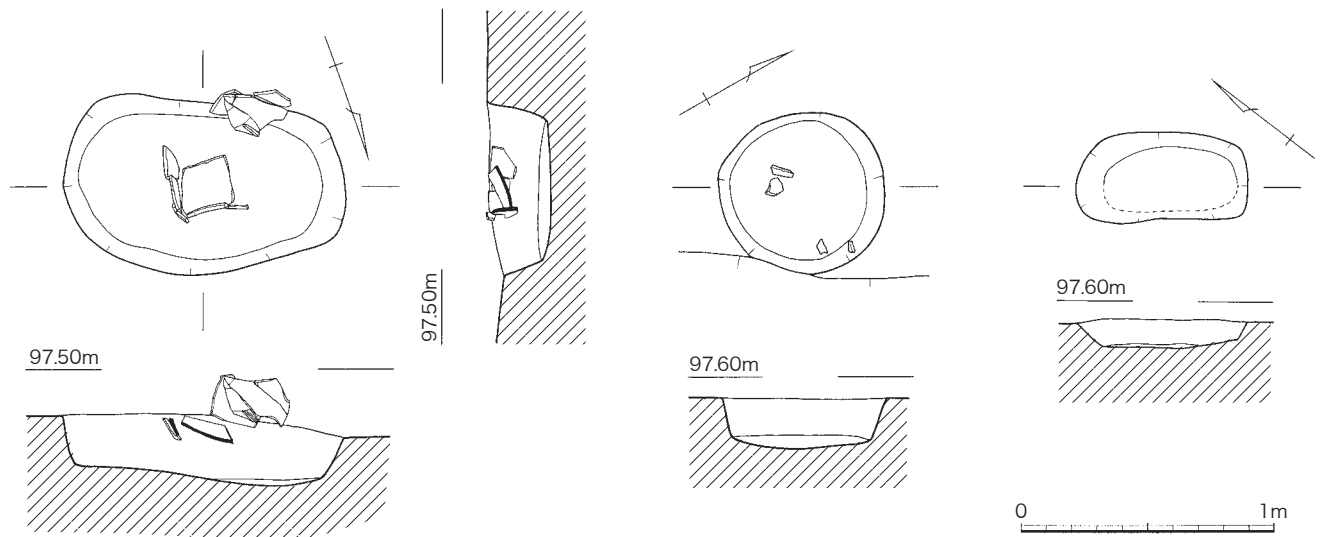
調査区南隅にて検出された土坑で、確認面での規模は東西軸約1.1m、南北軸約0.7m、深さ約20cmを測り、楕円形を呈する。土坑中央部及び、南西側に同一個体の甕の破片が浮いた状態で埋没していた。上面を削平されているため詳細は不明であるが、中央部の遺物が縦、横に据えられて



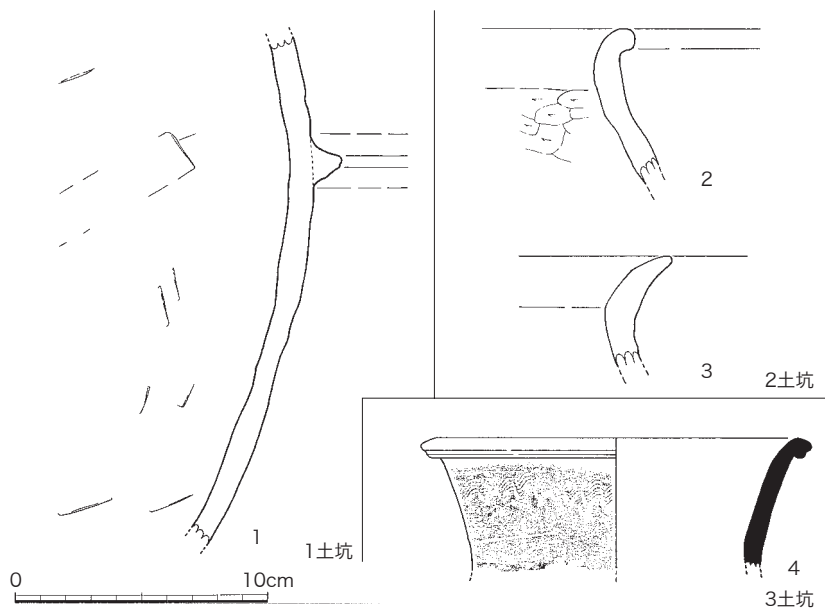
第188図 1号溝実測図 (1/80)



第189図 1号溝出土遺物実測図 (1/3)



第190図 1～3号土坑実測図 (1/30)



第191図 1～3号土坑出土遺物実測図 (1/3)

いることから、土器棺墓の可能性も考えられる。

出土遺物 (第191図、図版58)

1は弥生土器甕の胴部片である。その大きさから成人用甕棺の可能性も想定される。胴部に断面三角形の突帯が巡り、内面は棒状タタキの痕跡が残る。

2号土坑 (第190図)

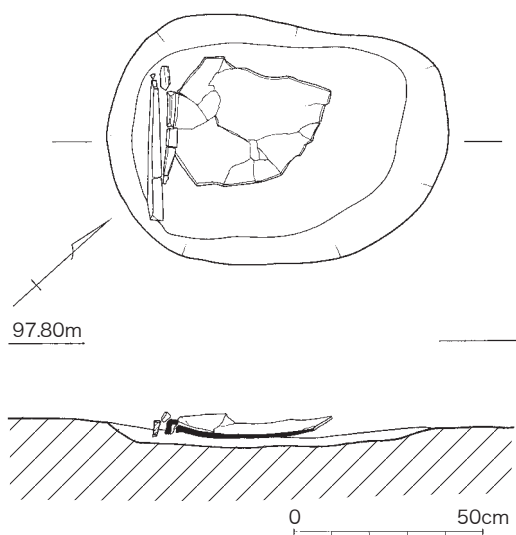
調査区西側にて検出され、10号住居に切られ、1号溝を切っている。確認面での規模は約65cm、深さ約20cmを測り、円形を呈する。

出土遺物 (第191図)

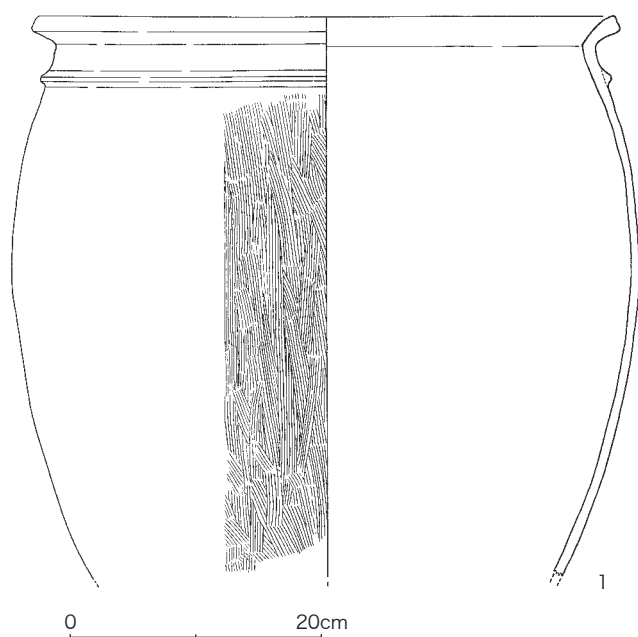
2・3は土師器甕である。2は口縁部が上方に立ち上がり、口縁端部を小さく外へ開く。

3号土坑 (第190図)

調査区西側にて検出され、11号住居に隣接している。確認面での規模は南北軸約70cm、東西軸約35cm、深さ約10cmを測り、楕円形を呈する。



第 192 図 1 号小児用甕棺墓実測図 (1/20)



第 193 図 1 号小児用甕棺実測図 (1/6)

#### 出土遺物 (第 191 図、図版 58)

4 は須恵器甕である。口縁部を肥厚させ、端部を窪ませている。口縁部下部には 5 本沈線による波状紋が施される。

#### 5. 甕棺墓

##### 1 号小児用甕棺墓 (第 192・193 図、図版 46)

調査区西側にて検出され、11 号住居に隣接する。上面を大きく削平され、甕の上部 2/3 を欠損し、安山岩質の蓋石片が一部残存していることから、蓋石を用いる単棺の小児用甕棺墓と考えられる。確認面での墓壙規模は南北軸約 90cm、東西軸約 65cm、深さ約 5cm を測り、楕円形を呈する。甕はほぼ水平に埋設され、主軸方向は N-138° W である。

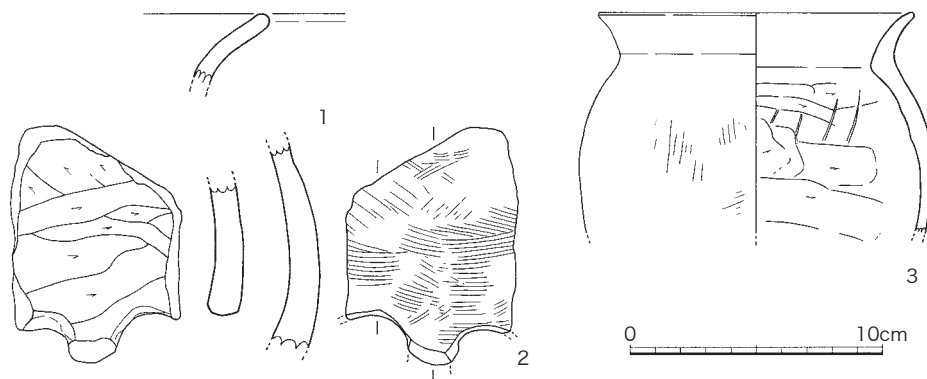
第 193 図は出土した甕である。底部は削平のため残存していないが、口縁部は復元が可能である。口縁部はくの字状に外反し、端部を跳ね上げ状に肥厚させる。頸部直下には断面逆台形状の突帯が巡り、胴部は外側に張り出している。外面には頸部下部より縦方向のハケ調整が残り、内面はナデにより仕上げられる。復元口径 45.2cm、残存器高 45.5cm を測る。

#### 6. その他の遺構と遺物

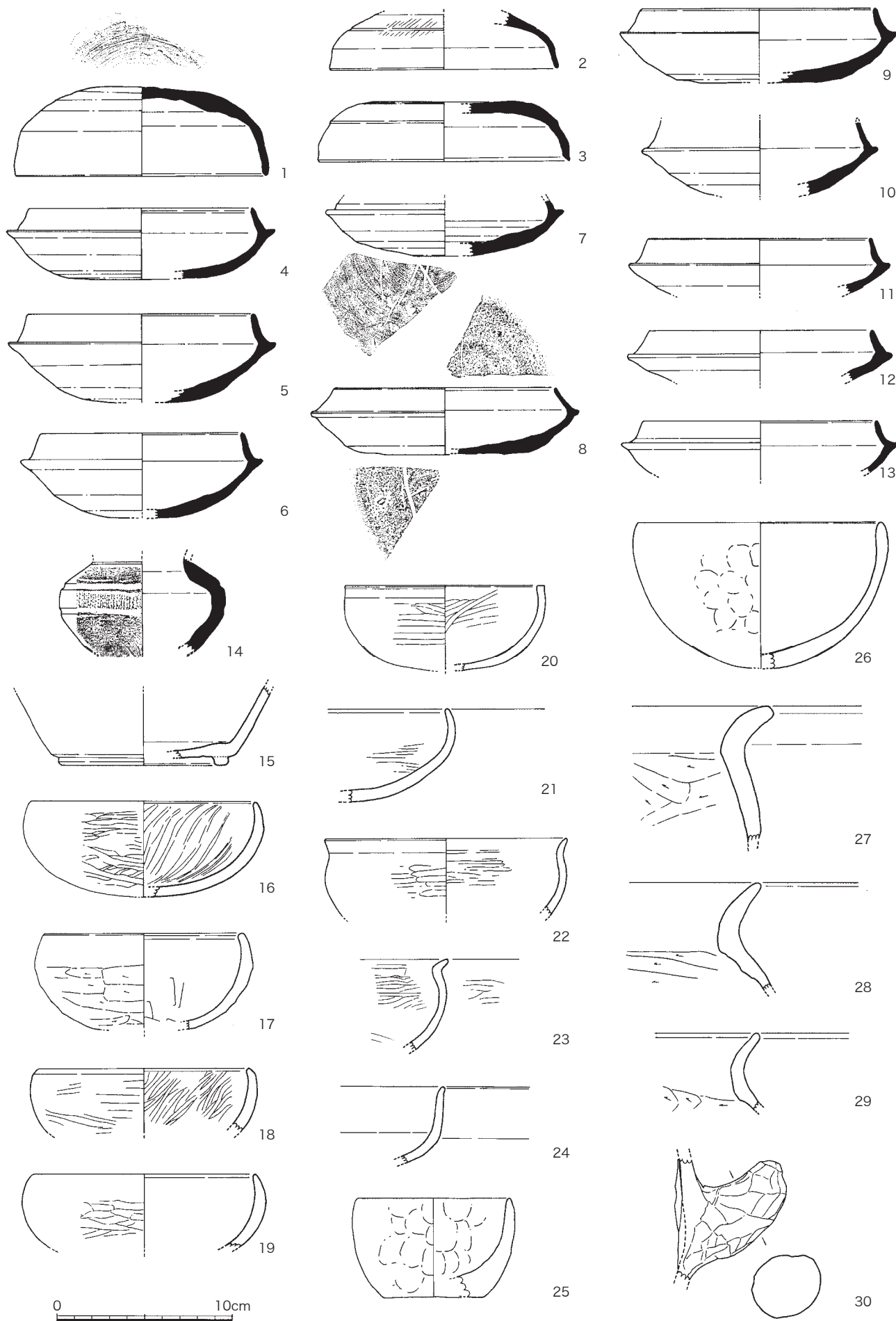
##### 柱穴、包含層出土遺物 (第 194 図、図版 58)

その他、柱穴及び包含層より出土した遺物について説明する。

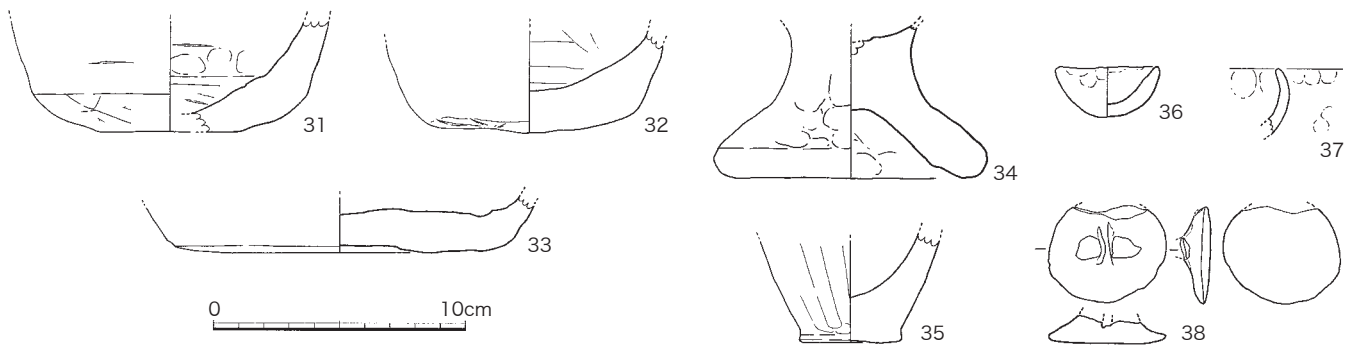
1 は柱穴 1 より出土した弥生土器である。2 は多孔式甑の出土した 3 号住居に近接する柱



第 194 図 柱穴、包含層出土遺物実測図 (1/3)



第 195 図 その他の遺物実測図① (1/3)



第 196 図 その他の遺物実測図② (1/3)

穴 2 より出土した土師器甑である。多孔式の甑の底部片と考えられ、2つの孔の痕跡が見られる。内面ケズリ、外面ハケ目調整である。3 は 1 号溝上面の砂質堆積層より出土した土師器甕である。この層は 1 号溝西側に部分的に残存しており、1 号溝埋没後、住居群構築前に堆積したものと考えられる。西側の攪乱部との間の狭い範囲に一部堆積する。頸部を明瞭に屈曲させ、口縁部は外反する。内面はケズリ、外面はハケ目調整。

#### その他の遺物 (第 195・196 図、図版 59)

表土中及び、遺構検出時に出土した一括取上げ遺物について説明する。大部分の遺物は調査区西側の 7～11 号住居周辺より出土、採取している。

1～3 は須恵器坏蓋である。1・2 は口縁端部を丸く仕上げ、3 は口縁端部に段を有する。1 は天井部にヘラ記号が施される。4～13 は須恵器坏身である。いずれも口縁部は内傾して立ち上がる。特に、8 は口縁部を大きく内傾させる。7 は底部外面にヘラ記号が施され、8 は底部内外面にヘラ記号が施される。14 は須恵器隙である。胴部は外に張り出し、張り出し部に沈線により文様帯を作出し、櫛描列点文を巡らせる。頸部外面には沈線が巡る。15 は土師器坏身である。底部を明瞭に屈曲させ、屈曲部下部に高台が貼り付けられる。16～24 は土師器碗である。16～21 は口縁部が内湾し、16・18～20 には内外にミガキ調整が見られる。22～24 は口縁部を小さく外反させる。25 は土師器碗か。手捏にて成形され、底部は平坦に仕上げられる。26 は土師器鉢か。全体に丸みを帯び、口縁部はやや肥厚する。全体に指頭圧痕が残る。27～29 は土師器甕である。頸部を明瞭に屈曲させ、口縁部は外反する。30 は土師器甕か甑の把手である。ケズリ調整が施される。31～33 は土師器底部片である。甕の底部か。31 はやや丸みを帯び、内面は指頭圧痕、外面にはケズリ調整が残る。32 は底面をやや平坦に仕上げ、内外共にケズリ調整が残る。33 は底面を平坦に仕上げる。34 は支脚か。全体に器壁が厚く、脚部を外に開く。内外共に指頭圧痕が残る。35 は甕の底部である。底部は平坦に仕上げられ、やや外に張り出す。外面にはケズリ調整が残る。36・37 は手捏土器である。38 は模造鏡である。鏡面は平滑に仕上げられ、鏡背には欠損しているものの鈕が作出される。

## 第6章 B、C区の調査のまとめ

前章において報告した内容をもとに、本章では各調査において各遺構の時期について検討を加えた上で、遺跡の性格について検討する。なお、B-1、B-2区は隣接していることから、ひとつの調査区として捉えて説明し、C区は遺構の時期も異なることから別途説明する。

### (1) B区の遺構の時期と特徴について

B-1、B-2区を併せて確認された遺構は、生活遺構では住居100軒以上、土坑230基以上、周溝状遺構1基、柱穴多数にのぼり、墳墓群では成人用甕棺墓5基、小児用甕棺墓52基、木棺墓2基、石棺墓8基、大石1基を数える。各遺構毎に時期の検討を行うには煩雑さを極めることから、生活遺構、墳墓群に分けて説明する。

#### 1. 墳墓群

墳墓群は甕棺墓群と木棺墓・石棺墓群とに区別して説明する。

##### 甕棺墓

成人用甕棺墓、小児用甕棺墓併せて57基が出土したが、特に小児用甕棺墓の大きさにバラツキが大きく、小形、中形が混在している恐れがあるため、その大きさをはじめに区分する。なお、比較資料として市内出土甕棺墓も含めて検討する。そのうち甕棺の計測値が利用可能で、大肥遺跡と同時期の弥生時代中期の宇土遺跡<sup>(1)</sup>、後迫遺跡<sup>(2)</sup>、上野第2遺跡<sup>(3)</sup>、大坪遺跡<sup>(4)</sup>、尾漕遺跡<sup>(5)</sup>、佐寺原遺跡<sup>(6)</sup>、吹上遺跡<sup>(7)</sup>、小迫辻原遺跡<sup>(8)</sup>より出土した合口甕棺墓を使用した。

大きさの指標となる器高のヒストグラムを作成すると、図197のようになる。市内出土分も含めるとおおよそ36cmにピークが現れ、その後はなだらかな減少傾向を示し、50cmを境に大幅に出現量に差が出ている。この境をもとにグループ化すると、小形は22～50cm未満の範疇に収まる大きさとなる。中形については、日田市内での中・大形甕棺の出土量が少ないものの、64～70cm前後を境に若干出現量に差が見られる。現時点での大棺の資料数が少なく明確な区分が難しいが、70cm以上で再度小さなピークが見られることから70cmでの区分とする。以上の点から、小形50cm未満、中形50cm～70cm未満、大形70cm以上と区分されよう。このような結果は速水氏の分析結果<sup>(9)</sup>と概ね合致しているが、大形棺が78cm以上とする速水氏の見解と異なっている。これは、市内の大形棺の資料数が少ないことや、口縁部打ち欠きのものが中期後半に多く見られることが影響していると思われる。ただし、全体的に小さく、100cmを超えるものが見られないことなどは、日田地域の特徴とも言えよう。<sup>(10)</sup>

甕棺墓の大きさを比較するための資料としては、このほか口径について検討する必要がある。遺体を棺に収める際に身長を反映する器高と共に、口縁部が肩幅より広くなくてはならない。そこで、口径についてのヒストグラムを作成したのが第198図である。この結果、口径36cm未満、36～52cm未満、52cm以上にグループ化され、それぞれが器高の小形、中形、大形に対応する。なお、単棺については、器高が大きいものの口径の小さな壺が用いられ、後迫遺跡、宇土遺跡例などは器高が78cmあるものの、口径が小さいことから、中形棺の範疇として捉えられる。

さて、このようなサイズの違いは埋葬遺体の体格に起因していることは言うまでもない。人骨の出土例の多い小郡市横隈狐塚遺跡<sup>(11)</sup>や筑紫野市永岡遺跡<sup>(12)</sup>での乳児、幼児はほぼ小形棺に納まり、

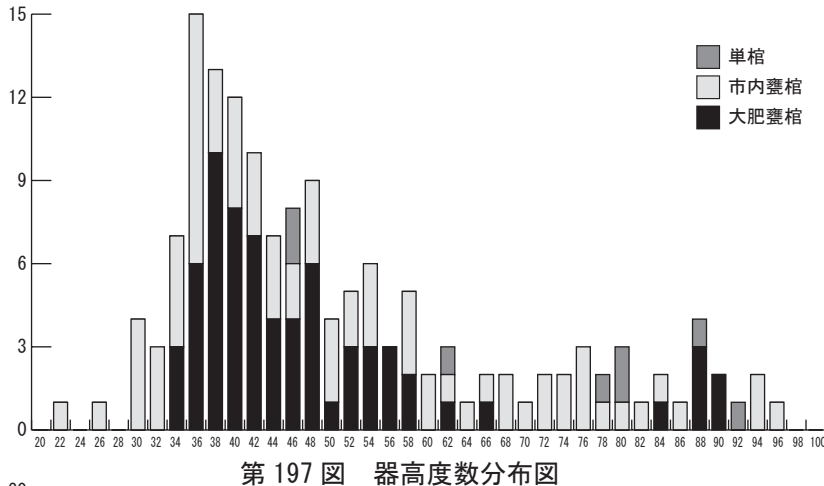


小児骨は中形棺に納まる。また、市内後迫遺跡例では12～14歳の遺体が中形棺より発見されている。このような例より、小形棺は乳児(0～1歳)及び幼児(1～6歳)、中形棺は小児(6～12歳)及び若年(12～19歳)でも低年齢層の遺体が収められるものと考えられる<sup>(13)</sup>。なお、B-1区3号成人用甕棺墓はこの区分から中形棺となり、以後中形棺として取り扱うこととする。

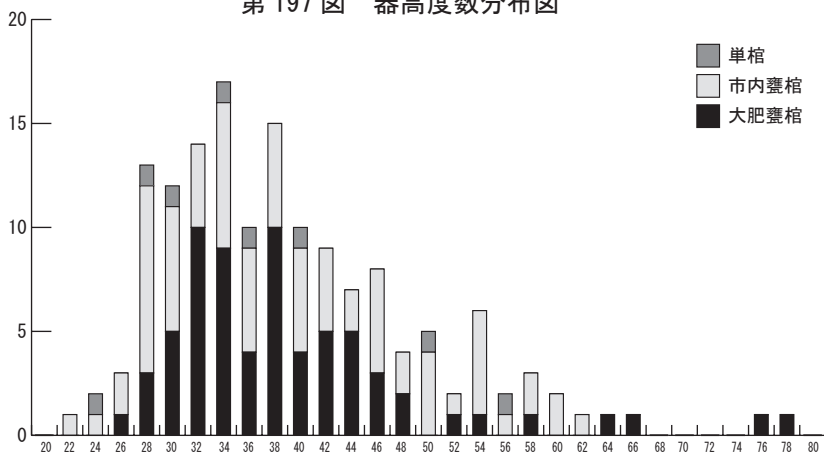
さて、以上の分類に基づき、甕棺墓の時期比定を行ってゆくと、市内出土の甕棺墓の事例も少なく、体系的な編年による時期比定は困難である。そこで、甕棺墓の編年を体系的に行っている橋口氏<sup>(14)</sup>、柳田氏<sup>(15)</sup>の甕棺墓編年を用い、小中形棺について田崎氏の編年<sup>(16)</sup>を参考に時期比定を行った。まず中期前半の須玖I式古段階には、口縁部断面が三角形及びコの字状をなし、頸部下面には突帯が巡り、底部は厚い上げ底の特徴を有するB-1区1号小児用甕棺、如意形口縁下部に平行沈線が巡るB-1区33号小児用甕棺などが該当し、柳田氏のⅢ-2、橋口氏のKⅡa期に相当し、中期前半の須玖I式中段階では、口縁部断面がやや長めのコの字状、或いは如意状に屈曲し、頸部下面には突帯が巡り、底部は上げ底の特徴を有するB-2区15号小児用甕棺墓などが該当する。柳田氏のⅢ-3、橋口氏のKⅡb期に相当する。中期中ごろの須玖I式新段階では、口縁部断面が長めのコの字状をなして逆L字形が定着するもの、如意形口縁部が逆L字状を呈するものが見られ、頸部下面には突帯が巡り、底部は上げ底の特徴を有する。B-1区5号小児用甕棺墓、B-2区3号小児用甕棺墓が該当し、柳田氏のⅢ-4、橋口氏のKⅡc、KⅢa期に相当する。この段階には成人用甕棺墓が見られ、2号成人用甕棺墓は口縁部が内側に大きく張り出した鋤先状を呈し、胴部には突帯が巡る。外側への張り出しが少ないことから、KⅡc期、1号成人用甕棺墓は2号に比べて外側への張り出しが大きいことから2号よりやや後出するKⅢa期に該当する。中期後半の須玖Ⅱ式段

階では、口縁部がくの字状に明瞭に屈曲し、頸部に突帯が巡り、胴部はやや張り出し、底部は平底の特徴を有する。B-1区15号小児用甕棺墓などが該当し、柳田氏のⅢ-5・6、橋口氏のKⅢb～c期に相当する。成人用甕棺墓は鋤先状口縁部が外側に垂れ下がり、胴部は張り出す4号成人用甕棺墓がKⅢb、くの字状口縁部が直線的に立ち上がる5号成人用甕棺墓はKⅢcに該当する。

さて、以上の特徴ごとに時期区分を行ったのが、第4表である。中期前半前葉に小形、中形甕棺墓が出現し、中期前半～中期中頃にかけてその最盛期を迎えると大形成人用甕棺墓が出現し、中期後半まで継続し、後期には甕棺墓はなくなる。特に、大形成人用甕棺墓については、



第197図 器高度数分布図



第198図 口径度数分布図

第4表 甕棺墓時期区分

中期中頃には出現し、中期後半までにはほぼ各時期1ないしは2基が埋設される傾向が見られる。

そのほか、甕棺墓の頭位方向は一定ではなく、時期別に見てもバラバラで、頭位別のグルーピングは難しいと考えられる。また、埋置角度については中期代を通じて

時期	柳田	橋口	区	小型	中型	大型
中期初頭	Ⅲ-1	K I c				
中期前半	Ⅲ-2	K II a	B-1	16、33	1、21	
			B-2			
	Ⅲ-3	K II b	B-1	6、14、22、25、27、28	7、9、34	
			B-2	9、10、11、12、15	4	
中期中頃	Ⅲ-4	K II c、Ⅲ a	B-1	2、4、5、8、24、26、31、32	23、30	①、②
			B-2	3、5、6、7、13、14、16、17	1、2、8	
中期後半～末	Ⅲ-5～6	K III b～c	B-1	11、12、13、15、17、18、19、20、29	35、③	④、⑤
			B-2			

※番号は各区の遺構番号を示す。○は成人用甕棺墓

ほぼ水平方向にて埋設されるが、中期後半の後葉には埋置角度が30°を超えるものが多く見られるようになる。この傾向は橋口氏の指摘する傾向<sup>(17)</sup>とほぼ一致しており、埋葬姿勢の変化と関連するものであろう。

### 木棺墓・石棺墓群

木棺墓は埋土出土遺物より、B-1区1号木棺墓が中期初頭以降、B-1区2号木棺墓が中期前半以降と推測される。また、切り合い関係により1号木棺墓は13号小児用甕棺墓以前となることから、中期初頭～中期後半以前、2号木棺墓は35号小児用甕棺墓より中期前半～後半以前の範疇に収まるものと推測される。ただし、いずれも木棺墓全体部を壊さず、掘方の一部を切って小児棺が作られ、小児棺埋葬時に木棺墓が意識されていることから、小児棺とほぼ同時期の中期後半の可能性が高い。また石棺墓に関しては、甕棺墓を切っていることなどから、後期以降の時期に収まるものと推測される。ただし、B-2区1号石棺墓に関しては、古墳時代と想定される住居を切って構築されることから、古墳時代に所属するものと思われる。

さて、以上のような時期比定から、墳墓群の特徴について述べてみたい(第199図)。墳墓群が形成され始めるのは中期前半の前葉で、その後中期前半には小、中形甕棺墓を中心として墓域が拡大する。成人用甕棺墓の出現は見られないが、中形棺を中心としてその周囲に小形棺が配置される。中期中頃には墓域の築造は最盛期を迎え、大形成人用甕棺墓が出現する。大形成人用甕棺墓を中心として、小形棺が周囲に配置され、中形棺も小形棺の周囲にまとまって見られる。この様相は中期後半に至っても継続し、大形成人用甕棺墓及び、木棺墓周辺に小中形甕棺墓が配置される。その後、後期にいたると墳墓群の数は激減し、甕棺墓の築造は終了し、石棺墓群が営まれるのみで、古墳時代に至ると墓域は終焉を迎えるのである。

さて、以上のような変遷を墳墓群はたどる。その特徴としては、各時期には成人棺と共に中形棺が構築され、その周囲に小形棺が配置されることである。大形甕棺墓あるいは中形甕棺墓の埋葬が墓地構成の中心となっていた可能性が考えられる。しかも、対岸で列埋葬を行なっている大肥中村遺跡<sup>(18)</sup>とは様相を違え、各時期1ないしは2基の成人棺を中心として集塊状の墓地が形成されることが大きな特徴と言えよう。

### 2. 生活遺構

遺構検出に留めた遺構が多く、遺物は表面採集したものが殆どを占め、切り合い関係の把握も不十分であることから、各遺構の確実な時期比定を行うには根拠が欠けている。しかし、各遺構から出土した遺物の量も多く、住居平面形の違いが見られるなど、概ねの時期を検討するには十分な資料であると判断し、時期比定を行うことをあらかじめ断っておく。

住居群は平面形から円形と方形に区分される。円形住居と想定されるのはB-1区では大型の4号住居、B-2区では22・23号住居、27号住居跡である。また、方形住居のうちB-2区6・7・10・11・12・13号住居跡に関してはカマドが伴うことから、古墳時代～古代の住居群であると想定される。

住居群から出土した遺物は大きく以下の7時期に区分される。

断面コの字状口縁や如意形口縁を呈する甕や厚めの底部など（第99図14～16・第101図53・第147図5～7・10～14等）から弥生時代前期末～中期初頭。断面逆L字形やくの字に近く屈曲する口縁を持つ甕や壺、やや厚めの底部など（第99図11～13・24～31・第101図54～59・第102図94・第147図8～9・15～22・27第148図45～52・38・39）から中期前葉。鋤先状口縁や跳ね上げ状口縁部を呈する甕、壺、高坏や筒状を呈する器台、やや薄めの底部など（第99図17～23・32・第101図62～71・73・74・第102図100・第147図18～26・第148図40・41・53～59、第149図68～70）から中期後葉～後期初頭。くの字状口縁部の甕や長胴甕、複合口縁壺、頸部がすぼまる器台、レンズ底状の底部など（第99図33・34・第100図35～51・第101図72・75～88・92・第102図95・97～99・101・102～113・第148図28～35・37・42～44・60～63・第149図65～67）から後期。そのほか出土量は少ないが第100図52などから弥生時代終末～古墳時代初頭。第149図79～86などの土師器、須恵器などから古墳時代。第149図87の高台付坏身などから古代。

また、掘下げを実施した住居は、出土遺物の特徴からB-1区1号住居が弥生時代後期、B-2区16号住居が6世紀代以降と想定される。さて、以上のような平面形や土器の時期区分に基づき、各住居の所属時期を単純に検討していくと第5表のようになる。しかし、切り合い関係の把握などが不十分であることから、出土遺物はあくまで住居の所属年代の上限を示し、時期比定の目安に過ぎない。特に、前期末～前半の遺物が出土した住居は平面形が方形であることから、流れ込みの可能性が高い。従って、B区において住居群が出現するのは概ね中期後半～後期の範疇に収まり、後期において集落が最も増加し、その後間において古墳時代、古代と継続するものと想定される。

次に土坑から出土した遺物についても住居と同様に以下のように区分される。

前期末～中期初頭（第97図22～24・26～28・30・第144図1～9・12～15・第145

第5表 住居時期区分

時期	調査区	遺構番号
中期初頭	B-1区	34
	B-2区	43
中期前半	B-1区	9、43
	B-2区	37、41
中期後半～後期初頭	B-1区	3、4、8、10、14、17、19、23、32、47
	B-2区	4、17、22、24、26、27、31、32
後期	B-1区	2、5、6、11～13、20～22、24、25、27、28、30、33、35、36、38～41、47
	B-2区	8、21、25、29、30、34、44、47、48
古墳初頭	B-1区	16
古墳時代	B-2区	1、7、9、15、16、19
古代	B-2区	20

第6表 土坑時期区分

時期	調査区	遺構番号
中期初頭	B-1区	13、39、40、43、56
	B-2区	7、34、42、45、53、74、82、84、98、119、120、139、146
中期前半	B-1区	1、5、7、8、9、88、91、92
	B-2区	16、73、147
中期後半～後期初頭	B-1区	4、6、12、14、17、21、23、27、29、31、32、37、43、62
	B-2区	1、2、3、10、18、24、30、39、47、54、56、67、92、98、107、140、144
後期	B-1区	19、26、50
	B-2区	6、13、43、57、87、102、103、142
古墳初頭	B-1区	35、36
古代	B-1区	46
	B-2区	5、46

図 34)、中期前半(第 97 図 25・29・31～32・41・第 144 図 1・10・16・第 145 図 38～40)、中期後半～後期初頭(第 97 図 33～37・40・42～46・第 144 図 17～23・30～33・第 145 図 41～46・48・49)、後期(第 97 図 39・47～49・第 144 図 24～29・第 145 図 47～51)、古墳時代初頭(第 97 図 51)、8 世紀代(第 145 図 53・54)となる。また、出土遺物の特徴から、掘下げを実施した土坑のうち、中期前半には(B-1 区)1・5・7・8・92 号土坑、中期後半～後期初頭(B-1 区)4・27 号土坑、(B-2 区)1・2・3 号土坑、後期(B-2 区)6 号土坑、古墳時代初頭(B-1 区)36 号土坑、8 世紀代(B-1 区)46 号土坑、(B-2 区)5 号土坑がそれぞれ所属するものと想定される。

以上に基づき、各土坑の所属時期を単純に検討してゆくと第 6 表のようになる。住居跡とは異なり、土坑は概ね前期末～中期初頭以降に出現し、後期までの範疇に収まり、その後間において古墳時代、古代と継続するものと想定される。

また、周溝状遺構は中期前半に所属するものと想定される。

さて以上のような時期比定から、B 区における生活遺構の特徴について述べてみたい(第 200 図)。B 区一帯が集落として最初に利用され始めるのは弥生時代前期末～中期初頭である。遺構は土坑類が殆どであるが、かなりの数量が確認される。墳墓群に伴う土坑の可能性はあるものの、少なくとも生活遺構域としての利用が推測される。中期後半～後期初頭に至ると住居が作られるようになり、この段階から集落の密集が著しくなる。住居、土坑の数量も豊富で、後期に至るとそのピークを迎えるようになる。しかし、古墳時代初頭にはその量は減少し、次に集落として利用され始めるのは古墳時代に至ってからで、特に B-2 区周辺に多く見られるようになる。この状況は古代まで続くこと見られ、その後集落としての利用は確認されなくなる。

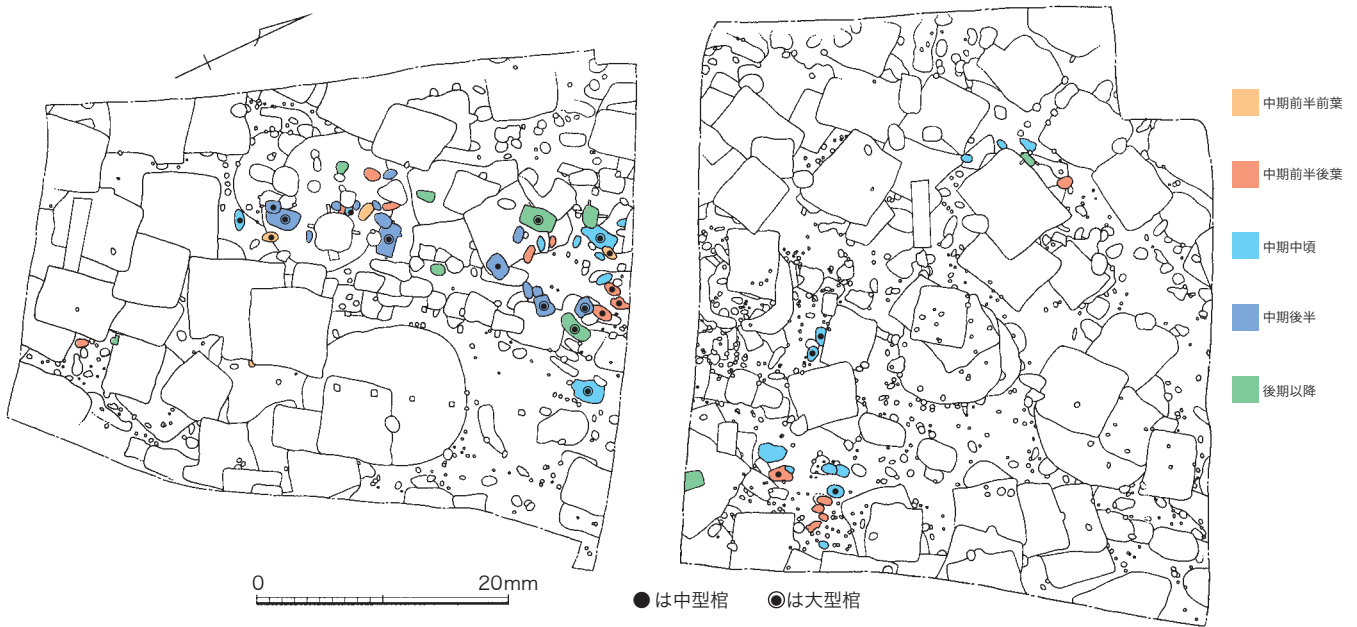
## (2) B 区の性格について

前節において検討した各遺構の時期とその特徴をもとに、B 区の性格について概説する。

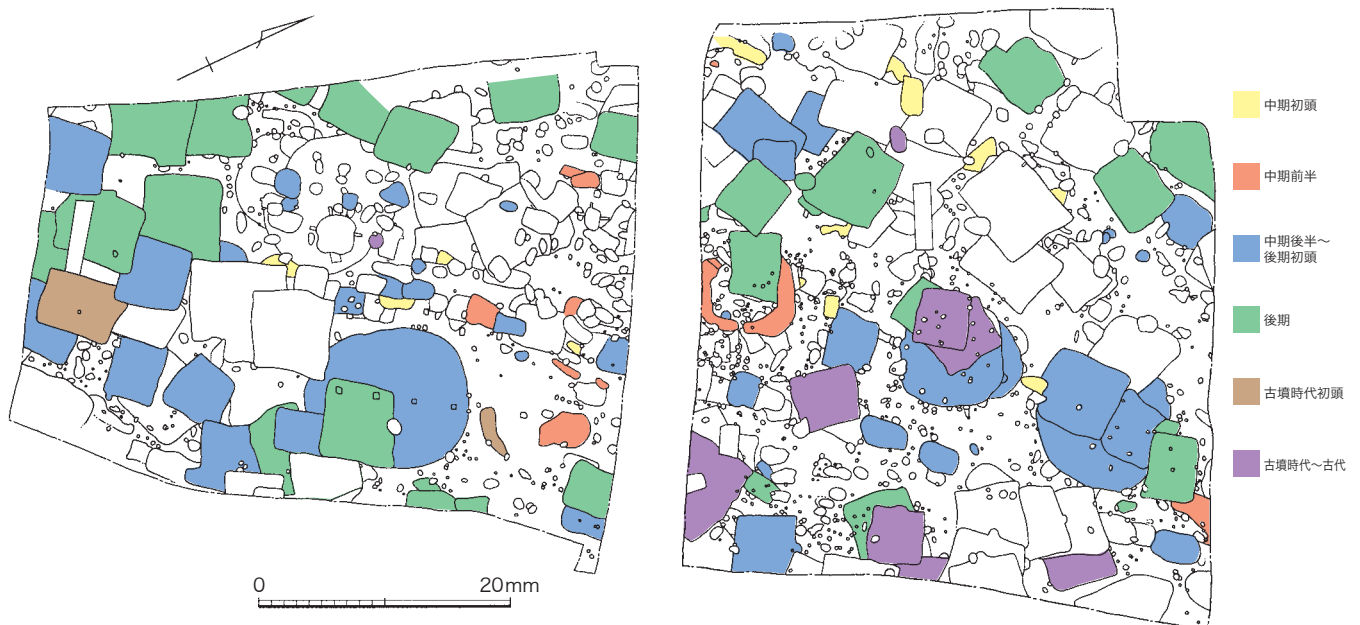
試掘調査等の結果より、調査区周辺は南北 200 m、東西 60m 程度の中洲状の微高地であると想定され、周辺には A-2 区のような流路や大肥川が巡り、環濠集落の様相を呈していたことが判明している。このような矮小な範囲に、密集して生活遺構と墳墓群が混在していることがこの調査区の性格とも言え、大肥川流域最大の拠点集落と位置付けられる。さて、前節での時期比定と変遷から、B 区一帯が生活域としてどのように利用されていたのかを以下に概略する。

弥生時代中期初頭には遺構数は少ないながらも集落域として利用され始め、続く中期前半には B 区の中心部において墓域の形成が開始される。中期前半を通して検出された生活遺構数は少ないものの、隣接する A-2 区では流路からほぼ同時期の大量の遺物が出土したことから、調査区周辺の未調査地などが中心的な集落域として利用されていたことが想定される。このような状況は、基本的に墓域と集落域が区分けされていたことを物語っている。墓域が減少傾向を迎えながらも継続する中期後半には、少ないながらも住居群が墓域周辺に営まれ、後期に至ると次第に墓域としての利用は下火となり、逆に生活遺構、特に住居が墓域周辺に大幅に増加する。しかし、墓域と生活域との区分け意識は基本的に残るものと思われ、墳墓群を住居が壊して構築されることは非常に少なく、墳墓群のある箇所は集落のなかの空白地のような様相を呈している。その後、古墳時代初頭を経て古墳時代には再び集落数が増加し、その状況は古代まで継続するものと想定される。

さて、B区の大まかな変遷を述べたが、特に墓域の性格についてここでは触れておきたい。これまでに述べてきた墳墓群の特徴をまとめると、大形成人用甕棺墓が各時期に1ないし2基しか埋葬されないこと、対岸に位置し墳墓群が列状を形成する大肥中村遺跡と異なり集塊状を呈すること、後期に至っても墳墓群のある箇所は住居群によって破壊を受けないこと、成人棺の上石として利用された可能性のある大石が存在していることなどが挙げられる。また、1・2号成人用甕棺墓には、墓域での希少性から副葬品と同等の扱いをされた可能性が考えられる赤色顔料<sup>(19)</sup>が少量ではあるが顔面の位置に塗布されていたことも注目される。以上の点から、この墳墓群がかなり特別な意味を持つ墳墓群である可能性が高い。それは、大肥中村遺跡における列埋葬群が近接することから考えても、溝口氏のいう区画墓のような様相が考えられよう<sup>(20)</sup>。すなわち、集落を構成する集団のうち、



第 199 図 B 区墳墓群変遷図



第 200 図 B 区生活遺構変遷図

貢献度の高い有力家族集団の墓域ではないかと現時点では想定されるのである。なお、後期に至って成人用甕棺墓の築造がなくなる点については、集落数が増加する状況などから、墓域が移動した可能性などが考えられよう。

### (3) C区の遺構の時期とその性格について

C区において確認された遺構は住居11軒、竪穴状遺構4基、土坑3基、溝1条、小児用甕棺墓1基にのぼる。ここでは各遺構の時期と特徴について説明し、その性格について検討する。

これらの遺構群は概ね5世紀後半～6世紀代にかけてのものと想定されるが、特に市内出土の5世紀代のカマドを有する住居の資料が現時点では少ない。そこで今回は、近隣のうきは市仁右衛門畑遺跡における重藤氏の土師器編年<sup>(21)</sup>を参考に時期比定を行っていくこととする。

住居群のうち、5世紀代と考えられるのが3・4号竪穴住居である。これらの住居より出土した遺物には須恵器が含まれず、縄蓆文が施された朝鮮系軟質土器の鉢、格子目タタキの施された甑の破片、多孔式甑が見られる。これらのうち、3・4号より出土した甕は口縁部が直線的に外傾するもの、やや緩やかに湾曲して外反するものなどが見られることから、重藤氏の6期～7期に相当する。高坏は坏部が深く、口縁部が小さく外反する。脚部は3・4号住居ともに脚部を明瞭に屈曲させるもの(第160図8、第162図10・11)、脚部が直線的に開くもの(第160図7、第162図9)が見られることから5～6期に相当する。また、小形丸底壺が見られず、碗類が見られ、大形多孔式甑が丸底であることから考えても5期には遡らず、3・4号住居は概ね6期の範疇で収まるものと考えられる。また、朝鮮系軟質土器についても、うきは市塚堂遺跡<sup>(22)</sup>13号住居より軟質壺が出土している例から、3・4号住居に伴う遺物であると考えられる。さて、そのほか6期に該当する遺構と考えられるものに6号住居が挙げられる。甕が直線的に開くこと、高坏の脚部が2種類見られること、碗類が見られることなどからも6期に該当する可能性が考えられる。第168図4・5は小形丸底壺の可能性があり、その場合、6期のなかでもやや古い時期に相当する。ただし、MT10以降と想定される須恵器の破片が出土しているが、住居床面しか残存しておらず、柱穴は上面より掘りこまれた可能性もあることから、混入遺物の可能性が高いことを後述しておく。そのほか、1号溝も甕の口縁部が直線的に外反することなどから6期に相当する可能性が考えられる。以上の特徴などから、3・4・6号住居、1号溝は5世紀の後半代に位置づけられる。

次に6世紀代に相当するものには須恵器が出土するようになる。この内、MT15～TK10の6世紀前半に相当するものとしては1・2・7・8、9・10・11号住居がある。これらより出土した須恵器坏蓋には口唇部内面に段を有し、天井部との境には稜を有するものが見られるなど碗特徴が挙げられる。さて、土師器の各種特徴について述べると、甕は緩やかに屈曲して外反し、は手持ちヘラケズリ、ミガキが施されるものが多く、黒塗り、口縁部が内湾するものが見られることなどから7～8期に該当する。特に2号住居に顕著である。高坏は2号住居例などは8期に属するものか。また、8・16号住居出土の高坏は口縁部が外に開き坏部の深さも浅いなどの特徴から5期に属するが、下層に1号溝が見られることからこの溝の出土遺物が混入した可能性が考えられる。また、須恵器の出土はないものの、5号住居は甕の口縁部が湾曲して外反するなどの特徴から7～8期に相当する。そのほか、1～4号竪穴、2・3号土坑についてもほぼ同様の時期に収まるものと想定される。以上の特徴から1・2・5・7～11号住居、1～4号竪穴状遺構、2・3号土坑は6

世紀前半期に位置づけられる。

そのほか 1 号土坑は弥生時代、1 号甕棺墓は弥生時代中期後半に位置づけられる。

さて、前述した遺構の時期をもとに、遺構の変遷を概観すると、この場所が集落として利用されるようになるのは弥生時代中期である。小児用甕棺墓が構築されることから考えても周辺部に弥生時代の集落が営まれていた可能性が想定される。これは、B 区の集落域とは別に C 区周辺部もほぼ同時期に集落域として利用されていたことを物語っている。その後 C 区一帯が再度利用されるようになるのは、5 世紀後半からであり、3・4・6 号住居が営まれ、西側には溝が構築される。続く 6 世紀前半期には住居数が増加する傾向が見られ、1・2・5・7～11 号住居、1～4 号竪穴状遺構、2・3 号土坑などが構築され、集落は終焉を迎えるようである。

さて、以上が C 区の遺構の変遷であるが、この調査区の特徴ともいべきなのは、日田市内でも類例の少ない 5 世紀代のカマドを持つ住居が導入されていることである。6 号住居のカマドは煙出し部が住居壁面よりも手前に位置する特徴を持ち、小田氏<sup>132</sup>のいう 5 世紀代のカマドの特徴を有する。また、3・4 号住居は朝鮮系軟質土器、多孔式の大形把手付甕が伴うことなどからも、カマドという渡来系の生活様式が渡来系遺物とともに定着していったことを示し、また、6 世紀代の 8 号住居から鞆羽口が出土していることは、渡来系遺物の定着に鉄生産技術が伴っていたことを物語っている。このような 5 世紀代のカマドの導入は、筑後川流域では重藤氏の編年の 5 期、5 世紀の前半～中葉に相当するとされる。本遺跡の調査結果より、筑後川の上流域に位置する日田市では、少なくともこれに後続する 6 期にはカマドが出現してしたことになる。この時期のカマドでは近年日田市内の求来里地区において調査例が増加している。求来里平島遺跡<sup>(24)</sup>では 5 世紀後半代の隅竈が検出されており、町ノ坪遺跡<sup>(25)</sup>では、初期須恵器を伴うカマドを持つ住居、金田遺跡<sup>(26)</sup>では、朝鮮系軟質土器、陶質土器などを伴ってカマドを持つ住居などが確認されている。また、朝鮮系軟質土器はほかにも小迫墳墓群第一地区墓群<sup>(27)</sup>より出土していることなどから、カマド、朝鮮系土器などの生活様式は筑後川を遡り、大肥川流域を経由して、日田市内に定着したものと考えられる。今後、求来里地区の調査例の報告と共に、日田市内におけるカマド導入期の様相が明らかになってゆくものと考えられる。

## おわりに

平成 18 年 1 月 22 日、埋蔵文化財係長を務められた田中伸幸氏が永眠されました。今から約 4 年前の本遺跡の調査時には、担当係長として何度も現場に足を運んできたいただき、深夜の調査の際には差し入れをしてくれたことが思い出されます。また担当者が現場や報告書作成で苦労しているときには必ず優しい言葉で励ましてくださる、見た目も中身も大きな尊敬すべき係長でした。1 年 3 ヶ月もの闘病生活を余儀なくされたが病魔には勝てず、享年 47 才という若さで旅立たれました。生前のご指導に感謝申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。



小田富士雄先生より指導を受ける担当者 と 故田中係長

- 註1) 『宇土遺跡発掘調査報告書』 大分県天瀬町教育委員会 1986
- 註2) 『後迫遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(18) 大分県教育委員会 2001  
『後迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第35集 日田市教育委員会 2002
- 註3) 『日田市高瀬遺跡群の調査4 上野第2遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IV 大分県教育委員会 2002
- 註4) 『五馬大坪遺跡』天瀬町教育委員会 1989
- 註5) 『尾漕遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 日田市教育委員会 2001
- 註6) 『佐寺原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 大分県教育委員会 1998
- 註7) 『吹上遺跡Ⅰ、Ⅱ』日田市教育委員会 1980、1981  
『吹上遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第52集 日田市教育委員会  
『吹上遺跡Ⅳ』日田市埋蔵文化財調査報告書第60集 日田市教育委員会
- 註8) 『小迫辻原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(10) 大分県教育委員会 1999  
『小迫辻原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書15 日田市教育委員会 2000
- 註9) 速水信也 『横隈狐塚遺跡Ⅱ 下巻』「Ⅵ 総括」小郡市文化財調査報告書第27集 小郡市教育委員会 1985
- 註10) 後期に至ると規模の大きなものが見られ、最大で130cmを測るようになる。
- 註11) 『横隈狐塚遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第27集 小郡市教育委員会 1985
- 註12) 『永岡遺跡Ⅱ』筑紫野市文化財調査報告書第26集 筑紫野市教育委員会 1990
- 註13) 『日本民族・文化の生成—九州大学医学部解剖学第二講座書蔵古人骨資料集成—』六興出版 1988
- 註14) 橋口達也「Ⅳ 考察 4. 甕棺の編年の研究」九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告XXXI 中巻 福岡県教育委員会 1979
- 註15) 柳田康雄「Ⅲまとめ 3 「ナ国」の甕棺編年」『伯玄社遺跡』春日市文化財調査報告書 第35集 春日市教育委員会 2003
- 註16) 田崎博之「須玖式土器の再検討」『史淵』第122輯 九州大学文学部 1985
- 註17) 橋口達也「Ⅳ 考察 1. 甕棺埋葬の傾斜角について」九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告XXXI 中巻 福岡県教育委員会 1979  
橋口達也「甘木朝倉地方甕棺についての若干の所見—とくに栗山遺跡出土甕棺を中心として—」『栗山遺跡』天岸文化財調査報告第12集 甘木市教育委員会 1985
- 註18) 『大肥中村遺跡—発掘調査概報—』日田市教育委員会 2003
- 註19) 速水信也「第三章第1節六 新しい墓制の出現」『小郡市史 第一巻通史編』小郡市 1996
- 註20) 溝口孝司「墓地の構成からなにが分かるか 1. カメ棺墓地の移り変わり」『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館 1998  
溝口孝司「二列埋葬墓の終焉：弥生時代中期(弥生Ⅲ期)北部九州における墓地空間構成原理の変容の社会考古学的研究」『古文化談叢』38集 1997
- 註21) 重藤輝行「Ⅳおわりに 1. 仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集 福岡県教育委員会 2000年
- 註22) 『塚堂遺跡Ⅰ』一般国道浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会 1983
- 註23) 小田和利「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994
- 註24) 『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 日田市教育委員会 2002
- 註25) 「町ノ坪遺跡A～C区」『平成15年度(2003年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2004  
「町ノ坪遺跡B区」『平成16年度(2004年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2005
- 註26) 「金田遺跡」『平成16年度(2004年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2005  
「求来里金田遺跡」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会 2005
- 註27) 『小迫墳墓群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 大分県教育委員会 1995



## 第7章 大肥遺跡出土人骨について

石川健・田中良之

\*九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座

### 1. はじめに

大分県日田市大肥遺跡から人骨が出土した。調査にあたった日田市教育委員会から田中に人骨調査の依頼があり、田中らが現地に赴いて人骨の観察・実測・取り上げを行った。その後人骨は、九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座へと搬入され、整理・分析を行った。以下に、これらの人骨についてその結果を記載する。なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化研究院考古人類資料室に保管されている。

### 2. 出土状態

#### 2-1. 1号甕棺出土人骨 (B1区)

1号甕棺からは、上下顎の歯牙および頭蓋冠の痕跡が認められた。人骨は下甕下半部より出土している。北側・甕棺合口側から上顎歯牙がほぼ歯列を保った状態で出土し、南側より下顎および頭蓋冠片が出土している。下顎歯は歯列を保持しない。また、上顎歯の西側に赤色顔料の痕跡が認められる。人骨の保存状態がよくないことから埋葬姿勢などは不明であるが、上顎歯牙がほぼ歯列を保った状態であることから、本来この位置に頭部があったものと考えられる。

#### 2-2. 5号石棺出土人骨 (B1区)

5号石棺からは、頭蓋骨および歯牙が出土しており、石棺の西端付近に位置する。頭蓋骨の東側より歯牙が出土している。頭蓋骨および歯牙の周辺からは赤色顔料が点的に認められる。

### 3. 人骨所見

#### 3-1. 1号甕棺出土人骨

【保存状況】人骨の保存状況はよくない。下顎骨の小片および上下顎の歯牙が出土した。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	/	/	/	/	・ I <sup>2</sup>	・ I <sup>1</sup>		/	/	・ C	/	/	/	/	/
/	/	/	/	P <sub>1</sub>	・ C	・ I <sub>2</sub>	・ I <sub>1</sub>		/	/	/	/	P <sub>2</sub>	/	/	/

これらの歯牙のほかにも、歯種詳細は不明であるが大白歯の咬合面小片がみられ、その歯牙咬耗度は栃原の1° b～cである(栃原 1957)。

【性別・年齢】性別は判定可能な部位が遺存しないため不明である。年齢は、歯牙咬耗の進行具合から成年と推定される。

【特記事項】上下顎歯ともにエナメル質減形成が認められる。残存する歯牙のほとんどにおいて、歯基部を中心に幅2～5mmほどの断続的なエナメル質減形成が認められた。これらの歯牙の形成期をみると約3歳～6歳の期間を中心に何らかのストレスを断続的に受けていたものと考えられる。

### 3-2. 5号石棺出土人骨

【保存状況】人骨の保存状況はよくない。頭蓋骨および歯牙が遺存するが、保存状態がよくないことから、頭蓋骨、歯牙ともに部位や歯種の特定は不能であった。

【性別・年齢】性別・年齢ともに判定可能な部位が残存しないことから不明である。

## 4. まとめ

以上、大肥遺跡より出土した人骨についての報告を行った。本遺跡より2体の人骨が出土したが、人骨の保存状況がよくないことから、形質的比較を行える個体は得られなかった。また、埋葬姿勢についても躯幹骨以下の骨が認められないことから不明である。

また、人骨所見において述べたように、1号甕棺出土人骨については上下顎歯にエナメル質減形成が認められた。エナメル質減形成は、全身的障害、局所的障害、遺伝的な種々の障害によって生じるとされており、なかでも全身的障害に関しては、飢餓、栄養障害その他感染症によるものなどの要因が考えられている（山本 1988；Malville 1997；Webb 1995）。本人骨において認められたエナメル質減形成は、残存歯牙に限られており、左右対称性等について詳細な検討を行うことが出来ないことから、全身的障害によるものかあるいは局所的障害であるのか不明である。

また、エナメル質減形成の形態的特徴についてみると、線状（Line）（山本 1988）を呈するものがほぼ大半を占め、一部微細なピット状の小窩が形成されているものもみられた。

エナメル質減形成の形成時期についてみると、この点に関しても残存歯牙が前歯を中心とするとから全体的なことは不明といわざるを得ない。少なくとも残存歯牙にみられる罹患部位の歯冠形成時期から、少なくとも3歳から7歳の間を中心に減形成が生じており、この時期に何らかのストレスを受けたものと考えられる。

以上エナメル質減形成のみられた人骨は、数量的また残存する歯牙においても限られたものであることから、出現頻度や歯種の偏りなどについて、また、それらに基づく当地域における一般的傾向については詳述することはできないが、今後の資料増加をまって改めて検討を行いたい。

謝辞 大肥遺跡出土人骨を調査・研究するにあたって、さまざまご教示、ご助力をいただいた日田市教育委員会の渡邊隆行氏ならびに関係諸氏に感謝申し上げたい。また、比較社会文化学府基層構造講座の諸氏には人骨の整理等で協力頂いた。記して謝意を表したい。

## 文献

Nancy J. Malville, 1997: Enamel Hypoplasia in Ancestral Puebloan Populations From Southwestern Colorado. I. Permanent Dentition. *American Journal of Physical Anthropology* 102.

柄原博, 1957: 日本人歯牙の咬耗に関する研究. *熊本医学会雑誌*, 31. (補冊 4)

山本美代子, 1988: 日本古人骨永久歯のエナメル質減形成. *人類学雑誌*, 96-4.

Stephen Webb, 1995: Palaeopathology of Aboriginal Australians-Health and disease across a hunter-gatherer continent.



1号甕棺出土人骨 上下顎歯牙



1号甕棺出土人骨 エナメル質減形成  
(上顎左犬歯)



1号甕棺出土人骨 エナメル質減形成  
(下顎右第一小臼歯犬歯)

第7表 出土甕棺観察表①

挿図番号	区	遺構名	器種	法 量 (単位: cm)			調 整		胎 土	焼 成	色 調		備 考	主軸	埋角
				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面			
第9図1	B-1	1号甕棺上	成人用甕棺	75.8	9.8	84.0	ナデ	ナデ	A.G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色		S42W	8
第9図2	B-1	1号甕棺下	成人用甕棺	76.2	10.8	87.9	ナデ	ナデ	A.G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色			
第11図1	B-1	2号甕棺上	成人用甕棺	65.0	10.2	88.0	ナデ、ハケ目	ナデ	A.G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色		S39W	3
第11図2	B-1	2号甕棺下	成人用甕棺	63.6	10.4	88.4	ナデ、ハケ目	ナデ	A.E.G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色			
第13図1	B-1	3号甕棺上	成人用甕棺		9.4	残存器高(60.8)	ナデ	指オサエ、ナデ(工具痕有り)	A.C.E	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	黒斑、口縁打ち欠き	N77E	39
第13図2	B-1	3号甕棺下	成人用甕棺		9.0	残存器高(65.4)	ナデ	ナデ(工具ナデ、一部指オサエ有り)	A.C.E	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	黒斑、口縁打ち欠き		
第13図3	B-1	3号甕棺	甕	40.8	10.8	53.1	ナ	ナ	A.D	良好	灰黄色	灰黄色			
第15図1	B-1	4号甕棺上	成人用甕棺	51.1		残存器高(41.5)	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目	A.D.E	良好	灰黄色	淡黄橙色	1部合成	S42W	46
第15図2	B-1	4号甕棺下	成人用甕棺	57.8	14.6	87.1	ナデ、1部ハケ目	ナデ、ハケ目	A.D.E.G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	黒斑、穿孔有り		
第17図1	B-1	5号甕棺下	成人用甕棺	(44.0)	12.6	90.0	ナデ、ミガキ	ミガキ、ナデ	A.G	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	1部合成、黒斑有り	N81W	62
第19図1	B-1	1号甕棺上	小児用甕棺	37.9	8.8	46.2	ナデ、ハケ目、指オサエ	ナデ	A.B.G	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	穿孔、黒斑有り	N62E	4
第19図2	B-1	1号甕棺下	小児用甕棺	41.3	9.2	51.5	ナデ、ハケ目、一部指オサエ	ナデ	A.C.E	良好	淡黄橙色	淡黄橙色			
第21図1	B-2	2号甕棺上	小児用甕棺	30.8	7.6	36.7	ナデ、ハケ目	ナデ、一部ハケ目	A.E.G	良好	灰褐色	灰褐色		S57W	2
第21図2	B-2	2号甕棺下	小児用甕棺	31.2	7.4	35.0	ナデ、ハケ目	ナデ、一部ハケ目	A.E.G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色			
第23図1	B-1	3号甕棺	小児用甕棺		8.9	残存器高(20.0)	ナデ、ハケ目後とところナデ	ナデ(工具痕有り)	A.E.G	良好	灰黄色	灰黄色		N86W	43
第25図1	B-1	4号甕棺上	小児用甕棺	28.0	8.5	37.3	ナデ、ハケ目	ナデ	D.F.G	良好	褐灰色	黄灰色		S56E	3
第25図2	B-1	4号甕棺下	小児用甕棺	31.2	7.3	38.1	ナデ、ハケ目	ナデ	A.G	良好	褐灰色	淡黄橙色			
第27図1	B-1	5号甕棺上	小児用甕棺	36.6	7.3	40.0	ナデ、ハケ目	ナデ	A.H	良好	灰黄褐色	灰黄色		N9W	1
第27図2	B-1	5号甕棺下	小児用甕棺	34.7	7.2	41.3	一部指オサエ、ハケ目後ナデ、ハケ目	ナデ	A.D.E	良好	淡黄橙色	明褐灰色			
第29図1	B-1	6号甕棺上	小児用甕棺	28.0	7.2	38.6	ナデ、ハケ目	ナデ	A	良好	灰白色	灰白色	黒斑有り 内面モミ痕?	N52W	0
第29図2	B-1	6号甕棺下	小児用甕棺	29.2	7.1	38.2	ナデ、ハケ目	ナデ	A.D	良好	淡黄橙色	淡黄橙色			
第31図1	B-1	7号甕棺上	小児用甕棺	46.2	10.0	54.2	ナデ、ハケ目	ナデ	A.G.H	良好	淡黄橙色	灰白色	黒斑有り	N55E	3
第31図2	B-1	7号甕棺下	小児用甕棺	46.5	9.0	54.6	ナデ、ハケ目	ナデ	E.G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	黒斑有り		
第33図1	B-1	8号甕棺上	小児用甕棺	36.8	8.0	40.6	ナデ、一部指オサエ、ハケ目	ナデ、一部指オサエ	A.H	良好	淡褐色	淡褐色	黒斑有り	S12W	8
第33図2	B-1	8号甕棺下	小児用甕棺	34.0	7.1	43.2	ナデ、ハケ目、一部器面剥落のため調整不明	ナデ	A.E	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	スス付着 黒斑有り	N50E	8
第35図1	B-1	9号甕棺上	小児用甕棺	45.2		残存器高(57.1)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	黒斑有り		
第35図2	B-1	9号甕棺下	小児用甕棺	43.6	10.5	53.4	ナデ、ハケ目	ナデ	A.F.G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	黒斑有り		
第37図1	B-1	10号甕棺	小児用甕棺			残存器高(1.1)	ナデ	ナデ	A	良好	淡黄橙色	淡黄橙色			
第37図2	B-1	10号甕棺	小児用甕棺			残存器高(16.4)	ハケ目	ナデ	A.G	良好	灰褐色	淡褐色			
第39図1	B-1	11号甕棺	小児用甕棺		8.8	残存器高(43.3)	ナデ、ハケ目	ナデ一部ハケ目、一部指オサエ	A.C	良好	淡褐色	淡褐色		S68W	56
第41図1	B-1	12号甕棺	小児用甕棺		9.4	残存器高(49.2)	ナデ、ハケ目、底部未調整	ナデ、指オサエ	A.D	良好	褐灰色	淡黄橙色	穿孔	S81W	69
第43図1	B-1	13号甕棺	小児用甕棺	(43.2)	10.0	47.8	ナデ、ハケ目	指オサエ後ナデ、ハケ目? ナデ	A.C.E	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	穿孔	N86E	30
第45図1	B-1	14号甕棺上	小児用甕棺	24.1	6.7	33.1	ナデ、ハケ目、接合痕	ナデ	A.B.C	良好	淡黄橙色	淡黄橙色		N15E	1
第45図2	B-1	14号甕棺中	小児用甕棺	(27.8)			ナ、暗文	ナ、後ナ	A	良好	灰黄褐色	灰黄褐色			
第45図3	B-1	14号甕棺下	小児用甕棺	31.0	6.6	34.3	ナデ、ハケ目	ナデ	A.E	良好	淡黄橙色	淡黄橙色			
第47図1	B-1	15号甕棺上	小児用甕棺	(34.2)		残存器高(18.7)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.C.E	良好	淡黄橙色	淡黄橙色		N79E	-
第47図2	B-1	15号甕棺下	小児用甕棺	(37.8)		残存器高(40.6)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.C.E	良好	灰褐色	灰白色			
第49図1	B-1	16号甕棺上	小児用甕棺	40.5	9.4	47.8	ナデ、ハケ目	ナデ	A.E.G	良好	灰褐色	灰褐色	黒斑有り	S28E	11
第49図2	B-1	16号甕棺下	小児用甕棺	37.5	8.1	43.3	ナデ、ハケ目	ナデ	A.B.G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	スス付着?		
第51図1	B-1	17号甕棺上	小児用甕棺	(30.4)		残存器高(13.4)	ハケ目後ナデ	ナデ	A.C	良好	灰黄褐色	灰黄褐色		N65W	42
第51図2	B-1	17号甕棺下	小児用甕棺	(34.8)	7.8	37.4	ナデ、ハケ目	ナデ	A.C	良好	淡黄橙色	黒褐色			
第53図1	B-1	18号甕棺	小児用甕棺	(28.0)	6.6	37.5	ナデ、ハケ目後ナデ、ハケ目	ナデ、指オサエ	A.C.G	良好	灰黄色	灰黄色		S60W	20
第55図1	B-1	19号甕棺上	小児用甕棺	(30.4)		残存器高(20.1)	ナデ、ハケ目後ナデ、ハケ目	ナデ、一部ハケ目	A.D	良好	淡黄橙色	灰白色		N65W	42
第55図2	B-1	19号甕棺下	小児用甕棺	(32.2)	7.8	36.3	ナデ、ハケ目	ナデ、一部ハケ目	A.D.G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色			
第57図1	B-1	20号甕棺上	小児用甕棺			残存器高(15.7)	ハケ目	ナデ	A.C	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	上下打ち欠き	S16W	34
第57図2	B-1	20号甕棺下	小児用甕棺	(37.8)	9.4	45.1	ナデ、ハケ目	ナデ	A.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑?		

胎土: A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第8表 出土甕棺観察表②

挿図番号	区	遺構名	器種	法 量 (単位: cm)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考	主軸	埋角
				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面			
第59図1	B-1	21号甕棺上	小児用甕棺	39.4	10.8	36.4	ナデ、ハケ目	ナデ	A.E.G	良好	灰黄色	灰黄色	黒斑 一部合成	N41W	1
第59図2	B-1	21号甕棺下	小児用甕棺	(45.2)	11.2	50.7	ナデ、指オサエ、ハケ目	ナデ	B.D.E.G	良好	淡黄褐色	褐灰色	沈線有り 歪み有り		
第61図1	B-1	22号甕棺上	小児用甕棺	37.6	7.8	44.1	ナデ、ハケ目後ナデ、ハケ目	ナデ	A.B.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		S35W	2
第61図2	B-1	22号甕棺中	小児用甕棺	29.0		残存器高(16.7)	ナデ、ハケ目	ハケ目、ナデ	A.D.E.H	良好	淡黄褐色	淡赤褐色	底部打欠		
第61図3	B-1	22号甕棺下	小児用甕棺	32.1	7.1	39.4	ハケ目後ナデ、ナデ、ハケ目	ナデ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	スス付着		
第63図1	B-1	23号甕棺上	小児用甕棺	43.0	10.4	55.8	ナデ、ハケ目	ナデ	A	良好	灰褐色	淡黄灰色		N73W	11
第63図2	B-1	23号甕棺下	小児用甕棺	41.0	8.9	48.2	ナデ、ハケ目	ナデ	A	良好	淡黄褐色	淡黄褐色			
第65図1	B-1	24号甕棺上	小児用甕棺	(32.4)		残存器高(7.9)	ナデ、器面剥落のため調整不明	ナデ	A.B.C.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		N3E	-
第65図2	B-1	24号甕棺下	小児用甕棺	(31.8)		残存器高(24.5)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.B.C	良好	黒褐色	淡黄褐色	スス付着		
第67図1	B-1	25号甕棺上	小児用甕棺	(38.0)		残存器高(31.3)	ナデ、指オサエ、ハケ目後ミガキ	ナデ、一部指オサエ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑有り	N27E	1
第67図2	B-1	25号甕棺下	小児用甕棺	(44.6)	(10.0)	46.7	ナデ、ハケ目	ナデ、表面剥落のため調整不明	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色			
第69図1	B-1	26号甕棺上	小児用甕棺	28.9	7.0	35.2	ナデ、ハケ目	ナデ	A.D	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		N68W	3
第69図2	B-1	26号甕棺下	小児用甕棺	31.1	7.8	39.0	ナデ、ハケ目	ナデ	A.D	良好	褐灰色	褐灰色			
第71図1	B-1	27号甕棺上	小児用甕棺	31.6	7.4	36.8	ナデ、ハケ目	ナデ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑有り	S36E	13
第71図2	B-1	27号甕棺下	小児用甕棺	32.0	7.2	36.4	ナデ、ハケ目	ナデ	A.C.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑有り		
第73図1	B-1	28号甕棺上	小児用甕棺	(30.6)		残存器高(8.6)	ナデ、ハケ目後ナデ、ハケ目	ナデ	A.C.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		S65E	13
第73図2	B-1	28号甕棺下	小児用甕棺	(32.3)	8.0	37.7	ハケ目後ナデ、ナデ、ハケ目	ナデ	A.E.G	良好	淡褐色	淡褐色			
第75図1	B-1	29号甕棺上	小児用甕棺	32.7	8.0	40.1	ナデ、ハケ目	ハケ目後ナデ、ナデ	A.D.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	一部合成	N53W	9
第75図2	B-1	29号甕棺下	小児用甕棺	31.8	7.8	38.6	ナデ、ナデ(工具痕)、ハケ目	ハケ目後ナデ、ナデ	A.C.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	スス付着		
第77図1	B-1	30号甕棺上	小児用甕棺	53.4	10.4	57.2	ナデ、ハケ目	ナデ	A.G	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	黒斑有り	S72E	0
第77図2	B-1	30号甕棺下	小児用甕棺	(42.4)		残存器高(49.1)	ナデ、ハケ目後ナデ、ハケ目	ナデ	A.B.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色			
第79図1	B-1	31号甕棺上	小児用甕棺	(35.2)		残存器高(10.4)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.C.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		N60E	-
第79図2	B-1	31号甕棺下	小児用甕棺	(34.2)		残存器高(17.6)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.C.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑有り		
第81図1	B-1	32号甕棺上	小児用甕棺	26.4		残存器高(30.4)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		N27E	-
第81図2	B-1	32号甕棺下	小児用甕棺	(32.5)		残存器高(23.5)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.C.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑有り		
第83図1	B-1	33号甕棺上	小児用甕棺	(33.0)		残存器高(9.3)	ナデ、一部指オサエ、ハケ目	ナデ	A.C.E	良好	黒褐色	淡黄褐色	沈線2条有り、	N66W	-
第83図2	B-1	33号甕棺下	小児用甕棺	(30.4)		残存器高(10.2)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.C	良好	暗褐色	淡黄褐色			
第85図1	B-1	34号甕棺上	小児用甕棺	(41.5)		残存器高(39.4)	ハケ目後ナデ、ナデ、ハケ目	ナデ	B.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑有り	N56W	1
第85図2	B-1	34号甕棺下	小児用甕棺	(45.5)		残存器高(45.0)	ナデ、ハケ目後ナデ、ハケ目	ナデ	A.B.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色			
第87図1	B-1	35号甕棺下	小児用甕棺	37.9	9.6	52.8	ナデ、ハケ目	ハケ目後ナデ、ナデ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		S37W	24
第106図1	B-2	1号甕棺上	小児用甕棺	41.8		残存器高(56.5)	ナデ、ハケ目	ハケ目後ナデ	A.D	良好	淡褐色	淡褐色	一部合成	S73E	8
第106図2	B-2	1号甕棺下	小児用甕棺	41.5		残存器高(38.2)	ナデ	ハケ目後ナデ	A.B.E	良好	淡褐色	淡褐色	黒斑、粘土接合痕有り		
第108図1	B-2	2号甕棺上	小児用甕棺	(34.0)	(8.2)	47.7	ナデ、ハケ目	ナデ	A.E	良好	灰黄褐色	灰黄褐色		S51E	0
第108図2	B-2	2号甕棺下	小児用甕棺	(41.0)	(9.0)	52.0	暗文、ミガキ	ミガキ、ミガキ?ナデ?	A.G	良好	灰黄褐色	淡黄褐色	黒斑有り		
第111図1	B-2	3号甕棺上	小児用甕棺	37.6	8.8	47.3	ナデ、ハケ目後ナデ、ハケ目	ナデ	A	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	接合痕有り	S19W	1
第111図2	B-2	3号甕棺中	小児用甕棺	38.6		33.8	ナデ、一部指オサエ、ハケ目	ナデ	A.E	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	底部打ち欠き		
第111図3	B-2	3号甕棺下	小児用甕棺	32.9	7.7	40.1	ナデ、ハケ目	ナデ	A.E	良好	淡黄褐色	淡黄褐色			
第112図1	B-2	4号甕棺上	小児用甕棺	(44.2)		残存器高(51.1)	ナデ、ハケ目	ナデ、一部指オサエ	B.G	良好	淡褐色	明褐色	黒斑有り	N29E	0
第112図2	B-2	4号甕棺下	小児用甕棺	(44.4)	11.0	58.0	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目後ナデ、指オサエ	A.B.D.E	良好	淡黄褐色	灰白色			
第114図1	B-2	5号甕棺上	小児用甕棺	28.3	7.5	35.8	ナデ、ハケ目、ハケ目後ナデ	ナデ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑有り	N36E	2
第114図2	B-2	5号甕棺下	小児用甕棺	29.5	7.0	37.2	ナデ、ハケ目	ナデ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色			
第116図1	B-2	6号甕棺上	小児用甕棺	(35.2)		44.0	ナデ、ハケ目	ナデ	A.E.F	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	一部合成	N48E	0
第116図2	B-2	6号甕棺下	小児用甕棺	(33.2)		残存器高(44.4)	ナデ、ハケ目後ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目後ナデ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色			
第118図1	B-2	7号甕棺上	小児用甕棺	39.5	7.2	45.2	ハケ目後ナデ、ハケ目、ナデ	ハケ目後ナデ	A.B.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色		N22E	6
第118図2	B-2	7号甕棺下	小児用甕棺	35.3	8.4	40.9	ナデ、ハケ目後ナデ、ハケ目	ハケ目後ナデ、ナデ、一部指オサエ	A.B.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑有り 一部合成		

胎土: A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第9表 出土甕棺観察表③

挿図番号	区	遺構名	器種	法 量 (単位: cm)			調 整		胎 土	焼 成	色 調		備 考	主軸	埋角
				口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面			
第120図1	B-2	8号甕棺上	小児用甕棺	(36.0)		残存器高 (44.5)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.E.G	良好	淡橙色	淡橙色	反転復元	N28E	0
第120図2	B-2	8号甕棺下	小児用甕棺	(42.2)		残存器高 (48.5)	ナデ、ハケ目後ナデ、 ハケ目	ナデ	A.E.G	良好	淡赤褐色	淡褐色	黒斑有り 反転復元		
第122図1	B-2	9号甕棺上	小児用甕棺	(32.2)		残存器高 (33.2)	ナデ、ハケ目	ナデ、一部指ナデ・指 オサエ	A.B.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	反転復元	N34E	0
第122図2	B-2	9号甕棺中	小児用甕棺	(33.2)		残存器高 (28.4)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.B	良好	暗黄褐色	淡黄褐色	反転復元 底部打ち 欠き		
第122図3	B-2	9号甕棺下	小児用甕棺	(34.6)		残存器高 (30.5)	ナデ、ハケ目後ナデ	ナデ? 器面荒れのため 不明瞭	A.B.H	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	反転復元	N29E	5
第124図1	B-2	10号甕棺上	小児用甕棺	32.4	(6.4)	34.3	ナデ、ハケ目後ナデ、 ハケ目	ナデ、一部ハケ目残存	G.H	良好	淡黄褐色	淡黄褐色			
第124図2	B-2	10号甕棺下	小児用甕棺	(33.2)	(8.6)	42.8	ナデ、指オサエ後ナデ、 ハケ目後ナデ、ハケ目	ナデ	E.G	良好	明褐色	褐色	黒斑有り 反転復元	N45E	-
第126図1	B-2	11号甕棺上	小児用甕棺			残存器高 (8.0)	ナデ、ハケ目後ナデ、 ハケ目	ナデ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	口縁部破片		
第126図2	B-2	11号甕棺下	小児用甕棺	(28.0)		残存器高 (27.5)	ナデ、ハケ目後ナデ、 ハケ目	ナデ	H	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	反転復元	N2W	0
第128図1	B-2	12号甕棺上	小児用甕棺	(27.6)		残存器高 (28.0)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.B	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	反転復元		
第128図2	B-2	12号甕棺中	小児用甕棺	(31.4)		残存器高 (27.2)	ナデ、ハケ目後ナデ、 ハケ目	ハケ目後ナデ、ナデ	A.B	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	反転復元 底部打ち 欠き	N37E	-
第128図3	B-2	12号甕棺下	小児用甕棺	(28.4)		残存器高 (29.3)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.B	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	スス付着 反転復元		
第130図1	B-2	13号甕棺上	小児用甕棺	(29.2)		残存器高 (7.0)	ナデ	ナデ	A.B.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	反転復元	N32E	-
第130図2	B-2	13号甕棺下	小児用甕棺	(30.6)		残存器高 (31.7)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.B.E	良好	淡黄褐色	灰黄色	反転復元		
第132図1	B-2	14号甕棺上	小児用甕棺	(30.8)		残存器高 (23.8)	ナデ一部指オサエ、ハ ケ目後ナデ	ナデ	A.E.G	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	反転復元	S23W	5
第132図2	B-2	14号甕棺下	小児用甕棺	(36.4)		残存器高 (35.4)	ミガキ、暗文、ナデ、 横方向のハケ目(沈線 状に入る)	ナデ、一部指オサエ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	穿孔 黒斑有り 口 縁部一部線刻有り		
第134図1	B-2	15号甕棺上	小児用甕棺	30.4	6.2	33.9	ナデ、ハケ目	ハケ目後ナデ、ナデ	A.D.E.G	良好	灰褐色	黄灰色	黒斑有り	N72E	6
第134図2	B-2	15号甕棺下	小児用甕棺	37.0	7.6	40.3	ナデ、ハケ目	ナデ	A.H	良好	灰褐色	灰黄色	一部合成		
第136図1	B-2	16号甕棺上	小児用甕棺	31.2	7.0	35.5	ナデ、ハケ目	ナデ	A.D	良好	灰黄褐色	灰黄褐色		N60E	0
第136図2	B-2	16号甕棺下	小児用甕棺	29.0	7.2	38.4	ナデ、ハケ目後ナデ、 ハケ目	ナデ	A.D.E	良好	明褐色	明褐色			
第138図1	B-2	17号甕棺上	小児用甕棺		10.3	残存器高 (21.7)	ナデ、ハケ目	ナデ	A.C.H	良好	明褐色	褐色	口縁打ち欠き	N60E	0
第138図2	B-2	17号甕棺下	小児用甕棺	38.3	6.9	44.4	ナデ、ハケ目後ナデ、 ハケ目	ナデ	A.G.H	良好	淡黄褐色	淡黄褐色			

胎土: A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第10表 出土土器観察表①

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)			調 整		胎 土	焼 成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第4図1	-	12トレ	土師器	埴	(13.8)		(6.6)	ケズリ、ハケ	ハケ、ナデ	B.C.G	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第4図2	-	15トレ	弥生	甕				ナデ	ナデ	A.B.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第4図3	-	15トレ	弥生	甕				不明	不明	A.B.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第4図4	-	20トレ	弥生	甕		(7.8)		ハケ、ナデ	ナデ	A.B.C	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	
第4図5	-	20トレ	弥生	甕		(7.4)		ハケ、ナデ	ナデ	A.B.C	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第4図6	-	28トレ	弥生	甕	(22.0)			ハケ、指頭痕	ハケ、ナデ	A.B.C	良好	明黄褐色	明黄褐色	
第4図7	-	28トレ	弥生	埴	9.2	4.2	5.6	ナデ、指頭痕	ハケ	B.C.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第4図8	-	36トレ	弥生	甕		(6.5)		ハケ、ナデ	ナデ	A.B.C	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第4図9	-	52トレ	須恵器	坏蓋				回転ナデ	回転ナデ	B.C	良好	青灰色	青灰色	
第4図10	-	53トレ	須恵器	坏身				回転ナデ	回転ナデ	C	良好	青灰色	青灰色	
第4図11	-	54トレ	須恵器	高坏		(6.9)		回転ナデ	回転ナデ	B.C	良好	青灰色	青灰色	
第4図12	-	60トレ	須恵器	坏蓋				回転ナデ	回転ナデ	B.C	良好	青灰色	青灰色	
第4図13	-	60トレ	須恵器	坏蓋				回転ナデ	回転ナデ	B.C	やや不良	淡緑灰色	淡緑灰色	
第4図14	-	60トレ	土師器	甕				ナデ	ナデ	A.B.C	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第4図15	-	60トレ	土師器	鉢				ハケ	ケズリ、ナデ	B.C	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第4図16	-	74トレ	弥生	垂				羽状文	ナデ	C	良好	黒褐色	黒褐色	外面丹塗
第4図17	-	83トレ	土師器	高坏				ナデ	ナデ	B.D	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第4図18	-	86トレ	土師器	甕				ナデ	ナデ	A.C	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第4図19	-	87トレ	弥生	甕				ハケ、ナデ	ナデ	A.C	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第4図20	-	87トレ	弥生	甕				ナデ	ナデ	A.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	外面丹塗
第4図21	-	87トレ	弥生	高坏		(15.8)		ハケ	ナデ	A.B.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第4図22	-	88トレ	弥生	器台	(14.0)			タタキ、ハケ、ナデ	ナデ、指頭痕	B.C.G	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第4図23	-	88トレ	弥生	垂				ハケ、ナデ	ナデ、ハケ	A.B.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第4図24	-	93トレ	須恵器	坏身				回転ナデ	回転ナデ	C	良好	青灰色	青灰色	

胎土: A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第11表 出土土器観察表②

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第93図1	B 1	1木棺	弥生	甕	-	-	-	ハケ	ナデ	B,C,G	良好	暗褐色	暗褐色	
第93図2	B 1	1木棺	弥生	甕	-	-	-	ハケ	ナデ	B,C,G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第93図3	B 1	1木棺	須恵	皿	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	青灰色	青灰色	
第93図4	B 1	2木棺	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C	良好	淡褐色	淡褐色	
第93図5	B 1	2木棺	弥生	甕	-	-	-	ハケ	ナデ	B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第93図6	B 1	2木棺	弥生	壺	-	(6.4)	-	ハケ	ナデ	B,C	良好	赤褐色	赤褐色	
第93図7	B 1	1石棺	弥生	高环	-	-	-	ハケ、ミガキ	ハケ	B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	丹塗り
第93図8	B 1	3石棺	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C	良好	明黄褐色	明黄褐色	
第93図9	B 1	4石棺	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A,B,C	良好	淡褐色	淡褐色	
第93図10	B 1	5石棺	弥生	甕	-	-	-	ハケ、ナデ	ハケ	A,B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第93図11	B 1	5石棺	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A,B,C	良好	褐色	褐色	
第93図12	B 1	5石棺	弥生	甕	-	(4.2)	-	ハケ	指頭圧痕、ナデ	A,B,C,D,G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第93図13	B 1	1大石	弥生	甕	-	-	-	ハケ	タタキ、ナデ	A,B,C	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第93図14	B 1	1大石	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A,B,C	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第93図15	B 1	1大石	弥生	甕	-	(9.8)	-	ハケ	ナデ、指オサエ	A,B,C,D	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第97図1	B 1	1土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C	良好	赤褐色	赤褐色	
第97図2	B 1	1土坑	弥生	甕	-	-	-	ハケ	ナデ	B,C	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第97図3	B 1	4土坑	弥生	甕	-	-	-	ハケ、ナデ	ナデ	A,B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図4	B 1	4土坑	弥生	甕	(46.0)		19.6 + α	ナデ、ハケ、一部ミガキ	ハケ、一部ミガキ、ナデ	A,B,C,D,G	良好	にぶい黄褐色	褐灰色	
第97図5	B 1	4土坑	弥生	甕	-	(6.8)	-	ハケ	ナデ	A,B,C	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第97図6	B 1	5土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	
第97図7	B 1	5土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図8	B 1	6土坑	弥生	甕	-	-	-	ハケ	ナデ	B,C,G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図9	B 1	6土坑	弥生	甕	-	-	-	ハケ、ナデ	ナデ	B,C	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第97図10	B 1	7土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C,G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図11	B 1	8土坑	弥生	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	A,B,C	良好	暗褐色	暗褐色	
第97図12	B 1	27土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第97図13	B 1	27土坑	弥生	器台	-	(9.2)	-	ハケ	指頭圧痕、ナデ	A,B,C,G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図14	B 1	27土坑	弥生	高环	-	-	-	ナデ	ミガキ	A,B,C	良好	赤褐色	赤褐色	内面黒塗り
第97図15	B 1	36土坑	弥生	壺	-	-	-	ハケ	ナデ	B,C	良好	淡暗黄褐色	淡暗黄褐色	
第97図16	B 1	36土坑	弥生	壺	18.9		28.1	ナデ、ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	A,B,C,G	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	底部に穿孔有り、外面に赤色顔料塗布
第97図17	B 1	46土坑	弥生	壺		(5.8)		ハケ後ヘラ描き・ナデ	工具ナデ	B,C,G	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	スス附着
第97図18	B 1	46土坑	弥生	甕	-	-	-	ハケ	ナデ	A,B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図19	B 1	46土坑	須恵	皿	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	B,C	良好	青灰色	青灰色	
第97図20	B 1	92土坑	弥生	甕	-	-	-	ハケ	ナデ	B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図21	B 1	92土坑	弥生	甕	-	-	-	ハケ	ナデ	A,B,C	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第97図22	B 1	43土坑	弥生	甕			(7.7)	ナデ・ハケ	ナデ	A,B,C,G	良好	灰褐色	黄褐色	ヘラ描き文
第97図23	B 1	13土坑	弥生	甕	-	-	-	ハケ、指頭圧痕	ナデ	B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図24	B 1	9土坑	弥生	甕	-	-	-	ハケ、ナデ	ミガキ、ナデ	B,C	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第97図25	B 1	10土坑	弥生	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C,G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図26	B 1	39土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A,B,C	良好	暗褐色	暗褐色	
第97図27	B 1	40土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図28	B 1	40土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C,G	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第97図29	B 1	45土坑	弥生	壺			(2.2)	ハケ・ナデ	ナデ	B,C,G	良好	黄褐色	黄褐色	
第97図30	B 1	56土坑	弥生	甕			(3.8)	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	B,C,G	良好	オリーブ黒色	褐灰色	
第97図31	B 1	88土坑	弥生	壺			(3.2)	ハケメ・ヨコナデ	ヨコナデ	B,C,G	良好	黄褐色	黄褐色	丹塗り
第97図32	B 1	91土坑	弥生	壺			(2.2)	指押え・ナデ	指押え・ナデ	B,C,G	良好	浅黄褐色	灰黄褐色	
第97図33	B 1	17土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第97図34	B 1	12土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A,B,C	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	

胎土: A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 12 表 出土土器観察表③

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (c m)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 97 図 35	B 1	39 土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 97 図 36	B 1	31 土坑	弥生	壺	-	-	-	ナデ	ハケ	A,B,C	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第 97 図 37	B 1	14 土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	丹塗り
第 97 図 38	B 1	34 土坑	弥生	鉢	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	丹塗り
第 97 図 39	B 1	26 土坑	弥生	壺	(8.2)	-	-	ハケ	ナデ	A,B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 97 図 40	B 1	31 土坑	弥生	壺	-	-	-	ナデ	ナデ	A,B,C	良好	淡黄褐色	淡黒色	
第 97 図 41	B 1	9 土坑	弥生	甕	-	-	-	ハケ	指頭圧痕、ナデ	A,B,C	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第 97 図 42	B 1	22 土坑	弥生	甕	-	(6.5)	-	指頭圧痕、ハケ	ナデ	A,B,C	良好	赤褐色	赤褐色	
第 97 図 43	B 1	23 土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C	良好	淡黄褐色	淡黒褐色	丹塗り
第 97 図 44	B 1	29 土坑	弥生	甕	-	(7.0)	-	ナデ	ナデ	A,B,C	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	
第 97 図 45	B 1	32 土坑	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A,B,C	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第 97 図 46	B 1	62 土坑	弥生	甕		5.5	(4.2)	ハケ・ハケ後ナデ・ナデ	指頭圧痕	B,C,G	良好	黄褐色	橙色	
第 97 図 47	B 1	43 土坑	弥生	甕		5.6	(3.9)	ヘラ磨き	ナデ・指頭圧痕	B,C,G	良好	黄褐色	暗灰黄色	
第 97 図 48	B 1	50 土坑	弥生	甕		9.7	(6.5)	ハケ・ナデ	指頭圧痕	B,C,G	良好	橙色	浅黄褐色	
第 97 図 49	B 1	19 土坑	弥生	甕		(7.0)	19.8	ハケ後ナデ	ナデ	A,B	良好	褐色	黄褐色	
第 97 図 50	B 1	19 土坑	弥生	器台	-	(12.6)	-	指頭圧痕、ナデ	指頭圧痕、ナデ	A,B,C,G	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	
第 97 図 51	B 1	35 土坑	土師	甕	-	-	-	ケズリ後ナデ	ケズリ	B,C,G	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	
第 99 図 1	B 1	1 住	弥生	甕	(27.0)		$2.1 + \alpha$	ナデ	ナデ	A,C,D	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 99 図 2	B 1	1 住	弥生	甕			(3.4)	ナデ・ヨコナデ	ナデ	A,B,C,G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 99 図 3	B 1	1 住	弥生	甕			$6.4 + \alpha$	ナデ、ハケ	ナデ	A,B,C	良好	灰黄褐色	にぶい黄褐色	
第 99 図 4	B 1	1 住	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 99 図 5	B 1	1 住	弥生	甕			(2.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	B,C,G	良好	橙色	橙色	
第 99 図 6	B 1	1 住	弥生	甕			(2.55)	ヨコナデ・マメツ・ナデ	ナデ	A,B,C,G	良好	浅黄褐色	橙色	
第 99 図 7	B 1	1 住	弥生	壺		8.6	(6.5)	ハケ・ナデ	マメツ	A,B,C,G	良好	橙色	橙色	
第 99 図 8	B 1	1 住	弥生	甕		(6.9)	$6.6 + \alpha$	ナデ後ハケ、ナデ	ナデ	A,B,C	良好	橙色	灰黄色	
第 99 図 9	B 1	1 住	弥生	壺		4.75	(3.4)	ハケ後ヘラミガキ・ナデ	ヘラミガキ	A,B,C,G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 99 図 10	B 1	1 住	弥生	甕		3.0	4.7	ナデ・マメツ	ナデ	A,B,C	良好	灰黄褐色	浅黄色	
第 99 図 11	B 1	17 住	弥生	甕	(37.0)		$10.3 + \alpha$	ナデ、ハケ	ナデ	A,C,G	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	口縁部一部スス附着
第 99 図 12	B 1	8 住	弥生	甕			$1.6 + \alpha$	ナデ	ナデ	A,C	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	外面全体に赤色顔料塗布
第 99 図 13	B 1	27 住	弥生	甕			3.3	ハケ・ヨコナデ	ナデ	A,B,C	良好	橙色	黄褐色	
第 99 図 14	B 1	34 住	弥生	甕			3.1	ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ	ヨコナデ	A,B,C,G	良好	黄褐色	黄褐色	
第 99 図 15	B 1	34 住	弥生	甕			4.4	ハケ・ヨコナデ	ナデ	A,B,C,G	良好	黄褐色	黄褐色	スス附着
第 99 図 16	B 1	27 住	弥生	甕			6.4	ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	A,B,C	良好	黄褐色	黄褐色	
第 99 図 17	B 1	4 住	弥生	大甕	(38.0)		$4.0 + \alpha$	ナデ、はりつけ突帯後ナデ	ハケ後ナデ	A,C,D	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 99 図 18	B 1	4 住	弥生	甕				はりつけ突帯後ナデ	ナデ	A,C,D	良好	橙色	橙色	
第 99 図 19	B 1	8 住	弥生	甕	(26.0)		$3.2 + \alpha$	ナデ	ナデ	A,C,D	良好	にぶい黄褐色	浅黄褐色	
第 99 図 20	B 1	14 住	弥生	甕	(27.5)		$1.9 + \alpha$	ナデ	ナデ	B,C,G	良好	橙色	橙色	
第 99 図 21	B 1	17 住	弥生	甕	(31.8)		$6.4 + \alpha$	ナデ、ハケ	ナデ、ナデ	A,C,G	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第 99 図 22	B 1	16、17 住	弥生	甕	(27.8)		$3.8 + \alpha$	ナデ、ナデ	ナデ、ナデ	B, E, G	良好	橙色	橙色	
第 99 図 23	B 1	19 住	弥生	甕	(27.7)		$3.1 + \alpha$	ナデ	ナデ	A,B,C,G	良好	にぶい橙色	浅黄褐色	
第 99 図 24	B 1	38 住	弥生	甕	(28.6)		(18.8)	回転ナデ・ハケ	回転ナデ・ナデ	A,B,C	良好	褐色	橙色	
第 99 図 25	B 1	21 住	弥生	甕			(2.3)	ナデ	ナデ	B,C	良好	灰黄褐色	黄褐色	
第 99 図 26	B 1	22 住	弥生	甕			(3.5)	ナデ	ハケ後ナデ	B,C,G	良好	黄褐色	黄褐色	
第 99 図 27	B 1	31 住	弥生	甕			4.6	ヨコナデ	マメツ・ナデ	A,B,C	良好	浅黄褐色	灰白色	
第 99 図 28	B 1	33 住	弥生	甕			5.9	ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	A,B,C,G	良好	灰黄褐色	灰黄褐	
第 99 図 29	B 1	34 住	弥生	甕			5.0	ヨコナデ・ナデ (マメツ)	ヨコナデ・ナデ	A,B,C	良好	黄褐色	淡黄色	
第 99 図 30	B 1	36 住	弥生	甕			3.1	ヨコナデ	ヨコナデ	A,B,C,G	良好	灰黄褐色	浅黄褐色	
第 99 図 31	B 1	43 住	弥生	甕			6.5	ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	A,B,C	良好	黄褐色	黄褐色	

胎土 A 角四石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒



第 13 表 出土土器観察表④

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (c m)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考	
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面		
第 99 図 32	B 1	4 住	弥生	甕	(35.4)		1.4 + α	ナデ後刻み目	ナデ	A.C	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面に赤色顔料	
第 99 図 33	B 1	2 住	弥生	大甕	(39.4)		12.8 + α	ナデ、タテハケ、刻み目、平行タタキ	ハケ、ナデ、ハケ	A.B.C.G	良好	褐灰色	灰褐色	工具痕有り、黒斑有り	
第 99 図 34	B 1	28 住	弥生	壺			(6.7)	ハケ・ヨコナデ	ハケ・ヨコナデ	A.B.C.G	良好	黄橙色	浅黄色		
第 100 図 35	B 1	22 住	弥生	甕	(25.4)	6.2	43.4	ナデ、ナデ	ナデ	A.B.C.G	良好	浅黄褐色	にぶい黄褐色	一部黒斑有り	
第 100 図 36	B 1	22 住	弥生	甕	(26.1)		38.2 + α	ナデ、指オサエ、ハケ	指オサエ、ハケ、ナデ	A.B.C.G	良好	褐灰色	にぶい黄褐色		
第 100 図 37	B 1	2 住	弥生	甕	(28.0)		10.2 + α	ナデ、ハケ、一部タテハケ	ハケ、ナデ、ハケ	A.B.C.G	良好	黒褐色	にぶい橙色		
第 100 図 38	B 1	24 住	弥生	甕			(15.9)	ナデ・ハケ	ハケ	B.C.G	良好	黄褐色	灰白色		
第 100 図 39	B 1	38 住	弥生	壺			18.1	指オサエ・ハケ後ナデ・ハケ	ヨコナデ・ハケ後ナデ・指頭圧痕	A.C.G	良好	灰褐色	黄褐色		
第 100 図 40	B 1	40 住	弥生	甕			20.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケ	A.B.C	良好	灰黄褐色	黄褐色		
第 100 図 41	B 1	40 住	弥生	甕			(8.6)	ヨコナデ・タタキ	タタキ後ナデ	A.B.C.G	良好	灰褐色	褐色		
第 100 図 42	B 1	5 住	弥生	甕	(13.6)		5.7 + α	ナデ、ハケ後ナデ	ハケ後ナデ、ハケ後ナデ	A.B.C	良好	にぶい橙色	にぶい黄褐色		
第 100 図 43	B 1	22 住	弥生	甕	13.0	7.5	21.0	ハケ	ハケ・工具ナデ	B.C.G	良好	赤褐色	橙色		
第 100 図 44	B 1	4 住	弥生	甕	(23.3)		3.7 + α	タテハケ後ナデ	ハケ後ナデ、ハケ	A.B.C	良好	にぶい橙色	橙色		
第 100 図 45	B 1	2 住	弥生	甕	(18.6)		17.7 + α	ハケのちナデ、ナデ	ハケのちナデ、指オサエ	A.B.C.D	良好	灰黄褐色	にぶい黄褐色		
第 100 図 46	B 1	5 住	弥生	甕	(14.0)		18.5 + α	ナデ、ハケ、一部ミガキ、ハラナデ	ナデ、ハケ	A.B.C.G	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第 100 図 47	B 1	5 住	弥生	甕	(12.5)	5.5	22.3	ハケ、ナデ、ミガキ	ハケ、ミガキ	B.C.D.G	良好	橙色	橙色		
第 100 図 48	B 1	5 住	弥生	甕	(21.0)		10.1 + α	ナデ、指オサエ後ハケ、ハケ	指オサエ後ハケ、ハケ	A.B.C.G	良好	灰黄褐色	灰褐色	外面胴部に黒斑有り	
第 100 図 49	B 1	6 住	弥生	甕	(16.5)		5.8	ナデ、ハケ	ハケ、ハケ	A.C.E.G	良好	褐灰色	明黄褐色		
第 100 図 50	B 1	13 住	弥生	甕			3.5 + α	ナデ	ナデ	A.C.G	良好	明黄褐色	にぶい黄褐色		
第 100 図 51	B 1	23 住	弥生	甕			4.9	ハケ	ハケ・指オサエ・ナデ	A.B.C.G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色		
第 100 図 52	B 1	16 住	弥生	壺	(9.6)		4.0 + α	ナデ、ハケ	ハケ	A.C.E	良好	にぶい黄褐色	明黄褐色		
第 101 図 53	B 1	9 住	弥生	甕			(8.2)	5.6 + α	ハケ、ナデ、ケズリ	ナデ	A.C.G	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
第 101 図 54	B 1	4 住	弥生	甕			(6.1)	2.3 + α	指オサエつまみ出し、ナデ	指オサエ、ナデ	A.B.C	良好	にぶい橙色	黄灰色	
第 101 図 55	B 1	4 住	弥生	甕			(8.0)	7.1 + α		A.C	良好	橙色	灰白色		
第 101 図 56	B 1	4 住	弥生	甕			(7.2)	4.7 + α	ハケ、ナデ	ナデ	A.C	良好	橙色	にぶい黄褐色	
第 101 図 57	B 1	6 住	弥生	甕			6.2	5.9 + α	ハケ、ナデ、ナデ	ナデ	A.C.E	良好	橙色	灰黄褐色	
第 101 図 58	B 1	10 住	弥生	甕			6.3	4.0 + α	ナデ	ナデ	A.C.E	良好	橙色	にぶい黄褐色	
第 101 図 59	B 1	43 住	弥生	壺			6.6	3.6	ハケ・マメツ	マメツ	A.B.C	不良	橙色	淡赤褐色	
第 101 図 60	B 1	4 住	弥生	甕			5.9	7.0 + α	ハケ、ナデ、ナデ	ナデ、指オサエ	A.B.C	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第 101 図 61	B 1	20 住	弥生	甕			6.0	(4.1)	ハケ・ヨコナデ・ナデ	ナデ・指頭圧痕	B.C.G	良好	黄褐色	褐灰色	
第 101 図 62	B 1	32 住	弥生	甕			7.8	(5.1)	ハケ・マメツ	指オサエ (マメツ)	A.B.C	良好	浅黄褐色	灰黄色	
第 101 図 63	B 1	3 住	弥生	壺	(6.3)		3.5 + α	ナデ	指オサエ、ナデ	A.B.C.G	良好	にぶい赤褐色	褐灰色		
第 101 図 64	B 1	4 住	弥生	壺	(9.0)		5.8 + α	ハケ、ナデ	ナデ	A.B.C.G	良好	にぶい黄褐色	にぶい褐色		
第 101 図 65	B 1	4 住	弥生	壺			7.8	3.1 + α	ナデ、指オサエ、	ナデ	A.C.E	良好	にぶい黄褐色	灰黄褐色	
第 101 図 66	B 1	4 住	弥生	壺	(6.4)		10.4 + α	ハケ、ナデ	指オサエ、ナデ	A.B.C.E	良好	にぶい橙色	にぶい黄褐色		
第 101 図 67	B 1	6 住	弥生	壺	(8.0)		4.0 + α	ナデ、ハケ	指オサエ、ナデ	A.C.G	良好	黄褐色	にぶい黄褐色		
第 101 図 68	B 1	33 住	弥生	甕			5.0	4.3	板ナデ・ナデ	指オサエ・ナデ	A.B.C.G	良好	灰黄色	黄灰色	
第 101 図 69	B 1	36 住	弥生	甕			6.4	(3.8)	ハケ後ナデ・ナデ	工具ナデ	B.C.G	良好	黄褐色	黄褐色	
第 101 図 70	B 1	10 住	弥生	壺	(9.0)		5.6 + α	ハケ	ハケ	A.C.E	良好	橙色	橙色		
第 101 図 71	B 1	23 住	弥生	壺			9.8	4.5	ハケ・ナデ	板ナデ・ナデ	A.B.C.G	良好	黄褐色	浅黄褐色	
第 101 図 72	B 1	39 住	弥生	甕			2.3	(5.9)	ハケ	ナデ	A.B.C	良好	黄褐色	黄褐色	
第 101 図 73	B 1	19 住	弥生	甕			(11.5)	4.2 + α	ハケ、ナデ	ナデ	B.C.D.G	良好	褐灰色	にぶい橙色	
第 101 図 74	B 1	11 住	弥生	壺	(8.0)		2.0 + α	ナデ、一部ハケ	ナデ	A.C	良好	明黄褐色	明黄褐色	底部一部スス付着	
第 101 図 75	B 1	6 住	弥生	壺			6.6	2.8 + α	ナデ後一部ハケ	指オサエ、ナデ	A.C	良好	浅黄褐色	黄褐色	外面に一部スス付着
第 101 図 76	B 1	35 住	弥生	甕			5.7	2.35	マメツ	マメツ	A.B.C.G	良好	橙色	灰黄褐色	
第 101 図 77	B 1	12 住	弥生	壺	(7.6)		5.1 + α	ハケ、ナデ	ハケ	A.C.E	良好	橙色	灰黄褐色		
第 101 図 78	B 1	16、17 住	弥生	壺	(5.4)		6.6 + α	ナデ	ナデ、指オサエ	A.C.E	良好	橙色	黒褐色		

胎土 A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 14 表 出土土器観察表⑤

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 101 図 79	B 1	21 住	弥生	甕		8.2	(10.5)	ハケ	ハケ・工具ナデ・指頭圧痕	B.C.G	良好	浅黄褐色	褐灰色	
第 101 図 80	B 1	25 住	弥生	甕		7.0	(2.2)	ナデ	ナデ	A.B.C.G	良好	橙色	浅黄褐色	
第 101 図 81	B 1	30 住	弥生	甕		2.0	2.6	ナデ	ナデ	A.B.C.G	良好	浅黄色	浅黄色	
第 101 図 82	B 1	47 住	弥生	甕		1.5	8.2	ナデ・マメツ	ナデ・ハケ	A.B.C.G	良好	浅黄褐色	明赤褐色	
第 101 図 83	B 1	41 住	弥生	甕		3.5	(6.4)	ハケ・ナデ	板ナデ・指オサエ	A.B.C.G, 黒曜石	良好	橙色	灰白色	
第 101 図 84	B 1	2 住	弥生	壺			$4.4 + a$	ナデ	指オサエ	A.B.C	良好	にぶい褐色	にぶい橙色	黒斑有り
第 101 図 85	B 1	5 住	弥生	壺		4.9	$7.5 + a$	タテハケ後ナデ	ハケ	A.B.C.G	良好	明赤褐色	にぶい黄褐色	
第 101 図 86	B 1	6 住	弥生	鉢			$9.7 + a$	ハケのちナデ	ハケ、ナデ	A.C	良好	暗灰色	黄褐色	
第 101 図 87	B 1	10 住	弥生	甕			$17.7 + a$	ハケ、ナデ、一部ミガキ	指オサエ、ナデ	A.B.C.G	良好	褐灰色	明黄褐色	
第 101 図 88	B 1	24 住	弥生	鉢	13.3	4.6	7.3	ハケ	工具ナデ	B.C.G	良好	黄褐色	黄灰色	
第 101 図 89	B 1	22 住	弥生	甕		7.7	$20.4 + a$	ハケナデのちナデ消し	ナデ	A.B.C.G	良好	灰褐色	灰黄褐色	
第 101 図 90	B 1	14 住	弥生			(6.4)	$11.8 + a$	ハケ、糸切り	ナデ	A.B.C.G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 101 図 91	B 1	16、17 住	弥生	壺		(4.0)	$6.9 + a$	ナデ	ナデ、指オサエ	A.B.C.D.G	良好	橙色	にぶい橙色	
第 101 図 92	B 1	49 住	弥生	甕			3.7	ヘラミガキ・ナデ	ヘラミガキ・マメツ	A.B.C	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	丹塗り
第 101 図 93	B 1	20 住	弥生	壺			(9.7)	ハケ・ナデ	ハケ	A.B.C.G	良好	黄褐色	黄褐色	
第 102 図 94	B 1	9 住	弥生	壺	(22.0)		$3.5 + a$	ナデ	ナデ	A.C	良好	浅黄褐色	明黄褐色	
第 102 図 95	B 1	4 住	弥生	壺	(16.3)		$10.0 + a$	ナメハケ後ナデ、ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	A.B.C	良好	浅黄褐色	にぶい黄褐色	
第 102 図 96	B 1	4 住	弥生	壺			$3.0 + a$	ナデ、はりつけ突帯後ナデ	ナデ	A.B.C	良好	橙色	橙色	外面に赤色顔料
第 102 図 97	B 1	27 住	弥生	甕			(3.1)	ナデ (マメツぎみ)	ナデ (マメツぎみ)	A.B.C	良好	黄褐色	黄褐色	
第 102 図 98	B 1	39 住	弥生	壺			(4.0)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	A.B.C.G	良好	明黄褐色	黄褐色	
第 102 図 99	B 1	39 住	弥生	壺			(5.0)	ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	A.B.C.G	良好	浅黄色	灰白色	
第 102 図 100	B 1	25 住	弥生	壺			(4.9)	ナデ	あて具痕のちナデ・ミガキ	A.B.C.G	良好	橙色	橙色	
第 102 図 101	B 1	22 住	弥生	壺				ハケ・ナデ	ヨコハケ・ナメハケ・タテハケ	A.B.C.G	良好	橙色	灰黄褐色	
第 102 図 102	B 1	36 住	弥生	壺	7.7	3.6	17.1	ナデ・ハケ	ハケ後ナデ・ハケ	A	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	黒斑
第 102 図 103	B 1	2 住	弥生	高坏	(26.3)	16.8	22.8	ナデ、ハケのちミガキ	ハケのちミガキ	A.B.C.G	良好	にぶい褐色	にぶい黄褐色	穿孔 3 つ有り
第 102 図 104	B 1	2 住	弥生	高坏		15.0cm 以上	$13.9 + a$	ミガキ、ハケ	指ナデ、ハケ	A.B.C.	良好	橙色	橙色	穿孔有り (3 つ) 外から内へ
第 102 図 105	B 1	2 住	弥生	高坏		(17.8)	$6.2 + a$	ナデ、ハケ、ナデ	タテハケ、ハケ	A.C.	良好	灰黄褐色	浅黄褐色	穿孔有り
第 102 図 106	B 1	39 住	弥生	高坏		16.4	6.8	ハケ・ナデ	ハケ	A.C.G	良好	黄褐色	黄褐色	
第 102 図 107	B 1	4 住	弥生	器台	(12.5)		$12.1 + a$	タテハケ後ナデ、ハケ	ナデ、指オサエ後ナデ	A.B.C.D.G	良好	橙色	橙色	
第 102 図 108	B 1	4 住	弥生	壺	(10.4)		$8.2 + a$	ナデ、ハケ、ナデ	ナデ	A.C	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第 102 図 109	B 1	21 住	弥生	器台		14.0	(9.2)	指ナデ・ナデ	指ナデ・ハケ	B.C.G	良好	橙色	橙色	
第 102 図 110	B 1	33 住	弥生	器台	9.4		4.6	ハケ	ナデ	A.B.C	良好	浅黄褐色	浅黄色	
第 102 図 111	B 1	36 住	弥生	器台	10.2		(14.7)	ヨコナデ・ハケ後ナデ	ヨコナデ・ハケ・指頭圧痕	B.C.G	良好	橙色	橙色	
第 102 図 112	B 1	38 住	弥生	器台	12.0		15.2	ヨコナデ・ハケ後ナデ	ヨコナデ・ハケ後ナデ	C.G	良好	橙色	橙色	
第 102 図 113	B 1	39 住	弥生	器台		11.0	16.7	ハケ後ナデ・ヨコナデ	ハケ後ナデ・指頭圧痕・ヨコナデ	A.B.C	良好	黄褐色	黄褐色	
第 102 図 114	B 1	23 住	弥生	器台		(9.3)	$7.9 + a$	不明	不明	B.C.G	良好	明黄褐色	にぶい黄褐色	
第 102 図 115	B 1	19 住	弥生	器台		(6.7)	$5.8 + a$	ナデ、指オサエ	ナデ	A.C.D.G	良好	褐灰色	橙色	底部スス付着
第 102 図 116	B 1	4 住	弥生	器台		(8.6)	$4.2 + a$	指オサエ、ナデ	指オサエ、ナデ	A.C.G	良好	灰黄褐色	にぶい黄褐色	
第 102 図 117	B 1	23 住	弥生	器台		(9.3)	(7.5)	ハケ・ナデ	ナデ	A.B.C	良好	黄褐色	浅黄色	
第 102 図 118	B 1	4 住	弥生	鉢	(11.0)		7.9	ナデ、タテハケ、ナデ	ナデ、ナデ、ナメハケ、指オサエ	A.C.G	良好	灰白色	にぶい黄褐色	黒斑有り
第 102 図 119	B 1	41 住	弥生	壺			(6.2)	ナデ・指オサエ・工具痕	ヨコナデ	B.C.G	良好	橙色	明赤褐色	
第 102 図 120	B 1	4 住	弥生	鉢	(12.2)		$11.7 + a$	ナデ、ナデ	ナデ、ヘラズリ	A.C.D.G	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	
第 102 図 121	B 1	6 住	弥生	鉢	(10.7)		9	ナデ、ハケ	ナメハケ、指オサエ、指ナデ	A.C	良好	橙色	にぶい黄褐色	
第 102 図 122	B 1	20 住	弥生	鉢?			$8.0 + a$	ナデのちハケ	ナデのちハケ	A.B.C.G	良好	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	底部に黒斑有り
第 102 図 123	B 1	9 住	弥生	鉢			$10.3 + a$	ナデ、一部ミガキ、ハケ	ナデ	A.B.G	良好	淡黄色	橙色	
第 102 図 124	B 1	38 住	弥生	鉢	(17.4)	5.7	10.3	ナデ	指オサエ、ナデ	A.B.C.G	良好	灰白色	灰白色	底部に穿孔有り
第 102 図 125	B 1	P 19	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B.C	良好	褐色	褐色	
第 102 図 126	B 1	P 1	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	B.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	

胎土 A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 15 表 出土土器観察表⑥

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (c m)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 102 図 127	B 1	P 2	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A,B,C	良好	暗褐色	暗褐色	
第 102 図 128	B 1	P 50	弥生	甕	-	-	-	ナデ	ナデ	A,B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 102 図 129	B 1	一括	弥生	鉢	(11.2)		5.7	ハケ	ナデ	A,C,D,G	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	スス付着
第 143 図 1	B 2	1 土坑	弥生	鉢	(15.0)	4.2	7.5	ハケ、ナデ	指オサエ、ナデ	B,D,G	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	黒斑有り
第 143 図 2	B 2	1 土坑	弥生	鉢	(15.5)	4.8	11.3	ハケ	ナデ、工具痕	A,B,C,D,E,G	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	スス付着
第 143 図 3	B 2	1 土坑	弥生	高环			2.6	ヨコナデ	ヨコナデ	A,B,C,G	良好	浅黄褐色	黄褐色	
第 143 図 4	B 2	1 土坑	弥生	甕			3.0	ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ	B,C,D,G	不良	浅黄褐色	黄褐色	
第 143 図 5	B 2	1 土坑	弥生	甕		6.8	5.0	ハケ・ハケ後ヨコナデ・ナデ	ナデ	C,G	良好	黄褐色	黄褐色	
第 143 図 6	B 2	1 土坑	弥生	甕		7.6	4.1	ハケ・ヨコナデ・ナデ	ナデ	B,C,G	良好	橙色	黄褐色	
第 143 図 7	B 2	1 土坑	弥生	高环			9.9	ヨコナデ・ナデ	ナデ・シボリメ	B,C,G	良好	赤色	灰白色	丹塗り
第 143 図 8	B 2	2 土坑	弥生	甕			2.0	ヨコナデ	ヨコナデ	B,C,G	良好	褐色	灰黄褐色	
第 143 図 9	B 2	2 土坑	弥生	甕			2.4	ヨコナデ	ヨコナデ	A,C,G	良好	灰黄褐色	灰褐色	
第 143 図 10	B 2	2 土坑	弥生	甕		6.8	5.0	ナデ・ヨコナデ	ナデ	C,G	良好	浅黄褐色	灰白色	
第 143 図 11	B 2	2 土坑	弥生	甕		7.8	3.8	ハケ・ナデ	-	B,C,G	良好	黄褐色	-	
第 143 図 12	B 2	2 土坑	弥生	甕		8.0	6.1	ハケ・ヨコナデ・ナデ	ナデ	C,G	良好	橙色	褐灰色	
第 143 図 13	B 2	3 土坑	弥生	甕			2.6	ヨコナデ	ヨコナデ	B,C,G	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	
第 143 図 14	B 2	3 土坑	弥生	甕			4.3	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	C,G	良好	黄褐色	浅黄褐色	
第 143 図 15	B 2	3 土坑	弥生	甕			7.4	ヨコナデ・ハケ後ナデ	ヨコナデ・ナデ	C,G	良好	黄褐色	黄褐色	
第 143 図 16	B 2	3 土坑	弥生	甕			5.9	ハケ・ナデ	マメツ	B,C,G	良好	浅黄褐色	灰黄褐色	
第 143 図 17	B 2	5 土坑	須恵器	环蓋		2.2		回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ		良好	灰	灰	
第 143 図 18	B 2	6 土坑	弥生	高环			7.5	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・板ナデ・ナデ	A,B,C	良好	橙色	橙色	
第 143 図 19	B 2	6 土坑	弥生	甕			8.3	ヨコナデ・マメツ	ヨコナデ・ナデ	B,C	不良	灰白色	灰白色	
第 143 図 20	B 2	1 号周溝	弥生	甕			3.1	ヨコナデ	ヨコナデ	A,B,C	不良	黄褐色	灰黄褐色	
第 143 図 21	B 2	1 号周溝	弥生	甕			5.3	ヨコナデ・ハケ	ナデ	B,C,G	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	
第 144 図 1	B 2	16 土坑	弥生	甕			2.3	ヨコナデ	ナデ	B,C,G	良好	灰黄色	黄褐色	
第 144 図 2	B 2	42 土坑	弥生	甕			4.0	ハケ・ヨコナデ	ナデ	B,C,G	不良	明赤色褐色	明赤色褐色	丹塗り
第 144 図 3	B 2	27 土坑	弥生	甕			3.6	ハケ・ヨコナデ	ナデ	B,C,G	良好	黄褐色	橙色	
第 144 図 4	B 2	82 土坑	弥生	壺		(4.6)		ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・工具ナデ	A,B,C	良好	灰黄褐色	浅黄褐色	
第 144 図 5	B 2	98 土坑	弥生	甕		(7.4)		ヨコナデ・タテハケ・ヘラ描き	指頭圧痕後ナデ	B,C,G	良好	褐灰色	灰黄褐色	
第 144 図 6	B 2	119 土坑	弥生	甕		(3.4)		ヨコナデ・ハケ	指オサエ・工具ナデ	B,C,G	良好	灰黄色	浅黄褐色	
第 144 図 7	B 2	120 土坑	弥生	甕			6.5	ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	B	良好	灰黄褐色	灰黄色	
第 144 図 8	B 2	139 土坑	弥生	甕		(6.1)		ナデ・ハケ後ヘラ描き	ナデ	A,C,G	良好	橙色	灰褐色	
第 144 図 9	B 2	146 土坑	弥生	鉢		(2.7)		ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	B,C,G	良好	橙色	黄褐色	
第 144 図 10	B 2	147 土坑	弥生	壺		(1.5)		回転ナデ	回転ナデ	B,C,G	良好	橙色	橙色	
第 144 図 11	B 2	7 土坑	弥生	甕			10.3	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	B,C,G	良好	橙色	橙色	
第 144 図 12	B 2	31 土坑	弥生	甕			4.8	ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	B	良好	浅黄褐色	橙色	
第 144 図 13	B 2	45 土坑	弥生	甕			7.3	ハケ・ヨコナデ	工具ナデ・ナデ	C,G	良好	灰黄褐色	浅黄褐色	
第 144 図 14	B 2	53 土坑	弥生	甕			4.8	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	C,G	良好	橙色	灰白色	丹塗り
第 144 図 15	B 2	74 土坑	弥生	甕			20.5	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ミガキ	A,C,G	良好	黒褐色	褐色	
第 144 図 16	B 2	18 土坑	弥生	甕			4.7	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	B,C,G	良好	橙色	黒褐色	
第 144 図 17	B 2	24 土坑	弥生	甕			3.3	ヨコナデ	ヨコナデ	A,B,G	良好	灰黄褐色	黄褐色	
第 144 図 18	B 2	30 土坑	弥生	甕			4.1	ヨコナデ	ハケ	G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 144 図 19	B 2	56 土坑	弥生	甕		(3.5)		ナデ	ナデ	B,C,G	良好	浅黄褐色	橙色	
第 144 図 20	B 2	92 土坑	弥生	甕			5.8	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	B,C,G	良好	灰褐色	褐色	
第 144 図 21	B 2	140 土坑	弥生	甕		(3.9)		工具ナデ・ナデ	工具ナデ	B,C,G	良好	黄褐色	黄褐色	
第 144 図 22	B 2	144 土坑	弥生	甕		(6.4)		ヨコナデ・ハケ後ナデ	ヨコナデ・ナデ	A,B,C,G	良好	黄褐色	黄褐色	
第 144 図 23	B 2	39 土坑	弥生	甕	45.2		18.7	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・工具ナデ・ナデ	A	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 144 図 24	B 2	142 土坑	弥生	甕	16.6		(8.0)	ナデ・ハケ	ナデ・指ナデ・後工具ナデ	B,C,G	良好	橙色	黄褐色	
第 144 図 25	B 2	43 土坑	弥生	甕			5.1	ヨコナデ・タタキ	ヨコナデ・ナデ	B,C,G	良好	黄褐色	浅黄褐色	

胎土 A 角四石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 16 表 出土土器観察表⑦

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (c m)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 144 図 26	B 2	87 土坑	弥生	甕			(7.9)	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・工具ナデ・ナ	B,C	良好	褐灰色	黄橙色	
第 144 図 27	B 2	102 土坑	弥生	甕			6.7	ハケ・ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ・ナデ	B,C,D,G	良好	褐色	橙色	
第 144 図 28	B 2	8 7 土坑	弥生	甕	33.0		38.8	ナデ・タタキ後ハケ	ナデ・あて具痕後ハケ	A,D	良好	浅黄橙色	黄橙色	
第 145 図 29	B 2	103 土坑	弥生	甕	(20.5)		22.3 + α	ナデ、ハケ、ミガキ	ヘラナデ	A,B,C	良好	褐灰色	浅黄褐色	
第 145 図 30	B 2	土坑	弥生	甕	29.0		24.1	ナデ・ミガキ	ナデ・ハケ後ナデ	A,C,G	良好	黄橙色	黄橙色	
第 145 図 31	B 2	54 土坑	弥生	甕			2.5	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	B,C,G	良好	黄橙色	橙色	
第 145 図 32	B 2	67 土坑	弥生	鉢			(4.4)	ナデ・ハケ後ナデ・ハケ	ナデ	B,C,G	良好	黄橙色	浅黄褐色	
第 145 図 33	B 2	73 土坑	弥生	鉢			(3.6)	ナデ	ナデ	B,C,G	良好	黄橙色	灰白色	
第 145 図 34	B 2	84 土坑	弥生	甕			(8.3)	ヨコナデ・ハケ後タテ磨き	ヨコ磨き	B,C,G	良好	灰黄褐色	黄橙色	
第 145 図 35	B 2	142 土坑	弥生	鉢			(6.3)	ナデ・ハケ	指頭圧痕・工具ナデ	B,C,G	良好	灰褐色	灰黄褐色	
第 145 図 36	B 2	114 土坑	弥生	鉢			(7.8)	ハケ	ナデ	B,C,G	良好	褐色	黄橙色	
第 145 図 37	B 2	139 土坑	弥生	甕			(8.7)	ハケ	ハケ	A ,B,C	良好	黄橙色	褐灰色	
第 145 図 38	B 2	16 土坑	弥生	甕	5.2	5.9		ハケ・ナデ	ナデ	B,C,G	良好	橙色	黒色	
第 145 図 39	B 2	34 土坑	弥生	甕	5.2	4.6		ハケ・ナデ	-	A,B,C,G	良好	橙色	-	丹塗り
第 145 図 40	B 2	107 土坑	弥生	甕	6.9	(6.3)		ハケ・ナデ	ナデ	B,C,G	良好	橙色	灰黄褐色	
第 145 図 41	B 2	57 土坑	弥生	甕	7.0	(6.5)		タテハケ・ナデ・指頭圧痕	ハクラク	B,C,G	良好	橙色	-	
第 145 図 42	B 2	13 住土坑	弥生	甕	6.0	6.8		ハケ・ナデ	マメツ・指オサエ	A,B,C	良好	橙色	橙色	
第 145 図 43	B 2	347 土坑	弥生	甕	6.2	(5.3)		ハケ・指頭圧痕	ナデ?	B,C,G	良好	橙色		
第 145 図 44	B 2	98 土坑	弥生	甕	9.6	(6.2)		タテハケ・ナデ・指頭圧痕	工具ナデ	B,C,G	良好	橙色	浅黄褐色	
第 145 図 45	B 2	107 土坑	弥生	甕	7.7	(3.6)		ハケ・指頭圧痕・ナデ	ナデ	A,B,C,G	良好	橙色	黄橙色	
第 145 図 46	B 2	10 土坑	弥生	甕	5.8	6.0		ナデ	ナデ	B,C,G	良好	橙色	灰白色	
第 145 図 47	B 2	43 土坑	弥生	甕	5.5	2.8		ナデ	ナデ	B,C,G	良好	橙色	黒褐色	
第 145 図 48	B 2	39 土坑	弥生	甕	9.3	16.4		ハケ・ナデ・工具ナデ	ナデ	A,G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 145 図 49	B 2	144 土坑	弥生	甕	11.0	(7.0)		タテハケ・ナデ	ハケ・指頭圧痕	A,C,G	良好	浅黄褐色	灰白色	
第 145 図 50	B 2	13 住土坑	弥生	甕	8.0	7.3		板ナデ・ナデ	ナデ	A,B,C	良好	浅黄褐色	褐灰色	
第 145 図 51	B 2	57 土坑	弥生	甕	7.0	(5.7)		ハケ・ナデ	工具ナデ	B,C,G	良好	橙色	灰黄褐色	
第 145 図 52	B 2	103 土坑	弥生	甕	(11.1)	22.7 + α		ハケのちミガキ・ナデ	ナデ・指オサエ	A,B,C,D	良好	黄灰色	橙色	
第 145 図 53	B 2	70 土坑	土師器	坏		(3.5)		回転ナデ・ヘラ切り・ナデ	回転ナデ	B,C,G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 145 図 54	B 2	70 土坑	土師器	坏	7.4	(2.0)		回転ナデ・ヘラ切り・ナデ	回転ナデ	B,C,G	良好	橙色	橙色	
第 147 図 1	B 2	16 住	弥生	甕		(6.3)		ヨコナデ・ナデ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	B,C,G	良好	浅黄褐色	黄橙色	
第 147 図 2	B 2	16 住	弥生	器台		(2.2)		ナデ	ナデ	B,C,G	良好	灰黄色	黄橙色	
第 147 図 3	B 2	16 住	弥生	甕		(6.1)		ハケ・ナデ	ナデ	B,C,G	良好	橙色	黄橙色	
第 147 図 4	B 2	16 住	弥生	器台		(5.3)		ナデ	ナデ	B,C,G	良好	黄褐色	橙色	
第 147 図 5	B 2	30 住	弥生	甕		5.1		ヨコナデ・ナデ・ハケ	板ナデ	B,C,G	良好	灰褐色	黄褐色	
第 147 図 6	B 2	32 住	弥生	甕		(8.6)		ヨコナデ・指オサエ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	B,C,G	良好	灰黄褐色	灰褐色	
第 147 図 7	B 2	34 住	弥生	甕		3.5		ヨコナデ・ハケ後ナデ	ナデ	B,C,G	良好	黄褐色	浅黄褐色	
第 147 図 8	B 2	36 住	弥生	甕		8.5		ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・板ナデ	A,B,C,G	良好	黄褐色	灰黄褐色	
第 147 図 9	B 2	37 住	弥生	甕		5.3		ヨコナデ	ヨコナデ	A,B,C,G	良好	浅黄褐色	灰白色	
第 147 図 10	B 2	37 住	弥生	甕	18.5	17.1 + α		ナデのち指オサエ・ミガキ	ナデ・ヘラナデ	B,C,G	良好	灰黄色	灰黄色	
第 147 図 11	B 2	37 住	弥生	甕		8.3		ヨコナデ・ハケ	工具ナデ・指オサエ・ナ	A,B,C	良好	灰白色	浅黄色	
第 147 図 12	B 2	43 住	弥生	甕		18.3		ヨコナデ・指ナデ・ハケ後 ナデ・ハケ	ヨコナデ・指ナデ・ヘラ ミガキ	A ,C,G	良好	黒褐色	褐色	黒斑
第 147 図 13	B 2	32 住	弥生	甕		(5.6)		ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	A,B,C,E,G	良好	浅黄褐色	橙色	
第 147 図 14	B 2	45 住	弥生	甕		5.6		ナデ・指オサエ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	B,C,G	良好	黄褐色	黄褐色	
第 147 図 15	B 2	47 住	弥生	甕		5.0		ヨコナデ	ヨコナデ	A,B,C,G	良好	橙色	橙色	
第 147 図 16	B 2	47 住	弥生	甕		(5.2)		ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ	A,B,C,G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 147 図 17	B 2	1 住	弥生	甕		(7.2)		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	C,G	良好	浅黄色	灰黄色	
第 147 図 18	B 2	21 住	弥生	甕		(15.6)		ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	B,C,G	良好	橙色	黄褐色	
第 147 図 19	B 2	22 住	弥生	甕		(4.7)		ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	G	良好	浅黄褐色	灰白色	
第 147 図 20	B 2	24 住	弥生	甕		(3.5)		ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ	B,C,G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	

胎土: A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 17 表 出土土器観察表⑧

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (c m)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 147 図 21	B 2	26 住	弥生	甕			(6.4)	ヨコナデ・ハケ後ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	C,G	良好	黄橙色	浅黄橙色	
第 147 図 22	B 2	32 住	弥生	甕			(7.0)	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	G	不良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第 147 図 23	B 2	37 住	弥生	甕			6.0	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	A,B,C	良好	黄橙色	浅黄橙色	
第 147 図 24	B 2	42 住	弥生	甕			(10.4)	ヨコナデ・ハケ後ナデ	ヨコナデ・ナデ	B,C	良好	浅黄橙色	橙色	
第 147 図 25	B 2	17 住	弥生	甕	(31.0)		(18.5)	回転ナデ・ハケ後回転ナデ・ハケ	回転ナデ・ナデ	A,B,G	良好	橙色	黄橙色	
第 147 図 26	B 2	20 住	弥生	甕	26.5		23.1	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	A,G	良好	黄橙色	黄橙色	
第 147 図 27	B 2	36 住	弥生	甕	34.8	7.4	40.4	ナデ・ハケ	ナデ	A,B,C,D	良好	橙色	にぶい黄橙色	
第 148 図 28	B 2	29 住	弥生	甕			5.9	ヨコナデ・ナデ	板ナデ・ヨコナデ・ナデ	B,C	良好	黄橙色	黄橙色	
第 148 図 29	B 2	48 住	弥生	甕			(4.2)	ヨコナデ	ヨコナデ・ハケ	B,C	良好	黄灰	灰白色	
第 148 図 30	B 2	44 住	弥生	甕			8.5	ヨコナデ・板ナデ	ヨコナデ・ハケ	A,B,C,G	良好	浅黄色	灰白色	
第 148 図 31	B 2	44 住	弥生	甕			10.95	ヨコナデ・ハケ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケ	B,C,G	良好	浅黄色	灰白色	
第 148 図 32	B 2	19 住	弥生	甕	3.9		13.9	回転ナデ・タタキ	回転ナデ・タタキ・ナデ	C,G	良好	黄橙色	黄橙色	
第 148 図 33	B 2	25 住	弥生	甕	(22.4)		30.3	ナデ・ナデのち一部ミガキ	ヘラナデのち一部ミガキ	A,B,C,G	良好	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第 148 図 34	B 2	8 住	弥生	甕	14.5	(7.3)	19.7	ハケのちミガキ	ハケのちナデ	A,B,C,G	良好	にぶい橙色	にぶい橙色	
第 148 図 35	B 2	37 住	弥生	甕	(9.7)	6.8	21.7	指オサエ・ナデ・ハケ	ナデ・ナデ	B,C,G	良好	灰白色	黄灰色	
第 148 図 36	B 2	37 住	弥生	甕	7.5		10.3	ナデ	板ナデ	A,B,C	良好	灰白色	浅黄色	
第 148 図 37	B 2	48 住	弥生	甕			10.9 + α	ナデ	ナデ・指オサエ	A,B,C,E,G	良好	橙色	橙色	
第 148 図 38	B 2	33 住	弥生	甕			6.5	ヨコナデ・指ナデ・ハケ	ナデ	A,B,C,G	良好	黄橙色	灰黄褐色	
第 148 図 39	B 2	28 住	弥生	甕			(6.4)	ヨコナデ・ハケ・ヘラミガキ	ヘラミガキ	B,C,G	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	
第 148 図 40	B 2	27 住	弥生	高坏			(2.9)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	G	良好	浅黄橙色	橙色	丹塗り
第 148 図 41	B 2	45 住	弥生	甕			3.5	ヨコナデ	ヨコナデ	A,B,C	良好	灰白色	灰白色	
第 148 図 42	B 2	21 住	弥生	甕			(13.3)	ハケ・ヨコナデ	ナデ・ハケ	B,C,G	良好	浅黄色	淡黄色	
第 148 図 43	B 2	19 住	弥生	甕			8.3	ヨコナデ・ハケ・ナデ	ハケ後ナデ・指オサエ	B,C,G	良好	黄橙色	浅黄橙色	
第 148 図 44	B 2	19 住	弥生	甕	23.0		11.7	ヨコナデ・タタキ	板ナデ	A,B,C,G	良好	黄橙色	褐灰色	
第 148 図 45	B 2	21 住	弥生	甕		6.6	(4.7)	ハケ・ヨコナデ	ナデ	C	良好	橙色	黄橙色	
第 148 図 46	B 2	22 住	弥生	甕		7.1	(4.5)	ハケ・ナデ	ナデ	B,C,G	良好	橙色	灰黄褐色	
第 148 図 47	B 2	31 住	弥生	甕			(4.8)	ハケ・ナデ	ナデ	B,C,G	良好	橙色	橙色	
第 148 図 48	B 2	34 住	弥生	甕		8.4	6.2	指ナデ・ナデ (マメツ)	ナデ	B,C,G	良好	橙色	黄橙色	
第 148 図 49	B 2	37 住	弥生	甕		5.35	4.25	ナデ・ハケ・ハケ後ナデ	ナデ	A,B,C,G	良好	橙色	褐灰色	
第 148 図 50	B 2	41 住	弥生	甕			(5.4)	ハケ・ナデ	ナデ・ヘラミガキ	A,B,C	良好	浅黄橙色	灰黄色	
第 148 図 51	B 2	44 住	弥生	甕		7.55	8.8	ハケ・ナデ	ヘラミガキ	A,B,C,G	良好	黄橙色	褐色	
第 148 図 52	B 2	17 住	弥生	甕		5.8	(7.0)	ハケ・ハケ後ヨコナデ・ナデ	板ナデ	A,B,C	良好	黄橙色	褐灰色	
第 148 図 53	B 2	27 住	弥生	甕		6.6	(4.4)	ハケ・ヨコナデ	ナデ	C	良好	浅黄橙色	灰白色	
第 148 図 54	B 2	31 住	弥生	甕			(5.6)	ハケ・ナデ	ナデ	B,C,G	良好	黄橙色	黄橙色	
第 148 図 55	B 2	22 住	弥生	甕		6.9	(4.0)	ヘラケズリ・ナデ	指ナデ	B,C,G	良好	浅黄橙色	橙色	
第 148 図 56	B 2	19 住	弥生	甕		7.0	7.0	ハケ・板ナデ・指オサエ	板ナデ	A,B,C,G	良好	黄橙色	灰黄褐色	
第 148 図 57	B 2	25 住	弥生	甕		8.0	(4.6)	ハケ・ナデ	ナデ	B,C,G	良好	黄橙色	黄橙色	
第 148 図 58	B 2	38 住	弥生	甕		12.0	4.35	ナデ・ヘラミガキ	ナデ	A,B,C,G	良好	灰白色	灰白色	
第 148 図 59	B 2	47 住	弥生	甕		6.1	5.7	ナデ・ミガキ	ナデ (マメツぎみ)	B,C,D,G	良好	橙色	灰白色	丹塗り
第 148 図 60	B 2	34 住	弥生	甕		6.3	9.65	ハケ・ナデ	板ナデ	B,C	良好	灰白色	黄褐色	
第 148 図 61	B 2	44 住	弥生	甕		7.4	13.9	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	A,B,C,D,G	良好	橙色	橙色	
第 149 図 62	B 2	29 住	弥生	甕		8.2	15.5	ハケ・工具ナデ	ナデ	A,B,C,H	良好	黄橙色	灰黄褐色	
第 149 図 63	B 2	29 住	弥生	甕		9.2	8.9	タタキ後ナデ	工具痕後ナデ	A,B,C,G	良好	橙色	浅黄橙色	
第 149 図 64	B 2	19 住	弥生	鉢		7.0	7.4	板ナデ・ナデ	板ナデ・指頭圧痕	A,B,C,G	良好	黄橙色	黄橙色	
第 149 図 65	B 2	19 住	弥生	甕		9.6	4.2	ヨコナデ・板ナデ	指オサエ	A,B,C	良好	橙色	黄橙色	
第 149 図 66	B 2	30 住	弥生	鉢		12.0	5.3	ハケ後ナデ・ヨコナデ	板ナデ	A,B,C	良好	橙色	褐色	
第 149 図 67	B 2	34 住	弥生	鉢		9.0	9.8	板ナデ・ヨコナデ	ハケ・ナデ	A,B,C,G	良好	黄橙色	浅黄橙色	
第 149 図 68	B 2	4 住	弥生	高坏			9.5	ミガキ	ミガキ・ナデ	B,C,G	良好	明赤褐色	浅黄橙色	丹塗り
第 149 図 69	B 2	32 住	弥生	甕	(7.0)	7.8	16.1	ナデ・ナデ・ハケ	ナデ・指オサエ	A,B,C,G	良好	褐灰色	橙色	

胎土: A 角四石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 18 表 出土土器観察表⑨

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (c m)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 149 図 70	B 2	19 住	弥生	器台	12.0		11.2	ナデ・ケズリ・ヨコナデ	絞り目後ナデ・ヨコナデ	B.C.D.G	良好	橙色	黄褐色	
第 149 図 71	B 2	48 住	弥生	支脚			(6.5)	板ナデ・ナデ	しぼり痕・ナデ	B.C.G	良好	黄褐色	灰黄褐色	
第 149 図 72	B 2	29 住	弥生	器台		10.0	7.6	ナデ・指頭圧痕	ナデ	A.B.C.D	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 149 図 73	B 2	19 住	弥生	鉢	(13.3)	4.8	9.4	ナデ	ナデ	A.B.C	良好	浅黄褐色	にぶい黄褐色	底部一部スス付着
第 149 図 74	B 2	30 住	弥生	鉢	12.5	4.2	6.4	ナデ・タタキ	ナデ	A.C.D.G	良好	褐灰色	褐灰色	
第 149 図 75	B 2	37 住	弥生	不明			1.6	ナデ	ナデ	B.C.G	良好	橙色	橙色	穿孔、突帯
第 149 図 76	B 2	22 住	弥生	不明			(3.0)	ナデ	ナデ	G	良好	橙色	橙色	ミニチュアか
第 149 図 77	B 2	4 住	弥生	ミニチュア土器	(5.9)		2.9 + α	指オサエ	指オサエ	A.C	良好	にぶい黄褐色	黄灰色	
第 149 図 78	B 2	29 住	弥生	ミニチュア	7.2	3.4	4.5	ナデ・工具痕	指オサエ	A.B.C.G	良好	橙色	橙色	
第 149 図 79	B 2	1 住	土師器	甕			(4.6)	ヨコナデ・ハケ後板ナデ	ヨコナデ・板ナデ	B.C.G	良好	橙色	赤褐色	
第 149 図 80	B 2	7 住	土師器	甕			(5.8)	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ヘラケズリ	B.G	良好	褐色	橙色	
第 149 図 81	B 2	9 住	土師器	甕			(11.1)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	B.G	良好	黄褐色	灰黄褐色	
第 149 図 82	B 2	15 住	土師器	甕			(4.1)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 149 図 83	B 2	9 住	土師器	高坏			(3.7)	ナデ	ナデ	G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 149 図 84	B 2	9 住	土師器	高坏			(7.5)	ナデ・ヨコナデ・板ナデ	ナデ・板ナデ・ヨコナデ	B.C.G	良好	橙色	橙色	
第 149 図 85	B 2	16 住	須恵	蓋	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	B.C	良好	淡青灰色	淡青灰色	
第 149 図 86	B 2	19 住	須恵器	杯身			(2.4)	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	C, 石器	良好	灰色	灰白色	
第 149 図 87	B 2	20 住	須恵	坏	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	B.C	良好	青灰色	青灰色	
第 150 図 1	B 2	P64	弥生	壺			14.2	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	B.C.G	良好	黄褐色	黄褐色	
第 150 図 2	B 2	P12	弥生	甕			(2.5)	ヨコナデ・板ナデ・ハケ後ヨコナデ	指オサエ・ナデ	A.B.C.G	良好	灰黄褐色	黄褐色	
第 150 図 3	B 2	P9	弥生	壺		9.2	5.0	ハケ・ナデ	板ナデ (マメツ)	A.C.D.E.	良好	褐色	黄褐色	
第 150 図 4	B 2	P8	弥生	甕		6.7	(8.0)	ハケ・ナデ	板ナデ	A.B.C	不良	灰白色	オリーブ黒色	
第 150 図 5	B 2	P54	弥生	甕		6.2	3.9	ハケ・ナデ	-	B.C.G	良好	黄褐色	-	
第 150 図 6	B 2	P2	弥生	壺		6.6	(6.3)	指オサエ後ヨコナデ・ナデ	板ナデ	A.B.C.G	不良	橙色	灰白色	
第 150 図 7	B 2	P1	弥生	甕		(7.0)	(5.1)	ハケ・ハケ後ヨコナデ・ナデ	指オサエ	A.B.C.G	良好	浅黄色	灰黄褐色	
第 150 図 8	B 2	P2	弥生	壺		6.6	5.0	ハケ・ハケ後ヨコナデ・ナデ	板ナデ	A.B.C.G	良好	黄褐色	浅黄褐色	
第 150 図 9	B 2	P14	弥生	壺		6.4	(4.4)	ハケ・ハケ後ヨコナデ・ナデ	板ナデ	A.B.C.G	良好	橙色	浅黄色	
第 150 図 10	B 2	P20	弥生	器台		(11.3)	(6.2)	ハケ・ヨコナデ	ナデ・ハケ	B.C.D.G	良好	浅黄褐色	黄褐色	
第 150 図 11	B 2	一括	弥生	壺			13.0	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ナデ	B.C.G	良好	黄褐色	黄褐色	
第 150 図 12	B 2	一括	弥生	甕			5.6	ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ	B.C.G	良好	灰色	淡黄色	
第 150 図 13	B 2	一括	弥生	甕			(5.5)	ハケ・ナデ	ナデ	B.C.G	良好	灰白色	黄褐色	
第 150 図 14	B 2	一括	弥生	甕			(12.4)	ヨコナデ・ミガキ・ハケ後ナデ	工具ナデ	A.B.D.G	良好	褐色	浅黄褐色	
第 150 図 15	B 2	一括	弥生	壺		6.0	11.8	ハケ・ヨコナデ	板ナデ	B.C.G	良好	橙色	黄褐色	
第 150 図 16	B 2	一括	弥生	壺		6.8	10.3	指オサエ後ハケ・ヨコナデ	板ナデ・指オサエ	A.B.C.G	良好	浅黄褐色	黄褐色	
第 150 図 17	B 2	一括	弥生	壺		7.9	(6.7)	ハケ・ナデ	ナデ	B.C.G	良好	橙色	褐灰色	
第 150 図 18	B 2	一括	弥生	壺		7.6	5.4	ハケ・ハケ後ナデ・指オサエ	ナデ	A.C.D.G	良好	灰白色	浅黄褐色	
第 150 図 19	B 2	一括	弥生	壺		6.4	6.3	指オサエ後ハケ・ナデ	ナデ	B.C.G	良好	浅黄褐色	灰黄褐色	
第 150 図 20	B 2	一括	弥生	甕		8.0	(5.0)	ハケ後ナデ・ナデ	ナデ	B.C.G	良好	橙色	褐灰色	スス付着
第 150 図 21	B 2	一括	弥生	高坏	19.0		7.5	ナデ	ナデ	B.C	良好	浅黄褐色	橙色	丹塗り
第 150 図 22	B 2	一括	弥生	高坏		9.2	8.0	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	C	良好	黄褐色	黄褐色	穿孔
第 150 図 23	B 2	一括	弥生	鉢	12.4	7.0	5.3	ヨコナデ・板ナデ・ナデ	板ナデ・ナデ	B.C.G	良好	橙色	橙色	
第 150 図 24	B 2	一括	弥生	ミニチュア土器		(0.8)	(2.9)	指オサエ	指オサエ	A.B.C.G	良好	浅黄褐色	黄褐色	
第 150 図 25	B 2	一括	須恵器	坏蓋	13.8		2.4	回転ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ	B.C.G	良好	灰白色	灰白色	
第 150 図 26	B 2	一括	須恵器	坏蓋			(2.9)	回転ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ後ナデ	B.C	良好	灰白色	灰白色	
第 150 図 27	B 2	一括	須恵器	坏蓋			3.7	回転ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	B.C.G	良好	灰白色	灰白色	
第 150 図 28	B 2	一括	須恵	蓋	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	青灰色	青灰色	
第 150 図 29	B 2	一括	須恵	蓋	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	B.C	良好	淡青灰色	淡青灰色	
第 150 図 30	B 2	一括	須恵	蓋	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	B.C	良好	青灰色	青灰色	
第 150 図 31	B 2	一括	須恵	蓋	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	C	良好	淡灰色	淡灰色	

胎土: A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 19 表 出土土器観察表⑩

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (c m)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 150 図 32	B 2	一括	須恵器	鉢		8.8	2.1	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	B.C	良好	灰白色	灰白色	
第 150 図 33	B 2	一括	土師器	坏		8.0	2.0	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	B.C.G	不良	浅黄色	黄灰色	
第 150 図 34	B 2	一括	土師器	坏			(3.9)	ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	B.C	不良	黄橙色	橙色	
第 154 図 1	C	1 住	須恵器	坏蓋	(12.5)		(3.4)	回転ケズリ・ナデ	回転ナデ	E	良好	青灰色	青灰色	
第 154 図 2	C	1 住	須恵器	坏蓋				回転ナデ	回転ナデ	A.G	良好	青灰色	青灰色	
第 154 図 3	C	1 住	須恵器	坏身	(11.1)		(4.0)	回転ケズリ・ナデ	回転ナデ	E	良好	青灰色	青灰色	
第 154 図 4	C	1 住	須恵器	坏身	(10.4)		(2.6)	回転ナデ	回転ナデ	A.G	良好	青灰色	青灰色	
第 154 図 5	C	1 住	土師器	埴	(15.8)		5.9	ケズリ・ナデ	ナデ	B.G	良好	橙色	橙色	
第 154 図 6	C	1 住	土師器	埴	(12.0)		(4.5)	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	B.G	良好	淡橙色	淡橙色	
第 154 図 7	C	1 住	土師器	埴				ケズリ・ナデ	ミガキ	C	良好	黒色	黒色	
第 154 図 8	C	1 住	土師器	埴				ケズリ・ナデ	ミガキ	A.B.G	良好	淡黄橙色	黒色	
第 154 図 9	C	1 住	土師器	埴				ケズリ・ナデ	ミガキ	A	良好	橙色	橙色	
第 154 図 10	C	1 住	土師器	埴	(14.4)		(5.3)	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	G.H	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第 154 図 11	C	1 住	土師器	埴	(16.0)		5.9	ケズリ・ナデ	ナデ	B.G.H	良好	淡褐色	淡褐色	
第 154 図 12	C	1 住	土師器	埴	(13.8)		5.2	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	E.G	良好	橙色	橙色	
第 154 図 13	C	1 住	土師器	埴	(13.3)		(4.2)	ハケ・ナデ	ナデ	A	良好	淡褐色	淡褐色	
第 154 図 14	C	1 住	土師器	埴				ケズリ・ナデ	ナデ	A	良好	淡褐色	淡褐色	
第 154 図 15	C	1 住	土師器	埴				ケズリ・ナデ	ナデ	A.D	良好	淡褐色	淡褐色	
第 154 図 16	C	1 住	土師器	埴				ミガキ・ナデ	ナデ	A.B	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 154 図 17	C	1 住	土師器	埴				ケズリ・ハケ	ケズリ・ナデ	A.G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 154 図 18	C	1 住	土師器	埴				ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	A.G	良好	橙色	浅黄褐色	
第 154 図 19	C	1 住	土師器	甕	(13.0)		(13.6)	タタキ・ナデ	ケズリ・ナデ	B.H	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第 154 図 20	C	1 住	土師器	甕	(18.2)		(10.5)	ハケ・ナデ	ケズリ・ハケ	A.B.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑有
第 154 図 21	C	1 住	土師器	甕				ナデ	ケズリ・ナデ	B.G	良好	淡褐色	淡褐色	黒斑有
第 154 図 22	C	1 住	土師器	甕	(8.4)		(3.4)	ハケ	ハケ・ケズリ	C.G	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第 154 図 23	C	1 住	土師器	高坏				ナデ	ナデ	C.D	良好	橙色	淡黄褐色	
第 154 図 24	C	1 住	土師器	高坏				ナデ	ナデ	B.C.D	良好	橙色	橙色	
第 154 図 25	C	1 住	土師器	高坏				不明	不明	B.D	良好	橙色	橙色	
第 154 図 26	C	1 住	土師器	高坏				ナデ	ナデ	A.C	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第 156 図 1	C	2 住	須恵器	坏蓋				回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	G	良好	青灰色	青灰色	
第 156 図 2	C	2 住	須恵器	坏蓋				回転ナデ	回転ナデ	C.E	良好	青灰色	青灰色	
第 156 図 3	C	2 住	須恵器	坏身	(13.0)		(2.9)	回転ナデ	回転ナデ	B.G	良好	青灰色	青灰色	
第 156 図 4	C	2 住	須恵器	坏身	(12.6)		(3.1)	回転ナデ	回転ナデ	A.G	良好	青灰色	青灰色	
第 156 図 5	C	2 住	須恵器	坏身				回転ナデ	回転ナデ	A.G	良好	青灰色	青灰色	
第 156 図 6	C	2 住	須恵器	坏身				回転ナデ	回転ナデ	C.E	良好	青灰色	青灰色	
第 156 図 7	C	2 住	須恵器	提瓶	(7.6)		(3.7)	回転ナデ	回転ナデ	C.E	良好	青灰色	青灰色	
第 156 図 8	C	2 住	須恵器	甕	(23.0)		(4.0)	回転ナデ	回転ナデ	E	良好	青灰色	青灰色	
第 156 図 9	C	2 住	土師器	甕	(17.0)		(5.6)	ナデ	ケズリ・ハケ・ナデ	A.E.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 156 図 10	C	2 住	土師器	甕	(23.6)		(9.7)	ナデ・ハケ	ケズリ・ナデ	A.C.H	良好	淡褐色	淡褐色	
第 156 図 11	C	2 住	土師器	甕	(13.0)		(10.0)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	A.E	良好	淡褐色	淡黄褐色	スス付着?
第 156 図 12	C	2 住	土師器	甕	(24.6)		(14.7)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A.C.D.H	良好	橙色	橙色	
第 156 図 13	C	2 住	土師器	甕	(25.8)		(9.9)	ナデ	ナデ・ケズリ	A.B.E.D	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	部分的に表面剥落
第 156 図 14	C	2 住	土師器	甕	(20.2)		(11.0)	ナデ	ナデ・ケズリ	A.B.C.H	良好	褐色	淡褐色	
第 156 図 15	C	2 住	土師器	甕	(19.2)		(21.2)	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ・ケズリ	A.G.H	良好	淡褐色	淡褐色	黒斑有
第 156 図 16	C	2 住	土師器	甕				ナデ	ハケ	A.E	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 156 図 17	C	2 住	土師器	甕				ナデ	ケズリ	A	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 156 図 18	C	2 住	土師器	甕				ハケ・ナデ	ハケ	A	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 157 図 19	C	2 住	土師器	高坏	15.7	(13.2)	14.5	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A.B.E	良好	淡褐色	淡褐色	
第 157 図 20	C	2 住	土師器	高坏			4.5	ナデ・ハケ	ナデ	A.B.E.G	良好	淡褐色	淡赤褐色	

胎土 A 角四石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 20 表 出土土器観察表①

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (c m)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 157 図 21	C	2 住	土師器	高坏				ナデ	ハケ	G	良好	淡橙色	淡橙色	
第 157 図 22	C	2 住	土師器	高坏				ナデ	ケズリ	A.E	良好	橙色	橙色	
第 157 図 23	C	2 住	土師器	高坏				ナデ	ケズリ	A.G	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第 157 図 24	C	2 住	土師器	高坏				ナデ	ケズリ	D.G	良好	橙色	橙色	
第 157 図 25	C	2 住	土師器	高坏		(13.2)		ナデ	ケズリ・ハケ	A	良好	淡黄橙色	橙色	
第 157 図 26	C	2 住	土師器	高坏		(10.0)	(4.7)	ナデ・ハケ	ケズリ	A.G	良好	橙色	橙色	
第 157 図 27	C	2 住	土師器	埴	(12.6)		(6.15)	ミガキ	ミガキ	A.B	良好	淡橙色	淡橙色	
第 157 図 28	C	2 住	土師器	埴	14.3		6.0	ナデ・ハケ・ケズリ	ナデ	B.G	良好	淡橙色	淡橙色	黒斑
第 157 図 29	C	2 住	土師器	埴	12.9		5.7	ケズリ・ミガキ	ナデ・ミガキ	G.H	良好	黒褐色	黒褐色	
第 157 図 30	C	2 住	土師器	埴	11.8		4.9	ケズリ・ミガキ	ミガキ	H	良好	黒褐色	黒褐色	
第 157 図 31	C	2 住	土師器	埴	(12.0)		5.7	ナデ・ケズリ	ナデ	D.G.H	良好	淡黄橙色	明褐色	
第 157 図 32	C	2 住	土師器	埴	11.4		4.6	ナデ・ケズリ	ナデ	E.G	良好	橙色	橙色	
第 157 図 33	C	2 住	土師器	埴				ケズリ・ミガキ	ミガキ	D.G	良好	黄灰色	黄灰色	
第 157 図 34	C	2 住	土師器	埴	(11.4)		(3.9)	ケズリ・ナデ	ミガキ?	A.B.C.D	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	
第 157 図 35	C	2 住	土師器	埴				ケズリ・ナデ	ナデ	A.C	良好	淡橙色	淡橙色	
第 157 図 36	C	2 住	土師器	埴				ケズリ・ナデ	ナデ	B.E	良好	淡橙色	淡橙色	
第 157 図 37	C	2 住	土師器	ミニチュア	3.3		2.75	指頭痕・指ナデ	指頭痕・指ナデ	D.E	良好	淡橙色	淡橙色	
第 160 図 1	C	3 住	土師器	甕	18.0		(8.2)	ナデ	ナデ・ケズリ	A.E	良好	淡黄橙色	灰黄色	黒斑
第 160 図 2	C	3 住	土師器	甕	(13.8)		(2.8)	ナデ	ケズリ・ナデ	A.G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 160 図 3	C	3 住	土師器	甕				ハケ・ナデ	ケズリ・ハケ	B	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 160 図 4	C	3 住	土師器	甕				ナデ	ケズリ・ハケ	A.G	良好	淡褐色	淡黄褐色	
第 160 図 5	C	3 住	土師器	高坏	16.1		(5.7)	ナデ	ナデ・ハケ	A.B.C	良好	橙色	橙色	黒斑・接合面
第 160 図 6	C	3 住	土師器	高坏				ナデ	ハケ・ナデ	A.B	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 160 図 7	C	3 住	土師器	高坏		(14.5)	(3.7)	ナデ	ケズリ・ナデ	A.E.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 160 図 8	C	3 住	土師器	高坏		(15.4)	(2.9)	ナデ	ケズリ・ナデ	A.G	良好	橙色	橙色	
第 160 図 9	C	3 住	土師器	埴	12.8		6.2	ナデ・ハケ	ナデ	A.B	良好	淡褐色	淡褐色	
第 160 図 10	C	3 住	土師器	埴	13.6		5.05	ナデ・ケズリ	ナデ	C.D	良	淡黄褐色	暗灰黄色	
第 160 図 11	C	3 住	土師器	瓶			(22.6)	ハケ・ナデ	ケズリ・ケズリ後ナデ	A.B.C.D	良好	淡褐色	淡褐色	
第 160 図 12	C	3 住	朝鮮系	鉢				縄文	ナデ	A.C	良好	黄灰色	淡黄褐色	
第 160 図 13	C	3 住	朝鮮系	鉢				縄文	ナデ	A.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 160 図 14	C	3 住	朝鮮系	鉢				縄文	ナデ	A.C	良好	黄灰色	淡黄褐色	
第 160 図 15	C	3 住	朝鮮系	甗				格子目タタキ	ナデ	A.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 160 図 16	C	3 住	朝鮮系	甗				格子目タタキ	ナデ	A.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 160 図 17	C	3 住	朝鮮系	甗				格子目タタキ	ナデ	A.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 162 図 1	C	4 住	土師器	甕	(16.9)		(17.7)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	A.C.D.E	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	
第 162 図 2	C	4 住	土師器	甕	(19.4)		(4.8)	ナデ	ケズリ・ハケ	A.B.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 162 図 3	C	4 住	土師器	甕	(16.9)		(4.0)	ナデ	ケズリ・ナデ	C.D.H	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 162 図 4	C	4 住	土師器	甕				ナデ	ケズリ・ナデ	D.E.G	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	
第 162 図 5	C	4 住	土師器	高坏	(25.0)		(6.2)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	A.C.G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 162 図 6	C	4 住	土師器	高坏	(21.0)		(4.3)	ナデ	ナデ	A.G	良好	淡黄褐色	淡褐色	
第 162 図 7	C	4 住	土師器	高坏	(21.8)		(5.2)	ナデ	ハケ・ナデ	A.C.G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 162 図 8	C	4 住	朝鮮系	高坏	(14.0)		(4.4)	ケズリ・ナデ	ハケ・ナデ	A.E.G	良好	黒褐色	淡褐色	
第 162 図 9	C	4 住	土師器	高坏		(14.5)	(2.9)	ナデ	ケズリ・ナデ	G	良好	橙色	橙色	
第 162 図 10	C	4 住	土師器	高坏	(13.0)		(8.0)	ナデ	ケズリ・ナデ	A.G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 162 図 11	C	4 住	土師器	高坏	(13.4)		(6.9)	ナデ	ケズリ・ナデ	A.G	良好	淡褐色	淡褐色	黒斑有
第 162 図 12	C	4 住	土師器	埴				ケズリ・ナデ	ナデ	A.B.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 162 図 13	C	4 住	土師器	埴	(13.4)		(6.1)	ケズリ・ナデ	ナデ	A.B.G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 162 図 14	C	4 住	朝鮮系	埴	(14.6)		(3.8)	ケズリ・ナデ	ナデ	C.E	良好	橙色	橙色	
第 162 図 15	C	4 住	土師器	埴				ナデ	ナデ	A.G	良好	褐色	褐色	

胎土 A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒



第 21 表 出土土器観察表<sup>⑫</sup>

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (c m)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 162 図 16	C	4 住	土師器	埴	(16.3)		(2.7)	ナデ	ナデ	G	良好	橙色	橙色	
第 162 図 17	C	4 住	朝鮮系	鉢				縄文・ナデ	ナデ	AG	良好	黒褐色	淡黄橙色	
第 162 図 18	C	4 住	朝鮮系	鉢				縄文・ナデ	ナデ	A.C.G	良好	淡黄橙色	淡黄褐色	
第 162 図 19	C	4 住	朝鮮系	鉢	(27.8)		(7.3)	縄文・ナデ	ナデ	A.B.C.G	良好	黄灰色	淡黄褐色	
第 165 図 1	C	5 住	土師器	甕	(17.3)		(23.1)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	B	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	
第 165 図 2	C	5 住	土師器	甕	(18.2)		(9.6)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	A.C.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 165 図 3	C	5 住	土師器	甕	(15.3)		(3.0)	ナデ	ケズリ・ナデ	AG	良好	灰黄褐色	黒褐色	
第 165 図 4	C	5 住	土師器	甕	(13.6)		(9.5)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	A.C.E	良好	淡橙色	淡黄褐色	
第 165 図 5	C	5 住	土師器	甕	(10.0)		(1.7)	ナデ	ケズリ・ナデ	E.G	良好	淡赤褐色	褐色	
第 165 図 6	C	5 住	土師器	埴				ハケ・ナデ	ケズリ・ハケ	C.D.E	良好	淡褐色	淡褐色	
第 165 図 7	C	5 住	土師器	埴	(13.4)		(5.8)	ハケ・ナデ	ナデ	C.D.E	良好	橙色	橙色	
第 165 図 8	C	5 住	土師器	高坏				不明	不明	AG	良好	橙色	橙色	
第 165 図 9	C	5 住	土師器	ミニチュア高坏		(3.8)	(2.0)	指頭痕	指頭痕	C	良好	橙色	橙色	
第 168 図 1	C	6 住	須恵器	坏蓋	(14.4)		(3.0)	回転ナデ	回転ナデ	B	良好	暗灰色	灰色	
第 168 図 2	C	6 住	土師器	甕	(18.6)		(4.7)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A.C.H	良好	淡褐色	淡褐色	
第 168 図 3	C	6 住	土師器	甕	(12.0)		(5.5)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	C.D	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	
第 168 図 4	C	6 住	土師器	甕	(13.3)		(4.2)	ナデ	ナデ・ケズリ	AC	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 168 図 5	C	6 住	土師器	甕				ナデ	ナデ	C.H	良好	暗褐色	暗褐色	
第 168 図 6	C	6 住	土師器	甕				ハケ・ナデ	ケズリ・ハケ	C.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 168 図 7	C	6 住	土師器	高坏		(14.6)	(2.1)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	D.G	良好	淡橙色	淡橙色	
第 168 図 8	C	6 住	土師器	甕				ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	A.C.D.E.H	良好	淡褐色	淡褐色	
第 168 図 9	C	6 住	土師器	高坏	(18.0)		(7.0)	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	B.D.G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 168 図 10	C	6 住	土師器	高坏	18.8		(6.3)	ナデ	ナデ	A.B.E.G	良好	淡褐色	灰黄色	
第 168 図 11	C	6 住	土師器	高坏	(17.8)		(4.5)	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	D	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第 168 図 12	C	6 住	土師器	高坏				ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	H	良好	橙色	橙色	
第 168 図 13	C	6 住	土師器	高坏				ハケ	ハケ	B	良好	橙色	橙色	
第 168 図 14	C	6 住	土師器	高坏				ハケ・ナデ	ナデ	G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑有
第 168 図 15	C	6 住	土師器	高坏		(17.6)	(2.3)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	G.H	良好	淡褐色	淡褐色	
第 168 図 16	C	6 住	土師器	高坏		(10.4)	(3.4)	ナデ	ケズリ・ナデ	C.D.E.G	良好	橙色	橙色	
第 168 図 17	C	6 住	土師器	高坏		14.3	(5.5)	ナデ	ケズリ・ナデ	G	良好	橙色	橙色	
第 168 図 18	C	6 住	土師器	埴	12.2		(4.4)	ナデ・ハケ	ナデ	A.E	良好	灰褐色	淡褐色	黒斑有
第 168 図 19	C	6 住	土師器	埴	(11.6)		(4.4)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 168 図 20	C	6 住	土師器	埴				ハケ・ナデ	ナデ	AG	良好	淡褐色	淡褐色	黒斑有
第 168 図 21	C	6 住	土師器	甕	(19.7)		(3.9)	ナデ	ケズリ・ナデ	C.D.E.G.H	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 171 図 1	C	7 住	須恵器	坏蓋	(15.0)		(2.0)	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	A.E	良好	青灰色	青灰色	
第 171 図 2	C	7 住	須恵器	坏蓋	(15.0)		(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	E	良好	青灰色	青灰色	
第 171 図 3	C	7 住	須恵器	坏蓋	(13.0)		(2.8)	回転ナデ	回転ナデ	E.G	良好	青灰色	青灰色	
第 171 図 4	C	7 住	須恵器	坏蓋	(16.3)		(2.9)	回転ナデ	回転ナデ	F.G	良好	青灰色	青灰色	
第 171 図 5	C	7 住	須恵器	坏蓋	(14.0)		(3.5)	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	E	良好	青灰色	青灰色	ヘラ記号
第 171 図 6	C	7 住	須恵器	坏蓋				回転ナデ	回転ナデ	E	良好	灰白色	灰白色	ヘラ記号
第 171 図 7	C	7 住	須恵器	蓋				回転ナデ	回転ナデ	E.G	良好	灰白色	灰白色	
第 171 図 8	C	7 住	須恵器	坏身	(13.2)		(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	E	良好	青灰色	青灰色	
第 171 図 9	C	7 住	須恵器	坏身	(13.6)		(3.2)	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	E.G	良好	青灰色	青灰色	
第 171 図 10	C	7 住	須恵器	坏身				回転ナデ	回転ナデ	E.F	良好	灰白色	灰白色	
第 171 図 11	C	7 住	須恵器	坏身				回転ナデ	回転ナデ	C.E	良好	青灰色	青灰色	
第 171 図 12	C	7 住	須恵器	高坏	(14.2)		(3.5)	回転ナデ	回転ナデ	E	良好	青灰色	青灰色	
第 171 図 13	C	7 住	土師器	甕	(30.8)		(10.0)	ナデ	ケズリ・ナデ	A.C.G	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	
第 171 図 14	C	7 住	土師器	甕				ナデ	ケズリ・ナデ	AG	良好	橙色	橙色	
第 171 図 15	C	7 住	土師器	甕				ハケ・ナデ	ケズリ・ハケ	A.B.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	

胎土: A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 22 表 出土土器観察表⑬

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (c m)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 171 図 16	C	7 住	土師器	甕	(14.6)		(4.2)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	A,D,E,G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 171 図 17	C	7 住	土師器	甕	(13.0)		(4.4)	ナデ	ケズリ・ナデ	A,C	良好	淡黄橙色	黒褐色	
第 171 図 18	C	7 住	土師器	甕				ナデ	ケズリ・ナデ	C,D,E,G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 171 図 19	C	7 住	土師器	甕				ナデ	ケズリ・指頭痕	A,C	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 171 図 20	C	7 住	土師器	底部				ナデ	ナデ	A,C	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 171 図 21	C	7 住	土師器	塊				ハケ・ナデ	ナデ	A,C,E,G	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 171 図 22	C	7 住	土師器	塊				ナデ	ナデ	G	良好	淡橙色	淡橙色	
第 171 図 23	C	7 住	土師器	塊				ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	A,G	良好	淡橙色	淡橙色	
第 171 図 24	C	7 住	土師器	高坏				不明	不明	C	良好	橙色	橙色	
第 171 図 25	C	7 住	土師器	手捏	(4.4)		(3.3)	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕	A,C	良好	褐色	褐色	
第 175 図 1	C	8 住	須恵器	坏蓋	13.6		4.3	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	E	良好	青灰色	青灰色	
第 175 図 2	C	8 住	須恵器	坏蓋	(13.6)		(2.9)	回転ナデ	回転ナデ	E,G	良好	青灰色	青灰色	
第 175 図 3	C	8 住	須恵器	坏蓋				回転ナデ	回転ナデ	E	良好	青灰色	青灰色	
第 175 図 4	C	8 住	須恵器	坏蓋				回転ナデ	回転ナデ	G	良好	青灰色	青灰色	
第 175 図 5	C	8 住	須恵器	坏身	12.8		4.1	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	F	良好	青灰色	青灰色	受部径 15.1
第 175 図 6	C	8 住	須恵器	坏身	(12.5)		(3.2)	回転ナデ	回転ナデ	E,G	良好	青灰色	青灰色	
第 175 図 7	C	8 住	須恵器	ハソウ				回転ナデ	回転ナデ	E,G	良好	青灰色	青灰色	
第 175 図 8	C	8 住	土師器	甕	(22.4)		(3.7)	ナデ	ケズリ・ナデ	A,B	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 175 図 9	C	8 住 B	土師器	甕	(15.4)		8.2	ナデ	ナデ・ケズリ	A,C	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 175 図 10	C	8 住	土師器	甕	(15.2)		(4.5)	ナデ	ナデ・ケズリ	A,C	良好	橙色	淡褐色	
第 175 図 11	C	8 住	土師器	甕	(15.4)		(5.9)	ナデ	ナデ・ケズリ	A,C	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	
第 175 図 12	C	8 住	土師器	甕	(16.8)		(6.4)	ナデ	ナデ・ケズリ	A,C	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	スズ付着
第 175 図 13	C	8 住	土師器	甕	(12.5)		(5.1)	ナデ・指頭痕	ナデ・ケズリ	A,C,E	良好	淡橙色	褐灰色	
第 175 図 14	C	8 住	土師器	甕	(12.4)		(3.6)	ナデ	ケズリ・ナデ	C,G	良好	橙色	橙色	
第 175 図 15	C	8 住	土師器	甕	(13.4)		(8.2)	ナデ・指頭痕	ナデ・ケズリ	A,C	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 175 図 16	C	8 住	土師器	鉢	(12.0)		(11.4)	ナデ・指頭痕	ナデ・ケズリ	A,C	良好	淡橙色	淡黄橙色	二次焼成
第 175 図 17	C	8 住	土師器	甕				ナデ	ナデ・ケズリ	A,C	良好	淡橙色	黒褐色	
第 175 図 18	C	8 住	土師器	甕				ナデ	ナデ	A,B,G	良好	淡橙色	淡橙色	
第 175 図 19	C	8 住	土師器	甕				ナデ	ナデ・ケズリ	A,C	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 175 図 20	C	8 住	土師器	甕				ハケ	ナデ・ケズリ	A,C	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 175 図 21	C	8 住	土師器	甕				ナデ	ケズリ・ナデ	G	良好	淡橙色	暗褐色	
第 175 図 22	C	8 住	土師器	甕				ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	A,C,D,E	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 175 図 23	C	8 住	土師器	甕				ナデ	ケズリ	C,G,H	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 175 図 24	C	8 住	土師器	高坏	(17.5)		(4.0)	ナデ	ナデ	A,G	良好	橙色	橙色	
第 175 図 25	C	8 住	土師器	高坏				ハケ・ナデ	ナデ	C,E	良好	淡橙色	褐色	
第 175 図 26	C	8 住	土師器	底部		(6.0)	(2.9)	指頭痕・ナデ	指頭痕	C	良好	淡黄橙色	淡褐色	
第 175 図 27	C	8 住	土師器	手捏	(4.5)		2.4	指ナデ	指ナデ	A,C	良好	淡橙色	淡褐色	
第 175 図 28	C	8 住	土師器	手捏	(3.6)		1.7	ナデ・指頭痕	指頭痕	A,C	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	
第 175 図 29	C	8 住	土師器	手捏				ナデ	ナデ・指頭痕	A,C	良好	淡黄橙色	淡黄橙色	底面赤彩有り
第 175 図 30	C	8 住	土師器	輪羽口	$5.6 + \alpha$		(4.3)	ナデ	ナデ	E	良好	暗灰褐色	暗灰褐色	鉄滓付着
第 178 図 1	C	9 住	須恵器	坏蓋	14.8		4.4	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	B,F,G	良好	青灰色	青灰色	
第 178 図 2	C	9 住	須恵器	坏蓋	(15.0)		3.7	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	E,G	良好	灰褐色	灰白色	
第 178 図 3	C	9 住	須恵器	坏蓋	(13.6)		(3.6)	回転ナデ	回転ナデ	E,G	良好	青灰色	青灰色	
第 178 図 4	C	9 住	須恵器	坏蓋	(14.1)		(4.2)	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	F,E	良好	青灰色	青灰色	内面ヘラ記号
第 178 図 5	C	9 住	須恵器	坏蓋				回転ナデ	回転ナデ	G	良好	青灰色	青灰色	
第 178 図 6	C	9 住	須恵器	坏身	(12.8)		5.1	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	E,F	やや不良	灰白色	灰白色	内面ヘラ記号
第 178 図 7	C	9 住	須恵器	坏身	(13.3)		(4.4)	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	E,G	良好	青灰色	青灰色	
第 178 図 8	C	9 住	須恵器	坏身	(13.6)		(3.8)	回転ナデ	回転ナデ	E	良好	青灰色	青灰色	
第 178 図 9	C	9 住	須恵器	坏身	(13.0)		(3.6)	回転ナデ	回転ナデ	G	良好	青灰色	青灰色	

胎土: A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 23 表 出土器観察表⑭

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (c m)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 178 図 10	C	9 住	土師器	甔	(34.4)		(27.0)	ナデ	ナデ・ケズリ	A.H	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 178 図 11	C	9 住	土師器	甔	(15.0)		(6.1)	ナデ・ハケ	ナデ・指頭痕	B.C.D.E	良好	明赤褐色	淡褐色	接合痕有り
第 178 図 12	C	9 住	土師器	甔	(12.7)		(3.7)	ハケ・ナデ	ケズリ・ハケ	G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 178 図 13	C	9 住	土師器	甔				ナデ	ナデ	A.C.D.E	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 178 図 14	C	9 住	土師器	甔				ナデ	ケズリ・ナデ	A.E	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 178 図 15	C	9 住	土師器	高坏	(17.9)		(4.6)	ナデ	ナデ	E.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 178 図 16	C	9 住	土師器	高坏		14.0	(8.5)	ケズリ・ハケ・ナデ	ケズリ・ハケ	B.D.G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 178 図 17	C	9 住	土師器	埴				ナデ	ナデ	D	良好	灰黄色	灰白色	
第 178 図 18	C	9 住	土師器	ミニチュア高坏				ナデ	ナデ	G	良好	橙色	橙色	
第 178 図 19	C	9 住	土師器	手捏				指頭痕・指ナデ	指ナデ	D.E.G	良好	橙色	淡褐色	
第 178 図 20	C	9 住	土師器	手捏	(5.2)		(2.9)	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	B.G	良好	橙色	橙色	
第 178 図 21	C	9 住	土師器	手捏				指頭痕・指ナデ	指頭痕・指ナデ	A.C	良好	橙色	橙色	
第 178 図 22	C	9 住	土師器	手捏				指頭痕・指ナデ	指頭痕・指ナデ	E.G	良好	橙色	淡褐色	
第 181 図 1	C	10 住	須恵器	坏蓋	(14.4)		(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	E.G	良好	青灰色	青灰色	
第 181 図 2	C	10 住	須恵器	坏	(13.0)		(4.1)	回転ナデ・ヘラ	回転ナデ・ヘラ	F	良好	灰白色	灰白色	
第 181 図 3	C	10 住	須恵器	坏身	(11.2)		(2.9)	回転ナデ	回転ナデ	C.E.F	良好	青灰色	青灰色	
第 181 図 4	C	10 住	土師器	甔				ナデ	ケズリ・ハケ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 181 図 5	C	10 住	土師器	埴	(13.4)		(4.2)	ミガキ	ミガキ	B	良好	橙色	橙色	
第 181 図 6	C	10 住	土師器	ミニチュア甔			(4.4)	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ・指頭痕	A.E.G	良好	橙色	灰褐色	
第 181 図 7	C	10 住	土師器	手捏	4.0		3.6	指ナデ	指ナデ	A.B.G	良好	淡褐色	淡褐色	黒斑
第 181 図 8	C	10 住	土師器	手捏	4.8		3.4	指ナデ	指ナデ	E.G	良好	淡褐色	淡褐色	黒斑
第 181 図 9	C	10 住	土師器	手捏	(4.8)		(2.1)	指ナデ	指ナデ	E.G	良好	褐灰色	明赤褐色	
第 185 図 1	C	11 住	須恵器	坏蓋	10.8		2.85	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	E.F	良好	灰色	灰色	
第 185 図 2	C	11 住	須恵器	坏蓋	(14.7)		(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	G	良好	灰白色	灰白色	
第 185 図 3	C	11 住	須恵器	坏蓋				回転ナデ	回転ナデ	E.H	良好	暗灰黄色	暗灰色	
第 185 図 4	C	11 住	須恵器	坏身				回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	B	良好	灰色	灰色	
第 185 図 5	C	11 住	須恵器	坏身				回転ナデ	回転ナデ	C.E	良好	青灰色	青灰色	
第 185 図 6	C	11 住	須恵器	坏身	(12.8)		(2.6)	回転ナデ	回転ナデ	D.E	不良	淡褐色	淡褐色	
第 185 図 7	C	11 住	須恵器	坏身	(14.3)		(2.9)	回転ナデ	回転ナデ	B	良好	青灰色	青灰色	
第 185 図 8	C	11 住	須恵器	壺	8.5		12.5	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	B	良好	青灰色	青灰色	
第 185 図 9	C	11 住	土師器	甔	18.0		(16.8)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	B.E.G.H	良好	淡褐色	淡褐色	
第 185 図 10	C	11 住	土師器	甔	(20.7)		(5.4)	ナデ	ケズリ・ハケ・ナデ	A.D.E.F.H	良好	淡褐色	淡褐色	
第 185 図 11	C	11 住	土師器	甔	(12.4)		(15.0)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A.B.C	良好	赤褐色	赤灰色	
第 185 図 12	C	11 住	土師器	甔	(14.4)		(6.4)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A.B.C.D	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	
第 185 図 13	C	11 住	土師器	甔	(16.0)		(3.9)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A.C.E	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	接合痕有
第 185 図 14	C	11 住	土師器	甔	(10.4)		(2.6)	ナデ	ケズリ・ナデ	H	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 185 図 15	C	11 住	土師器	甔	25.2		(23.7)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	A.B.H	良好	淡褐色	淡褐色	
第 185 図 16	C	11 住	土師器	甔				ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A.B.C	良好	淡褐色	淡褐色	
第 185 図 17	C	11 住	土師器	甔				ハケ	ハケ・ナデ	C.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 185 図 18	C	11 住	土師器	埴	(13.7)		(3.4)	ナデ	ナデ	D	良好	淡黄褐色	橙色	
第 185 図 19	C	11 住	土師器	埴	(11.6)		(4.0)	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	A.C.D.E	良好	淡褐色	淡褐色	
第 185 図 20	C	11 住	土師器	ミニチュア甔				不明	ケズリ・ナデ	C.D.H	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 187 図 1	C	1 竪穴	須恵器	坏身				回転ナデ	回転ナデ	A.E	良好	黒褐色	灰色	
第 187 図 2	C	1 竪穴	土師器	埴	(13.4)	(10.4)	(4.0)	ナデ	ナデ	G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 187 図 3	C	1 竪穴	土師器	埴	(13.8)		(5.2)	ナデ	ナデ	C	良好	橙色	橙色	
第 187 図 4	C	1 竪穴	土師器	埴				ハケ・ナデ	ナデ	A	良好	淡褐色	淡褐色	
第 187 図 5	C	2 竪穴	土師器	高坏				ナデ	ナデ	A.B.D	良好	淡褐色	淡褐色	
第 187 図 6	C	2 竪穴	土師器	甔				ナデ	ケズリ・ナデ	A.E	良好	橙色	橙色	
第 187 図 7	C	2 竪穴	土師器	甔	(24.8)		(10.4)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指頭痕	A.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	

胎土 A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 24 表 出土土器観察表⑮

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 187 図 8	C	3 竪穴	土師器	甕				ナデ	ケズリ・ナデ	A,B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 187 図 9	C	4 竪穴	土師器	甕	(13.8)		(5.5)	ナデ・指頭痕	ナデ・指頭痕・ケズリ	A,C,G	良好	橙色	黒褐色	
第 187 図 10	C	4 竪穴	土師器	埴	(12.2)		(4.6)	ナデ	ナデ	G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 187 図 11	C	4 竪穴	土師器	把手			6.85	指ナデ・ケズリ	—	A,C,D,E	良好	橙色	淡褐色	
第 189 図 1	C	1 溝	土師器	甕	(21.6)		(5.1)	ナデ	ナデ・ケズリ	A,D,E,G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	スス付着
第 189 図 2	C	1 溝	土師器	甕	(11.2)		(5.4)	ナデ	ナデ・ケズリ	A,B,C,D	良好	明赤褐色	明赤褐色	接合痕
第 189 図 3	C	1 溝	土師器	甕	(13.6)		(5.4)	ナデ	ケズリ・ナデ	C,D,H	良好	橙色	橙色	
第 189 図 4	C	1 溝	土師器	甕	(10.8)		(6.7)	不明	ナデ・ケズリ	A,B	良好	暗褐色	暗褐色	
第 189 図 5	C	1 溝	土師器	甕	(10.8)		(5.1)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A,C,D	良好	淡褐色	淡黄褐色	
第 189 図 6	C	1 溝	土師器	甕	(10.4)		(4.3)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A,G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 189 図 7	C	1 溝	土師器	甕				ナデ	ナデ・ケズリ	A,D,E	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 189 図 8	C	1 溝	土師器	甕				ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・ケズリ	B,G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 189 図 9	C	1 溝	土師器	鉢	(13.9)		(8.1)	ハケ・ナデ・ケズリ	ナデ・ハケ	A,B,G	良好	淡褐色	淡黄褐色	スス付着
第 189 図 10	C	1 溝	土師器	埴	(15.4)		(5.1)	ケズリ・ナデ	ミガキ	C,D,F,G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 189 図 11	C	1 溝	土師器	埴	(12.4)		(4.2)	ナデ・ケズリ	ナデ	A,E	良好	橙色	橙色	
第 189 図 12	C	1 溝	土師器	埴				ケズリ	ケズリ・ナデ	D,E,G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 189 図 13	C	1 溝	土師器	埴	(12.0)		(3.2)	ナデ	ナデ	A,C,E	良好	明赤褐色	明赤褐色	
第 189 図 14	C	1 溝	土師器	埴				ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	A,E,G	良好	淡黄褐色	淡褐色	
第 189 図 15	C	1 溝	土師器	坏身				ナデ	ナデ	C,D,E,H	良好	淡褐色	淡褐色	
第 189 図 16	C	1 溝	土師器	高坏	(14.6)		(4.6)	ナデ	ケズリ・ナデ	A,B,C	良好	橙色	橙色	
第 189 図 17	C	1 溝	土師器	高坏	(12.8)		(7.0)	ナデ	指オサエ・ナデ・ケズリ	A,C,D	良好	橙色	橙色	
第 189 図 18	C	1 溝	土師器	手捏	3.5		2.7	指頭痕	指頭痕	G,E	良好	淡褐色	淡褐色	
第 191 図 1	C	1 土	弥生	甕			(26.9)	ナデ	棒状タタキ	A	良好	灰黄褐色	淡黄褐色	
第 191 図 2	C	2 土	土師器	甕				ナデ	ナデ・ケズリ	A,B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 191 図 3	C	2 土	弥生	甕				ナデ	ナデ	A,B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 191 図 4	C	3 土	須恵器	甕	(15.4)		(5.1)	櫛描波状文・ナデ	回転ナデ	A,G	良好	灰白色	灰白色	
第 193 図 1	C	1 甕	弥生土器	小児棺	(45.2)		(44.5)	ナデ・ハケ	ナデ	A,G	良好	黄灰色	黄灰色	
第 194 図 1	C	P-1	弥生土器	甕				ナデ	ナデ	A,B,C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 194 図 2	C	P-2	土師器	甕				ハケ	ケズリ	A,E	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	多孔底部
第 194 図 3	C	砂質包層	土師器	甕	(13.8)		9.0	ナデ・ハケ後ナデ	ナデ・ケズリ	A	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 195 図 1	C	一括	須恵器	坏蓋	(14.1)		5.1	回転ヘラ・ナデ	回転ヘラ・ナデ	B,F	良好	青灰色	青灰色	ヘラ記号
第 195 図 2	C	一括	須恵器	蓋	(12.8)		(3.2)	回転ヘラ・ナデ・ハケ	回転ナデ	B	良好	青灰色	青灰色	
第 195 図 3	C	一括	須恵器	坏蓋	(14.2)		(3.4)	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	B	良好	青灰色	青灰色	
第 195 図 4	C	一括	須恵器	坏身	(12.6)		4.0	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	E	良好	灰色	灰色	復元受部径 15.2
第 195 図 5	C	一括	須恵器	坏身	(12.8)		(5.0)	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	G,F,E	やや不良	灰白色	灰白色	受部径 15.2
第 195 図 6	C	一括	須恵器	坏身	(11.3)		(4.8)	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ・ナデ	G	良好	灰白色	灰白色	
第 195 図 7	C	一括	須恵器	坏身				回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	C,E	良好	青灰色	青灰色	ヘラ記号・受部径 13.4
第 195 図 8	C	一括	土師器	坏身	(12.4)		(3.8)	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	B,E,F	良好	青灰色	青灰色	ヘラ記号・受部径 15.2
第 195 図 9	C	一括	須恵器	坏身	(13.1)		(4.2)	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	A	良好	黄灰色	黄灰色	
第 195 図 10	C	一括	須恵器	坏身			(4.3)	回転ヘラ・ナデ	回転ナデ・ナデ	G	良好	灰色	灰色	受部径 13.5
第 195 図 11	C	一括	須恵器	坏身	(12.5)		(3.1)	回転ナデ	回転ナデ	E,F	良好	暗灰色	灰色	復元受部径 14.8
第 195 図 12	C	一括	須恵器	坏身	(12.6)		2.9	回転ナデ・ヘラ	回転ナデ	G	良好	青灰色	青灰色	
第 195 図 13	C	一括	須恵器	坏身	(13.2)		(3.0)	回転ナデ	回転ナデ	E,G	良好	青灰色	青灰色	
第 195 図 14	C	一括	須恵器	ハソウ			(5.2)	回転ナデ・櫛描列点文	回転ナデ	B	良好	青灰色	青灰色	
第 195 図 15	C	一括	土師器	坏身		(9.2)	(4.5)	ナデ	ナデ	B	良好	淡褐色	淡褐色	
第 195 図 16	C	一括	土師器	埴	(12.6)		(5.4)	ミガキ・ケズリ	ミガキ	B,G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 195 図 17	C	一括	土師器	埴	(11.2)		(5.4)	ナデ・ケズリ	ナデ・工具痕	G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑
第 195 図 18	C	一括	土師器	埴	(11.8)		(3.6)	ミガキ	ナデ・ミガキ	B,D,E	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 195 図 19	C	一括	土師器	埴	(12.6)		(4.2)	ミガキ	ミガキ	G	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	

胎土 A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 25 表 出土土器観察表⑬

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	法 量 (cm)			調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 195 図 20	C	一括	土師器	埴	(11.2)		(4.9)	ミガキ	ミガキ・ナデ	B	良好	橙色	橙色	
第 195 図 21	C	一括	土師器	埴				ミガキ	ミガキ	A.C.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 195 図 22	C	一括	土師器	埴	(13.6)		(4.4)	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑
第 195 図 23	C	一括	土師器	埴				ケズリ・ミガキ	ミガキ	D.E.G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 195 図 24	C	一括	土師器	埴				ナデ	不明	E.G	良好	灰褐色	灰黄褐色	
第 195 図 25	C	一括	土師器	鉢	(8.6)	(5.6)	(5.6)	指ナデ・指頭痕	指頭痕・指ナデ	AC	良好	淡褐色	淡褐色	黒斑
第 195 図 26	C	一括	土師器	鉢	(13.8)		(8.3)	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	C.E	良好	橙色	橙色	
第 195 図 27	C	一括	土師器	甕				ナデ	ケズリ	A.C.D.E.H	良好	淡褐色	淡褐色	
第 195 図 28	C	一括	土師器	甕				ナデ	ケズリ・ナデ	A.E.G	良好	橙色	橙色	
第 195 図 29	C	一括	土師器	甕				ナデ	ケズリ・ナデ	A	良好	淡赤褐色	黒褐色	
第 195 図 30	C	一括	土師器	把手				ハケ・ヘラケズリ	ケズリ後ナデ	AB	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 196 図 31	C	一括	土師器	底部		(5.6)	(4.4)	ナデ・ケズリ・工具	ナデ・指頭痕	A.C.G	良好	淡褐色	淡褐色	
第 196 図 32	C	一括	土師器	底部		7.9	(4.1)	ナデ・工具痕	ナデ	A.C	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 196 図 33	C	一括	土師器	底部		(13.0)	(2.2)	ナデ・タタキ	ナデ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 196 図 34	C	一括	土師器	支脚		(9.0)	(5.9)	指オサエ・ナデ	ナデ	A.C	良好	灰黄褐色	淡褐色	
第 196 図 35	C	一括	土師器	底部		(3.8)	(4.3)	工具ナデ・ナデ	ナデ	A.C.G	良好	淡褐色	灰黄褐色	黒斑
第 196 図 36	C	一括	土師器	手捏	(4.0)		(2.0)	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A.G	良好	橙色	橙色	
第 196 図 37	C	一括	土師器	手捏				指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	A.G	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	

胎土 A 角閃石 B 石英 C 長石 D 赤色粒子 E 白色粒子 F 黒色粒子 G 雲母 H 砂粒

第 26 表 出土土製品観察表

挿図番号	調査区	遺構名	種別	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	胎土	調整
第 103 図 11	B 1	4 号石棺	土錘	-	3.1	1.1	C	淡黄褐色	-
第 103 図 12	B 1	21 小甕	土錘	-	3.7	1.1	C	淡灰黄褐色	-
第 165 図 10	C	5 住	土玉	2.2	2.2	2.1	A.C	淡褐色	ナデ
第 165 図 11	C	5 住	土製品	6.6	2.0	1.5	A.C	橙色	指頭痕
第 171 図 26	C	7 住	土製勾玉	3.6 + a	1.5	1.5	A.C	淡黄褐色	ナデ
第 178 図 23	C	9 住	模造鏡	4.9	4.3	2.2	H	淡褐色	指頭痕・ナデ
第 196 図 38	C	一括	模造鏡	4.6	3.9	1.1	A.E	淡赤褐色	指頭痕・ナデ

第 27 表 出土石器観察表

挿図目次	調査区	遺構名	種別	材質	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
第 103 図 1	B 1	27 号住居	石庖丁	結晶片岩	4.3	8.4 + a	0.7	
第 103 図 2	B 1	29 土坑	石庖丁	結晶片岩	4.6 + a	6.3 + a	0.4	
第 103 図 3	B 1	4 住居	石庖丁	安山岩	3.1 + a	2.9 + a	0.4	
第 103 図 4	B 1	1 号石棺	石庖丁	輝緑凝灰岩	2.4 + a	5.9 + a	0.4	
第 103 図 5	B 1	40 土坑周辺	石庖丁	輝緑凝灰岩	2.8 + a	4.8 + a	0.8	
第 103 図 6	B 1	5 土坑	石剣	玄武岩	5.5 + a	3.0 + a	0.8	
第 103 図 7	B 1	1 土坑	抉入石斧	硬質砂岩	4.6 + a	3.2 + a	3.3 + a	
第 103 図 8	B1	一括	磨製石斧	砂岩	12	5.3	4.3	444
第 103 図 9	B 1	30 住	砥石	硬質砂岩	8.7	3.8	6.4	
第 103 図 10	B 1	1 住	石鏃	安山岩	2.3	1.7	0.5	
第 151 図 1	B2	一括	石鏃	安山岩	3.1	2.5	0.8	4.7
第 151 図 2	B2	40 住	石鏃	安山岩	2.4	1.7	0.4	0.8
第 151 図 3	B2	16 住	石鏃	黒曜石	1.6	2.3	0.6	1.7
第 151 図 4	B2	13 号住居	石庖丁	結晶片岩	3.1 + a	5.5 + a	0.4	
第 151 図 5	B2	一括	石鏃	安山岩	1.9	1.5	0.4	0.8
第 151 図 6	B2	2 号甕棺	石庖丁	砂岩	3.5 + a	4.6 + a	0.5	
第 151 図 7	B2	一括	石庖丁	結晶片岩	5.5	8.5 + a	0.6	32
第 151 図 8	B2	1 土坑	石庖丁	結晶片岩	5.4	8.2 + a	0.6	43
第 151 図 9	B2	一括	石剣	硬質砂岩	2.6 + a	2.7 + a	0.6	
第 151 図 10	B2	一括	石剣	砂岩	4.6 + a	2.6 + a	0.8	
第 151 図 11	B2	一括	石剣	硬質砂岩	4.8 + a	3.8 + a	1.5	
第 151 図 12	B2	41 号住居	石剣	玄武岩	6.8 + a	3.6 + a	1.3	
第 151 図 13	B2	一括	磨製石斧	玄武岩	3.7 + a	5.5 + a	4.3 + a	
第 151 図 14	B2	一括	鉄鏃	-	4.7	3.1	0.4	
第 151 図 15	B2	113 土坑	不明鉄片	-	3.4 + a	2.7 + a	0.7	

第 28 表 出土鉄器観察表

挿図目次	調査区	遺構名	種別	材質	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
第 151 図 14	B2	一括	鉄鏃	-	4.7	3.1	0.4	
第 151 図 15	B2	113 土坑	不明鉄片	-	3.4 + a	2.7 + a	0.7	
第 171 図 27	C	7 住	U 字型鏃先	7.9 + a	9.5 + a	0.5 m	-	-
第 157 図 38	C	2 住	鏃	7.6 + a	2.6	0.4	-	-



調査区遠景（南から）



調査区全景（真上から）

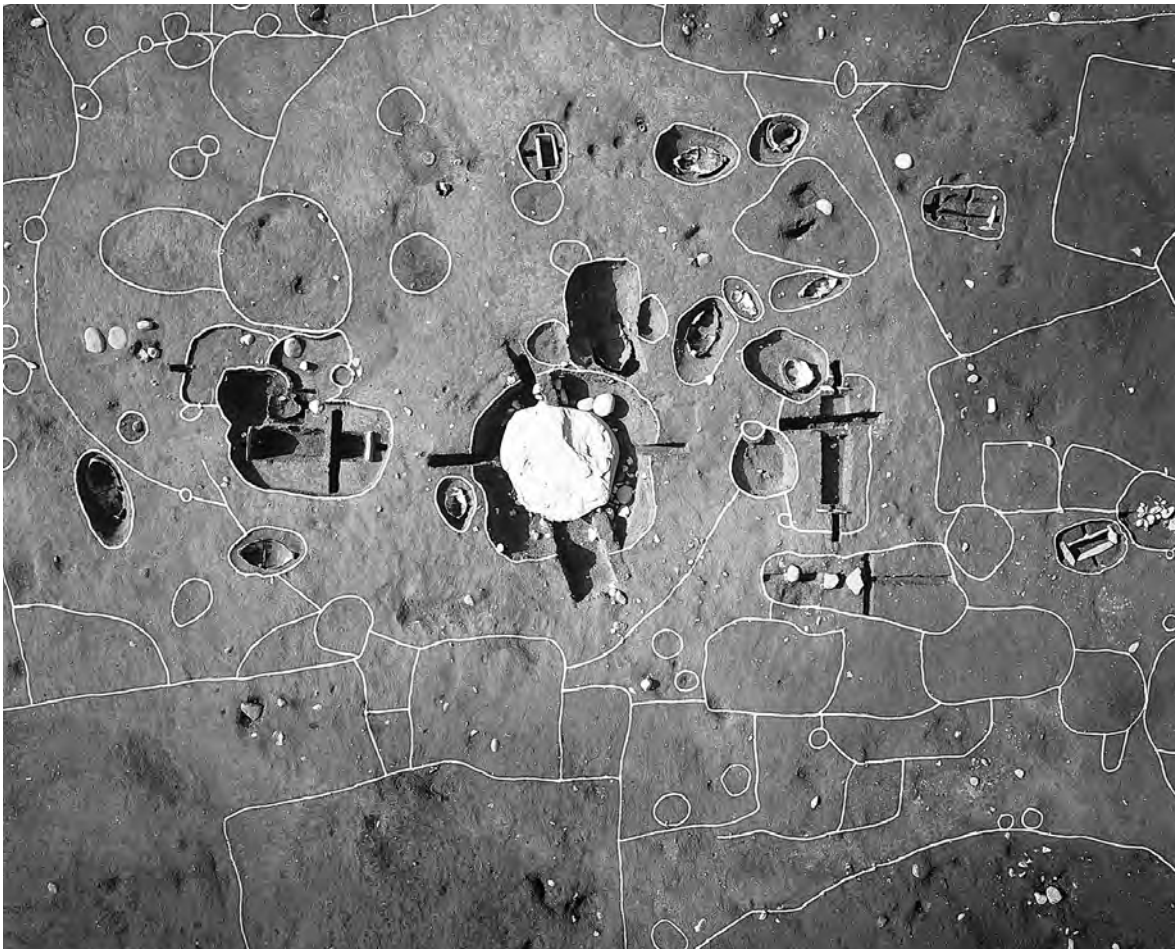
B-1 区  
写真図版 2



遺跡遠景（北東から）



成人用甕棺墓群（真上から）



大石と墳墓群（真上から）



大石



B-1 区  
写真図版 4



1号成人用甕棺墓（北から）



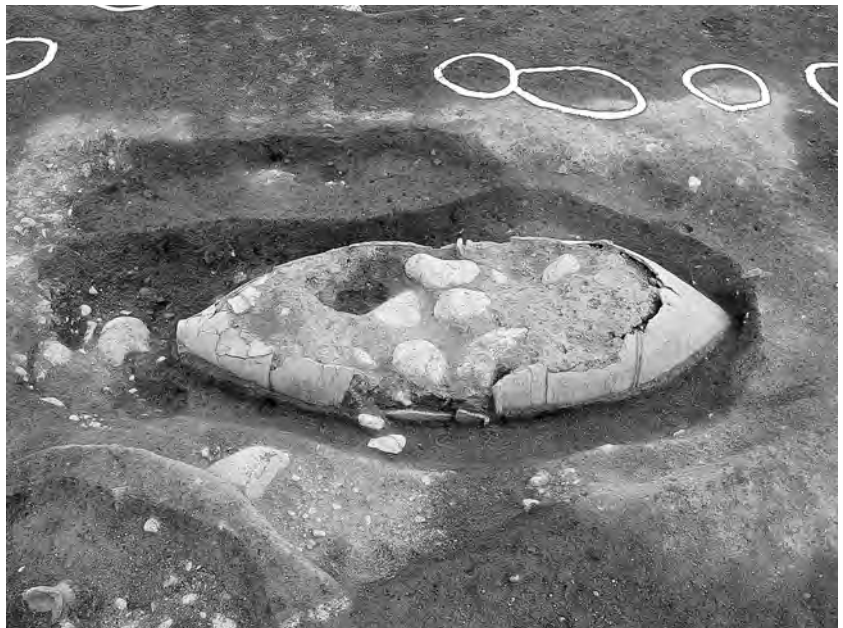
1号成人用甕棺墓（西から）



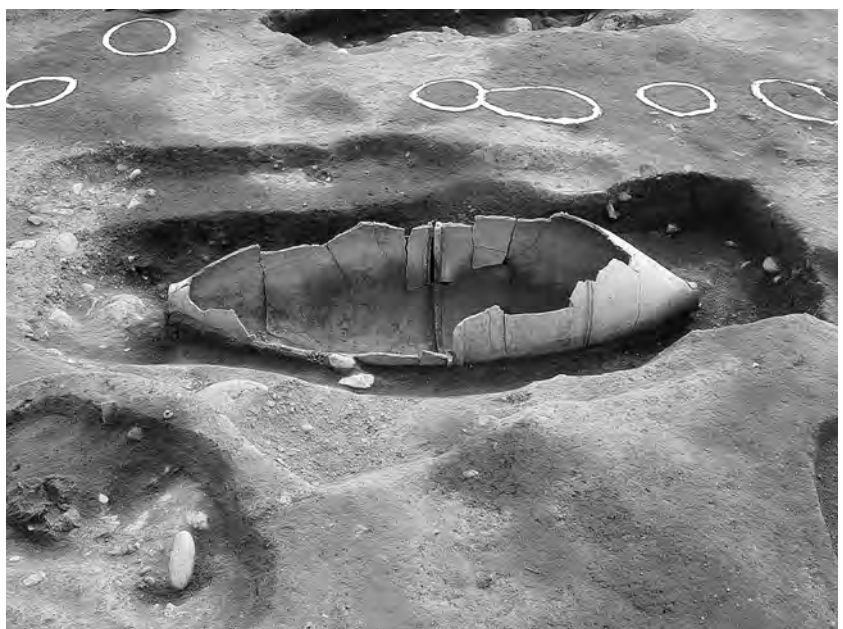
1号成人用甕棺墓完掘（西から）



1号成人用甕棺墓人骨出土状況



2号成人用甕棺墓（西から）



2号成人用甕棺墓完掘状況（西から）

B-1 区  
写真図版 6



3号成人用甕棺墓（南から）



4号成人用甕棺墓（北から）



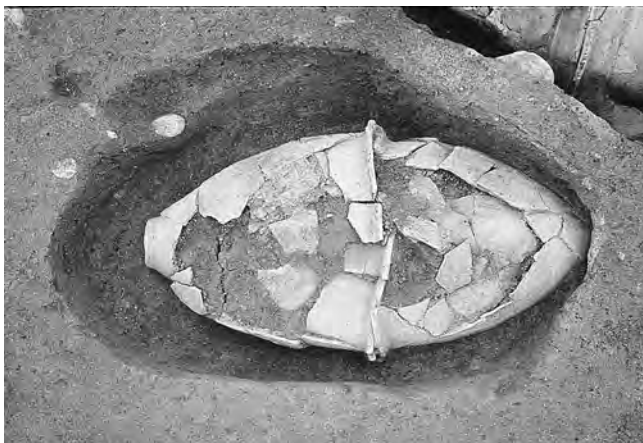
① 5号成人用甕棺墓（北から）



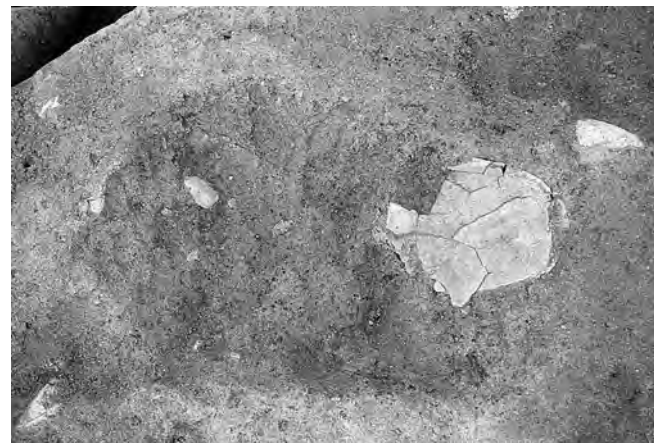
② 1、2号小児用甕棺墓（東から）



③ 1号小児用甕棺墓（東から）



④ 2号小児用甕棺墓（東から）



⑤ 3号小児用甕棺墓（東から）

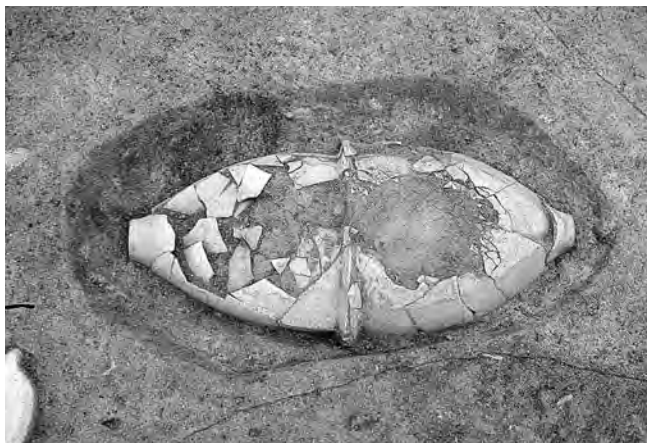
B-1 区  
写真図版 8



① 4号小児用甕棺墓 (南から)



② 5号小児用甕棺墓 (西から)



③ 6号小児用甕棺墓 (南から)



④ 7号小児用甕棺墓 (南から)



⑤ 8号小児用甕棺墓 (東から)



⑥ 9号小児用甕棺墓 (北から)



⑦ 10号小児用甕棺墓 (東から)



⑧ 11号小児用甕棺墓 (東から)



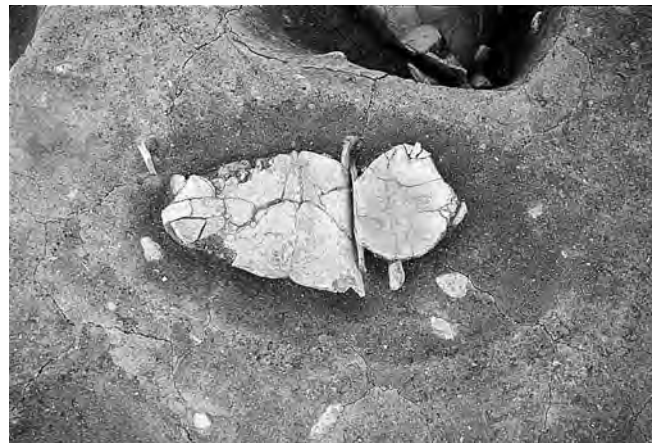
① 12号小児用甕棺墓（南から）



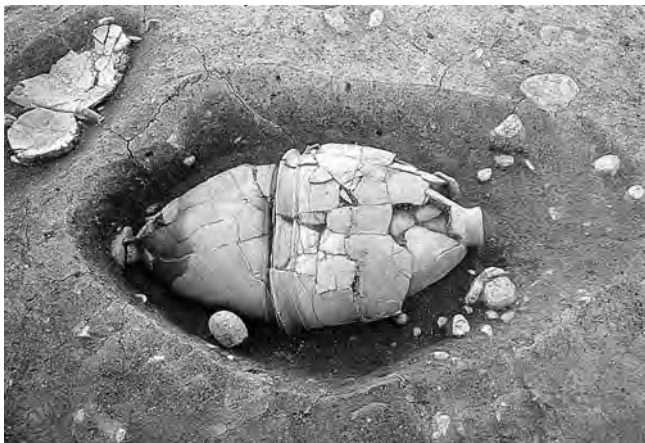
② 13号小児用甕棺墓（北から）



③ 14号小児用甕棺墓（東から）



④ 15号小児用甕棺墓（北から）



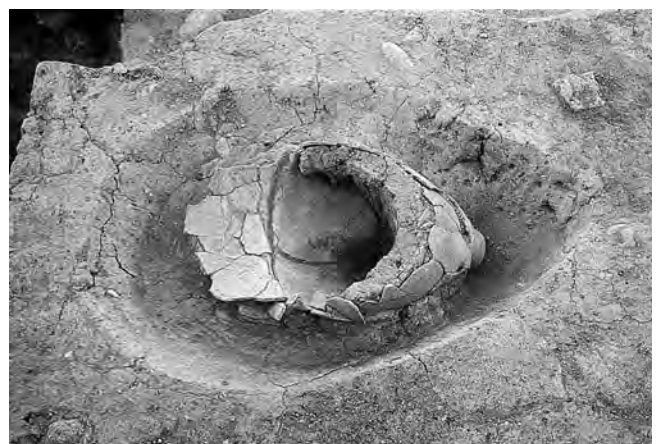
⑤ 16号小児用甕棺墓（西から）



⑥ 17号小児用甕棺墓（南から）



⑦ 18号小児用甕棺墓（北西から）



⑧ 19号小児用甕棺墓（南から）

B-1 区  
写真図版 10



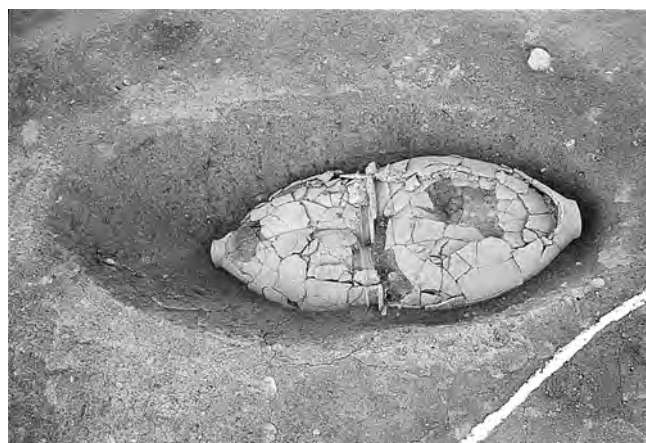
① 20号小児用甕棺墓（西から）



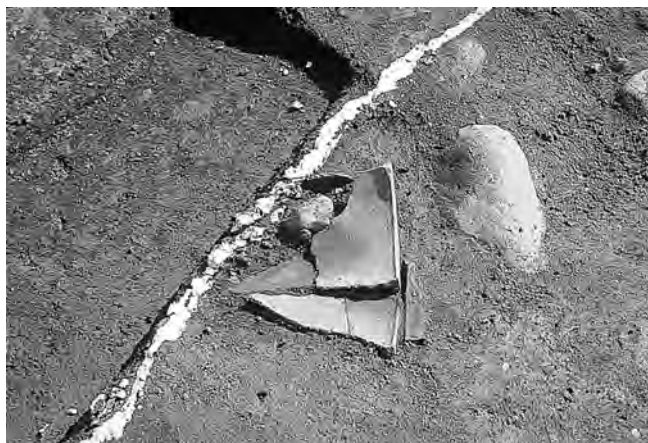
② 21号小児用甕棺墓（西から）



③ 22号小児用甕棺墓（東から）



④ 23号小児用甕棺墓（北から）



⑤ 24号小児用甕棺墓（西から）



⑥ 25号小児用甕棺墓（西から）



⑦ 26号小児用甕棺墓（北から）



⑧ 27号小児用甕棺墓（西から）



① 28号小児用甕棺墓（南から）



② 29号小児用甕棺墓（南から）



③ 30号小児用甕棺墓（北から）



④ 30号小児用甕棺墓断割り



⑤ 31号小児用甕棺墓（北から）



⑥ 32号小児用甕棺墓（西から）

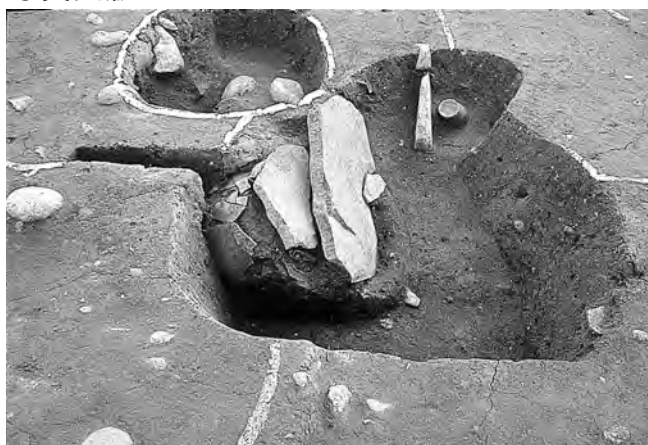


⑦ 33号小児用甕棺墓（東から）



⑧ 34号小児用甕棺墓（東から）

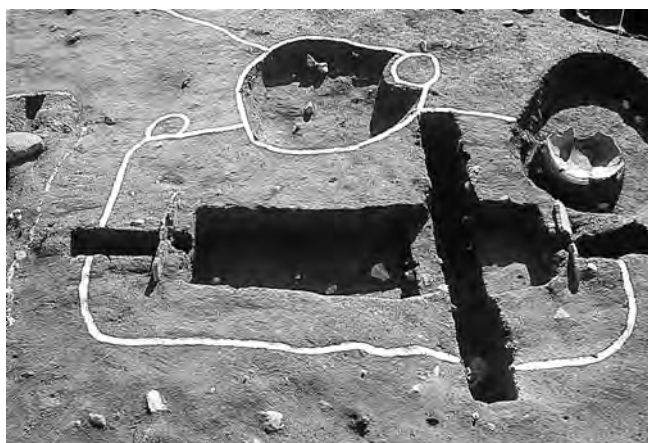




① 35号小児用甕棺墓（西から）



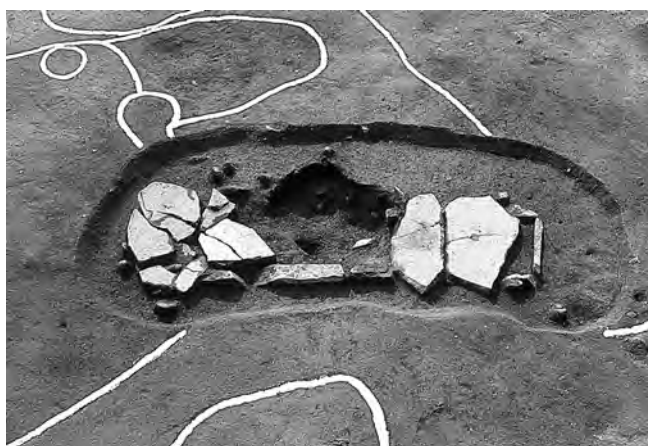
② 35号小児用甕棺墓蓋石除去後（西から）



③ 1号木棺墓（北から）



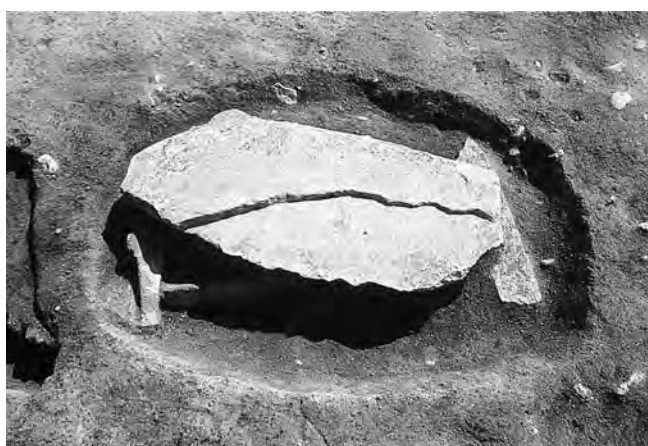
④ 2号木棺墓（西から）



⑤ 1号石棺墓（西から）



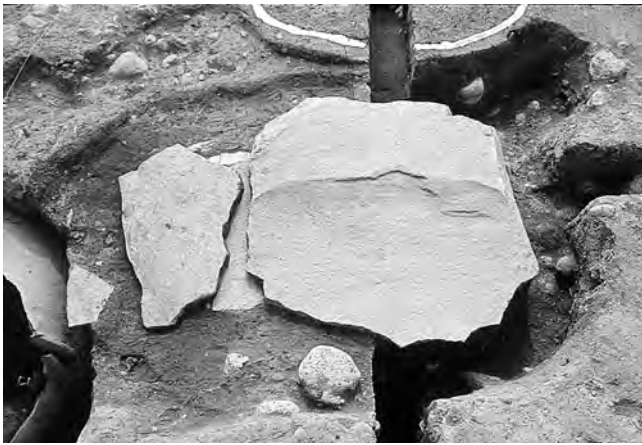
⑥ 1号石棺墓蓋石除去後（東から）



⑦ 2号石棺墓（西から）



⑧ 2号石棺墓蓋石除去後（西から）



① 3号石棺墓（北から）



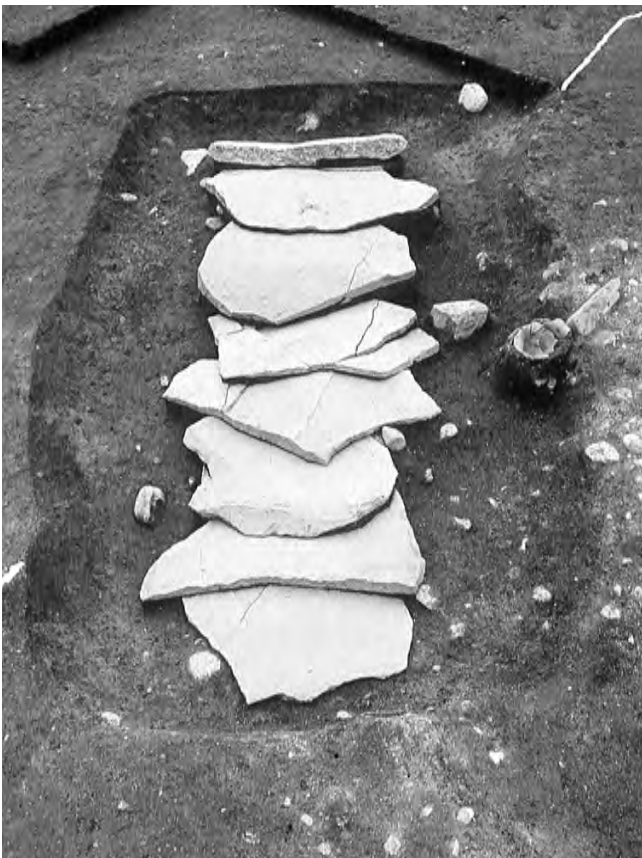
② 3号石棺墓蓋石除去後（南から）



③ 4号石棺墓（北から）



④ 4号石棺墓墓石除去後（北から）



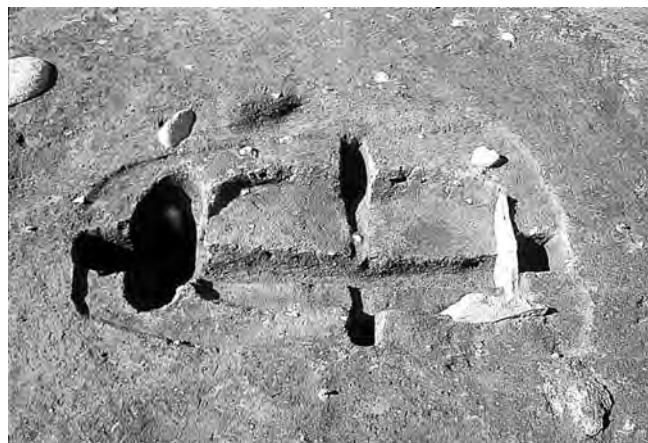
⑤ 5号石棺墓（北から）



⑥ 5号石棺墓石蓋除去後（北から）



① 5号石棺墓人骨出土状況



② 6号石棺墓 (南東から)



③ 1号大石 (東から)



④ 1号大石完掘 (南東から)



⑤ 1号土坑 (北から)



⑥ 2号土坑 (西から)



⑦ 4号土坑 (南から)



⑧ 5号土坑 (東から)



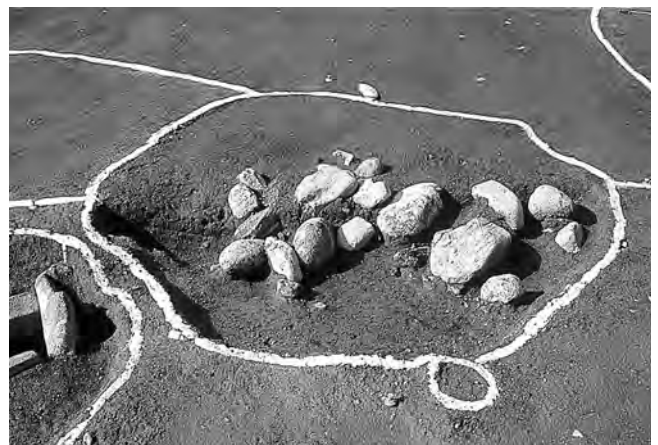
① 6号土坑 (西から)



② 7号土坑 (西から)



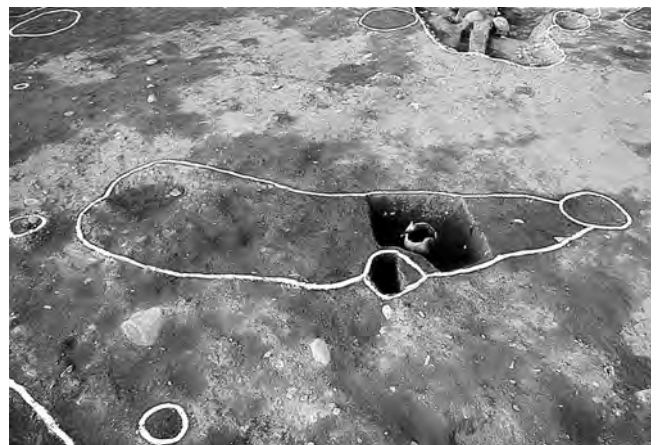
③ 8号土坑 (東から)



④ 27号土坑 (東から)



⑤ 46号土坑 (南から)



⑥ 36号土坑 (北から)



⑦ 92号小児用甕棺墓 (東から)



⑧ 1号住居跡 (西から)

B-1 区

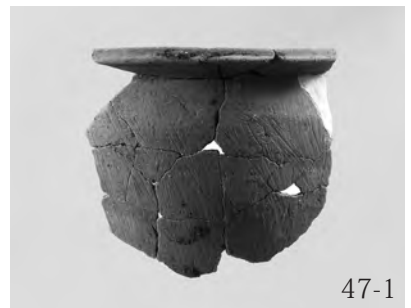
写真図版 16

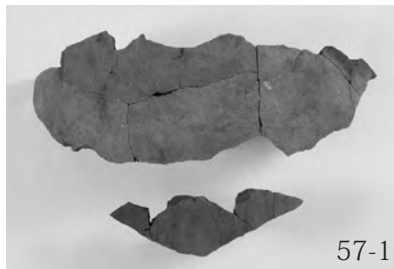




B-1 区

写真图版 18







B-1 区

写真图版 20





77-1



77-2



79-2



79-1



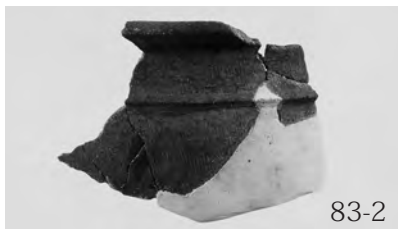
81-1



81-2



83-1



83-2



85-1



85-2



87-1



93-12



93-15



97-4



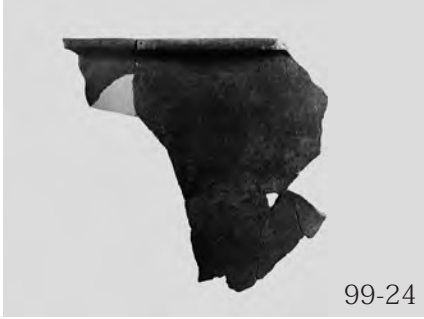
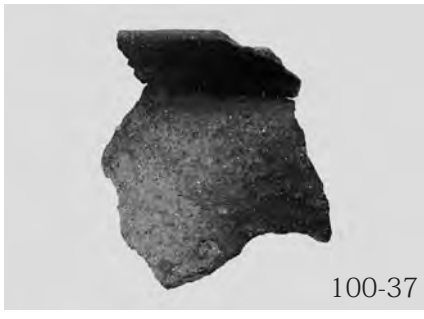
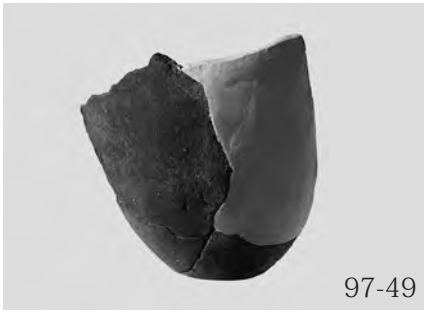
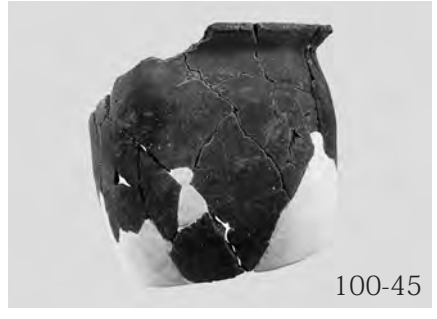
97-14

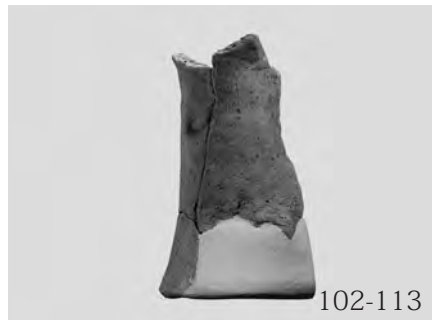
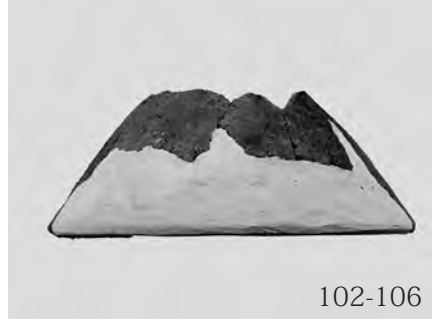
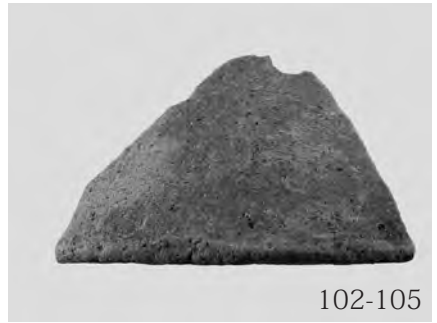


97-17



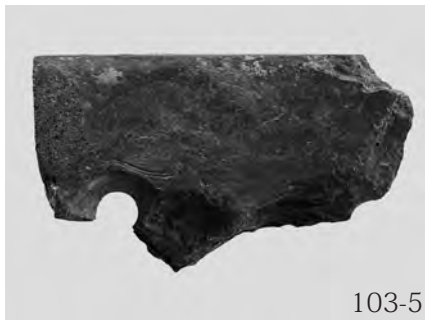
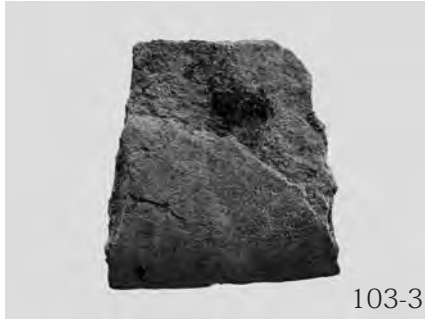
97-16





B-1 区

写真图版 24





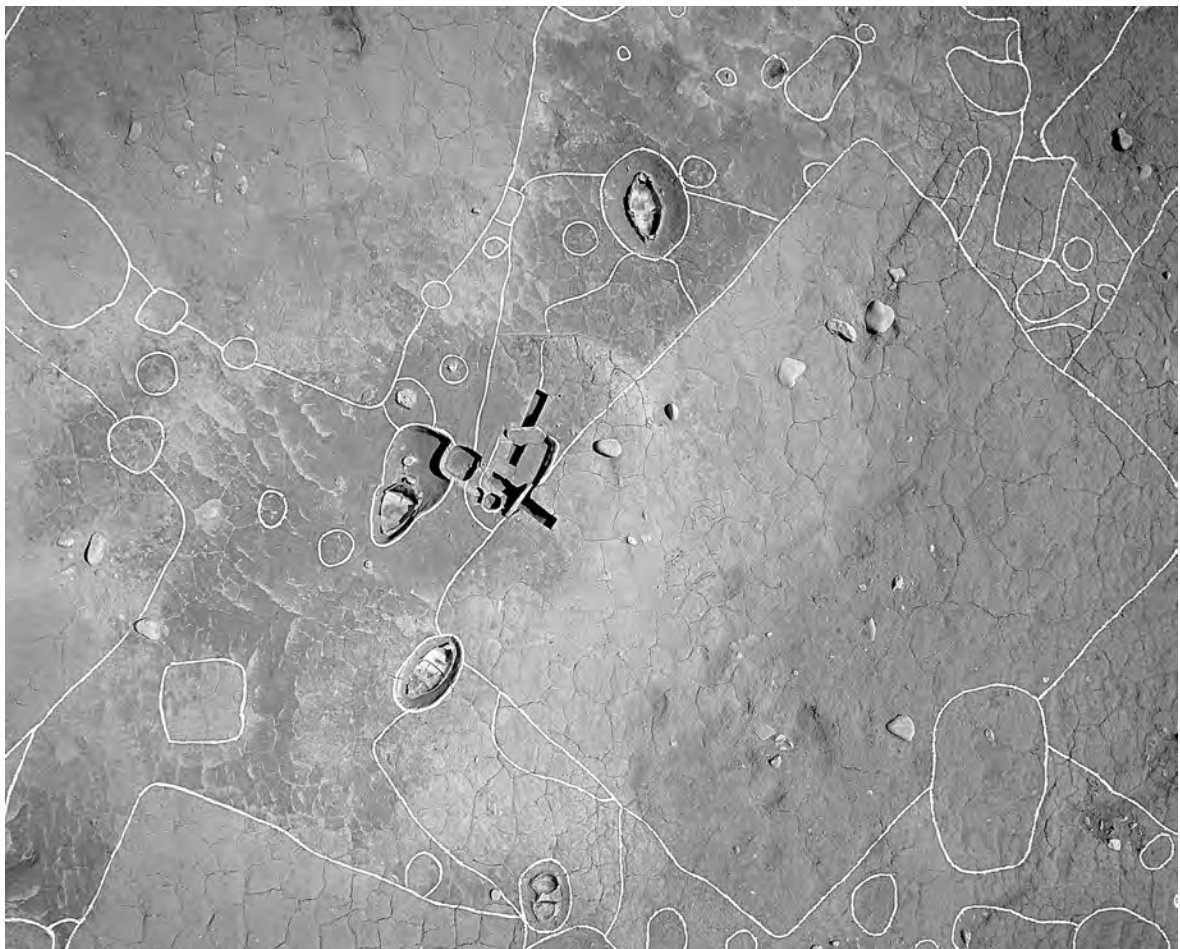
調査区遠景（南から）



調査区全景（真上から）



東側甕棺墓群（真上から）



西側甕棺墓群（真上から）



① 1号小児用甕棺墓（北から）



② 2号小児用甕棺墓（北から）



③ 3号小児用甕棺墓（西から）



④ 3号小児用甕棺墓（南から）



⑤ 4、5号小児用甕棺墓（西から）



⑥ 4号小児用甕棺墓（東から）



⑦ 5号小児用甕棺墓（西から）



⑧ 6、7号小児用甕棺墓（東から）





① 6号小児用甕棺墓（西から）



② 7号小児用甕棺墓（西から）



③ 8号小児用甕棺墓（東から）



④ 9～12号小児用甕棺墓（東から）



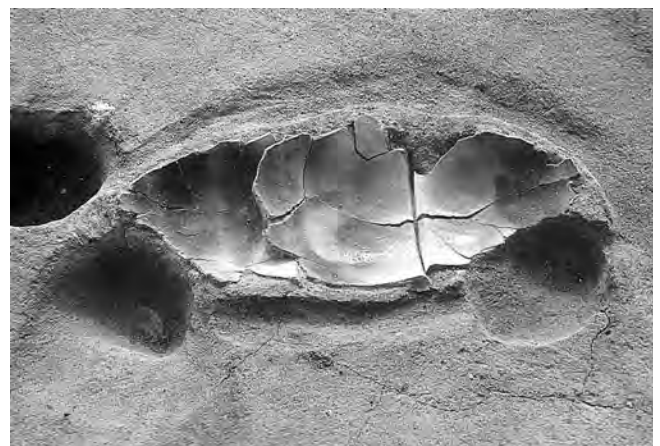
⑤ 9号小児用甕棺墓（東から）



⑥ 10号小児用甕棺墓（東から）



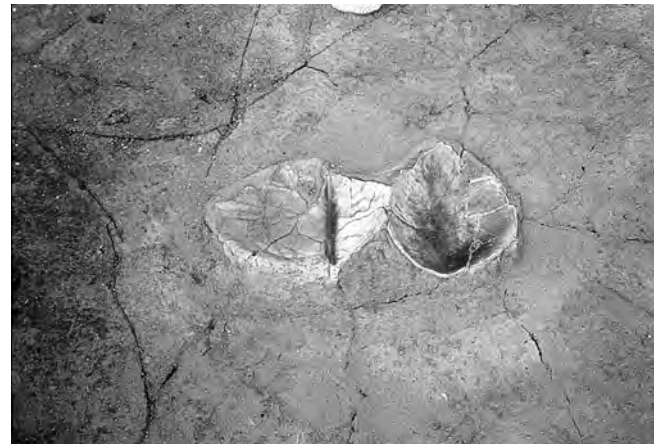
⑦ 11号小児用甕棺墓（東から）



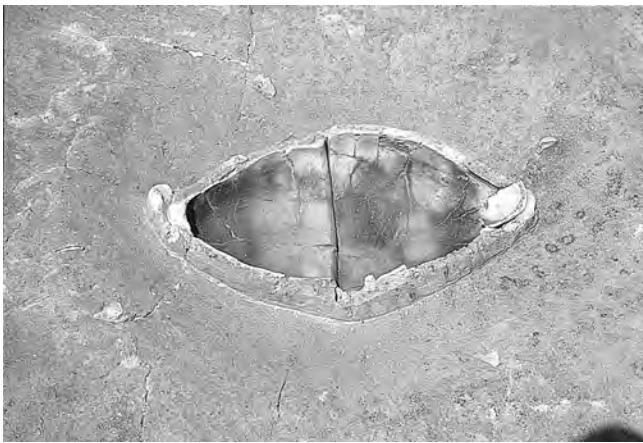
⑧ 12号小児用甕棺墓（西から）



① 13号小児用甕棺墓（東から）



② 14号小児用甕棺墓（東から）



③ 15号小児用甕棺墓（東から）



④ 16号小児用甕棺墓（東から）



⑤ 17号小児用甕棺墓（北西から）



⑥ 1号石棺墓（東から）



⑦ 1号石棺墓（南から）

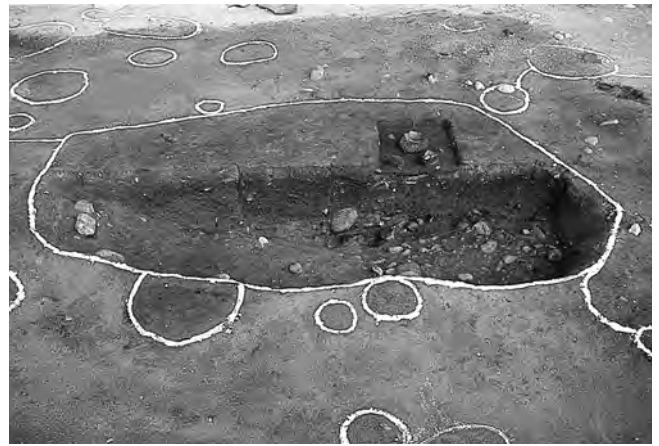


⑧ 1号石棺墓（北から）

B-2 区  
写真図版 30



① 2号石棺墓（南から）



② 1号土坑（西から）



③ 1号土坑土層



④ 2号土坑（西から）



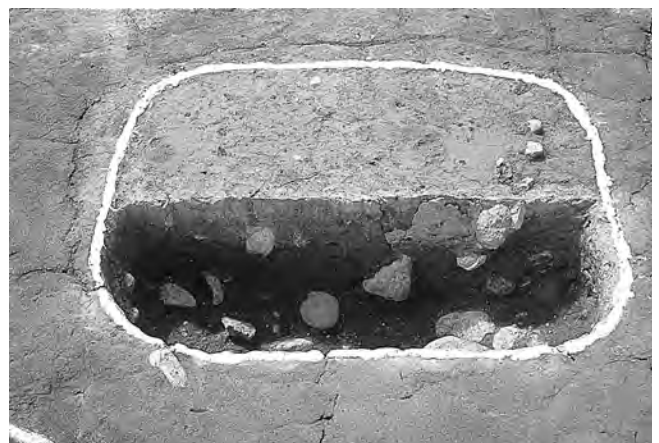
⑤ 2号土坑土層



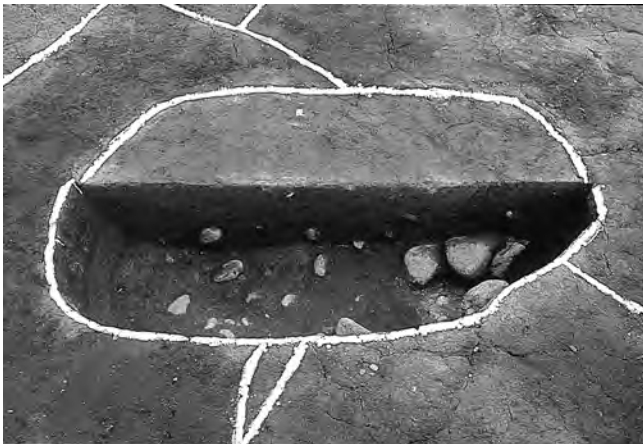
⑥ 3号土坑（西から）



⑦ 3号土坑土層



⑧ 4号土坑（西から）



① 5号土坑（北から）



② 6号土坑（北から）



③ 6号土坑土器出土状況



④ 1号周溝状遺構（真上から）



⑤ 1号周溝状遺構1 トレンチ土層



⑥ 1号周溝状遺構2 トレンチ土層



⑦ 16号住居跡（西から）



⑧ 16号住居跡体験発掘風景





116-2



120-2



124-1



118-1



122-1



124-2



118-2



122-2



126-1



120-1

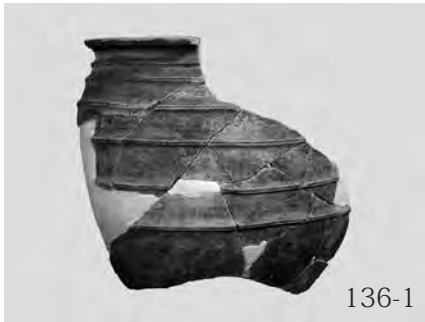
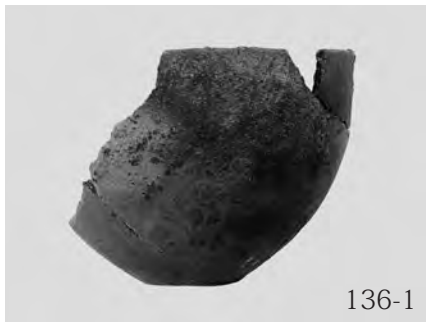


122-3

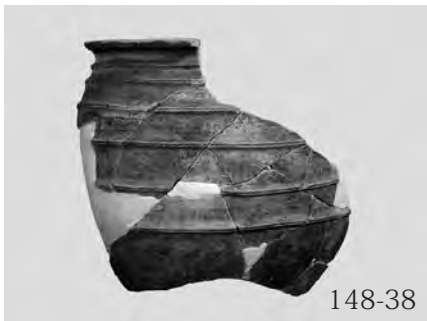
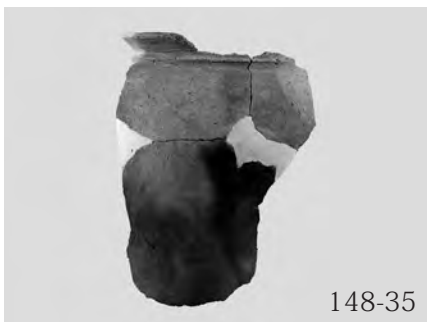


126-2

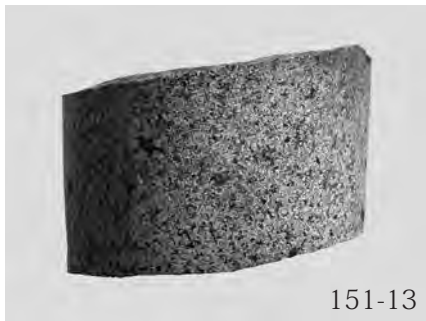
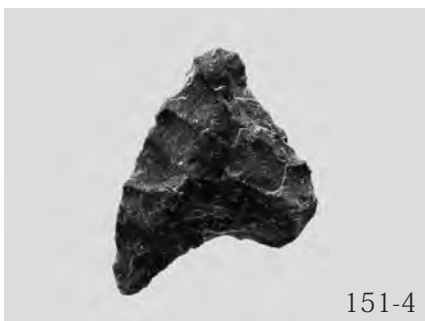
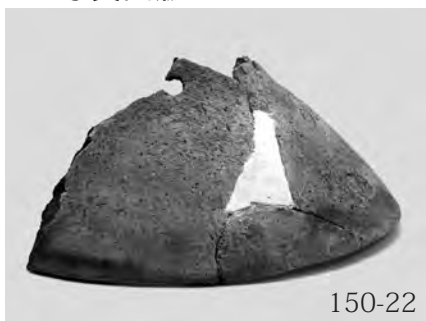














調査区全景（真上から）



C区西側（真上から）



調査完了風景



3～6号住居（真上から）



7～11号住居（南から）



① 1号住居跡（北から）



② 1号住居跡土器出土状況



③ 2号住居跡（南から）



④ 2号住居跡遺物出土状況



⑤ 2号住居跡遺物出土状況



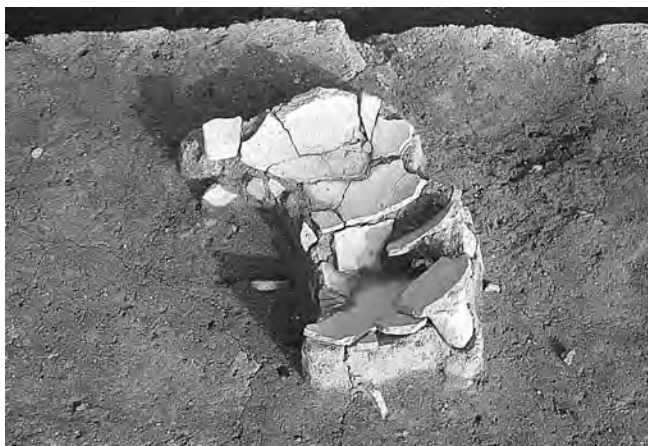
⑥ 3号住居跡遺物（西から）



⑦ 3号住居跡カマド



⑧ 3号住居跡遺物出土状況



① 3号住居跡甗出土状況



② 4号住居跡 (南から)



③ 5号住居跡 (東から)



④ 5号住居跡カマド



⑤ 5号カマド土玉出土状況



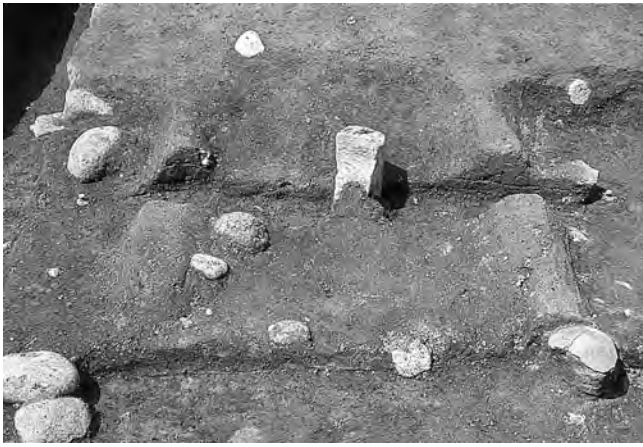
⑥ 6号住居跡 (南から)



⑦ 6号住居跡カマド



⑧ 7号住居跡 (東から)



① 7号住居跡カマド



② 7号住居跡カマド横土層



③ 7号住居跡カマド縦土層



④ 8号住居跡 (東から)



⑤ 8号住居跡Aカマド



⑥ 8号住居跡Aカマド土層



⑦ 8号住居跡Bカマド



⑧ 9号住居跡 (南東から)





① 9号住居跡カマド



② 9号住居跡カマド横土層



③ 9号住居跡カマド縦土層



④ 10号住居跡 (東から)



⑤ 10号住居跡カマド



⑥ 10号住居跡カマド縦土層



⑦ 10号住居跡カマド復元



⑧ 10号住居跡ミチ7土器出土状況



① 11号住居跡（南東から）



② 11号住居跡Aカマド



③ 11号住居跡カマド横土層



④ 11号住居跡カマド縦土層



⑤ 11号住居跡カマド復元



⑥ 10号住居跡Bカマド



⑦ 11号住居跡土器出土状況①



⑧ 11号住居跡土器出土状況②



① 1号竖穴状遺構（西から）



② 2号竖穴状遺構（西から）



③ 3号竖穴状遺構（西から）



④ 4号竖穴状遺構（西から）



⑤ 1号溝（南から）



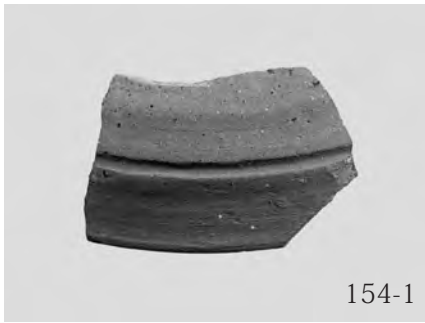
⑥ 1号溝土層



⑦ 1号甕棺墓（南から）

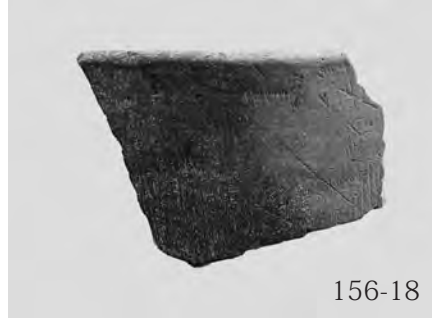
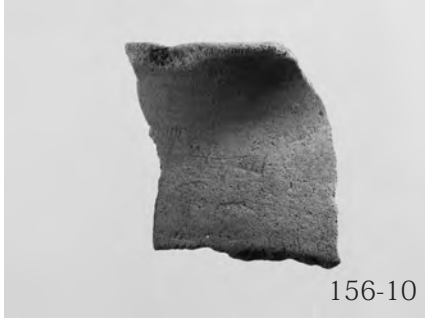
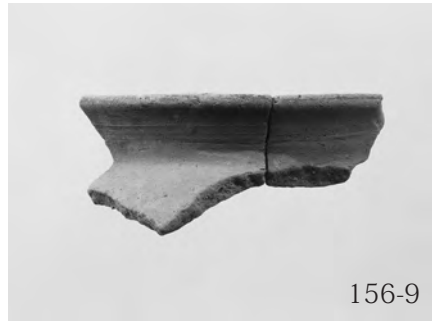


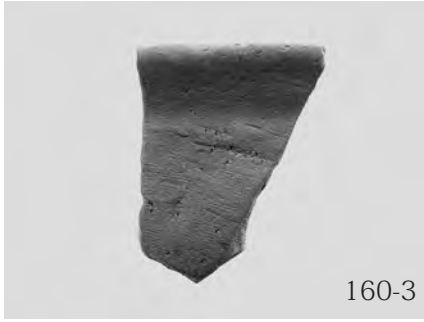
⑧ 1号土坑（北から）



C 区

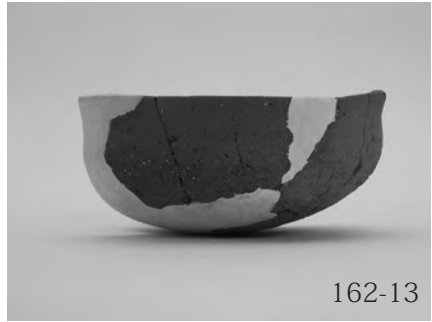
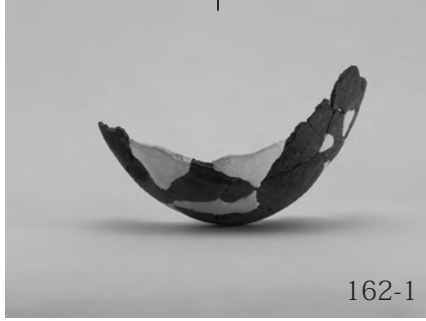
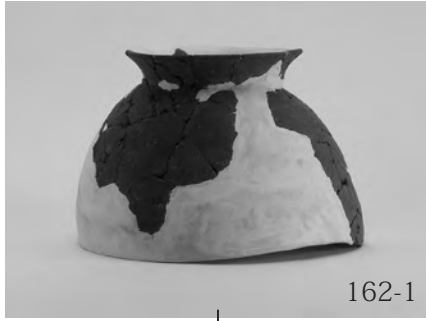
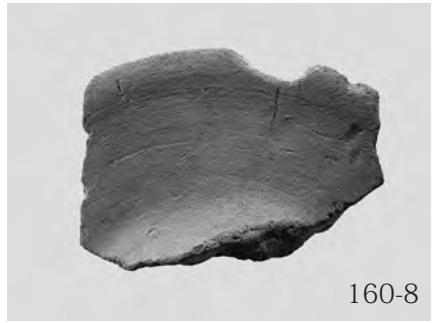
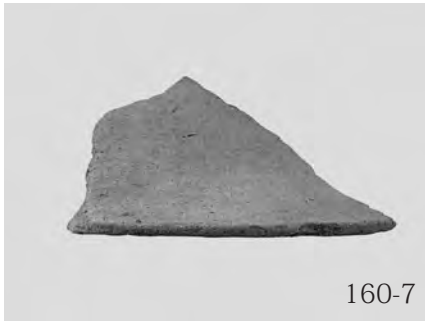
写真图版 48

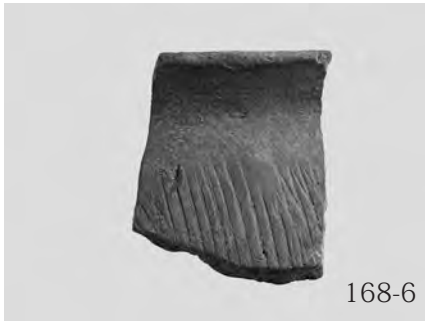
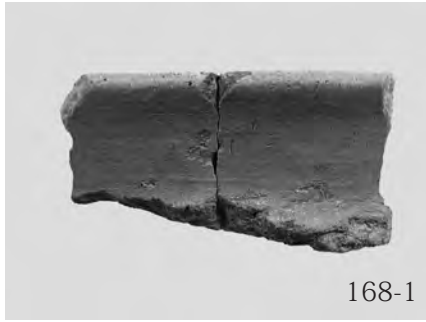
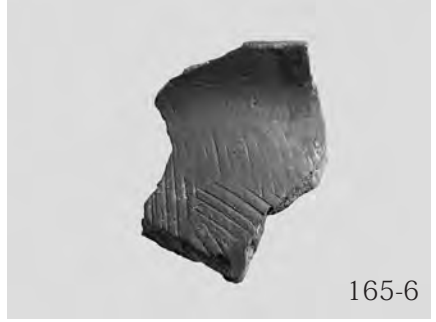




C 区

写真图版 50

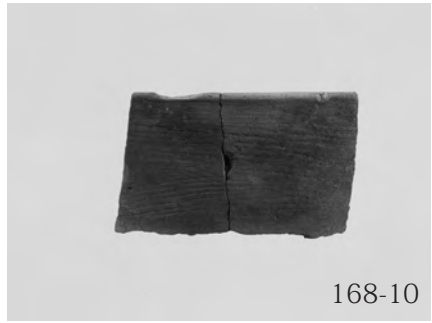






C 区

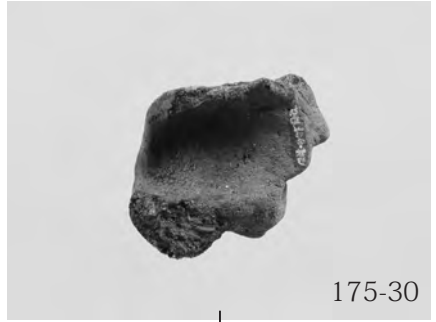
写真图版 52

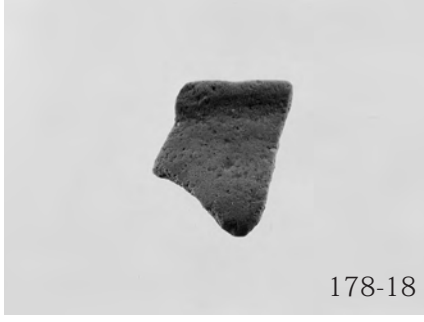
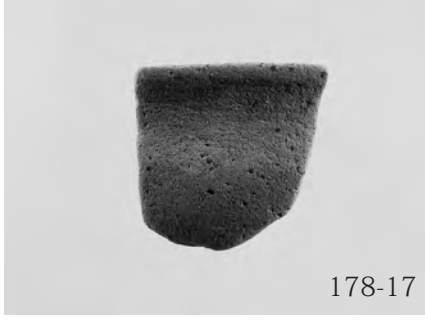
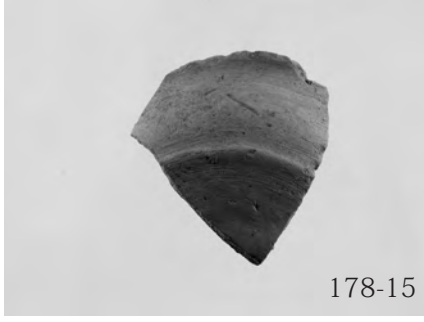




C 区

写真图版 54

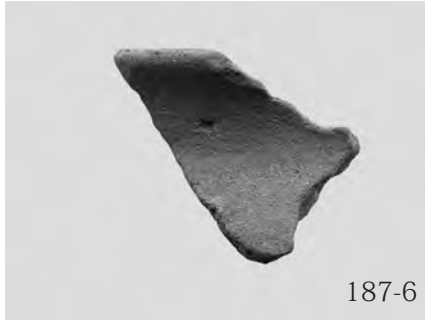
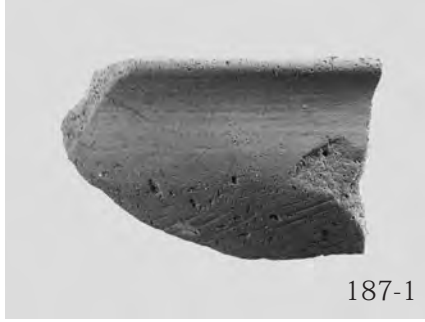




C 区

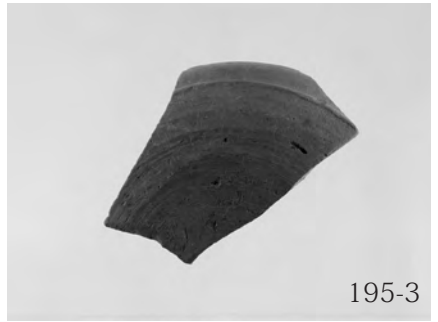
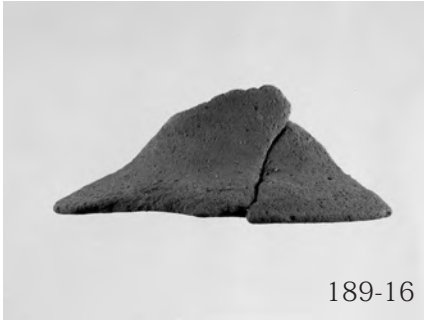
写真图版 56

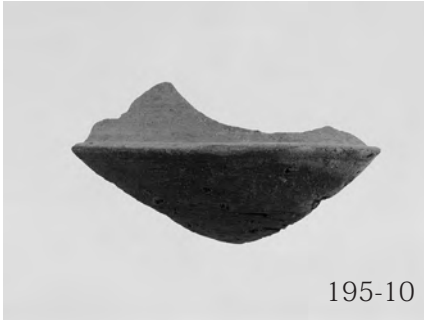




C 区

写真图版 58

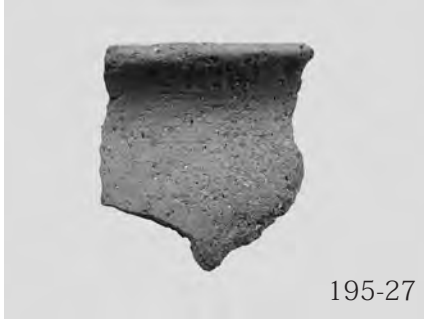
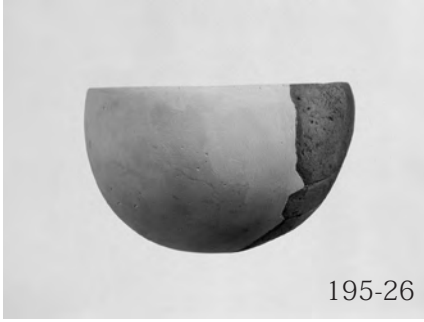






C 区

写真图版 60



# 報告書抄録

ふりがな	おおひいせき
書名	大肥遺跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第66集
編著者名	渡邊隆行
編集機関	日田市教育委員会文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2006年3月20日

ふりがな 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
おおひいせき 大肥遺跡	BC 区	ひたしおおあぎおおひめぎ 日田市大字大肥字 ほうしぐち 方司口ほか	44204-6	651004	33° 21' 34.96"	130° 52' 53.64"	200200621～ 20021129	4,400㎡	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大肥遺跡	B-1	弥生 古墳 古代	成人用甕棺墓 5基	弥生土器、甕棺 須恵器、石器	
			小児用甕棺墓 35基		
			木棺墓 2基		
			石棺墓 6基		
			大石 1基		
			土坑 91基		
			住居 49軒		
	B-2	弥生 古墳 古代	小児用甕棺墓 17基	弥生土器、甕棺 土師器、須恵器 石器、鉄器	
			石棺墓 2基		
			土坑 140基		
			周溝状遺構 1基		
			住居 52軒		
	C	弥生 古墳	住居 11軒	土師器、須恵器、弥生土器 鉄器、石器	
			竪穴状遺構 4基		
			土坑 3基		
溝 1条					
小児用甕棺墓 1基					

# 大肥遺跡Ⅱ

2006年3月20日

編集 877-0077 大分県日田市南友田町516-1  
日田市教育委員会文化財保護課

発行 877-8601 大分県日田市田島2-6-1  
日田市教育委員会

印刷 877-0086 大分県日田市二串町345-3  
日田時報紙器印刷（株）